

あの穴の先にあるモノ
は

星1頭ドードー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やせいのイサオが穴からとびだしてきた！ そのおかげでオリ主がイジツに行くとか行かないとか。

本編完結しました。お付き合いいただき、ありがとうございました。

本編 28+4+?話。

番外編 6+?話。

怪盗団アカツキ 22+7話。

カナリア自警団 26+7話。

目次

第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
100	92	84	73	66	59	43	34	20	11	1

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話
312	295	275	255	235	216	192	169	161	151	139	130	121

ゲキテツ一家	その3	472
ゲキテツ一家	その2	459
ゲキテツ一家		443
4月1日		
437		
Xヶ月後のY o u c o p y ?		
Xヶ月後の君と再会		421
Xヶ月後のイサオさん		406
Xヶ月後の君へ		399
第28話		389
第27話		370
第26話		347
第25話		327

怪盗団アカツキ	その9	630
怪盗団アカツキ	その8	619
怪盗団アカツキ	その7	606
怪盗団アカツキ	その6	595
怪盗団アカツキ	その5	587
怪盗団アカツキ	その4	576
怪盗団アカツキ	その3	563
怪盗団アカツキ	その2	552
怪盗団アカツキ	その1	538
怪盗団アカツキ	if 18話	
ゲキテツ一家	その6	520
ゲキテツ一家	その5	505
ゲキテツ一家	その4	490

怪盗団アカツキ	その10		641
怪盗団アカツキ	その11		654
怪盗団アカツキ	その12		667
怪盗団アカツキ	その13		679
怪盗団アカツキ	その14		693
怪盗団アカツキ	その15		707
怪盗団アカツキ	その16		722
怪盗団アカツキ	その17		734
怪盗団アカツキ	その18		743
怪盗団アカツキ	その19		756
怪盗団アカツキ	その20		767
怪盗団アカツキ	その21		775
怪盗団アカツキ	おしまい		788

怪盗団アカツキ	その後のロイグと	802
怪盗団アカツキ	その後のリガルと	819
怪盗団アカツキ	その後のモアと	836
怪盗団アカツキ	その後のカラんと	848
怪盗団アカツキ	その後のベツグと	861
怪盗団アカツキ	その後のレンジと	873
怪盗団アカツキ	ラーメンチャー	

カナリア自警団	その1	902	シユー味玉ギョーザ	888
カナリア自警団	その2	916		
カナリア自警団	その3	928		
カナリア自警団	その4	940		
カナリア自警団	その5	952		
カナリア自警団	その6	966		
カナリア自警団	その7	976		
カナリア自警団	その8	988		
カナリア自警団	その9	998		
カナリア自警団	その10	1010		
カナリア自警団	その11	1020		

カナリア自警団	その12	1032	カナリア自警団	その12
カナリア自警団	その13	1039	カナリア自警団	その13
カナリア自警団	その14	1052	カナリア自警団	その14
カナリア自警団	その15	1063	カナリア自警団	その15
カナリア自警団	その16	1072	カナリア自警団	その16
カナリア自警団	その17	1080	カナリア自警団	その17
カナリア自警団	その18	1089	カナリア自警団	その18
カナリア自警団	その19	1103	カナリア自警団	その19
カナリア自警団	その20	1141	カナリア自警団	その20
カナリア自警団	その21	1125	カナリア自警団	その21
カナリア自警団	その22	1135	カナリア自警団	その22
カナリア自警団	その23	1145	カナリア自警団	その23
カナリア自警団	その24	1155	カナリア自警団	その24

カナリア自警団	その25	1165
カナリア自警団	おしまい	1185
カナリア自警団	その後のアコさんと	1197
カナリア自警団	その後のエルさんと	1210
カナリア自警団	その後のリツタさん	1227
カナリア自警団	その後のミントさん	1241
カナリア自警団	その後のヘレンさん	1254
カナリア自警団	その後のシノさんと	

1284 カナリア自警団
カナリア合唱団

第1話

晴天。雲ひとつない空。

青空には眩しいぐらいに光を放つ太陽。

そんな絶好のお出かけ日和の中、私はトラックの荷台で相棒と一緒にドナドナ状態になっていた。

右を見れば地元では見かけた事のない大きさの畑。左を見れば畜産をしているのか、動物達の姿が見える

ほんの少し前まで、ガソリン満タンで元気一杯の相棒であったが、このお出かけ日和というには強すぎる太陽とアスファルトの照り返しにより、オーバーヒートを起こしてしまう。

目的地である曾祖父の家までは、まだ30km程かかる。スマホは繋がるのでせめて遅くなる事だけでも伝えようとしていた。

その矢先、私の前を通り過ぎて行った一台のトラックが路肩に止まり、運転手が降りてきて話しかけてきた。

「おーこんな所でどうした？ バイクでも故障したのか？」

「暑さにやられてオーバーヒートしてしまいました」

「なるほどな。確かにこの暑さだ。それにしたって今年はずっと異常だ」

地元の人でもこの暑さには違和感を感じるほどらしい。おじさんは首元に巻いているタオルで軽く汗を拭いている。

しばらく他愛もない話をしていた所で、トラックのおじさんから乗って行くか？ とのお誘いを受ける。

二つ返事をお願いをして、バイクを荷台に乗せてくれる所まで手伝ってくれた。ありがたい。

「普段は家畜を載せているから匂いは勘弁してくれな」

「とんでもない。助かります。ありがとうございます」

「良いって事よ。ところでこの先に用事でもあったのか？」

「はい、もう少し先にある曾祖父の家に呼ばれていまして、そこへ向かっている最中でした」

「あの爺様の曾孫さんか！ 呼ばれたとはいえ、よくこんな僻地まで来たな」

「お小遣いたんまりとあげるから今すぐ来いと言われてしまつて」

「学生さんはその言葉には勝てんなあー。俺もあの爺様の自宅なら分かるし、しばらく荷台でゆっくりしてな！」

「ありがとうございます。お世話になります」

トラックは心地よいエンジン音と振動と共に走り出す。風が当たってとても心地よい。

おじさんとも話していた通り、突然、曾祖父から電話があり、可及的速やかにこちらに来てくれと連絡があつた。横文字にするとASAPなのだろうか。

元々、曾祖父は職業軍人をしていたので、時々でてくる固い言葉を理解するのに少し時間がかかる。昨日、連絡を貰つた時もそうだった。

何かが聞こえる。

人の声ではなく、機械的な音。日々使っているスマホのアラームは、夏休み突入の時点で切つたはずなのにスマホは鳴り響く。

そうとなれば誰かからの着信になる。だけど正直、眠い。何故なら昨日は夜中まで好きな事をして寝たのは明け方。大型連休は生活のリズムを著しく崩すのである。たとえ初日からであつても。

だから今日はゆつくり英気を養つて、夕方に起きたら、始まつたばかりの長い休みに何をするかを決めるんだ。

そう自分を説得するかのように布団に再度、潜り込む。

だが無常にも、スマホはずっと着信音を鳴らし続ける。流石にこれだけ鳴らされると、何かあったんじゃないかと不安になる。

半分、寝ている脳みそと身体を動かしてスマホを手に取る。相手は……曾祖父からであつた。仕方ないので通話ボタンを押す。

「おお、やつとでたか。私だ、私」

「詐欺は結構です」

緊急案件じゃない雰囲気だけは分かつたので、通話を切り二度寝に入ろうとしたが、案の定また着信音が鳴る。

「……ひーじいです。起きてますか？」

「寝てます」

「いや起きてるよね！ 受け答えしているし！」

バレた。当たり前だよね。

「ごめんごめん、それでひーじいは突然どうしたの？ 電話なんか寄こしてさ」

「実は、ハルトにお願ひしたい事があつて連絡をしたんだ」

「お願ひ？ それはまた珍しいね」

「うむ。詳しい説明をすると長くなるから用件だけを先に伝える」

そう言つて一呼吸を置いてからひーじいはこう喋り始めた。

「今から私の所に来てくれないか？」

「あ、無理です、ごめんなさい。家から出れない病気が発生しちゃって。ゲホゲホ」

「そんなの無いよね！　いま考えたよねそれ！」

「だつてひーじいの家つて北の大地じゃないですか？　私の居る場所からだと半日本横

断ですよ。夏休み突入して惰眠を貪っていた人間がそんな元気でないって」

「無理は承知で言っているのは分かっている。だけど頼めるのはハルトしかないんだ」

「父さんやお爺ちゃんは駄目なの？」

「あ奴等は最近、構つてくれないから駄目だ」

基準はそこですか曾祖父殿。

とはいえ実際に今から行くとしても何を準備すればいいやら。

曾祖父の家は文字通り、周りに何も無い場所に建っている。森林やらはあるが基本は広い農地である。昔、何度迷子になった事か。

その為、公共機関を乗り継いで辿り着くのは少し絶望的。となると私が自由に使えて足となるのはバイクのみ。

なんだかんだで行こうとする為に思考をしていたら、曾祖父からの悪魔の囁きが聞こえてきた。

「来てくれるなら勿論、旅費は出すぞ」

ピクッ

「美味しい食べ物に、お小遣いもたんまりやろう」

ピクピクッ

「丁度、私の家に珍しい物があつてだな。それをハルトと一緒に見て楽しみたかったのだが。そうか、やる気が沸かないか……」

この曾祖父様、今日に限って押しが強いぞ！

そんなに人に自慢したいぐらいに珍しい物が手に入ったのだろうか。年に一度は会つてははずなのに。いつの間に入手したのだ。

好奇心が沸いてくる。一体なんだろうか。そんな想像をしつつ相槌をしながら対応していたら、突如、曾祖父の声のトーンが下がる。あ、これ本気のお願ひする時の空気だ。

「頼む。今すぐ来て欲しい事は確かなんだ」

もしかしたら初めてなんじゃないだろうか。曾祖父の真面目なお願ひ。

それが何故、曾孫の私に対してなのか分からないけれど。曾祖父にとつてはとても重要な事があるみたいだ。

……私は学生だし、夏休みに入ったばかりの暇人。後はやる気だけかな。

「ん。分かったよ。ひーじい。でもこれから行動開始をしても、着くのは明日になっちゃうよ?」

「それで構わない。無理しないように来てくれ」

「ほーい、それじゃ明日にでも会いましょ」

そう言つて電話を切ろうとした時に名前を呼ばれる。そして。

「急なお願いで、詳細も伝えてないのに来てくれてありがとうな」

「お寿司ね、お寿司」

「分かった分かった、着いたら好きな物を食べさせてあげるよ」

なんだか照れ臭くて反射的に食べたい物を言つてしまったが、曾祖父は笑いながら承諾してくれた。

さつ、頑張つて会いに行くとしますかね。バイクの点検にルート決め。念の為に金も下してこなきゃ。

曾孫との電話も終わり一息入れる。

ハルトとの会話は脱線するような事が多いが、これが意外と楽しい。

ひーじいと慕ってくれる可愛い曾孫。半面、自分のエゴの為に片棒を担がせる事に自分自身に嫌気が差す。

せめてこちらに無事ついた時には美味しい物を食べさせてやらねば。

しかし、相変わらず寿司が好きだな。そんな事を考えていると思考を遮るかのように声をかけてくる男がいる。

「曾孫さんとの会話は終わったかい？」

黒髪にスーツの似合う男が問いかけてくる。

「ああ。明日にはこちらに着くそうだ」

「そりゃよかつた！ 彼には色々教えて貰いたい事がたくさんあるからね！」

「だが、その前に約束通り聞かせてもらおう事がある」

そう言つて男と対面するように席に着く。

相手はせっかちななあ。といったリアクションを取るが気に留めず、老人は問いかける。
「貴方はイジツからやってきたのか？」

「荷物はこれだけか？」

トラックのおじさんに、曾祖父の家の前まで送り届けて頂き、バイク等を降ろす。

「はい。これで全部です。大変助かりました。ありがとうございます」

「気にしないでくれ。俺もこの爺様には助けて貰った事があるんだ。そのお返しが出

来てよかったよ」

それじゃあな、とトラックを走らせて去っていくおじさん。お辞儀をしてふうと一呼吸。

「あつつうー」

曾祖父との会話も終わった後に、ここまで辿り着く為に調べたルートの結果はフェリー経由だった。

フェリーで一泊して明け方に北の大地に降り立つ。

曾祖父の家はフェリー乗り場から数時間はかかる場所にあるが、ここから先は公共機関を使うわけではなく、バイク移動という事もあり自由は効いた。オーバーヒートは読めなかったが。

トラックのおじさんに助けられながらも太陽が真上に位置する頃によく辿り着いた。相変わらず周囲には曾祖父が所有する建物以外は見当たらない。まるで隔離されているかのような感覚に陥るぐらいに。

私が生まれる前からこういう場所だし。そういう場所なんだよなと認識している。

そんな事を考えながら玄関近くまでバイクを手押しで移動し荷物を降ろす。あれ、なんか地面がデコボコしているような。

併設されている大きな車庫には何かを牽引したかのような土の跡が地面に残ってい

る。

畑でも耕していたのやら、森林伐採でもしたのやら。曾祖父は機械に強いからなんでも出来るなあ。そんな事を考えていた。奴から話を伺うまでは。

呼び鈴を全力ピンポンして曾祖父を呼び出す。暑いからはよ開けてくれ。

中から足音が聞こえ、鍵が開く。そして開かれた扉の先には。

「やあハルト君！ 君を待っていたよ！」

「……あんだ誰よ？」

こうして私の。式守ハルトの夏休みが始まった。

第2話

玄関に現れたのは、曾祖父ではなく見知らぬ男性であった。

反射的に誰だと言ってしまったが、男性は私の失礼な問いかけに対して気にも止めずに名前を覚えてくれた。ただし、強烈にハイテンションで。

「これは失礼。僕の名前はイサオ。トウワ・ブユウ商事の会長、イケスカ市長、そして自由博愛連合の議長でもあるのだよ！ まあ今頃は全部失っているだろうけどね！」

名前がイサオさんである事は分かった。ただし後半は何を言っているのか分からない。

「ブユウ商事。これはきつと社名。イケスカ？ そういう地域があったかなあ、と半信半疑。最後のはなんとなく分かる。この人やべえ奴だ。」

「ひーじい、居るんでしょ。警察呼んだ方がよくない？」

「ちよ、ちよつと待つてよ！ 自己紹介しただけなのになんでそうなるの!？」

「いけ好かん奴だと本能が喚いているもので」

「イケスカだけに？ ハルト君は冗談も面白いなあ！」

一人で腹を抱えながら大笑いをしているイサオさん。咄嗟に出た言葉が冗談になっ

てしまつて恥ずかしさ全開の私。その空気の中、ようやく家の主が表れた。

「ハルト、遠い所からよく来てくれたな。歓迎するぞ」

「ひーじい、この人について詳しく」

「知りたい事は山ほどあるだろう。一先ず中に入って落ち着こう。シユワシユワも用意してある」

曾祖父にかかれば炭酸飲料は全てシユワシユワである。でも大好きなので何も問題ない。

バイクから荷物を降ろし家の中へと入ろうとすると、さも当たり前かのようにイサオさんが荷物を持つてくれた。見た目の通りの紳士的な行動にちよつと驚く。

持ち運びが済んだ後に、リビングにある椅子に腰をかける。曾祖父から渡されたシユワシユワを口にして一息つく。今日のような暑い日だと、いつもより炭酸が身体に染み渡る感覚がする。

「さて、落ち着いたところで本題に入るか」

この場にいる三人が椅子に座り、曾祖父が喋り始める。

「ハルトを呼んだ理由を伝えようと思う。私はしばらくこの家を留守にする。その間、この男の世話をししてやって欲しい」

「はあ、気をつけ……て？」

「ありがとう。もし私が一向に帰らなかつた場合には、これを読んで欲しい。財産分与や手続きに関して記入しておいた」

頭にハテナマークが浮かび続ける。帰らない？ 財産分与？ 手続き？

「それって所謂、遺書ですか？」

「ああ。歳が歳だけに前から用意はしてあつたが、ここにきて役に立ちそうだ」

「いやいや！ 遺書が必要な事って何をするつもりなの!? 留守にするって事は何処かに行くんだよね!」 何処に行くつもりなのさ！

「イジツだよ」

返ってきた答えを発したのは、イサオさんからであつた。

「イジツ？ 何処にあるのさ」

「んー別の世界かなー、少なくともユーハングとは別の世界だよ」

「ユーハング？」

「この世界の事だね」

頭がこんがらがる。知らない単語と別世界の話。そういった物語なら何度も目にしてきたし、その手のジャンルは好きだ。創作だから。

だからなのだろうか、イサオさんが発する言葉もおぼろげながらに意味は通じる。だけれど理解出来ているかは分からない。今の自分はきつと口を開いたままの間抜けな姿

なのだろう、そんな状況を見て曾祖父が口を開く。

「少し長くなるが、聞くか？」

口を閉じて静かに頷く。聞いておかないと後悔する事になりそうだから。

今日、出会ったイサオさん。この方は日本人でもなければこの世界の住人でもない。イジツという別世界から穴と呼ばれている所を通つて、こちらに辿りついたらしい。あちらの世界では、ここの世界の事はユーハングと呼ばれており、何十年も前には穴を通じてユーハングからイジツへと人が来て生活をしていた。

その時に持ち込まれた様々な物がイジツを一変し、生活が変化した。

だがある時、ユーハングからやってきた人達は突然と姿を消した。穴と共に。

そして現在、過去の言い伝えとして本当にあつたのかどうかも分からない程の年数が経つたある日。消えたはずの穴が再び現れる様になり、そこから様々な物が降り注いでくるようになった。

イサオさんはその穴を管理し、穴から降り注ぐ物を独占する為に行動を起こした。その為の一つとして作られたのがイケスカという町を中心とした自由博愛連合と呼ばれる組織である。

連合に加入した町とは上下関係。空賊と呼ばれる連中達から町を守る為に戦力の提

供をする。ただし、加入した町がイサオさんの要求に応じないなら武力で潰すという始末。ここで言う要求は主に穴に関する事らしい。

勿論、そんな事をすれば反発も食らうわけで、反イケスカ連合という組織が立ち上がり、大規模な空戦が発生する。

イサオさん自身も参戦して反イケスカ連合に対してダメージを与える事に成功する。昔はエースパイロットとして空を飛んでいたとの事。しかも二つ名付き。

順調に事は進み、反イケスカ連合も潰せそうだった時に誤算が生じる。穴の出現である。

穴。これは毎回、同じ場所に現れる物ではないらしく、見つけるのはなかなか困難だったみたいだが、イジツには穴の研究者がいてその人の研究結果として穴が出現する際に予兆が発生する事が分かった。

その予兆がイサオさんがあるイケスカに発生した。

反イケスカ連合がこの機会を逃すわけもなく、イケスカにて空戦が発生。反イケスカ連合にもエース部隊がいたが、イサオさんの敵とまではいかなかった。前回の空戦で、そのエース部隊に油断して撃墜されているのは忘れたらしい。

これでイサオさんを邪魔する奴らはいなくなる。穴を、全てを独占してイジツを手に取りめる。そう考えていた矢先に反イケスカ連合が穴を破壊する為に爆薬とブースター

を搭載した飛行船を穴に向けて発進させる。

勿論、そのままにしておく事は出来ず、撃墜に向かうイサオさん。だが相手をしていたエース部隊の一機が邪魔をし続ける。

イサオさんも苛立ちが隠しきれず、相手の機体を飛んでいるのが不思議なぐらいまでに銃弾を浴びせる。そして残りの弾薬を全て飛行船の撃墜にまわし始める。

しかし、尚も邪魔をし続ける相手に止めを刺そうと行動に移し、後ろを取り、引き金を引くだけで終わるはずだった。が、相手の予測不能な機体の動きに反応できず、機銃掃射を受けて自身の機体とエンジンに損傷を受ける。

飛行船の撃墜が事実上、不可能になったイサオさんが起こした行動が、エンジンが止まる前に飛行船の爆破によって破壊されるであろう穴に先に飛び込む事であった。

その穴を通じて辿りついたのがこの世界であり、こちらでの穴の出現場所が曾祖父が所有している土地の上だった事もあり、不時着して曾祖父に発見されて現在に至ると。

「本当に酷い連中だよな。 よりにもよって穴を破壊しようだなんて」

「私には相手方の人達の行動が真つ当に聞こえてくるのですが」

「アハハ、ハルト君は面白い事を言うねえ」

楽し気に笑うイサオさん。 目線を曾祖父に向けて見ると渋い顔。

曾祖父から始まった話も途中からイサオさんの独壇場。 身振り手振りも使ってこち

らに来る前の話を語ってくれた。

この姿を見ている限りだと楽し気な人なのだけど、所々でキツイ話も出てくる。空賊の連中と繋がりが有ったり、爆撃機を造って町を吹っ飛ばしたとか、ユー・ハングにおいていかれた爺さんが凄腕のパイロットだったとか。

飛行機……特に戦闘機の話になるとそれはもう楽しそうに喋りだす。その話の間にイジツという世界がどのような風景なのかも少しづつ垣間見えてくる。

イジツ。一面ほぼ荒野の世界であり、海も無く川も無い。地下資源に頼り、人々が生きてたり死んだり当たり前。

その世界に突如として表れた穴。穴からは様々な物が降ってきた。とりわけ、航空技術がイジツを変えたとも言われているらしい。

昔あったであろう海や川の痕跡による渓谷、アノマロカリス等の狂暴な生き物達のおかげで陸路が壊滅的だった所に飛行機が登場。空路という移動方法により町の交流や物の輸送が盛んになる。アノマロカリスって毒ガス吐くんですか。

それにより人々が手を取り合って。とならない所が難しいところ。物を運ぶとそれを狙う連中が登場するようになる。いわゆる空賊という人達。

空賊達から人や物を守る為に自警団が出来る。そこから更に腕の良い連中達は飛行隊を結成して傭兵として雇われるようになる。

結局、人々の争い事は終わらずに繰り返されていく日々。数年前にもリノウチ大空戦と呼ばれる程の空戦が発生した。そこでイサオさんは一度の出撃で十二機の敵を落とすという偉業を成し遂げて名を上げたそうだ。

イジツでいう戦闘機はレシプロ機が主流で、機体の名前を聞くと日本語ばかり……というよりも日本機。

隼に零戦、雷電と何かしらで聞いた事のある名前が出てくる。隼だと小惑星に探査機を送り出した話とかで。

イサオさんに問いかけると、ユーハングという言葉はこちらの言葉で日本軍を意味していた。

つまりユーハング＝日本軍が数十年前に穴を通じてイジツに辿りつき、色々やってたけど穴が閉じそうだから帰っていったと。

戦闘機の名前や年代的に考えると、第二次世界大戦の真つ最中に起きてた出来事なのか。

「ちよつとストップ。一回内容の整理整頓をしたいのですが」

「二度、休憩にしよう。当時生きていた私でもこの男から聞いた話を理解するには苦勞した」

「まっ時間は有るんだし、ゆっくりと理解していけばいいんじゃないかな」

そういつてイサオさんはリモコンを手に取り、ソファーに座り慣れた手つきでテレビをつける。

そこに丁度、種子島から衛星を打ち上げるロケットが映し出されてイサオさんが興奮し始める。

椅子に座っていた私を軽々と持ち上げて自分の隣に座らせて解説を求めてくる。

勢いといい知識欲といい、小さな子供かと思う反面、大人がはしやぐ姿もまた楽しそうだな、と思ってしまうた。

第3話

結局、二人して最後までロケットの打ち上げを見てしまった。

その間に曾祖父が寿司を用意してくれた。桶に入った凄いやつ。事前に予約して届けて貰えるように連絡しておいてくれたらしい。

咄嗟に出た照れ隠しだというのはきつと気づいているだろうけど、本当に用意してくれると感動する。出前なんて無理だろうと思うぐらい周りに何も無いこの場所であらうの事。

三人揃つての食事。久しぶりに誰かと一緒に食べるなあと考えてふと目に止まるのはイサオさん。

海も川も無い世界から来た人に生魚ってどうなのだろうかと心配するも、ワサビの辛さにやられている姿を見て大丈夫そうだと根拠のない確信を得る。

後で聞いたところ、湖はいくつか存在していて、イケスカにも大きな湖があり、魚は貴重ではあるけど専用の施設で養殖されており、お祝い事の際にももの凄く奮発すれば食べられるそう。しかしアロワナモドキって何だろうか。

夕飯も一段落ついて、私にとって本題である曾祖父が何処へ何をしに行くのかを聞かなければならぬ。

下手をすれば今生の別れ、間違つてもそんな事になつてはならないと祈らなければ。そうでなければ国籍不明の戸籍ナシのイサオさんをどう扱えばいいのでしょうか。

「さて、私の目的も伝えておくべきだな」

「それは勿論聞きたい。二人はもうお互いの目的とかは伝えてあるの?」

「それなりにねー。ジイサンはイジツで人探し。僕はユー・ハングで調べ物。利害が一致したからね、協力した方がいいって話にはなつたのさ」

「なるほど……、ん? もしかして私、イサオさんのお手伝い係? 呼び出し食らつた理由が嘘だつた?」

「こちらの世界でも中々珍しい物は用意してあるから嘘ではないよ。ただジイサンが重要な部分をお話さなかつたという事さ」

曾祖父に視線を移す。とても気まずそうな顔をしているが、イサオさんの話を否定もしない。確信犯か!

「その事については謝罪する他に無い。ただ私の話を聞いてはもらえないか?」

「……まあひーじいの事だから、余程の理由なんだと思う。とりあえず聞いてから考える」

「ありがたい。優しい曾孫を出会えた私は幸せ者だよ」

「そういうのは照れ臭いので話をお願い。イサオさんはそのニヤニヤした顔やめい」

こうして今度こそ、曾祖父の話が始まった。

曾祖父は弟さんがいた。私からすれば曾祖叔父だ。いた、というのは残念な事だけど戦争で亡くなられたからである。

兄弟して軍人さんをしていたのだが、弟さんが一通の手紙を残して忽然と消えてしまったのだという。

書類上では戦死とされ、書類に書かれていた場所では確かに争いがあつたが、遺体も遺品も何も残らず。

戦争。軍人として戦つて亡くなつたのなら、何も残らないのは不思議ではない。とは曾祖父の弁。

だけど曾祖父には気になる事が残つていた。生前に弟さんから届いた最後の手紙。

この手紙には穴に関する事が書かれていた。

その話をしている最中に、曾祖父は私にその手紙を差し出してくる。手紙が気になつたのかイサオさんが私の真後ろに移動してくる。こちらの文字が読めるのだろうか。

手紙の内容でイジツに関する事だけを抜粋する。三つの輪が空に浮かんでおり、それらが徐々に一つの輪になりつつある。このまま観察を続け、状況次第では偵察命令も出

るだろう。面倒。

「面倒だったんだ……」

「昔からのらりくらりとした性格だな。人から見れば落ち着きのある性格だ。などと言われていたがアレはただ怠けたいだけだったと思うぞ」

曾祖父の顔に少し笑みが浮かぶ。弟さんとの事を思い出しているのだろうか。

三つの輪、これが重なる事で一つの輪になって、穴と呼ばれる物に変化するのだろうか。

「ハルト君ハルト君。アレを見て見なよ」

イサオさんから呼ばれて顔を向けると手招きをしている。こちらに來いという事らしい。

「おお、本当に三つの輪だ」

自宅から少し離れた距離に低空で薄っすらと三つの輪が浮かんでいる。

「あれが重なる穴になるって事です？」

「多分ね。一応、あそこから僕は脱出してきたからね」

「でもイジツ側では爆破されたとか言ってますませんでしたっけ」

「そこが謎なんだよね。穴は一度、閉じればしばらくは痕跡すら残さずに消えるのに今回の穴は輪になって残ったままなんだよ」

「という事は、再びあの輪が穴となればイジツに行ける可能性がある？」

「その通り！ ジイサンはそのチャンスを狙ってイジツに行きたいんだってさ」

「うーん……」

曾祖父を見る。まだ聞きたい事はそれなりにあるので今の内に聞いてみよう。

「ひーじいはイジツに行つて弟さんを探したいの？」

「ああ、とはいえ年齢が年齢だ。生きているとは思わないさ」

「そこまでする理由を聞いても大丈夫？」

ああ。と返事をして曾祖父が教えてくれた。

弟さんが亡くなった事は悲しく辛い事ではあったが受け入れた。だけど最後の手紙に書かれていた事がどうしても頭に引っかかる。

でも時は戦争中。がむしやらに自分の仕事をこなし、気が付けば終戦。

今度は食べてゆく為に働かなければならず、また働き詰め。その間にも時は流れ、気が付けば自分が棺桶に入る順番かと考えた時に思い出す、弟さんからの手紙。

あれは一体なんの事だったのだろうか。自然現象か。戦場で見た幻覚のたぐいなのか。だが弟がそういった内容を書いた手紙を送ってきたのはあれが最初で最後だった。

このままもう少し時間が経てば本人に直接、聞く事が出来るのだろうか。あの手紙の後に何が起きたのか。何をしていたのか。どこで亡くなったのか。それともまだ生きて

いるのか。

「ジイサンも言ってるけど、生きてはいないと思うなあ。イジツにいたとしたらまず僕の耳に入ってくるだろうし」

「そういえば、ユーハングからおいていかれた爺さん。つて人もいましたよね。お名前とかは分かるんですか？」

「いいや、ただサブジーって呼ばれてたよ」

手紙に書かれていた名前とはかすりもしない。曾祖父の反応を見てもイサオさんが何かをした。という事はないようだ。また渋い顔はしているけど。

話を戻そう。

気になる事をそのまま放置してこの世を去るのも未練が残る。なにより弟から出された問題を解けずにあの世で会いに行くのは兄として悔しい。

曾祖父はそれ以降、手紙に書かれていた現象について調べ始めた。現地に直接赴いた。噂話でも足を運んで聞き取りをした。数少ない生き残りの人達からの協力も得た。そして得た情報をまとめた資料に幾つか共通点を見つける。

三つの輪は一つに重なり穴となる。その先には一つの世界があり、イジツと呼ばれていた事を。

曾祖父が住んでいるこの場所も、噂話の一つだった。

実際にこの場所に来て、三つの輪を見つけた時は内から溢れ出てくるものを抑えきれなかったという。

そして三つの輪が見えるこの場所に居を構え数十年。日々監視し続けたが何も起こらず年齢的に限界かと感じ始めていた矢先に、三つの輪に変化が起こり始める。

ただし、余りにも突然で用意してきた物を使用する時間も無く穴が開かれた。しばらくその穴を呆然と見つめていたが、何かの音が聞こえ始める。

その音は穴から聞こえるものであり、次第に大きくなり一つの戦闘機が飛び出してきた。

それがイジツから来たイサオさんであった。

「不時着出来る所があつてよかつたよ。流星に岩肌があるような場所だったら死んでいただろうしね」

「その代わりに私の畑が一部お釈迦になったがな」

「ままつ、人の命が救われたという事でそこはね！」

「生きててよかつたですな、イサオさん」

「ありがとう！ 心配してくれるのはハルト君だけだよ！」

そういつてハグをしてくるイサオさん。身内の所有する土地に死体発見とか洒落にならないからなあ。という意味だったのだが黙っておこう。暑苦しいのでそろそろ離

れてください。

「大まかにだけど分かった気がする」

「そうか、知つての通り私がイジツに行く理由は自己満足だ。弟がイジツに行った可能性も低い、イジツに行ったとしても生きてる可能性はほぼ無い。ただ、それでも可能性があるので知りたいのだ。あいつの生きてた証みたい物をな」

「それで、イジツに向かうとしてもあの穴がいつ頃開くか分かるの？」

「そこは僕にお任せあれ！ これでも一応、研究者から分捕ってきたノートは記憶してあるからね！」

頭の痛くなるような事を平然と言つてのけるイサオさん。とはいえ現状はそのノートとやりに記載されていたであろう予測に頼る他もなくそのまま話を聞く。研究者さんごめんさい。

「輪の動きと光り方からすると、およそ一か月後に再度開くと予想されるよ。ただしイジツ側のどこに出られるかは分からないけど」

「二か月後かあ。夏休み終わりそうな頃だけど……あれ、イサオさんの世話をするならば休みが足りない気が」

「二時的に休学してもらうしかないな。こればかりは私のせいだ。色々と便宜を図ろう」

「当初の予定からどんどん大事になってきた気がするよ」

「仕方ないね。まあ諦めも肝心だよ。と、言いたい所なんだけど一つ提案があるんだ」

「提案ですか。イサオさんも一緒にイジツに行ってくれるとか？」

「いやいや！ いま戻った所で袋叩きにされるのがオチだよ！ なによりまだこの世界で知りたい事が山ほどあるからね！」

「それは残念。それで提案とは？」

「少ししよんぼりするイサオさん。でも立ち直りも早い。」

「なに、イジツに向かうのをジイサンではなくてハルト君が行けばいいのさ」

「……はい？」

何を言っているんだお前は。そんな事を口に出すよりも曾祖父の行動が早かった。

「それは駄目だ。私の自己満足に曾孫を差し出すわけにはいかない」

「理由はそれなりにあるんだ。とりあえず聞いてみたりしない？」

「駄目だ」

ハルト君と助け船を求めるイサオさんからの懇願。どうしろというのですか。

「ひーじい。話だけでも聞いてみたら？」

「駄目」

「少しでも情報を聞き出せた方がいいんじゃないの？」

「駄目」

あかん。意地になつてる。とはいえ私の身を案じての事だから嬉しい気持ちもあるけど、理由も気になる。

「じゃあ私がイサオさんの話を聞いてみるから、そこに居るだけでいいから居て」

「……」

「と、いうことでイサオさん。理由が知りたいです。お願いします」

「任せてよ！　といつても理由は単純だよ。ジイサンがイジツに行くには歳を取り過ぎて目立ちすぎるんだ。イジツでは生き死にが当たり前で年寄りには少ないからね」

「最初に聞いた話でも言つてましたね。生き死にの話」

「そつ、その問題も含めて何とかしようと思つて行動を起こしたんだけど……まあそれは置いておこうか。後は生命力。年齢的に風邪でも引いたら終わりなんじゃないの？

幾つなのか知らないけど」

「私が小さい頃に百歳おめでどう的なイベントがあつた気がします」

あ、固まつた。そうだよね。口も達者で肉体労働も平気でこなしているけれど、曾祖父は百歳を越えていたんだ。

今何歳なんだろう。思い出そうとしていたら固まつていたイサオさんが動き出す。

「予想以上でびっくりしたよ……。次はイジツに向かう機体だよ。ジイサン、あの隼で

行こうとしているだろ?」

「……ああ。イジツでも珍しくないのだろう?」

「勿論。ただ性能的にイジツでも低い方の機体だよ。その隼に乗って空賊にかち合ったらジイサンどうするつもり? 逃げ切るのは不可能、格闘戦に持ち込んだとしてもジイ

サンのパイロットとして能力は未知数。そして先ほど言った通り体力的な問題」

「ひーじいパイロット経験はあるの?」

「あるにはある。戦時中に負傷したパイロットの代わりに零戦に搭乗させられて何機か落とした」

「何機つて下手すればエース扱いされるんじや」

「当時だとその程度のスコア持ちはゴロゴロいたよ。だがお祝いはして貰ったな」

「だ、そうです。でも70年以上も前なのは確かですけど」

「だよね! 経験があるのは意外だったけど、やはり厳しいかなーと僕は思うんだ」

「……イサオさんが搭乗してきた機体を修理して使うという手段でも取るのですか?」

「大当たり! 震電なら速度も上昇力も空賊連中が持っているような機体では追いつけないからね。無駄な争いを避けて逃げ切る事が出来るから体力も余裕が出来るんじやないかい」

「でもその機体、目立つんじゃないのですか。イサオさんが乗り回していたんだし」

んぐつ。という詰まる声が聞こえて呆れる曾祖父。これは却下な雰囲気。深呼吸をして落ち着くイサオさん。そのまま話を続ける。

「そこは塗装とかでカバーするとして。これが最後！」

「なんでしようか」

「ジイサンがイジツに行つたとしたら僕とハルト君だけになるんだ。ハルト君だけで僕の手綱を握り続ける事が出来るのになつてね」

心底、悪そうな顔でそんな事を発言する。

「ほう。曾孫をイジツに行かせろと言つてみたり、残したら残したで自分の手綱を引くのは無理だと発言したり。いい度胸だ」

そう言い残して曾祖父が席を立つ。とても危険な香りがする。

「イサオさん。これ相当まずい状況ですよ！」

「とはいえなあ。現実問題として伝えておくべき事だと思ふんだよね」

「イサオさんの口から現実なんて言葉が出てくるとは思わなかつたです」

「ひどっ！ ハルト君って僕に対して辛辣だよ！ 優しくしてくれてもいいんだよ？」

「言葉で返すだけ優しい方だと思えますよ」

ああ確かにと腕を組んで頷くイサオさん。冗談のつもりが本当にマシな方だったの

だろうか。イジツって怖い。

ともかく。人間誰しも怒れば怖い。特に曾祖父は私の知っている人達の中もつとも恐ろしい人。なんとかして落ち着かせないと。

あれやこれやと考えているうちに曾祖父が戻ってくる。手に持っているのは……。

「あぁー！ それユー・ハングの人達が持っていた武器だ！ えーとたしか、カタナ！

イジツじゃ数が少なくて凄く貴重品なんだよ！ そんな物が早々にお目にかかれるなんてやつぱりこつちに來れてよかつたなあ！」

「そうか。じっくりと見るがいい。その後で試し切りもしてやろう」

「えっ！ 本当!? 切れ味が凄いつて噂なんだけどイジツにあるのは誰も整備出来なくてさ。もうボロボロで本来の性能も分からなくて困っていたんだよ！」

「そうか。なら体験してみるといい。己の体でな！」

手に持っていた鞘からゆっくりと姿を現す抜き身の刀。天井から射す光が反射して眩しいほど綺麗に手入れがされている。曾祖父が手にしている刀は長さから見ると脇差。職業軍人をしていたから軍刀でも取り出してくるかと思っていたけど違った。

「ひーじい！ それガちなヤツだから！ イサオさんが言ってる刀はきつと軍刀の方だから！ いや、そうじゃなくてソレ鞘に納めて！」

「そのお願いは聞けん！ いくら忍耐強い私でも我慢がならん！」

「忍耐強いつて話を聞いただけでこの状況なんですけど！ 結構な早さの短気だよね！

私の事で怒ってくれてるのは嬉しいけど落ち着いて！」

曾祖父とイサオさんの間に入り、説得を続ける。抜き身の刀を持っている曾祖父はとてつもなく恐ろしいけど、そうも言っていられない。

後ろにいるイサオさんは自身の置かれている状況もなんのその。目を輝かせながら色々と聞いてくる。後で！ 後で答えるからちよつと黙ってて！

そうした問答が収まりを見つけた頃には日付も変わろうとする時刻となっていた。

第4話

興奮冷めやらぬ曾祖父をどうにか寝室に押し込んで、私とイサオさんはリビングで就寝。

翌日。起きた事には台所で曾祖父が昼食の用意をしてくれていた。イサオさんはまだ爆睡中。

出来上がった朝ご飯は和風一色。寝ている人を叩き起こして三人揃っていただきます。

朝食後にイサオさんから見せたい物があると言われ、連れて行かれた先は車庫だった。

「ハルト君を呼んだ時に珍しい物があるからってジイサンが言ってたじゃないか。それは昨日の話に少し出てたけど僕が搭乗してきた機体の事なんだ。ここの中に入っているよ」

曾祖父が車庫のシャッターを開けていく。現れたのは見るからに綺麗なプロペラがついた飛行機、かたやその隣には所々に銃弾の痕が生々しく残り、土埃まみれのプロペラのない飛行機。

「どう！ 僕の震電は！ これを完成されるのにどれだけの莫大な研究と時間と財産がかかった事やら。でもその分、性能はピカ一だよ！」

「そのご自慢の戦闘機もかなり損傷が激しいようですが」

「そうなんだよねえ。油断して鉛玉を食らったあげく、穴に突入する為に無理をさせたからエンジンはお釈迦。こちらで不時着させた事も響いてこのままだと飛べない状態だよ」

イサオさんにしては珍しく凹んでいる。よっほどのお気に入りだったのかな。

こうして現物を見ていると、本当に異世界から来たのだなと実感する。ましてはあのような損傷の仕方なんて現在の日本では到底見られないような傷跡だ。

流石に可哀想だったので軽く背中を擦って慰める。

「こつちにある羽の付いた飛行機も戦闘機なの？」

「隼一型だ」

「これに乗ってイジツに行こうとしたの？」

「その通り。イジツには当時の機体が持ち運ばれた事は協力者達のおかげで知る事ができた。機体その物には用意はしたが残念な事に今回は飛ばす時間もなかったが、当時の日本軍の機体が今でもイジツにおいては基礎的な戦闘機になっている事がイサオのおかげで知る事が出来たのは運が良かった。それだけでも安心して飛ばせるよ」

「撃墜スコア持ちは凄いですな」

「何機。かだぞ。元は技術畑の人間だ。修理に整備をしていた頃の方が長かったな」

へー。そんな時代もあったんだと感心していたら。背中を擦っていた相手が丸くなっていた背中を伸ばして曾祖父に顔を向ける。

「ジイサン。頼みがある！」

「駄目だ」

「僕の震電を直してくれないか！」

「駄目だ」

「無論、お礼はする。というよりも直してくれたらこの機体をあげるから！」

「話を聞いていないのかお前は。無理なのだよ。物資とか技術とかの問題ではなく設計図が無い」

「なっ!? だってここはユーハングでしょ！ 零戦は？ 彗星は？ 富嶽は!? 全部ユーハングから来た物だよ!」

「残念ながら、ユーハング。日本軍は戦争に負けたんだ。そこら辺の機密書類は実際にあったとしても敵国に渡る前に焼却処分だよ」

呆然と立ち尽くすイサオさん。イサオさんがこの世界に来て知りたかった事の一つだったのだから。

幾つかの機体は現在も現物保存がされていたり、レストアされて空を飛ぶニュースも見かけた事があるから全てではないのだろうけれど。

折角だからバイクをここに置きなさいと言われたので移動をさせる。私のバイクもそういえば、おハヤブサー号である。

エンジンを積んだ機体が三つ並ぶ。私のおハヤブサ。曾祖父の隼一型。イサオさんの震電。

今なお沈んでいるイサオさんを連れて家の中へ。そしてその日はあのテンションの高いイサオさんは戻っては来ずにその日は終わる。

翌朝、誰かに揺すられて目が覚める。言うまでもなく相手はイサオさん。

「どうしたんですか。朝も早よから」

「気づいたんだよ！」

「何にですか？」

「イジツに居た時だって断片的な情報から作りあげてきたんだ！ 物資もあつて技術力もあるこの世界でなら僕の知識も加えれば修理が出来る可能性がある！ そしてその震電にハルト君に乗せてイジツに行ってもらうんだよ！」

唐突な話に曾祖父がいるかどうかを確認してしまう。よかった。いないみたいだ。

「修理はともかく、どうしても私をイジツに行かせたいんですね。やっぱり生還率とかの話ですか？」

「それも勿論の事だけど、ユーハングに住んできたハルト君からみたイジツを見てきて欲しい」

「話を聞くだけでヤベー所なのだけは分かりましたけど」

「そのヤベー部分をハルト君の目線から改善できそうな事を探すだけでいいんだ。ユーハングの仕組みと照らし合わせながらね」

「これまた大きな事を言う。気に入らない物は爆撃してきた人間とは思えない。それにそういった事であれば尚の事、経験値がパネエ曾祖父が適任ではないかと。」

「確かにその部分では強みと言えるだろうね。ただ……」

珍しく言い淀む。何か懸念すべき事でもあるのだろうか。

「単純にあのジイサンだとイジツに行ったら帰ってこない気がするんだ」

「口では言っていましたけど。探し物の為にアッチで骨を埋める気マンマンな口ぶりでしたね」

「それでは僕が困るんだ。いずれは僕もイジツに戻る予定はある。だけど僕がいなくなった間のイジツの情報は何もなければ帰るタイミングが難しい」

「イサオさんはイジツに戻って何を企んでいるんですか？」

「いやあーそれが何にも浮かばないから困っているんだよね！」

「自分探しの旅で異世界に来たんかい！」

あははと頭に手を当てながら笑うイサオさん。少し元気を取り戻した模様。

しかしいくつか何か腑に落ちない事がある。イサオさんが私をイジツに向かわせようとし始めた頃から引つかかる何か。

曾祖父がイジツに向かうと、イサオさんはユーハングで私から手綱を奪い好きに行動し始めると宣言。曾祖父が無事に戻って来れる可能性が低いのでイジツの情報が手に入る可能性も低い。

仮に私がイジツに向かうと、イサオさんはユーハングで何をしようとする？ 私がイジツに向かった場合のみ、年齢、体力以外の要素で帰還が出来る可能性がそこそこあるような考え方。

震電の修理を願い、その機体に私を搭乗させてイジツに向かわせたい理由……。

「んー分からん」

「ふふふ、これでも天上の奇術師と呼ばれた男だからね！ ヒントは出せても答えまでは教えられないよ！」

「そのヒントで一つだけ分かる事はありました」

「なんだい。言ってみたまえ」

「私がひーじいと今生の別れをしなくて済むには、イサオさんの提案に乗るしかない。という事です」

そう言うと、目の前にいるイサオさんの顔は背筋が凍るような感覚を覚えるぐらいの気味が悪い笑顔でこちらを見つめている。

最初からこの人はどちらに転んでも自分に損はしないように考えていたのでは。

その中の案で私がイジツに行くという最適な方に事が進んで笑いが止まらないのだろうか。

初めて出会って以来、これほどイサオさんが恐ろしい人だと感じるのは始めてである。現代人では無く異世界の。それも連合の長を務めて戦争を仕掛ける程の人間なんだなど。

引き攣る自分の顔を無理矢理引っ張り口を動かそうと頑張る。黙っていたら本当にいい様にこき使われるだけだ。

「私がイジツに行く気になった。イサオさんの機体を修理出来たとする。更に戦闘機の操縦経験も無い私でもイジツで生き残って探索が出来る方法。教えてもらえるんでしょうね?」

「ははっ勿論だよ。ジイサンの説得がてら説明をしていくからさ。聞いてみてよ」
そう言って曾祖父が起きてくるのを待つことになった。

結果だけ先に記述しておこう。私がイジツに向かう事が決定した。

昨日の悪ふざけのような空気もなく始まった話し合い。

曾祖父もその雰囲気を感じたようにイサオさんと向き合い話し合いを始める。

イサオさんが私をイジツに向かわせたい理由。

イジツにいる自分の執事に言付を頼みたい事がある。その際の証明として震電を見せるのが最適である事。

穴から抜け出した後に出会うイジツの人間は、穴を調べさせていたイサオさんの手先の人間である可能性が高い事から、震電に私を搭乗させてイサオさんからの使者とすれば協力を得る事が出来る。そうすれば探し物も一人で途方もなく始めるよりは楽になる。

仮に反イケスカ連合側の人間に出会ってしまったとしても、震電の機体性能を生かして逃げ切る事が可能。

何よりも大切なのは、イジツから帰還する場合、穴が出現した時に目的が果たせなくても帰還を優先にするという意志を持ち合わせている事。

ここから先のやり取りは確認作業のような話し合いであった。

曾祖父が震電に搭乗では協力は得られるかどうか。帰還の意思が無い人には力は貸

せない。

執事の言付については。生きているよ、と伝えればいい。

震電の修理方法については。昨日の内に思い出したことは書き留めておいたよ。

操縦経験もないハルトにこの短時間でどうやって操縦を教えるのか。空にさえ飛ばさせてくれるなら僕が直伝で叩きこむよ。

そして曾祖父はこちらに顔を向けて訪ねてくる。

「ハルト。本気なのか？」

「本気です。ひーじいとこんな形でさようならは嫌ですから」

「生きて帰れる保証もないんだぞ？」

「生きて帰る為の努力と協力、帰る事を優先する意思はあります」

「私が帰ると言っても駄目か？」

「駄目です。意思があっても年齢的にあちらで体調を崩した場合、そのままという可能性は捨てきれないです。それに……」

「なんだ？」

「居場所を知っているのに迎えにも行けず。空っぽの棺でひーじいの葬式をするのはごめんです」

曾祖父は天井を見上げる。そのまま、時間だけが過ぎて行った。

第5話

話し合いから約一か月ほどの時間が経った。

まもなく穴も開くだろうとイサオさんが言う。実際に三つの輪は一つになりかけていて、もはや時間の問題といった所。

イジツに向かう前の、最後の時間を使いあの後の出来事を書き残しておく事にする。

これをふたたび目にし、イジツでの出来事を続きとして書き連ねる事が出来るように。

自宅のPCの中身を消去出来ないままお陀仏になってたまるものか。

腹を括った後の曾祖父は行動が早かった。

何処かに連絡を入れた後は、即座に私の飛行訓練が始まった。

曾祖父が隼の点検を行い、イナーシャハンドルを使いエンジン始動。カラカラとした音の後にプロペラの風切り音が響く。

生まれて初めて見た光景に少しだけ興奮するが、直後に渡されるエチケツト袋。吐くほど辛い現実がこの後に襲い掛かるのか。

操縦席にイサオさん。その後ろに反対向きに固定された私。操作を覚える前に肉体で空にいる感覚を覚えろという。

イサオさんが念入りに曾祖父から言われていた言葉は、雲にだけは絶対に入るな。

イジツに向かう為に畑の端に用意された直線の道。滑走路から隼が空へと飛び立つ。

地面から離れた時のお尻がムズムズする感覚。空に向かっているのかという興奮に包まれる間もなく地獄が始まる。

イサオさんが笑いながら隼を操縦する。とても楽し気で飛ぶ事が好きなんだろうと思えてくるのだが、私はそれどころではない。

肉体がこれまで経験した事のない方向から重力を感じ、悲鳴を上げる。

脳味噌も言うまでもなく、警告音が聞こえるかのようにヤバイ・マズイと同じ思考が繰り返し伝達される。

結果。口から一杯何かが出てきた。臭いだろうにも関わらずイサオさんは笑って飛び続けていた。

震電の修理について。

再度、機体の確認をしたところ。射撃を受けていた事もあり一部胴体の破損。特にエンジンが悲惨な事になっていた。

修理をすることは不可能。ならエンジンを交換するしかない。だが同じエンジンを入手する方法はこの世界には無い。ハ43と呼ばれるエンジンを再び入手し、オリジナルに戻すことは叶わなかった。

復元が駄目だと分かれば早々に違う可能性を考え始める曾祖父とイサオさん。オリジナルに拘る必要性が無くなった事を良い事に代理品を考え始める。

その結果、入手のしやすさ、信頼性の高さ等を含めて選ばれたのはイギリス製のエンジン。

どこぞへと連絡を入れて一週間。そのエンジンが届く。何処に連絡したのと尋ねれば、『昔、ちよつとな』だそうだ。

破損した胴体の修繕。操縦席を守る防弾ガラスの入れ替え。無理矢理機体にねじ込まれていくエンジン君と排気を出す為の機体修繕。やる事は盛り沢山。

寝る暇もなく機体に付きっきりの曾祖父であったが、技術者だった頃を思い出すのか。とても楽し気な顔をしていた。

日々、体力作りと隼に振り回されている間にも、イサオさんの知りたがっていた事を探すお手伝い。

私のおハヤブサ号の後ろに乗せて町にも出かけたりした。街中で目を離した隙に消

えるのは毎度の事でもあった。

ご注文通り、この世界についての資料をかき集めた。国、経済、歴史、人種と様々。それらを調べている時のイサオさんは普段の時とは違い、無言で読みふけている。時々、この世界の戦闘機を見せて息抜きをさせる程に。

ジェット化された震電に乗ってきただけあつてこちらも夢中に読む。その姿は子供の様に無邪気にも見えた。

ただミサイルは嫌いらしい。

曾祖父の技術とイサオさんの知識により、震電は再び空へ向かう可能性を得た。

幾度となく滑走路だけを往復し、機体全てのバランスチェックが行われた。排気の為
に開けられた穴があばら骨の様にも見える。

そしてイサオさんの操縦により、テスト飛行が開始されようとしている。

「何か注意点はある?」

「オリジナルとの違いは教えた通りだ。後は飛んで覚えてみる。パイロットがヘボでなければ無事に離陸できる」

「言ってくれるねえ! それじゃ天上の奇術師の飛び方をよく見ておくんだよ!」

イナーシャハンドルを使いエンジンが始動し始める。隼とは違う機動音。

徐々に上がる回転数。それに共鳴するようにパンパンと弾けるような音と共にエンジンが唸りを上げる。

ゆつくりと進む機体は本格的な加速を開始し、離陸可能な速度にまで達成する。

そして地面から車輪が離れ、機体は空へ飛び始めた。

ふらつくような事もなく。綺麗な青空へと震電は舞い戻って行った。

「こればかりはジイサンを褒めずにはいられないなあ！ 震電をあんな風にして修理して動かしてしまうだなんて！」

「お前さんも口ばかりのパイロットではなかったようだな。換装した機体の初飛行であんなに綺麗に飛ばせる奴を見たのは初めてだ」

「お！ ジイサンから褒められるなんて、明日は何か恐ろしい事が起こりそうだよ！」
「よく言うわい」

震電（キメラ版）の復活という事でちよつとしたお祝い会。お外で食事は楽しい。

一時はどうなるかと思つた曾祖父とイサオさんの関係。けれど共通の目的のおかげで少しは壁が薄くなったのかな。と。

機体の修繕、改装という大仕事をやってのけたのか、二人ともお酒が進み結構なグダグダになっている。

「この機体の塗装はどうするんだ？」

「勿論！ 赤に染めてもらうよ！ そうしないと僕の震電だと分からないだろうしね」

「ならパーソナルマークはどうするんだ。自由博愛連合とやらの残すのか？」

「残したままにしておくのと面倒な事になりそうだなあ……。ハルト君！ なにか書きたいマークあるかい？」

「いきなり言われましても何も思い浮かばないのですが」

「せつかくだから今決めて。パパッと描いちゃおうよ！」

酔っ払いは簡単に言いやがる。とはいえマークかあ。ドクロ……はねえな。やつぱり鳥とか。そうなると鷲とか鷹とか。やばいカッコイイ。胸熱。

震電に自分の考えたマークが描かれるというだけでテンションが上がる。あーでもない。こーでもないかと妄想を繰り返していた。それがいけなかった。

気が付けば酔っ払い二人は震電の所に移動をしていた。勿論、そのまま何もしない訳もなく。

「ハルト君ー。終わったよー！」

「は？ まだ何も決めてないのですが」

「長そろうだったからジイサンと決めて描いちゃった」

てへペろ。という感じでサラッと流すイサオさん。何が、何が描かれてしまっ

のだ。

「ちよ！ これパンケーキじゃないですか！ 何を思いついてコレに決まったんですか！」

「いやー街に連れて行ってもらった時に立ち寄ったお店のパンケーキが美味しいのを思い出してね」

「それ何時行つたの!? 私食べた記憶ないのですが!」

「そりやそうだよ。ハルト君を撒いた後に一人で食べてきたからね!」

「絶許」

「ハルトは昔からパンケーキが好きだったからなあ。丁度、まるいしよかったよかった」
よくねえよジジイ! ご丁寧に皿まで描いてフカフカの美味しそうなパンケーキを描きおつて!

「これについては後日、二人がシラフの時に考えるので中止です!」

イサオさんからハケを取り上げてパンケーキマークの上に三本の線を上書きする。

塗装し直しの意味でやった行動なのに、幻聴が聞こえてくる。独房……連れて行け……。

恐ろしい。いったいこのマークに何の意味が。呆然と聞こえてくる幻聴に耳を傾けていたら、ハケを再びイサオさんに取りられる。

そしてササッと何かを追加された時には幻聴は消えてなくなった。恐ろしい、三本線効果。

「いやー流石はハルト君！ 消すのかと思つたらフォークを描こうとしていたんだね！ そうだね、食べるなら必要だよね！」

イサオさんの手によつて追記された絵には、右側にナイフ。三本線がフォークへと様変わりし、パンケーキに刺し込むようにも見られる。

嗚呼、ぼくのかんがえたかつこいいマークが。理想のマークが。酔つ払い共に勝てる訳もなく。マークはこれで決まつたのである。

隼の単独飛行も出来るようになった頃に、震電の操縦に移る事になった。

隼のように操縦席の後ろ側に余裕がなかつたので、イサオさんを背もたれにするような感じで搭乗。とても窮屈。

だけど隼との違いで感じた事はいくつかある。馬力から体にかかる重力までまるつきり違うという事。とにかくキツイ。パワーの差なのか旋回するだけでも一苦勞。到達可能高度というものも格段に上がった。

隼からみた空の景色も美しく見とれてしまう光景だったが、震電によつて連れてこられたこの空は全てが青。この世界に自分一人しかないのではないかという不安さえ

覚えるぐらいに。

プロペラ付きですらこの感覚なのに、イサオさんが操縦するジェット化された震電は一体どのような動きをしていたのだろう。

夢とロマンを味わえたのはほんの僅か。ここから先はイサオさんによる訓練なのか嫌がらせなのか分からない戦闘機動を震電でも味わう事になる。でも吐きません。頑張りましたから。

そしてイサオさんから敵と遭遇した際の戦術を教えられる。

敵と出会った場合、撃ち落とすのは諦める事。時間が足らなくてそこまでは教えきれないし、覚悟の問題もあるから。

ではどうするか。震電の到達可能高度を利用して相手の機体のよりも上の高度に行く事。その際に追いかけてこが始まるけど上昇を止めない事。

到達出来れば空賊程度なら追ってはこれなくなるから、戦闘にはならない。

その間に無線で相手が何者であるかを知り、僕の手の者なら使者として護衛してもらう事。

反イケスカ連合の人間だったら……まあ余りにしつこい連中だったら降伏するのがいいよ。機体を手放す事にはなってもハルト君が死ぬ可能性は低くなるだろうしね。

それに、ユーハンクから来た事を伝えれば悪い事にはならないさ。実際、ジイサンの

探し物をする為にイジツに向かうんだからね。

とにかく。僕がこんな事を言っていたなんてイジツの誰かに聞かれたらあり得ないと言われそうだけど。必ず戻ってくるんだよ。

こうしてお互いが自分のすべき事をし、ついにイジツに向かう時がやってきた。

最低限の荷物を震電に押し込み。機体の点検を行う。これは曾祖父に最低限の知識として教えられた。

私の恰好は曾祖父から渡されたパイロットスーツに、もこもこ帽子という姿。見た目なら昔のパイロット達のような姿である。

「よく似合っているじゃないか」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、ちよつと動きにくいよ」

「でもソレを着てないと、イジツでも高高度は冷えるからねえ」

「イサオさんはスーツ姿だったりラフな格好で飛んでましたよね」

「僕の場合は別に逃げる理由なんてないからね。襲ってきたら撃墜して襲われなくても撃墜すればいいだけだし！」

エースパイロットの理論は凄いものである。

そんな他愛のない話も終わりに近づいてきた。三つの輪はまさに一つになろうとし

ている。そろそろ行かなくちゃ。

「ハルト、絶対に帰ってくるんだぞ」

曾祖父の言葉と抱きしめられた温もり。頑張つて目的を果たして曾祖父を喜ばせた
い気持ちに胸が一杯になる。

「ハルト君、緊張してる？ ほらガムでも食べなよ」

そう言つてガムを差し出してくるイサオさん。時々だけど人の心身状態を把握して
優しく接してくれる。一体、本当のイサオさんはどちらなのだろう。

差し出されたガムをつまむ為に指を差し出した。その瞬間、ガムのケースから飛び出
す板に指を挟まれる。

「引つかかった！ 引つかかった！」

きつと緊張を解す為にくれた事なんだろう。痛いのを堪えてイサオさんの手を
掴む。そして気が済むまでひたすらガムトラップを食らわせ続けた。

「痛い！ 痛いよハルト君！」

「やっぱりイサオさんは極悪人だと思います」

「悪党からランクアップしてない!？」

「気のせいですよ、ちよつと腹が立っただけなので」

「じゃれあうのも其れぐらいにしておけ。もう時間だ」

曾祖父の言葉を合図に震電に搭乗する。エンジンが始動されプロペラが回り始める。

これから向かうイジツでは何が起きるのだろうか。胸の高鳴りを無理矢理抑え込みながら最終チェックを行い。完了する。

『ハルト、聞こえるか』

「聞こえてるよ」

『無線も大丈夫なようだな、実験も兼ねて穴が封鎖されるまでは無線を使用したままの状態にする』

「イジツでもこの無線が届いているといいね」

『ああ。そうであれば穴が開いた時にこちらから無線で呼びかけができ、ハルトをこの世界に安全に導いてやれる事が出来るな』

『あとはスマホだっけ？ アレの電波も受信出来ていれば間違いなく僕達がいる世界ってことだね！』

「そつちは穴の先で確認してみますね。あとイサオさんに伝えたい事がありました」

『何かあったのかい？ 僕の事が恋しくなったとか!？』

「しばらく会えないという点では似たようなものですけど。前にイサオさんがイジツに戻った後に何をしようかって話です」

『ハルト君がデレたよ！ 今夜はお祝いだよジイサン！』

『やかましい！ お前はイジツに戻ったら何か仕出かそうと企んでいるのか？』

『前にも話した通り、何も浮かばないんだよね。執事に頼んだ言付もとりあえず生存報告ってだけだし』

「その事で提案が一つあるのですが」

『なにに？ 今ならもれなく聞いちやうよ！』

「イジツに戻ったら水平探査か垂直探査でもしてみませんか？」

しばらく沈黙が続く。いきなり宇宙へ！ なんていうのは無謀ではあるけど、イジツの世界がこの世界と同じ丸い星であれば色々と可能性は広がりそうである。良い事悪い事を全て含めて。大航海時代の空版とでも言うのだろうか。

勿論、今まで様々な人達が成し遂げようとして様々な理由によつて駄目だったという話もイサオさんから聞いた。なのでどちらも無謀とも言える提案ではある。

『ハルト君も中々の欲深さだよね』

「そうですか？ イサオさんとロケット発射の映像を見た時からぼんやりと考えてた事なのですか」

突然、笑い始めるイサオさん。結構な音量を発しているおかげで無線を通じても耳が痛くなる。

その笑い声も次第に小さくなり、ゴホゴホと咽るような声に変わる。そこまで笑う事

もないでしょうに。ちよっぴり涙目になりそう。

『はーこんなに笑ったのは久しぶりだよ。やっぱりハルト君は面白いなあ!』

「さいですか。それはヨカツタデスネ」

『不貞腐れないでよー。それだけイジツの環境が凄い状態って事なんだから』

「今からそれを確認してきますよーだ」

『そうだね。それを目の当たりにして帰ってきてても同じ事が言えたなら……まっ!』と

りあえず行つてきな!』

「そうですね。先の事を話しても進まないですからね」

『話しの区切りはついたか? さあ時間だ。後はハルトに全てを託す。たとえ何も見つ

けられなくても帰るチャンスがあつたら戻つてくるんだ。私はここで此奴と待つてい

るよ!』

『良い土産話待つてるよー!』

「行つてきます。二人とも体調には気をつけて」

スロットルレバーを操作し、震電を加速させていく。短い期間ではあつたけど、イサオさんから教えてもらった操縦法を忠実に守り、空へと舞い上がる。

一度、大きく旋回してこの世界を見渡す。ちゃんと帰つてこなければいけないな。P
Cのデータも消さないといけないし。

意外と落ち着いている自分に少し驚きつつも、穴を確認する。完全に一つとなつていて周りの風景とは別のような状態になっている。

そこへ機首を向けて機体を水平に保ち飛び込む体勢になる。やはりこういう時は自分の名前と出撃！ といったセリフでも口に出すべきなのか。

とはいえ、あと数秒で穴の中へ。結局、口から出た言葉は行ってきました。だった。

「行つたか……」

「無事に穴に突入できたみたいだね。よかつたよかつた」

「聞きたかつたのだが、ハルトはパイロットとしてはどうなのだ？」

「うーん、覚えは良いし時間をかければ良いパイロットになると思うよ。ただ」

「ただ？」

「ハルト君、よく吐く割に気を失う事つてなかつたんだよね。結構本気の機動とかしてみただけだよ」

「お前さんの機動で気を失わないなら、将来性はありそうだな」

「それどころか何かのきつかけで化けるかもね。ハルト君」

「父親の影響もあるかもしれないなあ」

イサオとの会話を遮るかのように無線機から雑音が流れ始める。そして聞こえてき

たのはハルトの声であった。

『あーあーこちらハルト。穴から抜けました。けど凄い渓谷と草一つ生えてない光景で驚愕中ですよ』

「ようこそイジツへ！ その光景が日常だから嫌でも慣れるよ。無線が通じてなによりだよー！」

『心配の種が一つ減りましたね。後はスマホの方でも確認……うわっ!』

「どうした！ 何があった!!」

『後ろに戦闘機らしき機影が六機！ うち五機は……あれは隼!』

第6話

ハルトが穴に突入する前日。

イジツではオウニ商会所属のコトブキ飛行隊六名が全隊の復帰を祝う食事会を楽しんでいた。

「全員分の機体が直るのに時間かかったよねー」

「ナツオ班長が頑張ってくださいったおかげでこの早さ。というべきですわ」

「そうだな、改めて礼に行きましょう」

「お礼は大事」

「そうそう、ちゃんと言葉にして伝えなきゃね」

一か月前に起きたイケスカ動乱。そこにはコトブキ飛行隊も参加していた。

任務は達成できたがオウニ商会の所有していた飛行船、羽衣丸は穴を破壊する為に大量の爆薬を搭載し出航。目的通り穴の破壊に成功した。

当然であるが羽衣丸は全壊。コトブキのメンバー全員の機体も破損。修理を余儀なくされていた。

だがあの動乱の影響は大きく部品の流通が滞り、現在になってようやく全機復帰と

なった。

飛行船に関しては様々な問題もあり、運び屋稼業を再開するのは当面先になりそうだとマダムは言う。

「しつかしキリエの機体なんかそこら中、穴だらけだったよねー。よくアレで飛んでられたよね」

「うっさい！ パイロットの腕がいいんですー」

「飛べない間にパンケーキ食べ過ぎて重くなってるんじゃない？」

「うぐっ！」

「また始まった」

「性懲りもなく好きですわね」

キリエとチカのじゃれあいが始まる。

皆とは会わない日々が続いた、というわけではないが機体の修理が完了した順に仕事をこなしていたので、すれ違うだけの時もあった。

最後にまわされていたキリエの機体修理が完了したと班長から連絡を貰った時に、前々から考えてた復帰祝いを兼ねた食事会が実現できてよかつたと、この光景を見ていて思う。

「あら、レオナ。嬉しそうね」

「これでようやくコトブキ飛行隊全員復帰だと思えば嬉しくもなるさ」
「そうね、またみんなで飛べるのは幸せな事よね」

私もそう思う。イケスカ動乱が起きて気づかされた事がたくさんあった。

仲間達に頼る事、失いたくないものが増えている事、こうしていられる日常がとても幸せであるという事も。

ザラと二人で始めた飛行隊も今では六人。メンバーはみな個性豊かで隊長として苦労する面もあるが腕は確かである。

昔、思い描いていた飛行隊が目の前に実現出来ている。そう思うと少し涙腺も緩くなりそうだ。

きつとアルコールを摂取しているからに違いない。

「だからキリエはモタモタした動きなんだよね！ 空戦以外でも！」

「空戦以外でも！ ってどういうことさ！ 空戦でもそれ以外でも私は機敏ですー！」

「それも一か月前の話でしょ！ 今日までは長い休暇みたいなものだったし、色々弛んでたりして」

「うっさいよ！ 弛んでなんかないし！ すぐ元に戻るし！」

「ほう、それは良い事を聞いた」

「うげっ、れ、レオナ……」

「そこまで言い切れるんだから再訓練の時は期待してるぞ。キリエ」
怒られてやんのー。怒られてないし、いい加減うっさいバカチ!

また二人して言い合いが始まる。エンマとケイトはいつもの事といわんばかりに二人を鑑賞しながら食事を楽しんでいる。

ザラは……ジョッキが積み上げられた隣でテーブルに突っ伏している。幸せそうな表情だ。

これで羽衣丸が活動を再開し、ジョニーのサルーンが復活すれば……なんて事を想像をしていた。

一本の電話が掛かってくるまでは。

「タイチヨーサン、オ電話デスヨー」

「いま行く」

少し外すと伝え、電話機に向かう。

『お楽しみ中にごめんねー。緊急事態が発生しちゃってさ』

「アレンか、緊急事態? なにか起きたのか」

『起きた、というよりも起こりそうなんだ』

「どういうことだ?」

『単刀直入に言うよ。ラハマより西に約70キロクーリル先で穴が出現した』

なつ、言葉にならない声が出てしまう

『とはいえ規模でいえば小さめ、おまけに地表から約十数クーリル。そして僕の計算外での出現。そういう事もあつてマダムに相談しに行つたんだ』

「マダムはなんと?」

『隣に居るから直接聞いてみて』

はい、と受話器を渡す声に続きマダムから連絡が入る

『聞いてた通りよ、レオナ』

「我々はどうすればよろしいのでしょうか?」

『現在、その場所にラハマの自警団が向かっているわ。幸いにして空賊共には見つからないようにだけど、早めに手を打つておいた方が良い事は確かね。本来なら契約を結んで料金を頂きたいところではあるけれど、事が事だけに私達だけ何もしないわけにはいかないわ。レオナ、早朝にコトブキ飛行隊を出撃できるようにしてくれるかしら』

「了解しました。では出撃準備をして待機に入ります」

『悪いわね、久しぶりの食事を邪魔してしまつて』

「問題ありません。仕事ですから」

『あとアレンも連れて行つてくれないかしら。肉眼で確認したいそうよ。いざという時の事も考えて、ね』

「了解しました」

受話器を下ろし、一度深呼吸をする。

この短い間で穴に関わる事が多くなった。

ほんの少し前まで存在そのものが怪しまれていたのに、おとぎ話の類ではないのかと
考えていたのだが。

横に軽く首を振って考えるのを止める。すべき事をこなしてからにしよう。

まずは皆に伝えないと。

「ええー！ またあの穴出てきたの!？」

「ああ。現在、ラハマ自警団が偵察に向かっているのだが、事が事だけにコトブキも早朝
に出撃できるようにとマダムから連絡があった」

「場所はどちらですの?」

「ラハマより西に約70キロクーリル。アレンの計算外での出現だそうだ」

「アレンは何か述べていた?」

「出現する以外は何も。マダムからの指示で調査の為にアレンを連れて向かう事にな
る。ケイトは赤とんぼでアレンを搭乗させての出撃だ」

「了解した」

「他に質問は？」

「行かなくて済む方法はないのー？」

「無い！ 別口の依頼ならともかく雇い主であるマダムからの命令は絶対だ」

「うへえー、せっかくの食事会だったのにい」

「それは私も残念に思っている。だから今回の件が落ち着いたらまたゆつくりと皆で食事しよう」

「ホント！ 約束だからね！」

「ああ、約束だ。ところでキリエ。何故俯いたままなのだ？」

レオナが明日の出撃について伝えている間、キリエはずっと俯いたままであった。ザラは言うまでもなく机に伏しているが……大丈夫だろう。

「……明日」

「明日？」

「新作のパンケーキを食べに行こうと思つていたのに！ 許すまじ！ 今すぐにも閉じてしまえばいいのに！」

何を懸念しているのかと思えば、いつものキリエらしい理由であった。

第7話

翌日、ラハマ自警団より引継ぎを行った後、コトブキ飛行隊は一路、穴が出現している場所へと向かう。

ケイトが搭乗する赤とんぼにはアレンも搭乗している。

徒歩で移動するのであれば長い距離だが戦闘機であれば直に見えてくるだろう。

『行つてくぞコトブキ飛行隊 希つ望の朝がつ来るう』

突然聞こえるキリエの少し音程が外れた歌声。周りを見ればまたか、といった表情。

新作のパンケーキを食べる予定を潰され激怒していたので少々不安になっていたが、本人は相変わらずといった感じである。

キリエの正確無比な操縦技術はコトブキでも指折りだ。その点には不安はない。ただ隊長としては再訓練で確認が出来てから仕事を任せられたが。

我慢が出来なくなつたのかエンマがお黙りと一言。やーだよーと言い返すキリエ。この二人は幼馴染だ。これぐらいでは喧嘩にもならないだろう。

『迅雷ちゃんは相変わらず楽しそうだね』

『その呼び方はやめて』

『ははは、ゴメンゴメン。歌うのが駄目ならこれならどう』

アレンに何か言われたのか、ケイトが隊列から外れて大空に向かっていく。

あたしもーとチカやキリエ達まで自由に飛び始めた。

任務中だというのに何を始めてるんだ。注意しようとした所、ザラに止められる。

『みんな揃って飛べるのは久しぶりじゃない。今の所は空賊の様子を見られないし、ね』

「前回と違って目標はもうすぐだというのに」

頭を軽く押さえてしまうが止めても無駄だろう。

「命令があつたら即戻る事、いいな？」

はい。と元気のいい声が返ってくる。日頃からこれだけ素直に聞いてくれると助

かるのに。

『うわっ！ 本当に穴がある。しかも開いてないこれ？』

『大きさはそれほどでもないけど、安定して開いてるね。さて一体なにが出てくるやら』

『キリエとチカは遊撃担当。エンマはケイトの護衛を。ケイトはアレンの指示に従って

飛行をし、穴の調査を手伝ってあげてくれ。ザラは私と周囲の警戒を』

了解！ 威勢の良い返事が来る。

穴はラハマ上空で見たものよりも一回り小さいのではないだろうか。

だがまだ穴に関しては謎な部分が多い。アレンが研究をしているのが現在の所、分かるのは出現位置の予測ぐらいだ。

そしてこの穴はアレンでも予測出来なかった物。今までとは何か違う事が起きてもおかしくない。

『んーこんなに間近で見るのは初めてだけど、分からない事が余計に分からなくなりそうだよ』

『はあ、それじゃダメじゃん。何か目新しそうなものはないの?』

『肉眼で確認できる範囲では特になし。開いた状態での変化も以前見かけたものと変わらず。結論、分からない』

『ケイトでも分からないんじゃない?誰にも分からないんじゃない?』

『このままですと、自然消滅を見届けるのがお仕事になりそうですわね』

『本当に行き詰まったら飛び込むのも手かもね。どこに通じるかはお楽しみみて所だけ』

『そんな無茶は許可できない。予定通り調査が終了次第、帰還だ』

それは残念とアレンが呟く。しばしの雑談後、穴に変化が訪れる。どうやら消滅するようだ。

「全機、穴から距離を置け。消滅の際に何が起こるか不明だからな」

『りようかーい……つてあら』

「どうした？ ザラ」

『レオナ、私達以外の機体の音がしない？』

そう言われ耳を研ぎ澄ます。ここにいるのは単一型が五機に赤とんぼ一機。だがそれ以外に別の、聞いた事もないエンジン音が聞こえた。

周囲を探索するが、機影らしき姿はない。地上は何一つ生えていない不毛な大地があるだけだ。

「キリエ！ チカ！」

『ないないない！ こっちは何も見当たらないよ！』

「エンマー！」

『空賊の類は見当たりませんわ！』

『穴の中』

『そうだね。穴の中から聞こえてるよ』

「ツ！ 全機散開！ 穴から何か来るぞ！」

『うつそマジで?!』

それには私も同意見だ！

耳を澄ませているなければ聞こえなかったであろう、エンジン音が次第に大きくなって

いく。

そして音の元凶であろう一機の戦闘機が穴から飛び出してきた。

「あれは?」

機体全体が赤く染められ、独特の形状をしている戦闘機。震電であった。

『あの機体ってもしかしてイサオの?』

皆が思っていた考えをザラが言葉にして発するよりも先にキリエが動く。その後ろを脊髄反射的反応でチカが援護に入る。

あの戦闘機が本当にイサオの機体だとしたら非常に危険だ。

ここにいる全員で相手をして撃墜できるか……最悪のシナリオが頭をよぎる。

いや、とにかく今は行動を起こさなければこの場にいる全員が危険な事になる。

「ケイトはラハマまで一時撤退。アレンを降機させ、機体を単に乗り換えて再出撃。エンマはケイトの護衛として共にラハマまで同行。ケイトの乗り換えが済み次第、共に合流してくれ!」

了解。と返事。だがケイトの後ろに乗っているアレンがストップをかける。

『ちよつと待って、あれ本当にイサオのかなあ』

「どういう事だ?」

『機体と塗装は確かにイサオが搭乗していた時のに酷使しているけど、富嶽生産工場襲

撃とイケスカ上空、二つの空で見かけた時とはまたエンジンが違うみたいだよ。それに操縦がふらついている。こちらを撃墜しようとするというより……逃げ纏つてみたい』

そう言われ、視界に入る震電に再度集中する。

イケスカ上空でキリエが被弾させた時の震電ではなく、富嶽生産工場の時にケイトが撃墜したプロペラ付きの震電だ。

高度を上げて逃げようとしているようにも見える。だが単一型の上昇力は他の機体と比べても軽量な為、引けを取らない。

震電が高度到達地点まで逃げ切れるか、あるいはその前にキリエが撃墜するのか。

キリエも撃墜させようと機銃掃射をするが避けられる。だが震電はイサオの操縦とは思えないほどおぼつかない。あれではまるで……。

『ねえレオナ。あの機体に乗っている人って』

「ああ、イサオとは思えない」

だとしたらまずキリエを止めなければ話し合いも出来ないだろう。

そう思いキリエに指示を出そうとした時、チカが何かに気づいたように叫ぶ。

『あーっ、キリエ待つて！ そいつのマーク、イサオのじゃなくてパンケーキだよ！』

パンケーキ？ と一瞬間に疑問が残ったが、震電の機体に描かれていたマークは自由

博愛連合のものでは無く、その代わりに描かれていたのはキリエの好物であるパンケーキであった。何故か片翼だけ線で消すように隠されているが。

「キリエ！ 攻撃は中止だ、一旦距離を取れ！」

そう指示を出すと応じるように距離を取り始める。チカがパンケーキと叫んだおかげで頭に上った血が落ち着いたのだらう。

上昇し続けた震電も追撃の様子がない事を確認できたのか、水平に飛行し始める。

よし、このタイミングでなら話し合いが始められる。ザラに私の援護をするように指示する。

ゆっくりと震電に近づき交渉を始めようとした瞬間。どこからか無線に雑音混じりの声が聞こえる。

『……丈夫かい？ な………かった！ ハルト君に死な………ら隣のジイサンに僕も同じ所に送…………だったよ！』

「イサオ!!」

その声の主は間違いなくイサオから発せられたものであった。

第8話

穴というモノはまったくをもつて分からない。

突入する前に見た穴は、行先も見えず膜のようなものを張っている状態であった。

そこへ戦闘機で突入するとなれば恐怖も感じるし、何よりイジツへと本当に繋がっているのか疑わしく感じてしまう。

結果的には無事に穴から脱出してイジツの世界にこんにちわ。一瞬で着くかと思われたが突入から脱出までに数秒の間があった。

濃い霧の中を飛行していたのかと思うと肝を冷やす。雲の中を飛ぶのはこれと似た感覚なのだろうか。厳守されていたので雲に入った事は一度もないので分からないが。

一呼吸して曾祖父と無線で会話が出来る事を確認する。だが急に違和感を感じた。

それは自分が操縦している震電以外のエンジンの音。近距離で。それも複数。

確認する為に首を振ると戦闘機五機と主翼が二つある機体が一機。確か複葉機という区分に入る機体だ。いや、それは今考える事ではない。このままだと初見殺しのパターンに突入してしまう事に気づき、つい叫んでしまう。

その内の二機が素早くこちらに近づいてくる。ヤバイと脳みそで実感しても手が上

手く動かない。

そうしている間にも接近してくる戦闘機。そしてこちらに向けて機銃を撃ってくる。生まれて初めての経験に恐怖を覚える。カんで踏んでしまったラダーのおかげで避ける事が出来たが、機体は不安定なまま右往左往とふらつく。

こういう時って！ こういう時って！ どうすればいいのかを必死に思い出す。あれだけ訓練したはずなのに咄嗟に動けない自分に情けなさを感じる。ああそうだ、高度を上げれば相手は追いつけないはず。というより隼やんか！ おハヤブサー！

「飛行機を六機確認！ 一機は主翼が二つある機体で残りは……隼だ！」
『ハルト君、落ち着かなくてもいいから高度を上げて振り切るんだ』

はあい師匠！ じゃないイサオさん。青空に向かってフルスロットルで上昇を始める。

しかし隼も負けじと追いかけてくる。訓練時に隼に搭乗していたイサオさんから散々お尻を掘られた悪夢が蘇る。腕の差なのか、機体の差なのか、多分両方だ。一定高度まではピッタリと張り付いて振り切れないのだから。

今も後方にいる隼から射撃を受ける。相手の射線軸に入らないように僅かに機体を動かし上昇し続ける。イジツに来て早々、このような場面に遭遇するとは誰が想像できたであろうか。イサオさんか！ 分かかって訓練してたんだな！

悪態をつきながらも上昇を続ける。実時間だけならきつと短いのだろうが、今はとても長く感じる。隼が上昇できない高度に到達しない事には始まる事すらできやしない。

どの程度、時間が経過したのだろうか。気が付けば空が濃い青色になり、後ろにいた隼も離れて行く。安堵と共にイジツの空も青いんだな。とか考える。

機体をゆつくりと水平に戻し深呼吸。第一イジツ人に出会って即撃墜される所だった。

はあーとため息をついていると先程とは違う隼が二機近づいてくる。今度はこちらを伺うようにゆつくりと。

これはもしかして対話が出来そうな空気？ 言葉通じるのかなと考えているとイサオさんから無線が入る。

『大丈夫かい？ ならよかった！ ハルト君に死なれたら隣のジイサンに僕も同じ所に送られそうだったよ！』

曾祖父ならやりかねない。きつとその後に分も追いかけてきそうだ。そうならなくてよかった。というかイサオさんと会話できるんだから大丈夫だよ。だよ？

ハイになっているのか、思考の方向性が少しおかしい。ともかく返事をしようとしたら、耳に響くほどの怒声が聞こえる。女性の声で『イサオ』と。イサオさんご指名入ります。

『生きてたのか!?!』

『ありや、バレちゃった。えーと確かその声は……』

『コトブキ飛行隊隊長のレオナだ!』

『あー! そうそう隊長さんだ! 元気してた? 僕はこつちで五体満足に元気で生きてるよー』

『ふざけるな!』

『イサオさん、その返しは怒りますよ。空気読んで黙つてももらつてもよかつたんですよ。』

あ、空気を読んだのは穴の方みたいだ。少しづつ形が崩れていく。

『穴が閉じようとしているね。もう時間も無いけど丁度いいや。隊長さん、そこにいる震電の子がしようとしてる事を手伝つてあげてくれない?』

『なぜ私が貴方の悪事に手を貸さなければならぬんだ!』

『信用無いなあー。じゃあ前に言つてた借りを返すつて事で、ね。おねがーい!』

『それはイケスカ動乱を起こした貴方に返すものではない! リノウチ大空戦の時に私を救つてくれた人に返すものだ!』

『同一人物なのに酷いなあー。まっ話ぐらいは聞いてあげてねー。じゃー!』

『さて! イサオ!』

そのやりとりを打ち切るかの如く穴が消失する。これでしばらく私は日本に戻る事が出来なくなつた。イジツにいる唯一のユーハングの人間、なのだろうか。

しかし最後は現地の方との一方的な対話で終わりですか。私に對しては何も無いの？ グッドラック的な？ 針の筵な状態になつてる気がしますよ、イサオさん。さつきまであつた気がするほんの僅かな対話のムードが一蹴されている。

頭をかかえたくなる状態になつたこの場で先ほどイサオさんと会話をしていた女性がこちらに呼び掛けてくる。結構なドスの効いた声で。

『……こちらオウニ商会所属、コトブキ飛行隊隊長のレオナだ。そちらの目的を伺いたい』

黙つていても墜とす。馬鹿な事を言つても墜とす。そんな空気が張り詰める。

「あーあー、こんにちは。私はハルトと申します。貴方がたでいう所のユーハングから来ました」

ユーハングその言葉で他の機体にいるパイロット達からは様々な反応が返ってくる。ただレオナさんという方は感情を押し殺すように応答する。

『先程の件も含めて貴方に聞きたい事がある。こちらの指示に従つてもらえるか』

「了解しました。こちらに交戦意思は御座いません。指示に従います」

『イサオがイジツで何をしたかは知っているんだな？』

「極々簡単に。ただしイサオさん側から見た内容ですが」

『そうか。その事についても詳しく聞かせて貰う事になる。まずは我々の機体の高度まで下降を』

「了解しました」

一言断つてから安全域だった高度からゆっくりと降下していく。

レオナさんの前方まで降下して足をだし、翼を振る。思い出した。たしか戦意無しを伝える方法だった気がする。今更な知識だけあの状況ではする暇も無かった。

そして今も状況だけなら似たようなもの。レオナさんの指先一つで私は撃墜されるだろう。大丈夫、大丈夫と根拠のないモノにしがみつく。

ほんの少しの時間をおいてレオナさんから応答がくる。

『……………こちらの指示から外れないように飛行をしてくれ。くれぐれも馬鹿な行動は起こさないように』

大丈夫です。射撃訓練は一切教わっておりません！ それを伝えても状況は良くならないだろうから黙ってるけど。

レオナさんが全機に命令を出す。帰還する町はラハマという場所だ。

確かイサオさん情報だと反イケス力連合の一つとして機能していた町だったか。

イサオさんの野望を打ち砕いだ人達がいる町。難癖レベルの要請を承認しても拒否

しても町ごとを焼き払うとかやっていたら反感を買うよね。

オウニ商会。コトブキ飛行隊。ん？ コトブキ？ コトブキ飛行隊って確かイサオさんを野望を打ち砕いた敵のエース部隊で、様々な異名で呼ばれていた気が……。

「ゴロツキ飛行隊？」

『あ、あ』

「ひいひい」

やばい地雷踏んだ！ 背中に物凄い殺気が刺さる。

動揺しすぎてまた機体がふらつく。咄嗟に謝罪の言葉を伝える。すみませんごめんなさい何でもは出来ません。

余りにも感情が表に出たせいで同情されたのか、助け船を出してくれる人がいた。

『レオナ。イサオの件で気持ちは分かるけれど、彼に八つ当たりしても仕方ないわよ』

『……はあ。大きな声を出してすまない』

「い、いえ。こちらこそ大変失礼な事を言いました申し訳」

『はい、そこまで。せつかく出会えたのだから自己紹介でもしましよ。私はザラ。よろしくね』

間に入ってくれた人はザラさんというらしい。

主翼が二つある機体、赤とんぼを操縦しているのがケイトさん。後ろにはお兄さんの

アレンさん。

そしてチカさんにエンマさん。最後は私を撃墜しようとしていた……。

『あれ、キリエ。どうして黙ってるの？ 名前ぐらい伝えなよ』

『むうー』

『何いじけてるの？ あ、もしかしてマークがパンケーキである事に気づかなかつたらとか？ 日頃あれだけ愛してるーって言いながら食べてるのにな？』

ウケるーと煽るように笑いだすチカさん。

反論するように大声で答えるキリエと呼ばれた人。

『大体アイツの機体と色でマークだけパンケーキとか卑怯じゃん！ こっちだって色々事情があるのに！』

『でもわたしは気づいたけどなー』

『それは私が追撃してたから気づけただけでしょ、私だって援護だったら気づいてたし！』

『あー！ あー！ そういう事いうんだ！ もうキリエの援護なんてしてやんないー！』

そこからはチカさんとキリエさんの口喧嘩が始まり、器用に機体の翼を振って自分の正当性をアピールする。

そんな二人には慣れていいのか呆れているのか、コトブキ飛行隊の方々は軽い溜息を吐く。

『しかし、キリエじやありませんが何故パンケーキをマークにしてみましたの?』

「修理をする以前の機体には自由博愛連合の物が描かれていまして、そのままイジツに向かったら相手次第では撃墜されるだろうな。という結論になりました」

九割ぐらい嘘を付く。まさか酔っ払い共に勝手に決められたなんて恥ずかしくて言えない。

『確かに。あの忌々しいダニ共のマークのままでしたら私が墜としていたところですよ』

訂正。勢いでパンケーキに塗り替えてくれて本当にありがとう! そうでなければもう私は撃墜されていた事でしょう!

しかしエンマさんは中々毒舌な方なのでですね。お声は凜としていらっしやるのに。

「違うマークにしようと思った時に提案したのですが却下されてしまい、結果がこの通りです」

『まあ、それでパンケーキでしたの』

『パンケーキ! やっぱりユーハンクにもあるの!? どんな味どんな形ふわふわサクサク大きい小さいともかくにも美味しいの!?!』

横から突然割り込んでくるキリエ？　さん。もしかしてパンケーキ好きなのだろうか。物凄い勢いで質問が飛んでくる。

「バターだったりアイスだったり丸かったり薄かったり何かが挟まれてたり包まれてたり色々ありますけど、美味しい事は確かですよ」

私を置いてパンケーキを食べに行つてたイサオさんが言うんだから間違いない。絶許。

『はあ……ユーハングのパンケーキ。食べてみたいなあ……』

「材料が揃いそうなら作りましょうか？　覚えている限りのレシピになりますよ」

『ホント!?　パンケーキの為なら何でも手伝うよ!』

周りの溜息から何うによつほど好きなんだなという事は分かった。

『あ、私はキリエ。よろしくね!』

「こちらこそよろしくお願ひします」

『ところでさ!　何で片側のパンケーキだけ線が入ってるの?』

「フオークです。フオーク。そういう事にしておいてください」

『パンケーキマークに食器も完備。やるねえ。もしかして君もパンケーキ好きかな!』

「自作する程度になら好きですよ」

『キタツ!　同志よ!　ユーハングからようこそ!　大歓迎するよ!』

機体の認識マークがどれほど大切なのかを知った、イジツでの始まり。

ホットケーキミックスを使って鉄板焼きする程度の好き。がバレたどうなるのだろうか。

第9話

同志認定をされたあの後、ユーハングに関する質問で一杯になった。

食べ物、お酒、植物、文化に技術の話と多種様々。

『はいストップ。いきなり質問攻めにしてもハルト君が困ってしまうわ。せっかくだから昨日の続きも含めてハルト君の歓迎会も開きましょ』

とザラさんが言う。こんなユーハングから来た事以外に身元不明の人間に対してなんて寛大な人でしょうか。

しばらくするとラハマと呼ばれる町が見えてきた。町の端には滑走路が見える。航空技術が発達した世界とは聞いてはいたが実際に町に滑走路と格納庫があるのを見ってしまうと驚きを興奮を隠せない。

その状態で飛行を続けていたらレオナさんからの無線が入り、先に降りるよう指示を受ける。

何度も練習した着陸。一呼吸を置いてから慎重に機体を安定させて着陸をする。尻のデカイ子なので隼とはまた違った緊張感のある着陸である。

毎回の事だが地面に車輪が接地した後の振動に妙な心地よさを感じる。

ここからは誘導員の指示に従い、エンジンを切り格納庫の隅へと押し入れられる。そのまま待機するようにと指示を受ける。

銃を携帯している人達が機体の周りを囲っている。当たり前ではあるが疑われているよね。大人しくしているに一票。そこまで緊急にやばい事は起きてない。具体的に言えば大とか小の話。

ああでもこの状況下がある種の独房状態なのだろうか。あの幻聴は未来の自分が語り掛けてきたのか。やはりパンケーキの呪いは恐ろしい。

暇な時間をくだらない妄想とこれからどうするか。そんな事に費やしていたら機体の叩く音が聞こえた。ふと音のする方向に首を動かすとレオナさんがこちらを見上げていた。周囲にいた銃を携帯していた人達はいつの間にか消えていた。

「すまないがこれからお会いしていただく方がいる」

「分かりました」

防風を開けて機体から降りる。地面を踏みしめて脳みそを切り替える。しかしどうなるんだろう。私も、震電も。

「機体が気になるか？」

「知らない場所で置いていくのは初めてなものでして」

「すまないが、外観だけは布で隠させて貰う。この機体がこれ以上、他の人達の目に触れられる状況にしておくのは余りに危険なのでな」

「それはイサオさん絡みのつて事でしようか」

「そんな所だ。さ、ついてきてくれ」

格納庫から街並みに向かい歩き始める。

道中、辺りを見渡すが事前に聞いていたイジツはもつと危機迫るようなイメージではあつた、だが少なくともここは治安も良さそう。道端にゴミもない清潔な街だ。

「どうだ、ラハマは？」

レオナさんが話しかけてくる。キョロキョロと挙動不審な動きをしていたからだろ
う。少し恥ずかしくなる。

「町の上空から見た時も思いましたが綺麗な街ですね。つい視線が移動してしまう」
「そうか、そう言ってもらえるのは嬉しいな」

嬉し気に笑みをこちらにくれるレオナさん。あんな事があつたのに微笑みまでくれる優しい人。赤髪のポニーテールに胸元に青いリボン。緑色の袖なしのワンピースジャケットの姿。背も高くとても凛々しいお姿。一言でいえば美女。頭にとびつきりのが付くぐらいに。はぁと溜息も出てしまう。

「大丈夫か？」

「あー……：はい。ありがとうございます。これから慣れない事をすると思うと緊張してしまいました」

「なに、マダムと面会する時は私も同席している。いつも通りにしていれば大丈夫だ」

そう言つて微笑むレオナさん。見知らぬ人間にここまで親身になつてくれるなんて。勿論、ユーハングから来たという理由もあるのだろうけれど。その後もレオナさんは私の緊張を解すかのように話かけてくれた。

そして案内された前には大きな建物。

「ここにオウニ商会の社長。マダムルウルウがいらつしやる。ハルトの事に関しては報告済みだ。色々と聞かれるだろう。答えにくい事もあるだろう。」

それでも嘘だけは止めておけ」

レオナさんの言葉に頷く。後ろについて行き、一つの扉の前で止まる。モコモコ帽子を今の内に脱いでおく。

「コトブキ飛行隊隊長のレオナです。ハルトを連れて参りました」

入つて頂戴。その声に従い部屋の中へ。

そこには赤で統一された服装を身に纏う女性がいた。美しい。という言葉よりも妖艶の方が似合いそうな雰囲気を漂わせている。

「いらつしやい、ハルト君。会いたかったわ」

「お会い出来て光栄です。マダム」

会釈をして顔を上げる。

「こちらから呼び寄せたもの、もう少し砕いて接してもらえると助かるわ」

「……善処はしてみます」

「そうして頂戴」

マダムが微笑みながらそう言い、ソファアに座るように勧めてくるのでお言葉に甘える。

対面にマダムとレオナさん。目の前に紅茶。銘柄などは詳しくないが良い香りが出ている。

どうぞ。と勧められたので頂く。ほんの一時程度しか経過していないはずだが、こちらに来てから怒涛の展開で喉も乾いていた。

紅茶の香りを楽しんだ後、一口。美味しい。思わず言葉として出てしまった。

「口に合うようでよかったです」

「はい、とても美味しいです」

紅茶の良い香りと暖かい飲み物。もう一口頂いて上がりきった肩を少し下す。自分が想像していたよりも緊張でガチガチの状態だったみたいである。

「話し合いを始めても大丈夫そうね」

「はい、お待たせしました」

「お互いに聞きたい事があると考えると良いかしら」

「その認識で間違いはございません」

「そうね……呼び出しに応じてくれた手前、先に聞きたい事があればどうぞ」

マダムはそう勧めてくれる。聞きたい事……第一としては曾祖父の弟さんの事だけ
ど、イサオさんですら不明な事を聞いてもあまり意味はなさそうな気がする。

せっかくお先にどうぞをされたのに思いつかない。あれ、むしろお先にどうぞをした
方が探り合いで有利なのかな。そうなのかな。そうかも。もう駄目だ。

嘘をつくなどレオナさんに言われていたが、嘘すら浮かばない。浮かんだとしても、
隠し事が顔に出るとイサオさんに揶揄されるぐらいなので無理です。でもイサオさん
にだけは言われたくなかった。結局、気になる事といえば……。

「では確認を。この世界はイジツと呼ばれる世界で合っていますか？」

「ええ、ここはイジツと呼ばれる世界でラハマと呼ばれている町よ。そして貴方がいる
世界はこちらではユーハングと呼ばれている事も」

おまけ付きで返事をもらう。よかった。兎にも角にも目的地の世界には辿り着いた
ようだ。

「ユーハングから来た貴方はイジツに何か御用かしら」

いきなり本題をぶち込まれる。そりやそうだよね。イサオさんの機体に乗ってイジツの事を知っているユーハングの人間が来たのなら目的があるに決まってる。イサオさんの事を最初に聞かれないのはマダム の優しさなのだろうか。

どうしようと考えるが、こんな与太話を信じてもらえるのだろうか。曾祖父の弟さんを探しに来ましたなんて。

頭の中で小人が白旗を全力で振る。せめて誤解を招かないように伝えるしかない。視線の斜め上にいるレオナさんに視線を移すと嘘は駄目だぞ。といった視線を返される。

「こちらの世界に探し人がいる可能性があります、唯一辿れる細い糸を頼りにここまで来ました」

「探し人……七十年前にこちらにいたユーハングの人達に関する事かしら」

「はい。その通りかと思えます」

「でもユーハングの人達は穴が閉じると同時に消え去ったと聞いているわ」

「二人だけ、残った方もいらっしやったという事も知っております。でも探し人はその方ではありません」

「断言できる理由は？」

「性別は一致していますが、名前と風貌。それに年齢でしょうか。もし今も生きてましたら百歳は超えていますので」

それを聞いたマダムは少し表情を崩す。レオナさんはやや落ち込んだ顔。

「そうだね、百歳越えてますなんて言ったら人間五十年な世界のイジツでは生存している可能性なんてほぼ皆無だ。」

「貴方は探し人の遺品となる物を求めてやってきた」

「はい。痕跡だけでもいいので生きていた証を見つけないのです」

マダムが紅茶に口をつける。一息ついて一言。

「穴からは色々な物が降ってきたわ。良い事も悪い事も。だけどこちらの世界に探し物を。ましては人を探しに人間がやってくるなんて初めてだわ」

第10話

こちらの事情を話してからは誤解を招かないように自分でも確認をするかのよう
にマダムに伝える。

探し人は私の曾祖父叔父である事。私が来た理由に曾祖父の存在がある事。まだ健在
である事。イジツの人には百歳超えてなお元氣は衝撃的らしい。

それでも当人が来ない理由は体力的な事よりイサオさん絡みという事も。美女二人
の表情が苦い顔になる。やっぱり悪党だったんだね、イサオさん。

「あの男、ユーハングでも好き放題しているのね」

「よく曾祖父に怒られてますよ。でもイサオさんが現れたおかげでイジツに来れた事も
事実です」

実際にあの提案を受け入れて震電をもらい受けていなければ穴から脱出した瞬間に
撃墜されていたと思う。

震電で赤のカラーリングじゃなければもつと友好的に始められた。という話もある。
むしろその方がよかった気も。

はい！ 結果論で物事考えても仕方ないので終わり！

「それで探し人の足取りを追うのに何かアテはあるのかしら」

「しらみつぶしにユー・ハングの施設や居たであろう場所に足を運ぶ以外には特に……書いて言うなら」

レオナさんに視線を送る。少し困ったような顔をする。罪悪感で心が少し痛む。

「レオナさんに貸した借りを私の手伝いをする事でチャラにするとイサオさんが言っております」

「……貴女、まだあの男に借りを返す事を考えていたの？」

「マ、マダム！ 私はただ彼に救って貰った恩を返したいだけで今のイサオには」

「今も昔も同一人物よ」

落ち込むレオナさん。

「それにハルト君の手伝いをすればチャラだと本人が言ったのよ。それで終わりにしな
きゃ」

「で、でも！」

「命を救われたのは分かるわ。では救われた命の分と同等の借りを返す方法は？」

拳を作つて頂垂れるレオナさん。なんだかすみません。こんな方法で貸し借りを使わせてもらつてしまい。

そんなわけだからとマダムが口を開く

「しばらくの間はレオナの世話になりなさい。私の方からも手伝えそうな事があれば手伝えわ」

「いいのでしょうか。返せる物なんか逆立ちしてもありませんけど」

「あら、十分あるわよ。貴方の頭の中にね。知り合いにユーハングの研究者がいるわ。彼の話し相手になってあげて頂戴」

「どうやらアレンさんの事らしい。彼は穴に関する研究をしていたみたいで、

穴の予測地点を計算していた事で様々な事件に遭遇した模様。私が飛び出した穴の場所にいたのも納得。」

「そしてお手当もくれるという。え、いいんですか！ 紙幣の価値が全然分かりませんけど！」

「私はホクホク。レオナさんはしよんぼり。なんだかいたたまれない気持ちになる。」

「日も暮れてきたから詳細はまた後日。宿の手配もしておくからしばらくはそこに住みなさい」

「色々ありがとうございます。お世話になります」

「誰かと違って素直で話が早いわ。そんな事を言われてしまう。誰だろう、誰かさんって。」

「お礼を言って意気消沈のレオナさんと一緒に表に出る。あの青空は夕焼けで真っ赤

に染まっていた。

「すみません、レオナさん。私事に巻き込んでしまった形になってしまい」

「いや、いいんだ。いつかは決めなければならぬ事を先送りにしてきた私も悪い」

弱弱しくも微笑みかけて伝えてくる。責任感が強くて逆に心配になってくる。

迷惑をかけないように……もう既に遅い。邪魔にならないように……やっぱ遅い。

存在してるだけで十分悩みの種になってる。

隣でうーうー唸っていたら頭に手を置かれる。

「子供が心配をするな。大人の好意には素直に甘えていいんだぞ」

あれ、私が成人している事って伝えてなかったっけ？ 伝えてないわ。

そんなに童顔だったけ？ 髪も染めず生まれも育ちも日本人だから童顔だった。

身長低いっけ？ レオナさんよりは低いや。

年齢は……どの世界でも女性には聞かない方が身の為だよな。

わしゃわしゃしてくるレオナさんの顔を見上げる。どうした？ と母性に満ち溢れ

たお顔で返される。

これから先、大変だとは思うけれど。こういうご褒美も頂けるなら頑張れそうである。

あの後、手配していただいた宿に案内をされる。近くにはラハマ自警団詰所と書かれ

た看板が置かれてある建物が見える。

防犯対策をしてある宿にしてみらったという事だろうか。案内された部屋に金庫が置かれてあったので間違いないと思う。マダムに感謝感謝。

震電の中で野宿プランも考えていた事もあり、屋根付きベッド有りのこの部屋が天国に見える。

一人で浮かれているとレオナさんから視線を感じる。

「ハルト。なにか他に荷物は持ってきてきていないのか？」

視線を下に向ける。そういえばずっとパイロットスーツのままだった。帽子はマダムとの面会前に脱いでいたけど。

多少ではあるが震電の中に詰め込んだ荷物が仕舞いつ放し。とはいえ緊急で必要な物は無い。漏らさなかつたからね！

そうレオナさんに伝えると、次に震電に近づけるのは何時になるか分からないから、あるのなら取りに行こうという話になった。

「ザラが歓迎会を開くと言っていたのを忘れたのか？」

震電が置かれている格納庫に向かう道中の会話でそんな事を言い始めるレオナさん。

「アレってその場の空気を落ち着かせる為に言っただけじゃなかったんですか？」

「そんなわけないだろう。ザラが言ってくれたがコトブキとしても歓迎したいと考えて

いるんだ。既にマダムからも歓迎会を開く為に人と場所の手配も受けている」

「いいのでしょうか。こんな正体不明の人間に歓迎会を開いてくださって」

「ハルトがユー・ハングから来たというのはあの場にいた全員が知っている。今日起きた出来事を中心人物を歓迎会に呼ばないでいたら私が怒られてしまう」

「それってつまり、空の上であつた質問攻めの続きでしょうか」

「まあ覚悟はしておくんだな」

頬を緩ませながら警告をするレオナさん。

あの状況から歓迎のムードになるとは誰が想像を。これはもう一度やったか。純粹に嬉しい。

道中、レオナさんから敬称はいらないとと言われるが、癖みtainなものなので少しずつ善処しますと返す。笑われた。

再び震電の前へ。今は布が覆いかぶさっており、機体の形状ぐらいいしか分からない状態にされている。

剥す……とまた面倒事になりそうだから布に潜り込むとして操縦席を覗き込む。僅かであるが荷物はそこに置かれたままであつた。

取り出して振り向くと、レオナさんが誰かと喋る声が聞こえた。そして相手の方が私に話しかけてくる。

「おーい。どうしたー。忘れ物かー?」

そこにはツバ付き帽子を反対向きに被った可愛い少女がいた。

「操縦席に置いてあつた荷物を取りにきました」

「おー中の物なら触つてないから残つてるハズだぞ」

「はい、無事に残つていました。機体に布を被せてくれたのは貴女ですか?」

「そうだぞ。ごく簡単にだけだ。それがどうかしたか?」

「いえ、手間をおかけさせてしまったので言葉だけで失礼ですがお礼をと思ひまして。ありがとうございます」

背筋を伸ばして頭を下げて伝える。

「いやいや! 止めてくれ、大した事はしてないし一人でやつた訳でもないからな」

「それでもお伝えしたかつたものでして」

少女はレオナさんに視線を降る。アイツはいつもあんな感じなのか? 少なくとも、

チ力達には見習つて欲しい程度にはああだよ。

帽子を取り頭をクシヤクシヤする少女。

「あー! 分かつた! まあなんだ、また何かあつたら呼んでくれ。手伝えそんな事なら手伝つてやるよ」

言うだけ言つて少女は他へと歩き始めている。

「少し重かったでしょうか？」

「いや、ナツオ班長も慣れてないだけだ。これから慣れていけば大丈夫さ」

荷物も無事に確保でき、本日行われる歓迎会の開催所まで足を向ける事になった。

第11話

「ハルトくんー、ちゃんとのんでるー?」

「はい。ありがたく頂戴しております」

「またまたかしこまつちやつてー、もつとリラックスしていいのよー」

はい。いいえ。無理です。

ザラさん距離が近すぎます。大きくてやわらかいのが当たっております。

この空間、良い香りしかしません。美味しい食べ物は勿論ですが、女性特有というベ
き甘い香りで頭が蕩けそう。

前見ても横見ても女性陣。コトブキ飛行隊の皆々様に、二つに分けた三つ編みをして
いるウエイトレスのリリコさん。

男性は私も含めて三人。ケイトのお兄さんのアレクサンダーさん、マスターのジョニーさん。
柔らかな笑みをしていらつしやる方である。

そして現在進行形で幸せ……絡み酒に巻き込まれている私である。

レオナさんの後ろを雛鳥の様に付いていく。

「結構な距離を歩いているが大丈夫か？」

「こちらに来る前に体力作りをしていたので、この距離ぐらいならまだ」

「そうか。それは良い事だ。サボらずに続けていけばハルトも戦闘機乗りとして活躍できるとも思えないな」

お世辞を言われましても、こんなものですつて。みんなおだて上手だから困る。調子こいて失敗する未来しか見えないので気をつけねば。

顔をキュツと引き締める。そんな顔をレオナさんが苦笑いしながら見ている。

引き締めた顔を解いていくと、地面に何やら影が見える。自分でもレオナさんの影でもない。どんどん大きくなる。これはもしかして空から何かが……。

その瞬間、ドンと大きな音をたてて大きな鳥らしき生き物が着地する。

「うわあああどわあその鳥どっかやって！」

「と、鳥？」

気づけばレオナさんが私の後ろに逃げ込んで両肩を掴んでいる。

この世界に来てから幸せな事が起きる。大きい。やわらかい。何より震えてて物凄く可愛い。

とはいえそのままの訳もいかず、鳥を見直す。あれ、何か啜ってる。

「もしかして、手紙を届けに来てくれたのですか」

口をグイツと上に向けてくるので受け取る。ご苦労様です。グワアアア。そう一言鳴いて羽ばたく。意思疎通出来てないかい、あの鳥。

後ろにいるレオナさんはまだ怯えたまま。ただね、ちよつとね、肩がそろそろね。

そんなレオナさんの反応が面白いのか、大きな鳥がグワアアアと鳴きながら羽ばたく。

「ヒイイイ！ 頼むどこかにやっつけてくれ！」

「だ、そうです。すみませんが本日はお帰り頂けると助かります。手紙ありがとうございます」

グワアアアと一鳴きしてから別の方角へと羽ばたいて行つた。あれは一体なんなのだろうか。

なんにせよ、私の肩もそろそろ限界を超えそうなので助かった。幸せの後に死を感じるのはそろそろ辛い。

「ねえ、もういない？ いらないよね？」

「レオナさん。鳥さんはもうお帰りになりましたよ」

肩越しから鳥の気配を伺うレオナさん。十分に確認した後にようやく落ち着いたのか、肩におかれた手が離れる。

「すまない……。みつともない姿を見せてしまったな」

「大丈夫ですか？ 私は気にしてませんが」

「ああ大丈夫だ。少し落ち着いてきた」

「あの鳥さんの事、知ってるんですか？」

「羽衣丸のドードー船長だ。時々ああやって手紙を運んできてくれるのだが……」

鳥なのに船長なのか。そこは横に置いておくとして、この手紙はきつとレオナさん宛てでは。落ち着いたレオナさんに手紙を渡す。

しばらくしてレオナさんが顔を上げてこちらを見る。

「先に歓迎会を始めているから早くこないと終わっちゃぞ。だそうだ」

「それは大変ですね。急がないと」

「ああそうだな。急ごう」

入口の看板が二つ、仮店舗と本日貸し切り、そう書かれた建物の前に連れてこられた。そこから聞こえる笑い声と胃袋を刺激する美味しそうな香り。活動停止していた胃が反応してお腹が鳴り始める。

建物に入るとそこは酒場のような光景。丸いテーブルがいくつもあり、バーのようなカウンター席もある。

その奥の一角で既に始まっていた歓迎会。こちらに気づいたコトブキ飛行隊の面々

がそれぞれに声をかけてくる。

「レオナおっそーい！」

「ハルトも早く！ 早く！ 主役がいなきや意味ないよ！」

チカさんがはよはよと急かすように手を振る。

レオナさんはザラさんの隣に。私はキリエさんの隣に招かれる。

テーブルには大量の食事とお酒で埋まっている。カレーやら謎の肉に飲み物、どれも美味しそうな匂いを漂わせている。

「さて、せっかく主役が揃ったのだから挨拶でもしてもらおうかな」

「こんなに大層な歓迎会で挨拶なんかした事ないですよ」

「いいのいいの、乾杯の音頭でも取ってくれるだけでも」

「その前にアレンさんもザラさんも飲んでるじゃないですか」

「それはそれ、これはこれ。はいそれじゃハルト君が挨拶をしてくれるみたいなので注目ー」

お顔がこちらに向けられてお目目が集中。こんな大勢に注目されるなんて初めて！
美形率たっか！

「あい、みなさんこんばんは。ユーハングと呼ばれている世界から来ましたハルトと申します。本日は「かんぱーい！」」

横入りしてきたキリエさんの言葉で全員がグラスや樽ジョッキの音を鳴らす。

「ちよ、まだ感謝の言葉が」

「長いからパスパス！ ほらせつかくの料理冷めちゃうよ？」

キリエさんに言われた通り、せつかく温かな料理が出されているのに冷めたら勿体ない。

長くしないようにと頭の中では考えてはいたけれど、いざその場になるとお礼を伝えなくなってしまう、結果長々と喋る事になっていたかも。

世の社会人の皆様もそうなのだろうか。短く、されど感謝を伝える方法。難しい。

そんな中、視界に飛び込んでくる物があつた。パンケーキ？

「ほらほら、そんな悩む事でもないでしょ。特別にリリコさん特製のパンケーキを分けてしんぜよう！」

「キリエさんの好物ですよね、いいんですか？」

「いいのいいの！ パンケーキを愛する同志が悩んでいるのなら、パンケーキを差し出すのが礼儀でしょ！」

愛が重たい同志がここにいる。しかもフォークに刺さつたパンケーキを差し出されている状態。いわゆるアー然的な。

食べないの？ と軽く頭を傾げる。この人も注視すると美人さんである。

黒髪でふわっとした髪質にショートボブ。赤いトレンチコートに青いマフラーを巻いている。眉毛は細長くておめめはいうまでもなくパツチリ。

それで好きな食べ物がパンケーキ。女子力レベルがたけえ。レベルってそもそもなんだって話だけど。

せつかく頂けるのなら待たせておくのも失礼か、てか一口サイズ大きくないかこれ。さつそく女子力がレベルダウンですよ！

なんとか口を開けて差し出されたパンケーキを口に放り込む。ふわふわで甘すぎず、バターが効いてとても美味しい。これお店で出せますよ！いや酒場だここ。

もぐもぐしながら言葉を探る。短く、されど感謝を伝える方法。もう復習のお披露目会ですか。えーとえーと。

「トテモオイシイデス」

「何故、片言」

ケイトさんの鋭いツツコミ。だけどキリエさんは気にせず好きな物を分かち合えた事が嬉しいのか、ひたすらにパンケーキ愛を語りだす。

おう、おう、と失礼にならない程度で相槌を返すが一向に止まない。食べながら器用に喋る。そして話がループをし始めた頃に横からパンケーキを載せたお皿が私の前に置かれる。勿論キリエさんの前にも。

「はいそこまで。美味しいと言って貰えるのは嬉しいけど冷めたら勿体ないわよ」
運んでくれたウエイトレスさんが言う。ありがとうございます。どうぞ致します。
普通のやり取りが新鮮に感じるぐらいに精神はどこかに旅立っていたようだ。

キリエさんは一先ず横に放置して、出されたパンケーキを頂く。うん美味しい。お店……いや、これはもう言った。

「パンケーキってデザートなのに最初に食べ始めちゃうのだから、ハルト君もキリエに感化されちゃったのかしらね」

「ち、違いますよザラさん！ 目の前に出されたから美味しく頂いているだけでありまして」

「パンケーキが好きなら何も間違っていない！ 出来立てを食べているハルトはむしろ正しい！」

キリエさんのパンケーキ愛がグラビティだよ。

空の上であつた質問攻めの続きが始まり一つ一つに答えている。賑やかで会話も尽きる事を知らない。

イジツに来る前に三人で考えていた様々な状況。それらの中でもかなり良い状況なのだろうか。

陸海空、例えどの環境に置かれていても初陣で生き残れるという事は実力以上の何かが必要だと曾祖父が言っていた。

穴に突入した直後のキリエさんからの追撃を逃げ延びる為に必死に飛んだのは実力かと言われれば絶対に違う。実力以外の何かだったのだろう。少なくとも、パーソナルマークがパンケーキだったおかげなのは間違いない。

ちよつとした会話途切れの間にそんな事を考えていた。空いたお皿から視線を上げるとザラさんが手招きをしているのが視界に入る。なんでしようか。

席を立ててザラさんの元に行くと、空いている椅子に手をポンポンと叩かれる。座りなさいって事だよな。

「お邪魔します」

「いらつしやーい。ハルト君はお酒は飲めるのかしら？」

「ザラ。子供にアルコールを進めるのは良くないぞ」

「あら、レオナ。ハルト君はもう大人よ。ね？」

横目でザラさんに見つめられる。レオナさんは驚いている。隠す理由もないけどなんだか恥ずかしさを感じる。

指を年齢に表すよう形を変えて前に差し出す。

「ほら、その年齢ならイジツでは立派な大人よ」

「まさか成人を迎えていたなんて。あ、いや変な意味ではなくてな。頭を撫でてしまったり大変失礼な事をしてしまったのではないかと」

「大丈夫です。顔つきと身長で間違えられる事はありますから。それに頭を撫でてくださったのも安心させる為だったと思つています。おかげでイジツにきてから初めて落ち着きました」

二人して何故か頭の下げあい。隣にいるザラさん微笑ましそうに見つめてくる。

レオナさんとまた違った美人さん。髪は長く綺麗で濃い黄みの橙色。胸元には青いリボン。青い何かを身に着けるのはコトブキのルールなのだろうか。よく周りを見渡すとコトブキの皆は何かかしらの青い装飾を身に着けている。

しかし注目はそこではない。青いリボンが台か何かに乗せたような斜めの状態になつているのである。大きい何かがりボンの下にあるのだ。言葉にすると意識してしまふから駄目です。

平然と出されたお腹、短いスカートに膝上まであるタイツを履いている。お姉さん、凄いです。

「はい。終わり。これじゃ空にいた時と同じになっちゃうわよ。という事で」

ビール樽ジョッキ三つねー。ウエイトレスさんに注文をする。しばらくすると器用に三つの樽ジョッキを運んでくるウエイトレスさん。お待たせしましたと告げられた

後に置かれた樽ジョッキの存在感の大きさよ。ビールの量、というよりも容器に目が移る。日本で見かけるには自分の意思で見つけに行かなければお目にかかれないのではないだろうか。

「それじゃ私達の出会いにかんばーい！」

乾杯。と告げて一口。ビールの苦味がパンケーキで包まれていた味覚を胃袋へと流し込んでくれるようだ。しょっぱい！ 甘い！ 苦い！ 少なくとも日本にいた時ならあまりしない組み合わせである。

ゆつくりと味わってから樽ジョッキを置く。ザラさんは未だ喉を鳴らしている。レオナさんは私とおなじペース配分なのだろうか。すでにジョッキが置かれていた。

「ほら、口にヒゲが出来てるぞ」

レオナさんが取り出したハンカチで泡で出来たヒゲを拭ってくれた。どうやらビールを飲んでもレオナさんにとって私はまだ成人の枠組みには入らないらしい。

感謝を伝えると、隣のザラさんから大きな一息が聞こえた。気持ちのいい程の飲みっぷりである。

「一仕事終えた後のビールはやっぱ最高ね」

「確かに。今日も特別な日だからか、いつも以上に美味しく感じるよ」

「毎日こうなら楽しいのになあー」

「チカ。毎日だと特別では無くなってしまふぞ？」

「でもでも！ みんなとご飯を食べるのはやっぱり楽しいよ！」

「同感です。やっぱり一人だと何処か手を抜いてしまったりしますから」

「だよね！ だよね！」

チカさんの気持ちは分かる。一人でご飯は自分から気持ちを上げていかないとただの栄養を摂取するだけの行為になりがちだ。でもぼっちご飯も慣れれば快適なものも分かる。だって現代っ子だもの。

「ハルト！ ハルト！」

「はい、なんででしょうか。チカさん」

「さん。はいらないよ！ 質問してもーん！」

両手を振りながら手を上げる。はいどうぞ。

「ユーハングには海があるってホント？」

「はい。ありますよ」

「やっぱでつかいの？ 見渡す限り水しかないの？」

「そうですよ、船が浮かべられるぐらいに大きいのですよー」

「ホントなんだ！ ウーミに書いてあった通りなんだ！」

「ウーミは良く分からないですけど、ああそうだ」

ちよつとお待ちをと断りを入れてスマホを取り出す。曾祖父の家に行く為に乗ったフェリーの画像や動画が残っていたはず。ウミネコらしき鳥が飛んでいた時に撮影した記憶がある。

それを持つてチカさんのお隣にお邪魔します。キリエさんと食べたパンケーキの甘さ。ザラさんと飲んだビールの苦味。そしてチカさんの目の前にあるものは刺激的な匂いが胃袋を刺激するカレーの匂いである

「なんですの、その板みたいなのは？」

「これに海の写真が入ってた事を思い出しました」

「まあ、私にも後で見せていただけます？」

「勿論ですとも」

動画を再生しようとしたら背後に気配を感じる。アレンさんとケイトさんがいた。ちよつとアレンさん酒臭いですよ！ 何杯飲んだの貴方！

「この世界には海がない。ケイトも見てみたい」

「後ろに同じく。無い物が見れる機会なんてそれこそ滅多に無いからね」

チカさんは目を輝きさせながら、はよはよとせがむ。ちよつと待つてね。

「えーつと確かここら辺に入ってるはずだけど」

「へえ、直接触って操作するのか」

「私も最初は慣れなかったですけどね。喋るだけならボタンがたくさん付いてる方が楽だと思えますよ」

そんな物もあるのかーとビールを飲むアレンさん。せつかくだから私とチカさんの間にアレンさんの車椅子を移動させてもらう。ほぼ密着状態になるが画面が小さいから仕方ない。

三角立てにしたスマホに表示されている再生ボタンをタップする。画面が動き出し自分の足元が映っている。それから数秒後に映し出されたのは船の手すりとうみねこの集団。そして海である。

「海だ！ 本当に遠くまで水だらけだ！ 船が浮いてる！ むしろ乗ってる!? 鳥もいる！」

「これは凄い。見渡す限りの海だねえ」

「ケイト。驚愕中」

各々、反応は色々。だけど驚きである事は確か。

「はえー海って本当にあるんだ」

いつの間にか井を片手にやってきたキリエさんが呟く。女子力ダダ下がり中だよこの子！

この水ってやっぱり塩辛い？ 飲み過ぎると死ぬ程度に。どれぐらいの量がある

？ 私の世界の七割が海です。ええ……軽く引かれた気がする。

風や鳥の鳴き声、船のエンジン音が聞こえてきた。この景色を見ながら曾祖父の家に行つたんだなあ。お小遣い目当てに。

少しの間、画面を凝視をしていたチカさんが爆発したかのように喋り始める。テンションマックスでアゲアゲですね。ああそんなに身体を揺らされると出てはいけない物がが。

長い間撮影していたからしばらくは再生され続けるはずだしお花摘みに行つてきまあす！ 席を立ち、ちよつとふらふらしながらいざお手洗いへ。

「しかしユーハングの技術とやらは凄いな」

板状の物から映画のような動き、音さえも聞こえてくる。こういった物が手に入るのであれば、あいつ等が穴に固執するのも少しだけだが分かる気がする。

「レオナも見に来たんだ」

「ああ。キリエ、立ち食いはあまり良いとは言えないぞ」

「はあーい。しつかしハルトつてなんか抜けてるよね」

「どういう事だ？」

「こんな見るからにヤバそうな物を置いて手洗いに行つてるんだよ。自分で持ち込んだ

物がどれだけ衝撃を与えてるかあんまり分かってなさそう」

目線をチ力達に向ける。ウーミの話が現実にある事が嬉しいのか、ケイトやアレンと大げさなジエスチャーをしながら議論……というよりは楽し気に疑問をぶつけ合っている。

「随分と賑やかな事ですこと」

「エンマは見たのか？」

「ええ、とても素晴らしい光景で、是非タミルにも見せてあげたいぐらいですわ」

「確か地質学とユーハングの研究をされていた方だったな。イジツの世界でユーハングに詳しい人ならばハルトなら喜んで会うだろう。こちらでのユーハングの情報が欲しがっているからな」

「まあ。それなら本人に許可を頂いたら連絡を取ってみるとしましょう」

エンマの頬が緩む。友人の力になれるかもしれないという事は誰しも嬉しく感じってしまう。ここにいる人達以外からも質問攻めに合いそうだぞ、ハルト。

「ただいまーとの声でハルトが戻ってくる。少しふらついているが大丈夫なのだろうか。傍に近寄ってみたが。」

「大丈夫かハルト。少し酔っているようだな。過剰なアルコールの摂取は身体に良くないぞ」

「ザラさんにおだてられてちよつといい気になってしまいました」

「あの底なしに付き合っていたら終わりが無いぞ。次回からは気を付けるんだ」

「はあい。気を付けます。水飲んできますー」

ジョニーの元に向かうハルトだが途中でキリエに捕まる。

酔い覚ましにほらアーン。ハルトの口にカレーをよそったスプーンを突っ込むが、ハルトが辛いと口と目を開く。

すかさずジョニーが持つてきた水で流しこむが、その様子をキリエが見て笑っている。あの馬鹿と注意をしに行こうとするが、片手をエンマに捕まれる。

「まあまあ、良いではありませんこと」

「しかしキリエの行動は余りに無礼すぎないか」

「確かにそうですけど、ハルトの方は怒っている風を装いながら笑っておりますしね」
初対面の相手にもある程度は人並みに対処をするキリエだが、今日出会ったばかりの相手に自ら絡みに行つて笑っているところは初めて見る光景かもしれない。

チカは相手に無礼な態度を取つてしまい、喧嘩ばかり吹っ掛けて大騒ぎを起こす事が多いのだが、今はハルトが教えた海の話に夢中で聞いている。

ケイトもアレンも研究者としての血が騒ぐのか、ハルトに質問をする事が多い。それの一つ一つ真面目に返すハルトもハルトだが。

ザラは……言うまでもなく、昨日と同じような状態だ。

しかし、どうしても頭に残る事がある。イサオの事だ。ハルトがイジツで探し人がいるという目的。これが嘘か誠か。あの独占欲が強いイサオがそれだけを理由に自分の震電を引き渡すのだろうか。もしあの場所で穴が現れていなければ。イケスカの上空に再び現れていたとしたら。

考え始めるとキリがないのは分かっている。だがあの激戦の爪痕は隊長という立場上。切つても切り離す事は難しい。

「レオナ。大丈夫ですか？」

「……すまない。考え事をしていた」

「イサオの事ですか？」

「どうしても、な。エンマに聞きたい事がある。イサオの事も含めてだ、ハルトについてどう思うか聞かせて欲しい」

少しだけ悩むエンマ。私も慣れない事をしているのは実感している。だが、分からないなら聞け。と最近怒られたばかりだ。

「今日出会ったばかりですが、そうですね……。誰かの言葉を借りるならば、ケツ頭野郎の知り合いとは思えないぐらいに礼儀正しく、素直な子だと思いますわ。この世界に came 理由がもし偽りであったとしても……既に震電は鹵獲済みでしょうに？」

「ああ。格納庫に隠ぺいするように細工がしてある」

「ならば大丈夫ですわ。ハルトには悪いですが戦闘機乗りとしての腕ならラハマ自警団の方が上でしょう。何か起きててもハルトが戦力として脅威になる事はありませんわ。本当の脅威はあの震電ですもの」

「イサオが震電を譲り渡し、ハルトに乗せた理由はイジツでの自分の存在の誇示だろうか」

「ダニ共がああの機体を見たら狂喜乱舞する姿は想像に容易いですもの」

ハルトの操縦方法はまだ覚えたてとも言える位のよちよち歩きだ。戦力としては現在の所は期待できない。マダムが震電の隠ぺいを指示されたのも分かる。

だが少し胸に残る違和感。もやもやとした物。それが何なのかを考えているとエンマがクスクスと笑う。

「何か変な事でもあったか?」

「いいえ。ですがレオナが感じている答えは分かりますわ。顔に書いてありますもの」

書かれているはずもない自分の顔に手を添えてしまう。私が感じているモノの答え。これは言葉にして出さなければならぬモノなのだろう。

「ケツ頭野郎……は置いておくとして。確かにハルトはこの世界では珍しい性格である事は確かだ。でも、もう少し砕けた感じに接して貰いたいと想ってしまうのはおかしい

ことだろうか」

「その想いこそ、赤の他人ではなく友人として接したいという想いなのでは？」

「……そうだな。ありがとう。エンマ」

どう致しまして。

よし決まりだ。

「そろそろいい時間だ。本日の歓迎会はこれで終わりにしたいと思う。みんな、また明日から頑張ってもらおうぞ」

うえーい、とやる気のなさそうな声が半数だが、食事会の後は大体このような感じなので放置する。

「それとハルトに伝えておく事がある」

「なんででしょうか」

「明日からはコトブキ飛行隊の皆に対して敬称を付けて呼ぶのは禁止だ」

「うえええ、そんないきなり言われましてもなんて言いますか……照れます」

「照れるのも続ければ慣れる。それにハルトに呼び捨てで呼ばれる事に反論する隊員はいないからな」

チカとキリエはニカつとした笑顔でハルトの顔を見る。

ケイトは頷き、エンマは片手を振ってごきげんよう。

ザラは……机に伏しているが気にしないだろう。

私も問題ない。

照れたような唸り声に続いて頑張ってみますの返事。あまり気にする事でもないと思うのだが彼なりの矜持があるのだろう。

友人として長い付き合いになりそうなのだ。頑張つて欲しい。

「よし、これにて歓迎会は終了だ。ジョニー、リリコ、突然だったが手伝いをしてくれてありがとう」

どういたしまして。お気になさらずに。その返事をもらうと私は良い人達と巡り合えてよかったですと本当に思う。

ハルト。その中にはお前も含まれているんだぞ。出会いは突然ではあったけど、事情を聞いて手伝つてあげたいという思いは本当なんだ。家族の為とはいえ世界すら超えて行動を起こせる人間とは初めて出会ったからな。

第12話

歓迎会を受けた数日後。マダムに呼び出されたので一人寂しくオウニ商会の館へと足を運ぶ。

コトブキの皆はそれぞれお仕事に出かけている。なんでも最近は空賊の出現率が数字の上でも分かるぐらいに増えているとのこと。

おかげで仕事には困らないのだが、あまり歓迎できる状態ではないな。とはレオナさんのご意見。ごめんなさいレオナさん。イサオさんのせいです。

気が付けばマダムの部屋の前まで通される。失礼のないように気を引き締めながらノックをする。

「ハルトです」

入って頂戴の声。お邪魔します。

マダムはいつもの赤いドレスを身に纏い、キセルを吸っていた。喫煙者でいらしたのですか。

席に着くように指示をされたので素直に座る。また対面接ですか。優しそうなお顔をされているのですが美人で恐縮してしまふ。

「短めに用件を伝えるわ。一週間後にラハマに向けてガドールから議員が来るわ」

「ガドール……のですか。でもそれが私に何か関係が」

「ユーリアって名前に覚えは？」

「反イケスカ連合の実質的なリーダーだった方。であっていますか？」

「そう、そして大のイサオ嫌いよ」

戦争したぐらいなのだから嫌いでしょうなあ。

「なんでそのイサオ嫌いの方がラハマに？」

「ハルト君と震電が目的よ」

何故にどうしてと思うが思い当たる節も盛り沢山。

「ハルト君が乗っていた赤い震電。既に色々な所で噂になっているの。イサオが戻ってきた。イサオの意思を継ぐものが現れた。ラハマに監禁されている。とかね」

「どれも間違いだらけじゃないですか」

「そう、間違いだらけ。でもこのまま噂が流れていけば本気にする奴等も出てくるわ。イサオを支持する過激派とかね」

恐ろしい単語が出てきて思わず頭を抱える。イサオ派とか過激派とか。カリスマの塊みたいな人だから支持者がいるのは分かる。けれど過激派までいるのか。本人が一番、過激と言ってしまうほどそれまでだけ。

「そういう事もあってね、早めに手を打っておきたいの。ラハマの治安問題に発展する前にね。噂を鎮静させる為に私が彼女を呼んだのよ。突然でごめんさいね」

「いえ、気になさらないください。イサオさんの残党？　みたいなの達が事を進めたるタイプでしたら、早めに対処しておかないとラハマにまでご迷惑かけてしまいますし」

「ありがとう。貴方は素直で良い子ね」

微笑みながら感謝を伝えてくるマダム。一枚写真を撮らせてくださいとお願いしたくなるぐらいに母性に満ち溢れたお顔である。

あれ、やっぱりこの世界では子供扱いされているよね、私。

「ユーリア議員が震電を確認したのは分かりますが、私と会って何を聞こうとするのでしょうか」

「ユーハングにいるイサオの事を根掘り葉掘りと質問してくるわよ。彼女、本気でイサオ嫌いだから」

嫌いすぎて逆に好き……なんて言ったら何されるか分からないけど、ユーハングで何をしているか、イジツに戻ってくる可能性があるか、そこら辺かな。

イサオさんがイジツに戻ってきた場合は、どうなるのだろうか。イジツに来る前にちよつとだけ思い付きで考えてた事を伝えたら笑われたけど。

あのカリスマ性があれば人を集めるのは容易いだろうし、探索に成功したらイジツの可能性も広がるし名前を残せ……もう残っているか。悪党としてだけど。

やっぱり戦争かなあ。はたまた対話路線に変更かな。いやあの人に限って無いわー。「ハルト君は震電と共に彼女の飛行船の搭乗してもらって、アレシマに同行して貰う可能性があるわ」

「私もですか？ あとアレシマって？」

「イケスカの南方にある物流で栄えている町よ。評議会や議員の対談場所として指定される事の多い所ね。同伴する理由は少しでも正確な情報が聞きたいからでしょう。彼女の事だからラハマで震電の積み込みと補給が済み次第、出発したいと思うわ」

「ユーリア議員とは付き合いが長いのですか？ 相手の事をよく知っているような話し方ですが」

「ただの幼馴染よ」

幼馴染かあ。私には縁のない出会いだっただなあ。

「でもどうやって噂を払拭させるつもりなのでしょう」

「ハルト君が乗ってきた震電を評議会の連中に公開して、イサオが搭乗していた物では無いと押し切れるかは彼女次第ね」

「大丈夫なのか不安になるのですが」

「あら、素人でも分かるぐらいに機体のパーツが違う箇所があるじゃない」

私でも分かるイサオさんの震電と違うパーツ……。ああエンジンか。

「あの震電にはイジツには存在しないエンジンが積まれているわ。イサオが作りあげたプロペラ付きとプロペラ無しのもちらでもないエンジンがね」

「とはいえ、貴重な機体に存在しないエンジン。ではこの震電はなんだという話になりませんか？」

「イサオが穴と共に消えてからは色々とおつたわ。指導者を失った連合の内戦も続いているような状況。そんな状態では何処からか貴重な何かが闇市に流れてきてもおかしくない程にね」

「そうか。貴重な機体ではあるけれど試作機も含めれば震電が一機だけのはずはないのか。」

「好事家が闇市で仕入れた部品を組み上げて飛行。あるいは誰かの手に渡ったのが今回の事で発覚した。という所でしようか」

「落としたところとしては、そこが限界でしようね。イサオはイジツにはいない。これだけを突き通せればいいのだから」

なるほどなあ。そこを強調してイサオ一派に噂はデマだと圧力をかけて馬鹿な事をするなよ。と警告するのか。

イジツでのイサオさんの影響力の大きさには私が想像していたよりも遥かに大きいものだったようだ。そのイサオさんが搭乗していた震電は相手にすれば象徴ともいえるような機体だったわけだ。

とはいえ、その震電でイジツに来なければ私はキリエに撃墜されていた可能性もあり、そもそも震電じゃなかったら襲われてへんやろと頭がプスプス。

口からは出ない溜息一つ。マダムが言葉をかけてくる。

「余り悩まない事ね。キリがないもの」

「とはいえ、噂の段階で既にラハマにぐも迷惑をかけているのも事実ですし」

「反イケスカ連合に加わって自由博愛連合と戦った以上は、こういった事が起こるのは想定内よ。だからこの事は気にせずに、貴方がこの世界でやらなければならない事をやりなさい。私は私の為だけに動いているだけですもの」

この世界の女性はつよい。自分の行動には責任持つて行えと。自分探しの旅に海外旅行に行かなくても何か見つけたりそうなる勢いですよ。ここ違う世界だった。

「そう、もしハルト君がアレシマに同行する事になった場合には、彼女に帰り際にイケスカに寄るように伝えてあるわ」

「イケスカは確かイサオさんの本拠地だった町ですよね」

「そうよ。貴方がこの世界に来た理由が本当ならばイジツにあるユーハングについて最

も詳しい人間がイケスカにいろわ。彼に会うなら彼女の力が必要ですよ」

「会うのに議員の力が必要な方なのですか？」

「彼はイサオの執事だった男よ」

ここにきていきなりイサオさんからの頼み事が達成できそうなチャンスが転がってきた。

だけど会って言付を伝えたとしたら、また何か起こるんじゃないかと、考えても仕方ない。考えればいくらでも可能性が出てきて身動きが取れなくなりそうだ。

せっかく頂いたチャンスだ。自分のするべき事をしよう。でも一応、マダムには伝えておこう。

「会わせて頂けるのはとても助かりますが、余り良い結果にならないかもしれませんよ？」

紅茶に口をつけるマダム。一つ一つの動作が華麗で引き込まれそうになる。音を立てる事もなくティーカップを置く。

「その時は、私の見る目が無かったという事だわ」

言付。

イサオさんから頼まれていたちよつとしたお願い。生存報告。

執事さんにどうやって証明をすればいいだろう。そしてこの世界のユーハングについて教えて貰う方法。

信じさせるという点では問題は無い。スマホの中にはイサオさんが写っている写真や動画がいくつもある。ブルーメランパンツ姿のとか。

でも伝えた事で何かが動き出すのではないかとも思う。主人が生きているのが発覚した場合。執事が取るべき行動は？

脳みそプスプス。そしてまた唸る。この世界に来てから脳みそが何度パンクした事か。

アレンは疑問を感じる事は良い事だよ。なんて声をかけてくれる。

マダムとの会話が終わった後に、この数日で日課となりつつあるアレンとの共同作業であるユーハングについての研究。

作業といっても文字の翻訳であったり、アレンの持論について分かる範囲で返事をするぐらい。だけどアレンは楽し気にニコニコと笑っている。少しは役にたっているという事だろうか。

「十分すぎるぐらいに助かっているよ」

「そう言ってもらえるなら少し楽になれるよ」

「ハルトは悩み過ぎるのが短所かな、でも長所でもあるよ。僕の事で悩んでくれてい

るって事だろうからね」

「お給料が発生していますので」

二人して笑う。日中はこんな感じで過ごしている。

ユーリア議員と会う前にラハマ近郊にあるというユーハングの工場を見に行く事になってる。

全て調べ尽くした後だというのが、私もついて行けば新しい発見があるかも。とアレんが言う。

その為にラハマの町長に立ち入り許可のお願いをしに行ったり、護衛を探したりの日々。

意外だったのがウエイトレスのリリコさんが護衛を引き受けてくれたという事。ウエイトレスに護衛が出来るのだろうかと思ふ疑問に、ウエイトレスだから大丈夫とリリコさん。あ、これは昔ちよつとねパターンかと曾祖父を思い出す。

ケイトも参加したいとの表明をしていたので私も含めて四人で行く事になりそう。陸路で行ける距離で危険はさほど無いようだけど、用心しておくに越したことはない。なんせ私は異世界人。

第13話

手も頭も引つ切り無しに動かし続けていれば、早くもユーハンクの工廠跡を見に行く日になる。

ラハマ町長の許可書を頂いたおかげで自警団からトラックを一台借りる事が出来た。

普段はバイクばかり乗っていたけれど、このサイズであれば私でも運転できそうだが、何事もなく往復できますように。

動作確認も含めてゆっくりと運転し、待ち合わせ場所まで向かう。

「ハルトは車の運転が出来るんだね」

「運転できないと移動が大変な地域に住んでいたしね。それにユーハンクは車社会だから大体の人は運転できるよ」

そうはいいいつもマニユアルのトラックは流石に初めてだったりする。軽トラ持ち込みみたいなあ。

アレンの案内に従い、地面に気を使いながらゆっくりと走行していく。荷台にも人を乗せておりますしね。

しかし町から外れたら何も無い。荒野といっても過言ではない風景だ。風でも吹け

ば藁を束ねて丸めたような物でも転がってきそうな気配すらするよ。

それでもまだこの道はマシな方らしい。少し道をずれるとデコボコだらけ。おまけに気を付けないと谷底までストーンと落ちそうな溪谷もある。

そりや車なんて使い道はごく僅かだなあ。地面を整備して橋かけて、空賊に橋落とされて、フリダシに戻る？ 何十年かかる事やら。

「ユーハングでは飛行機は使われてないの？」

「使われてはいるけど、イジツという飛行船の立ち位置が主かなあ。戦闘機とかそこら辺はこつちと同じだと思う」

「へえ、あの震電もエンジンがイジツの物では無いみたいだし」

「アレもユーハングで探すのに苦労したみたいだよ。七十年前のシロモノらしいし」

「震電に積まれたエンジン。動作確認を所望する」

荷台からこちらに顔を向けたケイトがそう言葉にする。

「アレシマから戻ってきた頃にでもマダムと相談してから動かしてみます？」

「是非、お願いする」

「いいねえ。僕も乗ってみたいよ」

そう言いながら足をポンポンと軽く叩く。そういやアレンの足ってなんで動かないんだろう。治るのだろうか。それもこれも今日のが終わってから聞いてみるとして。

「残念ながらお一人様用です。ケイトが搭乗しているのを地面から一緒に見ましょう」
指でお酒を飲むような仕草をしながらアレンに伝える。

「あはは、残念だけど楽しみでもあるなあ」

「飲み過ぎは体に毒」

「大丈夫だよ、ケイトの操縦を見ながら宴会を開けるのだから良い事しかないさ」

二人して笑って誤魔化する。一応見張っておきますから大丈夫でしょう。多分。

そうこうしていたらリリコさんから「そろそろじやない」とのお声を頂く。古めかしい建物と滑走路のような物が目に入る。

「昔はここで戦闘機も作られていたみたいだよ」

「それで滑走路まで用意されているんですか」

「滑走路は作り上げた物を輸送する為の物でもある。理由はイジツではほぼ陸路での輸送が困難な為」

なるほどなあーとケイトの発言に頷いてしまう。そうだ、ここはイジツだもんな。

アレンの指示で建物前まで車を移動させて停止。リリコさんが後ろから降りて周りを警戒。大丈夫との事なのでケイトの手伝いをしてアレンを車椅子へ。

ここからはリリコさん先導で建物内に移動。何も起きませんように。

「というよりも何も無い」

文字通り、建物内は空っぽという言葉がよく似合う。格納庫のような建物が二つ並んでおり、今いる場所はその建物の横にある事務所のようなスペース。

木で作られた机や椅子はある事にはあるのだが。昔は何かが置かれていたであろう痕跡だけを残して無い。

「イジツ的に木で出来た机や椅子って貴重じゃないの？」

「木はまったく無い訳ではない。手間を考えると持ち運ぶだけ無駄と推測」

なるほど。さてどうしたものか。辺りを見渡しても極端に物が少ない。地面には予定表と書かれた黒板のような物。

特に何かが書かれているわけでもなく、事務所の中を周回プレイ。

ついでに壁とかも触ったり。アレで見つかればいいんだけども。

「人気もなければ物も無いわね」

「さてはて、ハルトはここから何か見つけ出せるのやら」

「期待」

「おや、ケイトが期待するなんて珍しい。今の所は何かが見つかる可能性は極端に低いのに」

「勿論、現状では可能性は無いに等しい。けどハルトは何かを探しているように見える動きをしている。ケイト達が知らないユーハングの隠し場所を知っているかもしれないな」

「い」

「なるほどねー。お兄ちゃんは嬉しいよ」

「？」

後ろで兄妹が期待 a g e をしてくれているのは嬉しいのだけど、本当にこれで見つかるのかは結構な博打。

簡単に言ってしまうとイジツに来る前に曾祖父から教えて貰っていた、日本軍の伝統的隠し場所を試しているだけという。なんだよ伝統とか、などと最初は思ってたけどコレが中々あなどれない。

図書館等で調べてみると、曾祖父が教えてくれた場所に隠し部屋があったり、倉庫があったりと中々の的中率。

これってもしかしてマニュアル化されてたんじゃ、と曾祖父に問うも笑顔で返されるのみ。しかもこれ、陸軍編、海軍編、内地編と多種様々。

ユーハングでは既にバれている隠し方もイジツでは通じるのではないか。というのが曾祖父のご意見。ならば期待に応えましょう。ユーハング式へそくり探しを。

一人うろうろと探索術をしているがそれらしい形跡はない。見て分からず、触れても分からず、それ以外の方法だと……。

自分の足を見る。当時の人達に比べれば大きい方だと思っから歩幅で測ると誤差が

出そう。となれば他の人。

「リリコさん。すみませんが足をみせてください」

「何がしたいの？」

「歩幅で測りたい事があるのですが、私の足では当時の人達に比べて大きすぎまして。リリコさんかケイトの歩幅なら計算できるかなと」

おおよそ、私の掌ぐらいなのでここに足を乗せてくださいとお願ひする。

仕方ないわね。リリコさんが靴から足を差し出す。本日は黒のタイツにホットパンツという動きやすさ重視の服装。素敵なおみ足ありがとうございます。帽子も似合っておりますよ。

掌におかれたリリコさんの足の大きさは丁度よい。リリコさんにお願ひしようと思うがふと思ひ出す。そういうえば護衛で来てもらった。

お礼と理由を伝えて今度はケイトに乗せてもらう。ケイトのおみ足も黒タイツに包まれて、ショートパンツ姿の動きやすい服装をしている。

ベルトとサスペンダーの組み合わせのおかげか身体のラインが分かる。スタイルいいですね。ありがとうございます！

足のサイズも大丈夫そう。ケイトにお礼して建物の入り口に立つてもらおうようにお願ひする。足の先端にかかをつけて一步としてだ。東に六歩、北に四歩……。

「ここに何かあるって事かな」

机や椅子を移動させながらの歩数合わせ。辿り着いた先は特になにもない。しいて言うならば床か屋根か。

屋根にあつたらもう誰かに見つかつていてもおかしくない。とならば床になる。リリコさんに顔を向けると待つてとと言われる。

どこぞからボールのような何かを持ってきてくれたリリコさん。そのまま床に持ってきた物を差し込んで床を剥そうとしてくれている。やだ遅いわこの人。

流石に見ているだけなのは気が引けたので、隙間が見え次第、落ちていた物を差し込んでお手伝い。次第に床が浮いてきて埃と共に剥される。

「レバーがある」

「お、まさかの当たりかな」

いつの間にか口元をハンカチで覆っている兄妹が呟く。まさかって何よ。アレン、私の事を信じてなかったのね。もう知らないわ！

脳内劇場では女性不在で男女間のもつれが発生するが横に押し潰しておこう。リリコさんがはよ引けと目線で合図をしてくるから。

それじゃ引きますよ。どこかの世界にいるパイロット達のように自分の名前を言いたくなるが、我慢してレバーを引く。結構重い。

ガコンと何かが浮くような音。格納庫のような建物から聞こえたみたいで、みんなそちらに視線を向けている。行ってみますか。

建物の一角にある地面が少し浮いた状態で静止している。上には何かが置かれていたのか、多数の擦れたような跡。隠した時についたのか、それとも誰かが何かを持って行った後についたのか。

「はい。現状報告会を開きたいです」

「本当に何かを見つけるとは思わなかったよ」

「何も無い所にまだ何かあるなんてね」

「ケイト、驚愕中」

「期待してると言ってくれたのに驚くんかい！」

宝物探してで本当に宝箱を見つけてしまったせいとか、私だけテンションがおかしい事になつている。落ち着くために深呼吸しよう。スーツごっほごはっ。埃が肺に。

リリコさんから、貴方馬鹿なのみたいな視線が送られてくる。はい、馬鹿ですごめんなさい。ケイトが優しく背中を擦ってくれる。馬鹿だけこれだけで幸せを感じてしまう。

少しの間を置いてようやく落ち着いた。

「それで、誰が行くのかしら」

「リリコさん。お願いします」

「貴方でなくていいの？　せっかく見つけたのに」

「埃が舞っている中で深呼吸する人間に一番槍させたら、階段から足を滑らせて死にますよ」

「それもそうね。と納得されてしまう。何はともあれリリコさんに偵察してもらう事になった。」

「浮いた地面を持ち上げて、壁際に固定する。階段の先に扉らしき物がこちらからでも分かる。」

「行ってくるわ。いつてらっしやい、気を付けて。リリコさんが階段を下りて扉まで向かう。そして扉のノブに手をかけて引つ張る。ガンガンという音がこの静かな場所です響く。」

「開かないわ」

第14話

引いてダメなら押ししてみよう。押ししてダメなら回してみよう。

あれやこれやと試してみたものの、扉は答えてくれず。唯一の手掛かりは鍵穴があるという事。

「少し時間を頂けるかしら」

そう言つてリリコさんが取り出した物は先端の細い道具達。ピッキングをして開けようとするらしい。ウエイトレスってなんだろう。

「鍵がかかっているならまだ誰も立ち入っていない可能性はあるね」

「同意。中にユーハングに関する資料がある事を所望する」

「そうだね。僕は穴の事について分かる物があると嬉しいなあ」

それぞれに知りたい物があるといいなと期待する。私も曾祖叔父の事が分かる物があるといいのだけど、無いかなとも思う。

理由については、図書館で隠し部屋の事を探していた時に目に留まった内容。

軍隊が何かを隠すという事は、大概が食料や武器弾薬を保管する為の行動だった。機密とか秘匿の類は読み終わったらその場で燃やされるのが通例みたいだ。

違う世界に來たからといって早々、軍隊の行動が変わるとも思えない。

そんな事を考えてはいれど、内心ではワクテカが止まらない。隠し部屋なんて夢と口マン。

「今度こそ、開けるわよ」

見事に鍵の解除を成功させたリリコさんが伝える。さあ何があるのでしようか。

舞い散る埃と共に目の前にある扉が開かれた。

中は正方形の空間で人間なら縦横五人ほど並べるぐらいの広さ、一角には棚があり、箱が陳列されている。その中の一つに書かれていた文字は酒。

他に目ぼしい物は見当たらない。箱の中身次第ともいえるけれど、ただの倉庫かな？

ひとまずアレンを部屋までおぶって連れてくる。

「いやー隠し部屋ってワクワクするよね。その部屋に置かれた箱。ロマンの塊だなあ」
「開けて毒でも噴射されなければいいわね」

リリコさんがおつかない事を言う。棚にある箱は三つ。特に何も書かれていない箱を一つ棚から降ろして開けてみる事になった。

少しだけ慎重になりながら箱を開封。現れたのは……膨張している缶詰であったよ

うな物。

「ある意味で毒じゃないですか。これ」

「とてもじゃないけど食べる気にはならないわね」

「あ、でも中身は気になるから後で開封してみようよ」

「アレン一人でやってくださいよ、私は嫌です」

「拒否する」

がつくしと肩を下ろすアレン。中身次第では爆発しそうだから地面にでも埋めよう。汁とか飛び出して身体にかかったら大変だよこれ。

そう思いながら二つ目の箱を降ろす。あれ、結構重たいよこれ。

一つ目と同じようにやや慎重に開ける。中身は……紙の束？ アレンがこうふんしはじめた！

「凄い！ ユーハングの人達が書き残した物が出てくるなんて！ ああ期待してよかったですよ」

「そんな事を言われた記憶がないのですけど」

「今言ったから問題ないさ」

ケイトさん。貴方のお兄さん調子いいですね。つてあれ、ケイトも興奮してる？ 表情は全然変わらないけど雰囲気は少し熱を帯びてる。

兄妹が箱の中身に夢中になってしまった。仕方ないから放置して一度、リリコさんと一緒に上に戻る事にした。

「ああなつたらしばらくは何を言っても無駄そうね」

「アレンはともかく、ケイトまで夢中になるとは思いませんでしたよ」

「そうかしら、ケイトは最初から貴方に期待をしていると言つてたじゃない。期待をして、本当に見つかつたのだから、嬉しさがこみ上げて結果的に夢中になっているのよ」

「だとしたら嬉しいなあ」

「もう一つ箱が残っていたけれど、アテがありそうね」

「アレはですね、ちよつとお耳を貸してください」

リリコさんの横に立つて耳に顔を近づける。至近距離から見るとリリコさんの横顔は整つていてとても綺麗。甘い香りにうつつすらとした汗が入り混じつて頭がクラクラする。

『箱にユーハングの言葉で酒と書かれていたんです。アレンに見つかると大変でしょう？』

伝える事が終わつたらすぐにいた場所に戻る。幸せを少しでも長く感じていたい。でも固執すると大変な事になる。リリコさんに嫌悪されるのは嫌だ。雑な扱いも罵倒も、愛情が込められたのが好き。

「はあ。なるほどね。確かにアレンにバレたら面倒な事になるわね」

「今も飲める状態かは分かりませんが。大丈夫そうでしたらリリコさんもどうですか？」

「そうね。せつかくだから少し頂こうかしら。ジョニーに渡すのもいいかもしれないわね」

「それはいいかも。歓迎会でお世話になりましたし」

まあ本当に中身がお酒で飲める状態であれば。ですけどね。

「いやー大量、大量、だね」

日も暮れ始めてきた帰り道の道中、隠し部屋から持ち出した資料を片手にご満悦なアレン。少し酒臭いのはご愛敬。

あの酒と書かれた箱には。琥珀色をした液体が入っている瓶がそれなりの数。ウイスキーだと思われる。

資料に夢中になっている内にトラックに運ぼうとしたら、瓶同士の触れた時に発生した音でアレンにバレてしまった。

飲める状態なのかどうかも分からないのに、毒見でいいから飲ませてと懇願される。ケイトに確認すると「ハルトが許可するなら良い」との返事を頂く。お兄ちゃんが二

ヤニヤした顔でこつちを見てくる。

「どうせは確認する物なのだから毒見させて放置しておけばいいのよ」リリコさんの火の玉ストレートがあつた事もあり、一本だけアレンに手渡す。

結果的にアレン曰く、とても美味しい。コルク栓を開けた瞬間に瓶から溢れ出るアルコールと木の香り。初めて嗅いだ香りだけど落ち着く。

もう一口を何度か続けているけれど、お腹を壊すようなシロモノではないらしく。飲む度に顔が綻んでいる。美味しそうに飲みますなあ。

そんなへべれけアレンを横に置き。ラハマへの帰り道を進む。路面に気を付けながら車を走らせ、トラブルが起こる事もなく無事にラハマへと帰ってこれた。何事も無い事が一番いいよね。

ひとまずアレンを病院に押し込んでベットに放り込む。後は持ってきた資料の箱も病室へ。

「お酒はどうしようか。一人一本でもそれなりに余る数があるよね」

ケイトは余り飲まない事と、資料を貰えるのにこれ以上はと、やんわり断られる。

リリコさんは一本もあれば十分よ。との事で今回の護衛費用と一緒に一本だけお渡ししておく。

後はどうしようか。私もあまり飲むタイプではないから飲みきれない。アレンはそ

れならとアピールするがリリコさんに睨まれて縮こまる。

「無理して配らなくてもいいのよ。この男みたいに酒一本渡せば動く男なんてわんさかいるでしょうし。なんなら売り払って貴方の活動資金に変えるのも手よ」

その言葉にケイトも頷く。

「ハルトがこの世界に来た理由を考えれば、現金に変換するのが一番良い。探し物をするにも、その場所に行くとしても護衛費用がかかる。現金はあつて困る物ではない」

「そっか。それじゃお言葉に甘えていいかな？」

リリコさんもケイトも頷いてくれた。こちらで出会えた人達が彼女達で良かったと本当に思う。

お礼を伝えて病院で解散。車の返却に行こうとすると、ケイトが付き合おうと言つてくれた。

その車内でケイトから質問が来る。

「アレンの足。見てどう感じた？」

「よく分からないけれど、リハビリすればまた動ける怪我なの？」

ケイトが首を横に振る。

「医者の見立ではあのままの可能性も高いと言われた」

しばらく間が空く。私も返答に困っていたから。でもケイトは言葉を続ける。

「ハルト。お願いがある」

「なんだい」

「アレンの足を治す方法を一緒に探して欲しい。勿論、礼はする」

「それは問題ないけれど……ああユーハングの知識を利用してという事？」

ケイトは頷く。ただし雰囲気は暗い。

「ハルトには失礼な事を伝えている自覚はある。だけど時間が経てば経つ程、アレンは自分の足では歩けない状態に近づいてきている」

この事に関しては真面目に脳味噌を回転させる。アレンの足も、ケイトの心配も解消してあげたい。

残念ながら私には医療の知識は無い。あるとすれば父親が足の怪我をした時のリハビリ方法ぐらい。

でも症状を教えてもらわなければ始まらない。覚悟を決めてケイトに聞く。

「ケイト。アレンの足があのような状態になった理由といくつかの質問に答えてもらえるかい？」

ケイトは頷いた。

またですよイサオさん。好き放題この世界でやりすぎじゃないかなあの人。この世

界に来て名前が出てこない日が無いんじゃないかってぐらいの出現率。

「アレンの足に後遺症が残った理由。それはアレンが穴の位置を特定する為に調査へと向かった先に、イサオの手の者達が潜伏していて、アレンを襲撃。撃墜されたアレンは負傷し、足が動かなくなる状態になってしまった。」

これを聞いた時は頭を抱えてしまった。やっぱりとんでもないおっさんだったよ、イサオさん。

この状況にケイトが言葉を発する。

「ハルトは悪くない。気にする事ではない」

「とはいえ面識があつて、お世話になった人がそんな事をしていたと思うと頭を抱えたくもなりますよ」

「気持ちには分からなくもない。けどケイトも最初はハルトを疑っていたから」

「それは当たり前なのではないかい？ 穴から飛び出してきたんだし」

ケイトは首を横に振る。

「その後のイサオとの通信を聞いて、最初はイサオの指示でこちらの探りをしに来たのだと思っていた」

「ああ、なるほど。私の手伝いしてあげてねってレオナさんに言っていましたからなあ」

馴染んできたかなとは思っていたけど、どう考えても私はイサオ一派の人間にしか見

えないよね。

「でもそれは間違いだと、この数日で認識した。ハルトは本当に探し物を探しに来ただけで、イサオの行動を手伝いにきた訳ではないと」

「なんでそう言い切れる？ 自分で言うのもアレだけど結構怪しいと思うよ？」

「歓迎会でチカに海を見せた事。今日のユー・ハングの工廠跡で見つけた貴重な物を分け与えた事。ハルトは質問をされれば精一杯、答えてくれる。手に入れた物を独占しようという気配はまったくくない」

「いやまあ、聞かれれば可能な限りは答えたくありませんし、見つけたい物はあれど欲しい物とはまた別ですから」

「だとしても、独占をしたがる人間が多いのも事実。それをしなかったハルトだからこそアレンの足の事を聞いた。ハルトならきつと一緒に考えてくれて、何か治療法を見つけてくれるという期待。私にばかり都合のいい事を伝えている自覚はある。だからハルトはそれまで私を好きに利用してくれていい」

「好きに利用と言われてもなあ……」

「護衛が必要ななら最優先で予定を入れる。必要な物があるのなら可能な限り私が用意する」

あ、そういう好きにでしたか。自分の思考が邪すぎてぶん殴りたくなってきたわ。ご

めんよケイト。

でもまあ、アレンの、友人の為ですし記憶を頼りに頑張って探してみますかね。この世界の医療行為がどの程度なのかも分からないですし。もしかすればリハビリがアレンの足に合う可能性もあるし。

「可能な限り、手伝えるように努力するよ。ユーハングの研究作業の合間とかになつてしまふだろうけど。その時はケイトにも手伝ってもらいたいな。脳みそ一つだと、どうしても煮詰まっちゃうからさ」

ケイトはしばらくこちらを見つめたまま動かない。しかし思考が定まったのか口が動いた。

「ハルト」

「はいはい」

「感謝……」

軽く頭を横に降るケイト。

「ありがとう」

「どういたしまして。ってまだ始まってないけどね」

恥ずかしさを隠すように照れ笑いをする。ケイトは相変わらず表情に変化は無いけれど。雰囲気だけは今日一日、一緒にいたおかげか少し分かるようになった気がする。

意外と喜怒哀楽がはつきりとしているのかもしれない。

第15話

先日のユーハング工廠探索を終えた後にマダムと町長にお礼の挨拶に行ってきた。

町長からは無事でなによりとの言葉を頂いた。ややふつくらとした腹回りの男性であるが、穏やかで親切な方だ。

昔はラハマの貴公子と呼ばれ、エンマ曰く、町に対して難癖をつけてきた空賊達の要求にも屈せず、二度も断った。との事。その一つが自由博愛連合だったという事も。イサオさん、貴方の組織が空賊のゴミムシレベルの扱いをされてますよ。

工廠で発見した物の一部であるウイスキーを渡そうとしたが、丁重に断られる。町長の立場もあるし、自分が見つけた訳ではないからと。ここに大人の男性がいるよ。

マダムへの報告も同じ内容である。ウイスキーを渡したらすんなりと受け取ってくれた。売って資金にすればいいじゃないの。とも言われる。

リリコさんにも同じ事を言われて、いざ売ろうかと考えたなら相場が分からなかったのです。

なので下手に売るぐらいなら、日頃お世話になっている方に譲るのが良いと思いまし

て。

感謝の言葉と共にお辞儀をする。だって日本人だもの。

マダムは少し呆れた顔をしながらもキセルから煙を吸い込み、ゆつくりと吐き出す。緩やかな動作で椅子から立ち上がり、謝礼と共にお辞儀をする。私と同じ動作なのに上品さがまるで違う。

驚いた顔をしていると、これも商売に必要な事よ。と教えられる。母性に満ち溢れた顔で言われる。羽衣丸副船長のサネアツさんがお熱になる理由が少しだけ分かった。

でもドレス姿でお辞儀は眼福になり危険なので気を付けて欲しい。それもマダムなら予想範囲内か。

「ハルト君に伝える事があったわ」

「なんででしょうか？」

「ハルト君と搭乗していた震電。ユーリア議員と共にアレシマに行きが確定したわ」

「視察したという名分だけでは納得させる事が困難になった。という事ですか」

「ええ。あちらの世界も色々大変みたいよ」

少し辟易とした物が混じった溜息をつく。その姿さえも美しい。一枚写真を撮らせてもらってサネアツさんにでも売るか。

「震電の輸送については予定通りガドールの飛行船に搭載させる事。飛行船の護衛に

ユーリア議員の親衛隊と、コトブキ飛行隊が役目を請け負ったわ」

「コトブキの皆さんがですか」

「震電がラハマからアレシマに輸送されている間に何かがあつても、自警団で対応できるレベルでしょうしね。厄介者の震電を持ち運ぶ事がラハマの治安維持も繋がるからって彼女、大層値切ってきたわ」

「そ、それはなんとも」

「それでも他の依頼より報酬は破格よ。何かと物入りな時期ですもの。正当な依頼なら断る理由はないわ」

その為にも。マダムが続ける。

「震電が稼働できる状態か、確認して欲しいの。整備士なら腕利きの子を紹介できるわ」

「それがナツオさんの事だったんですね」

「まっそういう事だな」

「ナツオの整備は完璧。安心して機体を任せられる」

格納庫で出会った女性は、羽衣丸所属の整備士で名前はナツオさん。以前、同じ場所で見たあの美少女であつた。

どうやら私よりも年上らしい。周りからはハンチョーや姐さんと呼ばれているのを

見かける。人は見た目で判断してはいけない。

震電の動作確認の時に呼ぶと約束していたケイトと一緒に訪れた訳である。

「しっかし、まさか震電を整備する機会があるとはなあ」

「ナツオさん程の方でも震電の整備は初めてですか」

「当たり前だ。存在自体が幻の機体だぞ。イケスカ騒乱で初めて稼働状態の機体がある事を知ったぐらいだ」

「ケイトもあの時に初めてみた」

「そういう割には撃墜してたじゃねーか」

「イサオが油断していたから出来た事」

「そうだったんですか」

「とは言ってもだ。機体そのものはイジツで生産された以上は使われている技術で、あの程度の憶測はつく。改修されている部分も胴体部分や装甲のガワぐらいで済んでいするしな。そちらの整備は可能だが、問題はエンジンだ」

震電のプロペラに触りながら話が続く

「こちらでも原理も動作もある程度は把握できる。ハルトが震電にレシプロエンジンを積んできてくれたおかげでな。イケスカ戦でイサオが搭乗していた時のエンジンだったらお手上げだったかもな。ただ、それでも初めて触る事には違いない。その場合、万が

「一も発生する可能性はある」

「飛ばせなくなる事も？」

「ああ、十分ありえる。下手をすればエンジンが吹っ飛んでお釈迦だ。その可能性がある事を伝えた上で聞いておかなければならない事がある。私達に整備を任せてもいいかどうかだ」

ナツオさんがどうする。と問いかけてくる。

震電が飛ばなくなる。そんな未来を考える。だけど震電は既に私に様々なチャンスを与えてくれた。その機体性能で命も。

愛着はある。だがこれ以上、イジツでこの機体に搭乗するのは危険が伴う。震電から始まったドタバタも良い方向に向いてくれたんだ。

「エンジンが破損したり機体が飛べない状態になったとしても、ナツオさんを責めたりはしません。無茶なお願いをしているのは重々承知していますから。」

それにマダムやコトブキの皆さんが信頼している方ですから、そんな状況になったりはしないと信じてますよ」

駄目で元々。そういう風を受け取られるかもしれない。だけど信じているのは確か。静寂の間。腕を組んで黙っていたナツオさんがニヤリと笑みを浮かべる。

「おもしろえじゃねえか。その期待に応えてこそその整備士つてもんだ！ 野郎共、準備

しろー！」

部下と思われる人たちから『ウっす！』『喜んで！』の聲が挙がる。一人、喜んでる人がいるよお。

「よろしくお願いします。あ、ダメだった時はユーリア議員への言い訳を一緒に考えてくださいね」

「そんな心配をしないで済むぐらいに、完璧に仕上げてやるよー！」

「お願いします。無事仕上がったらケイトに動作確認をして貰おうと思っているのですが、大丈夫ですかね」

「んお、ケイトも気になっていたのか？」

「イジツにはないユーハングのエンジン。大変興味深い」

「それならこのまま手伝えてくれよ。ケイトの豊富な知識なら作業もやりやすくなるっ
てもんだー！」

ちらりとこちらを見るケイト。是非ともよろしくお願いします。分かった。

「なんだあ、随分と仲がいいんだな」

「ハルトにはケイトを好きにしてもいいと伝えてあるから」

「おい！ ハルトお、ちよつとこつちこいや」

「いやいや！ その言い方だと絶対に誤解されてますから！ 違いますから！」

要約する形でナツオさんに伝える。

「なるほど、アレン絡みの事か。確かに治ればいい事は確かだが……」

「そこですね、ナツオさんに質問があるのですよ」

「質問？　なんだ？」

自分で書いた汚い工作図を広げて見てもらう。書かれている物は平行棒が左右に並んで固定されている物と、車輪が付いた歩行器。赤ん坊が歩行訓練の時に乗ってるアレ、で伝わるだろうか。

これを書く前に病院を訪ねてみた。リハビリという治療行為をしているのは分かった。だけど父親の怪我の時に見たような器具は見当たらなかった。

図書館にも足を運んでユーハングに関わる事と共に医療に関する事、リハビリの項目を読んだがやはり見かけず。

これならもしかして可能性はあるのではないだろうか。勿論、アレンの神経に何らかしらの問題があれば全ては意味がない。それは穴の先にある私の世界であっても。

それでも一部の望みを託して可能な限りの記憶を頼りに形と使い方が浮かんだのがこれ。

「ここに書かれている器具を作りたいのですが、生憎こちらではアテがありません。ナツオさんはこういういった機材を作る事はできませんか？」

「この器具はアレンの足の治療になる物なのか？」

「はい。これらを使って歩かせる事により、足の筋肉を少しづつ元に戻していけば、自力歩行の可能性は上がるかと」

「病院にある器具では代用出来なかったのか？」

「平行棒であれば病院にもあるのは確認出来たのですが、壁伝いにしか設置してないで、それを利用すると筋肉のバランスが偏ってしまうので余り身体には良いとは言えないです。車輪付きのは見た限りではありませんでした」

「そうか、バランスは大切だな。と呟くナツオさん。」

「歩かせるのは分かった。ただアレンはまだ立つ事すら出来ないが、そこはどうするんだ」

「ユーハング式……という言い方は変ですが、こちらの技術で外部から処置すれば無理矢理立たせるだけなら可能だと思います。歩行に関しては急には無理でしょうが、日に何度か両足で立たせて筋肉に刺激を与えて、そこから歩行へといければと考えています」

ふーむ。とナツオさんが思考する。無理難題を言っている事は確かだし、医者でもない人間の知識でどうなるかなんて分からないのだから当たり前ではある。

だが、ケイトが横から口を挿む。

「ナツオ。私からもお願いする。この短期間でアレンの足の治療が可能かもしれない事を探してくれたハルトには感謝している。そしてハルトが探し出してくれた治療行為に必要な道具がある事も知った。ケイトはそれを是非とも手に入れたいと考えている。金額が多少かかってもかまわない」

「お願いします。と頭を下げるケイト。私も追って頭を下げる。

腕を組んで思考していたナツオさんが慌てて頭を上げるように言う。

「分かった！ 分かったから頭を上げてくれ。私だってアレンの足が治るならそれに越した事は無いと思っている。ただうまく想像が出来なくて考えてただけなんだ」

少し焦った表情をしていたナツオさんが一度、深呼吸をして再度、会話を続ける。

「これぐらいならなんとかなるだろう。作り上げてみせるよ」

「おお本当ですか」

「一度やるって言いつつなんだ、任せておけ！」

頼もしい。見た目はきやわきやわなのに、中身は熟練の整備士さんが入っているよ。

「でも、震電の事が済んでからになるぞ。初めての作業を二つ同時進行は無理が出るからな」

「問題ない。ナツオ。ありがとう」

「おう！ 任せておけ。ケイトもこき使ってやるからな！ 覚悟しておけよ！」

了解した。と返事をするケイト。

私はこのままここにいても邪魔になると判断したので、一度引き返す事にした。お礼を伝えると共に一緒に持ってきた差し入れを渡す。米菓だからカツチカチでしょっぱいぞ。

なんでも入っているのな、その鞆。そんな事を言われたが喜んで貰えた。日頃、間食する物としてはこういう物が好みらしい。覚えておこう。

第16話

本日も快晴。イジツの綺麗な青空が見れる朝。万年寝坊助だった自分がこんなに清々しく朝を迎えられる日が来るとは。

宿の前で軽く背伸びをする。こうしてイジツで生きていられるのもマダムのおかげだなあーと感謝の気持ちで一杯になる。せっかくだから太陽にでも拝んでおこう。

気持ちを通じたかは分からない。ただ太陽を背に何か空から降りてきたのである。前回と同様に躍動感溢れる着地。

「グワアアア！」

「ひいひい」

鳴き声と共に降りてきたのはドードー船長。一人きりの時に突然現れると前回のよくな対応が出来ない。あの時は自分が驚く前にレオナの悲鳴が聞こえてきたから。

「船長！ 驚かささないでくださいよ。心臓が止まるかと思いました」

「グワアア」

少しだけ低音になる鳴き声。すまなかつたと伝えたいのだろうか。ふと見ると船長の足元に何か落ちてている。

「ブラシ?」

「グワワアー」

もう一鳴き。翼を広げてピタリと動かなくなる船長。つまりこれでブラッシングをしろというわけですか。鳥はおろか犬猫ですらやった事ないのですが。

定番の頭からやってみよう。船長。帽子取りますよ。グワアー。痛くならないように軽めにブラシをかける。

すんなりと通るブラシ。サラサラとして綺麗な毛づや。日頃から誰かにしてもらっているのを今日は私がやっているのだろう。

翼に当たらないように気を付けながら背中もブラシを通す。気持ちがいいのか船長の鳴き声も心地よさそうにも聞こえる。鳥も人間も気持ちよさは変わらないみたいだ。

次はお腹周りなのだろうか。怒らないよね。とか考えていると太陽を遮るモノが再び現れる。飛行船だ。

現在、ラハマで建造中の第二羽衣丸。初めてみた時は大きさに驚いた。それと同じぐらいの大きさなのだろうが、実際に浮いて動いているのを見るのは初めてである。

「船長。おつきー船ですねぇ」

「グワアアー」

お腹にブラシを通しながら船長と会話をしていると、一人の男性が走ってこちらに

やってくる。あれはサネアツ副船長かな。

「はひいー。ハルト君、よかったまだ宿にいたんだね」

「副船長。おはようございます。息を切らしてどうしたんですか」

おはようと返事があるものの。呼吸を整えるので精一杯の副船長。そんなの関係無しでブラッシを通されている船長。あれ、鳥が船長なの？

「いま飛行船がラハマに到着したのは見たかい？」

「ええ、船長のブラツシングをしていた時に。大きいですよねえ」

「ガドールの飛行船は中の装飾も凄くてね。まるでホテルかと思うぐらいに……つてそうだよー。ユーリア議員が到着されたので今すぐマダムの所に来て欲しいんだ！」

「ああなるほど。あれはガドールのだったのですか。あれ、でも予定より早いような」

「そうなんだよー、突然連絡が入ってそろそろ着くわ。ですつて。こつちの予定も考えて欲しいよお」

「急を要する事をしてしまった身としては謝る他にないです」

すみません。軽く頭を下げる。副船長はいいやハルト君が悪いわけじゃないからとフォローしてくれる。良い人だ。

「そんなわけで船長。私に用事が出来ましたのでこれでブラツシングは終了です」
「グワワアアア」

船長が頭を下げる。つられてこちらも下げる。頭に帽子を戻してあげてブラシは……啞えて帰りますか。

帰り際に副船長の前で立ち止まる船長。ジーっと副船長を見上げた後、脛に蹴りを放つ。

「あいたあああっ！」

「グワアアア！」

副船長の泣き声で満足したのか船長は歩いて帰っていく。飛ばないんだ。

「大丈夫ですか！ 副船長」

「うう、今朝は忙しくてブラシを通してあげる暇が無かったんだよ。それを怒っているのかなあ」

「普段は副船長がやってあげていたのですか」

「朝、早々に部屋まできて起こされるんだ。だけど今日はドタバタでいつもの時間には部屋にはいなかったんだよ」

「それで今日は私の所にやってきたのか。でもなんで私だったのだろうか？」

「さあ？ 船長の行動はその時で違うから余り考えない方が良く思うよ」

泣き声の混じる副船長の脛を擦りながらの会話。もうイジツの出来事はそこまで深く考えない事にするぞ。毎日のイベントが多すぎる。

ありがとう。と言つて立ち上がる副船長。

「もう平気ですか」

「なんとか。それよりマダムに怒られる方がマズイからそろそろ行こうか」

「了解です」

朝から男二人、並んで女性の元へ足を運ぶ事になる。まずは震電から始まった噂の問題を片づけ、執事さんに会い、ユーハングの痕跡を見つけなければ。

焦らずに一つずつ解決していけばイジツでの調査も捗る様になるはずだ。

「アンタ！ イサオがどういふヤツか知つててそんな事を言えるわけ!？」

マダムの幼馴染であるユーリア議員。今回の件で大変お世話になる人である。

長く綺麗な黒髪で深緑で統一された服装を身に着けている。大きな帽子も良く似合つていて美しい人。口を開く前はそういうイメージであつた。

「簡単にイジツで起きた……起こした事は本人から聞いていますが」

「ハア!? そんな一方的でかつ自身の都合の良い事しか言わないクソ野郎が言う事を真に受けてここまでやってきたわけ!? 既にアンタが搭乘してきた震電のおかげでこんな事になっているのは気づいているのかしら。今のイジツは世界的に不安定になつていてそこら中にイサオの残党やら空賊やら増える始末。そんな状態にも拘わらず自身

の都合の為だけにユー・ハング来たあげく、穴と共に消えたイサオが搭乗していた機体でやってくるなんて最高に頭パツパツパーなのかしら。クソ野郎の話ですら聞いていれば想像は容易いでしょうに。少しはその脳みそを動かさなさいよ。何のために頭がついてるのよ！」

いざとなればその残党とか空賊側に震電を見せつけて、こちらの目的を果たそうとしていたなんて死んでも言えない。

とはいえ実際にこちらの都合で迷惑をかけている事は確か。申し訳なさと胸が一杯になり少しだけ涙腺が緩くなりそうである。

ユーリア議員の顔を見ていた視線も徐々に下がっていく。いけない。このままでは。この世界の人達に迷惑をかけてでもやり遂げたい事があるのに。頭の隅に押し込んでおいた事を正面から言われただけで心が軋む。だけれどきちんと聞いておかなければ。必ずしも歓迎を受けられる身ではないという事を。こういった意見もある現実を受け止める事を。

「ユーリア議員。そこまでにしておいて頂戴。彼はオウニ商会の大切な客人よ」

「ルウルウ！ 貴女だつてイサオのせいで飛行船を無くしたじゃない！」

「あれは私の判断よ。私のすべき事をして事が成しただけ。結果的に飛行船は無くなつてしまったけれど」

「それでもコイツの目的に手を貸すつもり!？」

「ええ勿論。彼はイサオでは無いですもの。他の、一人の自立した人間よ」

ユーリア議員に睨まれる。だけど視線を外す訳にはいかない。甘んじて受け入れる他に。そのせいで睨み合いの状態になる。私は涙目ですが。

マダムが紅茶を一口飲み息を一つ。

「ユーリア議員。貴女の力が必要な。彼とイジツの世界にこれ以上の荒波が発生しない為にもね。それに貴女。その性格と言論のせいで自分にも責があると悔やんでいたじゃない」

「それは！ 確かにそうだけど……」

「ならばこれが始まりよ。自分を見つめ直して前に進む為にも」

立ち上がっていたユーリア議員が席に戻る。そのまま目を閉じ、しばらく沈黙が続く。

「アンタ。ハルトって言ったわね」

「はい。そうです、ユーリア議員」

「ユーリングの政治か経済か、言葉にして伝えられるかしら?」

「可能な限りは、ただどうしても時間が必要になりますよ?」

「いいわよ、アレシマまでそれなりに暇だから。私の喋り相手になりなさい。それで今

回はチャラにしてあげるわ」

「ありがとうございます」

思わず立ち上がり頭を下げる。辛い現実を突き詰めてくる相手から救いの手を差し伸べられた。これほど嬉しい事はない。先程の涙目もまた意味が変わった。

「ちよ、ちよつと頭を上げなさいよ！　まるで私が苛めてるみたいじゃない！」

「実際に苛めていた事には変わりはないでしょうに。しかも年下の子を相手に」

「ルウルウつ、もう！　いいから支度に取り掛かりなさい！　準備ができ次第、アレシマに向かうわよ！」

「はい、ありがとうございます！　支度をしてきます！」

失礼にならない早さで部屋から出ていく。急いで用意しなきや。

「……はあ、なんなのよあの子は」

「誰かさんと違つて素直で良い子よ」

「まるで私が底意地の悪い人間みたいじゃない」

「あら、自覚はあつたんじゃなかったかしら？」

「……ルウルウ」

第17話

自分の荷物を手早くまとめて飛行船へ。元々そんなにある物ではないから鞆にも余裕がある。

飛行船の迫力は凄い。間近で見ると尚の事。輸送だけでなく空母としても扱われる。なんとというロマンの塊みたいな乗り物だろう。

格納庫の出入り口付近にナツオさんを見つける。あちらも私を見つけたのか、手を振っている。こつちに来いという仕草で。

「お待たせしました」

「おお！ 今から震電を飛行船に積み込むから手伝ってくれ」
「勿論です」

以前ナツオさんに震電の動作確認及び点検を依頼した事がある。

結果は良好。機体そのものに異常は無く、補給すべき物は詰め込んでくれた。勿論、搭載されている五式三十耗固定機銃にも。四挺も搭載されているけど使う機会が来るのだろうか。

機銃を使いたくないだとか、撃ちたくないとか、そんな考えはない。イジツに来る前

に通り動作確認の為、地上で試し撃ちをした事があった。戦闘機に乗るのはまた違う迫力で興奮したのを覚えている。

問題はだ。何かしらの機会があつて空戦になり、相手の後ろに取る事が奇跡的に起こり、撃てよ！ 臆病者！ いや、これは正面からだ。そんな状況がはたしてやつてくるだろうか。

イサオさんとの模擬戦は全敗。キリエとの勝負も後ろをつかれたまま敗北したようなもの。今のところ、私の前に戦闘機が飛んでいた試しがない。そしてイジツにやつてきてからは一度も空へ飛ぶ事も無く、日々調べ物に追われている。

まつ、飛ばなくて済むならそれでいいや。遠出しなければならぬ時はコトブキに依頼を頼んでみよう。私は私の出来る事を一つずつ。目標を忘れるべからずだ。

「しかし震電に搭載されていたエンジン。興味深かつたぞ。液冷で配置も初めてみる位置だ。飛燕に積んでいるエンジンと似ているようで似ていない。苦労したぞおー」

じとおーとした目つきで片手を腰に当て、上目使いになるような体勢で見つめてくるナツオさん。その体勢のままポケットから折り畳まれた紙を取り出してヒラヒラと動かす。

あの紙には曾祖父が書き写した震電に関する事が記載されている。オリジナルは手元にある手帳に書かれているのだが、そのままナツオさんに見せた時は読めない箇所が

いくつもあつた。

イジツ語と日本語。そこへきて曾祖父の達筆という要素が加われば分けが分からなくわけ。

私がイジツ語を理解しているかと問われると、日常で使う文字しか覚えていない。だけれど毎日会う温和で爽やかな酔っ払いが私には付いている。ウイスキー一本で釣り上げる事に無事成功する。

そうして極短期間で出来上がったイジツ語のマニュアルをケイトに託してナツオさんの元へと届いたのである。

「エンジンを起動させた後のケイトは見物だったぞ。今すぐにも飛ばしてみたいって顔に書いてあつたからな！」

感情を表に出すことは無いケイトだが、あくまで表面上は。という事に最近気が付く事が多い。表情は変わらないが内側にある感情の動きは意外と流動的だ。

アレン曰く、レオナに預けた事で少しづつ今のケイトに近づいていった。とのこと。昔はもつと無感情だった。まあそれも可愛かつたけどね。

なんて話すアレン。お兄ちゃんをしていて少し驚いた。

「そのまま飛ばしてあげたかったですけど、残念なことに時期が悪かつたとしたか」

「そうだな。まっユーリア議員の手腕に期待して、無事にラハマに戻ってきたら飛ばし

てみたらどうだ。機体の色は変えて、だけどな」

ニカツとしながらも少しだけ悪巧みを考えていそうな笑い方をするナツオさん。釣られて私も声を押し殺すように笑ってしまう。

「ケイトに飛行試験を頼む時、アレンと一緒に見ようって約束してたんです。ナツオさんも一緒にどうです？」

これもありますよ。親指と人差し指を傾ける仕草。お前も段々とこちらに馴染んできたんじゃないか。おかげ様で皆さん濃い方ばかりなので。抑えていた笑い声は楽し気な声に変っていった。

飛行船が出航し、ラハマの町が少しづつ遠くなっていく。この世界に来て初めての遠出。地図だけで見れば端から端といっても問題ないぐらいの距離。

端と端。イジツの世界も丸い説として考えれば、西側にあるラハマから更に西に移動するだけで東側のイケスカに辿り着く事が出来る。

図書館に通い、その発想に行き着いた人達がいた事も知る。空には砂嵐。地上には危険な生物が盛り沢山。まるで行く手を遮るかのよう。ある一定の距離から突然と発生する。

戦闘機はもちろん、飛行船で突破も出来ない程の風。そして落ちればアノマロカリス

の毒ガス。やるだけ無謀だとその本には書かれていた。

そうとなればロケットを打ち上げて成層圏ギリギリ辺りからパラシュートで落下撮影を試みるのが比較的安安全でかつ命の危険も少ないか。

実行するにはどれもこれも、日本から持ち運ばなければ無理な話ではあるけれど。イサオさんの欲望を支配、独占からずらすにはまだまだ考えなければならぬなあ。

「さて、長い旅路の始まりよ。私の暇を潰して頂戴」

「それでは、ユーハングに辿り着いたイサオさんの話から始めますよ。マダムにさえまだ話をしていない事も含まれますがよろしいですか？」

「良い隠し玉持っているじゃない！ 聞いてあげるから早く始めなさい」

「イサオさんからの出会い。私の目的。イサオさんが知りたがっていた数々の知識に關する事。ユーハングという世界の在り方。」

これらを伝えては質問を返し、気が付けば外の景色は黒一色となっていた。

ユーリア議員は紅茶に手を付けて一口。

「少なくとも、私の政治信念に間違い無いということね。これが分かっただけでも貴方と話をしたかいがあつたわ」

「基本はとにかく話し合いです。対話による解決を最優先とし、武力を持って制する時

代はほぼ終わっています。が、それでも定期的に紛争は発生していますよ」

「そこは人間ですもの。感情だけを優先して行動を起こす馬鹿なんてどこの世界にもいるわ」

「後は結局、自分の身は自分で守れ。それが出来ないと潰れていきますね」

そんな事当たり前よ。そういつてユーリア議員が立ち上がり窓辺に顔を移す。

「空賊離脱者支援法だなんて言っているけど、現実の問題が山積み。生活援助、雇用、おまけに元空賊だから信頼できない。なんて声もね。それでもこのイジツで生存していく為にはそういった奴等の力も必要。何かするにも物資もお金も人手も足りない。空賊なんてやる暇があつたら少しでもイジツで生存確率を上げる方法を知恵を絞りだして見つけていかなければならないのに」

ふう、とため息を付くユーリア議員。その表情には少し憂いを帯びた顔。理想を現実にする為に進む女性が見える。何か手助けをしてあげたいという気持ちが湧くのはおかしい事だろうか。

イジツに来てから……イサオさんと出会ってからなんだかお節介焼きになっている気がする。あんまり良くないなあ。

ユーリア議員を見つめながら考え事。視線の先に居る人からの手招き。椅子から立ち上がった傍によおお。

「ハルト！ 貴方、イサオに付くの!? 私に付くの!? 今すぐここで決めなさい！」
両肩を掴まれたと思つたらそのまま揺さぶられる。そして唐突な選択肢を提示される。

そんな事をいきなり言われましても。一先ず両肩に掴まれているユーリア議員の両手を掴み返し、肩から引き離す。

揺れは収まったがユーリア議員の手に込められた力は変わらない。

尚も掴もうと猛襲してくるユーリア議員の手を捌きつつも、最後は私の体勢はエビ反りになり、お互いの指が絡んだ状態で静止する。

「付くとか付かないとかの問題でしょうかね!?!」

「問題に決まっているでしょう!! いま! ここで!! イジツの未来が決まるのよ!!!」

「私一人でそんな大事になりますかね!?!」

「現に貴方一人が現れただけでこの状況よ! なによりも穴の先。ユーハングで自由に動ける人間が目の前にいるのよ! 使えるモノはなんでも使わないと生きていけないわよ!!」

「ならイサオさんも使えばいいじゃないですか! 空賊相手でも手を取り合っていかないとマズインでしょう!?!」

「私は! あのカス野郎が!! 死んでも大嫌いなものよ!!!」

私に正論をぶち込んできた今朝までのユーリア議員はどこへ消えたのだろうか。自身が発していた理想とは真逆の事を口に出し、目を見開き、今なお手に力を加えて私を地面へと押し付けようとしている。

イジツは力こそパワーなのか。たとえ見た目美しい美女でも中身は肉食系なのか。草食系などと言われた世代にはキツイ。怖いのに凄く綺麗だと思ってしまう。

そのお顔が近距離にある事。イサオさんごめんなさい、何かを手伝うのならおっさんよりおば……お姉さんの方がいいです！

心も身体も折れかけた時、扉からノックをする音が聞こえる。ユーリア議員が何つ！と返事をする。少し驚いた声と共に所屬と名前を伝える相手。レオナさんだ。

「レオナさん！ たすけてえ！」

「ユーリア議員！ 失礼します！」

返事を待たずに扉を開けるレオナさん。中の状況を見て、扉のドアノブを握りしめたまま固まる。

「たすけてえ……たすけてえ……」

「ゆ、ユーリア議員。何をなさっているのですか!？」

「話し合いよ。一対一の真剣なね」

「とてもそうには思えません。と、とにかく一度、席に戻られては？」

チツと言わんばかりの態度で私を軽々と引き戻すユーリア議員。やはり力こそ神の世界なんだ。胸の鼓動が止まらない。ゆつくりと呼吸を整えてから二人の方に姿勢を向ける。

「今日はこれぐらいにしておいてあげる。コトブキも警備の交代が済んだのでしよう。一緒に夕食でもとりなさい」

「ハッ。了解しました」

失礼します。レオナさんと共に部屋を出る時に聞こえた、また明日。生まれてこの方、また明日の言葉に恐怖を覚えるのは初めての事である。

しばし無言で歩く。部屋から距離が取れた辺りでレオナさんが心配そうに声をかけてくる。

「ハルト、大丈夫か？」

「おかげさまで助かりました。ありがとうございます」

「いや、いいんだ。私は警備の交代報告に来ただけなのだから」

「それでも助かりました。もう少しで心も身体も折れそうでしたから」

「一体、何をしていけばあんな体勢で話し合いになるんだ……？」

「イジツの未来について。ちょっとだけお互いに譲れない部分が発生したのです。多分」

どう考えても後半は子供同士の駄々っ子としか思えない。私だってユーリア議員があのような行動に出るとは思わなかった訳で。ってレオナさん。何を立ち止まっついていらっしやる？

「ハルト……お前は自身の目的の事だけでなく、イジツの事も考えてくれていたのか」
「は、はあ……」

もしかしなくても盛大な勘違いをされている。そりやイサオさんがこの世界に再び戻ってきてても、政治は無理でも探索活動ぐらひは許されなかなあとかは考えてはい

る。
あの欲望の塊と行動力も上手く使いこなせればイジツの世界に利益をもたらす事になるのかもとは思っているが、そんな未来はまだ先の事で。ああ何故私は出掛けにあんな事を言ってしまったのだろう。

「レオナさん。そんなに真剣に受け止めないでください。本当に、軽く、表面上の話し合いですよっ。」

「それでもイジツの事を考えてくれたのは間違いないのだろうか？」

「それはそうですけど」

「ケイトから聞いたぞ。アレンの足に関してても治療する方法を模索してくれていて、器具の作成を班長に頼んできた」と

「あ、あれは確かにそうですが。私は医者でもないですし。同じように一時的に足が動かなくなってしまうた時の父親の記憶が蘇っただけでまだ治るといふ確定では」

「可能性が上がっただけでも十分だ。あのまま打開策も浮かばなずに歩けなくなる未来に比べれば」

レオナさんの前向きな姿勢。なんとというタフネス。バイタリテイ。

行動には移せても結果がいまだ何も生まれていない身としては尚の事、姿勢を正し、精進していかないといけない。

まずはザラさんにレオナさんの事で相談をしてみよう。物凄く前向きに勘違いされたのは過去にもあったのだろうか。

夕食。コトブキの皆と一緒に食べる事になった。いつも話は絶えないので、各々から私に話を振られた一部だけ抜粋する事にする。

「ハールトー。パンケーキ作ってよー」

「作つてと言われても既に食べてるじゃないですか」

「勿論、これも美味しいよ！ だけど前にハルトが作ってくれたパンケーキが食べたい！ リリコさんやジョニーともまた違った美味しさがあって好きなんだよー！」

前回、キリエにパンケーキを作る機会があった。実はその前にジョニーさんとリリコ

さんの元に向かい、パンケーキの作り方を伝授して貰ったのは秘密。

こちらら既製品をちよちよいっとした程度のパンケーキしか作った事がなかったのだ、これを同志に出した日には蹴りでも食らいそうな気がしたのだ。

二人は快く承諾してくれて、基本的なパンケーキ作りに没頭した。失敗品も成功品も食べきったのでしばらく食べたくない。

そのパンケーキ耐久レースの最中に、味を変えながら食べたりもした。バターは基本として、アイス、メープル、チョコレート、果実類にはたまたチーズを載せてみたりと。頭に覚えている限りのトッピングを用意した。

これが意外にも二人に対しても受けが良く、いくつかはもう少し試行を重ねていけば商品として出せそう。とまで言われた。

こうして唐突にも関わらず無理難題を引き受けてくれた二人に謝礼を渡そうとしたが、断られる。では三人で作ったレシピの中でお店に出せそうなのがあればそれはジョニーズサールのメニューとして使ってください。という事で手を打つ。

ジョニーさんにはこちらが貰いすぎていると言われるが特急料金だからと念を押す。リリコさんも援護してくれた。

そういう経緯の元、同志キリエにパンケーキを差し出す。見た目は分厚く二段のパンケーキにホイップクリームを載せた物。

「同志ハルトよ！ 見た目はごく普通のパンケーキとお見受けするが！」

「同志キリエよ、食べて頂ければ分かります」

うんむ！ といつてナイフを通すキリエ。その場にいたエンマとチカの目線は明らかに馬鹿かな。といったげである。

その視線もなんのその。キリエが口にパンケーキを放り込む。一口サイズが相変わらずでかい。

しばし食感を楽しんでいたのでろうが突然表情が変わり、飲み込む。そしてナイフとフォークを持ったまま机をドンと叩く。エンマが抗議するも聞こえぬふり。

「同志ハルトよ！ このパンケーキは一体なんだ！」

「同志キリエよ、お望み通りユーハングで流行りのパンケーキを再現させて頂きました。お口に合いませんでしょうか？」

「違う！ 逆！ 口に入れた時のふわふわ食感がしばらく経つと解けて消えていくの！
そう、あの雪解けのように……」

キリエつて雪見た事あんの？ あるわけないでしょう。ひそひそ話が聞こえる。

「つまり？」

「美味しい！ すつごく！ こんなパンケーキ初めて食べた！」

それを伝えた後はひたすらパンケーキを頼張るキリエ。あ、あぶねえ。二人に頼み込

んだおかげで出来た試作品が成功して良かった。

ころころと表情が変わるキリエ、味が気になるのかチカが一口と言ってもヤダ！ ケチ！ そんな言葉の応酬に辟易するエンマが自分とチカの分もお願いできないかと伝えてくる。ただし一枚で十分とも。

了解しましたと伝えてパンケーキ作りに戻る。その間にもキリエからおかわり！の声。これ850キロカロリー以上あるんだけれど、まあいいか。そんな出来事があった。

「作ってあげたいのは山々だけど、材料と少し下拵えが必要ですぐには作れないんだよ」「ええー久々に会えたのにお預けなのー」

「ま、まあアレシマに材料が売っていて、厨房を利用する許可をユーリア議員から頂ければまた作ってあげますから」

「ホントに!! 約束だよ！ 裏切ると凄い事が起きるよ!!」

「約束。約束です」

ヤッター！ と両手を挙げて喜ぶキリエ。あそこまで正直に喜びを表してくれると作り甲斐もあるものだ。

「ハルトハルト！ 海のウーミは読んだ!？」

「貸して頂いた本ですよ、お酒が好きなか二の出る話」

「そうそう！ それ！ ちゃんと読んでくれたんだね！」

「勿論。お話が描かれている本は色々想像が膨らんで楽しい気持ちになりますよね」

「うんうん！ ハルトから本物の海を見せてもらってから絶対に読んでもらいたかったんだ！」

本。といつても区分としては絵本に入るものだと思う。強欲でお酒好きの力二さんがお酒を独り占めする為に色々とした所、突然お酒が沸かなくなってしまったという話。

独り占めやみんなの迷惑になる事はしてはいけないよ。と伝えたい絵本なのかなと思いつながら読んでいた。

「あの本の他にもね！ 友達のミスかい子や、友達が作れないフグのウーミの話もあるんだよ！」

「続編があったのですか。いつか見てみたいですね」

「うんうん！ 図書館で見つけたら借りて持ってくるよ！ 一緒に読もう！」

「了解です。チカの解説付きとなれば楽しみですよ」

ニシシ！ という感じで笑ってくれるチカ。時々、可愛いの上限突破をあつさり飛び越えてくるものだからチカちゃん呼びをしまいたくなる。かわいいなあ。

「チカの海の話ではありませんが、ハルト。お願いがあるのですが」

「どうしましたか、エンマ？」

「私の友人に地質学などに精通している方がいるのですが。その方に是非ともハルトから見せていただいた海を見せて差しあげたいのですが……」

「ええかまいませんよ」

「頼んでおいて失礼ですが……相手の素性とかは気にならないのですか？」

「エンマの友人であれば大丈夫でしょう。それでもコトブキの皆さんは信用していません。身元不明の人間を歓迎してくれて、今もこうして一緒に夕食を共にさせて頂いて。少しでも恩返しをしたいという気持ちはいつでも持ち合わせています。なのでお気になさらずに」

まあ。と少し驚くエンマ。その後には深々とお礼を伝えられる。いえいえこちらこそいつもお世話になっていきます。これでは誰かの時の二の前だ。ああそうだ。

「エンマ、よかつたらこれをそのご友人に渡していただけないでしょうか」

「これは……あの時にみた海の写真？」

「ご友人と会える予定がいつになるかわかりませんから。無理矢理な方法で撮影したのではやけた写真になってしまいました。海の色やウミネコ達の姿は認識できると思う

のですが……」

「十分すぎますわ！ ああこれを早くタミルに見せて差しあげたいですわ！」

喜んでもらえてよかった。やっぱりこちらでもある程度、スマホを通さずに海を見せる方法としては有効そうだ。

袖をグイグイとされる感覚。ケイトだ。

「あの写真。見た事がある」

「あー、うー」

「確かアレンが持っていたカメラ」

「んー、まあ確かにそうであるんだけど……」

「何を引き換えに使わせて貰ったの？」

「……これです」

指で何かを掴んでいる仕草。バレバレであるが天下の宝刀、ウイスキーである。

「……あまり飲ませては駄目」

「はい、ごめんなさい」

「また必要な物があつたらケイトに伝えて欲しい」

「ケイトに？」

「そう、前にも伝えた。護衛が必要ななら最優先で予定を入れる。必要な物があるのなら可能な限りケイトが用意する」

確かに、その後には猛省しなければならぬ事も思い出して少し顔が赤くなる。

「そうでした。最初にケイトに相談すべきでしたね。ごめんなさい」

「次回からそうしてくれればいい。私もハルトの手助けをしたいから」

「……ありがとうケイト。お言葉に甘えさせてもらっちゃおうよ？」

「かまわない。むしろ何かあれば直に教えて欲しい」

「了解しました。何か困った事があつたら真つ先にケイトに相談に行くね」

こくり、と頭を下げるケイト。迷惑をかけまいと思つていた行動は、時には不安を募らせしきただけだったのかもしれない。

「それでだな、ザラ。ハルトはあのユーリア議員の気迫にも堂々たる態度で立ち向かつてだな……」

「はいはい。それは凄かったわね」

レオナさんが私の記憶にない出来事をザラさんに語っている。私はレオナさんに涙目になりながら救援を助けてたはずなのに、何故か真つ向から意見のぶつかり合いをしたかの如く語る

ザラさんはそんなレオナさんの語りを受け流すように相手をしている。時々こうしたスイッチが入るのだろうか、手慣れている。

視線が重なり、頬を軽く搔くような仕草をするザラさん。あれはきつと、レオナが勘違いを始めちゃってごめんね。という事を伝えたいのだと思う。二人の付き合いは長そうだから、ある程度は推測出来るのだろう。こちらこそすみません。の意味も含めて頭を下げて返す。

賑やかな夕食も終わり。お互い各々の部屋に戻る。私は一人部屋を貸していただいている。こうした船では部屋数も限られているだろうに有難い事である。ユーリア議員に感謝しないと。

布団の中に潜り込み、本日の営業は終了。となればよかったのだがこういう時に限って近くなる生理現象。我慢をしたところで熟睡が出来るわけもなく手洗いに向かう事になる。

無事に用を足せて心も身体もスッキリとした。さあ寝るぞと部屋へと足を向ける途中、壁に掛けられた物を見つめている女性がいた。

「ザラさん？」

「あら、ハルト君。こんばんは」

「こんばんは。つてほんの先程まで一緒にいたじゃないですか。何を見ていらしたのです?」

「うふふ。ウキヲエが飾られていたの。少し気になっちゃって」

ウキヲエ? 聞いた事がある単語によく似ていると思ひ、絵を眺める。うん、浮世絵だ。絵画様式までイジツに伝わってきたのか。

「なんだか見慣れた感覚がしますよ」

「ユー・ハングのホクサイヤクニシゲといった人達が描かれた絵よ。やっぱりそちらでも有名な人なのかしら?」

葛飾北斎、歌川国重だろうか。絵に携わる事をしていなくても名前は見た事がある有名な人だ。その人達の作品がイジツにも流れていて影響を与えているのだろうか、目の前にある絵は浮世絵によく似た画風である。

「こちらの生まれの人なら一度は何かしらの機会で知る名前ではありませんね」「やっぱり。詳しくは知らないけれど、素敵な絵ですもの。特にこの絵はね」

この絵に描かれているのは風景。……ラハマ? 最近になって寝ぼけて間違える事が無くなった、毎日見ている景色に良く似ている。

滑走路、格納庫、収められている自警団の戦闘機。建物の縫い目から高台といった街並みまで詳細に描かれている。

「私も詳しくは分かりません。ですがこの絵からはなんて言えбайいのでしようか……愛情のようなモノを感じます。一つ一つに想いが込められた。忘れまいとする意志とでもいうのでしょうか」

「ふふふ。本人が聞いたら喜んでくれる様子が目に浮かぶわ」

「ザラさんのお知り合いで？」

「ええ。ちよつとした縁でね。元々は空賊で女帝なんて言われてた子なのよ」

「空賊ですか!? それはまたなんというか、やつぱりドンパチ交わした事が縁で？」

「否定できないのが悲しいかなあ」

少し恥ずかし気に顔を崩して傾けるザラさん。月明りも相まってその姿も美しい。

「ハルト君は絵に詳しくくない。なんて言っていたけれど、ホクサイやクニシゲという人達がどういった方なのかはご存知？」

「んー……。ホクサイに関しては生前から故人になった後の今でも、作品と共に語り継がれる人物で詳細に記録が残っている方なのですが、クニシゲに関しては作品以外はまだ謎に包まれている事が多いですね」

「まあ……亡くなられていらつしやつたの」

「ええ。二人とも。およそ二百年ほど前に、ですけどね」

ザラさんが自分の額に手を当てる。具体的な数字が出ると日本とイジツの世代のズ

レミみたいなモノを感じざる負えない。

「そんなに昔の人だったの……」

「私の曾祖父も生まれていないぐらいですから、歴史の一部として扱ってもおかしくないかと」

「ユーハングは壮大ねえ」

「私からすればイジツの方が壮大な世界だと思えます」

「ユーハングの言葉にある、隣の芝生はつて事かしら」

「まさしくその通りだと思えます」

絵を前にして二人で小さく笑う。ここが良い、ここが悪いを見つけるよりも、ここが好き。で突き抜けたいものである。

「そうだ、ザラさん。先ほどのレオナさんについてなのですが」

「レオナは凄く真面目で責任感があってね。それでも時々だけ暴走してしまう事があるの」

「ああやつぱり、大げさに伝えてたものでしたから、勘違いされていないかと気になって仕方ありませんでしたよ」

「ふふふ。でもありがち間違いないのかも。つて聞いてて思ったわ」

「いやいや！ もう！ ザラさんもレオナさんも人が悪い。私はまだ何も成し遂げてま

せんよーだ」

不貞腐れるように少しだけ顔が膨らむ。大きくなつた頬つぺたにザラさんの指が優しく触れて、空気が抜ける。また二人して笑う。

「それじゃ。ハルト君が無事に目的を果たせたら、お姉さんがいっぱい褒めてあげましょう」

「それ、物凄くやる気が沸いてくるのですが」

「今からでも褒めてあげましょうか？」

「好きな物は最後まで取っておく主義なので我慢します！」

頑張る子は大好きよ。なんてまた調子に乗つてしまいそんな事を言うザラさん。我慢、我慢です。目的を達成した後にご褒美が確定しただけでも十分すぎるのです。欲しがりません、勝つまでは！

幸せの時間も終わり、部屋へ戻る事になった。おやすみなさい。寝る前の挨拶を誰かに伝えられる事はそれだけで幸せな事なのだ実感する。

翌日、再びユーリア議員と腕の掴み合いの状態になり、レオナさんに見られた事以外は順調に進むのであった。

第18話

アレシマ。

このイジツにおいて、空を利用する運輸事業、用心棒、飛行隊などを登録及び管理する航空運輸局なるモノが存在する町。ギルドかな？ ギルドだよ？ そうだよね。

町の真ん中には大きな通りがあり、その先にある立派な建物はホテルだそうだ。本日は行われる評議会の会場でもある。

過去にイサオさんとユーリア議員が会談を行った場所。その際には所属不明の部隊による襲撃が発生し、イサオさん自身も戦闘機に乗り参戦した。

そんな事もあり、町としてはイケスカ動乱が発生した際にはイケスカ連合側に付いてきた。所謂イサオ派の町。

しかし、イケスカ動乱により反イケスカ連合から襲撃を受け、被害を出した。イジツを二つに分けた大戦だった事が伺える。

それでも比較的小規模で済んだのは町の自警団、アレシマ市立飛行警備隊の存在と町議会の手腕によるものだろうか。

イサオさんの謀略が暴かれた後の行動、イサオ派であった町が今回の議題であるイサ

才登場の噂の真相を明らかにすべく、評議会の会場に名乗りをあげる。これはひよつとしてまだ……。

これから行われる評議会はラジオでも聞ける事になっている。コトブキの皆と聞くべきではあつたのだが。

評議会開催の前日。議題に挙げられる震電を各町の代表者たちに披露するべく準備をする。

人によつて様々な表情。機体を見るのも嫌なのか、苦々しい顔をする人、イサオさん本人の機体でない事を祈る人、様々ではあるが大半は拒絶気味。

その人達を相手に立ち回るユーリア議員。この姿を見てしまうと頭が下がる思い。でも飛行船での出来事を思い出すと素直にそう思えないのがまたなんとも。

ユーリア議員から合図が出る。震電のエンジンを起動させるべくイナーシャハンドルを手取る。毎回思うのだが、曾祖父しかりイジツの人々しかり、よく一人で回せるものだと感心してしまう。

私がイナーシャハンドルを持っている。では現在、操縦席にいるのは誰か、ケイトである。コトブキ飛行隊という知名度。その飛行隊の隊員でイサオさんを撃墜した経験もあるケイト。

エンジンが始動する。イジツには存在しないエンジンが唸りをあげて周囲に響く。この三つを最大限に生かし、噂の払拭に努めるユーリア議員。この機体、私が乗ってき
たんですよ。ふふふ……。

仕様もない事を考えるが、代表者達の雰囲気は先程とは変わり、所詮は噂、眉唾物だったかという空気になりつつある。このまま明日の評議会まで維持し、任務完了。になればいいなあ。

話を元に戻す。今まさに評議会が開催され、その模様がラジオを通じて町全てで聞ける事になっている。

「ハルト。ユーリア議員の演説は聞かなくてもいいのか？」

「前日にあれだけの手応えを感じ取れば問題ないかと」

「だが後で聞いていたかしら、とユーリア議員に問い詰められるのではないか？」

「その時は全力で感謝を伝えますよ」

それは誤魔化しているだけなのでは？ 眉毛を八の字にして困り顔のレオナさん。このタイミングで出かけないといけない事があるのです。

「ハルトー、出かけるのー？」

「初めての町ですから。図書館に寄ってユーハングの事を調べてこようと思ひまして」

「あーなるほどねー」

「待機命令なんて無ければハルトとウーミの本を探しに行けたのに！」

「仕方ありませんわ。我々の任務は護衛ですから。いつでも出撃出来るように待機して
いなくては」

「目的の物が見つかる事を祈る」

「気を付けてねー」

ありがとう。それじゃ少し出かけてくるね。

いつてらっしゃーいの声に送られて町に出る。ガイドマップを貰っておいたので
書館には迷うことなく着きそうだ。

それから数時間後。時折聞こえていた街中のラジオでユーリア議員の淡々とした声
で震電とイサオとは因果関係は無し。決定でよろしいですね。その言葉に異議なしの
声が聞こえた。

ありがとう。ユーリア議員。貴女がいなければ私はどうなっていたか検討もつきま
せん。飛行船に戻ったら改めてお礼を伝えよう。

私はその間に図書館で調べ物をしていた。ユーハングの残した工廠で未だに戦闘機
が作られている事、閉鎖され跡地として残されている場所。

意外ではあったが文献にはそれなりにイジツのユーハングについてが記載されていた。

ただ私の知りたい内容は残念ならなかった。やはりイケスカにいる執事さんに直接聞かなければ分からない部分なのだろう。

それでもユーハングの事が少しでも知れて満足である。遠出して、その町にしか記載されていない本というものがやはりあるのだなと実感。

飛行船に戻ろうと足を動かすと、どこからか大声が聞こえる。なかなか汚い言葉を使っているが……女性の声のようだ。いくつかの足音と共にこちらに近づいてくる。

嫌な予感。それを考える暇もなく突如として表れる男性とそれを追う女性二人。

狭い路地、追われる男性、追う女性二人、さあどうなる。何事もないように端っこに避けまますよ。

「おい！ そのガキ！ そいつを足止めしてくれ！」

「クソつ、ガキが！ 俺の邪魔をするんじゃないやねえ！ そこをどけ！」

背の小さな女性からガキ、野郎からもガキ、うん。分かっていたけど私は背は低いし童顔で成人には見えないよね。

ならせめて男性に憂さ晴らしをして心を落ち着かせよう。とはいえ正面から止めら

れる訳もない。素直に一度、避けるように移動する。

男性が油断したのか、私を避けるようにして足を早めて通り過ぎようとする。だが許さぬ、誰しも身体的特徴で触れてはならぬ箇所があるのだよ。

私の足元に落ちていた木の棒を男性の足に向けて蹴り上げる。男性は自分の足と足の間にもう一人の女性が男性を確保。何がどう理由で追っていたかは知らないが、こういう時はさっさと逃げるのが一番。自警団だったら面倒な取り調べも発生するだろうしね。

そんな訳でさようなら。はい無理でした。掴まれた片腕には細腕が見える。見た目とは違い鉛のように重く、身動きができない。

「いやーさつきはガキだなんて言つてすまなかつたな！ オマエが足止めしてくれたおかげで捕り逃さずにすんだぞ！」

「さいですか、私はこれで用事があるので失礼させて頂きます」

「さてよ！ このまま返したらゲキテツ一家の名が廃る。何か礼をさせてくれ！」

「何かって男性が勝手に転んだだけで何もしてないですつてば」

「そんな事があるか！ 走ってる人間の足の間に木の棒を蹴り飛ばして転ばせられるヤツをそのまま放っておけるかよ！」

会話の間にも、もう一人の女性が男性を拘束したらしくこちらにやってくる。

「突然でごめんなさいね。助かりました。私としても何かお礼をさせて頂きたいと思っ
ているのですが」

「とは言われましても……」

「だあああ！ いいから好意を素直に受け取れ！ ガキの礼ぐらいならいくらでも叶え
てやるよ！」

「フィオ！ もう少し言葉を慎みなさい！」

ナーツハハハと笑うちびつ子。つい目を閉じてしまう。私より小さな子にガキン
ちよ呼ばわれ。私の背丈と童顔が何をしたというのだ。涙腺が緩んできた。素直に気
持ちを伝えてさっさと離れよう。

「フィオ？ さんつて言われてましたね。お礼が浮かんたのですが」

「お！ なんでもいいぞ。あんま無茶なのは流石に無理だけだな！」

「身長を伸ばしてください」

場が凍り付く。当たり前だ、身長を自由に伸ばせられたら苦労しない。涙目になりな
がら続ける。

「無理でしょ？ これでも私、成人しているんですよ。平均値より低いですが、顔も童顔
で幼く見えるけど、成人しているのです。子供ではないのです。ガキンちよにしか見え

ないでしょうが成人なのです。お分かり頂けたでしょうか。それでは失礼させていただきます」

八つ当たりをしてみました。でもそれだけ心にグサグサときたの。辛い時に逃げちや駄目なんて言われるけどもう駄目なの。

飛行船へと踵を返す為に歩みを始めた途端、また片腕を掴まれる。先程以上の力で。

「ちよ、ちよつと痛いですよ！」

「おまえも……」

「おまえも?」

「見た目で苦労してだんだなあああ」

先程までの狂犬のような姿のフィオ? さんの姿とは思えない程にうって変わって

涙目でこちらを見つめてくる。

うう、うう。と泣きじやくる姿になっている。流石にいた堪れなくなつてハンカチを取り出し、綺麗な瞳から流れ落ちる涙を拭き取っている。

自分の発言には後悔しか浮かばない。女性を泣かせてしまい自己嫌悪に陥る。

ありがと。その言葉が聞こえたので拭き取るのを止めてハンカチを手渡す。自分で細かな場所を拭き始めた。

「ごめんなさい。私もまだ子供かと思っていました」

「いえ、こちらこそすみませんでした。自分の気になっている箇所を突かれて、苛立ちで八つ当たりをしましてしまい申し訳ございませんでした」

しばし頭の下げあい。こればかりは軽率な発言をしましてしまい後悔しか浮かばない。

「なあ、お前の名前はなんて言うんだ？」

泣いていた女性に唐突に名前を聞かれる。少し落ち着いたようだ。

「ハルトと申します」

「私はフィオだ。こっちにいるのはローラ」

ローラと呼ばれたもう一人の女性が会釈する。

「ハルト。濟まなかった。私もよく見た目で判断される事が多くてハルトの気持ちは十分、分かっていたはずなのに気づけなかった」

「私も言い過ぎましたから気になさらずに」

「でもハルトは初対面の私を見ても子供扱いをしなかっただろうか？」

「そりやまあ、フィオさんが子供かって言われたら違うでしょう」

そんなご立派な物をお持ちの方が子供な訳がない。そう、背丈に似合わず凄いモノをお持ちの女性なのだ。フィオさんは。

そのフィオさんはキョトンとした顔でこちらを見つめている。目つきは鋭いのに可愛い。

「どうしてそう思ったんだ？」

「どうしてって、私に感謝や謝罪の言葉を告げられましたし、何より子供であればお礼をする。という言葉は出てこないかと」

ホラを吹く。本音を言える訳がない。フィオさんの顔から少しでも視界を外すと山が見えてしまう。イジツマウンテン。貴女の山から朝日を眺めたい。

突如、両肩を掴まれる。邪な思考が読まれたのかと思つたがそんな訳もなく。最近まつたく同じ経験をした出来事が頭にちらつく。

「ふ、フィオさん！ いきなりなんで肩を掴まれてどうされたただだあああ」

「気に入った！ ハルト！ 私と来い！ 部下にしてやる！」

「突然なにを言っているのか分かりませんが揺さぶるのはやめてくださいよー」

とても嬉し気な笑い声と共に私の体はフィオさんによつて揺さぶられる。これはユーリア議員の時とまつたく同じではないか。それ以上に体格の割に力が強くて抗えない。イジツの女性はバケ……。

さすがにこの状況を良しとしないのか、ローラさんがフィオさんを後ろから引つ張り、放してくれた。月下美人の長髪と白をベースにした縦縞のスーツ。まさに女神。感謝と共に拝んでしまう。当の本人は困り顔ではあるが。

「フィオ。突然そういう事を伝えてもハルトさんが困っていますよ」

「だがなローラー！ この先、ゲキテツ一家が勢力を拡大させる為にもハルトのような人材は必要だろう！ 何より私と初対面であつても子ども扱いをしなかつたんだぞ！」

余程そこが重要なのか。気持ちには痛いほど分かりますけど。ローラーさんも思考するように口元に手を当てている。これはまずい。レオナさんの時の様に、話を受け流すか、誤解を解いてくれるであろう役の人まで考え始めてしまった。

図書館から中央通りまで一曲がり、後は人混みに紛れれば撒けるか。何より私に山は無い。走り抜ければ勝機はある。

一息入れて覚悟を決める。その様子を誤解したフィオさんが少し嬉し気な表情を浮かべる。キラキラな笑顔。物凄く心がチクチクしてきた。

「フィオさん！」

「おう！」

「ごめんなさい！」

フィオさんとローラーさんが呆気にと取られている間に全力で逃げ出す。後ろからフィオさんの待てやゴラアの怒声。ヤバイ。次に捕まったら二度と帰れなくなる！

人混みをうまくすり抜けて中央通りへと向かう。だが最悪のタイミングで中央通りへの道は自警団によって閉鎖されていた。評議会が終了して代表の人達が各々の飛行船へと戻ろうとしている最中だったのだ。

これはまずい。更に横道へと逃げ込む。一瞬振り返ると見えたモノは、齒を剥き出しにして追いかけてくるフィオさん。それを追いかけるようにローラさんも走っているが、男性を捕まえようとしていた時のような動きではない。周りに注意を払いながら走っているようだ。

ローラさんよりもやや赤みがかかった洗柿色の長髪、揺れるポニーテール、そしてマウントイジツ。うたれるなら滝でもなく、警策でもない、アレがいい。

全力疾走でアレシマを駆け抜ける。捕まったら最後、死んでもイジツから離れまてん。が始まってしまう。私にはまだしなくてはならない事があるのだ！

また一つ、道を曲がり走っていると手を振る人が目に写る。私？　と思いながら視線を向けると自分の後ろ側を指で指す仕草。まさか匿ってくれるのだろうか。

このままではらちが明かない。一筋の希望に託し手を振る人の元へ駆け込み、壁際に小さくなる。

その直後に聞こえるフィオさんの声。フェードアウトしていく声によくやく一息を入れる。危なかつた。捕まっていたら別のお話が始まる場所であった。

今は駄目だ、目的を果たさなければならぬ。

匿ってくれた方にお礼を告げるべく顔を上げる。そこにいたのは女性二人。これはまた美しい女性。イジツ……の思考が回る前に視界がとらえたのは、大胆に前開きにな

れた服にリターントゥマウンツイッツ。下着、いや水着に近い。そうじゃねえ！

怒涛の展開と息切れにより思考がうまく定まらなくなってきた。正座の体勢に入りお礼を述べる。

「大変助かりました。ありがとうございます」

「いいのいいの！　ホラ、そんな所で座つてないで椅子に腰を掛けたら？」

ポンポンと空いている椅子に手を当てながらお誘いをしてくれる。少し落ち着きたいという思いもあるのでご厚意に甘えさせてもらう。もう一人の女性が飲み物を注文してくれていたらしく、目の前に紅茶が出される。柑橘系の香り、口につけた時の紅茶の渋みが心も身体も一息をつけさせてくれる。

「美味しい」

「それはよかったわ。貴方、紅茶を飲み慣れているわね」

「どうしてそう思いました？」

「香りを楽しみ、最初の一口の後、一息入れていたじゃない。優雅で華麗な、普段から飲みなれている人の楽しみ方よ」

顔を少し傾け、微笑みながら伝えてくる女性。銀色の髪がサラッと流れるように動く。

髪の色と対比しているにも関わらず惹かれあう褐色の肌。先程のローラさんとはま

た別の美しさを放つ人。

対比を崩さない為か、勝色の上着とスカート。先端にある白いフリルがとても良く似合う。

「落ち着かせてくださる為に柑橘系の香りがする紅茶を選んでくださったのでしようか。アールグレイ?」

「まあ、品種まで分かるのね」

「時々ですが飲む習慣がありまして。申し遅れました。私はハルトと申します」

「私はリガル。そっちにしているのはロイグよ」

ハリーと手を振り答えてくれるロイグさん。透きとおった桜貝色の髪。長い髪を片側で結んでいる。身体の線がでやすい衣服を身に着けている。どうしても目線が行きがちな大きな山があるが、それ以上に羨ましいのが椅子に座っていても分かる足の長さ。長身だあ。

「ねねっ! ゲキテツ一家に追われるなんて何をしでかしたの?」

好奇心旺盛に聞いてくるロイグさん。前のめりになって聞いてくるのだから顔が近い。イジツのひととの距離感はまだに慣れない。

「追っている人がいたみたいで、私の目の前を通り過ぎる時にちよつと」

「貴方が追われていた訳ではないの?」

「はい。最初は私以外の人を追っていたのですよ。その時に止めろ！　って言われたので手伝いをしまして」

頼む！　そいつを止めてくれ！　世界を救ってくれ！　そんな大げさな事ではないけれど似たようなものだよねと思う。

「では、なぜハルトが追われる身になったのかしら」

「何故かフィオという方に気に入られてしまい、部下になれ！　という拒否不可能な状況になってしまいました」

「へえ！　あの狂犬に気に入られるなんて。余程の事があつたのね！」

興味津々といった感じで見つめてくるロイグさん。同族と出会えた喜びが原因だなんて流石に悪い気がして言えない。

紅茶に口をつける。喉が渴いていたせいもあつて既に何度か繰り返していた為にこれでカップの中身は空になる。これで飛行船に戻らないと。

店員さんと呼ばうとしたリガルさんに声をかえる。

「紅茶、ご馳走様でした。すみませんがこれで失礼させていただきます」

「あら、もう行ってしまふの？」

リガルさんは机に肘を置き、絡ませた手先の上に顎を置いて顔を傾けこちらを伺うように見る。行儀だけでいえば悪いのに視線が外せない。その間にロイグさんが追加注

文を済ませてしまふ。

「はい！ もう注文しちゃったから終わるまでは駄目よ」

「いやつ、本当にこれ以上のご厚意に甘えるわけにはいきませんって」

「なら尚の事、私達を楽しませてほしいわ」

楽しませるっていわれても。同族の話はするべきではないし。何か他の話題が無いかと探る。

んーと考えながら思いついたのは、図書館でも見かけた海のウーミの話。ギリギリセーフかな？ アウトかな？

「お二人共、海ってご存知ですか？」

「海？ 唐突ね。勿論知っているわ。昔イジツにも海があつて見渡す限りの水があつたそうよ」

「オサカナ達も自由に動きまわっていたとかね！」

「そうです。その海です。その話でよければ出来ますよ。楽しいかは分かりませんが」

「聞きたい聞きたい！」

ねつりガル！ と顔を合わせるロイグさん。ええ、と返すりガルさん。

そういう事で少しだけ、日本の海について喋る事になった。

大地が割れ、海は裂け、空に雷鳴が轟く。そんな事はまったく無く。フェリー上からみた光景を言葉に変換して物語として伝える。こんな話で楽しめるのだろうかと不安になったが、二人は楽し気に聞いてくれる。良い人達だ。

「という事があつたそうじゃ」

「……なんで最後は老人口調なのかしら」

「語り部の役目は大概は老人だからかな。その方が夢といいますが浪漫が感じられやすくなるかと思ひまして」

確かに。なんて腕を組んで頷くロイグさん。更に強調される部分があつて困る。リガルさんはその様子を見て少し呆れ顔。

「それにしてもまるで見てきたかのような語り方ね」

「……まったく見ていないという訳ではないのですよ」

「どういふこと？」

助けて頂いたお礼も出来ていないし、これぐらいはと思ひポケットから写真を取り出す。アレンから借りたカメラで撮った幾つかのぼやけた写真の一つ。水面を跳ねるように泳ぐ魚達の姿が映し出されている。

机に置かれた写真を覗き込むお二人。気づいたのか、同時に喋り始める。

「これってもしかして海!？」

「この生き物はオサカナ!? ハルト! これは一体どういう事!?!」
「同時に聞かれても答えられませんってば!」

あと近いって! もうちよつと離れて! コイントスを初めて質問の順番を決める二人。どうやらリガルさんのオサカナの話かららしい。

「ハルト! これはオサカナなのね!?! ここは湖なの!?! 海なの!?!」

それ、私が聞いたかったのにーと口を三角形に変えるロイグさん。

「海です。それは間違いないです」

「まあ! 地平線の先まである水。そこを飛び跳ねるオサカナ。なんて美しい光景なの」

うつとりという言葉が似合うリガルさん。写真を片手に自分の世界へ。

その間にロイグさんが耳打ちをするように顔を近づけてくる。

「それにしてもあんなオタカラ。どこで手に入れたの?」

「それなりに訳アリ品です。あまり出所は探らないで頂けると助かります」

「ふーん。狂犬が気に入るのも分かる気がするわ」

それは勘違いですよ。フィオさんの場合は同族からによるもの。ロイグさんが考えているのはきつとブツを手に入れる手腕。訂正する理由もないのでそのままにしますけどね。

「今も写真を片手に世界を旅立っているリガルさん。今日は長いわね。なんていう眩
き声が隣から聞こえる。」

「よければその写真、差しあげますよ」

「そんな！ 貴重な物を貰う訳にはいかないわ」

「えーリガルばかりずーるーいー。私には何かないのー？」

今度は口を尖らせるロイグさん。表情がコロコロと変化する。

とはいえ他に渡しても平気そうな物つてあったかなあ。身体を軽くポンポンと触り
ながら考えていると、手に当たる物があつた。これならまあいつか。

「ではロイグさんにはこちらを差しあげます」

「えっ！ 本当にくれるの!？」

「説明ナシだとただの筆記用具ですけどね」

「これって万年筆……よね？」

ロイグさんの手の中にあるのは万年筆。年季はあるがまだまだ使えるシロモノ。

「そうです。とはいえ、そのままだとごく普通の万年筆で終わってしまいますが」

「コレにも何かオハナシでもあるのかしら？」

「海ほど規模の大きな話ではありませんけどね」

式守さん家の代々伝わるお話である。初代は曾祖父なのだから想像が何も膨らまな

いのが玉に瑕。本人に聞けば良いではないかで終わるお話。

曾祖父が当時の初任給と色々を合わせてこの万年筆を購入し、様々な想いを書き連ねた事。その中には奥さんとなる方への恋文も。

その想いは無事に祖父へ引き継がれる。祖父から父へ。そして成人を迎えた子の私に父から託されたというお話。

始めの話に戻ってしまうが、初代も、引き継がれてゆく人達も存命なのである。想像の膨らみようもなく、渡された時でさえも、へー。の一言で終わるぐらいに。

時代は少子化社会。たとえ一撃必殺の武器を持つていようが使えなければただの筆記用具。そう、社会が悪いのだ。わたしわるくないもん。

「とまあそんなどこにでもある話でございます」

「そんな事はないわ！」

机を叩く音と同時に立ち上がるロイグさん。令嬢かとも思える凛々しさと気品に溢れたモノが辺りを包む。

「ハルトのご先祖から連なる大切なお話よ。どこにでもあるお話ではないわ」

物凄く大真面目な返事をいただく。リガルさ……ん。視線の先には紅茶を飲む美しい人。目線が合い、微笑みをくださる。ご褒美をありがとう。違う！

「いや！でも本当に大したオハナシじゃないんですよ。きちんと伝わりすぎて想像が

膨らまないといひますか」

「尚の事。ハルトの家の方々が大切にされているという事よ！ そんな素敵な物を受け取る訳にはいかないわ」

私の手を取り、掌に置かれる万年筆。受け取り方によっては、貴方、重いのよ。である。凹む。

「なら、ハルトに手紙を書いてもらえばいいじゃない」

返された万年筆を受け取り。仕舞おうとする時にリガルさんが突拍子もない事を言う。どういふ事だ。

私がロイグさんに手紙を書く。手紙を書く。書く。ん、恋文を書けつてこと!?! ロイグさんも同じ発想に至ったのか、顔を赤らめている。まさかのワンチャン有りか!?!

ここでいかねば式守家の名が廃る。手帳を取り出し文字を書き連ねるべく考える。人生最大の分岐点。これがラストチャンスだ、走れるところまで走ってみる！

手帳に文字をしたためる為、万年筆を走らせようとした瞬間。鐘が響き渡る。その瞬間思い出す。門限の事を。

マズイ、カーチャ……ユーリア議員に滅茶苦茶怒られる。評議会終了時に代表の人達が帰るあの時点で手遅れだった気がしなくもないが、一刻も早く戻らなければ。

「すみません！ 本当に帰らなくてはならない時間になりました！ 紅茶ご馳走様でし

た。匿っていたきありがとうございました！」

それでは失礼します。何を書いたか記憶にない手紙をロイグさんに渡して飛行船へと走り出す。

今日は何という日だ。走つてばかりだ。幸せな時間もたくさんあったが少し落ち着きたい！

「どうしよう、リガル。私、初めて貰っちゃった……」

「どうしようも何も、受け取ったなら読んであげるのが筋じゃないの？ 貴女だってよく相手に送り付けているでしょう」

「あれは予告状であつてお手紙ではないわ……」

「似たようなものでしょ。私は海の写真を見つめるのに忙しいの」

この子は予告状を相手に送り付ける事は出来ても、人から貰った手紙を読み上げる事すらできないのかしら。

そもそも、私は手紙を書いてもらえばとは言つたが、恋文を書けとは言っていない。歴史と伝統がある物を引き継いだ素晴らしい万年筆で感謝の意を表した手紙でも書けばいいじゃないと思つていただけだ。……少し言葉が足りなかつた事は認めるわ。二人とも似た思考をしていたのは誤算だつたけれど。

三角形に綺麗に折られた美しい手紙をロイグは未だに見れず、両指の人差し指をツンツンしていたりクルクルと回してモジモジとしている。こういう所は可愛らしいのよね、この子。

「早く開けなさい。お店も閉まる時間よ」

「でもでも！ 初めて頂いた手紙だし、拠点に戻ってからゆっくりと読みたいなっ、て思うわけで」

「い・い・か・らー！」

「はいい！ 私の気迫に押されて手紙を解いていく。最後の折りを開けば文が読めるところまでできた。目を閉じて深呼吸をするロイグ。早くしてくれないかしら。」

意を決して目を開け、手紙に視線を写す。沈黙が続く。何が書かれている事やら。

「ねえ、リガル」

「なあに。自慢なら違う子にしてちょうだい」

「そうじゃないの。……読めないの」

「はあ？ 手紙を見せてもらおう。確かに読めない。これはイジツ語ではないのかしら。」

「それでも最初の字は見た事あるわね」

「月光の月の字よね。それは分かるんだけど続きがなんて書いてあるのやら」

「はあ……丁度いいじゃない、震電を盗むって気分でも無くなっちゃったのだし。抛

点に戻って手紙の解読でもしましよ。それもロマンでしょ？」

「！ そうね！ それじゃ帰りましょうか！」

受け取った手紙を嬉しそうに胸元に入れる。そんな所に仕舞うと無くすわよ。本来の目的からは大きく外れてしまったが、予想外の出来事が起きて、飽きる事のない一日だったわ。

第19話

言うまでもなく、こつ酷く怒られた。

ユーリア議員が飛行船の搭乗口で仁王立ちをしていたのである。頭によぎる鬼の文字。ああいうのはな、鬼神っていうんだ。

最初はさり気なく表れて、お疲れ様でーす。と声をかけて素通りをしようとした。だがそれは怒りを増幅させるだけであつた。

襟首を掴まれてユーリア議員の目の前へと引つ張り上げられる。しかも片手で。鬼の冒険はここで終わりを告げる。

夕食までありとあらん限りの説教と罵倒を食らう。ごめんなさい。もう遅刻しません。門限も守ります。ユーリアかわいいよユーリア。解放してえ、おねがいい。

その後、第二段としてレオナさんにも怒られる。遅刻厳禁！ 遅れるならせめて一言連絡を入れる事！ コトブキ飛行隊の名を落とすしめるような行為は隊員として断じて禁止だ！

迫力もあつてかその時は何も考えずに、はい！ と返事をしたが、私は隊員ではない。両名ともご心配とご迷惑をおかけしました。

翌日、イケスカへと出航する飛行船。道中はコトブキ飛行隊が護衛を担当する。イケスカ近郊からはガドールの方々と交代。

イケスカ動乱においてコトブキ飛行隊という存在は、悪夢の象徴かそれに近いモノであると感じた。イケスカ連合の本拠地で代表のイサオさんをイジツから消したのだから。

現在は自分達の立ち位置を決めるべく、内部闘争が活発中。町は二つに分かれ火に包まれている。などというわけがなかった。

武力で統治をしようとしていたイサオさんの時の反動なのか、議会でエライ人達も今日も元気に口論を交わす。お互いに譲れない事が発生すると、空戦による決闘が始まる。

その裏側で発生する賭け事。震電に積んだエンジンを作り上げた国のような事をしてる。

私はユーリア議員と共にイサオさんの執事である方に会う為、街中を移動中。動乱によつて破壊された建物がいくつも見える。だが人並みは絶えない。

イジツ一、大きな町だとイサオさんが言っていたのは過言では無かった。

コトブキ飛行隊の皆は船内で待機。キリエとチカに文句を言われてしまったが仕方

ない。本気で言っている訳ではないと思うが、ラハマに戻ったらお互いの好きな食べ物を作る事を約束する。

カレールーって無いよね？ ジョニーさんとリニコさんにまたお願いしよう。

「ハルト。腹は括ったかしら」

「緊張でお腹が痛くなってきました」

「あつそ、それじゃ行くわよ」

私のご意見を華麗に受け流す。この先に執事さんがいらつしやる。聞きたい事は……うん。大丈夫。覚えている。

ユーリア議員が一つの扉に向けてノックをする。帰ってくる返事と共に扉を開ける。白髪と上ひげが整えられ、燕尾服を着ている。この方がイサオさんの執事。動乱の時もイサオさんに従事していた人。

「相変わらず、慌ただしい小娘ですな」

「誰が小娘よ！」

「失礼。年増でしたな」

「はあ!? アンタ目が腐ってるんじゃないの!？」

「そちらの方がハルト様でいらつしやいますか」

「初めまして、ハルトと申します」

頭を下げて挨拶をする。

「これはご丁寧に。私の事は執事、とでもお呼びください。ハルト様」
「様。を外してもらえないでしょうか？」

「イサオ様のご友人とあらば、そのような失礼な呼び方は土台無理な話でございます」

いつから友人になったのだろう。私達、これから先もズツ友だよね。じゃあコレおねがいで始まる友人間の上下関係。気が付けばイジツに。

「さっさと初めてくれるかしら。こんな所、一秒でも居たくないのよ」

「ならばユーリア議員には先にお帰り頂きましょう。ハルト様は我々が責任を持ってお送りしますゆえ」

「全て聞くまでは帰る気は無いわ、貴方達だけにする訳にはいかないの」

「帰ると申し上げたり、聞くまで帰らないと譲らない。頑固で癩癩持ちの年増は手間がかかる」

ユーリア議員の表情が凍り付く。アレシマで震電の前で演説をした時にも見た事がある。鉄仮面を装着した状態だ。つまりさっさと話せ。

口に手を当てて喉を鳴らす。失礼。一言断つてから始める。

「貴重なお時間を頂いた事です。幾つか質問の前にイサオさんの話を」

「イサオ様はユー・ハングでも元気にしておられますか」

「既に話は伝わっておりましたか？」

「会談理由として其処にいる小娘を経由して。震電についても」

話が早い。これもユーリア議員の手腕によるものだろう。虚空を見つめて表情を一切変えないユーリア議員に心からの感謝を。

「そうでしたか、ではイサオさんから預かってきた言付があります。お受け取りください」

ポケットに仕舞ってあるスマホを取り出す。イジツに来てからは何かしら忙しさを感ずる毎日ではあったが、充電は忘れずにおこなっていた。太陽充電が出来てよかった。

事前に動画の手前まで操作をしていた。後はタップをするだけで表示される。音量を確認して執事の前にスマホを三角立て。再生を始める。

『あーこれ、もう始まっている？ そっかそっか。やあ爺や！ 僕だよ！ イサオ！ これを見るならきつと側にハルト君がいると思うんだ。ハルトくん。こっちきて！ 嫌だつて？ 一緒に映らないと証明できないでしょ！ ほらほら早く！ せっかくだから何か言ってみて！』

『えーと、まだ見ぬ執事さんへ。こんにちは。ハルトと申します』

『もうハルト君は相変わらず固いなあ。執事にさん付けは逆に失礼だから呼び捨てで呼んであげてよ！ まっそもハルト君らしいか』

『恥ずかしいので画面から消えたいのですが』

『終わるまでは隣に居てもらおうよ！ 僕はいまユーハングの世界にいる。こうして五体満足で元気にしてられるのもハルト君のおかげだよ！』

『いや、それはおかしい』

『おかしくないよ！ 本当の事だからね！』

画面の中で喋っているイサオさんは私の知っているイサオさんだ。イジツに来たばかりの事を思い出す。マダムがレオナさんに向けて放った言葉。今も昔も同一人物。

『帰る予定はあるけれど、一先ずはここでお世話になる事になったよ。色々調べたい事もあるしね！ その代わりではないけれどハルト君がイジツに向かうから、彼の手伝いをしてあげてくれないかな。おねがーい！』

『そんなに軽い頼み方で大丈夫なんですか？』

『僕と爺やの付き合いは長いからだいじょーぶ！』

『問題は、イジツで出会う最初の人にもよるのですが』

『うーん。まあもし僕側の人間でこれを見ていたのなら伝えておくよ。ハルト君に傷一つ、つけるなよ』

『……反対側の人達だったら?』

『見せなければいいんじゃないかな』

『ああそつか……そうですよね』

『あはは。ハルト君はどこか抜けてる所があるよね。まあそこが面白いんだけどさ!』
『本人からすれば直したい部分なんですけどね』

そのままのハルト君でいて欲しいな! なんていう言葉が出てくる。気恥ずかしさ
最大値。こんな会話だったっけ……?

『まっそういう事で僕は元気にしているよ。イジツがどういう状況になっているかは定
かじやないけど、あの世界の事だから闇鍋みたいになっているだろうね。僕以外の人間
が成り上がる最大のチャンスかも!』

『二度と帰ってくるなっと思う人もいるでしょうね』

『そんな……酷い……』

『しおらしい仕草をしても何も変わりませんって』

『それもそうだね』

ポンと手を叩くと同時に紙吹雪が舞う。このあと無茶苦茶、曾祖父に怒られていた。

『ブユウ商事もどうなっているかなあ。爺やがいるなら解体にはなっていないだろうけ
ど』

『社員の人達は肩身狭そうですね。外部からの圧力で執事さんも名ばかりの肩書を押し付けられているか、それとも追い出されているか』

『そういう事ができる奴等だったらいんどだけどねえ……閃いた!』

閃いたらしいので頭に浮かんだであろう電球を吹き矢を吹くような仕草で壊そうとする私。ボケが通じなかった時の気恥ずかしさは異常。

『ハルト君!』

『絶対に嫌です』

『まだ何も言っていないじゃないか!』

『流れで何となく読めますよ! これでも日本人ですよ!』

『じゃあ話は早い! 僕が帰る時、一緒にイジツに行こう! そして僕の代わりにブユウ商事を治めてくれないか!』

『いやーだ!』

『新しく会長が就任するんだ。せっかくだし名前も変えよう! 今がトウワ・ブユウ商事だから……、シン・ブユウ商事! 決定!』

『昨日見た映画に影響されすぎですよ! 結局名前もイサオさんが決めるんですか!』

『ハルト君に任せると日が暮れても決まらないよ! はい決定! 異議なし! 文句なし!』

抗議の声を挙げながらイサオさんに掴みかかるが、軽くないなされ、猫じやらしに食らいつく猫の状態な私が映っている。もうやめて……。

『そんなわけだから、もうしばらくは頼んだよ！ 何か僕に伝えたい事があつたらハルト君にお願いでしてね！ イジツとユーハングを自由に動ける唯一の人間だからさ！』

じゃあね！ そういつて動画の再生が止まる。最後は私の抗議を片手で受け止めるイサオさん。腕も足も長いなんてずるい。

ひと時の静寂。イサオさんが現れただけで場の空気が賑やかになる。やかましいだけかもしれないが。

「生存確認の言付。という割には中身の濃い話じゃない」

「年増の化粧の厚さに比べれば薄い方かと」

表情は変わらず、されど辺りに巻き散らす最大限の殺気。これが鬼神か、魅力的な奴じゃないか

「ま、まあイサオさんの事ですから、その場で思いついた事を言っただけで深い意味はないかと。特に後半部分は」

「その思い付きから始まる行動力もあり、ブユウ商事は業績拡大いたしましたから。イサオ様がそう仰るのであれば間違いは無いかと」

「いくら業績拡大しても、頭が消えてしまえばこのザマよ」

「なのでハルト様。正式にイサオ様から引き継いだ事を表明されては如何でしょうか」

「私が先日、イサオの存在を完膚なきまで否定した事を台無しにするつもり!」

「存命なのは確かですからな」

鉄仮面が外れて私の知っているユーリア議員に戻りつつある。

「ハルト! 前にも聞いたわよね。私とイサオ。どちらを取るか今決めなさい!」

「ハルト様。このような年増にアゴで使われる人生などつまらない事でしょう。イサオ様の手伝いをしていただければ、お金も美女も苦勞せず、イジツで好きなだけ戦闘機野郎になる事ができますぞ」

「いやあ……お金も女性も飛行機もあんまり興味ないです」

「おや、男色家でございますか」

「いやいや、普通です。普通ですよ。普通……?」

「ハルトはそんな薄っぺらいモノではなびかないわよ!」

「あのような高圧的な態度を取っているのは信頼の証というわけですか」

「誰が高圧的よ! 私だってハルトからユーハンクの情勢を聞かせてもらってるのよ。情報を握っているのはイサオだけじゃないのよ」

「少しだけ情報を分け与えてもらっただけで、私は信用されていると。なんともチヨロイ年増でしょうな」

胃が痛い。もうおうちにかえりたい。レオナさんに困り顔で心配されたい。ザラさんにご褒美貰いたい。エンマと植物のお話がしたい。ケイトとアレンの治療を試したい。チカとウーミの話で盛り上がりたい。キリエ……キリエには目的を終えた後に伝えておかないといけない事がある。

「で、ハルト。どちらを選ぶのかしら？」

「ユーリア議員です」

「つつしあ！ ついには隠す事も無く喜びを表現するユーリア議員。」

「理由を聞いてもよろしいでしょうか。ハルト様」

「私知っているイサオさんは、ユーハンクに現れたイサオさんだけです。イジツで大暴れしたイサオさんの事は知らない事ばかりです」

「どちらもイサオ様である事には変わりはないはずですが」

「そうです。どちらもイサオさんです。だから私はイジツのイサオさんの事も知りたくない」

「今からでも遅くはありません。こちら側に来ていただければイサオ様の全てをお伝えしましょう」

「それでも、ユーリア議員につきます」

「何故？」

「イジツでお世話になった方、勿論、他にも同じぐらいお世話になつていらっしゃる方がいます。だけど震電から始まる噂を払拭させてくれたのは紛れもなくユーリア議員であります。議員の立場を使い評議会という場を開催させてまで私を助けてくれました。私にとつては恩人です。これにはきちんと私に出来る事で返さなければならぬ事だと私は思つております」

ユーリア議員の驚く顔が視界に映るが、いまはそつとしておこう。

執事さんが息を入れる。

「そうですね。出会う順番が違えば……というのは無しですな」

「残念ながら。ご協力頂けなくなる事は大変厳しい事ですが、こればかりは譲る事はできません」

「ごめんなさい。執事さんだつてイサオさんの事が気になるだろう。それでも私は曾祖父との約束を優先させる。まあ元々地味コツ作業になるは分かつていたんだ。近道が利用できるなくても仕方ない。」

「私がいつ、協力をしないと申し上げましたかな？ ハルト様」

「……へっ？ あ、いや確かに申し上げてはおりませんが、流れとしては決裂では？」

「それはその年増が独占欲丸出しでハルト様を求めていただけでしょう。卑しい女です。私はイサオ様の命により、最初から協力は惜しまないつもりですが」

「は、はあ、へ？」

「ひとまず休憩と致しましょう」

出される紅茶。簡単に摘まめる茶菓子。もしかもしやと食べながら現状を思い返す。選択しなければならなかった事。これはこの場で聞かれるだろうと思いつながら、今までの事を考え付いた先の結果。

イジツに来れたのはイサオさんのおかげ、イジツで自由に動けるようにしてくれたのはユーリア議員。始まりとその後、どちらを取るか。

結果としてはその後を選んだ。これについては後悔はない。それなのにも関わらず協力を申し出てくれた執事さん。協力してくれる理由は本当にイサオさんからの命令だけなのだろうか。

「何か聞きたい。という顔しておられますな」

「ご協力していただく理由が浮かばないものでして」

「イサオ様からの命でございます。それ以上はございません」

「その、ユーリア議員を選んだ事で何かあると思っていたので」

ああ、なるほど。執事さんが納得をしている。

「ハルト様は探し物を見つける為にイジツへとやってきた。その過程でその小娘に恩を着せられる形になった。自由に動ける身となったハルト様には我々もご協力させて

いただき、無事に探し物を見つけ、ユーハングへと帰還していただく。それが早ければ早いほど。我々にも利点があるのです。イサオ様に対してのご報告であつたりと」

「ああ、確かに。帰還が早ければイサオさんに伝える事も……つてそうだ。ユーハングに戻ればどうしたつてイサオさんが待っているんだつた」

「その通りでございます。なのでパパつと済ませて小娘に感じている恩義もさつと返却していただければ、後はシン・ブユウ商事立ち上げを待つのみでございます」

「それはおかしい」

「そ、そんな簡単に返せるほどの恩じゃないわよー」

「ほう、ではハルト様はいつ小娘から解放されるのでしょうか。聞けばハルト様の行動は全て曾祖父様から託された思いによつて始まつた事。それを自分の恩返しが終わるまで帰さないとはいささか人としてどうかと思われませんが」

「ハイ！ 止め止め！ 繰り返しになってしまいますよー」

そう発言した後にユーリア議員の隣に移動する。お手を拝借。暖かい手をしていらつしやる。

「ユーリア議員。きちんと言葉でお伝えすべきでした。私はユーリア議員のおかげでイジツを制限なく動き回れるようになりました。この事については何度感謝の言葉を告げても足りません。ありがとうございます。そしてこの恩は必ず返さなくてはならな

いと思っております。それが今回、イジツに居られる期間では叶わなくても」

「そ、そうなの……?」

「はい。イサオさんの事で……と言われると、そもそも私一人で何とか出来るような人ではありません。ですが飛行船で語られていた、空賊離脱者支援法。イジツで人々が手を取り合い、イジツを良い方向に向け生き延びようとする活動。私にも手伝わせてください」

視線を私に向けたまま動かないユーリア議員。

「とはいえ、私はユーリア議員のように頭は良くないです。一人より二人にもならないでしょう。私自身もまだすべき事がありますが、一段落つけばユーハングの歴史を調べる事は出来ます。その中にはきつとイジツと似た過去の話もあるでしょう。資料の提供ぐらいしか出来ませんが……」

「それで十分よ! 私の考えに賛同して手伝いをしてくれるのがユーハングの、いえハルト君なら心強いわ!」

「そういつて貰えると嬉しいです。微力ながら精一杯頑張りたいと思います」

イジツに深入りが決定。何もせずにいれば曾祖父からのげんこつを貰うだけなので結局積みゲー。腹を括ろう。

「ハルト様は熟女がお好みでしたか」

ちやうわい！ 好きになった人が好きで今回のほまた別だい！

「なるほど。ユーハング跡地、ユーハング人の名簿、それに墓場、ですか」

「はい。期待できそうな順番に質問させていただきました」

「跡地。イジツには無数の工廠が残されておりますが、既に我々も含め大方探し終えたところばかりかと」

「何も無い、といわれた場所からユーハングの置き土産が見つかったのですよ」

執事さんに置き土産の写真を手渡す。ほう。と感心するかのような一言。

「その場所からは物資と帳簿が残されていました。アレン、友人がいま分析中ですが」

「ユーハング独自の隠し場所があったという事ですな。跡地を知りたがる理由が分かりました」

「跡地を根気よく調査をし続けていけばいずれは。というところです」

「よろしかったのです？ 私にそのような情報を伝えても。ハルト様より先に調査を始める事も可能ですよ」

「その時はその時で、私の探し物がそちらで見つかればそれだけで良いので情報提供を求めたいですが……最終的には合流するのでしょうか？ シン・ブユウ商事とやらに」

ユーリア議員がこちらを見つめる。何故か今も隣に座ったまま。移動しようにも片

手を掴まれたまま固定されて身動きが取れない。

執事さんは驚きの顔。その後聞こえる笑い声。

「イサオ様のご友人になられるだけの人物だけありますな。ハルト様」

「継ぎませんよ？ 設立もしませんよ？ イサオさんが戻れば自分で勝手に始めるでしょ」

「イサオ様でしたら。本人の承諾無しでハルト様を会長に仕立て上げるでしょう。私めも全力でお手伝いさせていただく事になりますな」

簡単に想像できるのが困る。一つだけ、といって関わり始めると底沼になると分かってはいたはずなのに。

ぎゅつと握られる手。鉄仮面を被っているユーリア議員。

「おや、随分としおらしくなられて」

「……人に頼れるところは頼る事になると決めただけよ」

「それで手始めにハルト様と。年増なだけに若いツバメを飼えるぐらいの余裕はありそうですな」

手に込められる力が増す。痛いですって！ でも挑発にのらないユーリア議員も素敵ですよ！

「め、名簿についてはどうでしょうか。そういった類の物は存在しているのでしょうか」

「残念ながら、ハルト様が見つけた帳簿程度であればいくつかございますが、名前が記載されている物は一つも。徹底しておりますな」

軍隊だからなあ。書類は焼却が基本なのだろうか。

「ですが、墓場。については心当たりがございます」

「本当ですか!？」

「正式に調べた訳ではありません。ただユー・ハンクがイジツに辿り着き、全ての人間が帰路へ着いた。とは考えにくい。現に生きていた人間がイジツに残るという選択をされた人物も知っております」

「サブジー、という方ですか？」

「よくご存じで。その後の結末については？」

「イサオさんから。出来れば詳細に教えていただきたい。どのような状況であったか、撃墜された場所とかを」

「調べに行かれるのですか？ 機体と骨以外は何も残っていないかと思われませんが」

「それでも、余計なお節介は重々承知で」

イケス力でイサオ様を被弾させた小娘絡みの事ですか。

「ハルト様も、随分と深みに嵌まり込んでいますな」

「一つ始めれば後は勝手に積み上げられていくものですよ。それでも私は自分の目的を

「第一優先させますけどね」
「それでよろしいかと」

第20話

ラハマへと帰還中の飛行船内。執事さんとの対談を終えてそのまま帰路へ着く少し強硬なスケジュールだった。それでも得る物はたくさん。

帳簿も見せてもらった。所々の翻訳を私が。執事さんとユーリア議員は物資の流れについて調べてくださった。

その結果、モノの流れに違和感を感じる場所がいくつか見つかる。この場所に、この物資が、この量が必要なのか。疑問が浮かぶ。

その一つをいま、上空から通過をしようとしている。名前が付けられている地形。オフコウ山。

「あんな所に墓所なんてあるのかしら」

「ですがユーリア議員にも手伝っていただいた結果。ここも候補地の一つです」

「そうね。夜で視認性が悪いのが癪だけど、通過点だから見るだけ見てみましょう」

飛行船の甲板から外を眺める。飛行船の周りにコトブキ飛行隊の隼一型が飛んでいるのが目に映る。地面には独特の形状をした地形が広がる。

オフコウ山は卓状の形をしており、ここをユーハングの人達は離着陸の訓練として利

用していたと伝えられている。私が知っている空母の形そっくりである。

山のふもとから谷底まで飛行機の残骸が散らばり、訓練の過酷さと離着陸失敗の多さが伝わってくる。

「相変わらず残骸ばかりね。ここは」

「結構な数ですよね」

「そうね。その分、死んだ人間もいそうなモノだけ」

辺りを見渡してみるが、墓標らしきものは見つからず。ユーリア議員はいつの間にか双眼鏡を取り出し覗いている。それ、私にも。

通過後もしばらく眺めていたが、上空から分かる事はなし。

「結局、通過する間だけでは何も分からなかったわね」

「仕方ないです。きつとここまで来い。という事なんでしょう」

「悪いわね、そこまで手伝いをしてあげられなくて」

「とんでもない！ ユーリア議員には既に返しきれないぐらいのお力添えを頂いています。これ以上、甘えてしまつては罰が当たりますよ」

別に今更よ。そんな言葉を返される。

「このままだと谷底まで降りなければいけない可能性が高いわ。幸いクソウザイ生物は見かけなかったけど危険な事には変わりはないわ。注意して」

「はい。分かりました」

しばらくの間、二人でそのまま外を眺める。月と星々の光に包まれたイジツ。飛行機が跋扈する日常も賑やかで楽しいけれど、ゆつくりと星を眺められる夜の風景もまた美しい。

飛行船がラハマに着港する。外見を隠されたまま震電が降ろされる。

執事さん曰く、イサオ様が差しあげたと申した物を返せなどと私の口からは到底。ですがお気を付けを。イサオ様を盲信する連中は少なからずいる事を忘れずに。との事。

震電はこのまま日本に帰るまで封印しておくことが一番安全なのだろうとは思いますが、ケイトとの約束も守りたい。塗装の変更も含めてまたナツオさんに相談してみようか。

出迎えにマダム、アレンと車椅子を押してきたのであろうリリコさんがいた。

「おつかれさま。彼女と一緒に居ると疲れるでしょう?」

「何を言っているのよ! ルウルウ! 無事に事を済ましてきたわよ。ねえハルト」
コクコクと頭を下げる。この二人の会話を割り込める勇氣はまだ持っていない。

「あら、ずいぶんと打ち解けたみたいじゃない」

「話を通じる相手ならいみじう理由なんてないわ。色々と興味深い話が聞けたもの」

ねえ。という顔でこちらを見るユーリア議員。何かと最後に私に話をふるのは止め

てください。

「驚いた。貴方達、本当に仲良くなったのね」

「利害が一致しただけよ。それだけだわ」

それだけかあ。沸々とユーリア議員を困らせてみ隊が誕生する。奥義、レオナさんの困り眉。八の字に変形する私の眉毛。挙動不審になるユーリア議員。こうかは、ばつぐんだ！

「そ、それ以外にも一致する事があつたのよ！ 思考が似ているとか、あ、相性とか！」

あたふたという言葉がよく似合う。やはり鉄仮面を被っている時よりも素敵だなあ。

マダムは額に手を当てて呆れている。

「その件については後日、ゆっくりとお伺いさせていただきます」

「そ、そうね。うん。そうしましょう」

「ハルト君は何か伝える事はあるかしら？」

マダムに話をふられる。

「今回は大変お世話になりました。ありがとうございます。お手数ですがもう一件についてもよろしくお願いいたします」

「任せて頂戴。連絡を取ってみるわ。あの話を持ち出せば直ぐにでもラハマに飛んでくるでしょうけど。彼女、報酬がすこぶる高いわよ？」

「逆立ちしても足らなかつたら……土下座でもしてみます」

「はあ……いざとなれば私が立て替えるよう伝えておくわ。それじゃまたね、ルウルウ」
ちよ、止める間もなく飛行船に搭乗するユーリア議員。安全の為に距離をおかなくてはならなくなる。

ラハマから遠ざかる飛行船。僕たちは見送った。太陽が眩しい。

「変態のあの子に気に入られるなんて余程の事ね」

「変態同志で気が合ったんじゃないかな」

「変態ね。あの時も私とケイトの足を舐めるような視線で見つめていたもの」
散々な三連撃を食らう。

夜。コトブキ飛行隊の食事会兼ご苦労様会が開かれる。参加確認の為、どちらかにしるしをご記入頂き返信をして頂ける様お願いいたします。不参加と。

飛行船に乗り、調べ物をして、人と会っただけだが、身体が悲鳴を上げている。特に腕。私に優しく触れてくれたのはアレシマで出会ったロイグさんだけだ。

「参加だって」

「おっけー」

「人の話を聞いてましたかね？」

参加確認の為に二人で尋ね周っているのだろうか、キリエとチカが宿屋に来た。理由は上記の通り、食事会するよ！ 拒否権なんてないよ！ である。そもそも既に日は暮れて夜である。コトブキの皆も夜間飛行からの明けで疲れているはずなのに。なんて体力だ。

「同志ハルトはもう少し私達を労わるべきである！」

「そうだそうだー！」

「ハルトには！ 私達を満足させられる手腕を持っている！」

「いいぞいいぞー！」

「パンケーキを要求する！」

「かつれーえ！ かつれーえ！」

好きな物が食べたいだけにしように。この二人は。

「でも今日の会場は普通のお店の一部屋を借りた場所でしょ？ 厨房なんて簡単に借りられるものでもないし、諦めてくださいよ」

『ええええ!!』

不当だ！ 横暴だ！ 私達には要求する権利がある！ 好き放題な言われ方である。とはいえ食べさせてあげたいのも事実。特にチカにはまだカレーを作ってあげていない。

「始まるまで時間ってある？」

「無いよ！」

「無いんかい！」

「だってハルトが最後だもん。コトブキのみんなは全員参加だし。エンマとケイトは其々タミルとアレンのお出迎え中」

「そうだとすると、二人はわざわざ私の所へ迎えに来てくれたのですか？」

「そうだよ！ だからカレー作って！ キリエばっかずるい！」

抗議の声を挙げるチカに対してキリエはなんだか得意げ。

「パンケーキが好きなのは世界すら超えて導かれるのだよ！」

「カレー好きだって超えられるし！ ねっ！ ハルト！」

「う、うん？ カレーは私も好きですけど」

「ホラホラ！ キリエがたまたま先だっただけでハルトはカレーの方が好きなんだよ！」

ぐぬぬぬといった表情をするキリエ。嬉しそうなチカ。そういう問題なのだろうかと思うがらちが明かない。

「一先ず、ジヨニーさんの所へ寄りましょう。もしかしたら材料と下拵えがあって使わせてもらえるかもしれませんし」

『ヤッター!!』

両手を挙げて喜ぶ二人。そら行くぞ！ はよ行くぞ！ そんな二人を静止させて鞆に荷物を放り込む。

ジョニーさんと無事会う事ができ、練習用として用意した食材を頂ける事になった。本当にすみません。ありがとうございます。たまにある事だから気にしないでと声を頂く。たまにあるんだ。

とはいえだ、会場であるお店で調理をする訳にはいかない。持ち込みはいいのかと言われればそれまでだが、二人が何とかしてくれるだろう。不安だ。

待ち合わせの時間の問題もあるので二人には先に会場に行ってもらおう事にした。絶対だよ！ 来なかったら怒られるの私達だからね！ 多分ね、私と一緒に来ないだけでレオナさんに怒られると思うよ。

まずはキリエのパンケーキ。ジョニーさんの手伝いもあり、前回同様にうまくできたと思う。教えてくれたジョニーさんからお褒めの言葉もいただく。

「でもカレーはどうするんだい？ 流石に時間が足りないと思うんだけど」

「ユーハングから保存食を持ってきました。これを温めてご飯の上にかけて終わりです」

「だ、大丈夫かなあ」

「無理を言うチカも悪いのです。味は保証済みですからこれで我慢させます」

温まったレトルトパウチを開ける。カレーの匂いが胃袋を刺激する。どんぶりによそったご飯の上に注ぎ込んで完成。料理とほいい難しだけど仕方あるまい。

「ジョニーさん。パンってあります？」

「ちよつと待ってね」

探しに行つてくれている間にレトルトパウチを大きく広げる。まだ少しだけレトルトパウチにカレーが残っている。

「おまたせ。もしかして……？」

「行儀が悪いでしょうけど勿体ないですし、ジョニーさんもどうです？」

「いいのかい？」

「もちろん。こんなの形で申し訳ないですが」

とんでもない！ ユーハングのカレーを味わう機会に恵まれるとは。二人してパンにカレーを塗って食べる。

イジツで食べる、いつもの味。私にとって新鮮みがないことが。嘘です。いつ食べても美味しいです。久しぶりに食べる日本の味付けにちよつとだけ感傷。

ジョニーさんは大真面目に味付けについて考えている。結局、なにを言おうと私はキ

リエやチカ側の人間なのだ。

本日の会場であるお店に到着。冷たくなる前に大急ぎでもってきたのと、保温バツクのようにして持ち運べるようにしてくれたジョニーさんには頭が上がらない。

「こんばんわ。コトブキの皆さんに招待を受けた者ですが」

「キイテルヨー。オクノヘヤニドゾー」

ありがとうございます。指示された部屋に向かい足を早める。

イジツに来てから随分と聞きなれた声が聞こえてきた。ここか。そつと顔だけ出して部屋を覗き込んでみるとコトブキの皆とアレンにタミルさんかな？ あれ、あの二人がいない。

そのまま視線を移動させる。いた。部屋の隅で直立不動で並んでいる。やはり怒られたのか……。私も怒られるのかな、大丈夫だよ、大丈夫、大丈夫。

壁をノックしてご挨拶。

「すみません。遅れました」

レオナさんが反応するよりも先に、隅で直立不動の体勢の二人が即座に反応する。

『ハルト!!』

「頼まれてた物、ツクツテキタヨー」

「本当に自分達が食べたい物を作らせる為にハルトを置いてきたのか……」

怒りも通り越して呆れ顔のレオナさん。それをフォローするザラさん。いつものコトブキの光景だ。

「サメタラモツタイナイヨ。アタタカイ。ウチ。タベル」

「いつも通りの喋り方に戻っていただけませんか?」

あらあら。タミルさんが上品に笑う。よかった、笑ってくれる人がいて。

「はあ、仕方ない。キリエ、チカ。席についていいぞ。反省はしているな?」

しています! していまーす! 威勢の良い返事をして席につく二人。

「お待たせしました。パンケーキでございます」

「キタツ! ハルトのパンケーキ! このふわふわと雪解け食感を食べられるのはハルトが作ったパンケーキだけっ!」

「雪解けって、あの雪ですこと?」

「あながち間違いとは言いきれないところですよ」

キリエではありませんが、いままで食べた事がない食感の美味しいパンケーキでした。まあ。エンマも頂いた事があるのですね。

「お待たせしました。カレー丼でございます。ユーハングから持ってきた一品なので一杯だけしかなくてごめんね」

「そんな貴重品を食べてもいいの!？」

「いいよいいよ。食べたい人に食べてもらう方が一番だよ。イジツの食事も美味しいからお世話になる事もなかったし、気にしないで」

「ありがとう! ハルト! いただきまーす!」

チカの挨拶と共に食事を開始する二人。容姿は違えど姉妹かと思うぐらいに息が合う。喧嘩する程なにかかって事なのかな。

顔をあげればレオナさんの困り顔。大丈夫です。大丈夫ですよ、レオナさん。アレンの手招きが見えたのでそちらに移動。隣が空いてるので座れってことか。

「お帰り。そっちはどうだった?」

「これ以上を求めたらユーリア議員に怒られるぐらいには」

「それはよかった。こっちでも跡地から見つけた帳簿を分析していたけれど、報告できそうな事がいくつかあったよ。そこにいるタミルにも手伝ってもらったんだ」

横を向くと、菩提樹の髪色に白いリボンとヘアピンをたくさんつけているタミルさんの姿。私、ドリル巻いてる髪型って初めてみるかも。

タンクトップ姿にハーフパンツ。可愛いサンダルを履いている。そこまでは何一つ問題はない。可愛い。

美人さんは、なんでも着こなしてしまうのだろうか、その薄着の下からは、お帰り!

イヅツ山!

それだけではない。脇の部分は大きく見開いており山の形が横から見えてしまう。X軸とY軸、イヅツ人のちよい魅せコーデがダブルで、だ。

「始めましてタミルさん。エンマからお名前を聞かせてもらつております。エンマとはご学友で、現在は学者さんだとお伺いしておりますが」

「まあそこまで。まだ学者と呼ばれる程の身ではございませんが、日々、研究を続ける毎日ですわ」

「勉強が苦手な私からすれば頭の下がる思いであります。エンマから写真は受け取られましたか?」

「もちろん! あの一枚の写真からは、空と海、優雅に飛ぶ鳥たちの息遣いが今にも伝わってきそうでしたの!」

両手を重ね。写真を思い出しているタミルさん。学者魂に火がついたか。熱の籠った言葉を伝えてくる。

「エンマ、ここにタミルさんがいらつしやるといふ事は、アレをお見せしてもよろしいのでしょうか」

「ええ。是非ともお願いいたしますわ」

「えっと。何かお見せしていただけるのでしょうか?」

「準備しますので、エンマに聞いてみてください」

エンマ、何かしら、何かしら。それは見てのお楽しみですわ。背景に華が咲き誇りそうなお美しい光景。

少しだけ視線をずらすと、パンケーキを大口で頬張るキリエ。こんな初めて！とカレー丼を胃袋へかきこむチカの姿。私も向こう側の人間なんだよなあ。

最近、出番の多いスマホ君を三角立てして動画の選択まで持つていく。

「あらあら。これで何かを見せていただけることですか？」

「その通りです。画面が小さい事が玉に瑕ですが、我慢していただければ」

「それでは、少し隣に失礼させて頂きますわね」

タミルさんが立ち上がり、座っていた自分の椅子を私の真横にまで移動させる。そして着席。腕と腕が当たる距離。行儀よく、両手を両膝の上に置いて待つ。

華麗で気品に溢れる仕草。一つ一つの動作が生まれ育った環境の良さが伺える。視線が合えば微笑みを。このまま見つめていたら自分の穢れた心が浄化されてしまう。

目を瞑ったまま、固まる私を心配そうに見つめるタミルさん。いつもの事だから気にしない方がよいよ。とかいうアレン。そうだ、固まる時は今ではない。

「では始めますね」

断りを入れてから画面をタップする。再生される映像は依然、コトブキの皆に見せた

映像と同じもの。

船、海、波、魚、鳥達の環境音と共に映し出される映像は写真で見ると以上の美しい光景である。画面撮りはどうしても無理が生じるよね。

まあ。両手で口元を抑えて歡喜を抑えきれないタミルさん。両腕と連動するように閉鎖されていくタミルトンネル。あのトンネルには夢しか詰まっていない。断じて、段違い平行棒などという邪悪な存在はないのである。

コトブキの皆に見せた時とはまた違った質問もあった。だが、残念な事に学者さんの質問全てに答えられる程の知識はなく、断片的な返事しか返せなかった。

それでも、素敵なモノを見せて頂きありがとうございます。と頭を下げしてお礼をされる。反射的にこちらも頭を上げて返す。逆に頂いてばかりな気がする。

「いま一度、ご覧になられるのでしたらここを触っていただければ再び鑑賞する事ができます。よろしければどうぞ」

「まあ！ あの美しい世界をもう一度見せてもらえるのですか？」

「お好きだけどうぞ。私からお答えできる知識には限界がありますが、映像を繰り返し見る事によってタミルさんの中で新しい発想が生まれる可能性もあることでしよう」

「なんとお礼申し上げたら良いのでしょうか」

「アレンの手伝いをしていただいただけで十分ですよ。もしくはタミルさんにお見せしたいと伝えてきてくれたエンマに感謝を」

エンマの方を向き感謝を伝えるタミルさん。友人の手伝いが出来てよかったと答えるエンマ。照れている姿は新鮮だ。

その隣二人は……いうまでもなく。更にお隣さんは美味しそうに樽ジョッキを傾ける。バングルで髪を結っている隣人は食事会全体を見通し、落ち着いた様子だ。

その隣で黙々と食事を進めている妹さん。そして私の隣にいるお兄ちゃん。本題が始まる。

「さて、情報交換を始めようか」

「単刀直入に。こちらで調べてみた結果いくつか怪しい場所が絞り込めた。その中で一番怪しいのはオフコウ山」

「おっとー、やっぱりその地名が出てくるか。こちらの帳簿でも名前が出てきた場所だよ」

「帰りに飛行船から眺めてみたけど、地形に対してモノの動きがおかしい。あんなに狭い所でこれだけのモノが必要とは思えない」

「木材とかもあつたね。建物や他の事に使うとしても、ちよつと量が多いかな」

「そうなるよ、上空で眺める程度では気づかない何かがあるのかな？」

「だね。ここは基本に戻って現地取材かなあ。行くんでしょ？」

「もちろん」

行かなければ始まりもしない。ユーリア議員の助言通り、谷底まで降りる必要もありそうだ。その可能性も含めて必要な物を準備しなくては。

あとはオフコウ山に行く手段。私が単機で向かい、あの山に着陸できるか。可能か不可能かの選択肢が出現するのなら止めた方がいい事は確かだ。ここまできて賭け事をする気にはならない。ならば。

ケイトを見つめる。こちらはハルト。ケイト、私の声が聞こえますか？ 視線に気づいてくれたのか、こちらに顔を向けてくれるケイト。ケイトに頼みたい事があるんだ。了解した。まだ何も伝えてないの？ 頷くケイト。話は聞こえていたから、オフコウ山へハルトを連れて行く。そっか、お願いします。了解した。

「案内人は確保できた。あとは下準備が整えば向かえる」

「君たちいつから視線で会話できるようになったのかな？」

「今。ね、ケイト」

食べ物飲み込み込み頷くケイト。

「ハルトをオフコウ山に連れて行き、目的を遂げる」

「きちんと伝わってる。問題なし」

「兄として嬉しいのやら、嬉しいのやら」

「嬉しいのならいいじゃない」

「まあね。そこから先は兄妹でも野暮って事さ。でも一機だけで向かうのは少し不安かな、せめてもう一機……。ああ、空賊とか空の治安に関してだよ」

信用してるから。そんな事をいわれても直前で何かをする勇氣と根性は無いです。

うーん。オフコウ山に離着陸できる人。コトブキの皆だったら全員可能だろうけど、誰に頼るか。確かキリエが一度、不時着したとかでオフコウ山にいた事があつたはず。

そう思い声をかけようとしたところ、チカから声上がる。

「ハルト。またどっか行くの？」

「オフコウ山に用事が出来たんだ」

「それってイジツに来た理由の為？」

「うん。それでケイトに連れて行ってもらう事は決まったんだけど、念の為もう一機はいた方が良くアレから提案があつてね」

「ハイハイ！ それじゃワタシも行くーっ！」

意外な所から助っ人が参上。念の為、ケイトに相談。視線を合わせて問いかける。ケイトさんケイトさん。チカを連れて行く事についてご意見を伺いたいのですが。チカ

は体積が小さく、身軽な為、今回の任務には最適。また、空で問題が発生した場合、電光石火で敵を翻弄してくれる。敵を自分に引き付けて私達が安全圏まで脱出した後でも単独で帰還が可能な技術も持ち合わせている。つまり、断る理由はないと？ 頷くケイト。

「来てくれるならもちろん心強いけど、二人とも、仕事や用事は大丈夫なのかい？」

レオナさんに向けて視線集中。あ、気づいた。レオナさん、チカとケイトのご予定は大丈夫なのでしょうか。目を閉じ、何かを考えて始めるレオナさん。

「ユーリア議員の護衛任務のおかげで少し余裕が出来た事は確かだ。ハルトをオフコウ山まで連れて行き、戻ってくる期間であれば問題ない」

「さっすがレオナ！ それじゃ一緒に行つてきてもいい？」

「ああ、ただし、油断せず、危険を感じたら即座に戻る事。ハルト。これにはお前も従う事。分かったか？」

『はい』

意外な事に通じた。もしかして信頼度が一定値より上昇すれば誰にでも通じるのか!? 念のためにもう一度、レオナさんに視線を送る。レオナさん、ありがとうごさいます！ 穏やかで優しさに満ち溢れてた微笑みをこちらに向けてくれる。なんて事だ。この世界は意外と私に優しい。

「いあいあ。話の流れをちゃんと聞いていれば誰だって分かるっしょ」
肩肘ついて新しいパンケーキを口に放り込むキリエ。だよね。ソウダヨネ。

第21話

朝はいっだってお天気晴れ。イジツに来てからはまだ雨は経験した事が無い。私からすれば雨は降らないでくれると嬉しい。気圧のせいで頭が重くなるから。

オフコウ山に目指す為、ナツオさんやリリコさんに相談をして必要だと言われたアレやコレを三人分用意できた。

ナツオさんはオフコウ山に向かう為を利用して赤とんぼに何やら細工をしてくれたらしい。当日まで秘密だと言われた。

リリコさんからは懸垂下降のやり方をみっちり。道具の事は勿論の事、降下する際の手順も。ロープは二本通し。高さによつては二回から三回の懸垂下降。L字の体勢を崩さないように慎重にゆっくりと。

そうでなければ死ぬわ。懸垂下降が如何に危険な行動かを叩き込んでくれた。

たまに耳に触れる吐息で魂が抜けそうになるが、その度に正気に戻すように強めにふつと耳に息をかけてくれる。変態ね、そのお言葉は、ご褒美です。字余り。

かくして、一泊二日の大冒険へと旅立つ時がやってきたのだ。マダムにもきちんとして報告してきたよ！ 貴方にとつて良い結果になる事を祈っているわ。マダムに微笑み

かけられながらそう伝えられた。泣きたくなるのはなんでだろう。

「ようハルト！ やつてきたな！」

「おはようございます。ナツオさん。チカもケイトもおはよう」

おつはよー！ と朝から元気なチカ。いつも落ち着いた様子のケイト。コトブキでも一番対照的な二人かな。いや、感情を表に出すか出さないかだけの差だと思う。

「本日のオフコウ山までの計画を確認する」

「パーつといつてヒューつて降りればいいじゃん。燃料の問題も無いんだし、なにかあればナンコーなりガドールまで足を延ばせば問題なくない？」

「敵機と遭遇した際に取る行動の問題もある」

「そんなんチカがパーツと突っ込んでズダダダつて撃ち込んでやれば逃げるっしょ。戦闘機や赤とんぼを狙う空賊なんて所詮、頭悪いだろうしさ！」

パーつと手を挙げて、ズダダダと両手の人差し指で機銃を撃つ身振りをするチカ。絶対にやる！ 信じる！ 自分の力を！ 前向きに考えておこう。

話を聞いていたナツオさんは呆れた顔をしている。

「チカ。もう少し頭を使え、聞いてるとお前まで頭が悪そうに聞こえるぞ」

「班長ヒドくない!!? 空賊なんかと比べられたら心外なんだけど！」

「ならもう少し言葉を選ぶんだな。ケイトが困惑してるぞ？」

用箋挟を手にしたまま硬直しているケイト。チカの言葉を理解する為の変換で詰まっている模様。

「ハルトなら分かるでしょ！　こう上からさ！　ピューって降りてさ！　バババって撃ち抜くの！」

分かるかどうかと問われれば分かりますよ、ブンドドですよ。いや食事会でケイトに教わったからね。

「つまるところ、一番槍として敵編隊に突っ込んで、かき回した後に各個撃破。で合ってる？」

「それぞれ！　ホラ！　ちゃんと理解出来てるじゃん！」

両手を腰に当ててえっへんといった態度。ケイトは正気に戻り、ナツオさんは呆れ果てる。

「それはチカを援護してくれる人がいてこそその戦法だろ。今日は護衛だぞ。念の為、コイツを用意しておいてよかったよ」

赤とんぼをトントンと叩くナツオさん。

「当日のお楽しみって赤とんぼですか？」

「そうだ。話を聞いた時にちよいと嫌な予感がしていたからな。コイツに細工をしておいたんだ」

「一体何をされたので？」

「九七式七耗七固定機銃を搭載して操縦者が撃てるようにした。ケイトの腕前なら威嚇以上の成果も挙げられるだろうが、まっ無理は禁物だな」

赤トンボをよく観察すると機銃らしき物体が一挺、見え隠れする。どうやって積んだというのだこれは。

「無理矢理感は否めないな。赤とんぼの利点を潰さないよう尚且つ突貫作業の結果がコレだ。だが後方にいるハルトに射撃手をさせるとも効果的だと思うぞ」

「正論すぎて何も言えません。下手に撃たせたら尾翼を撃ち抜くでしょうし」

「そうだろうさ。でも機動には耐えられるんだろ？ ならじつと耐えてケイトに任せておけばどうにかするさ。なっケイト」

「任せて。でも、万が一の時にならない為にも正確な計画が必要」

「ほーい。んじゃちゃちゃつと済ませて早く行こ！」

ケイトの提示した飛行計画について。ラハマからオフコウ山までは直線距離で二百六十キロクーリル。途中で町も駅も無し。

地図を見せてもらったがオフコウ山はラハマから西南西の位置する。前回ユーリア議員と一緒に見た時は通過点。と言ってくれただったが、イケスカ帰りから考えればラハマを迂回してまで寄ってくれたのである。

私には何も告げずに。私の事を心配してくれて、だろうか。優しさに今気が付く。

先陣はケイトでその後ろをチカが飛ぶ編隊で行くとの事だ。オフコウ山は空路の座標として利用されている為、他の飛行機が通りがかる可能性もある。それを狙うハゲタカのような空賊が狙ってくる可能性はあるとの事。

ただ、飛行船ではない戦闘機を襲うような空賊がいれば、それこそ頭の悪い連中。だそうだ。運べる物資なんて知れてるもんね。

「よっし！ それじゃ行こっ！ 今から向かえばお昼前には着くでしょ」

「オフコウ山までの旅路、よろしくね」

「了解した」

赤とんぼの後部座席に荷物を放り込む。三人が一泊と谷底に降りれるだけの物資を詰め込んだ。座席は狭くなるけど安全には代えられない。自分も隙間に潜り込む。

「それじゃナツオさん。行ってきますね」

「ちよつと待て、ハルト」

「なんでしようか？」

「オオカミになるなよお」

んふーと口元に手元を当ててニマニマとした顔のナツオさん。楽しんでるのを一切隠さない。

「そういう事を考えられる結果なら逆に気楽で楽しめるんですけどね」

「そうだな。それでも、ハルトの目的が達せられる事を祈っているよ。それがどんな結果になろうともな」

「ありがとうございます。それでは行ってきます」

「おう！ 野郎共！ 回せー!!」

赤とんぼと隼一型のエンジンに火が灯る。滑走路に向けて二機が進む。加速が始まり離陸可能な速度になる。防風についていない飛行機に搭乗するのは初めてだが、これは少しやみつきになりそう。どこかの国が風を感じられない！ と戦闘機に文句を言いつけた話も少しだが分かる。

無事に離陸を完了し、ラハマを一周。その後、オフコウ山へと進路を向けて行くのであった。

「ひーまー!!」

「何事もなく順調に進んでいいじゃないですか」

「ケイトも同感」

「でもでも！ ここ最近、空賊の奴等の動きがおかしくない？ 雑魚ばつかなのは仕方

ないとしても飛行船を狙うのにあの数は無いっしょー」

「確かに。腕が良いとはいえない、数では相手の方が勝っていたのにも関わらず連携が取れていなかった」

「だよね！ 何か引つかかるんだよなあー」

チカとケイトは頭の隅に何かが引つかかるらしいが、私はそれどころではなかった。

モコモコ帽子を被り、ゴーグルを着けて今になってようやく飛行機に乗っているという感覚に胸が一杯。

それに加えちよつとだけ、ちよつとだけやりたい事があるのだ。風によるロマンを。

手を伸ばしたい。やれば後悔するのは分かる。だが本能が訴えてくるのだ。飛行機から掴める風の感触を体験できるのは今しかない。腹をくくれ。オフコウ山の前哨戦だ！

「ああああ！ 右腕が！ 私の王の力があああ！」

「何やってんのハルト？」

「理解不能」

周りの通り過ぎる風景が遅く感じても、飛行機なのを甘くみていた。欲望に負けた右腕が我先にと機体から飛び出したのである。その瞬間。右腕に訪れたのは死にも近い風圧。

無情にも右腕は風に押し流され、手元に戻す事すら叶わない。終わった。人の欲望と

いうモノは解き放つてはならないのだ。自我を保ち。我を忘れるような事は断じてならぬのだ。

「曲げればいいじゃん」

「曲げるって何を!？」

「右腕、そのまま戻そうとするから戻らないんだよ」

チカの助言通り、腕を曲げてみる。おお！ 右腕の帰還だ！ 王の帰還だ！ ありがとうがてえありがてえ……。

「たまにいるよね、そうやって風を感じたいー！ とかいつて飛行中に手を伸ばす人。何かあるのかな？」

「嬉しくなるとつい両手を挙げて喜んでしまうのですよ。今回は特に。二人に付き添って貰えてるからさ」

「へっへー！ ハルトも素直でよろしい！ それなら仕方ないよねー！」

「ハルト、怪しい」

「信じてよ、本当だから」

私の悪巧みを疑う事もなく喜んでくれるチカ。疑心暗鬼なケイト。目と目で通じ合えるケイトに対して嘘が通じなくなってきた。

ソウウン峡谷を超えてオフコウ山が見えてきた。あんなに狭い所に着陸するのか。

「ケイトが先に着陸をする。チカは警戒を。合図を送り次第、着陸をお願いする」

「りよーかーい！」

「ハルト、少し揺れるけれど我慢」

「分かった。ケイト、お願いね」

「了解した」

オフコウ山へと着陸をする為、ケイトが機体を滑走路とは言い難いような地面に向けて機体を水平に保つ。私とは比べ物にならないぐらい低速でも安定した機体操作。車輪が地面に接地する音。速度の低下により前のめりになる感覚。完璧だ、ケイト。

だがこのままではチカが安全に着陸が出来る空間が無いので、赤とんぼを押しして少しだけ隅に移動させる。ケイトが合図を出し、チカも着陸体勢へ。

いつもの自由気ままな飛び方とは違い、安定した着陸。つい拍手をしてしまう程。やはりコトブキの皆の操縦技術は他の飛行隊に比べて頭一つ抜けているのだと実感する。

念の為、チカの隼一型も隅の所に押していく。不時着機が現れないとも限らないしね。

赤とんぼから荷物を降ろして、一息を入れる為にお茶を提供する。現在の太陽の位置はやや斜め上。可能であれば日が暮れる前に何かを見つけたいものである。

「と、いう訳でオフコウ山、山頂にいる訳ですが、変わった物つてあります?」

「機体の残骸と観測所。建物が複数。調べるなら建物を優先」

「見るからにボロつちいけど何かあるのかな?」

「そこはハルトの手腕。隠し物を見つけるのはお手の物」

「ほっほー! ハルト! 期待してるよ!」

「がんばりまーす」

三人で連なるように並ぶ建物に向かう。

「なーんにもないねー」

「空路の座標として使われるぐらい有名な場所です。不時着機も多数あったようですか

ら、大概はもう漁られて何も無いかと」

「そこをなんとかするのがハルトの役目」

「なんとかですか……せめて床でもあれば違うのだろうけど」

木材で建てられた簡易的な建物は正直なところちやっちい。雨風を防いで寝る為だ

けという形である。

地面もそのまま剥き出し状態。いくつか木で出来た床が残っている場所もあるが、

きつと遭難者が剥して火を起こす燃料にでもしてしまったのだろう。

付近にある建物を全て探索してみるが、ほぼ同じような状態。これで何かを探せとい

うのは流石に無理がある。

穴を掘れば何か出てくるのかもしれないが、アテもなく掘るぐらいなら谷底を調べてみる方が可能性は高そうだ。

もう一つ、観測所を調べる事にした。ここで何か手掛かりが見つかればいいのだが。

ちよんと突き出た岩に寄り添うように建つ鉄塔。途中で折れているので少し怖い。その根元部分には部屋がある。机と椅子とロッカー。見事に最低限の物しかない。

足で叩くとコンコンという音が帰ってくる。直接地面があるわけではなく、ユーハング工廠跡地でも見かけた地面だ。

「少し建物を見まわして、ひっくり返せそうな道具があるか確認してきます」

二人から気を付けて、と言葉を頂く。足を滑らしたら一巻の終わりだ。足元に気を付けないながら周囲を見渡す。

機体の残骸の傍までやってくると先端が尖った丁度良い棒が見つかる。元はこの残骸に付いていた機体のパーツなのだろうか。お借りします、と一言。

「この小さな部屋で怪しそうな床は何処だ選手権」

「いえーい！」

「いえーい」

「そんなわけで早い者勝ちです。怪しそうな場所を指名して見事当てたら私にできるお

「礼なら何でもする券を差しあげます」

「ホント！　じゃあじゃあ！　机の下！」

「ハルト、それは本当？」

「本当。私に出来る事、限定だけどね」

ケイトが思考を張り巡らせる。スイッチでも入ったか。しばしの後に選択した場所はロッカーの下だった。

「ハルトは決めないの？」

「決めても特に商品はないしね」

「じゃあ！　ハルトが当てたらワタシが一日遊んであげる券を差しあげよう！　ケイトはー？」

「……一緒に日向ぼっこ」

「ええーそれって楽しい？」

「楽しい」

むうーと唸るチカを横目に自分で決めた床をこじ開けようと試みる。ちなみに私は入り口を指定。

尖った先端を床に刺し、ゆつくりと引き上げる。徐々にズレていく床ではあったが、特に何も無いようだ。

「ハルト、はっずれー」

「残念無念でありますよ」

「じゃあ次はワタシの場所！」

机をずらして同じように床をめくる。残念な事に何も出てこなかった。

「残念、外れだね」

「ええー！ それじゃケイトが優勝？」

「まだ分からない。そもそも何も無い可能性もあるしね」

ロッカーを移動させて再び床をめくる。ん、何か手ごたえが違う。

「あれ、何か埋まってない？」

「きちんとずらすからちよつと待っててね」

「ハルトといると毎回あり得ない事が起きて、ケイト驚愕中」

移動させた床の下には何かに包まれた物がある。ケイト、お願い。了解。そうして出てきた小さな何か。

「早く！ 開けて開けて！」

チカに急かさされながらも慎重に包みを開けていくケイト。出てきたのは鍵と……棒？

「鍵はまあ分かるけど、棒ってなんだろう」

「同じ所に隠されていた以上、必要な場所があると推測する」

「問題はそれをどこで使うかだよねー」

確かに、鍵穴らしきモノは今の所は見つかっていない。勿論、棒の使い方も分からず。もう少しだけ周囲を調べても何もなければ、やはり谷底まで降りるしかないのだろうか。

「やつぱり谷底まで降りるしかなさそうだね」

「けっこう深いよね、こころー」

「幸い、生物達の姿は見受けられない。覚悟を決め細心の注意を払って降りるべき」

山の上から谷底の覗き込む三人。丁度、ロープの切り替えが安全に出来そうなお出っ張り部分を見つめる。あそこに杭を打ち込んで懸垂下降を行えば二度で谷底まで降りられそう。

最初のロープを固定する。可能であれば杭よりも重たく固定されているものが好ましいが、やはりそうになると鉄塔を利用するのが良さそう。リリコさんの

指示で長めのロープを複数用意しておけて良かった。

二本通しのロープを鉄塔に巻き付けるようにして固定。引っ張ってみるがブレる事もなく、鉄塔の軋む音も聞こえない。これなら大丈夫だ。

ハーネスを装着してロープを付属の二つ輪の大きい方へ束ねた状態で通す。その後小さな輪に引つ掛けるようにロープを回し、腰部分に小さな輪の方を装着して完成。その際に大きな輪に通したロープは上向きにある事。

「それじゃちよつと準備してくるね」

「ハルト、気を付けて」

「落つこちなないようにね！」

「気を付けるよ」

手袋を装着し、鉄塔に縛り付けた側のロープを左手で掴む。谷底に向けてあるロープを右手で掴み、足は固定したままお尻を谷底へ、身体がし字の姿勢になるように。そこから一歩ずつ崖を降りていく。

焦っちゃだめ。リリコさんの甘い吐息と息遣いが頭によぎる。妄想と現実は違ったけど。

足を滑らせる事もなく出つ張りの岩へとたどり着く。ここまできて油断はしません。慎重に参ります。私が乗って大丈夫なら二人も平気であろうと考え、ロープを固定状態にし、念入りに足場を調べる。

体重をかけたり、軽く足で地面を蹴るようにしてみたが、ビクともしない。谷底にも生物無し。順調である。

二度目の懸垂下降の為に固定杭を打ち込む。ここからが一番怖い。自分で打ち込んだ杭が外れない様に徹底的に検査する。

先ほどと同じようにロープを通し、第二懸垂下降のロープを装着。第一懸垂下降のロープを外す。同じように体勢を整えてゆつくりと後は谷底まで降りるだけ。

「順調に降下中」

「もうあんなに低い所まで行ってるよー。ハルトつて意外と凄いや？」

「努力家である事は確か」

「巻き込まれ体質なだけじゃない？」

「そうともいう」

既に二人の姿が小さくなっていて、何を喋っているのか分からない。鼻がムズムズするのできつと自分の事だろうと己惚れる。何故ならチカが指を指しているから。

谷底まであと数歩というところ。それでも怖くてそのままの体勢で降りていく。背中で接地してようやく実感が湧きそうだけど、流石にそこまではいかない。

ようやく谷底へ到着。固い地面は生きている事を実感させてくれる。なんてね。二人に呼び掛ける。

「無事に着いたよー！」

「それじゃー次はワタシね！」

ケイトに準備してもらっているのだろう、何やら和気藹々とした会話らしき声が聞こえる。

「ハールトー！」

「何ー!？」

「上見ないでよー！」

「ナーンデー！」

「分かってて聞いているでしょ！ パンツ見えちゃうもん!! 後ろ向いててー!!」

怒られたので後ろを向く。黄草色の髪にふわっとした髪を二つに分けて結び、ピンク色で統一された上着とミニスカート。胸元にはコトブキのカラー色である青いリボンを身に付けている。その恰好でハーネスを装着しているものだから、そりやもう色々。

素直に後ろを向き、ついでの事なので簡単に周囲を探る。もう少し地面がデコボコしていたり大きな岩が散乱しているのかと勝手に想像していたが、辺りはよく言えばすつきり、悪く言えば殺風景。

正面には降りてきたのと同じ高さの崖、左右二手に分かれるように溪谷が続いている。自然現象によつて生み出されたのか、はたまた人の手が入っているのか。

「ハールトー！」

先程よりも近くから聞こえるチカの声。振り向いてみれば既に第二懸垂下降地点まで降りていた。顔だけこちらに向けて片手を振っている。せつかくだから振り返しておこう。

「順調だねー！ もう少しだから頑張ってるねー！」

「分かったー！」

顔を戻して再び降下を始めるチカ。私の時とは打って変わりテンポ良く降りてくる。あ、まずい。後ろ向くの忘れてた。ハーネスを着用してもヒラヒラと舞うスカート。怒られたら謝ろう。怒られなかったら？ 心に刻みこんで黙ってしよう。

そんな私の心情など露知らずか、危なげなく谷底へ到着。やはりイジツ人の身体能力は半端ない。

「意外と面白いよね、コレ！」

「趣味で楽しんでいる人達もいるぐらいだから、何か魅力があるんじゃないかな」

「だよねだよね！ あーでも帰りはこれ上るのかあ……」

「人によつては上る方が楽だつて話だよ」

「ホントかなあー。まっ後で考えればいつか！」

そうだね。その間にもケイトの準備が整ったようで、合図が送られてくる。チカとはまた違った。律動的な動きで降りてくる。あの人はその道のプロかな。

後ろを向いているという指示は無かったので、チカと一緒にケイトを見守る。黒タイツにシヨートパンツのケイトに身につけられているハーネス。

自然と締め付けられていくケイトの身体。それを視線に映してから湧く内なるモノ。情緒的なモノを感じる。なんだこれは。奴とは、一体何が違う。七つの大罪は無慈悲だ、生きた力と生きた力との衝突なんだよ。

新しい自分を向かい入れる余裕が無い為、一時的に正面の壁に目を動かす。これは決して逃げたわけではない。

深呼吸しているとチカが背中を叩く。大丈夫だって！ ケイトならこれぐらいよゆーっしょ！ 違うんだ。そうじゃないんだ。これは私の罪だ。贖罪を受け入れなければならぬのだ。

己が罪と汚れを感じ取る間にケイトはあっさりと谷底まで降り切った。ケイト、済まない。何を謝られているか、理解不能。目で通じ合えるのも好し悪し。

「しっかし、意外と広いよね。ここ」

「どこから探して行きましたようかね」

「降りてきた崖を伝いで鍵穴を見つけるのが無難。幸い、障害となるモノも無し。二手に分かれての行動を推奨する」

「やっぱりそれしかないよね。仕方ないか」
谷底からの異世界生活。夢は大きく墓地探し。

第22話

チカとケイトのコンビで時計回り。私は一人で反時計回りで、オフコウ山外周を周る事になった。左手法って名前がついていたような。

一人静かに黙々と。自分の足音以外は聞こえない程に静寂に包まれている。

手袋越しに伝わる崖の感触。ここから鍵穴を探すのは可能なのだろうか。そもそも本当に鍵と棒を使うような場所がここにあるのだろうか。オフコウ山以外で使うのでは。と、一人になると途端に良くない事を考える。

考える断ち切るように歩みを進める。まだ他の場所にも目星はついているのだ。その為の正しいなものを手に入れたと思えばいい。

出発地点から半分ほど周ったのだろうか、着陸する際に見かけたオフコウ山の下り坂部分が視界に入る。チカとケイトは……いた。やはり私より早い。手を振り呼び掛けられている。

「ごめん。遅くなりました」

「だいじょぶだって！ ワタシ達もいま来たトコロだしね！」

「こちら側にはそれらしきモノは無し」

「怪しそうな場所は蹴っ飛ばしたりしてみただけどなーんも変化なし！」

ね、ケイト！　あまり無茶はしないで欲しい。チカを心配するケイト。

「残念ながらこちらも、それらしいモノは見当たらず。本当に鍵を使うような場所なんてあるのやら」

「同じ場所でも何度も通う事で新しい発見が出来る事がある。現地取材は繰り返し行う事で可能性が飛躍的に上がる」

「えーめんどくさいー。もつとこうパツと見つける方法ないの？」

「それが出来たら苦労はしない」

身振り手振りで自分の提案を伝えるチカだが、その度にその発想は無かったと言うケイト。思考の根っこが根本的に違うのだろう。私はチカ側。

休憩も兼ねて壁に寄りかかり一休み。しかしチカではないが、何か見つけ出す方法はないものか。念の為、寄りかかった崖に手を当ててみるが、ごく普通の石壁である。中身たつぷりの。

ケイトも言っていた通り、繰り返し調査と他の場所を探索するしかないのかもしれない。時間をかければかかるほど、シン・ブユウ商事なるモノが私の背後に迫る。これがパ

ンケーキの呪いか。フォークを背負った罪状は重い。

「もしかしてさー。オフコウ山には無いんじゃないのー?」

「その可能性はあると思うよ。山頂も外周もそれらしいものは見当たらないし」

「いやーオフコウ山そのものがって言うより、なんていったらいいんだろ?」

「身振り手振りでもいいよ。きちんと聞いているから」

「うん! えつとね。ワタシ達が触ってきたオフコウ山には無いかもしれないけど、あつちの、ソウウン峡谷側に何かないかなって」

指を指す先を見てみる。現在いるオフコウ山から正面にはソウウン峡谷の高い崖がそびえ立つ。そこに至るまでの距離には飛行機の残骸がそこら中に散乱している。

崖そのものには何やら傷やオイルのようなものが染み込んでいる場所がある。つまり戦闘機の離陸に失敗して崖に衝突した時に出来上がった、という事なのだろう。

「ここまで来た事だし、歩いていける距離だからチカの案に賛成するよ」

「ケイトも賛成。他の案が浮かばない以上、このまま休憩していてもらちが明かない」

「ホント!? じゃあじゃあせつかくだし早速行ってみようよ!」

チカが私とケイトの手を引っ張る。それに引かれるように三人でソウウン峡谷側の崖へと歩みを始めた。

「これは酷い」

「これは酷いなあ」

「ユーハングも全員が操縦が上手いわけじゃなかったんだねえ」

近づいてみて分かった事がある。残骸はオフコウ山からの離陸の際に、戦闘機の邪魔にならないようにと端へと避けられていたという事。もう一つは地面を擦ったのか、はたまた崖に突っ込んだのかは分からないが、オイルとガソリンの匂いがする事である。

「凄い匂いだね、ここは」

「加熱性のある液体が地面に染み込んでいる為。この匂いが理由で生物がないのかもしれない」

「マロちゃんだつてそりやイヤだよ、こんな匂いー」

「だとすれば、チカはイジツ生物学において大いなる発見をした可能性がある」

「ええ！ そんな凄い事なのこれ!？」

「凄い。地上の開拓を進めるに辺り、難題とされていた生物から簡易的に身を守る事が出来る可能性が浮上した」

「それじゃさ！ マロちゃんにお嫁さんを買ってあげられるぐらいのお金とか貰えるのかな？」

「実験を繰り返して、証明する事ができれば何匹でも」

「えー、お嫁さんは一匹だけでいいよー」

「チカは意外と欲がない」

「欲とかじゃなくてマロちゃんのお嫁さんは一匹で十分なの！」

なにやらチカの直感によりイジツの生物学に革命が起こりそうな雰囲気だ。二人が話をしている間、崖を見つめてみる。

所々にプロペラが擦れたのか、傷が入っている。場所によっては機体その物が突っ込んだのか、オイルやガソリンが染み込んでいる。中々衝撃的なものを見ている気がする。オフコウ山なんて名前が付けられるわけだ。

そのまま左手法で横へとずれていく。オフコウ山の正面から少し外れたこちらにも残骸と傷、匂いが凄い。衝突を避けようとして回避行動を起こした結果なのだろう。

視察して、思考して、その繰り返しをしていると、左手に違和感を感じ取る。なにかと自分の左手を見るが、油が付着していた。なんだ、崖から垂れてきた油にでも触ってしまったのか。

強烈な匂いと土色の粘着性のある油が手袋に付いている。帰ったら洗濯かと思つめていたが、頭によぎる。土色の油つてなんだ？ 油が壁に付着したと思われる時期はもう何十年も前の事。今更、壁に染み込んだ油が垂れてくるわけがない。

左手で触れていた壁を見る。そこには私の左手を滑らせた後がはつきりと残る壁があった。軽く叩いてみると、響く音。少なくともこの崖は自然物ではない。人工物だ。

「ここに何かが隠されているとハルトは推測」

「うん。これは絵で偽装されている扉だと思う」

「絵で隠せるものなの？」

「可能。移動手段が飛行機が主な為、ここまで近距離で近づく人間は稀。谷底まで降りようとする人間は尚更」

「あーそつかー、こんなの空にいた時に見つけろだなんて無理だよねえ」

「だからこそその現地取材。それでも引き当てるハルトの運の良さ」

「いや、チカのおかげだよ。ここまで来ようと提案してくれたのはチカだからね。ありがとうチカ」

「恥ずかしいからそういうのはいいって！　じゃあじゃあ！　ご褒美ちょうだい！」

「ハルト。何でもする券の事も忘れずに」

「分かった。ここを調査を終えたら一緒に考えよ」

偽装されている壁を三人で調査。一か所、穴が空いている場所を見つけた。ケイトが持つていた棒を慎重にその穴にはめ込む。そこにあるのが当たり前のように棒は引っかけかりを見せることなく嵌る。

ケイトに指示をされ、棒の左手に移動をし、言われた通り棒を押す。かなり渋く重たいが、少しづつ壁が動き始める。人が通れる幅になったので一旦停止。

「うっわ！　ほんとに何か出てきた！　でも……この匂いは好きじゃない」

この匂いは何度か嗅いだ事がある。人が亡くなられた時の、通夜や葬式で嗅ぐ匂いに近い。

「念の為、換気も含めて待機を提案」

「そうだね、これで中を調べる為にランタンとかを使ったら危ない……よね？」

「現時点では発火性のある匂いは感じられない。だが慎重に進める事を推奨。ハルトが見つけたかったモノが目の前にある可能性があるのなら尚更」

またしばらく待機。その間に二人に伝えておきたい事がある。

「二人共、ちよつといい？」

「どしたの？　ハルト？」

「この匂いから分かると思うけど、この先に私が見つけたかったモノがある可能性が高いんだ」

「ユーハンクの墓地」

「そう。まだ中がどうなっているか分からないから、こうなるって答えにならないだろうけれど……」

「墓荒らし」

「……うん。そうだよ。墓荒らしをする事になる」

しばらくの間、誰も何も口を開かない。私も何か言える気分ではないが、無理矢理でも口を開かなければ。これが私の目的なのだ。曾祖父の願い。曾祖父がイジツで生きていたかもしれない証を見つけるのに避けては通れない道。

「……まあ、探し人がそこで寝ているとも限らないんだけどね」

「そ、そうだよね！ 他の場所にいるかもしれないし！」

「そうそう。昔の人のお墓参りに来た気持ちで入ってみようか」

顔を軽く叩く。気合を入れて中に進入してみよう。ケイトが火の元の確認をしてくれる。問題ないようだ。ランタンを受け取り私が先陣を切る。

坑道を慎重に進む。落盤事故を防ぐ為か、木材で補強しているのが見受けられる。この為に運んできたのか。

しばらくすると、横に通路らしきものが見える。覗き込んでみると……小さな部屋がある。机、椅子、壁掛けのランタン。そして金庫だ。

調べてみようかと二人に提案して承諾される。

「うわぁーオフコウ山にあった物とは違ってキチンとしてるよね」

「重要視していたのか、はたまた消え去る時に慌ただしくてここまで手が回らなかったのか」

壁掛けてランタンを調べる。まだ使えそう。手元にあるランタンから火を移すと、

先程よりも周囲が見える。ケイトが金庫を念入りに調べている様子まで。

「やっぱあの鍵つてその金庫に使うのかな？」

「そうだと思うよ。手回しで暗号する形では無いみたいだし」

「ケイトケイト！ 早く開けて！」

「ここはハルトが」

「せっかくだから。ケイトに開けてもらいたいな」

感情には出ないが、興奮しているのは感じ取れる。チカも気づいているのだろう。はよはよとケイトにせがむ。

鍵を取り出し、慎重に差し込んでいく。ゆっくりと回される鍵。後から開くような音がした。レバーに手を置き、下す。開かれる金庫には……書類の束。

「ええ……また資料とかそんなのー？」

「これはかなり貴重な資料。工廠後で見つけた物と同じぐらい。いや、場所から考えればそれ以上の可能性が非常に高い」

「チカは何が入っていると思っただ？」

「うーん……お金？」

素直で良いかと思いません。

あの後、しばらくはケイトの独壇場であった。詳しい事はそのままケイトに任せて部

屋を見て回る。壁には絵も掲げられていた。

「これってウキヲエ？」

「かもしれないね」

「やっぱユー・ハングが持ち込んだ絵なのかな？」

「この場所が隠されていた以上はそうかも」

せつかくだから写真でも撮っておこうか。チカも入りなよ。はい撮るよー。ポチつ。スマホで撮影した写真は明かりが足らなくてチカの顔が少し怖い事になっていた。当然、怒られる。こんな顔してないし！ もっと可愛く撮ってよ！ ごもつともである。

ハルト。名前を呼ばれて振り向くと、何かを手にしたケイトが立っている。

「ハルト。これを」

手渡された資料。表紙に書かれていた文字は、戦没者名簿。胸がざわつく。

「そこにハルトの探し人の名前が記載されている可能性がある」

「そうだね、記載されていれば……亡くなった事が確定かな」

それが分かっただけでも、曾祖父なら帰って来いと言ってくれるだろう。それ以上、踏み込む事もない。この名簿を開けた瞬間。私はどうなるのだろう。

チカが私の服の裾を握って心配そうな顔で見上げてくる。ケイトも先程とは違う、少し落ち込み気味な顔。大丈夫。少なくともここにいるのは私一人ではない。大切な仲

間がある。

表紙を捲る。紙は数枚。名前と亡くなった理由。埋葬されている位置が記載されていた。ここから式守の名を見つける。一つずつ、飛ばさないように。

紙が捲られ次の一覧に、あった。式守の名が。曾祖叔父の名前が。この世界に来る時に、曾祖父から手渡された手紙に書かれていた名前と字が一致している。亡くなった理由は……失血死。その下に文として理由が書いてあった。

こちらの世界の住人を庇った際に出来た傷が原因。と。曾祖叔父は何らかの理由でイジツの住人を守り、命を落としたのである。

一言も言葉を交わした事のない人。顔も私が一方的に知っているだけの人。曾祖父の弟さんであるという事しか知らなかった人。それでもこの文を読むだけで伝わる曾祖叔父の存在。濃い霧で見えなかった曾祖叔父の姿がようやくよく見えた。

式守さんは昔からこんな人達ばかりなのである。おかしくてつい笑ってしまう。二人は心配そうに見つめてくる。そうだ。先に伝えないといけないね。

「探し人。見つかったよ」

「お……おめでどうでいいのかな?」

「ありがとう、チカ、ケイト」

「ハルト。大丈夫?」

「大丈夫、ではないかも。それでもすつきりした部分はあるよ」

答えに辿り着いた。死因についても分かった。埋葬されている位置も記載されている。

「二人にお願いがあるんだ」

何？ 返事が来る。

「この先に眠っている曾祖父叔父に二人を紹介したいんだ。私をここまで導いてくれた仲間達の代表として」

幾つかの部屋の一つであるこの場所。目の前には卒塔婆が立てられてあり、そこにも名前が記載されていた。片膝をついて挨拶をする。

「初めまして、ハルトと申します。貴方からすると……まあ曾祖父の曾孫です。訳ありまして曾祖父の代わりに来ました。そちらにはまだ曾祖父は訪れていないと思うのですが」

きつと元気にイサオさんを相手に頑張っているだろう。もう少しだけ待っててね。

「貴方に会いたくてここまで来ました。それまでの道のりで様々な人達に助けていただきました。代表として二人を紹介させてください」

二人を曾祖父叔父の前に案内させる。

「こちらのちんまくて可愛いのがチカ。無表情だけど可愛いのがケイトです」

「そりゃ小さいけどさ！　そもそもその紹介の仕方ってあるの!？」

「無表情なのは自覚はある。けど……」

怒る人と照れる人。対照的な二人。

「ごめんごめん。なんかつい。紹介できる人が側にいてくれて嬉しいな」

「もう！　自分でちゃんと伝えるから!」

チカとケイトがしやがみ込み、話しかけ始める。

「初めまして！　チカだよ！　コトブキっていう飛行隊で一番槍をしているんだ！　最

近ようやく電光石火のチカ！　って二つ名が付けられたんだ!」

「初めまして、ケイトという。チカと同じ飛行隊に所属している。こうして会えた事を

嬉しく思う」

親族以外の方がお墓参りをしてくれる姿は嬉しいものである。

「それじゃ、また来るね、えーつと……」

呼び方に困る。曾祖父叔父である事は間違いないのだが、とても堅苦しい。おっさん、おっさん、おじさん、おっさん……これは間違えて覚えていたやつだ。

「おっさんでいいんじゃない？　年齢を考えるとジジイ扱いされても困るんじゃない

「？」

チカが名簿を覗き込んで指さす。確かに、亡くなった歳を考えると、曾祖父と同じ扱いではジジイ扱いである。もう少しだけ柔らかくしておじさんと呼ぼうか。年齢性別問わず、心におじさんを飼えば誰しもがおじさんなのだ。

「それじゃ、おじさん。また来ます。可能であればそちらで会う前に曾祖父を連れて」

墓地から離れ、金庫の置いてあつた部屋まで戻る。

「ハルト。金庫の中身はどうする？」

「気になる物があれば持ち出していいよ。この世界の事を知る為にも大切な事だと思う」

「……止めておく」

「どうして？」

「道徳と倫理。ハルトの大切な人が眠っている場所。荒さずに済むのならそれに越した事はない」

「……ありがとう。ケイト」

名簿に関してだけは写真を撮る事にした。自分達以外の人も亡くなっている。もしかしたらこの中には曾祖父の手伝いをしてくれた人達の家族がいる可能性もあるから。

こうして、有るべき所に置かれていた物は戻され、オフコウ山、山頂へと戻る事となつ

た。

山頂に戻れた頃には既に日が暮れていた。たき火の準備をして、夕食を取る。いつもの楽しいひと時。そうして訪れるほんの僅かな静寂。どうしても色々と考えてしまう。

突如、後ろから私の頭を抱え込むように抱き着いてくる人がいる。チカだ。

「ハールト！ いま何考えてのー」

「チカの事」

「へあ!? あ、うん。って絶対に違うでしょ!?!」

「今日の出来事を考えていたから、間違いではないと思うんだけどなあ」

「そんな言い訳、通用しないよ！ もう!」

右側にあるチカの顔は怒っています。といわんばかりにぶんぷんと膨らんでいる。指で優しく触れて空気を抜く。

「ハルトー、あんまり考えても仕方ない事だつてあるよー」

「ソウダナー」

「ハルトの目的は達成できたじゃん！ おめでとう!」

「アリガトー。これもそれも、みんなが手伝ってくれたおかげだよ」

「有難みが薄いなー！ もっとこうパーっといこうよ!」

「家に帰るまでが冒険」

「ケイトに言われるとは思わなかった」

押し掛かる様にもたれてくるチカ。背中に触れる温もり。

「まー確かに。必要最低限の物だけ積んできただけだし、贅沢は出来ないけどさー」

「ラハマに着いたらご飯でも一緒に食べましょうか」

「それいいね！　さんせーい！」

「ケイトも賛成」

「決まりだね。それじゃちよつと早いけど寝ようか」

チカが背中から離れてくれたので寝支度をする。風も無く、寒いわけでもないの、このまま野外で寝る事にした。勿論、二人とは少し離れてだけど。おやすみと一声返ってくる声。星空はいつだって綺麗だ。

頭はすつきりとしている。すつきりとし過ぎていて。何故、どうして。身近とは到底、言い難い人が亡くなったという事実。なのにどうして今更こんな感情が沸き出てるのだろうか。

お墓参りが終わった直後から心に湧いてくるゴチャゴチャとしたモノ。中々整理がつかなくて眠れない。

星空を眺めていると、足音が聞こえた。その足音は徐々にこちらに近づいてくる。そ

して星空を遮るように覗き込んでくる顔。

「やーっぱり寝てないじゃん！ ハルト！」

「バレたし」

「バレバレだよ！ 夕食の後にぎゅーってしてあげたのに！ まだ落ち着かないの？」

「中々、自分の感情と思考がうまく一致してくれないのです」

「もう！ 仕方ないなあ」

手にしていた枕替わりの物を私の左側に置く。そしてまたチカは私の頭を抱え込むようにして抱きしめてくれる。

「辛い時は辛い！ ってはつきり言わないと通じないよ」

「辛いです。助けてください」

「よしよし！ ワタシが今夜はこうして抱きしめてあげよう！ そだ！ 三人で寝よう

よ！ ケイトー！」

起きていたのか、こちらに顔を向けるケイト。枕と毛布を持つてこつちきなよーと呼ぶチカ。流石に無理があるのではと言いたいが、現在、私は傷心中。チカの温もりが心地よい。

耳元に聞こえる足音。そして右側に置かれた枕と毛布。そしてケイトの姿。

「ハルト、辛いんだってさー。だからこうしてくっついて落ち着かせてあげよ！」

「流石にチカの体勢は恥ずかしい」

「えー、それじゃ！ 手を繋いであげてよ！ それだけでも違うよ！」

しばらくすると右手に暖かな手が触れる。繊細で、操縦桿を握りしめているとは思えないほど華奢な手がそこにあつた。

「心がね、ぎゅーってして辛い時は人と触れ合うのが一番いいんだよ！ ワタシも昔、チト兄にぎゅーってしてもらったんだ！」

「触れ合う事で落ち着く理由は？」

「分かんない！ でもイヤな気持ちとは正反対の気持ちか沸いてこない？」

沈黙が続くケイト。華奢な手から先程より少し力を感じとれる。

「幸せだなあ」

「でしよでしよ！ 今日特別だからね！ だからハルトも目を閉じてぐっすり眠るんだよー！」

「はーい」

「素直でよろしい。それじゃおやすみー」

もう一度、お休みをする。チカに抱えられている頭。ケイトに握られている手。先程までの心のゴチャゴチャとしたモノは一先ず収まったようだ。

不意に意識が戻る。自分でも驚くほど、あっさり意識を手放していたようだ。

まだ夜明けの時間ではないらしく、瞼がまぶしいという感覚は無い。このまま寝続けようと思っていたが、違和感を感じる。

相も変わらず私の頭を抱きかかえるようにして寝ているチカ。もう少し腕が閉まると完璧なヘッドロックの体勢である。

時より寝言が聞こえる。そして右側にいるはずのケイト。右手に感じる手の感覚は先程までと同じ。だが位置が異なっていた。

私の口元の傍にケイトの顔が、身体を横向きにして肩の辺りに預けるよう寄りかかっている。突然の事で顔を下げた。先ほどよりも閉まる腕。これはまずい。二重の意味で。

寝ている為、ゆっくりと少しだけ上下する身体。間近で見るケイトの顔。色白で、細く長いまつ毛。甘い香り。寄りかかる場所からはケイトから伝わる暖かな温もりと鼓動。

ケイトが何故この位置まで近づいてくれたのか、チカからのお願い、友人に対しての心配、親愛からくる行動。目を逸らすのか、見つめるのか。自分の事ながらしようもない。

それでも嬉しい。その気持ちは確かだ。この大切な想いは言葉にして伝えるべきだ

と思った。

「ありがとう」

少し調子に乗っておでこを重ねようとしたらハイ完成！
チカのヘッドロックだよ

！

第23話

「びっくりしたよー。朝起きたらハルト、魂が抜けてるんだもん！」

「魂は抜けていない。気絶による一時的な意識喪失状態。ケイトは肝を冷やした」

「驚くほど綺麗に腕が決まっていました」

「いやーゴメンってば！」

帰り道、空での会話。誰よりも早く起きたケイトに命を救われた私。

お墓参りを済ませたと思ったら見送られる側になるところであつた。原因は言わずもがな、チカの細腕である。

私の不届きな行動も理由の一つであるが、それは内緒である。

ラハマへ帰投するのだから、もちろんオフコウ山から離陸をしなければならぬ。こうして会話が出てくるのだから、無事に飛び立てた事は確かではある。

だが、離陸をする際の地面がなくなり滑降をしているごく一部の間、なんともいえぬいお尻のムズムズ感はもう二度と経験をしたくない。お墓のお引越、真面目に検討させていただきたい。

道中で郵便配達をしている姉妹の方と遭遇した。イジツでは空送で配達をするのが

普通なのだ、慣れてきたとは思ってもまだまだ興奮する要素が盛り沢山の世界である。

あと、郵便屋さんはどこの世界も早起きなのだな。とも。

見慣れた街並みが見えてきた。一泊二日の大冒険もこれで終わりを告げる。私のイジツでの冒険もこれで終わりか。まだ行ったこともない場所だらけで興味は湧くが、役目を果たさせた事の安堵が勝る。

ケイトの丁寧な三点着陸。羨ましい。私も帰る前に再訓練をしなければならぬ。いくら身体にも覚えさせた動作だとはいえ、この世界に来てからは一度も機体の操作をした記憶が無い。

歩き回り、本を読んだり、頭の方ばかり動かしていた。お尻のでっかい震電もさぞご立腹であろう。

「よっ、おかえり。その顔だと良い事があつたって感じだな」

「ただいま。皆さんのおかげで無事にお墓参りができました。ナツオさんありがとう」「いいってことよ。念の為、用意した物は使わずに済んだみたいだな。無事に帰ってきたならいう事はないさ。ちよつと耳貸せ」

「なんででしょう?」

少し屈むようにナツオさんに顔を合わせる。そつと私の頭にナツオさん手が置かれて一言。おつかれさん。

レオナさんに帰投報告をする。無事でなによりといわれ、頭を撫でられる。優しく触れてくれる暖かなレオナさんの手が心地よい。

「それでね！ ハルトつてば、寝ながら泣いてたんだよ！」

「チカ。それは言つては駄目」

「それ、初めて聞くんですけど!?!」

いつだ。どのタイミングで泣いていたのだ。自分の記憶には全くない為、しどろもどろな対応になる。押し殺すように笑うレオナさん。

「詳しい話はまた後日だ、今はゆっくりと休め。ハルトはこの後、マダムのところへ向かうのか？」

「その予定です。ご挨拶だけでも、と思つています」

「なら私も付き合おう」

「お願いします。頭を下げる。二人とは一旦お別れとなる。ありがとうね、チカ、ケイト。」

マダムの居らっしゃる建物までの道中。なんだか懐かしい。

「こうして一緒に歩くのも懐かしいな。まだそれ程、月日は経っていないはずだが」

「同じ事を考えていました。初めて歩いていた時は、今みたいに皆さんと仲良くやっていけるか不安だらけでした」

「そうか？ あれだけ空で質問攻めにあっていたじゃないか？」

「興味は合ったんでしょう。なんせ穴から飛び出してきたのですから」

「そうか……ハルトはあの穴からやってきたのだったな」

「ええ、目的を。探し人を見つける為に」

そこからは無言で歩く。そう、目的は果たしたのだ。問題はあの穴がいつまた開くか。これはアレンに頼る所が多い。後で訪ねてみよう。

レオナさん先導の元。気が付けばマダムの部屋の前。ノックをして帰ってくる返事。一緒に部屋へと入る。

「そう。見つかったのね」

「はい。そのご報告と感謝を伝えるに。多大なご助力をいただきありがとうございます」

「大したことはしていないわ。レオナにも伝えたのかしら」

私の隣に座るレオナさんを見る。

「先程、簡単にですが。感謝を伝えました」

「そう。レオナもご苦労様。少しは貴女も気が楽になったのでは」

表情を崩すレオナさん。多分、私の知らないイサオさん絡みの事だろう。命を救った時のイサオさんはどんな心境だったのだろうか。

レオナさんには悪いけど、敵機を撃墜するのが楽しくて意識をしてすらいなかった気がする。

「ハルト君はこれからどうするつもりかしら」

「穴の開くのを待つ間、アレンの足について試行錯誤しようと思います。後はユーリア議員に頼んでおいた方の到着を」

「連絡があつたわ。明日には着くそうよ。今度は何をするのかしらね、ハルト君は」

「余計なお節介だと思えます。でも大切な、キリエとナオミさんに伝えておかなければいけない事です」

「そう……上手くいく事を願うわ」

「区切りが良いので退席する事に。ソファアから立ち上がり扉の前へ行こうとするとマダムに呼び止められる。」

「一つだけ、無粋な質問をさせてもらえるかしら」

「なんなりと」

「探し人が見つかった時、ハルト君は何を感じ取ったのかしら」

「安堵です。写真でしか顔を知らないのに。言葉を交わした事があるわけでもないの

に。不思議ですよね」

「家族とは、そういうモノなのかもしれないわ」

ありがとう。マダムのご感謝を受け取り、退室する。

マダムとの対談が終わり、レオナさんの背中を追いかける。この道のりもまた懐かしさを感じる。

私の視線の先にいる方は引き返す道中で立ち止まり、こちらを振り返る。

「ハルト、確認させてほしい事がある」

「なんででしょうか？」

「先程、マダムに伝えていたキリエとナオミの話なのだが……」

「レオナさんはサブジーという方をご存知でしょうか？」

「確か二人の師匠のような方だったと聞いている」

「ならレオナさんにお伝えしても平気です。聞いていただけますか？」

「勿論。立ち話もなんだから、そのカフェにでも入ろうか」

テラスのあるカフェに行き、椅子に腰を下ろす。これはひよつとして周りから見たらデートなのでは。

正面にはいつも私の心配をしてくれるレオナさん。時には叱られるけれど、それは私の行いのせいなので仕方ない。

うん、どれだけ自分鼻屑に考えてもお姉ちゃんである。レオナお姉ちゃん。これはこれで良いではないか……。

「ハルト、注文はいいの？」

「あ、えーつと紅茶をお願いします」

店員さんに注文を頼む。それほど時間がかからずに運ばれてくる飲み物。紅茶は良い、単純にコーヒーは苦くて飲めないのである。

「それでは、サブジীর事に関してお伝えさせていただきます」

「頼む」

「実はこちらに来る前に、イサオさんからも少しだけ聞いていた話でした。コトブキの皆に出会わなければ知識として止めておく程度で終わつたと思います」

「イサオか……」

「十人十色ですよ。好意が出るか、悪意が出るか。無関心はいまのところ無いみたいですが」

「その事についても聞きたいが、今はサブジীরだな」

「はい。イケスカにいるイサオさんの執事さんから詳細を聞き、撃墜地点を教えてくださいました」

「理由は？」

「会話の流れの一つとして聞く機会がありました。こちらに来てからキリエとは親しい方だと知りました」

サブジーはキリエにとって師匠なのだろうか。空を教えてくれた人、突如消え去った人。心境は本人のみぞ知る。

「それで、サブジーが撃墜された場所に向かうというのか？」

「はい。お節介もいいところだと思いますが、少しだけ良い可能性もあります」

「どういう事だ？」

「アレンに聞いたのですが、赤とんぼでアレンの穴の調査に付き合わされたキリエがイサオさんの手の者達に撃墜された話です」

「ああ、流石に肝を冷やしたな。アレは」

「撃墜された二人は谷底へ不時着し、死んだふりをしてその場を凌いだと聞いております。アレンの指示があったとしても弟子がしていた行動を師匠もしている可能性があったとしたらどう思われます？」

「まさか！ 生きているとでも!？」

「ナオミさんにも同じ事を聞いてみるつもりです。もし同じような経験があれば、三人とも同じ行動を起こした可能性が……という事になります」

椅子に寄りかかるレオナさんはしばらく空を見つめていた。

お茶会は一度、終わりを告げる。続きは今夜の夕食後となった。

別れを告げてお昼ご飯の約束をしていたケイトとチカに合流。ケチャップ丼と謎肉が妙に好みの味で好きなのである。

昨日と今日の出来事を言葉にて伝え合う。私はそんなに動揺していたのか……。すつきりとした。ゴチャゴチャしてる。どちらやねん。どちらだろう？

チカ監修の私の百面相を聞かされて、私の心と恥じらいは限界地点を超えようとしている。こちらハートブレイク・ワン。お前たちの真正面だよ、チカ。

お昼もお開きとなり、チカは一寝入りするとの事。ケイトと二人でアレンのところへ足を向ける。

「それは大変だったね。おつかれさま」

「ありがとう。アレン」

「オフコウ山に墓地と当時の資料か……興味深い事は確かだけど、流石に気が引けるなあ。足も動かないし」

「動くようにこれからするんですよ。足、触りますよ」

「優しくしてね」

軽く抓ると、少し時間を置いてから痛つと反応がある。触れていると冷たいと文句を言われる。私の手は冷たいよーだ。

ノックするように足全体を叩く。ついでに脚気検査しまーす。ピクツと僅かにだが震える足。

「アレン。歩行訓練、サボっていない？」

「そんな事はないよ、ねえケイト」

「アレンは甲斐性無し」

「冗談も言えるようになったんだねえ、ケイト」

「甲斐性無し」

兄妹の会話を微笑ましく聞きながら、アレンの足に細工をする。いわゆるテーピング。一秒でもいいから立たせてみないと、この甲斐性無しは駄目かもしれない。ケイトが二度も言うぐらいなのだから。

父親の足にした時の記憶を脳みそからほじくり返す。出来上がったアレンの足は、あの時と同じ痛々しい見た目になっている。それでも可能性があるのなら我慢してもらうしかない。

「ハルトの魔法が見れるのかな」

「それには二人の協力が必要ですよ、甲斐性無し」

「ハルトにまで言われるようになってしまったよ」

「仕方ない。事実」

ベットの端で座らせ、ケイトと一緒にアレンの肩を担ぐ。

「駄目そうな時は意識だけでもベットへ倒れ込むように。お願いね」

「了解したよ」

合図と共にアレンを足で立たせる状態にする。後はアレンが腕の力を抜いて直立出来るかどうか。

少しだけいつもと違う雰囲気のアレン。穴の研究をしている時とも違う。緊張……するのかな、この人は。

肩にかかる力が抜けたのが分かる。アレンは先程と同じ目線の高さ。だが直ぐにベットへ倒れ込む。

「大丈夫、アレン？」

「久しぶりに高度六十センチクローリルを超えた気がするよ」

「冗談を言えるなら大丈夫だね」

「冗談ではないんだけどなあ」

ははは、と笑うアレン。鈍くはなつてはいるけど、歩行が可能になるかもしれない。以前と同じようにかと、問われれば分からない。

「足で立つというのは大変な事だったんだねえ」

「歩けない人が言うとお重みがありますね」

「そうでしょ？ 足を動かさなくなるような事が起きないのが一番だけどね」

「ごもつとも。ね、ケイト」

返事はこない。いつもより目を見開き、硬直している。ちよつと怖い。呼び掛けても反応なし、手を振っても反応なし。どうしたものやら。

「人間、自分の想像範囲を超えると固まってしまうんだね。ケイトも例外ではないよう
で安心したよ」

「そういう問題ですかね。流石にここまで反応が無いと心配になってくるのですが」
「なら触れてみればいいんじゃない？ 頬っぺたとか」

心配になりケイトの頬を触る。暖かくてサラサラとした肌。オフコウ山での出来事
を思い出す。

しばらく触れていると、目が動き、視線が合う。こちらが驚いてしまい指に力が入る。
少しだけ沈む指先。埋まるケイトの頬。

「ぶつ、あははは。ケイト、面白い顔をしているよ」

「ケイトがしている訳ではない」

「ご、ごめん！」

慌てて頬から手を放す。変顔をさせてしまった。でもとても柔らかかった。

「平気、驚いただけ」

「僕も驚いた。ケイトがそんなに表情を変えるだなんて」

「アレン」

「ごめんごめん。でも驚いたのは本当。久しぶりに足に力が入る感覚を体験したよ。嬉しいものだね」

「大見え切った手前、成功してよかったよ」

「失敗すると思っていた？」

「それなりに。アレンやケイトと違って都合のいい頭をしているからね」

でも、アレンの足に触れた時の感触。少しばかりではあったけど筋肉は付いていた。

隠れて訓練をしていたか、それともケイトや看護師の人に手伝ってもらっていたのか、真相は本人たちぞ知る。

「こんな感じで足を締め付けて。キツすぎるのも良くないからその都度、触れて感覚を覚えてね」

「了解した」

ケイトにテーピングの方法を伝える。立てると分かれればナツオさんに頼んでおいた器具が役に立つ。これからは厳しい日々が続くが、頑張れお兄ちゃん。何度も実験台にされて流石に疲れているけど。

日が暮れて、面会時間もそろそろ終わる。続きはまた今度にする事となり、ケイトと帰路へ。

しばらく歩くと立ち止まるケイト。昼前にも体験した記憶がふとよぎる。

「ハルト」

「何、ケイト」

返事は直には来ない。ただじつと、こちらを見つめている。夕焼け色に染まるケイトの姿が神秘的に見える。

何かを伝えようと、伝えようとする言葉は私にだって分かる。でも、この場合は素直に待つべきなのだろう。

長くて短い時。もうしばらくこうしていたい。意を決したのか、ケイトの口が開く。迎え入れてきちんと返さなければ。

「ありがとう。ハルト」

「どういたしまして」

ごく当たり前のように夕食の話になるが、襲い掛かる睡魔には勝てず。途中で分かれる事になった。心なしかケイトが寂し気に見えたのは……気のせいでは無いと思う。私は寂しい。

宿に戻り、そのまま布団に顔を埋める。一泊二日の大冒険。今になって身体が悲鳴をあげている。体力作りをしても中々こちらの標準値には達していないと身体中で感じる。

微かに聞こえるノックの音。寝ぼけながらも答える。扉を開けて入ってきたのはレオナさんだ。

そうだ、約束をしていた。もうそんな時間なのか。月明りに照らされるレオナさんはとても美しい。それも、直に消えてしまったが。

「ハルト。寝ていたのか？」

「すみません。布団に顔を埋めていたら寝てしまったようです」

「大丈夫か？ 今日はそのまま寝たらどうだ？」

「いえ、折角のお誘いですから。事の顛末もお伝えしておきたいですし」

布団から脱却して背伸びをする。骨の鳴る音が聞こえる。変な体勢で力尽きたせいだろう。

待たせていたレオナさんに準備が完了した事を伝える。ついてきてくれ。言われた通りに後ろをついていくと、そこには酒場があった。

「ザラ。待たせたな」

「レオナ。ハルト君は起きていたかしら？」

「いいや、ザラの言う通り。布団で力尽きていたよ」

どうやらザラさんには読まれていたらしい。少し照れ臭い。カウンター席で二人の間に座らされる。この布陣ですか。体験する逃げ場のない酒場。

昨日の出来事を簡単に二人に説明をする。ケイトとチカに慰められていたのはもうバレているのでそこについても。

「そう……七十年前の時にこちらにいらしていたのね」

「はい。亡くなった理由についても。あの文だけでは、はつきりとした状況は分かりませんが」

「確かに、推測や憶測だけで決めるのは悪手だな。だが私達の世界の住人を守ってくれた事には間違いない」

「そうね。それじゃ感謝の意味を含めて、乾杯しましょ」

樽ジョッキではない、グラスでの乾杯。

おじさん、こんなに素敵な人達に感謝されるなんて幸せ者だね。見つけたお札に何か良い事を起こしてくれてもいいんだよ。

「そうだ。ハルト君が無事に目的を達成できたのだから、いっぱい褒めてあげなくちゃね」

ザラさんの方に顔を向ける。そうだった、ザラさんのご褒美が待っている事をすつか

り忘れていた。アルコールで艶やかな雰囲気醸し出しているザラさん。

いまから無茶苦茶に褒められる。これは大人への第一歩、今の自分を超えてみせる。ありがとう、おじさん！

ザラさんから差し出される手。置かれた場所は頭。うん、ちよつとだけ予想できた。両手でわしやわしやとされたり頬つべた摘ままれたり。

これはひよつとして酔っ払いに絡まれているだけなのでは。でも幸せ。チョロイ自分はそのなりに好き。レオナさんはその光景を見て苦笑い。でも止めない辺りは楽しんでる。

酔っぱらったザラさんにむぎゅーとしてもらった翌日。唐突に表れた彼女に起こされる。

「アンタがハルト!？」

「はい、はるとです」

「あのジジイについて知っている事があるそうね！ 呼び出したのだから全部教えなさいー」

寝ぼけ眼で見つめる先には、サブジの事について聞いてもらいたい人物の一人。ナオミさんが立っていた。

第24話

「あれ、ナオミじゃん！ どしたの急に？」

「コイツに呼ばれたのよ」

「コイツってハルトに？ 二人とも知り合いだっけ？」

「今日始めて会うわよ。用事があるからキリエも来なさい」

「ええーまだ朝ご飯も食べてないんだけどー」

「どうせ毎日パンケーキでも食べてるんでしょ。一食ぐらい抜いたぐらいで死にはしないわよ」

「いやあーそれとこれはまた別問題だと思うんだけどなあ」

「い・い・か・ら！ それ以上食べると太るわよ！」

キリエのお腹を摘まもうとするナオミさんと、絶対阻止を崩さないキリエの場外乱闘が始まる。二人とも朝から元気だ。

宿まで足を運んでくれたナオミさんに、まだキリエにもサブジの事を教えていないと伝えると、私の首根っこを掴んでここまで運んでくれた。

時代劇で見た市中引き回しをまさか体験する事になろうとは誰が想像できたか。そ

れも女性の片腕で。

こうして本題に入る為の必要な人物は揃った。カフェに入り、コーヒーを三つ頼むナオミさん。私とキリエには選択肢がない。

運ばれてきたコーヒーをこちらの意も介さず口に運び、一息を入れる。キリエは気怠げを隠そうともしない。私はまだ舟を漕ぐ。

「ハルト、コーヒーでも飲んでさっさと目を覚ましなさい」

「あい……あい……」

「ハルトもまだ眠いつてさ。もう少しゆっくりしようよ。ナオミ」

「こいつが！ 私を!! 呼んだのよ!!!」

この庄は誰かに似ている。黒髪のショートカット。身体の線が出る服に、上から髪の色と同じジャケットを着こなしている。アイラインと口紅が映える、誰が見ても大人の女性。

今回の件でナオミさんと私を繋いでくれたユーリア議員と少しだけ似ている。少しだけね。

「ハルトがナオミを呼んだの？ 一体なんのために？」

「それを今から話すのよ！ いいからコイツを叩き起こしなさい!!」

「ハルトー、命が惜しかったら起きた方がいいよー」

キリエに大雑把に肩を揺さぶられる。そんなに揺らされると胃がもたれるっば。でも命は惜しいから頑張つて起きよう。

「おはようございます」

「私を相手にアンタも根性が据わっているわね」

「そりゃナオミの事を知っているわけはないだろうしねえ」

気が付けばパンケーキを頬張るキリエ。こっちはこっちでまた朝から重たい物を食べている。

「そうだったわね。だからこそジジイの事を知っているのよね」

「ジジイって……サブジীর事？」

「そうよ。コイツが私を呼び出した訳、イサオの野郎に撃墜されたサブジীর墜落地点を知っているのよ」

「え、ええええ!!」

朝から鳴り響く声。耳から耳へと通過される事によって脳みそが刺激を受ける。起きた。起きたぞ。

「何で! どうして!?! ハルトがサブジীর事を知ってるの!?!」

「こっちに来る前に少しだけ名前が出たんですよ。まさか知り合いの方と出会うなんて誰が想像できますか」

「でもでも！ それなら尚の事、撃墜された場所まで覚えているの!？」

「イケスカにいるイサオの執事から詳細を聞いたのよ」

「へ、なんで？」

「なんでって、サブジীর知り合い。キリエと出会ったからじゃない」

「まだ混乱状態に陥るキリエをナオミさんが呆れたように見つめる。落ち着かせるようにゆっくりと碎いて喋る。

「執事さんから詳細を聞いてから伝えると決めるまでに少し悩んでいたんだ。余計なお節介だと思っていたから。けど……イジツつて撃墜されたぐらいでは感傷に浸る暇もない事に気づいてね」

「そりやそうよ。毎日が空戦よ。落とす方も落とされる方もいちいち考えていたらキリがないわ」

「私は落とす側だけど。機嫌よくコーヒーに一口。ここからあの話を聞いてみなければならぬのか。難易度が高い。

「落とす側のナオミさんに質問です。落とされた事つてありますか？」

「無いわよ!! いや、昔の事も含めればあるかもしれないけど……」

「サブジীরさんがイサオさんに撃墜されて、溪谷に不時着。その際に死んだふりをしていた可能性があります」

「はあ!? あのジジイが? 死んだふり!」

「まだ可能性ですよ! 不時着した場所が場所なだけに実際に近づいて確認した人がいないのです。イサオさんは撃墜が出来た事を喜んでいてだけで確認した執事さんも上空から眺めての確認。機体の中で防風に寄りかかっていた。それだけなのです」

何かを思い出そうとしているのか、急に沈黙するナオミさん。

「弟子ともいえる二人が死んだふりをした事があれば、師匠は……色々と可能性を感じませんか?」

「……あるわ。まだひよつこの頃に。だけど」

「キリエは?」

パンケーキを刺したフォークを握る手も止まり、思考中。つい最近、アレンとの調査で同じ事をしたのは聴取済み。それがアレンの指示だったとしても。

「……ある。アレンの調査の手伝いをした時に墜とされて死んだふりをしろってアレンに言われて」

「指示があつた行動だとしてもどうでしょうか?」

「……行くわよ」

「はっ。」

「今から行くわよ!! ジジイが撃墜された場所に!! こんなところで考えるだけ無駄よ

!!

「はい!! 直に準備しますので少々お待ちください!!」

一泊二日の大冒険詰め合わせをまた用意しなければ。杭とロープの確認に食料とかそんなもんでいいのかな?! 慌てて席を立ち、準備に向かう。

「キリエ。さつさとそのパンケーキ食べちゃいなさい。支度が済み次第飛び立つわよ」

「う、うん。分かった」

「しっかし、とんでもない爆弾を抱えていたわね。完全に予想外からの手掛かりよ」

「……サブジー生きてるのかな?」

「分からないわよ。だから死んで骨になっているのか。どっかに逃げ出しているのか。それを確認しに行くんでしょうが」

「そ、そうだよ。うん。どちらかが分かるんだよね」

「そういう事よ。さ、胃袋にソレぶち込んで。覚悟を決めなさい」

「分かった!」

必要な荷物を再びぶち込み、ナオミさん達の元へ戻る。そのまま格納庫へ。ナオミさんの機体は零戦三二型。なんでもサブジーさんと同じ機体だとの事。

それが原因で、昔キリエから一方的に敵対されて何度も空戦に陥ったらしいのだが、

それはまた今度。

「私には目的地点までの空路は分かりません。なので撃墜地点について詳細を説明致します。サブジーさんが撃墜された地点はここらハマからは南東。タネガシと呼ばれる場所からは北。カイチからは西南西に位置する場所だと聞かされました」

手帳を取り出して確認する。地図に書かれているのと同じ地名がある事を確認。間違いは無い。ただそこまで辿り着く方法は私には分からない。

「山岳地帯に渓谷もある地形ね。めんどくさい所で落とされたものね」

「それでも着陸をして谷底まで降りる予定ですか？」

「当然！ 機体だけ見つけてハイおしまいで満足出来るわけないじゃない」

「なら着陸ができそうな場所を探す時間も必要ですね。谷底に降りる為の準備と知識と経験は、先日実践したばかりなので問題はないです」

口笛で返される返事。アンタも中々やるじゃない。お褒めの言葉をいただく。

「最短で行くのならカイチで補給。念入りに行くのならロータを経由。キリエ、アンタならどうする？」

「うーん。カイチに向けて直行だと最短ではあるけれど長時間の飛行と迷子になる可能性もあるし、ロータに寄れるなら楽ではあるけど時間がかかるよねえ。どうしよ」

「はあ……ハルト、アンタは何かある？」

「カイチに直接向かうのであれば道中飛行経路から少しだけ迂回をすれば撃墜……不時着地点を上空視察する事が可能かもしれない。ついでに着陸できそうな場所の確保も。ですがキリエの言うとおり疲労と迷子になる危険もあるかと思えます。ナオミさんが迷子の部分を何とかできるのであれば気合で直行に一票」

「……ハルト。アンタ戦闘機の操縦は出来る？」

「えーと……飛ばすだけでいいのなら。隼一型であれば訓練は受けましたけど」

「ハルトも隼に乗ってたの!？」

「赤とんぼなんていう素晴らしい機体がああ時は無かったのです。隼で空の飛び方を叩き込まれた後に震電への転換訓練を受けていたんだ」

あの地獄のようなイサオさんの機動を思い出して身体が震える。会いたくて震えているわけではない。

「なら決まりね。ハルト、アンタも隼一型を操縦して私たちについてきなさい。赤とんぼの速度に合わせていたら日が暮れるわ」

「もしかして、今日中にサブジーさんの確認までするつもりですか?」

「当たり前よ! アンタもさつき言ったわよね、気合で直行って」

「いやいや! カイチまで赤とんぼの後ろで揺られながら行く。っていうのが私の前提なのですか!？」

「そんな甘つちよろい事を言ってるんじゃないわよ！」

「機体はどうするんですか？ 私の機体は一応震電という事になるのですが」

「借りる!!」

「そんな無茶苦茶な！」

ポン。と私の肩におかれるキリエの手。諦めろという事か。そういう事なのか！

「さあ！ カイチに向けて飛行。道中でジジイの機体と着陸地点の確認。カイチで補給が済み次第引き返してジジイの生死を確認するわよ！ 準備をしなさい！ 出すもの全部出しな！」

「ナオミ、下品だよお」

久しぶりの操縦。しかも単一型。搭乗時間だけでいえば単の方が確かに長いが……操縦席に座れば思い出せるのだろうか。エンジンの始動から。

左手側にある調速器を押し込み、隣にある小さな桿を手前に引く。

カウルフラップを開く為に右手側にある桿を回す。

計器を見て燃料量を確認。点火開閉器を閉に合わせる。

再び左手側にある手動ポンプで燃料を加圧する。計器を確認しながら3、5に目盛りの針が指す事を確認。

スロットルを一回、二回と押し戻しをして始動の準備を開始する。

「ナツオさん、お願いします」

「ほいきた！」

イナーシャハンドルを隼一型に差し込み、回転させるナツオさん。エンジン始動前の独特の唸り音が響き始め、ナツオさんからの合図。点火。

点火開閉器を両手で動かし、右手側の小さな桿を回す。

足元中央にあるペダルを踏み込み、エンジンを始動させる。

少し詰まった音からプロペラが徐々に回り、排気音が響き渡りエンジンが唸りを上げると同時に回転数が上がっていく。

機体が前進しないように足元にある左右別れたラダーを両方踏み込み、機体を静止させたままにする。

油圧計の針が4を指し、エンジンの回転数の安定を確認、ラダーを左右順番に踏み込み尾翼の左右の動作を確認。

操縦桿を押し戻しをして尾翼の上下の動作を確認。更に操縦桿を左右に倒し、主翼に付いている補助翼の動作を確認。

操縦桿の黄色いボタンを押し込み空戦フラップの出し入れに問題がない事を確認する。

調速器を手前に引き、スロットルを少し押す。

点火開閉器を再び操作して右まで動かし両に戻す。異常がない事を確認。

調速器を押し、戻しを一度行いエンジンの回転数の低下と上昇を確認。

右側にある電盤のスイッチを入れる。脚信号灯の点検、青色に光る。

スロットルを素早く押し戻りをして点検を行う。大丈夫、これで飛び立てる。

「それじゃ行つてきます！」

「おう！ 気をつけてな！」

滑走路に向けて隼を動かす。前方の視野が確認しづらいので少し頭を傾ける。

前方には二人の機体が目に入り、その後ろで静止する。

先に飛び立つ二つの機体。綺麗で優雅な離陸。あの二人の様になれるまではあと何

十時間、機体に触れていれば私にも出来るのだろうか。

安全バンドを装着して、スロットルを少し押し、機体を加速させる。

操縦桿をゆっくりと押し込み、後輪の一輪が浮き始める。

そして前方の視界が開く。速度が五十キロを超えるのを確認して操縦桿を引く。

上昇し始める隼。足を仕舞う、赤く光る脚信号灯。操縦桿を操作して旋回をし、二人

の後ろにつき、防風を閉める。

「よかった……無事に飛べた……」

「アンタ。どれだけ自信無かったのよ」

「ずっと地上で調べ物をしてきたもので。どこかに連れていってもらう時も飛行船やコトブキの皆に後ろに乗せてもらっていったのです」

「はあ……よくそれでイジツまで来たものね」

「それでも探したい人がいたのです。今のナオミさんなら理解していただけたと思います」

「そうね。それもこれもアンタが来たおかげね。少しだけ料金を割り引いてあげるわ」
「ユーリア議員なら逆に正規料金を受け取れと押し付けてきますよ」

「あら。アンタが払うつもりは無いわけ？」

「値段を聞いて逆立ちしても無理な事に気づきました。ユーリア議員の足元にしがみつきます」

「情けないわね。借金してでも払いますとか言えないわけ？」

「そうすると返済までずっとナオミさんのお尻を追いかけ続ける事になりますけど」
「既に一人いるから十分よ」

お相手がいらつしやるようにより。荒野の雌豹と呼ばれるナオミさんのお相手の事だ、きつと凜々しくて頼れる人なのだろう。

こうして無事に飛び立つ事ができ、ラハマからカイチまでの長い道のりが始まる。それでもお日様が昇りきる頃には近郊まで近づけるのだから、戦闘機は速い。

サブジーさんが不時着した地点までもう少し。二人と喋っていると時間の進みは早い。

「空賊に出会わなくてよかったですよ」

「戦闘機を狙うような馬鹿がいらないわよ。キリエ以外にね」

「あれは仕方ないじゃん！ サブジーと同じ三二型に乗っているナオミが悪いんだよ！」

「あらあ、キリエちゃん。その三二型に何度墜とされかけたのかしら？ 一度は落としてあげたわよね？」

「んぐつ、今度は落とされないし！ 落とすし！」

「ほっほおー、帰ったら対戦してみましようか。腕前の確認がてらね」

「ナオミが勝つ事前提で喋ってるよね！ 結果論で喋ってるよね！」

「当たり前でしょ。まだまだケツの青いガキに落とされるような私ではないわよ」

「ぬぐぐぐ！」

「そろそろ目標地点の上空に辿り着きますよ。探索を始めましょう」

「りようかい。ジジイの機体を一番早く見つけた人に奢りね！」

「はあ!? ナオミに奢ったら何も残らなくなるじゃん！」

「なら奢られる側になる事ね。ほら探した探した」

なんとも仲の良いお弟子さんでありますかな。私は奢る側なのは目に見えている。

前を見て隼を飛ばす事に集中していないとまだまだ怖い。山岳と渓谷のある地形で谷底を注視していたら激突。なんて笑うに笑えない。

しばしの時。いくつも分かれた渓谷。GPSなんて物があれば直に分かるのだろうが、ここはイジツ。無いものねだりをしても始まらない。

高度を保ち下を覗き込む。二人は私なんかとは比べ物にならない程、低い所を飛んでいる。谷底は私の視力では岩の大小ぐらいしか分からない。そして、その時がやってきた。

「何かある！ 主翼の片側が折れてるけど機体はひっくり返っていない！」

「キリエ！ 尾翼に描かれているマークは分かる!？」

「……赤い鳥!? サブジーが乗っていた機体に描かれてると同じのだ！」

「でかしたキリエ!! 今からそっちに向かうわ!!」

ナオミさんと同じくキリエの傍まで近づく。邪魔にならないように高度は保ったままだけだ。

「ナオミ!!」

「どうしたのキリエ!？」

「防風が開いているよ！ 操縦席に誰かが乗っている様子がない!!」

「っ！ という事は……」

「サブジーはまだ生きてる!？」

「ああ！ もう！ ここまで来てお預けだなんて！ キリエ！ 一度カイチに向かって補給を済ませるわよ」

「でも！ サブジーが!」

「今更慌てた所で変わりはしないわよ！ 確実に調べる為にも私達は万全の体勢で臨むべきよ。分かるわね？」

「……うん。分かった」

「素直でよろしい。周りを覚えていて。直に戻わよ。ハルト!」

「はいい！ なんでしようか!」

「飛ばすわよ！ しっかりついて来なさい!」

「了解しました！ 死んでもついていきます!」

「ホントに死ぬんじゃないわよ！ まだやってもらいたい事があるんだから!」

「分かりました!」

第25話

カイチに辿り着いてからの行動は早かった。ナオミさんは到着早々にガソリン！

八割よ！ 満タンにしたらぶん殴るわよ！ と整備の人に言葉をぶん投げる。キリエは機体の中でそわそわ。私は生理現象が我慢できなくなってきたので猛然と手洗いの為突き進む。うーとイレトレイレ。

きちんと手を洗いハンカチで拭き拭き。格納庫への帰り道に屋台があつたので二人のお土産に買つていく事にした。

道に迷う事もなく無事に到着。まだ補給は終わっていないようで一安心。ナオミさんが搭乗している三二型に近づき声をかける。

「ナオミさん。事のついでに屋台で食べ物を買つてきましたが食べます？ 串焼きですけど」

「あら、気が利くじゃない。いただくわ」

「ではどうぞ。口元と手を拭く物も置いていきます。飛び立つ前に回収にきますね」

サンキューと返事をいただいたかと思えば既にかぶりついている。流石、荒野の雌豹。このままキリエの元へ向かう。

「キーリエ」

「うわっ！ びっくりした」

「大丈夫？ 中々おちつけないみたいだけど」

「まさか本当に……ってハルトを疑ってたわけじゃないよ！ ただ実際に目にするとな体がぞわぞわするっていうのか。チリチリするっていうのか」

「そっか。まあとにかくパンケーキでも食べない？ 屋台で可愛い大きいのがあったから買ってきたんだ」

「食べる！ お腹も空いてきたし！ ありがとハルト！」

「どういたしまして。また後でゴミとかを回収にくるね」

私も搭乘してきた隼の傍の近くでパンケーキを頬張る。

今回お借りた隼一型はナツオさんが利用している機体だ。コトブキ飛行隊の機体から流用できる部品をかき集めて一機に仕立てあげた予備機。

部品ごとに迷彩も違い、主翼の端には整備班のマークが描かれている。イメージカラーは黄色みだ。急遽お借りした予備機とはいえ、コトブキの皆が使用していた機体を操縦する日が来るとは思わなかった。

流石のナツオさんでも二機作る予算で三機を作り上げるよう事は出来ない。

補充が完了しそうなので、また二人の元へ行きゴミの回収。再び隼一型のエンジンを

始動させるために押ししたり引いたり。問題ない。二人を追いかけるように再び空へと戻る。

行ききの半分以下の時間で再び不時着地点に到達する。サブジーさんの機体が谷底にあることを確認。ナオミさんからの指示で着陸できそうな場所の指定を受ける。

「私が先に降りるわ。その次がハルト、最後にキリエよ」

「この場所へ着陸出来るか不安なのですが」

「私の着陸を良くみていけば簡単。少し地面が荒い程度よ」

「それが凄く不安なのですけど」

「ここまできたら腹を括りなさい。ほら行くわよ」

ナオミさんが着陸を試みる。ここら一帯では唯一の平地。救いなのがそれなりに直線が長い事。車輪が接地して機体が揺れているのが見えるが、問題なく成功し、機体を端に避ける。

次は私の番。震電で培ってきた三点着陸をいつもより意識すれば降りれる。そう自分に言い聞かせて足を出し、徐々に高度を下げる。

車輪が接地して同じように機体が揺れるが、速度は徐々に低下して機体がひっくり返る事もなく無事に着陸が出来た。

出すものは出したはずなのに何かが出てきそうなくらい怖かったけど。

三二型の隣まで機体を移動させて停止。気が付けばキリエが着陸を試みる。私のよ
うなたどたどしい着陸とは違い、簡単にこなしている。同じ機体でこうも違うのか。

荷物を取り出し、サブジーの機体が見える位置まで近寄る。

「はあ、本当に見つかるなんてね」

「防風、やっぱり開いてるよね」

実は私、双眼鏡を持つてきたのですよ。アレンから借りた奴だけど。ユーリア議員が
使用していて羨ましかつたのと、二人ほど視力が良くないので。

荷物から取り出して覗き込もうとしたら、横からナオミさんに颯爽と取られた。酷
い。

「三二型にあの塗装、尾翼に赤い鳥、間違いないわね。ジジイの機体よ。だいぶ土埃で汚
れているけど」

「ナオミ！ 操縦席はどうなってるの!？」

「防風は開けられて、血痕のような物は見当たらないわ。当然骨もね。少なくとも不時
着した時点では生きてたでしょうね」

ナオミさんからキリエに双眼鏡が渡される。それ、私の。

しばらくの間、キリエも双眼鏡で不時着した機体を確認していたが、心を決めたのか
ゆつくりと双眼鏡を下す。

「後はこの渓谷を降りるだけね。ハルト、谷底まではいける？」

「もう少し機体の傍まで近づいた後に降下地点を調べます。この高さであれば降りると事体は可能です」

「そう。それじゃ歩きましょう。ここから先はアンタが頼りなんだからね」

「頑張ります」

三人で機体側の崖まで歩く。この時ばかりは終始無言。私も集中する為に心を整える。

谷底にある機体のほぼ真上まで辿り着き周囲を探る。近くに第二懸垂下降に適した岩を見つける。

念の為に双眼鏡を使い横からも確認。谷底まで接地している。これなら上に乗っても安定しているだろう。

ハーネスを装着して、谷から少し離れた位置に杭を打ち込む。

前回と同様に二本に束ねたロープを通した部品をハーネスに着用。ロープの長さも十分。杭も安定して外れるような事は無い。

「それじゃ準備をします。戻ってきますので少しお待ちを」

「頼んだわよ、ハルト」

「気を付けてね、ハルト」

各々の性格が出る返事を受け取り、降下開始。焦らずに。再びリコさんの声が頭に響く。

ケイトやチカのように器用には出来ないが、ゆっくりと確実に降下して岩の上に降り立つ。

再び、崖に向けて杭を打ち込む。少し硬いが杭は無事に刺さる。

同じ手順でロープを通し、着用。第二懸垂下降を開始する。足から伝わる感触が少し変化する。

意識をしつつも、手元はしつかりと。こうして谷底まで降下する事に成功する。

周囲の警戒もするが危険生物も無し。本当に油か何かに弱いのだろうか。チカ先生のご意見に耳を傾けてしまいたくなる。

「降りれたよー！」

二人に手を振り無事を伝える。後はもう一度、上まで戻りハーネスの着用と降下の手伝いをしなければならぬ。

手間ではあるが手順を知らない二人を危険に晒すよりは絶対に良い。

最低限の物だけを身に付けてまた来た道へと戻る。意外と登るほうが楽なのである。筋肉痛は必須だけど。

「アイツ、意外とやるじゃない」

「凄いやね、オフコウ山でも今みたいに降りたみたい」

「あんな場所で谷底まで降りたの？ よくやるわね」

「うん。それでも会いたい人がいたんだよ」

「その立場が今の私達つて事ね。はあ何かを考えてあげたくなるわ」

谷底から二人の元へただいま。大口叩いたけど結構辛い。深呼吸をして息を整える。

「さて、どちらから行きます？」

「私からお願ひするわ。流星に待ちくたびれたわ」

「すみません」

「謝んな！ 本気にするな！ 頼んだわよ」

頭をくしゃくしゃにされる。一言断りを入れてハーネスを着用させる。

降下時のロープの扱い方。岩上でのハーネスに取り付ける部品の着用順番。注意事

項を伝えてナオミさんは降下していく。

それを見つめる私とキリエ。

岩上に到着して教えた手順を行い再び降下。無事に谷底まで辿り着き手を振る。や

はりこの世界の住人は何かが違う。

「それじゃ今度はキリエの番」

「うん。お願ひ」

ナオミさんの時と同じように同じ事を伝える。二度目かもしれないがそれだけ危険なのだ。

とはいえ、私の心配も他所に谷底まで辿り着くのだから羨ましい。荷物を身に着け私も再び谷底へと向かう。

無事に到着した時には、二人は既に機体を調べている最中であつた。思い入れがあるのだろう、感慨深げに機体を見つめている。

左主翼が半分以上も失い、プロペラはへし折れている。近くで見れば見る程、損傷の激しさが分かる。

積み重ねられた土埃が歳月を感じさせ、機体の色は灰緑色……より暗めの暗緑色。この色は日本にいた時にイサオさんの資料で見かけた。

やはり七十年前のあの時にサブジーと共にやってきた機体なのだろうか。

胴体部分の埃を払うと、何かを塗りつぶしたような跡がある。白と赤。色々と仮説は尽きないが、口に出すべき時ではない。

「この機体の操縦席に乗せてもらって初めて上空から空を眺めたなあ」

愛おしそうに機体を優しく撫でるキリエ。ナオミさんも思う事があるのだろう。同じように機体を優しく手を置いている。

この機体と搭乗者の過去については二人が共有する思い出があるのだろう。少しだ

け機体から距離を離し、手ごろな岩に腰をかける。

そつとしておこう。太陽は再び沈み始め、茜色に染めていく。機体も、二人も。

辺りが闇に包まれる前に、たき火の用意をする。周囲を探索して多少ではあるが拾えた燃えそうな物と荷物に入れてきた僅かな薪。ついでにゴミも燃やしてしまおう。

経験した事を参考に荷物の構成を僅かに変えた。あの短時間で整えられたのも、オフコウ山での出来事があつたおかげだ。

三人でたき火を囲む。

二人の口から聞かされるサブジーにまつわる昔話。楽し気に、嬉しそうに、二人の共有を分かち合える喜びに嬉しさを感じる。

見上げればいつもの星空。日本にいた頃は余り空を見上げる事なんてなかったな。

楽しい時間も終わりを迎える。キリエが船を漕ぎ始めて、口数が少なくなる。

「眠くなつてきた……」

「寝なさい。朝起きれなくなるわよ。明日またここをよじ登らなくちゃいけないんだから」

「うん。先に寝させてもらうね。おやすみ」

キリエに毛布を渡す。たき火から少し距離を置いて横になる。

ナオミさんと二人きりになると、暫しの間、静寂が訪れる。たき火から聞こえる、薪が割れた音が響く。

「ハルト。聞きたい事があるわ」

「なんででしょうか？」

「この谷底から道具無しで登る事は可能？」

辺りを見回すが、道具を使わずに岩登りを出来そうな高さでも地形でもない。

当時の年齢と体調を加えると流石に。少なくとも私は無理だ。

「無理です。命を懸けてまで登る理由があつてもここから登るのは無謀です」

「そうなるをやっぱり移動したのかしら」

「操縦席に何も残されていないのであれば、そう考える方が妥当かと」

「はあー、これだけあちこち徘徊されると骨になつてもらつた方がマシだった気がするわ」

「一つ解決すると直に新しい問題が発生しますね。でも良い方向だと思えますよ」

「そうね。ハルト、アンタには感謝してるわ。ありがと」

「どういたしまして、お値段なりの価値はありましたか？」

「むしろ私が払わなければいけないわよ、何がいい？」

「特に何も、お節介なので気にしないでください」

「それじゃ私の気が済まないわよ」

腕を組んで悩み始めるナオミさん。本当に気にしなくてもいいのに律儀な人だ。

「ご飯でも奢ってもらいチャラにした方が良さそう。よし！　と一言あつてから私の隣に移動してくるナオミさん。

「ハルト、一ついい案が浮かんだわ」

「何でしょう、つて別にご飯を奢ってもらえればいいのですが」

「そんな事で済むわけじゃないでしょう！　そこに落ち込んでいる痛い気な可愛い女の子が横たわっているわよね？」

「え。どい？」

「アンタ目ん玉ついてんの!?　キリエよ！」

頭を掴まれ思いつき握られる。握力が半端ないよ！

「ごめんなさいごめんなさい！　います！　可憐でか弱い女の子がそこに！」

「よかつたわ。お互いに同じ認識で」

「その……キリエがどうかしたんですか？」

「いまあの子は突然の出来事で色々と参っている状態よ。頭はもちろん心もね。そんな時に一番効く方法は知っている？」

オフコウ山の出来事が頭によぎる。確かにね。そうだけどね。

「えーっと、人の温もり……ですかね」

「分かってるじゃない。なら答えは知ってるわね、私は寝るから後は好きにしなさい」

「それはおかしい」

「おかしくないわよ！ さっさと慰めてこいっての！ その延長で何かあっても私は寝てるから知らないわよ！」

「そんなの無いです！ 無理です！ それなら尚の事ナオミさんでいいじゃないですか！？」

「私がやったらお礼にならないでしょ！ ほら行った行った！ 抱き寄せて撫でてりやすぐよ！」

卑猥な仕草を手で表現するナオミさん。なんて雌豹だ。こんなに獰猛な女性を飼いならせるナオミさんのお相手を知りたい。

このままでは不毛な争いになるので枕と毛布をもってキリエの傍に近づく。オフコウ山でもらった事をするだけ。慰めるだけ。

近づいてみるが反応がない。寝てる。良かった、少し距離を置いて寝て、朝に怒られれば済みそうだ。

そう思いキリエの正面となるべく右側へと移動したが、そんな簡単に済むわけもなかった。

寝ているのは確か。呼吸に合わせて身体が僅かに動いているから。だけど目から流れるモノを見てしまった。

私とおじさんの距離感でも、私の心は欠き乱れた。ではキリエとサブジーさんの距離感ではどうなる？ 安堵？ 悲しみ？

いずれにせよ、涙を流している事には違いはない。

キリエの隣で並ぶようにして両膝をつき、左手を地面に置きながら、ハンカチで優しく涙を拭き取るとキリエの瞳が徐々に開かれる。起こしてしまったか。

「……ハルト？」

「ごめん。起こした？」

私の持つハンカチに視線を移すキリエ。自分が泣いていた事に気づいていないようだ。

理由があつたとはいえ寝顔と泣き顔まで見てしまったのだから謝らなければ。

体勢を戻そうとした時にハンカチを持つ手の裾を掴まれる。反動で傾く身体。バランスを崩してキリエと並ぶように倒れてしまった。

それでもキリエの動きは鈍い。まだ夢の中にいるのか、私が近くにいっても動揺するよ
うな行動をとるわけでもなく、ただ横になって涙を流している。

「キリエ？」

「よく分かんないの」

「分らない？」

「サブジーが生きてるかもしれないのに。嬉しいはずなのに」

数日前に自信が経験した出来事。あの辛さをお節介からキリエに味わわせてしまった事。その発想に至り自責の念にかられる今の自分に対しての嫌悪。

そんな事を考えている場合ではないと振り切り、体勢を整え横向きになり私の胸元にキリエの頭を寄せ、抱きかかえるようにして優しく撫でる。

私にしてくれたあの二人の様に。ナオミさんにいい様に扱われて気もするが、これは自分の意思である。慰めるだけ。

微動だにしなかったキリエが自分の頭を更に私の胸元に押し込む。握るように掴まれる服。聞こえてくる声。言葉が見つかからないまま、それでも手は止める事をせず。ただゆっくりと時間が過行く。

それからしばらくして、落ち着いたのか掴まれていた服は緩やかに解放されていく。

最初の時のような力強さは無い。ただ軽く摘まむ程度になった。ハンカチを渡そうとしたが、その前に顔を胸元に押し付けられ拭うように頭が動く。

「……ありがと」

「(イ)ち(イ)そ」

「なんでハルトまで？」

「それはまあ。色々とあるのです」

「なんだそれ」

キリエの顔を直接見ようとはせず、たき火が視界に入るにしている。時々揺れ動く髪が目映るがそれは許してもらおう。

そろそろ離れないと誰かさんの目論見通りになってしまう。

軽く頭をぼんぼんと叩いて離れようとする。だが、キリエが離してくれない。

手に再び力が入り服が引つ張られる。

「あの、そろそろ離れていいですか」

「駄目」

「流石にこれ以上は失礼だと思っておりますが」

「ダメ」

「このままだと添い寝になりますよ」

返事の代わりに服が引つ張られる。意識のある内に泣いてしまったせいなのか幼児退行を起こしている。

服は掴まれたまま。位置の関係で手を使って引き離すこともできず。覚悟を決めるしかないのか。

「離れるよ?」

「だめ」

臉上に眩しい光を感じる。気が付けば朝だ。

結局、あの後もキリエの頭を撫で、時折背中を擦っていた。

キリエが眠りについた後に離れようとしたが私の方が先に寝てしまったようだ。

胸元にあるキリエの頭。掴まれたままの服。あの状態でよく眠りにつけたものだと感心する。

ただ、頭を撫でていたはずの右手はいつのまにかキリエの両手の中に納まっていた。絡まった指。離す事もできず、目覚めても身動きがとれない。仕方ない、もう一度寝よう。正気に戻ったキリエに何をされるのか少々不安ではあるけれど。

開いた臉を再び閉じ、眠りにつこうとした時に胸元で動き始めるキリエの頭。どうやら起きるようである。殴られるか、蹴られるか、罵倒されるか。最初に物理要素が浮かぶのはイジツのせいだと思いたい。閉じている臉に力が入る。

背伸びでもするようにキリエの身体が動かされ。そして驚くような動き。それはそうだ、起きたら私の胸元に顔を押し付けていたのだから。その顔も離される。

何もされませんようにと願っていたが胸元に衝撃が走る。やはり物理か。覚悟を決

めていたがキリエの行動は少し違った。

夜の時のように。それ以上かもしれない。私の胸元に顔を押し付ける。

ゆつくりと呼吸をする音。擦り付けるように頭を動かす。拘束された右手はキリエの両手に撫でられ、放され、重ねられ、絡められる。

何度も様々な発音で私の名前を呼ぶ。頭が動かされ、キリエの息遣いが首元に感じる。

再び呼ばれる名前。頬に当たる温もり。その先から伝えられる感謝の言葉。

私が出てきている事を知っているに違いない。心臓の鼓動が高鳴るのを一番近くで感じ取るのは、他ならぬキリエなのだから。

ラハマへの帰り道。どうしても明け方の事を意識してしまうが。それをナオミさんが茶化する。

「キリエちゃんも立派な大人の女性だったわけね」

「は、はあ!? 最初から大人だし!」

「それもそうかー。そうじゃなきゃ朝からあんな事は出来ないわよね」

「あ、あんな事ってなんの事かなー。記憶にないなー」

「誰かさんの胸元で乙女をしていたのは誰かしらねえ」

「あーあーあー何も聞こえません! 無線が不調のようです! 喋らず前を向いて

飛行した方がいいと思います！」

散々弄り倒すナオミさん。明け方の出来事は全てお見通しのようだ。

キリエが私の胸元で頭を動かしていた時に、ほんの僅かの好奇心で開いた目の先にニヤつくナオミさんと目が合ったから。つまり、全員知っている。

会話が尽きる事を知らない。気が付けば既にラハマ近郊。一先ずは着陸をしてからという事になった。

「おーつす、お帰りー。今回はどうだったんだー?」

「タダイマツ! 万事全テ問題アリマセンデシタ! オ疲れ様デシタ!」

ぎくしやくししながら一人で格納庫から離れて行くキリエ。

「ナツオさん。機体ありがとうございます」

「お、おう。何かあったのか?」

「何か起きなければあんな風にはなりません」

「そうか……そうだよなあ」

腕を組んで納得してくれるナツオさん。班長の理解力は高い。後ろで大笑いするナオミさんの声が辺りに響き渡った。

マダムに報告をするために向かったが、先約があるとのことで会う事はできなかつた。

その代わりに帰投した事を伝えてもらおうように対応してくれた方にお問い合わせを。
せつかくなのでそのままアレンがいる病院へと向かった。

「なるほど、無事にサブジの機体を見つけた事ができたんだね」

「この短い間で二度も谷底まで降りる事になるとは思いませんでしたけどね」

「迅雷ちゃんにお節介焼きたかったんでしょ。でも無事なら何より」

「ありがとう」

ナオミさんは直ぐにラハマから飛び立っていった。次の仕事があるからと。雌豹の遅しきはイジツでも指折りだと思う。

「そうそう、報告しておくことがあったよ。再び同じ場所に穴が開く。二ヶ月ぐらい先だけどね」

「そっか……もう帰らないといけないのか。二ヶ月後なんてあつという間だよね」

「そうだね。きつと直ぐさ。それまでに穴の事について書きまとめておくから持ってきてきなよ」

「いいの？　かなり貴重な情報だと思うけど」

「大丈夫。頭に入っている情報を書き写すだけだから」

アレンの頭の中はどうなっているのだ。やっぱり普通の人は構造が違うのだろうか。

「キリエ！ ハルト！ 無断で出撃をしてどこへ行っていたんだ!!」

レオナさんに呼ばれて会いに行く。その道中でキリエと出会い、お互いに片言になりながらも同じ人に呼ばれた事を確認して一緒に向かう。そして叱られる。

「これで一体何度目だ！ コトブキ飛行隊を名を貶めるような行動はあれだけ慎めと伝えてあるだろう!!」

キリエに視線を移して聞いてみる。私、隊員だっけ？ 違うはずだけど。じゃあキリエのせいかな。いやいや！ 今回はハルトも共犯だし！

視線を合わせている事がレオナさんにバレて更に怒られる。理由を伝えてもそれはそれ。伝言を残しておくことも出来ただろう。ごもつとも過ぎて反論できず。じつくりとこつてりと絞られていった。

窓から見えるイジツの空。あと二ヶ月。ようやくゆつくりと出来るだろうと考えたのがそもその間違いだった。

第26話

本日のイジツは曇り空。もしかしたら雨が降るかもな。街中で出会ったナツオさんが嵐にならない事を祈っていた。

先日のレオナさんのお説教はとても長かった。無論、心配をしてくれてのお説教なのは重々承知なので反発なんかできない。

ザラさんがなだめてくださり、しばらく反省をさせる為に直立不動の命令が下される。

その最中にまたコトブキ飛行隊の名前が出るが、その言葉が口から出てきた時のレオナさんの視線は私に向いていた。

名を貶めるな、その時はキリエに向けられていたから間違いない。こういう所もコトブキの皆がレオナさんを慕う要素なのだろうと思う。うっかりさんな意味で。

そうだ、思い出した事ある。先ほどアレんに伝えられた事をレオナさんに伝える。

私、そろそろユーハンクに帰ります。一瞬、空気が固まり隣から驚きの声があがる。

「ハルト！ 帰るの!?!」

「はい、帰ります。二ヶ月後に同じ場所で穴が開くそうです」

なんだ、今すぐじゃないのか。安堵のような溜息を聞いて私は幸せ者だなと実感する。私を心配してくれる人達がイジツにもできました。

眉間に皺を寄せてお説教をしていたレオナさんの顔は戸惑いに変わり、私に何かを伝えようとしている。だが、ろくろ回しをする仕草から先に繋がらない。ザラさんからのフオローが入る。

「まだ先の事じゃない。そろそろラハマに落ち着いていられるのかしら？」

「はい、目的とお節介まで焼けましたので帰るまではずっとラハマに居られる予定です」
「そ、そうか。ならよかった」

レオナさんが一度喉を鳴らして取り直し。

「コトブキ飛行隊に仕事が舞い込んできてな。明後日ラハマを出発しなければならんだ」

「えっレオナ、私聞いてないよ」

「昨日の事だからな。賛成五、反対ナシ。キリエには反省の意味も含めて今回は着いてきてもらうぞで」

「そんなあー」

「それが嫌なら必ず一言は私に伝える事。いない人間にどうやって採決を取れば良いのだ？」

「ごめんなさいい」

「キリエの仕事っぷりに期待してるぞ。よし、この話はまた後日だ。ハルトもマダムにご心配おかけするような行動は控える事」

「ごめんなさい」

レオナさんの手が伸び、ごく自然のように頭に置かれる手。ちよつとだけわしやわしや感が強い。

キリエもして欲しいみたいです。そう伝えるとレオナさんはもう片方の手でキリエの頭をわしやわしやする。

昨日の今日で色々あったから気晴らしになればいいのだけれど。

こうして迎えたコトブキ飛行隊のいないラハマ。心なしか静けさを感じてしまふ。とはいえ私のする事はアレンの手伝いであり、アレシマ・イケスカに旅立つ前のような頃に戻っただけなのである。

「いやあー静かだねえ」

「思っけても口にしますかね？」

「嵐の前の静けさ、つてやつかもよ」

「やめて、その手の話は口に出すと本当に起きるから」

確かに。他人事の様に笑い出すアレン。少し腹がたつたので揉んでいる足を抓る。遅れて反応がある。焦らずに治しましょうね。

ユーハングの事、穴の事、会話の材料になる事はいくらでもある。最近の出来事ですら濃厚過ぎた。自分でも再確認するように言葉にして喋る。

「ハルトと出会ってから、ケイトは本当によく表情が変化するようになった」

「もう少し分かりやすくなると良いのですけど」

「表情筋がまだ追いついていないんだと思うよ。それでもハルトにもケイトの表情は分かるんだろう？」

「分かるうと努力をしていますから。内に秘める喜怒哀楽が大きい事も」

「あまり嫉妬にかられるような事を起こさせないで欲しいなってお兄ちゃんは思います」

「身に覚えがあるので気を付けます。お兄ちゃん」

また二人で笑う。日が暮れて夜の帳が下りる。そろそろ帰るね。そうアレンに伝えたと同時に鳴り響くサイレンの音。一体なにが。

「あーごめんね。変な事を言ったせいで本当に嵐が来たみたいだ」

「どういう事？ これはなんの音？」

「ラハマに敵がやってきたって事さ。その内マダムから連絡が来るだろうし、しばらく

「ここにいたら？」

イジツに来てから初めての戦闘。心がざわついて落ち着かない。

失礼な話になるけど自警団だけで追い払えるのだろうか。不安が募る。

「大丈夫だって。以前にも空賊がラハマを襲撃してね。色々とおつて空賊は更生して和解に至ったんだ。その内の二人はラハマにいるよ、つてその話は置いて。そのおかげでみんな自分の事は自分で守るつて意識が高まったんだ。自警団の他に街中には対空機関砲も。そんなわけで僕らは大人しくしていた方が彼らの邪魔にならないつて事さ」

アレンが私の手を握つてそう伝えてくれる。握り返して深呼吸。ふうと息を吐き出すと少しだけ落ち着けた。

「ありがとう。アレン」

「どういたしまして。ほらきた、マダムからの取り次ぎ電話」

看護師さんと呼ばれてアレンを車椅子へ移動させ、電話のある場所まで連れて行く。何度かの相槌の後に置かれる受話器。

「気になる事があるから二人とも至急きてほしいつてさ」

「私も？ やっぱり震電絡みかな」

「さあ？ 気になるなら尚の事。向かった方がいいんじゃないかな」

車椅子を押してマダムの元へ。街中に響くサイレンがいつものラハマの空気を一変させている。夜でも賑やかな町に。あの美しい星空は見えない。

「待っていたわ」

「お待たせ致しました」

「空賊が出たんだって？」

「所属不明機を空賊と呼ぶならそうよ」

「不明機？」

「分かっているのは複数の機影をレーダーが捉えただけ」

「それだけを理由に僕らと呼んだわけじゃなさそうだね。何か思うところがあつたんじゃないのかな？」

「マダムがキセルに口を付ける。ゆっくりと吐き出される煙。喫煙を好まれるのは存じておりましたが、実際に見る姿は初めてである。」

「いままでは気を遣ってくれていたのだろう。その状態でないという事は。」

「嫌な予感がするのよ。羽衣丸が占拠された時のように」

「えーつと……つまりどういう事でしょうか？」

「この部隊は囷の可能性があり本体は別にいるかもしれないわ」

「本体が別。つまりレーダーの捉えている機影よりも更に現れると。私でも分かる。」

これは大変な事になると。

「うーん、自警団の質と量。町との連携による対空機関砲だけで追い払えるかなあ」

「相手の目的次第よ。あの時は正体を隠したイサオ所属の者達が羽衣丸を占拠、イケス力防衛という大義名分の元、墜落させる事が目的だった。では今回は何かしら」

「震電。で間違いはなさそうだね。やつぱり強奪かな？」

何かあるとイサオさん。悪い出来事が起こるとイサオさん。震電も元はイサオさん。あの人は本当に好き勝手この世界で動きまわる！

これを解決できないのならこの先もイサオさんが決めた事に従えという事か。

「イケス力で執事さんに会った時に言われました。イサオさんを盲信する連中がいると」

「……元イサオ所属の残党とでも呼べばいいかしら」

「現在もイサオ所属だと彼らなら思っているだろうね。いやはや、コトブキがない時に大変な事になってきたなあ」

また他人事のように笑う。町に被害が出れば自身にだって危険が及ぶかもしれないというのに。

「いないから襲ってきたのでしよう。仕事を与えてラハマから離れた可能性もあるわね。忌々しい」

「それでハルトはどうしたい？ 奴らに震電を与えれば町の被害は最小に収まるかもしれない」

イサオさん所属の人達に震電を引き渡す。そうすれば被害は最小限で済む……訳が無い。引き渡してその後の保証は誰がする。

ラハマはイサオさん側からすれば忌むべき町。オウニ商会とコトブキ飛行隊が本拠地としている町だ。

イサオさん本人の意思はともかく盲信するような連中がそのままハイさようならをする訳がない。

結局やるべき事は一つだ。これさえもイサオさんの手の内であれば乗り越えなければならぬ壁だ。

「奴等に震電を与えるつもりはありません」

「ならどうするつもりかしら。このまま本場に本体が登場したら震電は強奪されるわ。町にはついぞと言わんばかりに被害を与えていくでしょうね」

「私が震電で出撃をします」

「実戦経験もない貴方が？ 出撃してどうするのかしら。まさか敵機を撃ち落とすとかなわないわよね」

「私が戦闘行動をおこしても直ぐに落とされるのが目に見えています。それでは引き渡

すのと結果は変わりません」

「では何をするのかしら」

「震電の性能に頼り誰の手も届かない場所まで飛ぶ事です。このまま自警団と町が敵機と交戦状態に陥ればそれさえも叶いません。街に潜伏中の残党が震電を強奪をする可能性も捨てきれません。このまま相手の計画通りに進まされるぐらいならば」

「先に出撃して震電を逃すと。仮に残党が潜伏しているとしても自警団と共に震電が出撃する……奴等にとっては一番の奇策かもしれないわね」

「上は寒いよー。酸素は薄いし気圧は下がる。飛んでいるだけでも想像より辛いよ」

「戦えない私が足を引つ張らずにいま出来る事はこれぐらいです。辛さなら我慢します。結局、皆さんに甘えるって話ですが」

キセルの灰を落とす音と共に姿勢を整えるマダム。

「私の予感から始めた推測よ。まだ決まったわけじゃないわ」

「マダムの予感。アレンの推理。コトブキのいないラハマ。置かれたままの震電。疑うには十分だと」

「用心して進めておくに越した事はないね。もし大当たりなら忌々しい奴等に一泡吹かせてやれるかもよ」

アレンがマダムに言い放つ。二人とも悪そうな顔を始めた。ひよえええ。

「ハルト、貴方に依頼よ。今すぐ震電に搭乗して上空に避難してちょうだい」
「分かりました」

「アレン。貴方はここで相手の動向を可能な限り推測して。最悪の事態を想定してね」
「はいはい」

「あとは酒場に飲んだくれてる奴等も使えば数にはなるでしょう。時間がないわ。今すぐ行動して」

『いやあーハルト君も大変だねえ』

「すみません、町長。こんな事態を呼び起こしてしまい」

『いやいやハルト君だけのせいではないよ。こういう事がまた起きてもいいようにみんな訓練を続けてきたのだから』

現在の高度は約六千五百クーリル。下を覗けば層積雲。こんなに高い位置に来るのは久しぶりだ。

イサオさんとの訓練にキリエに追い掛けられたあの頃を思い出す。

マダムが不安定要素を一つずつ潰した結果。町長も雷電に乗って駆り出される事に。ラハマへと近づく所属不明機に今も自警団が応答を呼び掛けている。

『こちらはラハマ自警団。所属不明機に告ぐ。直ちに所属を伝えよ。警告に従わない場

合は撃墜も辞さない』

所属不明機の数は八機。四機を一つの編隊にしてこちらに向かつてきているようだ。

『クソ、曇り空のせい空が暗すぎる。相手の機体が良く見えない』

『我々の仕事は偵察だ。確実に視認できるまでは焦るな』

時折、無線を通じて自警団の声が聞こえる。所属不明機側に赤とんぼが一機。ラハマ近郊にそれぞれ一機ずつ偵察の為、飛んでいる。

『所属不明機。直ちに所属を伝えよ。これ以上の進行は敵とみなし撃墜するぞ』

尚も返答のない不明機だったが、突如、散会を始める。

『こちら赤とんぼ一号！ 機影を確認！ 機体は疾風！ 黒塗りの疾風だ！』

『マダムからの情報通りか……。全機に告ぐ。相手はイサオの所属部隊だ。絶対に一対一で戦うな。突出するな。地上と連携を取っていくぞ』

『おう！ 自警団の魂見せてやるぜ！』

『コトブキ無しでは何も出来ないと思われたら心外だからな。追い払う事ぐらいはしてみせるさ』

『ここでラハマに被害が発生したら鍛えてくれたチカ姉さんに顔向けができねえ！』

『傭兵部隊、こちらの事は任せてくれ。マダムからの情報通りなら……。』

『こつちに本命が来るってわけか』

『アドルフオ、敵機が偵察をすり抜けてくる可能性だつてある』

『はいはい分かつてるよ。ちゃんと前見て操縦してるよ』

『ここでコトブキに助けられた恩を返せないで何がエリキト興業だ！ 野郎共！ いくぞー！』

『アンタ、油断せずに』

所属不明機と自警団が交戦を開始する。町からの対空砲火が噴きイサオ部隊に向けて放たれる。相手は率先して自警団に対して攻撃を行おうとはしない。

『空を眺めながら交戦とは暢気な連中だ』

『高嶺の花ほど見つめたくなるものさ。油断している間に数を減らすぞ』

一部の機体は急上昇を始め、震電に対して機銃を放つ。手に入らないなら破壊するつもりなのか!?

疾風ではこの高度まで届かない事は無線で通達済み。それでも機銃を撃たれば当たる可能性は十分。

こちらも再び上昇を開始して高さを利用して逃げる。自分の想像とアレンが言つていた以上に厳しい。

『おいおい。敵さんあんな場所からケツを追いかけに行きやがったぞ』

『ふざけやがって。眼中にねえつか』

『焦るな、震電を狙いに行った機体が下降した時を狙えばいい』

自警団団長が冷静さを保つように呼び掛けている時。イサオ部隊の一機が主翼から火を噴く。

『敵機から火が出てるぞ』

『誰だ!?! 誰が当てたんだ!?!』

『町長だ! 町長が一機撃墜!』

雷電に乗った町長がイサオ部隊を一機撃墜。震電を狙い機銃掃射をしていた一機が推力を失う。それを逃さずに機銃を当てる町長。

『ラハマの貴公子をなめるなあああ!!』

『あちらは楽し気で羨ましいよ』

『アドルフオ』

『そうはいうがよ、フェルナンド。余りに音沙汰がなさすぎるぜ』

『何も無ければそれに越した事はない。マダムからは報酬は頂いているのだから』

『そりやそうだがよお』

ナサリン飛行隊の二機、エリキト興業の四機が自警団とは反対の位置を飛行している。あちら側が陽動部隊だという事を考えてだ。

赤とんぼが偵察で先行しているが、現在の所は報告は無い。

『俺たちも早いところ四機編成に戻りたいぜ』

『その為にも今回の仕事を成功させなくてはな』

『ああ、傭兵は信用第一だからな』

二人の会話に割り込むように無線が飛ぶ。

『こちら赤とんぼ四号！ 機影を確認した！ こちらから来る機体も黒塗りの疾風！

数は十以上！』

『噂をすればなんとやらだ』

『我々の目的は防衛だ。数では劣っているが地上からの援護もある。エリキト興業、よ

ろしく頼む』

『おう！ 任せておけ！』

『こちらこそ、お願いします』

イサオ部隊と傭兵部隊が交戦を開始するかと思われた、だが相手はそのまま直進を続ける。一部の敵機はすれ違い様、後方射撃を受け墜落していく。

『おい！ どうなってやがる！ 俺達をまるつきり無視かよ！』

『わからん！ 自警団！ そちらに敵機が向かっている！ 我々を無視してまでの強行軍だ！』

『震電は遙か上空へ。もはや我々の手に届かない場所にいる』

『相手の方が上手だったという事か』

『コトブキを引き離れたまではよかった。だが地上からもなんとかするべきだったな』

『それは我々の矜持に反する。盗人共と同じ扱いはゴメンだ』

『ああ。それに我々の目的は震電以外にもある。この日を逃せば二度は無い』

『イサオ様の震電が手に入らないのであれば破壊するのみ。もはやあの震電は我々の敵だ』

『その為にも空に舞うあの震電を引きずり降ろし破壊せねばならない』

『あの震電を、町を、全てを』

無線から各方面に飛んでいる他の赤とんぼからの報告が入る。こちらは外れを引いたように何も見当たらない。

『残念ながらこちらは外れか』

『仕方ない。だが戦闘が終わるまでは持ち場を離れずに警戒を続けるぞ』

『了解。帰ったらアイツラに奢ってやるか』

『新婚の嫁さん泣かせるような事はするなよ』

『ははは、裏切り者に乾杯だ』

『まったく……おい、何か聞こえないか?』

辺りを見回すが何も見当たらない。いくら層積雲があるとはいえ全てが見えない程、暗いわけではない。

『機体が震えているぞ!』

『どういう事だ、とにかく連絡を』

『おい! あそこを見ろ! 雲の切れ目だ!』

あれは!? 馬鹿な!? 雲の中を飛行し続けてきたとでもいうのか!?

『こちら赤とんぼ三号! 雲の中に爆撃機が一機! 以前ラハマを爆撃しようとしたあの大きな機体。富嶽です!!』

富嶽。イサオさんがラハマに向けて送り込んだ大型の爆撃機。本人曰く超でっかくて快適な爆撃機!

それなら爆弾積まないで物資や人でも運ばばいいじゃないかと言った記憶がある。今こうして実物を目に見ている。

自分の遥か下方に想像し難い大きな物体がプロペラを六つも回して飛んでいる。あんなに大きいモノじゃ滑走路が足りないですね。ごめんねイサオさん。

ラハマへと近づく富嶽。周りには護衛機すら存在しないというありえない状況が目の前で起こっている。衝撃と戸惑いは隠せない。

だが分かる事は一つ。私がここで富嶽を落とさなければラハマに甚大な被害が出るという事。

赤とんぼ三号からの連絡後、イサオ部隊は息を吹き返すように動き始めた。自分達の間などどうでもいい。ただ富嶽に敵を近づけさせなければと。

事実、いま飛行中の戦闘機では最も早い疾風に搭乗している彼ら。富嶽に向かおうとした機体を確実に落として自警団、傭兵部隊を足止めしている。

その中で疾風を振り切れてかつ、自由に動ける機体。つまり私と震電である。

「私がやらないといけないんですかね!？」

『そうだねえ、ここにきてようやく震電の性能が見られるね。僕は嬉しいよ』

「性能って! 嬉しいって! アレン馬鹿かな!？」

『あはは。今のハルトの喋り方も嬉しいなあ。日頃からそう喋ればいいのに。もつと魅力的になるよ』

「嫌なこつた!」

性能などと言われても。そもそもこの震電はオリジナルとは程遠い、異質同体、キメラである。曾祖父が……うん、楽しそうにエンジンと機体を弄り倒してたわ。イサオさ

んと一緒に。

『こうして補助役をしてあげるから、可能なら落としてよ』

「可能ならつて落とさないとラハマの町が吹っ飛ぶでしょう!？」

『そうだね、なかなか景色が良い町になると思うよ』

「駄目じゃん!」

『駄目じゃないよ。これは前回の爆撃があつた時の出来事の再現。コトブキ飛行隊がない自分達の現状さ』

「だとしたら余計に!」

『ハルトはきつと自分のせいだと思つているだろうね。それは違う。逆に今、ハルトがいてくれたから富嶽撃墜の機会があるのさ』

見透かされている。

『まっ落とせなくても気にしないでつて事さ』

「気にするよ! せっかく慣れてきたのに!」

『おや、ラハマを気に入つてくれたのかい? 嬉しいな』

「当たり前でしょ! 思い出たくさん夢いっぱいだよ!」

『なら頑張つてもらおうしかないね。ん、マダムが一言あるそうだよ』

『ハルト、聞こえているわね』

「は、はい！ 聞こえています！」

『建造中の羽衣丸に傷一つ、つけたら許さない』

羽衣丸。街中より外れで建設中なのは記憶にある。ロマンの塊みたいな飛行船だから。

富嶽の方向を考えると……当たる。どう考えても。つまり落とせと申している。

『死んでも落とせてさー』

「流石に分かるわい！」

『いいかいハルト、君のいる高度は爆撃機に対して優位な位置にいる。相手を追うようにしながら下降して、上から主翼を撃つんだ』

「主翼。主翼ね」

『そう。どちらか片方だけでいい。上空から攻撃した時に当たった側を集中して狙うんだ』

「片側。片側」

『その後は失速するような機動をとらない事。追いつけなくなっちゃうからね』

「ほいほいほい」

『機銃に気を付けて、下腹部にも何基か設置されているから』

「お腹に機銃ね」

『後はお尻を追いかけて主翼にあるエンジンを止められればおしまい。簡単でしょ』
「どこがですか!？」

『あはは、さつきも言ったけど。止められなくても恨みやしないよ』

「先程のマダムの声、凄いやつでしたよ!？」

喋っていたら少しだけ落ち着いてきた。下方には富嶽、雲は切れ目。攻撃を開始するには今しかない。

「それじゃ行つてきますよ!」

『いつてらっしゃい。気を付けね』

震電を下方へと向け加速し過ぎないように調節をしながら富嶽へと近づく。

相手の射程距離に入ったのか、機上からの雨のような銃弾がこちらに向けられる。横切るだけの弾が防風越しからも音をたてて通り過ぎる。

まだ、射程距離に入らない。一方的に撃たれ続ける状況だがこれを耐えきらなければならぬ。

身体に感じる重力はイサオさんの後ろに乗っていた時よりも数段マシだ!

射程圏内に入り照準器に富嶽を収める。実践で機銃発射装置を押し込む日が来るとは。指に伝わる感触と共に放たれる四門からの機銃。命中確認もできずに横を通り過ぎる。視界が悪いせいで大ききの把握しきれない。衝突しないように距離が開いてし

まう。

『命中。プロペラ一つの停止を確認。ハルトからみて左側が当たったよ』

「左ね！」

『万全を期すなら、あとはもう二つかな。頑張つて』

「ありがと！」

機体の操作を行い失速を出来る限り止める。それでも少し距離が開く。スロットルを押して追いつくまでの間も富嶽からの機銃が放たれる。

『富嶽のラハマ到達まで残り二十キロクーリル』

可能な限り近づき後ろから追い抜くようにして富嶽を撃つ。当たっているはずなのに止まりやしない。

『残り十五キロクーリル』

震電の速度には余裕があるはずなのに。弾は当たっているはずなのに止まらない。

『残り十キロクーリル』

私の能力ではここで止めなければ。再び震電から放たれる機銃。四門のどれかが主翼に当たり富嶽から火が出る。よしこれなら、そこで油断をしてみました。

富嶽の中央腹部から放たれた機銃は、通り過ぎるほんの一瞬に震電のエンジン部分に突き刺さり機体に衝撃が走る。

初めて味わう感覚と共に身体が後ろに引つ張られる。前のめりになっていた頭を後ろにぶつつけ意識が飛び始める。

何かが聞こえる。多分アレンの声だ。走馬灯か、最近の出来事が頭を過っていく。

イジツであった出来事。お世話になった人達。コトブキ飛行隊のみんな。ケイト。キリエ。そこに現れる誰かさん。うるさい。やかましい。イサオさんの飛び方なんて。飛び方なんて!!

「貴方にしか出来ないよ!!!」

機首を思いつきり上げてエンジンを絞り失速したまま上方向の体勢を維持する。その上を富嶽が通り過ぎる瞬間に機銃を放つ。

何か衝撃を感じるが確認する事ができない。なによりも脱出をしなければ。

機体はそのまま宙返りになり最後の力を振り絞り水平飛行になるように操縦桿を操作する。

プロペラを搭載されている爆薬で破壊に成功を確認。パラシュートを装備して防風を開け勢いよく飛び出す。

私の目の前には二機、墜落していく機体が見えた。富嶽と震電。どちらもイサオさんの夢のような機体が地面へと落ちていく。

感傷に浸りたいが地面が近づいてくるのを思い出す。パラシュートから着地つてど

うやるんだっけ。教わってないよ！

嫌な音と衝撃で今度こそ、意識が飛んだ。

第27話

全身が痛い。特に足が。震電から脱出を図り、パラシュートが開かれ着地した事までは覚えていた。瞼を開いて辺りを見渡す。

この部屋には見覚えがある。アレンのいる病院だ。

やはりあの音は……痛みが走る箇所を確認する為、頭を動かして見ると左足にボルトが刺さっているのが見える。がっちり固定されているようだが見るからに痛々しい。

でも左足一本で生き延びられたのだから良かったのかな。イサオさんと共に日本へ現れた震電。イジツへと私を導いてくれた震電。そのせいで色々と問題も発生したけれど思い出がたくさんの機体。

足が治ったら残骸の一部でも拾わせてもらおうかな。

考え事をしていたら少しだけ落ち着いてきた。そして、一番大事な事も思い出す。羽衣丸は？ 傷一つ、つけたら許さないってママ……マダムが！

首を動かしても確認しようがないのだが、どうしても気になってしまいベットの上で右往左往。

そんな中、こちらに向かう足音と喋り声が聞こえノックの音と共に部屋の扉が開かれ

る。

「ハールト、起きたー？ 元気してるー？」

「チカ、病院内の騒音は禁止されている」

「騒音って！ ちょっと呼び掛けただけじゃん!？」

聞きなれたいつもの二人の声だ。無事にお仕事から帰ってきたんだと安心する。

「ハルト、何やってんの？」

羽衣丸の事が気になつて小刻みに揺れる頭。喉から声が出てこない。これでは先日のレオナさんと同じではないか。

「つて起きてるじゃん！ みんな呼んでこないと！ ケイトはセンサーとかアレンとか呼んで！」

チカは走つてまた来た道を引き返していく。危ないよ。ケイトも一言、待つてと告げて呼び出しに行く。流石に走つてはいないけれど早歩きはしている様子。

先に戻ってきたのはお医者様と看護師さん。意識の確認。現状を優しく教えてくれた。全治三ヶ月。穴が開くまであと二ヶ月って聞いたんだけど！

しばらくは安静にしてリハビリはサボらない事。君が持ち込んでくれた器具を自己実験してくれるなんて嬉しいよ。この医者もマッド系だっ！

説明が終わり、お医者様と看護師さんが部屋から退室すると同時に、部屋へと入つて

くるレオナさん以外のコトブキの皆とアレン。

「ハルト！ 目が覚めたんだね！ よかったあ……」

「キリエやチカのように落ち着きのない人です。このような姿にまでなって……」

「素直に喜べよ！ 仲間だろ！ ワタシ達がいけない間にラハマを守ってくれたんだぞー！」

「ハルト。二度と無茶はしないで」

「そうね、その姿はいつみても落ち着かないわ」

「この騒がしい感じはいつものコトブキだ。うん。楽しさや嬉しさがこみ上げてくる。

「やあ、お隣さん。これからはご近所暮らしだね」

「いままでと大して変わらなくなっていますか？」

「そうだね。むしろハルトの足がそうなってしまった事でより身近な関係になれるね」

「それだけは絶対にないです」

「はあ、フラれちゃった。あの戦場を共に駆け抜けた友人なのに」

「それはそれ、これはこれです。でも感謝していますよ、本当に」

再び扉の音が開く音が聞こえる。レオナさんだ。私の右側に立ち、腰に手を当てている。これはあれですね。

「ハルト!! 何度言えば分かるんだ!! 無理も無茶も無断行動もあれだけ控えろと言っ

ただろ!!」

はい。怒られています。仕方ないのです。戦場で急遽マダムからの追加依頼が発生しまして。

レオナさんの認識では私はコトブキ飛行隊の傘下に置かれているのだ。今思えばイサオさんから頼まれた時からこういう認識になったのではないかと推測してみる。借りは作らない主義の人。

根性頼りは下の下! 戦闘機乗り失格だ! はい。その通りでございます。レオナさんの正論に打ちひしがれつつも、心の隅っこでは嬉しさが湧いてくる。馬鹿な、新しい何かに目覚めつつあるのか。そんな事を考えていると、起こしていた身体をレオナさんが抱きしめてくる。頭に埋まる感触。埋まるんだこれ……。

「ハルト……ラハマを救ってくれて、ありがとう」

「もむみあみあみえ」

「何言ってつかわかんない!」

「それでも意思は伝わりますわ」

レオナさん以外の笑う声が聞こえる。最初はね、嬉しかったの。発掘探検隊! とかちよつとは思っていたわけ。

でも気づいたんだ。レオナさんから伝わる弾力と、固定されている頭に。つまり息が

出来ない。

背中をポンポン叩いても力が強まるの。レオナさん、悲しみに叩いてるわけじゃないんだ。息が出来ないだけなんだ。誰か助けて。その日、二度目の睡眠に。

一ヶ月と半分の時間が経過した。私の足についていたボルトは未だに入ったまま。松葉杖の移動ぐらいいは出来るようになった。

流石にチカの四十三日退院は無理でした。リハビリを頑張らないとお家に帰れないの。

「アレンの為に作っておいた器具を自分で使う事になるとはなあー」

「本当ですよ。ナツオさんに作成しておいてもらったおかげで捗ります」

「そうかそうか！ まっ無理してまた怪我すんなよ！ またな！」

「ありがとうございます。ナツオさん」

お見舞いにくれてくれたナツオさんにお礼を言う。振り返る事無く手をあげてヒラヒラと動かす仕草は様になっているのだからかっこいい。

「ようこそ！ ハルト！ 僕は君を待ちかねていたよ！」

「生まれたての小鹿が何か言っている」

一緒にリハビリをするアレン。プルプルと足が震えているが、最初の頃に比べれば立

てる時間が長くなった。まだ数秒程度だけだ。

しかし、私は本当に帰れるのだろうか。あと二週間以内でこの足で飛行機を操縦し、穴に突入をしなければならぬ。

どうしたモノかと考えるけれど、イザとなれば赤とんぼなりで穴の近くまで寄つてもらい、無線で帰れませんとでも伝えればいいのか。最悪はそれでいっか。

「そうそう。無理して悪化させるならきちんと治療してから帰った方がいいよ。そうじゃないと僕みたいになっちゃう」

「言葉の重みが凄くてつい耳を傾けたくなりますよ」

よっと、掛け声と共に横に腰掛けるアレン。

「それで、ハルトはこの先どうしたいんだい？」

「んー安定したユーハングとイジツの移動手段かなあ」

「やっぱりイサオと関係があるのかな？」

「うん」

「ユーハングは分からないけれど。イジツに再びイサオが出現したらまた大騒ぎになりそうだね」

「それも踏まえて一年ぐらいはユーハングで下準備かなと考えているよ。まずはひーじい……曾祖父に報告したいから」

「そうだね。その為にイジツへやってきたんだもんね。ハルトは」
少しだけ、しみりとした空気になる。だけどまだお別れではないよ。

この日、私はある方からご実家へご招待を頂いた。わざわざ病院まで出迎えをしてくれて車椅子に乗せて運んでくれた。

「ハルト、元気にしておりますこと？」

「おかげ様で、エンマはどうですか」

「貴方に比べれば健常ですよ」

エンマ。女郎花の髪色と長い髪は頭の後ろで結われている。白をベースとした服の上から肩の部分が開いている長めの青いジャケットを着こなしている。

いま、実家にある桜の剪定を行っている。脚立に立ちながらも器用にパチパチと心地よい音を立てていく。

「まさかとは思いましたが、ハルトにソメイヨシノの知識があるとは思いませんでしたわ」

「最初に聞かれた時は思い出すので精一杯でしたよ」

「お願いしますわ。そう言われて手渡したのは墨汁。」

「剪定した後に墨汁を塗って消毒だなんて思いつきません」

「イジツからユーハングが去って、更に二十年後ぐらいに始めた方法みたいですよ」
「なるほど。それでユーハングにあるソメイヨシノの寿命は延びましたの?」

「知っている覚えている限りだと、百年越えもそれなりにつて所です」

「まあ! それではこの子もまだまだ元気の花を開いてくれるでしょうか」

「それはもちろん。エンマが愛情込めてお世話していますからね」

上を見上げる。立派な桜の木。花が咲き誇るのを見たい。イジツの青空、雲一つない……はずなのに見える雲。そうだ、気を付けていたのに。見上げてはいけないのに……見なかった事にしようと。

エンマが脚立から下りてくる。本日の剪定と消毒が終わった模様。

「ふう終わりましたわ」

「ご苦労様です。あとは根が隠れる程度に肥料を与えてあげればなお良しかと」

「分かりましたわ。何かお礼を……と思いましたが必要ありませんわね」

「え? まあお礼は別に構わないですけど」

手袋を外したエンマがそのまま私の頬に両手を押し付ける。

「先程、何か見たのではありません?」

「桜かな?」

「それより上ですわ」

「んー青空とか」

少しづつ力が込められる。バレてる！

「私のスカートの中。覗いていたのは知っていますよ！」

「ご、誤解です！ たまたまなんです！ 凄くよかったです。いやちが」

そのまま思いつきり引つ張られる頬。ふあふいふおふあふえふえふあふい。

「素直に白状しなさい！ ……貴方、もちもち肌ね」

頬は離してくれたが、今度は顔中を触られまくる。

「よく見るとまつ毛も細く長い、髪もサラサラで肩まで伸びている……貴方つてもしかして……」

トドメといわんばかりに胸元に手を置かれる。そ、そこは敏感なの！

「無い……わね」

「ちゃんとあるわいー！」

「あら、あるというのはこういう事ですよ」

モデルのようなポーズを取るエンマ。美しい。出ている所に引つ込んでいる所、スタイルの良い女性だ。思わず拍手をするが満更でもなさそう。

「はあ、イサオの事も穿り返して全て暴いて差しあげようと思いましたが、貴方が一番怪しい人間ではありませんこと」

「そんなに恐ろしい事を考えていらしたのですか。私は普通ですよ。ふつうー」
「はいはい、そういう事にしておきましようね」

エンマが上品に笑う。その仕草も優雅である。

帰り道をエンマがまた送り届けようとしてくれたら、ケイトがやってきた。お散歩がてらお向かいに来たとの事。申し訳ない。

「ハルト」

帰り際にエンマに呼び止められ、正面を向くようにケイトが移動させてくれる。深呼吸をした後に告げられた言葉。

「ラハマを守っていた事には感謝します」

深々と下げられる頭。自分がこの町を守る為に少しでも力になれていたのなら嬉しいな。

車椅子をケイトに押されながら進み町。夕焼けにつつまれて今日も一日が終わりそうだ。病院のご飯を食べてまた明日に向けて寝るしかない。

ふうーと一息を入れると車椅子が止まる。どしたのかな？ 前方にケイトが現れた。

「どうしたの、ケイト？」

「ハルト、オフコウ山の約束」

「約束、お礼は何でもする券の事でいいのかな」

「そう。それを今、使いたい」

「構わないけど、何をすればいいの？」

「アレンをユーハンクへ連れて行って欲しい」

アレンを。確かに治療目的としても知識を得る為でもアレンを連れていけば良い事は起きるだろう。けど、無理じゃないかな。

「ケイト、アレンはきつと拒否するよ」

「何故？」

「これは私とケイトの約束なのだから、ケイトの為に使えってアレンなら言うよ。絶対」

暗い表情に変わるケイト。あーとえーと何か……ああそうだ！

「ケイト、こちらから一つ提案があるのだけれど」

「何？」

「ケイトの好きな食べ物にハンブルグサンドがあつたよね？ それを次回、作ってあげるのはどう？」

「大変興味がある」

「ユーハンクのハンブルグサンドはオサカナが挟まれているんだ。イジツだと何が挟ん

であるのだろうか？」

「今ならまだケイトが推奨する店は開いている。ハルトには是非食べてもらいたい」
言い出すと同時に押される車椅子。今からですか！

「急な予定変更は遺憾だったんじゃないの？」

「時には自分の気持ちに従う事も大事」

口元を緩めるケイトは私の車椅子を押してお店へと向かう。

マダムからの呼び出し。松葉杖で訓練もかねて一人で向かう。あともう少しかなあ。
通された部屋にはいつものママムの姿が目映る。

「ごめんなさいね。呼び出してしまって」

「お気になさらずに。良い訓練ですから」

ソファーに座ると運ばれてくる紅茶。やはりここで飲む紅茶は一味違う。

「まず最初に。羽衣丸及びラハマの防衛。ご苦労様でした」

「依頼ですから。なんてね」

「羽衣丸に傷をつけるな。と申しただけで富嶽を撃墜をしるとは言っていないわ」

「あのタイミングで追加依頼発生ってそうするしかないんじゃないですかね!？」

「それは貴方の勘違いよ」

ぐぬぬぬ。そんな楽し気な表情で言われても。本気で言っているわけではないのが見え見えて、揶揄われているのがはつきり分かる。スツとマダムが立ち上がる。

「ハルト君。貴方に感謝しているわ。人も町も羽衣丸も守っていただき、ありがとう」
お辞儀をされる。慌てて立ち上がりこちらこそ。とお辞儀で返す。うーん、日本人。マダムの微笑み。守った中にはマダムも含まれているのかな。そうだと嬉しいな。

「ハルト君は次の穴が開く時に帰るのかしら」

「はい。目的は達成し、その事を伝えたい人が待っていますので」

「そうね。貴方には待っている人達がいるものね」

曾祖父とイサオさん。元気にしてるかな。元気じゃない二人なんて想像できないけれど。

「ハルト君。貴方に依頼した報酬がまだ決まっていなわ。追加報酬も含めてどうしたらいいかしら」

「いやあ……この機会でお金を頂いても直ぐに帰ってしまいますし、病院の治療費ぐらいですかね？」

「それは既に完済済み。何がいいかしら。何もいらなわ。というのは無しよ」

んぐ。読まれている。だとすれば……うん。出来るか分からないけど伝えてみよう。

『はあ!!? もう帰るですって!!? 誰に断りをいれて帰るつもりなのよ!!』

「いえ、ですから帰る予定なのでお別れのご挨拶にとマダムから電話を借りまして」
『何よ!! 私を捨てる気なわけ!!』

なんでそういう言い方になるのですか。ユーリア議員。

「見捨てませんし、再び戻ってきます。約束したじやないですか」

『そ、そうよね。ハルトが裏切るわけないわよね』

「勿論です。これで一言も伝えずに消えてたらユーリア議員はどう思いますか?」

『絶対に許さない』

鬼神の圧が受話器を通して伝わる。イジツの女性は凄い。

「なのでまた会いましょう。それを伝えたかったです」

『……分かったわ。連絡ありがとう。ハルト』

「はい」

『行つてらっしゃい。気をつけてね』

「ありがとうございます」

レオナさんが食事を開きたいと申してくれたが、お断りをさせてもらった。

どうしてもしみりとした空気になってしまふから。ザラさんもお別れ会みたいになるのは嫌よって援護をしてくれる。

しばらくの後、納得してくれたレオナさん。そうだな。まだ先もあるのだから慌ててする事もないな。そうですね。そうですね。また来ますから。その時はお帰り会と富嶽撃墜祝いにもなるから覚悟しておけ。と言われる。分かりました。

何故かおかしくて三人で笑ってしまった。

病院に戻りベットの中へ。もうちよつと。あと少し。私の冒険が終わりに近づいている。

空き時間にお世話になった人達にお礼をしに行かなければ。頭を布団の中にまで入れてもぞもぞと。

今回のイジツ滞在期間でやる事はまだまだあるものだと考えていた時に、窓の方から音が聞こえた。頭を出して確認するとそこにいたのはキリエ。布団から出て窓を開ける。

「こんばんは、キリエ。どうしたの」

「あ、あのね、ハルト。なんていうか……その、ね」

両手の指先が落ちつかない。くるくると回している。

「よかつたら寄っていく？ 窓からじゃ落ち着かないでしょ？」

「うん！」

手を貸して部屋へと招く。座る場所は二人で隣通しベットの上。

「大丈夫？ キリエ？ 何か用事があつたのかな？」

「用事……うん、用事」

「何かな？」

「変だとか思わないよね？ 笑わないよね？」

「既に挙動不審だけど」

「なんでそういう事を言うの！ 見て見ぬふりしてよ！」

ポカポカと叩かれてしまい笑う。でもキリエは少し落ち込み気味。お別れが苦手なのか……そうだよなあ。

「ハルト。これで帰っちゃうんだよね」

「うん。でも戻ってくるよ？」

「そうだよね！ でも心がサブジーが消えちゃった時のように落ち着かないの。あの時とは違うって分かっているのに」

「こういう時は一つしかないわけで。私が先にベットへと潜り込み、キリエにポンポンと隣に来るように知らせる。」

「こういう時は誰かと一緒に寝るのが一番だよ。キリエが私を選んでくれたのが凄く嬉しい。だから今日はぎゅーってして寝よ」

お互いに意識を向けあいながらは初めての事。それでもキリエは素早く私の右側へ

潜り込んでくる。

短い黒髪の女性。キリエ。布団に潜り込み、右腕をあの時以上に抱きしめている。優しく頭を撫でると嬉しそうに笑ってくれる。

右腕はキリエの両手によって指一つ動かせなくなり。今回は右脚までもがキリエの両脚に挟まれて動かせなくなる。

視界に入る絹のように柔らかく白い脚。日頃から戦闘機を操縦しているのだから鍛えられて固いのだろうという予想を裏切る。

私の右脚は今やキリエの両脚によって確認する事ができない。服の裾から見える可愛いフリル、離さないとばかりに可愛く交差するキリエの指先。

このままではやられっぱなしになってしまう。一つぐらい反撃してもいいよね。

自分の頭を少し上に動かし、キリエのおでこに触れて温もりを残してあげる。あの時の仕返しだ。おやすみと伝えて目を閉じる。右腕から伝わる。キリエの確かな鼓動と熱が徐々に上昇していくのを感じ取れた。

ユーハングへ帰還当日。イジツの天気は快晴。目の前にはいままも開きそうな穴。

イジツへ来た時とは色々変わった。首元には青いマフラー、伸びてしまった髪は、レオナさんから頂いた髪飾りでポニーテール。操縦している機体はナツオさんの隼一

型。ちゃんと返しに来いよ！ 約束をしたので返しにこなくては。

周りには初めてイジツで出会ったあの時と同じ人達がいる。顔を向けると手を振り返してくれる。嬉しくてこちらもつい振る。

『さあ、そろそろ穴が開くよ』

アレンの言葉に連動するかのようには変化が始まり、イジツの世界に來た時の状態で止まる。無線を通じて連絡をする。

「あーあーこちらハルトです。ひーじいー聞こえますかー？」

『ハルトか!! よく、よく無事で……っ!』

「よかった。これを通れば無事に帰れそうだ」

『ハルト君! おつかえりー! イジツはどうだったー?』

「貴方のアレやソレで死ぬところでしたよ」

『あははは! ごめーんね! そこには隊長さんもいるのかな』

『ああいるぞ、イサオ』

『ハルト君はどうだった? 何か手伝ってあげてくれた?』

『ああ。逆に借りを作ってしまったぐらいにな』

『ほっほーう……それで、僕に作った貸しはどうなったのかな?』

『もう終わりだ。今度、敵対した時は迷わず撃つ』

『ひえええ、隊長さんこわーい。でもまっいつか。僕を落とせるものなら落としてみなよ』

『次は必ず。な』

イサオさんとレオナさんの会話が終わったようだ。お別れをしなければ。

『ハルトーっ今度くる時はもつとカレー食べさせてねー!』

『私はハンブルグサンド。絶対に』

『もう! 二人とも食い意地を張りすぎですわ』

『それじゃ私はお酒がいいわー』

『僕もそれに一票。ユーハングの味をもつと知りたいな』

『はあ……お前たちは。ハルト、気を付けて。またな』

『はい。皆さんもお元気で。また会いましょう!』

『ハルト!! 絶対に!! 絶対に帰ってきてね!!』

『帰ってくるよ、キリエ! 絶対に。またね!』

穴に突入する為に機体を旋回させる。この大地ともしばらくはお別れだ。直線に入り、翼を軽く振る。そして私は再び穴へと突入したのであった。

第28話

相も変わらず、一瞬で脱出が出来ない穴の中。辺りを見回しても何も見えない。暗いから、では無くて自分の指先ぐらしか視認できないのだ。それでも操縦桿を握りしめて真っ直ぐと。ほら、出口が見えてきた。

飛び出した先には、しばらく離れていた雄大な大地。畑や森林、そして曾祖父の家も見える。戻ってこれたんだなあ……。

あの滑走路に向けて着陸態勢に入る。イジツからユーハングへ。震電から隼へ。変わった事もあるけれど。私は再び日本へ帰ってきたのだ。

停止した機体に近づいてくる人影、閉じ始める穴。届くか分からないけれど伝えた。みんな、またね。

「ハルトオオオ!!」

「うあ、こわっ!」

「ジイサン近づきすぎだよ。ハルト君が怯えてるじゃないか」

「ハルト。元氣そうだなによりだ」

「父さんも心配してたんだぞ」

「じーじに父さんまで、いつの間に」

「積もる話は後だ。土産話はたんとあるんだろ？」

「うん。そうだ、これだけは今伝えないと」

曾祖父に顔を向けるが、泣きじやくくって凄い事になっている。それを治めているのがイサオさんなのだから笑いますよ。どうしても。

「ひーじい、お伝えする事があります」

「なんだ。どうした。お前が無事なら私は」

「あーはい。それは長くなるので。ひーじいの弟さんのお墓をイジツで見つけました」

見開かれる目。もう涙とか色々なモノのせいでぐちゃぐちゃだよ。

「そうか……そうか……」

「詳しくは家に入ってからね。じーじ、父さん、イサオさん、隼を車庫まで押すのを手伝ってほしいな」

協力もあつて何とかナツオさんの隼を収める。あれ、車庫でつかくなつてない？ なんか隼の数も増えてない？ どういう事？ 疑問が湧くが一旦家に入る。ああ懐かしい。帰ってきた感が凄い。

曾祖父に事の顛末を伝える。お墓のある場所。死亡理由。お世話になった人達。そ

の度に涙を拭う曾祖父。祖父も父親もイサオさんでさえ私の話に耳を傾けてくれた。

「式守家の悲願を達成させるのがハルトとはなあ」

「この子はやれば出来る子だ。じーじは最初から知っていた」

「それなら父親の俺にだって分かるさ！ ハルトはやれば出来る！ 俺の愛する妻との子だぞ」

めちやくちや褒められる。そもそも二人とも知っていたのか。

「昔な。それでじーじは海から」

「父さんは空から探すかって事になったんだよ。強制ではないけどな。ハルトが始めた時と同じようなものだ」

ここのところは何も言わずとも似るんだなあと思う。

「そうだ、イサオさん。執事さんから言付を預かってきましたよ」

「まださん付けで呼んでいるのかい？」

「もう癖なので気にしないでください。見ますか？」

「見る見る！ 僕のお便りの返信だよね！」

「そうです。ちよつと待っててくださいいね」

スマホを取り出していると、せつかくだからみんなで見ようよ！ とのイサオさんからの

ご提案なのでモニターに接続して完了。再生しますよ。

『よいしょ、と。これで撮影が始まっていますのでどうぞ』

『イサオ様。お久しぶりでございます。言付、こちらにいるハルト様から確かに受け取りました』

『私も映らないと駄目ですかね』

『駄目でございます。むしろ、そちらの年増がなぜハルト様の横にいらつしやるのかが不明ですが』

『ハツこれはイサオが見ているのでしよう。私がハルトを此処まで連れてきてあげたのよ。感謝しなさい』

『やれやれ。事のついでに來ただけでしょうに恩着せがましい。先ほどまでハルト様の手を掴んでいた、しおらしい年増はどこへ消えたのやら』

『いい加減、年増年増とうるさいわよ!』

『自覚があるのでは』

『ないわよ!!』

「ハルト。お前はこういう女性が好みなのか?」

「じーじは良いと思う」

「まさかユーリア議員を使うとはねえ。ハルト君もなかなか隅におけないね!」

「やかましい! 素直に見てれ!」

『シン・ブユウ商事につきましては計画通り進めてさせていただきます』

『あ、あんまり大げさにならないようにして欲しいのですが』

『無理でございます。これでもイジツ一の企業ですので』

『どうだが、ハルトは手伝わないって言ってるわよ』

『化粧の厚い年増には聞いておりません』

『ひいひい！』

「トーチャン、この人いくつだと思う？」

「四十はいつてないな。希望も含めれば三十四。一番アブラがのる時期だ」

「前に調べた記憶があるけど……忘れちゃった！」

「勝手に予想しないで！ 怒られるのは私なんですよ！」

『イサオ様のご想像通り、現在イジツは闇鍋でございます。コトコトと煮込まれて爆発

寸前とでもいいでしょうか』

『盲信する人達もいるんですけど……』

『左様。勝手にイサオ様の遺志を継ぐ等と申し上げ、暴れまわる戦闘機野郎の風上にも

置けない奴等です』

『そのまま空賊とでも潰しあってくれりやいのよ』

『おや、気が合いますな。明日はイジツの終わりでしょうか』

『これぐらいで滅んでれば、今頃誰もいないわよ』

「その盲信する人達に襲われて私は足に怪我を負い、ボルトが入りっぱなしです」
「何と戦ってきたというのだ。ハルトは」

「えーつと……富嶽？」

「まさか！ 富嶽を落としたっていうのかい！ あれ作るのが大変だったんだよ!」

「人の身を心配してよ！ 震電のおかげで助かったんだよ！ ありがとイサオさん!」

『お互いに、準備期間が必要だとお伺いいたしました。ハルト様との協議の結果、一年後。再び出会える事を楽しみにしております』

『やる事がたくさんありすぎて頭が爆発しそうです』

『取るに足らない事ばかりでございます。ささ、こちらに署名を』

『ハルトに何させようとしているのよ!! 私の目の黒いうちは好きにはさせないわよ!』

『むむみみむむ』

『おや、今度は色仕掛けでございますか。婚期に焦る年増はこれだから』

「サイン。した？」

「その聞き方、絶対に執事さんからのモノに対しての聞き方じゃないよね！ 父さん!」

「じーじはハルトが決めたなら賛成だよ」

「違うし！ そうじゃないし！」

「それでハルト君。君はイジツに行つて何か得たのかい。あの世界を目にしてなおイジツでも僕を手元に置いて使うつもりなのかい？」

イジツに行く前に出された問題の提出日だ。

「当然です。イジツだつて丸い世界。月にはタヌキがいる世界ですよ！ あのまま荒野だけで終わらせたなら勿体ないじゃないですか！ シン・ブユウ商事でもなんでも使つてイジツ全体の調査を行つて可能性を広げるんですよ！」

「僕の所業を許さなかったり、襲つてくる連中も沢山いると思うんだけどなあー」

「だからこそ、イサオさんをこき使うんですよ。戦闘機野郎に戻つて私達の存在を許さない奴らは全て叩き落してください！ 邪魔だから!! どうせちよつかい出してくるようなのは空賊でしょ!!」

顔を下に向けて笑いを抑えるようにしているが、身体が震えているので全て分かる。

「面白くないと感じたら、反旗を翻すよ？」

「その時がきたらユーリア議員の足元にしがみついて踏まれてでもイサオさんを止めてやる！ 謀反！ ダメ！ 絶対！」

「僕の足元にはしがみついてくれない？ いっちややだーつて？」

「おっさんののは、やだ！」

「足元にしがみつくよりサインをしてやる方が効果的だとジーじは思うな」
「やかましい!!」

今度こそ、腹を抱えて笑い出すイサオさん。息切れするまで笑う癖、治した方がいいですよ。そんな事で死んだら悲しいから。

「分かったよ。ハルト君がそこまで腹を括っているのなら。しばらく一緒にいてあげよう。会長さん」

「ありがとう。イサオさん、退屈する暇なんてあげないからね」

「それは楽しみ。それで、ユーハングでは何を準備していくんだい？」
「ひーじい！ こつちきて！ 全員に聞いてもらいたいの」

再び全員が机の前に集まる。

「イジツ調査と穴の防衛にはお金がどうしたって必要です。イジツの物資に日本の知識と技術をプラスするだけじゃ足りないのです」

「それで会社を立ち上げてイジツのモノなりを売り捌いて手に入れた資金でモノを送り込む。違うか？」

「それぐらいしか思い浮かばないんじゃない！」

式守家の三人が笑う。ぐぬぬぬ。

「可愛い孫の為だ。ジーじも手伝ってあげるよ」

「じーじ、大好き」

「待ちたまえ！ 父さんだつてやれば出来る子だぞ！」

「父さん、大好き」

「はいはいはい！ 手伝うつて決めた以上は僕もハルト君を全力でお助けしちゃうよ！ ブユウ商事でも何でも好きに使つて！」

「本気で嬉しくて泣きそう」

私の孫を泣かせる野郎はこのどいつだ。ええ!? 手助けするつて言ったのに!?

ハルト君たーすけてえええー。祖父と父親に引きずられて消えていくイサオさん。ごめんよお。

「ハルト。そこまでする理由はあるのか？」

「ひーじいをイジツにあるお墓まで連れて行きたい。イサオさんと一緒にイジツの可能性を見つけない。コトブキの皆や大切な人を……」

「ほう。好きな人でもあちらに出来たか？ その人を守りたいから頑張ろうとしているのか？ そうかそうか」

納得するように頷く曾祖父。んぐつ……分かったよ！ もう！ 深呼吸をして彼女の姿を思い出す。私が頑張ろうとしている理由なんか、ただ一つ。

「キリエの事が好きだから!!」

その昔、世界の底が抜けて、そこから色々な物が降ってきた。良いもの悪いものも、美しいものも汚いものも、色々な物があつた。

そして今、再び世界は閉じられて私達は色々な物を失いながら、そして色々な物を受け取り、掴み取りながら生きている。生きていく。

ラハマ。

この町には最近、新しく出来た記念碑みたいな物がある。と、いつでも町の隅にひっそりとだけどね。

それは戦闘機の主翼。そこに描かれているパーソナルマークはパンケーキ！ ご丁寧にフォークまで刺さっている。この主翼と同じだね。大地がパンケーキ！

「はあそんな事、考えてたらハルトのパンケーキが食べたくなっちゃったよ」
今はいない人。でも帰ってくると約束した人。絶対に。絶対にね。

こういう時はリリコさんにパンケーキを作ってもらおう。美味しいパンケーキがあれば明日も頑張れる！ 軽く背伸びをすると視界に入る夕焼け。染まるイジツの空。また会いたい、あの人に向けて。

「またね！ ハルト！」

Xヶ月後の君へ

今日も無事に仕事を終えて帰ってきたよ。記念碑の前で報告。も、もちろんサブジの礎石にも立ち寄ったよ！

誰に言い訳しているのだろう。自分でもおかしくて小さく笑う。

このXヶ月の間に立ち寄る先が増えた。サブジは勿論、ハルトにも会いに行き、無事を伝える為に。

会いたいな。寂しいな。顔を見たいな。声を聴きたいな。……触れたいな。

突然消えたわけではなく、亡くなったわけでもない。またね、つてお別れの挨拶をして見送ったのだから。

それでも時折、寂しさが沸いてくる。最初は振り切るようにしていたけれど、最近は受け入れる事にした。本当の事だし。自分の気持ちを無視できるわけではない。

でも悪い事ばかりでもない。受け入れた事で、ハルトの帰ってくるという言葉も思い出せるから。

その度に顔が緩んでしまい、挙動不審になる。チカによく揶揄われてしまうので気を付けなくちゃ。

ジョニーズサルーンでコトブキの食事会。そこにケイトと共にアレンが現れた。今日は車椅子で来たみたい。少し前までは歩く事さえ出来ずに、移動方法は一つだけだった。今では選択肢が増えている。

アレンから伝えられた事は、ふたたび穴が開くという報告。xヶ月前に開いた、ハルトがやってきた場所に！

自分でも分かるほど、体温と鼓動が高まっている。きつと顔は真っ赤だ。それを隠す暇もなく、心は歓喜の声をあげている。

会えるのかな？ でもイジツに帰ってくるのは一年後とも聞いている。それでも穴が開いたら……自分の欲望が内から溢れてくる。私はこれほど執着心が強かったのだろうか。

ハルトがいるユーハングに繋がっているよね。もし会えなくても、無線で声が聞こえるよね。心が宙にあるようにそわそわ。一人で空へと飛び立っている。

早く穴が開かないかな。とまで考えてしまう。最初は今すぐにでも閉じてしまえばいいのに！ つて思っていたのに。こういう気持ちになったのも全て分かっている。

穴が開く当日、前回と同じくコトブキ飛行隊とアレンを加えて、穴へと近づく。

アレンの秒読みが始まり、三つの輪が一つに重なっていく。そして一つの穴へと変化を遂げた。

無線に雑音混じりの声が聞こえる。あーあー、と何うように返事を求めている。本来なら隊長であるレオナが対応する場面なのだが、気持ちが抑えられない。叫ぶように相手の名前を呼ぶ。ハルト！

キリエ？ 最初は疑問形で帰ってきた私の名前。それでも直に私の名前を明瞭に呼んでくれる。

嬉しい。好きな人に名前を呼ばただけで、こんなにも弾んだ気持ちになる。このXヶ月間、感じられた寂しさが消え、体が溶けそうなほど心地いい。

私が幸福に包まれている間に、ハルトとレオナが話を進めていく。今回はハルトのひーおじいちゃんとおとーさんがイジツに来るらしい。しばらくすると穴から隼一型が飛び出してきた。

青色を基準に迷彩が施された隼。ハルトに見せてもらった海のように綺麗だ。操縦席に搭乗している人が手を振っている。こちらも振り返す。操縦しているのは、おとーさんじゃなくてひーおじいちゃんなんだ。

レオナに二人の事をお願いするハルト。これで貸し借りなしに出来ませんか？ 貸した方が伺いを立てるところが、ハルトらしきを感じとれて自然と笑みが浮かぶ。

みんなにお世話になる故を端的に伝えるハルト。最後に私の番が来た。そしてアレ
ンからのそろそろだよ。との合図も。

xヶ月間に起きた出来事、伝えたい想いを、全てぶつける勢いで話しかける。ハルト
はそれを聞いて頷いてくれる。あの時と同じように、優しく、包み込むように。

穴の消滅が始まる。私の声はいつしか泣き声に近い状態へと変化していた。

会いたい。声が聞こえるだけでもいいと考えていたのに、それが叶うと次の欲望が溢
れ出そうになる。いま、この穴に飛び込めば……。

その時、ハルトの声が聞こえた。キリエ、次回、穴が開いた時に一度こちらに来てく
れないか？ 会いたい。と。

今回の穴の出現により、アレンの予測と研究結果により、ある程度の間隔で同じ場所
に穴が開く事、それがユーハングとイジツを結ぶ穴である事が証明できたからだと言っ
ていた。

だけど、それよりも、そんな事よりも、ハルトが私に会いたいと言ってくれた。会い
に来て欲しいと言ってくれた。先程の泣き声とは正反対の感極まる声で想いを伝える。

ハルトも私に想いを伝えてくれる。好き。大好き。

こうして、穴は消滅した。

二人の歓迎会が開かれる。その際にハルトから頼まれていた物を各自に手渡す二人。レオナにはユーハングの航空戦術本。几帳面にイジツ語で翻訳されたメモ付き。

ザラとアレンはユーハングの各種アルコール。二人も一緒に乾杯をしている。

エンマはユーハングで咲かせているソメイヨシノが美しく撮られた写真集。見せてもらったら、余りにも綺麗な風景で息を飲んだ程だ。お手入れに関しては曾祖父が詳しいとメモ付き。

ケイトは手作りハンブルグサンドとユーハング戦闘機の科学技術本。ここにもメモ付き。オサカナを食べても平気なのか心配になったが、ケイトは迷う事なく食べ始め、美味しい。と一言。

チカは手作りカレー。大鍋でよく運べたなあと思う。このメモはジョニーとリリコさん宛てになっていた。レシピなのだろう。

そして私にはパンケーキ！ があると買ったら無い。私には何も無いのだろうかと不安になっていたら、ひーおじいちゃんが私に手渡してくれた物がある。手紙だ。

人から手紙を貰った記憶がない。もしかしたら初めてかもしれない。それがハルトからだと思うと、また心は喜びに満ちる。

チカに開けて読まないの？ と尋ねられるが断る。後で一人の時にじっくりと読むんだ！ 後で教えてよーと言われるが、絶対に教えない。これは私だけの手紙！

しばしの談笑をしていた時に、二人がおもむろに立ち上がり、視線を集める。

そして、ハルトの事、今回お世話になる事の感謝を伝え、頭を下げる。慌ててレオナが立ち上がり頭を上げて欲しいとお願ひするが、なかなか上がらない。

ハルトには心配してくれる家族がいるのだと。羨ましく感じた。その後キリエさんはハルトと家族にならないのかい？ と質問をされて顔が赤くなる。

まだ、好きという感情が強くてそこまで考えた事がなかった。ハルトがイジツに帰ってきて、ラハマに住んでくれるのなら、私はまた帰る場所が増えるのかなと想像する。心臓が激しく波打つ。幸せすぎて何も考えられなくなつた。

ハルトのひーおじいちゃんから受け取つた手紙を宿舎に戻つてから開封した。

それで正解だつたと思う。ハルトからの手紙を読むたびに顔が綻んでしまう。こんな姿、誰にも見せられない。

ハルトの想いが私の心に伝わり、暖かい気持ちに包まれ、胸の高鳴りを抑えきれない。ハルトが私の為に書いてくれた手紙。何度も読み直し、書かれている文字を愛おしく撫でるように触れ、一字一句逃さず心に刻みつける。

好き、優しさ、寂しい、触れあい、抱き締めて、温もりを伝えあい、お互いの顔に熱を残した。

思い出す度に、顔が熱くなる。それでも毎回、幸せを感じる。人と一緒にいる事が、好きな人といられる時間がどれ程、幸せなのかをハルトに教えてもらった。

もつと甘えればよかった。もう少しだけ勇気を出してハルトに……。

今度、会える時にもう一步踏み込んでみようかな。うん。そうしよう。これからも、ずっと一緒にいられるように！

xヶ月後のイサオさん

「ハルト君！ 飛行機！ 飛行機を見に行こうよ！」

「また唐突ですね、イサオさん」

「仕方ないよ！ 不意に思いついたんだから！」

「思いつきかい！」

イジツに向かつてxヶ月後、日本に戻ってくれば、相も変わらずイサオさんに振り回される日々。

今日はどうやら飛行機が見たい模様。

「そうなるかと空港かな。でも戦闘機は見れませんよ？ 普通の旅客機になりますけど」

「いいのいいの。ハルト君の土産話に富嶽の話があっただろう？ それで見たくなっただんだ」

「なるほど。似ているといえれば似ているのかな」

「今度、富嶽を作る時にユー・ハングのエンジンを積んだらどうなるのか、実物を見て想像したいんだ！」

「またアレ作る気なの!? ここに死にかけて人間がいるんですけど！ ダメ！ 絶対

！」

ぶー、と露骨に不満げなイサオさん。

この人は行動力が凄い事は重々承知だが、原動力となる欲望が強すぎる。

プロペラ機の富嶽をターボファンエンジンに転換させたらどうなる？ そんなの口

マンじゃん……違う！

「格好いい夢なのは分かりましたけど、想像で収めておいてくださいよ」

「まっ、イジツじやまだまだ生産なんて無理だろうしねー」

「その前にやる事がたくさんありますよ。それで、行くんですか？」

「行くー！」

「それじゃ準備してください。もう寒さを感じられる季節ですから」

はい。良い返事をいただいて、私も準備を始めようとするが、その前に伝えておかないとね。

ないよね。

「じーじ、イサオさんと一緒に空港まで行ってくるね」

「そうか、気を付けていつてくるんだぞ。やはりバイクで行くのか？」

「風を感じたい派、らしいからそうだと思う」

「ははは、ハルトも大変だな。風邪をひかないようにこれを持っていけ」

手渡されたのは使い捨てカイロとお金。

「じーじ、カイロは有難く頂戴するけれど、こっちは金額が大きい気がするんだ」

「気にするな。行って帰ってくれば夜になるだろう。暖かい物でも食べてきなさい」

「うう……お言葉に甘えるね？　ありがと！」

「ええでええで」

玄関先からイサオさんの声が聞こえる。もう準備終わったのか。急いでコートを着用して外へと向かう。行ってきます。行ってらっしゃい。

車庫というには余りに大きい建物。その中に私のおハヤブサー号と隼一型が二機並んでいる。一つはナツオさんからお借りした機体。もう一つは曾祖父が用意した物だ。

何故、隼が増えていたのか。答えとしてはイジツに向かう為の予備機の意味と、イサオさんと格闘戦をしたい人達の為であった。ほぼ父親が原因。

勝敗は言うまでもなく、イサオさんの全勝。

父親は感覚に慣れてないだけだもん。と泣き言。イーグルドライバーのガチ凹みを見てしまった。

レシプロもジェットも乗りこなせるイサオさんがちよっとおかしなのだ。

「ハルト君も、よくこんなに重い乗り物を動かせるね」

「慣れとしか言いようがありません。片足はつきませんし、なのでいつも通りお手伝いよろしくです」

「分かったよ。僕が運転出来ればいいのだけれど」

「免許どころか戸籍もない人間に乗せたら大変な事になりますから。駄目ですよ、イサオさん」

敷地内でイサオさんに運転させた事がある。

私が運転するよりも滑らかに動かされているおハヤブサー号を見て悔しい記憶が蘇る。あとは足。両足が着くつて羨ましい。

二人を載せたおハヤブサー号のエンジンを始動させる。うん、今日も元気だ。それは空港に向かいますか。

道中もイサオさんの騒がしきは変わらない。ヘルメットにレシーバーを装着しているので、お互いの声が聞こえる。

アレは何、コレは何、すれ違うバイクの人達に手を振ったりと大忙し。それでも、一人で淡々と運転していた時に比べれば賑やかで楽しいな。

休憩を挟む為に立ち寄ったお店で、ソフトクリームを買って食べたり。寒いのに何故か食べなくなるんだよね。不思議。

イサオさんが一口！と申し立てをしてくるので差し出したら、ガブツつと食われた。オツサンてめえー！

「いやー満足満足。寒い日に食べる冷たい物も格別だね！」

「私のは半分ぐらい誰かに食べられてしまったのですが」

「それは大変だったねー」

「イサオさんのせいでしょうが！」

掴みかかろうとするが、イサオさんには手が届かない。出す手は全て弾き返される。やはりイジツ人の身体能力は半端ないと実感する。

じゃれあいにも似た抗議をしていると、上空に飛行機を見かける。私達が向かおうとしている空港にでも着陸するのだろうか。

「良いよねえー、アレ」

「イサオさんは戦闘機が好きなのでは？」

「勿論、自分で操縦出来るのが一番！ だけどそれとは別の良さを感じるよ」

しばらく、二人して上空を飛行する飛行機を眺めていた。地上にいても伝わるエンジン音。綺麗な青空に映る飛行機。その後を追いかけるように続く飛行機雲。

世界は違うけれど、あの空に私もいたのだ。

空港に到着して、おハヤブサー号を指定の位置に駐輪させる。時はすでにおやつの間。向かう先は展望デッキ。途中で白熊の人形がお出迎えをしてくれる。

迎り着いた矢先、飛行機が一機、離陸準備に取り掛かっていた。丁度よいタイミングだ。

「ハルト君！ はやくはやく！」

「焦らなくても逃げやしませんって」

「それでも！ こういう一連作業を見てからの離陸はまた違った楽しさが感じられるよ！」

確かにそうかもしれない。私を置いて颯爽と一番良い場所に陣取り、フェンスを掴みながら飛行機を眺めているイサオさん。

イサオさんが手を振っていると、飛行機のパイロットさんがこちらに気づいて、手を振り返してくれた。

「こつちに気づいて振り返してくれたよ！ ハルト君！」

「貴重な体験が出来て良かったですね」

そう言いながらイサオさんの横に並び、私も手を振っている。展望デッキには私たち二人しかいない。この状況もかなり珍しい。

飛行機からタラップが離れて行き、小さなタグ車が飛行機を後方へと押し出す為に移動を始める。

指定位置まで飛行機を移動させた後にトローリングバーを飛行機から取り外すし、タグ

車は安全な位置まで移動を開始する。

飛行機が滑走路に向けてタキシングを始める。作業をしていた人達も手を振り見送る。つられて私達も手を振る。

滑走路の端まで進み、タキシングを終えたら、フラップの確認などを行っているのが見える。この辺りは同じなのかな。と思いつつながら見つめる。

この瞬間だけはイサオさんも何も喋らず、飛行機のエンジン音だけが周囲に響く。全ての確認が終えたのだろう、レシプロ機とは違う、ジェット機の独特な吸い込むような音が鳴り響き始める。

徐々に加速を始める飛行機。一定速度に達した後に機首が上へと向けられ、ゆっくりと車輪が地上から浮き上がり、離れる。

車輪は収納され、後ろには陽炎が立つ。こうして、私達が見つめていた飛行機は大空へと飛び立っていった。

「大型の飛行機が飛び立つ瞬間って、どうしてこうもワクワクするんだろうね！」

「不思議ですよ。あんなに重たい物が空に飛び立ってるのか」

「富嶽を作り上げた時も感じたよ。戦闘機とはまったく別物。なのに何か沸き立つ感覚。嬉しくてつい使っちゃったよ！」

「もう二度と使わないでください」

「ええー、じゃあ今の飛行機みたいな使い方ならどう？」

「爆弾も、機銃も、装備していない富嶽ならいいと思いますよ。私もそれなら搭乗してみたいものです」

「イジツで機銃ナシかあ。なかなか命懸けな飛行になりそうだね」

「まあ一つの夢……よりも、目標にするのもいいかもしれないですね」

視線を空に向けてイサオさん。気が付けば夕暮れ時。辺りは赤紅色に染まり始め、一日が終わろうとしている。

スーツ姿にコートを羽織ったイサオさん。夕日を背にした状態でイサオさん自身も赤紅色に染まり、とても格好いい。

「ただ、何かを考えている様子。」

「ハルト君」

「なんででしょうか？」

「もし、僕がこのままユー・ハングに残る。と言ったらどうする？」

「いいんじゃないですか。このままここに居ても」

「簡単に答えるね！ 結構、真面目に考えて発言したんだけれど！」

「私も至って真面目に返答しています」

「まあそうだよ。ハルト君はこういう時は即答するもんね」

夕日の方に身体を向けるイサオさん。私の目には背中が映る。

「ユー・ハングに来て、ハルト君達と出会ってから、しばらく離れた日もあつただろう？」

「私がイジツに行っていた間ですね。何かありましたか？」

「いいや、逆に何もなくて平和だったよ。平和過ぎて余計な事ばかり考えた」

「余計な事……ですか？」

「さつき言つたとおり、このままユー・ハングに居てもいいんじゃないかなってさ」

「独裁者がしおらしい事を言っていますね」

「独裁者って！ まあ否定はしないけどさ！」

「死に物狂いで生きていたのに、急に落ち着いた生活になつて戸惑っているわけですか」

「そうだね。それを悪くないと考える自分がいる事に気づいてね」

イジツの世界で一大企業を作り上げ、自身もパイロットとして飛び回り、野望を達成する為には手段を選ばずに進んできた人。

「こういうのは王道なのか、霸道というべきか。」

「良かったじゃないですか、そういう気持ちもある事が知れて」

「良いのかなあ、このままだとハルト君の手伝いをしてあげられなくなるよ？」

「あ、大丈夫です。シン・ブユウ商事の良い所だけ掻っ攫っていくので」

「ハルト君、空賊に転向したのかな!?　ここって気持ちよく譲渡させる場面だよね!」
「まだ受け取つてもない口約束ですし、それに無いならそれでもいいと思いますけどね。
私は」

「どうしてそう言い切れるんだい?」

再びこちらに身体を向けるイサオさん。眩しくて顔は見えない。だけど感じ取れるモノはある。

「だって、ブユウ商事で一番良いモノは既に受け取つていますから」

「震電?　でもあれは富嶽撃墜で墜落させちゃったんだろ?　他に何かあつたっけ?」

「イサオさんですよ」

辺りは静寂に包まれたまま。先ほどまで聞こえていた飛行機の音はもうしない。

「イジツにイサオさんはいなくても、ユーハングに戻ればイサオさんがいる。それだけで私は嬉しいです」

身体をこちらに向けたまま微動だにしないイサオさん。顔は相変わらず夕日で見えない。

しばらくの間、そのままの状態が続いたが、イサオさんがまた私に背中を見せる。

夕日が影を長く尖らせている。私はその後を追うようにしてイサオさんの横に立つ。

私たちはそのまま、夕日の光に包まれていった。

「イサオさん。寒いからそろそろ中に入りましょうよ」

「そうだね。ハルト君に風邪を引かせたら小さいジイサンに怒られちゃうよ」

祖父から貰ったカイロだけでは、内側は暖められない。自動販売機で二人分の飲み物を購入して、一つを手渡す。私は相変わらずコーヒーは呑めません。

「んんー暖まるねえ。やっぱり寒い時は暖かい物に限るね!」

「行きとは逆の事を言ってますせんか?」

「あの時はそういう気持ちだったのさ。今は暖かいのが一番!」

「否定はしません。その時の状況で気持ちは変わりますからね」

「だよねだよね!」

飲み物のおかげで、身体の内側から温まるのを感じる。飲み終わった缶をゴミ箱に入れる。

さて、帰るとしましょうか。出口に歩き始めるが、イサオさんがついてこない。

「イサオさん? 置いていきますよ?」

「ハルト君。君は僕の力が必要かい?」

「必要ですよ。何を当たり前の事を聞いてくるんですか」

「さつきも言ったけど、こういう時って即答だよね、ハルト君って」

「本当の事ですから。居てくれるだけでも心強いですけど、手伝ってくれるなら尚の事です。むしろお願いします。あのようない方はしましたけどイサオさんが頼りなんです。お願いします少しのワガママならなんでも聞きますから！」

大げさな身振りですがみつくようにイサオさんに抱きつく。ついでにわさわさと背中を掌を使つて高速で撫でる。熱いやろ！ 熱いやろ！ 掌が熱っ！

馬鹿な事を考えながら手を動かしていると、イサオさんからも抱きしめられる。力強い抱擁。でもちよつと強すぎないかいだだだ！

背中を叩いてはよ離れろと合図をするが、なかなか離してくれない。仕方ないのでそのまま好きにさせておく。今はそういう気持ちなのだろう。

時計の針が動いていく。その後、そつと離される。そして頭に手を置かれてわしやわしや。みんなそこに手を置きたがるのな！

「仕方ないなあ。ハルト君の頼みなら、もうひと頑張りしますか！」

「そうですそうです。天上の奇術師の力を是非ともお貸ください」
「任せてよ！ 休養明けでも僕の力は衰え知らずだよ！」

指先を銃に見立てて撃つ仕草をするイサオさん。私も同じようにしてイサオさんに撃ち返す。くだらないだろうけど、付き合ってくれるイサオさん。その避け方はマトリッ……。

外に出ると肌寒さを感じる。呼吸をするたびに白い息が見える。

「そろそろ雪が降ってくるかもしれないね」

「雪ってあの白いやつ？ 僕、見た事ないんだよねえ」

「ひーじいと父さんが帰ってくる頃には、嫌という程、見る日が続きますよ」

「その時は、ハルト君の大切な子も来るのかなあ」

ニヤニヤとした顔つきでこつちを見る。

「そうですよ！ イサオさんを被弾させたエースパイロットですよ！」

「僕という存在がいるのに、他の人まで呼ぶだなんて……」

「紛らわしい言い方をしないでくださいよ！」

「もしかして、彼女に雪を見せたかったとか？」

「……それもあります」

「ハルト君はロマンチックなんだねえ！」

「うっさいよ！ 遠距離は寂しいんだよ！ キリエに会いたくて仕方ないんだよ！ 共通の思い出を作らないと不安になるんだよお！」

日中の再現。掴みかかろうとするが、結局イサオさんには手が届かない。ほら、私にはまだまだイサオさんの力が必要なんです。だからこの先も手伝ってくださいよ。

「はあはあ、もう！ 寂しさに打ちひしがれる人間をあまり苛めないでくださいよ！」
「ゴメンゴメン。ハルト君の反応が面白くてさ、つついちよつかい出したくなっちゃうんだよね」

「ちよつかい出すなら最後まで付き合ってくださいよ」

「分かった。ちゃんと付き合うよ。最後までね」

「それじゃ約束。小指出して」

「約束は分かるけど、何をするんだい？」

「ユーハング式の約束の儀式ですよ」

私とイサオさんの小指を引つ掛け合わせて、ゆびきりげんまん。歌付きで約束を誓う。

「はい。これで誓いが立てられました。破られた場合は針千本飲んでくださいね」

「ええ!! そんなに厳しい儀式なのこれ!!」

「厳しいですよ。謀反! ダメ!! 絶対に!!」

とほほ、といった仕草をするが、顔はすつきりとした様子。何か決めたのかもしれない。同時にお腹を鳴らす残念なイケメン。

「イサオさん。何食べたいですか？」

「ラーメン！」

「味は？」

「味噌！」

「了解です」

それなら道中にある、あそこのお店でいいだろう。私も大好きな味だ。

イサオさんにヘルメットを渡す。美味しいラーメンを食べて、祖父の待つ家に向けて。

「それじゃ、帰りましょうか。イサオさん」

「そうだね。帰ろっか、ハルト君！」

Xヶ月後の君と再会

白銀の世界。

朝日に照らされて目の前が見えない程、煌びやかな世界に包まれた今日が始まる。

例年通りの積雪とは言わないが、それでも北の大地に降り積もる雪の量は多い。

今日が晴れていてよかった。吹雪に見舞われてしまえば滑走路の除雪作業も行えなくなってしまうところだったから。

重機に乗り慣れた手つきで操作をしている祖父。そこからはみ出た雪を安全な場所に移動させる為に、私とイサオさんは手で押すタイプの除雪機を操作している。

何が楽しいのか分からないが、イサオさんは除雪機を使い豪快に雪を飛ばしている。ただそれだけでも関わらず笑顔で楽し気だ。

直往邁進でいて裏工作を怠らない。イジツではその様な話を至る所で聞いてきたが、その本人であるイサオさんは、日本へ来てから何か変化が起きたようだ。

一緒に飛行機を見に空港へ行つてからだ。私でも分かるぐらいに穏やかな笑みを浮かべる回数が多くなった。

当初、日本に来てからこの世界の知識を貪欲に学ぶ姿は、度々見受けられていた。

だが、ここ最近の姿を見ると、それは夢か現か幻か。

本を開く回数は減り、テレビを見つめる時間も減り、ネットで情報収集する姿を見受けられない。

その代わりに私や祖父と今まで以上によく喋るようになった。

会話の内容だつてとてもじゃないが知的なモノとは程遠い。本当にくだらない事を言い合ったり、トランプゲームで勝つまで止めれ……は私だ。じーじもイサオさんも強すぎる。

イジツに居る曾祖父や父親は元気にしているだろうか。イサオさんがキリエの事で私を揶揄ってきたりとそんな日常を過ごしている。

そんなイサオさんについて祖父に相談してみるも「今のイサオ君は嫌いか？」なんて返されてしまう。

嫌いな訳がない。お調子者で賑やかでスキンシップが激しくて結構ウザイけれど、その部分に関しては出会った当初から変わらない。

それにイサオさんから見た日本に関して発せられる言葉には考えさせられる事も多い。

ただ、ちよつとだけ最近の動向に変化が見られて心配だなんて。

「空港に行つてからだろうか？　そこで何を喋っていたのか私には分からない。ただ、イ

サオ君にとっては自身の分岐点となる事でもあったのだろう」

「そんな事を言われても、飛行機を見た後、落ち込み気味のイサオさんの尻を蹴り上げたから抱きしめられただけだよ？」

「そういう事をされた経験が無かつたのだろう。自身の野望の為にひたすら走り続けてきて、あと少しの所で失敗に終わって、けれど日本には来れた。ここで様々な知識を吸収し、再びイジツへと舞い戻ろうとする為にもハルトを利用して色々と手を打った。だが、それらは自分の想像とは違う形で帰ってきた。その中でイサオ君を変えてしまうような事が、企業や政治家といった立場のしがらみから解放させるような事を空港でハルトが言ったのではないか？」

「恥ずかしい事を言った記憶だけが残っている。でもイサオさんの力……イサオさん本人が必要なのは本当。」

悪ふざけだと思われたブユウ商事の再編と引継ぎ、イサオさんを再び戦闘機野郎へと戻し、イジツで好き勝手に暴れている空賊共を治安維持も含めて黙らせる必要がある。ユーリア議員とは最優先で手を組む事が必須であり、空賊離脱者支援法をガドール以外でも浸透させなければならぬ。

お世話になりっぱなしのユーリア議員。まだ何も返せていないのに再びお世話にならざる負えないこの情けない状況下。

何をして差し上げれば分らないから、一層の事、何でも言う事を聞きます券でも献上しようか。いやいやきょうび幼稚園児だってもっと良い考えを浮かべるだろう。

青筋を立てられて、出会った当初のように怒られるのは本当に辛いので、真面目に考えておこう。

それと並行して私たちの活動拠点を決めなければならぬ。

地盤を固めなければイジツ探索を行うのは不可能に近い事もあるが、イジツの世界で自分たちの帰る場所を明確に決めなければ精神面が削られていくのは目に見えている。

家に帰って一息入れられる場所があるという事は、とても大切な事。

日々の忙しさと翻弄される未来が待ち構えているのは想像に容易いが、希望も沢山待ち構えている。

それでも何とかなるんじゃないかと思えるのは、家族や仲間たちの協力があつてこそだと言ひ切れる。

「ハルトくーん！ 休憩だつてきー！」

「はい、今行きますね」

早朝から始めていた除雪作業も一段落つく。

これだけのスペースがあれば、隼二機が着陸してもなお余るほどの広さ。

万が一の事も考えて準備も怠らない。イジツの暖かい所から日本の極寒の地へと飛び出してくるのだから、隼に積まれたエンジンが正常稼働し続けてくれるとは限らない。

この大地は全てにおいて等しく、全てのものを凍らせてしまうから。

そうならない為にも、まずは暖かいお茶を頂かねば。

この数日間、除雪作業の繰り返しではあるが、それには勿論理由がある。

穴が出来る前の予兆である三つの輪が再び動き始めたからだ。

アレンから受け取ったノート、こちら側から観測したデータ。お互いに情報交換をして共有をしている。

それでも僅かながらに誤差は生じる。だが、アレンはそれさえも楽し気に無線を通じて語ってくれる。

足の事について聞いてみても、会った時のお楽しみとしか教えてくれない。

アレンが駄目ならケイト。僅かに聞き出せた事は、サボらずに訓練を頑張っているという事。それを聞けて安心した。

そして予定通りであるならば、本日は再び穴が開く日。

イジツへと向かった曾祖父と父親が帰ってくる日でもあり、キリエがこちらの世界へとやって来てくれる日でもある。

私の大切に大好きな人。

イジツを離れたあの日からxヶ月。穴が開いた時には無線で声を聞いていたけれど、やはりそれだけではどうしても我慢が出来なくなってしまうた。

自分でも驚いている。キリエをこちらへ誘った日の事を。それを一つ返事で「うん！」と返してくれた彼女の優しさが愛おしくてたまらない。

あの日から私の心はイジツに、キリエと共にいるのだろう。

「そろそろだな」

「今回も綺麗に穴が開きそうだね！ イジツと繋がってればいいけれど！」

「不安な事を言わないでくださいよ、イサオさん」

三つの輪は、再び一つの穴へと変貌するべく重なり合っていく。

何度見ても不思議な光景だ。三つの輪の時点では背後も僅かながらに見えているのに、穴へと姿を変えると上空に漆黒の空間が出来上がるのだ。

出来上がった穴。イジツと繋がりが出来た事を証明するように、無線が聞こえてくる。

『無線が聞こえている者はいるか？』

「いますよ。親父殿」

『今回も無事に日本へと繋がったみたいだな。あとは穴を抜けて帰るだけか』
「そうだな。お前も無事で何よりだよ」

『お、おう。海外派遣から帰国した時ですら言われた事のない言葉でびつくりなんだが』
「確認です、穴から抜けてくる機体は二機なのですね?」

『そうだ。ハルトの大切な女性をエスコートして帰投する。そちらの状況は?』

「気候は晴れ、気温はマイナス七度、滑走路は整備済み。凍結に注意を」

『了解した。皆、大変世話になった。また会おう』

聞き慣れたコトブキの皆の声が聞こえる。

本来ならばこの僅かな時間にお互いの近況を伝えあうべきなのだが、浮き足立つ心は抑えられない。

「ハルト君、余程嬉しいらしくて滑走路の方まで走って行っちゃったよ」

『遠距離恋愛は大変だからなあ。俺も若い時は……』

「お前の話は長いから放置するぞ。隊長さん、この度も私の家族が大変世話になり感謝の念に堪えません」

『いや、私たちもお爺様方には助けて頂いた事が多い。どうか畏まらないで欲しい』

「では感謝の言葉だけでも受け取り頂きたい。ありがとうございます」

『こちらこそ、ありがとう』

気が付けば滑走路脇にある駐機場に向かって走り始めていた。

ここからは後方に位置する穴。その方角から次第に聞き慣れたエンジン音が聞こえ始めた。

徐々に大きくなる音、そして穴から飛び出してくる見慣れた二機の隼。

曾祖父と父親が搭乗している隼に塗装されている青色の迷彩は、イジツの風埃によって剥げかけてはいるが、その存在感は健在だ。

そしてもう一機、主翼にコトブキ飛行隊のチームマーク、尾翼には赤い鳥のパースナルマークが描かれている。

この世界を見渡すかのように、二機はしばらくの間、滑走路の上空を巡回している。彼女にとって初めてのの世界と初めての雪。イジツに向かった時の私と同じように初めてだらけを体感しているのだろうか。

僅かな時間の後、機体は次第に高度を落とし、体勢を整える。彼女が先に着陸をするようだ。

滑走路上の積雪は片付けたとはいえ、凍結までは完全に対処はしきれていない。

だが、それもこちらの心配が過ぎたようで、彼女は何事もないように三点着陸で地上に舞い降りる。

考えてみればイジツの世界で様々な場所を難なく離着陸出来る程の腕前の持ち主だ。事前に状況を知らされていれば、あの荒野よりは整備もされており楽なのかもしれない。

こんなにも自分が心配症になっているとは。驚き半分と喜びが入り混じっている。目の前には彼女の搭乗している隼の機体。止まるエンジンとプロペラ。

防風が開けられて、勢いよく立ち上がる彼女は目を見開いてこちらを見つめている。

「ハルト!!」

私の名前を叫び、勢いよく操縦席から飛び出して主翼に足を置いたまではよかった。着氷している事に気づいていない事以外は。

置いた足に力を込めて前へと降りようとしたのだろう。足に力を込めた瞬間、着氷に足を滑らせてバランスを崩したままこちら側へと倒れ込むように落ちようとしている。

考えるより先に身体が動いてくれた。主翼から前のめりに落ちる彼女を思いつきり抱きしめて救い上げる事に成功できたから。

「あ、危なかった……」

「心臓が止まるかと思いましたよ……」

首には力強く回された彼女の両腕。言葉と共に現れる白い吐息で耳元がくすぐったい。

このままゆっくりと彼女の両足を地面に下そうと思ったが、イタズラ心と好奇心が勝る。

抱きしめている腕を僅かに動かし、持ち上げる様な体勢へと移行する。

所謂ところのお姫様抱っこ。道中の細い腰と魅力的なふとももを合法的に触れられる画期的な仕組みに感動である。

首を横に向ければそこには彼女の顔が見える。

ずっと会いたかった人。触れ合いたかった人。私の大切に大好きな人。

「会いたかった、キリエ」

「私もだよお!!」

再びキリエの腕に力がこもり、頬と頬が触れ合う。

邪魔と判定されてしまったのだらう、飛行帽を思いつき放り投げるキリエに対して笑みが浮かぶ。

「あのー、お楽しみの中の最中に悪いんだけど、そろそろ話しかけてもいいかな?」

「んげえ! イサオ!!」

「女性が出てきて良い声じゃないよね、それ」

「イサオさん、ちよつと忙しいので視界に入らないでくれませんか?」

「ハルト君酷くない!?」ここ最近で一番の悪口だよ、それ!」
もうしばらくはキリエと触れ合い、視界も思考もキリエの事だけを考えていたいというのに。

そんなお邪魔虫から差し出された手には、冬用のコートがあった。

「イチヤつくのはいいけどさ、このままだと彼女、風邪ひいちゃうよ?」

そうだった、キリエはイジツから来た時の姿のままである。

唯一の防寒であった飛行帽は、投げ捨てられたままの状態に雪に埋まっていた。

キリエもこの世界の気温に気づいたのだろうか、可愛らしいくしゃみをする。

私の我儘で風邪をひかせてはならない。名残惜しいけれどキリエの両足を地面へと下す。

キリエは嫌そうな顔を隠そうともせず、イサオさんが差し出しているコートへと手を伸ばすが、その手は途中で止まる。

どうしたのだろうか、イサオさんが持っているのが気に入らないのだろうか。いままでの経緯を考えれば顔も見たくない程だとは思うけれど。

こちらに顔を向けるキリエ。何か良い事を閃いたような表情をしたと思いきや、私の着ているコートのボタンを外し始める。

素早く中へと入り込み、器用にボタンを閉めていく。

「ふいふあったか〜い」

「見ているだけで胸焼けしそうだよ、本当に」

流石のイサオさんも苦笑いをしながら見つめてくる。

傍から見ていればしようもない二人なのだろう。だけどこうやってじゃれ合いたかったのだ。

コートの上から自分を抱きしめるように腕を重ねる。キリエはこちらに身体を預けて暖まり中。かかと立ちになるぐらい身体を預けてきてくれる。

私たちは再び、出会う事が出来た。

あの後、曾祖父と父親もこちらへとやってきて、お互いの無事を確認。

二人羽織の状態の私たちを見て笑いあう。

流石にこのままでは荷物も取り出せないし、移動も出来ないのでキリエと離れようとするが、拒否される。

とても嬉しい拒否ではあるが、そこだけは何とか説得をして受け入れてもらう。

条件として、私の着ているコートをキリエが、イサオさんが持つてきたコートを私が着るといふ事になる。

雪によって生み出された白銀の世界。

見て、触れて、踏んだ時の感触が面白いのか、とても素敵な笑顔を浮かべ、両腕を広げてはしゃいでいるキリエ。

その光景は、見慣れているはずの景色が別の世界にも見える程、美しい。

自宅へと辿り着き、温かな飲み物を皆に差し出す。

戻ってきて早々だがと、前置きをして始まる曾祖父のイジツ話。

細かな部分は後日聞き直すとして、私にとって問題となる話が幾つか出てきた。

曾祖父と父親は、目的を終えた後にオウニ商会の計らいで、機体を一機借り、二人でイジツを見て回ってきたと言うのだ。

道中、空賊に襲われている輸送機を助けたりと色々であったようなのだが、それは一先ず置いてくとしてだ。

私にとっての問題、それはゲキテツ一家のフィオさんと会ったという事だ。

「そんな訳で言付だ『私は狂犬フィオ様だ！ 狙いを付けた獲物は逃したりはしないぞ!! ハルトおお!!』だそうぞ」

「ローラさんも呆れるぐらいの勢いだつたぞ」

「何で出会っちゃうのかな!? 特定箇所に向かわなければ早々エンカウトしないよね!?」

私のふとももにはキリエの指。摘まれて指先に力が込められる。

キリエの誤解を必死に解きながらも楽しい時間は過ぎてゆく。

夕飯を食べ終え、ようやく話しに一区切りがついたところで本日は解散となる。

しばらくの間、キリエに利用してもらおう部屋へと本人を案内をする。

「私、個室つて初めてかも」

「使い方が分からない物があるかもしれないけど、分からなかったら聞いてね」

「うん。ありがと、ハルト」

エアコンの暖房をつけ、しばらくすると暖かな風が入り込む。

キリエにとっては怒涛の一日でもあっただろうし、荷物整理もしなければならぬだ

ろう。

一声掛けて部屋を出ようとするが、服の裾を掴まれて引き留められる。

「ハルト、もう寝ちやう?」

「流石にもう少し起きてるよ。ちよつと寝る時間としては早いし」

「そ、それじゃさ! 着替え終わったらハルトの部屋に行ってもいい? ……もう少し、

一緒に居たい」

その言葉には赤べこの如く、頭を上下に動かさざる終えない。

掴まれていた裾は離され、赤みを帯びたキリエに背中を押されて「後でね!」の言葉

と共に一旦お別れ。

急ぎ隣の自室へと戻り、部屋を暖めて寝間着へと着替える。

しばらくして小さなノックの音。裏返る自分の声。

「……寒い」

イジツでは平気かもしれない薄手のパジャマを着てやってきたキリエの一言目。

これは明日にでも日常品の調達に向かわないといけないなど考える。

「ごめん、こつちも今、暖房をつけたところなんだ。暖まるまでしばらく居間にでも居る？」

キリエの部屋とほぼ同じタイミングで暖房を動かし始めたのだから、部屋はまだ寒いまま。

冬場でも年中暖かいのは居間だけだ。あそこは冬の間はずっと暖房機器を動かしたままだから。

だが、キリエは首を横に振る。その代わりに潜り込んだのは私の布団の中。

布団を身体に巻き付けるようにして、顔を埋め、目を閉じ、深呼吸をしているキリエの姿。

幾度か繰り返されたその姿は、布団を捲り上げられて終わりを迎える。

「ハルト、さっさとお話しよっ」

キリエからの招待状。お断り出来るはずも無く、導かれるように布団の中へと潜り込む。

いつもは一人だけの場所に、もう一つの体温を感じる。

キリエの頭を抱き抱えるように腕を回す。同じように私の身体へキリエの腕が回される。

最初は強めに、徐々に緩まり、再び力強く抱きしめて体温を分け合う。

サラサラの整えられた髪、ゆつくりと撫で、幾度となくその綺麗な髪に唇を押し付ける。

それに応えるかのように、キリエの柔らかな唇が私の首筋に押し付けられる。

言葉を発する事もなく、ただひたすらに動作を繰り返す。

お布団の中で二人きりの内緒話。お互いに存在を確認し合う世界に浸かる。

睡魔に襲われる、その時まで。

Xヶ月後のYou copy?

「ハールトっ」

私の名前を呼ぶ、愛おしい人からの声が聞こえる。

そちらの方向に顔を向けると、喜色満面の彼女がそこにいる。

「どうしたの?」

「なんでもない!」

返事をする、決まり文句の言葉が返ってくる。

白い吐息を吐きながら、いたずら心で始まる問いかけ、応答がある事の喜び、白い歯を魅せながらあふれんばかりの笑みを浮かべる彼女。

キリエがこちらに来てから始まった、恒例行事になりつつあるやりとりの一つ。

見慣れたモコモコの飛行帽とゴーグル、コトブキ飛行隊の象徴である青いマフラーを身に着け、ミトンの手袋とダツフルコートをつ纏い、ロングブーツで新雪を踏み奏でられる音に乗せられて聞こえてくる鼻歌。

その調べに合わせ、両手を広げて自由気ままに白く覆われた世界を飛び回る。

時折、一人ぼっちではない事を確認するかの様にこちらを振り向く、その度にふわり

と揺れるフレアスカート、防寒対策の為にデニール数の高めな黒いタイツに包まれた足が垣間見える。

この美しい世界と同化し、地上を舞う彼女に視線を奪われて離す事ができない。

雪が止み、粉雪の間に終わらせようと始めた除雪作業。

北の大地は、私が住んでいた場所よりも多くの積雪を誇る。

昔の様に三角の形をした屋根から雪おろしを行わないと、家が潰れてしまうという事は無くなり、慌てて作業をする必要性は無くなったのだが、雪を使つてキリエに見せたイモノはたくさんある。

「ユキダルマだっけ？」

「うん。お祭りになれば彫像を作る人もいるよ」

「なんていうか、イジツに残されてるユーハングの人達の行動も、そう間違いいではないんだなあつて思った」

「楽しい事が好きなら人達である事には間違いない」

一ヶ所にまとめられた雪をシャベルで削りながら会話をする。

最初は雪玉を転がして大きくしようとキリエが奮闘していたのだが、自分の身の丈の半分程で転がす事を断念。

むしろよくそこまで転がせられたなと感心してしまう。

折角なのでその雪玉を二人で移動させ、追加の雪を被せて頭を作っている。

二人で他愛の無い会話をしながら、それでも尽きる事のないお喋り続け、笑い合う。

「あれ？ このユキダルマってもしかしてレオナ？」

「作るならコトブキの誰かに似せようと思って」

丸い目とへ文字をひっくり返しただけの笑顔に満ちたユキダルマではあるが、髪形で人物が判断できる様に細かく雪を削っていく。

前髪と後ろに結われている髪を再現し、落ちていた杖を胴体部分に差し込んで完成。

斜めに置かれたプラスチックの小さなバケツが帽子代わり。

「おお！ 思ってたよりもレオナじゃん！ 写真撮ろうよ！ 本人に見せたいし！」

「この出来で怒られないといいのだけれど」

首を横へと向けると、私のユキダルマとは遥かに出来の違う、いい大人たちが全力を出したであろう丹精込められた雪像が並ぶ。

可愛らしくデフォルメされてはいるが、きちんと研磨をされてピカピカに磨かれた、はやぶさと名付けられたモノたちと震電。

ここまでは問題ない。職業柄、お仕事という名目でお祭りのお手伝いに行っていたのかもしれない祖父と父親の共同作品であろう。

操縦席にちよこんと乗せられているネクタイを身に着けたユキダルマは、きつとイサオさんの仕業。

問題なのはその隣。立派な台座の上で両手を腰に当て、今にも聞こえてきそうな高笑いをしている同志の姿。

曾祖父渾身の作品である。これを最初に見せられた時は、同じく雪像化されて同志の隣にいらつしやる、頬を掻く姿のローラさんと同じ表情をしていたと思う。

「フィオだっけ？ アレシマで会ったっていう？」

「うん。同じ悩みを持つ者なのだけれど、こうして雪像を見上っていると悔しい気もする」
「なんだそれ」

お腹を抱えながら白い息を吐き、笑うキリエ。ほんの僅かの数センチを求めてしまうのは仕方のない事。

そんな私を余所に、突如キリエがスコップを使い、一ヶ所に雪を集め始めた。

念入りに雪を踏んだり叩いたり、硬さを確認したところで身軽な動きを披露し、その上に乗る。

ちよいちよいとミトン手袋を振って私を呼び寄せる姿、近づくとキリエの顔は少しだけ見上げる位置に。

この差がなあ。叶わぬ願望を抱いていると、伸びてきた手が私の頭を横切り、抱きし

める形へと変わる。

コートの上からでも私を優しく受け止めてくれる柔らかな膨らみと伝わるキリエの鼓動。

突然の事で意識も身体も硬直状態に陥るが、少しずつ力が抜けていき、甘えるように頭をキリエに委ねる。優しく頭を撫でられる感触に目元が緩みそう。

このまま幸福感に身を委ねていたくなるが、気になる事もあるので喋れる程度に頭を動かして上目遣いにキリエを見つめる。

その先にある表情は、行動とは食い違いを見せており、少し不満気である。

「急にどうしたの？ 凄く嬉しいのだけれど」

「なんか急に悔しくなったから、私だってハルトの同志なのに」

「同志って……パンケーキの？」

「そう！ むしろ私が最初だし！ 私という存在を忘れてもらっては困る！」

つまるところ、やきもちを焼いてくれているのだ。どうしよう、嬉しさの余り口元まで緩みかけてきた。

フィオさんとは背丈やそれにまつわる悩み事について分かち合う意味での同志なのだ。ついでに言えば攫われかけたわけ。

でもま、いつか。こうして甘えさせてくれるのなら、存分に甘えてしまおう。

頭を先程の位置まで戻し、深呼吸をして少しだけ左右に振る。

そのままゆっくりと目を瞑り、キリエから伝わる鼓動に集中をする。

夢心地とはきつとこういう事を言うのだろう。

頭に回されていた手に力が込められ、キリエが言葉を発すると同時に吐息が耳にかかり、全身に喜びが迸る。

「へへっ、毎晩こうしてもらっているから、今日はお返しー！」

先程よりも鼓動が高まるのを感じとれているのは、勘違いではなさそうだ。

4月1日

ゲキテツ一家

目の前には無垢な瞳とキラキラと輝く笑顔。自分の思いどおりになると信じて疑わない、無邪気さすら感じとれる。

だが残念。世の中はそう上手くいく訳もなく、私が今からする行動だってフィオさんにとっては予想外となるだろう。

しかし、私には為さねば成らぬ事がある！ 遂行できなくても私を信じて待つ人達と帰る家もある！

自分自身を鼓舞するかのように言い聞かす。いわゆる、がんばれがんばれ。ハートマークがつくアレは人から言われたいセリフだった。

再び目の前に意識を集中する。同じ悩みを持つ同志は光り輝き眩しさを覚える。

「フィオさん！」

「おう！」

「ごめんなさい！」

唐突に下げられた頭にフィオさんとローラさんが呆気に取られている。チャンスだ、

全てをここに集中させる。

かくして、唐突に開催されるアレシマ杯、G（頑張れば）I（ワンチャン）スタートです。

ハルト、絶好のスタートを切ります！ 後ろからは二名が遅れて追走。その内の一人は罵声に近い怒声を上げながら猛追していきます。

ここから先は人込みの多い中央通り、ここに紛れ込めれば……ああつとまさかの閉鎖！ 自警団によつて閉鎖されています！ 早々にこれは痛いロス。

脇道へと反れ、なんとか逃げ切ろうとしているハルト。慣れない道ながらも地図を片手にゴールである飛行船へと向かいますが、後ろも徐々に差を詰めてくる。既に射程内でしようか!?

それでもなお、脇道に積み上げられている物を倒してまでは妨害をしないハルト。これはユーハング人の性なのか！ 生まれつきの性分なのか！ 大馬鹿野郎なだけか！ 後方には豊かな果実を揺らしながら追いつく女性が手を伸ばし始める！

最終コーナーを回り、直線コースへと参ります。共に最後の加速を始めるかと思われたその瞬間、ハルトの目の前に人が現れる！ 避けきれない！

両足を使って急停止を試みる。地図を見ていたせいで前方不注意になっていた。この勢いでぶつかってしまったら相手に怪我をさせかねない、それは避けなければ。

最後の力を振り絞りギリギリまで踏み止まるが、まずい、止まらない。ぶつかると思った瞬間、首根っこを思いつきり引つ張られる感覚がする。それと共に私の意識が飛んだ。

「ニコ！ よくやった！」

「……？」

「よし！ 今の内にハルトを連れていくぞ！ 今日からハルトはフィオ様の部下だ！」

「いいのかしら……。無理に新しい子分を作らなくても良いのでは？ フィオ？」

「子分じゃない！ 部下だ！ ハルトはフィオ様の部下一号だ！ 教えれば喜ぶぞ！」

「はあ……。仕方ないわね」

「ニコ！ ハルトを担いでタネガシまで戻るぞ！」

「……訳が分からない」

高笑いと共にこの日、アレシマから一人の失踪者と一機の戦闘機が盗まれる事件が発生する。

保護者がわりの隊長は動揺を隠し切れず、ガドールの議員はアレシマの警備体制に鬼のような形相で迫り、責任を追及する。

かくして散り散りとなったハルトと震電。舞台はアレシマからタネガシへと移され

る事になった。

「そして一ヶ月の時が過ぎた」

「誰に言ってるんす?」

「独り言です、副長」

手帳に記載されているアレシマからタネガシまで連れてこられた日数を数える。もうこんなな月日が経っていたのか。それともまだこれだけで済んでいるというべきか。現在、私は親分の元でせっせかとマフィアの仕事をこなしている。まさか自分がこのような職業につくとは誰が予想出来たであろうか。

「朝食が出来上がるんで親分を起こしてきてほしいんすよ」

「また私ですか?」

「ハルト君が起こしてくれると被害が少なくて助かるんす」

余り寝起きの良くない親分。起こすのは大変な苦勞を強いられてきたようで、大切な集まりの時でさえ遅刻する程だと聞いている。

おかげで素直に起こせるといっただけで、最近では親分を起こす役目を押し付けられている。

「それでは起こしてきますね」

「お気を付けてー」

人を起こしに行く時に言われる台詞とは思えない言葉を受け取る。

「親分、ハルトです。入りますよ?」

一言、断りを入れてからふすまを開ける。部屋の中にはアレシマで出会ったあの人が私を此処まで連れてきた元凶であるフイオさんが寝ている。

布団を蹴り飛ばし、片足は畳の上、自身の服装も少し乱れている。この姿をみて鼓動が走るか頭痛を覚えるか。私は後者である。もう慣れですよ。

穏やかな顔をして口を半開きにしながら寝ている親分に優しく問いかける。

「親分。朝ですよ。起きてください」

これで反応があれば苦労はしない。返事があつた事は一度もないのだから。

仕方なしにいつもどおり肩を掴み、ゆっくりと揺らす。一緒に揺れ動くモノもあるが、慣れだ。寝ている人にまでそんな感情はいだけない。

「んっ……」

「もう朝ですよ、朝食も出来上がるそうです。起きてください、親分」

ゆっくりとだが確実に意識を取り戻しつつある親分。伸ばされた手を引っ張り起こすのも仕事の内。

「おはようございます。親分」

「……おはよう。ハルト」

「必要な物は揃えておきましたから、準備が出来次第、朝食をとりに来てくださいね」
「わかった」

「本日も無事に任務完了だ。これより帰投……したいところだが、親分にスーツの裾を引つ張られる。」

「ハルト、お前は何時になったらわたしの事を名前で呼んでくれるんだ？」

「もうしばらくは嫌どす」

「無理矢理連れてきた事に対して怒っているのか？」

「怒らずに従順であつたら逆に怖くありませんか？」

「それはまあ確かにそうだが……」

「そういう事なので、もうしばらくは親分呼びです」

「むう！」

「不満げな態度を隠そうともせずにくくれる親分。そういう顔をされても可愛いだけですよ。」

「一言伝えてから部屋を出て副長の元へ戻る。」

「お帰りなさい。親分を起こすのはハルト君に任せるのが一番すね」

「これでも結構、気疲れして大変なのですが」

「他の奴らが行くと怪我をしてしまうので我慢して欲しいんすよ」

寝返りをする際であつたり、夢で格闘をしているらしい。巻き込まれたら世話がないですなあ。

「はあーご馳走様！ 朝は米とミソシルに限るな！ ミルク！」

「ご馳走様でした。今日も美味しかったです、副長」

「お粗末様でした。ハルト君にそう言ってもらえると作り甲斐があるんすよ」

「おおい！ 私の為に作っているんじゃないのか!？」

「親分のはついでつすねー」

「コイツう!!」

なんだかんだで仲の良いフィオ組。慕われる理由は性格か、あるいは不思議な魅力を持ち合わせているのだろう。

台所に食器を置いて本日の日程を調べる。親分たちは特に何も無し。私は少々出掛けなければならぬ。

「ん？ ハルト？ どっか行くのか？」

「前日にも報告しておりましたが」

「そうだったか？ 悪い悪い！ 聞いてなかった！」

「もう……。本日は他のシマの方々と意見交流会をします」

「ああ！ そんな事も言っていたな！」

「一人で大丈夫でやんすか？」

「空賊に出会ったら尻を向けて逃げてきますよ」

「そんな事したらフィオ組の恥になるじゃないか！ 出会ったら全部叩き落とせ！」

「そうはいいますが、私の操縦能力もしかり、空戦前に仁義を切るにも最近は聞いてくれる人の方が少ない始末で」

仁義を切る。いわば名乗り上げのようなモノのだが、空賊の皆さんはそんな事をいちいち聞くわけもなく発砲してくるわけで。

「そうだ！ 今日は私が行って行ってやろう！ ありがたく思えよ！」

「邪魔をしに行くだけっすよね？」

「副長！ うっさいぞ!!」

「下っ端の仕事に親分がついてくるのはちよつと……」

「とはいえだ！ 空賊にケツ向ける事はわたしが許さん！ 素直に護衛されろ！」

「親分に護衛される子分ってどうなんでしょうか？」

「子分じゃない！ 部下だ！ ハルトもいい加減覚えろ！」

「副長、子分と部下ってどう違うんですか？」

「親分のその時の気分ですから気にしたら負けっすよ」

「おまえらあー！！」

お怒りの親分。結局、私について来る事になってしまった。

副長はシマの人達から建物の修繕を頼まれているからついて行けないと言われる。本当かなあ？

最初に辿り着くのはイサカさんのシマ。酒場で落ち合う予定となっている。

親分を席に座らせて注文をしにカウンターへ。商品を受け取り親分の座る席まで戻る。

「親分、今日は暑いですからオレンジジュースでいいですよね？」

「おお！ 気が利くな！ ハルトはリンゴジュースか、相変わらず甘いのが好きだな！」
オレンジジュースだつて似たようなものだと思うのだが、そこに触れると喧嘩になるので黙っておく。ここはイサカさんのシマだから騒いだ日には怒られてしまうのだ。

身に着けていた懐中時計を確認すると時間にはまだ余裕があるようで一安心。

「ん？ ハルト？ お前いつからそんな時計を身に着けてたんだ？」

「キノクで自由に行動が出来るようになってイサカさんから頂いたのですよ」

「なにいいい！！ そんな事聞いてないぞ！！」

「いやいや、副長込みでご飯の時に伝えましたかな」

「聞いてない!」

「それじゃ今、伝えましたという事で」

「ハルト!! 最近私の扱いがおざなりだぞ!! 教育し直してやろうか!」

「それはシマに戻ってからで願います。そろそろ相手方が到着される時間なので親分はここで見守っていてください」

「おう! 分かった!」

席を立ち、親分から少し離れた位置で立ちながら待つ事数分。本日のお相手のご到着。

「相変わらず時間通りだな、ハルト」

「お時間をいただきありがとうございます。イサカさん」

「なあっ!」

親分の驚いた表情、それと共に口も動く。

「なんでイサカがここに!」

「それは私の台詞だ。フィオと会う約束はしていないはずだが?」

「ハルトは私の部下だ! 部下を守るのも親分の甲斐性だろ!」

「あのような権幕でついて来られました」

「はあ……。まあいい、そこで大人しく待っている。今日はハルトに用がある」

「意見交流会だろ？ わたしも混ざったって問題ないだろう？」

「事前準備をしたうえで会議だ。何を議論するのもかも理解していかないだろう？」

「親分。本日は私の仕事を見守っててくださいると心強いのですが」

「……仕方ないな。部下の仕事を見守るのも親分の仕事か！ 頑張れよ、ハルト！」

「あい、ありがとうございます」

満足げに椅子に腰をかける親分。これで横入は無くなった。

「……随分と手綱を引くのが上手くなつたじゃないか」

「一月ほど一緒にいますから」

「ふふっ、では始めようか」

「よろしくお願いいたします」

意見交流会。なぜか相手は幹部編。

「……なのでこうすればイサカさんの負担も減るか」と

「しかしだな、これもシマの治安と秩序を守る為でもあるのだが」

「理解はしているつもりですが、こうする事が出来れば部下の教育と実績、積み重ねの努力を評価出来るわけでありまして……」

頂けた僅かな時間に意見交流は続く。私はイサカさんから用件を頼まれていた側な

ので、事前に調査をし分析を行い、資料を基に提示しているだけともいう。

私の親分は暇そうに椅子に跨いでオレンジジュースが無くなった容器をカリカリと齧っている。

「組長、お話し中に申し訳ありませんが次の会合が」

「もうそんな時間か？ まだ終わっていないのだが……」

「気にしないでください。幹部の方々が忙しいのは当たり前ですから。よろしければまたこちらから足を運ばせていただきます」

「……すまないな」

「いえ、他の組の、ゲキテツ一家のいち子分に対してもつたないお言葉です」

お互いに席を立ち、握手をする。その際に胸ポケットへと仕舞っておいた懐中時計を取り上げられ、イサカさんは私の懐中時計をみて満足そうな顔を見せる。

「時計、身に着けているようだな」

「身に余る物ではございませんが、シマの許可証の意味も含まれているのであればと思ひ、着けさせていたいております」

「それだけか？ 常日頃から手入れをされている。目立った傷もない。針は私の時計と同じ時を刻んでいる」

「大切な物ですから」

「……ハルト。私の組に来ないか？ お前ほどの人材をフィオの元に置いておくのは勿体ない」

ウチの親分が何かを喚いているが相手にしていると大変なので放置する。

「大変ありがたいお誘いではありますが、私には既に親分がいますので」

「お前の為に席を……。いや、ハルトなら下から始めても直ぐに私の横へと並び立てるだろう」

「申し訳ございません」

「駄目か。いや、こういった誘いになびかないからこそ……か」

離される手。冷たくも感じたが心はとても温かな人だ。私のような身元不明の人間にもこうして機会を与えてくださるのだから。

「予定が空き次第、また連絡をする。今度は邪魔が入らないように、な」

「邪魔とはなんだ！ 邪魔とは！」

「ふふつ、それじゃまたな、ハルト」

「本日はありがとうございました」

店を出て次の会合先へと歩いていくイサカさんは、そのままの体勢で手をひらひらとさせ、こちらに合図を示してくれる。下つ端相手に律儀なお方だ。

本日最初の交流会は無事に終了。全身も使い胸を撫で下ろす。

「ハルト！ お前はフィオ様の部下だからな!! どこにも行くんじゃないぞ!!」

「行きませんよ。そう伝えたじゃないですか」

「それはそうだが……。イサカの奴！ 私にはハルトが勿体ないだつて!! 私がハルトを見つけてきたんだぞ!!」

正確に言えばさらわ……。やめておこう。

お怒りの親分をなだめて次のシマへと移動を開始する。

道中、後ろにいるサダクニを呼ぶために再び手を挙げて合図を送る。

「先程の話、どう思う」

「イサカ組の信念、方針とは相性が良い話かと」

「だが、今以上にお前たちに苦勞をかけてしまう事になってしまう」

ハルトの案を受け入れれば、私の負担は減る。私でなければ出来ない仕事に集中出来るようになる。だがしかし、部下達にはより一層の負担を強いる事になる。

「お言葉ですが、組長」

「なんだ？」

「この話、キノクだけを限定にした話ではございません」

「どういうことだ？」

「ハルトの提案してきた話はキノクの先、今あるゲキテツ一家の形を示しております」
「私達が首領からシマを預かっている現状と同じだという事か」

「そしてその先にあるマファイア統一後を見据えた、タネガシの在り方を示した内容かと思われませう」

「……」

一体、ハルトは何者なのだ。アレシマからファイオが見つめてきたとは言っていたが、タダの子分ではなかったのか？

童顔で小柄な体格ながらマファイアを相手に怯える事もなく意見をぶつけてくる度胸。とてもじゃないがカタギの人間だったとは思えない。珍しくはないが孤児だったか、あるいは私と同じく両親を。

礼儀作法はファイオ組以外で習ったのか盗んで覚えたのか。そういえば、図書館から出てきたところで出会ったと言っていたな。自分の環境に腐る事なく、更に知識を得ようと努力してきたのか。

その結果、私に提案をしてきた内容がマファイア統一後を見据えた話か。これだけ規模の大きな話をされたら笑いたくもなる。

「なあ、サダクニ」

「なんでしようか、組長」

「ハルトも争いを、孤児が生まれるのを止めたいと思つているのだろうか」

「分かりません。ですが争いを望む人間ではないでしょう。他人からはいいように顎で使われていると揶揄されていても、自ら足を運び、情報を仕入れ、信憑性の確認も怠つておりません」

「それだけ聞くと大馬鹿野郎だな」

「ですが信用に値する人物かと。我々も組長の為ならば労は惜しみません。ご命令があればなんなりと」

「……ああ。ありがとう、サダクニ」

本人に直接、聞いたわけではない。だが、私達は同じ道を歩もうとし、お互いに努力を怠らないよう努めている。

ゲキテツ一家は家族だ。言葉で言うだけなら誰しも可能だ。では、ハルトの様に行動で組を超えた活動が、家族を助ける為に動ける日が来るのだろうか。

フィオ組に居ながらもハルトは私に問いかけてきたのだ。私に首領となる決意を、義務を持ち合わせているのかと。

「ふっつ面白いじゃないか」

お互いに為すべき事を為してやろうじゃないか。このタネガシから、イジツから争いや孤児が無くなる日を目指してな。大馬鹿野郎。

ゲキテツ一家 その2

案内された部屋には、壁に大きなバラと天女の姿が描かれている。畳の上にはソファが置かれており、そこに座り人を待つ親分と私。

「あの飛行はなんだ！ フラフラ飛びやがって！」

「慣れない機体で飛ばせてるだけ褒めてくださいよ！」

「それだけじゃないぞ！ イサカの次はレミか！ 一体そのケースには何が入っているんだ！」

「極秘事項となっておりますのでお答えできません」

「わたしはお前の親分だぞ!!」

「たとえ親分でも、信用に関わる事ですから」

「そうつすよ。信用は大事つすから」

ひらひらとした動きをしながらやってきたのは、この屋敷の主であるレミさんだ。

「ハルト君はそういうところを理解してくれてるつすから助かるつすよ」

「恐縮です」

「そんなに畏まらなくていいですよ。アタシたちの仲じやないつすか〜」

「ハルト！ お前はいつの間にも他の幹部と仲良くなっているんだ！」

「ゲキテツ一家は家族だから大切にしろと言われたのは親分では？」

「んぎぎぎぎ！ そういう意味ではないだろう！」

「ならどういう意味だったんすかね〜」

レミさんはそのまま私の隣に座り腕を絡ませてくる。見開かれる親分の目は驚きに満ち溢れている。私は虚空を見つめている。そうしなければ心も身体も幸せで蕩けてしまいそうだから。前開きの部分を閉めたい。

「こういう意味で仲良くなっていたらよかったですかね〜」

「なあっ！ レミ！ 近寄り過ぎだ！ 離れる！」

「毎朝、ハルト君に起こしてもらっているフィオに言われたくないつすね……」

「どうしてそういう事を知っているんだ！」

「そりゃ〜アタシの専門はそういう事を生業としているつすから。それでハルト君、そのケースには何が入っているんすかね？」

「レミさんから頼まれていた物。ご用意できました」

和気藹々としていた空気が一変して重苦しいモノへと変化する。

「クロ。フィオを丁寧に隣の部屋に案内してほしいつす」

「分かった」

「おい！ それの中身をフィオ様にも教えろ！ 教えるまでは動かないぞ!!」

「もう、フィオはワガママな子っすね。仕方ない、私がしばらくフィオの相手をしてるんで、クロはハルト君の相手をしてあげてくれっす」

「レミ！ はーなーせえー!!」

「ちっこいと、こういう時は便利っすね」

「誰がチビだゴラア!!」

親分の怒声もなんのその。自分の気ままな速度を一切変えずにレミさんは親分を担いで部屋の外へ。

残されたのは私とクロさん。この方はレミさんの片腕、そしてゲキテツ一家の闇の部分を担当している方。何か一つでも間違えたのならば……。

沈黙が続く。何か話題を考えると考えるが、背筋が氷付くような空気に飲まれて何も思いつかない。

そうした中、最初に口を開いたのはクロさんだった。

「なあ、ハルト」

「は、はい」

「そんなに緊張しなくていい、楽しんでくれ」

「そういわれましても、他の組、レミさんの片腕と呼ばれている方を相手に楽にしろとは酷な話でありまして」

「……あの親分とは正反対の性格をしているな」

口元が少し緩くなるのを感じる。微笑ましいモノを見つめているような。少なくとも馬鹿にしたような行為ではない。

「一つだけ聞いてもいいか？」

「私でよければ何なりと」

「どうやって、俺の尾行を撒いた？」

尾行？ 何のことだ？ クロさんの口から飛び出してきた単語に理解が追い付かない。尾行されるような事もしていない。ましては尾行を撒くような行動なんて尚の事だ。

「……まあそうだな、言う訳はないか」

「は、はあ。ご理解いただけで幸いです」

よく分からないから相手に合わせておこう。わたし、じゃばにーず！

「変な事を聞いてすまなかつたな。お互いに飯のタネとしてある事を聞き出そうとしていた俺が間違っていた」

「い、いえ。私は頼まれていた物を運びにきただけです」

「いとも簡単に言つてのけるな。流石だよ」

何故だ、頼まれた物を見つけて運んできただけだというのに過剰なヨイシヨをさせている。これは明らかに危険だ。何かが起こらない内に引き上げるのが得策か。

「あの、頼まれ物はこちらに入っていますので、私はそろそろお暇させていただこうかと思つたのですが」

「レミがソレを見つけてきたと聞いた時の反応を見ていただろう？ 悪い事は言わん、最後まで付き合つてもらおうぞ」

なんとという事だ。ケースに入っている物なんてタネガシに来てからも地道にユ－ハング工廠後を見つけては探して掘り当てただけの物なのに。貴重品とは何つてはいたが、自宅に帰れば無造作に積みあがっている中の一本なのに。

これらを少しずつお金に変えて、とびだせ！ タネガ島！ 計画がバレてしまつたらマズイ。幸いにして何処からか流れ着いたのを購入してきたと勘違いされているので、貴重性を訴えて次回の入荷は未定です。という流れに持つていけば、もう関わり合う事もないだろう。よし、これでいこう。

「遅くなつてすまないっす〜」

「いえ、こちらこそ突然の人数追加になつてしまい申し訳」

「はいはい、そういう喋り方はアタシにはしなくてもいいっすから〜。それで、例の物。

そこに入っているんすか?」

再び、私の真横の座るレミさん。イジツ人の距離感は近い。

「はい、ご用意させていただきました」

「ほあく、開けてもいいっすかね!」

「どうぞで」

レミさんがケースを開ける。中に入っていたのはユーハング酒。ラハマにあった工
廠後でも見つかった定番の物だ。

「ほほあく! 本当に見つけて来てくれたんすか!」

「たまたま手に入る機会に恵まれましたので、一本だけですがご用意させていただきました」

「あの短い期間で探し当ててくるなんて、ハルト君も中々の情報網を持ち合わせている
んすね」

無論、そんなモノはない。掘り当ててきただけだもの。

「代金を支払うつすよ、いくらだったんすか」

マズイ、コレがいくらで売買されているかなんで知る訳がない。このまま下手な金額
を掲示した日には、疑いの眼差しから闇の底へと引きずり込まれてしまう。

しばらく黙っていると、レミさんがどうしたんすか? と心配そうに声をかけてくれ

る。嬉しいけどその優しさが今は怖い。

「代金については頂く事はできません」

「へ？ これほどの上等品だと結構な値段もするつすよね？」

「ええ、ですが代金を受け取る訳にはいかないのですよ」

「それはどういう事つすかね」

再び重くなる空気。盗んできたのか。そう言いたげな視線を送られる。あともう少し、（ん）さえ乗り越えられればなんとかなる！ 多分！

「値札が貼られていない物なのですよ、ソレは」

「つまり正規の流通品ではないと」

「ええ、ちよいとお世話になった方がいまして、その方から譲り受けた品でございます」

「へえ〜」

架空の人物登場！ 駄目かな、アカンかな。そう思っていた矢先にあれほど重かった空気が一蹴された。

「ハルト君も、なかなかやるつすね」

「いえいえ、相手の方も紳士的だったというだけですよ」

「そういう事にしておくつすよ」

山を越えたららしい。よかった。ハルト、今日も無事に生きています。

「でもよかつたんすか？　そういう経緯があるとはいえ希少なお酒を私にくれてしまつてもっ。」

「手元に置いてあつても仕方ありませんし、私も親分もお酒は飲みませんから。それに」「それに？」

「レミさんは楽しそうにお酒を飲まれていらつしやつていたので、そういつた方に飲んでいただけの方がお酒も喜ぶかなつて」

横にいるレミさんが固まる。しばらくして少し顔が赤くなり始めた。こういう事で照れるのなら、先に前開きのシャツを閉めましようよ。

「ハルト君は口も上手いんつすね。お姉さん口説かれているのかと思つたつすよ」

「レミさんのような素敵な女性にはとても。まだまだ精進していかなければならぬい身ですから」

「あらあ残念、フラれちゃつたつす」

空になったケースの蓋を仕舞い、次のシマへと向かう為に準備を始める。

「んくとはいえ、このまま返したらレミ組としても義に反するといつすか」

「私は一向に構わないのですが」

「当人たちが良くても周りがこういう事には敏感なんすよ……そうだ」

自分の身体を弄つて何かを探している模様。出てきたのはアクセサリー？

「これを持っていくといいです。アタシが日頃から身に着けていた物つすから、レミ組のシマで何かあればこれを見せつけてやるといいですよ」

「日頃、身に着けていらつしやるような大切な物を受け取るわけにはいきません。レミさんに（ご）迷惑をおかけしてしまう事になりますから」

「それぐらいはちよちよいのちよいですよ。イサカからの受け取れて、アタシからの駄目なんすか……？」

赤く染まる顔、潤む瞳、これを断りきれるか？ 無理です、はい。

「……分かりました。では、友好の証。という事で受け取らせていただきます」
「どうぞどうぞ。これからも末永くよろしくつすね」

末永く……最後にマズった感じがする。

「親分、お待たせしました」

「遅いぞハルト！ 待ちくたびれたぞ！」

「何か飲みませんか？ 緊張で喉がカラカラです」

「レミを相手に何を緊張しているんだ？ イサカと違って礼儀や何かを押し付けてくるヤツじゃないだろ？」

「それは確かにそうなのですが、ふう、今日は親分についてきていただけでよかったです
思っています」

「お？ おお!! ようやくわたしの偉大さが分かってきたか!!」

「はい。親分の大きな器に大変助けられているのだと実感しました」

「そうかそうか!! ハルトもついにわたしの事を理解し始めたか!! ついでに名前で呼んでもかまわないんだぞ?!!」

「それは遠慮させていただきますね、親分」

「なんでだよおお!!」

「こうしてまた次のシマへと移動を始める。あと何か所だったかな。

「無事に行ったようだな」

「クロく、ハルト君をみてどう思ったっすか?」

「俺達と同じ匂いがする。だがそれらを一切見せる事がない」

「アタシが横に座った時も、隙を見せず、害をなそうともしなかったっすもんねく」

「俺達と違うのは、ハルトは一人で生きてきたという事だ。そこで身に着けた処世術だろく」

「……ずっとひとりぼっちだったんすかね」

「分かん。尾行についても聞いてみたが曖昧な返事しかもらえなかった」

「珍しいっすね。クロが直接そういう事を相手に聞くなんて」

「地上でも、空でも撒かれたんだ。一体何をすればそんな芸当が出来るのか興味があつてな。ただお互いにそれで飯を食っている事を思い出して、質問を忘れてもらったが」
はあとため息をつくクロ。アタシの事で溜息をつく事はあるとしても、それ以外の相手に対しては珍しい。

「まゝ余り深く考えない方がいいつすね」

「ハルトが敵に回る可能性だつてあるんだぞ？」

「それはないつすね」

「何故、断言できるんだ？」

「あの年頃まで一人で生きてこれた人が、いまではフィオの下で働いているつすよ。あのワガママ親分に」

「だがしかし……」

「アタシらだつてそうだったじゃないつすか。ゲキテツ一家に救われてなければ今頃地面の下つすよ」

「ああ……」

「ハルトも見つけてもらえたんすよ、フィオにね。アタシじゃなかったのは悔しいつすね」

「ハルトがレミ組に入ってくれれば、今以上に活動の幅は広がっただろうな」

「そうっすね。でもハルトならレミ組に入らなくても助けてくっつてお願いすれば飛んでくる気がするっすよ」

「なんとなくだか、分かる気もする」

「でしょ？ 自分の事よりも他人の事を優先する性格、コレだっけ見つかりませんでしたって言って売り払えばいいのにあっさり置いていくぐらいに欲がない。イサカが懐中時計を預ける程の人物っすよ。こちらのアクセサリーも友好の証としてようやく受け取ってくれたっす」

「つまり、今後とも仲良くしていこうと？」

「そういう事っすよ。ゲキテツ一家はみな家族。家族で争いなんてまっぴらゴメンっすから」

用意してくれたユーハング酒に口をつける。そこいらで飲んだ紛い物ではなく、本物の味。

ハルトはずっとひとりぼっちだったんすか？ アタシらと同じで裏の世界でしか生きていけなかったんすか？

もし幼い頃に出会えてたら、アタシらはどうなっただっすかねえ。

きつと、一緒に悪ガキをしてくれたんだらうっすなあ。

叶わぬ過去を考えても仕方のない事っすね。それでも大切な現在にハルトと会えた

事に感謝するっすよ。

「ハルトくこれからはたくさん家族でいっぱいっすからねく」

もちろん、アタシもハルトの家族っすよ。こんなに美味しいお酒を持ってきてくれるんっすからく。

ゲキテツ一家 その3

「丁重に、このお方をボスの元へ案内しろ」

「ウツス」

「おいこら、幹部であるファイオ様よりハルトの方が扱いが上ってどういう事だゴラァ!!」
「あの、今回はうちの親分が同伴してくれているので、いつもどおりのご案内は控えていただいても」

「わたしがいない時もこんな扱いを受けているのか! ハルト!!」

「迎り着いたシマはヤジヨと呼ばれる場所。目の前にあるのはヤジヨを仕切る幹部の屋敷。」

案内されている最中に、親分が話しかけてくる。

「一つ聞いていいか? ハルト?」

「なんなりと、親分」

「どうしておまえはアノマロカリスの人形を背負っているんだ?」

あのでっかい人形、通称マロちゃんを背負いながら本日三人目の方と面談予定。

「コレも本日の主役でございまして」

「人形が主役？ しかもそれ、私の部屋にあったヤツじゃないか？」

「イエス、ママ」

「イエス、じゃない!! 何を勝手に人の物を持ち出してんだ!!」

「もう使われない。と部屋の隅で涙を流していたので気分転換に連れてきました」

「人形が泣くわけないだろ！ 気分転換ってなんだよ！」

「本当の事が知られたら、親分にも、面談者にも殴られてしまう。とても大切な機密事項。」

「当人にバレても平気だと思うのは私だけであろうか。それともまだ恥じらいが勝る年頃なのだろうか。確か幹部の中では最年少と言われていたはずだ。それでいてあの身長と足の長さ。その身長を少し私に分けてください。」

「ボス、ハルト達を連れて参りました」

「ハルト達!?! フィオ様とその部下だバカヤロー!!」

「し、失礼しました！」

立派な椅子に座り足を組んでいらっしやるのは、ここのシマの親分、ニコさんだ。

「……フィオ。よく来てくれた」

「ニコお、もう少し子分の教育をした方がいいんじゃないかあ？」

「……すまない。言い聞かせておく」

「本当かあ？ 大丈夫かあ？」

「……本当だ。謝罪もかねてアイスでもどうだ？」

「まあ、分かってくれたならいいさ。食べる」

「フイオに」

「分かりやした」

子分に命令を下して、アイスの準備を始める。

運ばれてきたアイスは透明な器に載せられ、丸くちよこんとした形をしていて可愛らしい。
しい。

「しかしなんでアイスなんてあるんだ？ ニコは甘い物が好きだったか？」

「今日は暑いからな、せめて冷たい物でも用意させておいた」

「おおーそうかそうか！ ハルトを捕まえた時といい、良い仕事をするな！ ニコー！」

「……フフフ」

私の知っている幹部の中で、もつともマフィアらしい見た目と態度を示しているニコさんではあるが、中身はその、なんといいですか、乙女……？ ちよつと違う。

小さくて可愛い子が好きなのだ。この人は。その証拠に親分が美味しそうにアイスを食べている姿を見て、身体は歓喜に震え、緩み切った笑顔を表している。少なくとも

私にはそう見えるのだが、親分は気がつかない。

ニコさんはウチの親分と仲良くなりたいたいと、常日頃から考えていたらしい。そんな折に自分の考えを理解してくれる人物がウチの親分の元に現れた。つまり私である。

何をすればお近づきになれるのか。何をしてあげれば親分は喜ぶのか。その熱は言葉に変化され、夜を終えて朝を迎えた後も終わる事がなく、その頃には私は寝ていた。

つまり、可愛い子が可愛い仕草をして可愛らしく自分に頼ってくれると、そのお願いに自らの命を賭けてしまえるほど、可愛い子が好きなのだ。特に小さい子が。

前回お会いした時に打ち明けられた秘密。それを実行に移し、成功へと導く為の作戦を立案する。何か理由を見つけてニコさんのシマへと親分を連れてきて、接待をすれば良いのではないかと。

何をすればいいのか分からないと言うので、一つは親分の機体の整備を名目に。親分は機体の操縦が荒っぽいのでエンジンの故障率が高い。それを整備の腕前も良いと評判のニコさんに依頼をして修理を頼む。という流れ。

機体が絶好調になればフィオさんからの評価も上がるのでは。と伝えたところ、紫電を新しく組み上げられる程のパーツが用意される。その行動力はどこから。

修理にかかる暇な時間に甘い物でも食べてもらう。最近暑いですからアイスでも食べさせたらどうですか？　と言った記憶はある。そして唐突な訪問にも関わらず出さ

れるアイス。既に用意してあるとは思わなかった。

「……フィオ、少しの間、ハルトを借りるぞ」

「おお！ そういや用があつたんだな！ いいぞ！」

「おかわりが欲しかったら言ってくれ」

「分かった！ ありがとな！ ニコ！」

あの、歓喜に震えていないでこちらに来ていただきたいのですが。絶対に心の中で叫んでいるよ、この人。

親分から少し距離の空いた机と椅子のある場所で、ようやく本日の用事を聞く体勢に入れた。

「とはいえ、今日の出来事で既に任務達成だと思うのですが」

「ああ、最高だよ、お前というヤツは。私が長き間、望んでいた事をいとも簡単にこなしてくれた」

「運もあると思いますよ。まさか今日、親分がついてくるなんて思いもしなかった出来事ですし」

美味しそうにアイスを頬張る親分はとても可愛い。ニコさんが夢中になるのも分かる気がする。

「だが、問題が発生した」

「問題ですか？」

「ああ、フィオは可愛い。これは絶対だ。だがな……」

「だがな？」

「たまたま、出会った子がとても可愛い子でだな」

「随分と浮気性なんですね」

「浮気性なのではない！ 私はただ小さくて可愛い子が好きなだけだ！」

「ちよ！ もう少し声を抑えて！ 親分に聞かれたらマズイ事になりますよ！」

「う、うむ……」

慌てて親分を観察してみるが、アイスに夢中のようだ。アイスの力は偉大。

「可愛い子と出会えてどうしたのですか？」

「その子はだな、最初は私の顔を見て怯えていたのだが、内面を知ると怯えた事に対して

謝罪してくれた」

「また、人の出来た方ですね」

「ああ……。そして無茶をした私を叱りつけてくれたのだ。あの時に受けた衝撃は今も

忘れられない」

「初めて人に怒られた、それも自分の身の事を案じて。でしょうか？」

「そうだ。小さくて可愛くて私の事で怒ってくれた少女。このおかげで最近、悩みが甦生した」

「悩みですか？」

「かわいい。という言葉だけでは私の心が収まり切れないのだ」

頭痛がしてきた。ついでに嫌な予感も。

「その為に、今回ハルトを呼んだ」

「私にどうしろというのですか？」

「今の私の心に埋まる適切な言葉は無いか？」

そういう事ですか。いや、こういう事ならまだ平和的でいいよね。

「んー。愛らしい？」

「意味としては間違いではないが、足りない」

「愛おしい？」

「それも分かる。可愛い子を見つめている時に思うからな」

「愛でる？」

「今のフィオに対して思っている言葉だ」

「二杯目のアイスに立ち向かう親分。たまに自滅して頭を痛めている。

「何か、何かないのかハルト。このままでは私の心が！」

「今の親分を見ていれば落ちつきませんか？」

「それとこれは別だ」

「うわっ、面倒くさっ」

とはいえだ、二つほど検討はついている。利用方法が合っているのかも不安。そしてユーザング語、理解出来るであろうか。

「二つほど、思い浮かびました」

「……なんだと」

「頼んでおいて本当にあるのかって態度、傷つきますよ」

「すまん。まさかこれ以上、案が出て来るとは思わなかったのだ」

「やってみないと心に当てはまるか分かりませんから、実際に試してみましよう」

「どうするんだ？」

「まず目を瞑って、少女の顔を思い出してください」

言われたとおり目を瞑るニコさん。そこまで深刻な状態なのですか……。

「どうすればいい？」

「先程、話をされていた少女との内容を思い出していつってください」

しばしの間、黙るニコさん。ただし表情がマズイ。お見せ出来ない顔をされている。

「最後にその子、なんてニコさんに言われたのですか」

「……ありがとうだ」

「その時に可愛いつて言葉を思い浮かべるとどうなりますか？」

「……可愛いだけでは足りない」

「ユーハングの言葉では可愛いを通り越すと、尊い、という言葉が使われるようになりましたが、そちらはどうですか？」

尊い。その言葉を念仏のように繰り返すニコさん。駄目かね。

その刹那、目を見開き、机の上に置いていた私の両手を掴み、重ねる。そのまま力を込めて何かに祈りを捧げるような姿勢になる。とりあえず手を。

「ハルト」

「なんででしょうか。手を」

「……素晴らしい」

「は？」

「言葉の意味は分からない。だが私の心はその言葉を求めていたかのように、ぴったりと収まったのだ」

「そ、そうでしたか。それはよかったかと」

「ありがとう。ハルト。お前に出会えてよかった」

「あ、はい。こちらこそお会い出来て光栄です」

なんとかニコさんとの用事も終わりそうだ。一安心。できやしなかった。「もう一つのはなんだったのだ？」

「アレは少々、上級者過ぎるといいますか。心が持っていられる可能性が」「私がフィオ以外の相手に浮かれるとでもいうのか！」

「浮かれてますやん……」

「私の事であれば気にしないでくれ！ 今の私に怖い物などない！」

「どうなっても知りませんよ？」

「構わん。教えてくれ」

どうしても知りたいらしい。禁断の言葉を。愛を。

「では先程と同じ様に目を瞑って少女を思い出してください」

「分かった」

「そして今度は叱られているところで一旦止まってください」

「今、とても叱られている」

しよんぼり眉毛のニコさん。さあどうなる。ニコさんにこの適正があつた場合、タネガシで一体何が起ころ。

「では、怒っている少女に対して可愛いという言葉は浮かびますか？」

「怒られているから難しい」

「尊いという言葉は？」

「……怒られているせいで辛い」

「では、ママという言葉は？」

「ママ？ 彼女は私の母親ではないぞ？」

「いいから、先程と同じく呟いてみてくださいよ」

ママ。ママ。これ、聞いてるだけでも恐怖を感じる。

呟く言葉は一定の間隔を保ちながら呟かれている。問題は先ほどと違って帰ってこない。まさか、心を、魂を持っていかれたのか！

ニコさんの肩を掴み、揺らす。強制的に戻さなければ帰ってこれなくなってしまう。

頼む！ 帰ってきてくれ！ ニコさん！

目をゆつくりと開くニコさん。先ほどとは違う、穏やかな顔。まさか。

「ニコさん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫、大丈夫だ」

「本当に？」

「ああ、ハルト。ありがとう。私は世界の真理を見つけた」

駄目なのに来ちゃった。

「あの人は、あの少女はママだ。私のママになってくれる人だったんだ……」

「ちよ！ 違いますから！ 戻ってきてください、ニコさん！」

「大丈夫だ、今はとても心が穏やかなのだ。今まで本心を隠し続けて生きてきたのはなんだったのだろうか」

あかん。これはマズイ。だが、まだニコさんを現世へと戻せる方法がある！

「親分！ 緊急です！」

「んお、どうしたんだハルト？」

「いま親分が食べているアイスをニコさんに食べさせてあげてください！」

「どうして私がそんな事をしなくちゃ」

「お願いです！ 後で何でも言う事を聞くので今だけは！」

「お、おう。分かった、分かったよ」

席を立ちあがり、アイスの容器を持ってニコさんの横へ移動する。

「やあ、フィオ。今日も可愛いな」

「……大丈夫か、コイツ？」

「駄目になりかけているから頼んでいるのです！ そのままアイスを食べさせてあげて

ください！」

「わたしが!? それでどうにかなるのかコレ!？」

「なるのです！ お願いします!!」

頭を下げて真剣なお願い。さすがの親分も何かを察したのか、ニコさんにアイスを食べさせようとする。

「ふふふ、今日のフィオは一段と尊いな……」

「気持ち悪いなあ……。はよ戻れ。アーン」

「アーン」

素直に従ってアイスを食べさせてもらうニコさん。だが、パンチが足りないのか……。

「アイス、美味しいな」

「おいハルト!! 戻らないぞ!!」

「少々お待ちを!」

ニコさんの耳元まで近づき一言申し上げる。

『ニコさん! フィオさんにアーンしてもらえたんですよ! しかも間接キスですよ!』

その瞬間、震えはじめ肉體。心と身体が争いを始める。頼みます! 禁断の言葉を口にした私も悪いのです! 戻ってきてください!

親分はさつさと席に戻って三杯目のアイスを頼む。

長く短い時間、その時、ニコさんは咆哮をあげる。全てを思い出したかのように。

「だいじょーぶかー？ ニコー？」

「……ああ、危ないところであつたが助かつたよ」

「適正持ちが覚えるところなるのですね……」

かくして日常を再び得られたのだ。

「すまなかつた」

「いえ、私も軽率でした」

「あの言葉は危険だ。二度と使わないと誓おう」

「それがいいと思います。あとせっかくなので口直しではないですが」

マロちゃん人形を膝の上に乗せる。

「アノマロカリスの人形？ それがどうかしたのか？」

「親分がしばらくの間、抱き枕として使っていたのですが、副長にお子様と言われて以来、部屋の隅に置かれていたのですよ」

「それを私に持ってきてどうするんだ」

「使いませんか？ 親分のお古になりますけど」

「使う」

一応、親分に許可をもらおう。

「親分、マロちゃん人形をしばらくニコさんにお貸してもよろしいですか？」

「んあ、ニコはそんな人形が好きなのか、意外と可愛い物が好きなんだな！」

「……ああ、気になってはいた」

「しようがないな、まっ！ 今は使つてないし、その人形の良さも分かっているのならしばらく貸してやろう。フィオ様の寛大な心に感謝するんだぞ！」

なーっはっはっはっつと高笑いをしていた親分であるが、突如、高笑いが止まる。

「すまん、トイレ貸してくれ……」

「アイスを食べ過ぎたのですね」

「うっさいいいい」

子分に案内されて消えていく。

「そんなわけで、マロちゃん人形でしばらく心の安定化を目指して頑張ってください」

「……今回は色々と面倒をかけたな、ハルト」

「気にしないでください、私もご迷惑をおかけしましたから。あ、こんなところに親分の涎の残が残ってる。拭かなきゃ」

「ヤメロオオオオオ!!!」

二人が次のシマへと向かうため、ヤジヨを離れて行く。

予想外の訪問者はフィオだった。だが、フィオにありがとうと言ってもらえ、あまつさえ、アーンまでしてもらった。その後の記憶が飛び飛びなのが辛い。

私の人生の中でもっとも充実した日である事は間違いない。それを手引きしてくれたハルトに感謝をしなければ。

あいつは物ではなびかない。イサカとレミが言っていた気がする。よく聞いていなかったけれど。そして孤児である可能性も。

だが、私はハルトに対しもう一つの可能性を見つけた。

前回、会った時にハルトは上着に水を零した。風邪を引かれては困るので私のシャツを貸してあげたのだが、案の定ブカブカである。

童顔で小柄な体格、恥ずかしそうにシャツの袖から指を出していた。その時、私の全身に何かが走る。ハルトは本当にハルトなのか？

疑問は深まる。確信へと辿り着くにはまだ何かが足りない。そう考えていた。昨日までは。

今日の出来事で確信した。ハルトは女の子だ。私が守るべき可愛い女の子だったのだ。

落ちつきのある喋り方。自身より他者を労わる優しい心。私に対して怯える事もなく接してくれるあの器量。華奢な手。そして困ったときの顔。かわいい。

では何故、男のフリをしているか。そんな事、この世界が悪いに決まっている。彼女を彼女のまま生活していけない世界が悪いのだ。

守ってやらなければ。幸いにフィオと共にしている事が多い。二人を、フィオとハルトを私が守らなければ誰が守るといふのだ。

「アハハハハハ!!」

いままで自分の意思とは無関係に世界が進んでいた。だが、フィオと出会い、ハルトと出会った。この為に世界は私を導いていたのだ。

この先は私の意志で進ませてもらう。たとえ世界が敵になろうとも、二人と可愛い子を守る為、私は生きていくのだ。

「ボスの咆哮が止まらない……っ」

「ついに始まるぜ……。血で血を拭う争いが！ 死と隣り合わせで踊る輪舞がよお！」

「若頭！ 一体何が起こるんで!？」

「最初の生贄が決まったのさ……。狂犬フィオと期待の新入りと呼ばれているアイツに
よお！」

「フィオだけでなく新入りにまで!? 一体なぜ……」

「ボスには敵はいない。だが、確実に潰せる芽から潰して一人残らずフィオ組を潰す気

だ……」

「なんとこの事を……。新入りにすら手を抜かずに潰そうというのか、ボスは……」

「クツクツク……。空は硝煙にまみれ、大地は血とオイルで塗り潰されていく。だが、ボスを一人だけそこへ行かせるわけにはいかない。そうだろうか？」

「へい！ 行先が地獄でもお供しますぜ！」

ゲキテツ一家 その4

「今度はシアラのシマか……」

「おや、親分。あまり乗り気でないご様子」

「あいつは昔から何かとつけて人の身長をバカにするのが趣味な性悪女なんだよ」

「長いお付き合いのようで。でもお会いするのはシアラさんではありませんよ」

「ん？ それじゃ誰と会うんだ？」

「副長であるヴェイトさんですよ」

「アイツかあ、あいつも苦手だ」

「親分にも苦手な人つていたのですね」

「シアラに蹴られて喜ぶような奴だぞ！ シアラの事をさし置いても人に蹴られて喜ぶ

ヤツが存在するなんて信じられん」

「そこら辺は人それぞれですからね」

「……ハルトはそういう趣味はないよな？」

「私？ 握手や抱擁がいいですね」

「そうだな！ そうだよな！ よかった……」

親分の心配事は解決されたご様子で。ヴィトさんの性癖はちよつとレベルが高すぎる。

ヴィトさん自らお出迎えをしていただき、部屋へと通される。

椅子に座り机を挟んで交流開始。といきたいところではあったが、親分が既に飽きている。

「親分、よければ少し、仮眠を取られては如何ですか？」

「んー、うーん」

「突如お付き合ひさせてしまいましたから、ここで一休みしていただければと。あと一件ですから」

「そちらのソファでよろしければ、お使いください」

「……わるいな、少し使わせてもらうな」

「どうぞ、ごゆるりと」

「終わりましたら、私が起こしますのでゆつくりされていてください」

「わかった。ちよつと寝る」

ソファに横になる親分。しばらくもしないうちに寝息が聞こえてくる。寝つきの良

さは羨ましい。

風邪をひかないように上着をかけておく。これで大丈夫だろう。

「さて、ハルトさん。本題に」

「分かりました。今回はどのような用件でしょうか」

「実は……」

ゴクリと喉を鳴らすヴィトさん。一体なにがあつたのだろうか。

「最近、シアラ様からの寵愛を受けられないのです」

「……はあ？」

「言葉であれば出会うたびに頂けるのですが、その」

「蹴られたり、踏まれたり、乗られたり、ですか」

「よくご存じで。我らシアラ組以外の方に理解をしていただける日が来ようとは……」

「理解はしますけど、私は違いますからね。ここ重要だよ？」

「私どもはシアラ様が心配で心配で。我々にご褒美を与え続けてくれたシアラ様が突然、何もなされなくなってしまう、体調でも優れないかと考えたら夜も眠れなく」

「私で解決できる用件だととても思えません」

「一度だけでいいのです。部屋にいらっしやるシアラ様にお会いして、様子を見てきていただきたいのです」

「私、殺されないでしようかね？」

「そこは大丈夫です。外から私が見守っておりますから」

私に向けられる殺意を愛情に変換して受け止め……もとい、庇ってくれるのだろう。

「分かりました。シアラ組の副長でもあるヴィトさんに頼まれて断るわけにはいかないでしょう」

「おお！ ありがとうございます！ ハルトさん！」

立ち上がり握手をする私達。身の丈にあつた普通の会議っぽい光景だ。それでも相手の立場は副長だけ。

こうして連れてこられたシアラさんの部屋。ヴィトさんがノックをしてお伺いをたてると返事が返ってきた。

「フィオ組の部下の方がいらつしやいました」

「はあ？ そんなヤツ追い出さないよ。命令されなきゃできないわけ？」

「ですが、私の権限では対処しにくい用件でありまして。是非ともハルトさんにお会いしていただきたいのですが……」

「ハルト？ なんでわざわざアイツがここにいんのよ」

「頼まれ事が御座いまして、突然ではあります面会をさせて頂きたたく」

分かったわよ。面倒だと隠しもしない声と共に椅子から立ち上がる音が聞こえる。

親指を立てて成功だ。といわんばかりのヴィトさん。シアラさんを騙してでも安否を気にかける。その姿は忠義か、犬か。

扉が開けられて、現れたのはこのシマを仕切っているシアラさんの姿だ。

「はいはい、ハルトだけ入ってきなさいよ」

「シアラ様！ 私は！」

「アンタは入ってきたら蹴るわよ、ブタ野郎」

嬉しそうに突入する。そして罵声と怒声に包まれながら転がるように戻ってきた。ただのブタであつた。

「早く入りなさいよ」

「失礼します」

「そのブタ野郎が入らないように扉も閉めておきなさいよ」

命令されたのでそつと閉じる。恍惚の顔をしたヴィトさんが見えたが、どうする事も出来ないのでそつとしておこう。

「それで、フィオから何か頼まれたの？ 人に頼むより自分で行動する子なのは私が一番理解しているつもりなんだけど」

「ご想像通りです。親分から頼まれてきた訳ではありません」

「それじゃあ何よ？ つまらない理由なら殺すわよ？」

「先程、蹴り飛ばされたヴィトさんにシアラさんの様子を伺うようにと依頼がありました」

「ヴィトが？ 何のために？」

「いわゆるその、ご褒美が貰えなくて禁断症状が起き始めていたようでした」

シアラさんがとても楽し気に、狂気に満ちた溢れた笑いをする。

「ハルトお、あたしが出す問題に答えられたら無事に返してあげるわあ」

「なんででしょうか？」

「あたしがヴィト達を蹴り飛ばさなかった理由よ。答えてみなさい？」

理由。分かるわけもないが、脳味噌に問いかける。この人達の関係はいわゆる女王様と下僕。SとM。どちらがどの立場なのかは言うまでもなく。

普段からブタ野郎と罵り、反応を楽しんで蹴り飛ばす。うーん……。

「シアラさんからの罵声も蹴りも、毎日もらえるモノだと認識されていたら反応が同じで変化が起きないから？」

「あら、簡単すぎたかしらね。フィオ組の奴ですら分かるというのにあたしの下僕は理解できないのよ。だから調教中なの」

「お邪魔をしてしまいましたか？」

「そうよ。調教中だったのに、つい気持ち悪くて蹴り飛ばしちゃうたじやない。どうしてくれるのかしら?」

「私がシアラさんから彼らのような事をされても、シアラさんが喜ぶような反応は難しいかと」

「……:そういうえばアンタ。最近フィオにずいぶんと気に入られているようね」

「目にかけてもらっている事は確かです」

「フィオのお気に入りであるアンタがあたしの手で情けない姿にされたのを見せたら、あの子はどんな反応をするでしょうねえ」

「激おこぶんすか丸になるかと」

「意外と理解してるじゃない。そうよね、フィオの事だから自分の子分を貶されたりしたら自ら現れて喧嘩を売ってくるわ」

その親分は同じ屋敷内で仮眠中。黙っておくべきなのは理解した。

「ハルト、そこで四つん這いになりなさい」

「お断りします」

「アンタに拒否権なんてないのよ。やりなさい」

拒否し続けたら、きつと頭と身体がお別れしちゃうよ。仕方ない、ちよつとだけ我慢をすればいいのだ。

言われたとおり、両手と膝を床につける。蹴られる……のかと思われたが、上に乗られた。

シアラさんの柔らかな感触が腰の当たりから伝わる。重みを感じさせず、どこからあの力が出されているのか不思議である。

「ほら、歩き回りなさいよ、ブタ野郎」

「特にブタのような体形はしておりませんが」

「ブタが口答えしなくていいのよ。ほら、はやくはやく」

尻を何度か叩かれたので四つ足歩行を開始。ハルト、動きます。ぶひい。

なおも尻を叩き笑うシアラさんの姿は可愛らしい。のだが、ニコさん曰く、中身が可愛くない。

特殊性癖を持ち合わせていないと、この姿は屈辱……とまではいかないが、背中に乗っているシアラさんがまた見た目愛らしいせいで、家族の集まりとかで来た小さい子のお守りをしている感覚だ。親分と大差のない身長だし。

「あはは。アンタ、才能あるんじゃないの？」

「まったくをもつて喜びを感じませんが」

「それを喜びに変えてあげるのがあたしの役目よ」

「なんという悪女でそう」

「あら、誉め言葉、ありがとう」

皮肉も何も通じないのである。何週目かのお馬さんごっこならぬ、ブタさんごっこ。流石に辛くなってきた。

「ほらほら、ペースが落ちてきてるわよお」

「後何週ぐらいですかね？」

「そんなの、あたしの気分次第に決まっているじゃない」

「鬼！ 悪魔！！ フリフリスカート！！」

「最後のはなによ……」

気合を振り絞り、ひたすら同じ場所を周回中。叩かれる尻、いけない、これはいけない気持ち。理性を保ち、耐えなければならない。

「意外と耐えるわね。いいのよ、楽になっても。その瞬間にアンタの運命が決まるでしょうけど」

「耐えてみせますよ。頑張りますよ。これぐらいではっ」

「……ハルト。どうしてそこまで意地を張るの？ フィオに失望されたくないから？」

「親分が出てくる要素ってどこかにありましたっけ!？」

「そこら中にあるじゃない。違うの？ なら何故？ 組も違うし私が性悪女だと聞かされてるでしょうっ？」

「聞いていますし、今まさに実感もしていますよ！」

「なら何よ？ 答えなさい？ 蹴られたいの？」

尻を叩かれるぐらいならまだしも、蹴りは上級者すぎる。私はいたって普通なのだ。

「シアラさんが病気や悩みを抱えていたわけでは無い事が判明したからです」

「……はあ？ 何言ってるの？ 馬鹿なの？」

「そう言われましても！ 最初にお会いした時にお伝えしましたでしょう！ ヴイトさ

んからシアラさんの様子を伺うようになって！」

「忘れてたわ、そんなこと」

「この人、酷すぎる」

実に楽しそうに笑うシアラさん。片手は私のシャツを掴み、もう一つの手は尻に置かれたまま。時折、楽しくて仕方ないのか、尻を叩く。自分の尻ながら良い音を部屋に響かせるのは、上に乗っている調教師の賜物か。

「アンタ。本当に変わっているわね。ヴィトに頼まれたからって、組も違う幹部に近づいて、直接あたしの確認をしに来るなんて」

「頼まれたとはいえ、私もこの部屋に入ってから後悔してます」

「もう遅いわよ、アンタの上つ面、全部私が引き剥がしてあげるわ」

「上つ面って！ 私はこれが素なのですが！」

「そんなわけあるわけないでしょ。仮面の下にある醜い部分を引き出してあげるわ。感謝しなさい」

「無いです！ 素です！ それでもというならこちらも手がありますよー！」

「何よ、今のアンタに何かできるとでもいうの？」

やりたくはなかった、呼び出したくなかった。だが、こういう時に助けを呼ばずして誰を呼ぶ。

「親分……」

「親分？ フィオに助けを乞うのかしら。ほくら、叫んでみなさい。許可するわよ」

「たーすけてえええおやぶーん!!!」

「あははは!! 本当に呼ぶなんて情けな!! ほら、いまのアンタ、とつても素敵よ」
笑い声と尻の叩く音が響く部屋に、一つ違う音が走りはじめた。

「な、なによ。この音は？」

当りを引くまで、目につく扉を片っ端に開いていく。ヴァイトさんが踏まれたのだろうが、漏れるような声が聞こえた。そしてこの部屋の扉が開かれる。

「ハルトオオオオオ!!!」

流石のシアラさんも驚いた表情。それはそうだ。いるはずのないと思っていた人物が目の前に現れたのだから。

「おやぶーん！ 助けに来てくれたんですね！」

「おうよ!! ってなんつー格好してんだオマエは!!」

「あらく本当にいたんだ。いらつしやい、フィオ」

「おい！ シアラ！ ハルトになにしてやがんだ!!」

「あら心外。彼は自分から跪いて懇願してきたのよ」

「なにかがおかしい」

「ハルトがそんな事するか!! ハルトはおまえらとは違つて普通だ！ 普通！」

「気づいてないのねーフィオ。コイツの本性に」

「本性？ ハルトはハルトに決まっているだろう！」

「まあいいわ。今日は十分に楽しませてもらったから。帰つていいわよ」

そつと私から立ち上がるシアラさん。腰の辺りに感じた温もりが消えて少し寂しさを覚え……ちや駄目なやつだ。

足にうまく力が入らないが、親分が手助けをしてくれた。袖まで通していた私の上着を脱ぎ、渡されて、この屋敷に来た時と同じ姿に戻る事ができた。

「そーいやアンタ。他の幹部からいろんなモノを貰っているんだっけ。スタンプラリーでもしているのかしら」

「シマでの行動を認知する許可証代わりで頂いてはいますが」

「あたしのシマの許可証もあげるわ。今度から来る時には必ず持ち歩きなさい。確認した時に持ち歩いてなかったら殺すわよ」

無造作に上着の横ポケットに手をつつまれる。何かが入られたのは分かるが、取り出さなければ確認できない。

「一体、なんででしょうか？」

「ハルト！ 取り出して私にも見せろ！」

「それはだめよ。フィオに知られてみなさい。バレた事が分かったら、もつと凄い事をしてあげるから」

「おおおやぶん！ どうか！ どうかご勘弁を！」

「ぐぬぬぬ！ 人質を取りやがって！ それがマフィアのする事か！」

「マフィアだからこそ好きにするんでしょうが。相変わらずアタマかったいわねえフィオは」

「んがーっ！！ これ以上、シアラと喋っていても埒が明かない！ 帰るぞ！！ ハルト！！」

「あい、シアラさん。お邪魔致しました」

「律儀に挨拶をするな！ 自分が何されてたか分かっているのか」

「ぶひ」

「正気に戻れ！ このバカたれ!!」

再び尻に衝撃が走る。その威力はシアラさんの比ではなかった。当たり前前である。手ではなく足だったのだから。

「は〜い。今度来る時は一人でいらっしやい〜」

この数日、考えていた事があつた。

一部の幹部でハルトの能力の高さと、同情にも似た意見が出ているのを聞いた。それを聞いた時に思った。ばっかじゃないの。

あたし以外は気づいていないのね。アイツはクソみたいな仮面を被っている事を。

優しい？ 誠実？ 自分より他者？ 馬鹿じゃないの。そんな人間、このクソみたいな世界にいるわけじゃないやない。

他者に取り繕ってへばりついているだけのアイツに誰も気が付きやしない。滑稽で笑えてくるわ。

でもいいの。しばらくは放置してあげるわ。気が付かれないという事は信頼されていくという事なのだから。

もしゲキテツ一家のシマで何かを起こしたら、私のおもちゃに傷をつけるような事をしたら、ぶっ殺してあげればいいと思っていた。今日までは。

実際に会ってみて分かった事があるの。アイツはフィオやニコ、ヴィトとは違う、私の新しいおもちゃになれる可能性があるとということ

フィオ達のようにおちよくつても瞬間沸騰をするタイプでもない。ヴィト達のようにすぐに喜びを見つけてしまわず、簡単には従順にならない精神の強さ。このあたしに直接、物を言える姿勢。

少しだけ見せた仮面の下の本性。これをあたしが手に入れる事が出来れば、新しいおもちゃにハルトを追加する事ができればどれだけ楽しい事になるのかと。

でも急いではダメ。楽しそうだからといって焦ったらずぐに壊れて消えてしまうわ。今はまだそつと、優しく育てていかなければ。

すぐにでも仮面を剥いで、本性を剥き出しにしてあげたい。その時はどんな声で鳴いてくれるのかしらあ。でもあたしは我慢強い。キッチンと実が熟してから偽りの仮面を握り潰してあげるわ。

「あはつ。ハルトお。予想外のところからおもちやが増えて楽しくなってきたわ」

それまであたし以外に潰されるような事にならないでよ、ハルト。あたしを楽しませて頂戴。

ゲキテツ一家 その5

「ついに最後か……」

「はい。ローラさんのシマですね」

「それで、ここでは何をするつもりなんだ？ ハルト？」

「交流会の名目で招待券をいただいたのです。キクチヨさんから」

「ローラの副長か。ローラの歌謡祭を見るのが本日最後の仕事ってことか？」

「そのとおりでございます。前四件に比べれば気を張らずに済みます。歌っているローラさんの応援をするのが仕事といえれば仕事ですね」

「なるほどな！ それなら私も参加できそうだな！」

「ええ、私も楽しみに待っております。楽しんでいきましょう」

「そうだな！」

案内された事務所の特設ステージは、既にローラさんのファンで埋め尽くされている。招待制という事もあって人数は小規模ながらも熱気は凄い。

天井に設置されているミラーボールが光り輝き、今か今かと始まりを待ち望んでいる

「ハルト！ これだとローラが見えないじゃないか！」

私達の場所は最後方。招待制ではあれど指定席ではないので場所は早い者勝ちなのである。

私たちは他の用件を済ませてから来たので、当然ながら前には行けるわけもなく。

「そんな事もあるうかと、こちらに踏み台を用意させていただきました」

「流石だな！ つてなんでここにそんな物があるんだ？」

「私も背は高くないのでイザという時の為にキクチヨさんからのご配慮をいただいたのです」

「そうか。ハルトはちっこいもんなあ」

「そーですよ。ちっさいですよー」

「あんまり気にするなって！ 背で何かが決まる訳じゃないのはわたし達がよく分かっているだろう!!」

「そうでしたね。流石は親分。心にグツとくる」

「そうだろうそうだろう！ もっと褒めてもいいんだぞ！」

照明が少しづつ落とされていく、そろそろ始まりそうだ。

「褒めたいのはやまやまですが、始まる様子で」

「仕方ない。終わったら存分に褒めさせてやるからな！」

「了解しました。ということでしょうか。お願いします」

「おう！ 踏み台！」

「へい」

スツと横にあつた踏み台を親分の前へ。副長の務めを代理で行わせていただきやんした。

「つて、ハルト。お前の分が無いじゃないか？」

「元々は一人の予定でしたので、親分が利用している踏み台しかないのです」

「それじゃお前が見えないだろ!？」

「歌声は聞こえますし。姿も多少なら隙間から見えますのでおかまいなく」

「バカをいうな！ ほら、私の隣に立てば見えるだろ？」

「手狭になりますよ？」

「それぐらい気にするんな！ せっかくなんだから一緒にローラを応援するぞ！」

差し出された小さな手。それに掴み親分の隣へと移動する。踏み台は頑丈に作られており、二人が乗っても安定性が崩れる様子は無い。肩が触れ合う距離感ではあるが結構いなしだ。

「よく見えますね」

「私はここからの景色が大好きだ！ なんでも見通せるからな！」

「確かに。憧れの世界を垣間見ている気がします」

程よい高さの踏み台は、全てを見通せる場所へと変化させ最後方とは思えない程の贅沢な席へ。

「では、こちらもどうぞ」

「なんか光ってるな？ 何に使うんだこれ？」

「ローラさんの歌に合わせて色を変えたり振ったりして応援するんですよ」

「ほほう！ そんな物があるのか！」

「曲に合わせて、縦に振ったり横に振ったりと。歌唱中に声を出して応援をするわけにはいきませんから」

「これはハルトの分もあるのか。二本も持ってきたのか？」

「周りの観客を見て頂ければ分かるかと」

熱狂的ファンか、親衛隊と呼ぶべきか。一つの手に一本が当たり前のようであり、二刀流の人がほとんどである。

「あーなるほど、ソウダッタ。ここはそういう場所ダッタナ」

「ですが応援の仕方はそれぞれです。危険な行為や他人の邪魔になるような行動は取らずに礼儀正しく応援すれば問題なしです」

「なら任せておけ！ フィオ様ほど礼儀正しい人間はそうそういないからな！」

「そつすね。あ、ローラさんが出てきましたよ」

「いま物凄く素っ気ない返事が聞こえたぞ……」

舞台上に現れたローラさんは、光に照らされてとても美しい。その場に立っているだけなのにローラコールが鳴りやまない。

「こうしていると、ローラの歌を真面目に聞くのは初めてかもしれないな」

「お二人とも長い付き合いなのでは？」

「ガキの頃からずっと一緒だったな。何をさせてもローラが一枚上手で悔しかったなあ」

「それでも他の幹部の方たちからすれば仲が良いですね」

「マフィアの何たるかを教えてくれた先生みたいなものだからな。頭が上がらないんだよ」

「なるほど。親分が何かしでかした時はローラさんに頼めばいいと」

「何かってなんだゴラア!!」

「シーツ！ 始まりますから！ 後で後で！」

「くうーっ！ 後でシメてやる！」

そうこうしている内に始まったローラさんの歌謡祭。優しく、切なく、時に激しい歌声は、その場にいる人達を魅了していく。

私達も例に漏れず、光る棒を振ってローラさんの応援に夢中になっていったのであった。

そして全ての公演が終了し、現在は握手会へと突入する。盛大な列が出来上がっており、しばらくはかかりそうだ。

「いやー凄かったな！ こういった事は初めてだったが悪くない！ 体験して初めて分かる事もあるってことだ！」

「そうですね。合唱部分ではつい熱がこもり歌ってしまいましたよ」

「わたしもシマでもやってみるのもいいかもしれない！」

「それは止めてくださいいね」

「なんでだよ!!」

現在、私たちは端の方で待機をしている。姐さんが挨拶をしたいので良ければお待ちいただけませんか、キクチヨさんから言付をいただいたのでこうして待っている間に感想会を開いているのである。

私もこういった行事に参加するのは初めてである。一人で参加をする事に少々不安を抱いていたのだが、それも親分がいてくれたおかげで不安は吹き飛び、目一杯楽しむ事ができた。

「親分。本日はお付き合いただきありがとうございますがとうございました」

「んお。どうしたんだ？ 急に？」

「今日一日を振り返りまして、親分にはとても助けられている事に気づきまして」

「わたしだつてハルトには日頃から世話になつてゐるぞ？ お互い様じゃないか！」

「そういう事を言葉に出せるから、親分は親分なんだろうな」

「そうだろう！ なら名前で呼んでいいんだぞ？ ほら、言つてみ？」

「ありがとう。フィオ」

本当に言われるとは思わなかつたのだろう、予想外の名前呼びで硬直する親分。

「ごめんなさい。遅くなつてしまつて。あら、フィオ？ どうしたのかしら？」

「いやいやいや!! なんでもないぞ！ ローラ！」

「それならいいのだけど……？」

挙動不審の親分を連れて、別室へと案内されていく。

「本日は楽しんでいただけただけでしょうか？」

「ローラ！ おまえは凄いな！ 歌があんなに素晴らしいなんて初めて知つたぞ！」

「隣に同じくであります。とても素敵な歌謡祭でした」

「ありがとう。そう言つてもらえて頑張つたかいがあるわ」

「親分、こちらをローラさんに」

本来、自分で渡そうと用意しておいた花束を親分に手渡す。

「ハルト……。どこに仕舞っておいたんだ、この花束？」

「秘密です。ささつ、ローラさんに心を込めてお渡ししてください。キクチヨさんから
の許可は頂いておりますゆえ」

「ハルトが用意したんだろ？ ハルトが渡せ」

「いやしかし、私の代表は親分でありますから」

「なら命令だ。私の代わりに渡せ。嫌か？」

「とんでもない。その令、ありがたく従わせていただきます」

うむ！ と手を腰に当てて親分らしい姿勢で返事をする。その様子を楽し気にローラさんは見つめていた。

「ローラさん、ご招待いただきありがとうございます。こちらはほんのお気持ちでは
ありますが、お受け取りいただければ」

「ありがとうございます。とても素敵な花束……。用意していただくのも苦勞されたで
しょう？」

「いえいえ、タネガシ中を飛び回る事が多かつたもので、その時のツテで用意が出来た物
です。お気になさらずに」

「……ありがとう。こんなに素晴らしい花束を頂いてしまったら、何かお返しをしてあげないといけなくなってしまうわ」

「お気になさらずに、と言いたいところですが、ローラさんをお願いがございまして」「あら、何かしら?」

「是非ともこちらにサインをいただきたく」

「おい! ハルト! 見返りを求める気マンマンじゃないか!!」

「ファンです」

「ファンです。じゃない! ローラの代わりフィオ様のサインを書いてやる!」

「あ、でしたら親分。是非とも絵も頂戴してもよろしいでしょうか?」

「わたしの絵か? どうしてだ?」

「選挙をされた際に書かれたという話を耳にしまして、親分の絵を見てみたいなあ」と

「しかたないなあ! ハルトがそこまで望むなら描いてやらないこともないぞ!」

「是非ともお願いいたします。ささつそちらの席で、黒色しか無くて申し訳ありませんが」

「任せておけ! しばらくそこでローラとお喋りでもしていてくれ!」

手渡したサイン色紙とペンを片手に椅子のある場所まで移動し、創作活動を開始する親分。予定どおりっ。色紙はもう一枚あるのだよ。

「つきましてはこちらにサインを」

「ハルトさんもずいぶんフィオの扱いになれてきたみたいですね」

口元に手を当てて上品に笑うローラさん。見た目麗しい姿に歌謡祭を終えたばかりのせいか、熱がこもっており艶やかさが隠し切れない。

「ローラさんには色々とお教えしていただきましたから」

「そんな。私が教えた事なんて僅かですよ」

「ですが、その僅かが大切だったのです。こちらに来てからは」

少し、表情が暗くなるローラさん。

「ごめんなさいね。アレシマであの時に無理に連れてきてしまい」

「あの時に出会えたのはこういう事だったのでしよう。あまり気にしないでください」

「でもハルトさんの事情も聞かずに連れてきてしまったでしょう？ ご家族の方とかは

心配されていらつしやらないかしら？」

「その関係で少し帰省しようかと考えています。親分にはまだ伝えてませんが」

「ハルトさんには帰る場所があったのですね。大変申し訳ない事をしてしまいました」

「いやいや！ 帰る場所といいましても、なんて言えばいいのでしょうかね」

「……何か事情が？」

穴の先からやってきました。いいい。なんて言えるわけもない。

一度はラハマに戻り、隊長さん辺りにも、凄く怒られるだろうけれど、日本に戻る為にはあれこれをしなければならぬのも事実。

次回、穴はいつ開くのか。同じ場所に開くのか。定期的な監視も必要だろう。あの酔っ払いの計算の手助けや現地の情報収集も必要なのだ。

その為にも私は部屋に山積みとなつてお酒をラハマまで運ばなければ！

「……ごめんなさい。失礼な事を聞いてしまいました」

考え事をしていてたせいで、暫く沈黙が続いてしまった。

「へ？ あ、いや。大丈夫ですよ。監視とか計算とかもあつて大変だなあと考え事をしてたもので」

「……大変ですか？」

「ええ、あとは家族の事を思い出しまして」

「……みなさんお元気にされていらつしやるのですか？」

元気にかあ。曾祖父はこの穴の件が発生したおかげでまた寿命が伸びそうだ。祖父もまだまだ元気いっぱい。父親は足を怪我した事以外は問題ない。今では普通に歩いているからね。式守さん家の家系では特に持病持ちはいない。手を自分の胸に当てて鼓動を感じ取る。心臓系の病気もないから逆に頭がホゲホゲになるのではないかと心配する。

「大丈夫です。みんな生きていますよ」

「ッ!!」

途端に顔色が悪くなるローラさん。歌謡祭と握手会までされたのだから疲労困憊なのだろう。ここまですき合わせてしまい、申し訳なさを感じる。

ズボンに入れてあったハンカチでローラさんの汗を拭きとる。抵抗をする事もなく受け入れてくれるローラさんの信頼を感じる。

「大丈夫ですか? ローラさん?」

「ごめんなさい、ハルトさん。私は……」

「いいんですよ。誰しもある事ですから。気にしないでください」

「……」

「また、ローラさんの歌を聞かせてもらいに来てもいいですか? 私もすっかりファンになってしまいました」

顔を上げてくれた。うん。やっぱり俯いているローラさんよりも日頃の凛としたお顔をされている方が何倍も魅力的だ。

ハンカチを持つ手を握られた。

「……ええ! また是非ともハルトさんにお聞きしていただきたいです」

「ありがとうございます。その時を楽しみにしておりますね」

再び聞ける日が来るのは先の話になってしまいかもしれない。それもまた次の楽しみまでのワクワクする期間だと思えば苦はない。

綺麗なお辞儀をして、先に部屋から退出していくローラさん。あ、ハンカチ……まっ
いいか。

「おやぶーん。帰りますよー」

「あれ、ローラはどうしたんだ？」

「お疲れの様子でしたから、先に退出されましたよ」

「そうか。あれだけの事をこなしたら疲労が溜まるのは仕方ないもんな」

「ところで、絵の方は完成しましたか？」

「おう！ どうだ！ フィオ様の自画像だぞ！ ありがたく受け取るんだぞ！」

「……」

「何か言えよ!!!」

芸術とは奥深い。

二人がシマから離れ、自分達の家へと帰っていく。

私はハルトさんに大変失礼な事を聞いてしまい、罪悪感で胸が詰まりそうだ。

ハルトさんは帰る場所があると言ってくれた。それはきつと私に対しての心遣いだ

ろう。

監視と計算という言葉。実家に帰られる際にそれが必要な場所など、この世界に存在するのだろうか？

過去にハルトさんにも何かがあったのだろう。そして、それらが必要な場所に眠っているのだろう。ご家族が。

胸に手を当てて、生きていると伝えてくれた。心の中にだけ残る家族との思い出。ハルトさんはそれを大切に、生きているのだ。私と同じように。

表情に出してしまった私に対して、ハルトさんは優しく汗を拭ってくれた。自分を傷つけるような事を発言した相手だというのに。

それだけではない。私の歌を好きだと言ってくれた。この人はどこまで自分より、他の事を考えてくれる人なのだろうか。

自分の情けなさと同時に、嬉しさがこみ上げてくる。ゲキテツ一家に拾われた時のような、こうして皆といられるのと同じ思いを。

心で何かを感じる。これはフィオに向けて感じたモノとよく似ている。私は一体何者なのだろうか。どちらに心が向いているのか。

……ハルトさんに事実を伝えてみようかしら。フィオにすら伝えていない事を。ハルトさんが知ったらどうという反応を示すだろうか。

きっと、変わらないと思う。失望されるどころか、少し楽し気に笑った後、苦勞を勞つてさえくれそうだ。

簡単に想像できてしまう姿に嬉しさを感じ、頂いた花束を抱きしめてしまう。

「今度はハルトさんの為に、精一杯、歌わせてもらいますね」

持つてきてしまったハンカチを鼻を覆うように近づける。罪悪感で包まれていたモノが薄らいでいくのが分かる。

僅かに、ハルトさんの匂いがしたからだ。

ゲキテツ一家 その6

「ふいー。ようやくシマに帰ってきたな！」

「お勤め、ご苦労様でした」

「なに、これも親分の仕事さ。なーっはっはー！」

本日、全ての日程を終えて、私たちは再び自分たちの屋敷へと帰ってきたのである。

「お帰りんす。ご苦労様でやんすよー」

「おう！　なんか変わった事はあったか？」

「何もなかったでやんすよ。静かですごしやすい日でした」

「それはわたしの声がデカいと言いたいのかあ……」

「そうでやんす」

「副長！　お前というやつはーっ!!」

副長もめげない。用意してもらった少し遅い夕食を頂く。タネガシに来てから嬉しい事といえば、ご飯とみそ汁が飲める事。ケチャップ丼も捨て難い味ではあったが、そこは日本人。贅沢をいえば卵かけも食べたいところではあるが……。流星に衛生面が

気になつて無理だ。

早々に食べ終わつた親分は、両手を畳につけて満足げ。報告をするのなら今時分だろうか、お暇させていただくという事を。厳密に言えば休暇をください、三ヶ月ぐらい。許可されるとは思えない。でも伝えてみなければ結果は分からない。

ここに連れてこられてから色々な事があつた。最初にマフィアだと聞いて、イジツにもいるんだ……そんな人達……。という感想から始まり、みかじめ料の徴収に付きあわされた日は、反社会組織に属している事を実感した。曾祖父に知られたらゲンコツで済まされるわけがない。

ただ、自分の目で直接見たモノがいくつもある。タネガシは今もマフィア同士の小競り合いが多く、自警団は意味を成していないという事。各シマの住民たちが自分たちの身を守るには、マフィアに頼るといふ選択肢しかないという事。

そして、イジツには孤児が多い。多すぎると言つても問題はない程に。これはイサオさんから聞いており、ある程度は想像していたがそれ以上であつた。

ラハマには孤児院があつた。そこも子供たちでいっぱいであつたが、守ろうとする大人たちもいた。

ではタネガシは？ 自分たちの身を守るだけで限界な状況下。いくらゲキテツ一家がタネガシでも指折りの規模とはいえ、救える数は知れている。元を減らさなければい

くら救い上げてでも終わりが見えないのが現状だ。

限られた資源。衰退の一途を辿るイジツの世界。

イサオさん。貴方が成そうとしていた事、少しだけ分かる気がしてきました。穴の独占というのは事実か、方便かは分かりませんが、この状況は誰かが止めなければならぬ。生き残るには。

その中で限られた選択肢、最短の道にして最悪の選択肢。イサオさんが選んだ道は血を流す方だったのですね。

穴というパンドラの箱。イジツの世界が、町が、自分たちが生き残る為には、その箱さえ開けなければならぬ状況下。

イサオさんから出された課題は大変に重く、深刻である事が、タネガシに来て気づいた事であった。

と、深く考えてはみたが、あの人の場合はこの状況も楽しんでいたのだろうか。ユーイングのおもちゃを使い放題の立場だし。自身も戦闘機に搭乗して敵機撃墜をするのが好きだった様子だし。

しいて言うのであれば、強すぎたのだ、イサオさんは。

そんな人に当時の最新鋭機を乗せてみたらどうなるか。普通に考えてみればイサオさんが落とされる確率は低いハズなのだが、イケスカに発生した穴、イサオさんが少し

おつちよこちよいな性格であつたせいで、知つてゐる限りで二度、被弾してゐる。そして最後はイサオさん自身はイジツから存在を消されてしまつたが、イサオさんから生み出されたモノたちは未だに健在。

それらは菌止めが効かなくなり、跋扈往来をしてゐるみたいだ。うん、大体はイサオさんが悪いや。

「ハルト、ハールトー。考え事かー?」

物思いにふけていたら、親分に呼ばれてゐる事に気づき、顔を上げる。

「大丈夫かー? 疲れてるんじゃないのか?」

思えば親分に連れられて来る前に言われた事がある。『ゲキテツ一家が勢力を拡大させる為にもハルトのような人材は必要だろう!』後半部分は添削しておこう。私情だから。

ゲキテツ一家が行つてゐる勢力の拡大方法は、対話と同盟。血を流す方法で無かつたのは救いである。

私が出る事、出来た事。今のところは言われた事をこなし、今日の出来事のように、呼び出されれば赴き、意見を述べる。それぐらいである。思い返せばユーリア議員にしていた事と似ている。

まっ、私一人で何か変化を起こせるわけがないしね。

「すみません。考え事をしていました」

「どうしたんだ、いきなり？」

「このシマに来てからの事と、親分にお伝えする事があるのを思い出しまして」

「なんだ？ 言ってみろ」

「休暇をください。三ヶ月ぐらい」

「はあ!? 三ヶ月も休みが欲しいだつて!? 一体そんな長い期間、何をしてくるんだよ!!」

「一度、実家に戻って色々と清算してこなければいけない時期に差し掛かりまして」

「実家？ ハルトの実家はどこにあるんだ？」

「うーん……。活動拠点としてはラハマを利用していたとぐらいしか」

「……わたしにも言えない事なのか？」

少し躊躇する。ゲキテツ一家としてやらなければならない事が多い大切な時期に、心配事を増やすような思いはさせたくはない。何よりユー・ハングから来た事を知る人間は少ないほうがいいのは決まっている。

だが、どうやらこの態度は親分の機嫌を損ねてしまう行動であったようだ。

「ハルト!! 言えない事なのかと聞いているんだ!!」

「すみません。事情が事情なので詳しい事は」

「わたしとハルトの仲でもダメなのか!？」

「ごめんなさい」

駄目なものはダメなのである。頭を下げて飛んでくるであろう罵倒に耐えるべく、準備を整えるが、一向に飛んでこない。

おそるおそる顔を上げて、親分の顔を見つめてみると、瞳には涙のようなモノが見えた。

「お、親分……?」

「……」

「すみません」

「ツ!! ハルトの馬鹿!! アホ!! おたんこなす!! あとチビ!!!」

屋敷から飛び出すように駆け出す親分。その俊敏な動きは瞬く間に姿を消していく。

「また自分より小さい人にチビって言われた……」

「そういう事を言っている場合ですかね」

「そうですね。追いかけないと」

「ハルト君。なんで親分が激怒したか分かっているんすか?」

「……ゲキテツ一家は、組のみんなは家族だからでしょうか」

「そうでやんす。だから親分は悩み事も心配事も隠されなくなかったのだと思うんす

よ。特にハルト君には」

「気に入られている事は自覚しているつもりでしたが」

「その中でも親分にとってハルト君は特別でやんすから。さあ、迎えに行つてくるでやんすよ」

「ありがとうございます。副長」

「あつしは先に寝てますから後は頼んます」

「この場面で寝ますかね!?! 待つててくれないの!?!」

「連れて帰つてくれるのが分かり切つてやんすから。それじゃおやすみでんすー」

なんて副長だ! ああ、あつし、いつか磨き上げてやる!!

親分を探して屋敷を飛び出し、街の中心地までやつてきてしまった。

一月も一緒にいたのに、親分の行きそうな場所が思いつかない。我ながら情けなさすぎて自己嫌悪に陥りそうだ。

周りを見渡しても、親分らしい人影は見当たらず、光が灯っているのは酒場ぐらいだ。「おや、フィオちゃんのところの子じやないか」

その言葉に振り返ると、一人の老婆が立っていた。

「すみません! 親分を見かけませんでしたか!?!」

「何かあったのかい？」

「心配をかけまいとした好意が仇となり、泣かせてしまいました……」

「ほほう、フィオちゃんを泣かせたのかい」

「大変申し訳」

言葉を紡ごうとした瞬間、腹に何かが当てられる。次に聞こえたのはゲキテツが引き起こされた音。

「謝る相手が違うだろうか？」

「……そうですね」

「何故、フィオちゃんを泣かせたのだい？」

「親分にも伝えられない事を教えるわけにはいきません」

「腹に当てられているモノが何か、分からないわけではないでしょう？」

「それでもです。たとえ引き金を引かれても答えるわけにはいきません」

脅されても、それが原因で傷を負うとしても、親分にさえ教えられない事を他人に伝えるような事はできない。せめてもの抵抗。償い……は格好良すぎるから駄目だ。

「一つだけ、聞かせなさい」

「答えられる事なら」

「またフィオちゃんを泣かせるような事があれば、どうするんだい？」

親分を泣かせてしまう事。きつとこの先もあるだろう。穴から帰ってきたら直ぐにでも戻らないとまた怒られてしまいそうだ。

穴から戻る、かあ。曾祖叔父がまだ見つかっていないから、可能性は大いにある。イサオさんとの約束事も。

その際になったらここに帰つてくると、考えが出るのだから不思議だ。もうここは私の帰る場所なんだなって。

「多分、また泣かせてしまう事でしよう」

「言い切るわね。引き金を引かれないのかい？」

「出来れば勘弁していただきたいですが、この先を考えると泣かせないという状況が思いつきません」

「……では、どうするんだい？」

「悲しみに泣かせてしまう事があるのならば、喜びで泣かせる事もあるでしょう。頑張つて喜びで埋め尽くしてみますよ」

それぐらいしか思いつかない。どう足掻いても生きている以上、感情がある以上は泣かせてしまう事が起こるだろう。

それならせめて、楽しくて、嬉しくて、どうしようもない事で泣かせてみせる。

腹部に押し付けられていたモノが離れて行くのを感じた。

「フィオちゃんなら、一人になりたい時はこの先にある高台にいるわよ」

「やっぱり高いところが好きなんですネ、うちの親分は」

「早く行っておやり、きつと待っているから」

「ありがとうございます」

老婆にお礼をして、再び足を動かし、親分の元へと走り始めた。老婆ですら銃を所持しているだなんて、イジツコワイ。

足を畳み、身体を曲げた姿の親分を見つけた。小柄な女性がその体勢になると余計に小さく見える。

「親分」

「ツ！ ハルト！ どうしてここが！」

「そこら中を駆け巡りましてね、親分みーつけ」

息切れをしている身体を動かし、親分の隣に腰掛ける。こちらを向いていた親分の顔は、再びかくれんぼを始めてしまった。

「ごめんなさい、親分。あのような言い方になってしまい」

返答はない。怒る……というよりも今は悲しんでいると表現した方が近い。

しばらくの間、沈黙が続いたが、親分が口を開く。

「なあ、ハルト。わたしはそんなに頼りないか？」

「滅相も。親分ほど頼りがいのある方は早々いませんよ」

「なら何故、ハルトの事は手助けできないんだ？ わたしじや力になれないのか？」

「そんなことはありません。ただ、ゲキテツ一家という看板を背負っている以上はダメな事もあるのです」

「わたしはハルトに助けて貰つてばかりだ。アレシマからわたしが無理矢理連れてきた後も、ハルトは着実に仕事をこなしているというのに、恩返しも出来てやしない」

「こうして好き放題、行動させてもらっているだけで十分なのですが」

「それではわたしの気が済まない！ ゲキテツを背負っているからこそ、駄目な事って一体何だよ!!」

親分の八つ当たりにも似た質問。伝えるべきか、信頼に答えるべきか、私が穴の先から来た事を。

「……ハルトの実家の事が関係しているのか？」

「いえ、私の実家は普通の家なので、しいて言えばマフィアは苦手かもしれませんが」
「他の場所ではわたしたちのような存在は煙たいだろうな……」

少しだけ、自暴自棄のような言い方をする親分。心がお疲れのようだ。そうさせてしまったの私か。

親分にもう少しだけ近寄る。逃げる事もなくそのまま座っている親分とは、手を置く隙間もないくらいに近くなる。

そのまま、自分の頭と親分の頭をくつつける。少し驚くような動作はあったが、そのまま受け入れられる。

「見送ってくれませんか、フィオ」

「……卑怯だぞ、ハルト」

「分かっています。でも、一度は帰らなければ。伝えてこなければ私も怒られてしまうのです」

「ハルトを怒るような人がいるのか？」

「そこら中に。しばらくはその対応と、ここに戻ってくる為の対策もしないと」

「戻ってくるのか!？」

「休暇だとお伝えしましたやん」

「それは口実で、逃げ出すのかと思っていた」

「意外とフィオからの信頼値が低い事にショックで寝込みそうです」

がつくりと頭を下すと、フィオは慌ててフォローしようと手探り弄り。それがおかしくてつい笑ってしまう。

「はあ……。こんなに慌てふためいて、わたしがバカみたいじゃないか」

「そんな事はありませんよ。私の事を想つての言葉だったのでしよう？ 嬉しかったです」

「なっ!? そういう事を本人を目の前にして言うか!？」

「本人に伝わらなければ意味がありませんから」

そつと、フィオの頭に手を置いて優しく撫でる。アレシマで見かけた時と変わらぬ、赤みがかかった洗柿色の髪。サラサラとしていて撫でていても気持ちがいい。

手は払われる事もなく、そのまま撫でられるフィオ。再び再開する頭と頭。少し頭を抱きかかえるような体勢になるが、そのまま手を止めずに。

「ありがとう。フィオ」

ちゃんと戻ってきましたから。少しの間のお別れですから。帰ってきたらまた一緒に頑張りましょうね。

「どうしてこうなった」

「ふふーん。フィオ様の記憶力を侮ったな！ ハルト!」

現在の場所はフィオの寝室。寝間着に着替えたフィオが布団に潜り、その隣に雑魚寝の状態の私。流石に上着のボタンは外してはいるが。

「ニコのシマで言つてただろう？ 後で何でも言う事を聞くつて」

「ここで使いますかね、普通」

「どうせわたしも連れてけと言つても無駄だろう？　なら面白そうな事に使つた方が得策だ！」

「親分の中では添い寝は面白い事と」

「フィオだ!!　今日ぐらいは名前で呼べ!!」

「うえーい、フィオ」

「何がうえーい、だ！　優しく労わり感謝を込めてもう一度!!」

「フィオ様」

「……何か違う」

何時ものワガママさんなフィオに戻つて一安心。やっぱり喚き散らしているフィオが一番魅力的だと思うのだ。

「そもそも、なんでそんなに離れているんだ？　布団に入れ、風邪ひくぞ？」

「その距離感是我々にはまだ早い」

「おかしな事をいうな！　早くこい！」

ネクタイを引つ張られ、勢いよくフィオの元へ。勢いの余り頭はフィオの鎖骨部分へと。視線の先にはタネガ島名物の豊かな実りを垣間見る事ができた。今日の気分はスパシィーバ。ダンケを使つてはいけない案件だ。

先程のお返しといわんばかりに、頭を抱きかかえられる。逃げようと試みるが足を器用に使われ、抱き枕にされてしまった。

「ほら！ 逃げるな！ 今日はこのまま寝るぞ！」

「ほんはははは」

「何を言っているのか分からん!!」

フィオが素敵なモノを押し付けているせいで何も喋れない。もう諦めようか。時には必要だよな。うん。

「ふが」

「大人しくなったな。それじゃ寝るぞ。おやすみ！ ハルト！」

「ふおふあふふいふあふあふい」

「ははっ。おかしなヤツだな。ハルトは」

最後はおかしな人認定をされてしまった。フィオから伝わる熱と香りは、私を眠りにつかせるのに十分な効果があったようだ。

夜中。不意に目が覚める。暖かな物を感じるの、腕の中にいるハルトだ。規則正しい呼吸を続けて寝ている。

わたしも伝えられない事がある。それを伝えられた時は胸の奥からこみ上げてくる

モノがあつた。それはとても複雑で、絡み合い、何物であるのかさえ理解できなかった。ただ、悲しかった。わたしもハルトの手助けがしたかったのに。させてもらえない。そのまま屋敷を飛び出し、一人になりたい時の秘密の場所へと足が向いていた。

いつもなら、ここからの景色を見ていては明日も頑張れると信じられた。今日はその自信が浮かんでこない。

悲しくて、悔しくて、自分の不甲斐なさで思考がゴチャゴチャになる。辛くて気が付けば額を足に押し付けて座り込んでいた。

しばらくして、わたしを呼ぶ声が聞こえた。ハルトだ。息を切らし汗をかいている。わたしを探す為に。

その姿をみて、また自己嫌悪に陥る。何も出来ない自分に。

その後の出来事は言うまでもない。また、わたしはハルトに助けられてしまった。なのに心は穏やかさを取り戻している。頼りつ放しなのに、甘えつばなしなのに。

帰り道でみたハルトの背中。背が小さいと気にしている割に、とても大きく見えた。首領であるオヤジと、ローラとも似てはいるが、また別の安心感がある。握られた手は離さまいと少し強めに。それさえも心地よい。そして思い出す、良い事を。

風呂を浴び、着替えを済ませてハルトを呼ぶ。今日は一人で寝れるような気分ではない。こんな時に限って誰かさんのせいでマロちゃんを貸し出し中。ならば相手は一人

しかない。

無理矢理、何でも言う事を聞く権利を行使する。呆れながらも傍にいてくれるハルト。再び甘えてしまった。

どうしても抑えきれない表情。でも恥ずかしくて見られたくない。なので思いつきり引き寄せて、抱き枕にした。こうすれば私の顔を見られずに済むからな！

今もわたしの腕の中で穏やかな表情を浮かべながら眠りについてハルト。頭をそつと撫でてやる。少し長めで、細くやわらかい髪。

「ハルト、寝てるよな？ 起きていないよな？」

声をかけて問いかけるが、反応はない。寝てる。なら、もうちよつとだけ甘えてもいいよな？

自分の身体を布団に潜らせるように下げていく。目の前にはハルトの胸板。顔を近づけると、少し汗の匂いがした。

わたしを探す為に必死に走り回ってくれた証拠。嗅覚が鋭くなるのを感じ、幸せが身体を巡るいい匂い。

もう一度だけ、もう一度だけ。何度も自分に自制を示すが、身体は言う事を聞かない。本能の赴くまま。気が付けば顔を擦りつけるように埋めて、幾度となく呼吸を繰り返していた。

何も考えられなくなる。頭はぼやけて、余りの心地のよさに目が閉じていくのが分かる。

その時、目に映る物があつた。イサカの懐中時計だ。無性に腹が立つのが自分でも分かる。ハルトの胸ポケットから取り出し、頭の上へと追いやる。レミのアクセサリーもだ！

そういえば、シアラのやつからも何か受け取っていたな。そんなモノもポイだ！　ポイ！　横ポケットに手を突っ込んで探り、手に感触を覚える。

それを掴み、放り投げようとした瞬間。普段身に着けている、見慣れた薄い布が見えた。これは！　まさか!!　シアラのやつは何を考えているんだ!!!

穏やかで幸せに包まれていた心は、再び荒れに荒れる。ゴミ箱がある場所にソレを無造作に放り投げる。

シアラのせいで、眠気が吹き飛ぶ程の感情に揺さぶられる。これではまた、心を落ちつかせなければ眠りにつけなくなってしまうではないか！

体のいい言い訳が見つかり、意気揚々と再びハルトの胸板に顔を押し付ける。これは仕方のない事。仕方ないんだ。

邪魔な物が無くなったおかげで先程以上に頭が流暢に動かせる。

緩み切った顔は誰にも見せられない。

怪盗団アカツキ if 18話

怪盗団アカツキ その1

「なら、ハルトに手紙を書いてもらえばいいじゃない」

丁重にお断りをされ、手元に舞い戻ってきた万年筆を受け取ると、リガルさんが突拍子もない事を言い始める。

「手紙と申しますと?」

「素敵なお話を受け継いでいる万年筆に綴られる感謝の言葉。モノよりも想いの方が大切って事よ」

「なるほど、確かに万年筆そのものは受け取る側も扱いに困りますよね……。少々お待ち」

手帳を取り出し、ロイグさんとリガルさんに気持ちを伝えるべく筆を走らせる。月が綺麗……。つてこれは感謝とは違う。

ど真ん中に書いてしまったので、そのページは切り離して三角形に折り曲げテープルの上に置く。余白部分を控え書きにでも使えばいいか。

「いいのよ! 感謝されたくてした訳ではないのだから!」

「そうは言いながらも好奇心には負けたじやない？　ロイグ？」
「んぐつ！　ま、まあそうだけど……」

表情や仕草がコロコロと変わるロイグさん。大人の女性ながら可愛らしいさを感じとれてしまうのは、そういった表現が親しみを覚えやすいからなのかもしれない。

簡潔な文章となつてしまったが感謝の気持ちはたつぷりと。うん、これなら大丈夫なのではないか。そう思っていた矢先、リガルさんから声をかけられる。

「ねえ、ハルト。この手紙の文字ってイジツの文字ではないわよね？」

「へ？　ああ！　それは間違えて書いたものなので気にしないでくださいー！」

「もう遅いわよ。ロイグなんて興味津々で見つめているもの」

視線で指示をされた先には、あの三角折りにした手紙を広げて見つめるロイグさんがいる。解読をしようとしているのか、とても真剣な眼差しで。

そんなにも熱心に読まれていると意味がバレるのではないかと気が気でない。

「ロイグさん。その手紙は間違えて書いたものなので、是非とも返していただきたい」

「ハルト。もしかして、ユーハンク語を理解をしているの？」

「えつと……。多少なら理解できるかと」

「文字が書けるのに多少な訳がないと思うのだけど？」

「たまたまその言葉が印象に残って覚えていただけですつて」

「ならこの文字は何て書いてあるの？」

そう問われると返答に困る。様々な説があるらしいけど、基本的な解釈では愛していません。

流石に口に出せる訳がない。出会って数秒とまでは言わないけれど、名前を伝えあつた程度である。

メモ書きの内容を誤魔化す方法はないものだろうか。

ロイグさんは楽し気に私の言葉を待ち続けて言える。そんな可愛らしい姿を見ていると言葉が自然と思いつく。

「貴女は美しい」

可愛いと伝えなかつたのは、女性を褒める場合は可愛いより綺麗が良いと何かで聞いた記憶があつたから。

ロイグさんの顔はイジツの荒野で見た夕焼けのように燃えるような赤紅色に染まる。書き損じた手紙はテーブルの上に落ち、両手は膝に置かれ、視線は当てもなく泳ぎまわる。

一方、リガルさんは当然と言わんばかりに自身に満ち溢れた表情。短く整えられた髪を指先で触る。

各々の反応は対照的で、とても魅力的で見惚れてしまいそうになるが、流石にもう飛

行船に戻らなければ。

「紅茶、ご馳走様でした。匿っていただき、ありがとうございました」

「待ちなさい」

服の袖をリガルさんの手によって引つ張られる。

「リガルさん！ 流石に門限に間に合わなくなるので勘弁してください！」

「門限？ それってこの町で鳴る鐘の事かしら？」

「そうです！ それが鳴ったら直ぐに戻る様にと約束をしているのですよ！」

「残念ね。鐘なら整備の為に外されていて、本来、鳴らされる時刻もとうに過ぎてい

るわ

「嘘ですよね？」

「本当よ」

終わりを悟り、顔を両手で覆う。これは絶対に怒られる。ユーリア議員は元よりレオナさんから。あれだけ自信満々に一人でお出かけ余裕であります！ という態度でお出かけてこの有様だ。

ユーリア議員の怒髪天を衝く姿を想像するのは実に容易い。だが、前向きに考えてみよう。怒ってもらえるのならまだマシなのだ。

顔を隠していた両手をそのまま頬に持つていき、気合を入れ直すように軽く叩く。よ

し、怒られに帰ろう。なんだそれ。

「覚悟を決めたので帰りますね」

「そんなに恐ろしいお説教が待っているのかしら？」

「かなりのものが。それでもリガルさん達に匿っていただけなければ怒られる事すら叶わなかったかもしれません。本当にありがとうございます」

「いいのよ、別に。こちらも好奇心から始まった事だとはいえ、美しい物を見せてもらったのだから。ここまできたらハルトの身に起きた出来事について私たちが説明してあげるわよ？」

「いえ、これ以上お世話になるわけにはいきません。お気持ちだけいただいておきます」

「そう、それじゃ行きましょう」

「あの……人の話を聞いていましたか？」

「もちろんよ。ロイグ、いい加減正気に戻りなさい」

「ひゃい！」

素っ頓狂な声を出して返事をするロイグさん。先程より表情は赤みが薄くなっているが、泳ぐ視線は変わらない。

「それじゃ、ハルト。案内をしてくれるかしら？」

「本当に良いのでしょうか？」

「それだけ素敵なものを見せてくれたという証拠よ。気にしないで」
「……分かりました。お世話になります」

会釈をして、案内をするように来た道を戻る。僅かでもいいのでユーリア議員のお怒りが減少しますように。

『ねねっリガル！ このままハルトについて行くのは少し危険じゃない？』

小声で心配そうに話しかけてくるロイグ。普段は自信満々な割に、時折、極度なまで慎重になるのだから不思議ね。

それとも先程、言われた言葉が未だに尾を引いているのかしら。

これだけの美貌を持った女性なのだから、言われ慣れていてもおかしくないはずなのに。

『あら、スリルも怪盗らしくて良いのじゃなかったのかしら？』

『それは否定しないけど、まだ予告状も出していないのに近づくのはどうかかなあーって』
『あなた、本当に予告状が好きね……。いま、彼を逃したら二度と近づけないかもしれないわよ』

『オウニ商会にコトブキ飛行隊。それにガドールの議員までついている。普通じゃありえないぐらいの人选よね』

『ええ、それにハルト自身もユー・ハングについて詳しく知っているような素振りを見せていたわ。もしかしたら……』

『私たちの本当の目的。夜明けの鷹に関する事が分かるかもしれないって事?』

『可能性は十分あるでしょう? 何も当てが無い以上は、震電を狙うよりも唯意義だと思わない?』

『そうね……。うん! 分かったわ! 覚悟を決めてハルトの素性を探ってみましょ!』

『それでこそ、怪盗団アカツキのリーダーよ。ロイグ』

結論。お二人の尽力も空しく怒られた。そのまま二人も一緒に。

「ハルトを助けてくれた事に感謝するわ。そのまま連れ攫われていたら手間が増えるところだったもの」

連れ去ろうとしたゲキテツ一家のフィオさん達の名前は伏せる事になった。

「無事に戻ってきた事が重要であって、相手はさして問題ではないのよ」とはリガルさんの弁。

「いえ、私たちも偶然その場に遭遇しただけですから、気に為さらないでください」
「鐘が整備中だったという事も分かったわ」

「ええ、なので余りハルトを責めないであげてくれませんか？」

「私には外出をするという事を一切伝えずにアレシマの図書館で調べ物。あげくに誘拐未遂。私が仕事申中だというのお二人と門限を忘れる程、お茶を楽しんできたハルトを怒るなど？」

「はい、すみません」

私の為に仕事をしていたのに、当の本人は女性二人とゆっくりとお茶と会話を楽しんでいた事がユーリア議員を怒らせてしまう要因であった。

とはいえ、初めて会った時のような口調ではなく、心配をして怒っている事が言葉を通じて伝わる。

門限に遅れてしまった事実は変わらない。心配をかけてしまった分はきちんと素直に怒られよう。

隣にいたロイグさんは「はい、すみません」を繰り返し、リガルさんは「理不尽よ！」という表情を崩さない。

なんと言いますか、巻き込んでしまい申し訳なく。

ユーリア議員に心配をかけて怒られたのだ。だとしたら言うまでもなく、私はもう一度、怒られるのである。レオナさんに。

最初に私を救ってくれた二人に対して感謝の言葉を伝えるレオナさん。疲労困憊な

二人は「気にしないで」と伝える。

この間、私は壁際に直立不動で立たされたまま。視界の端にはニヤニヤと楽し気な顔をしたキリエとチカの姿が見える。

二人と話を終えたレオナさんがこちらにやってくる。そして一息を入れた後に始まるお説教。

「ハルト！ 私がどうして怒っているのか分かってるか!？」

「はい！ 町をぶらついて誘拐されかけたせいでしょうか!？」

「それについてはそこにいらっしやるお二人には感謝の言葉以外は思いつかない。だが、怒る理由はそれだけではない！ 分かるか!？」

「ご心配をおかけして申し訳ございませんでした!!」

直角に近い角度で頭を下げる。私には謝罪をする以外はないのだ。心配をしてくれる人達がいる事も忘れない為に。

「……はあ。ハルト、頭を上げろ」

「はい」

「今後、遅刻は厳禁。寄り道は控える事。遅れる時は必ず連絡を入れる事。コトブキ飛行隊の名を落としめるような行動は隊員として断じて禁止だ!」

「あ、あの、私は隊員では」

「返事は!？」

「は、はい!!」

「無事でよかった」

私の頭に乗せられたレオナさんの手は暖かく、顔には安堵の表情。色々と気になった部分もあるけれど、ここで指摘するのは止めておこう。何よりもレオナさんの手から伝わる暖かさが心地よい。

「みんなも心配をかけてごめんなさい」

コトブキの皆にも謝罪をする。各々から無事で何よりとの言葉をいただき、少し涙腺が緩みそうになる。二名ほど、食べ物要求してきたが聞かない事にした。

準備が済んだのだろうか、搭乗しているガドールの飛行船が再び動き始める。イサオさんの伝言を執事さんに伝えるべく、イケスカへと向かう為に。

コトブキの皆は、夜間警備の為に配置へとつく。コトブキ飛行隊がイケスカの空を飛ぶにはまだ危険が大きい為、道中の護衛が任務となるようだ。

夕食をいただき用意された自室へと戻る。すると後ろからはお二人も付いてきた。

本来であれば四人で使うべき部屋を一人で利用させて頂いている為、空きはもちろんあるのだけれど、同室って事はないよ……ね？

「みんなに心配をかけちゃ駄目よ？ ハルト」

「あい、今後は気を付けます。ロイグさん達は、このまま一緒にラハマまで？」

「ユーリア議員からハルトを助けてもらったお礼がしたいと言われちゃってね。ケースに入った札束を出された時はびっくりしちゃったけど」

本来、私がお二人にすべきお礼をユーリア議員が先に手を打っていたみたいだ。そこで即座に札束を出せる事ができるのがユーリア議員の強さを感じる。

ここまで面倒をおかけしているのだから、ユーリア議員には今回の件も含め改めてお礼を伝える事にしよう。そして自分に出来る事で何かお返しが出来るように頑張らなければ。

「お金が欲しくて助けたわけじゃないからって遠慮させてもらったのだけど、なかなか難しい主義の持ち主みたいで」

「本人があげると言っていたのだから素直にもらってあげばよかったじゃない？」

「ちよつとりガル！ 本心でもない事を言わないの！」

「はいはい。でも、私はハルトに見せてもらったあの美しい光景が映し出された写真で十分なのは確かだよ」

「まあそんなわけで、お互いに落とし所を探した結果、私たちがラハマに用事があるからそこまで乗せて貰う事で合意したのよ」

「そうでしたか。ですが、イケスカに立ち寄ってからラハマへ向かう事になりますがお時間は大丈夫でしたか？」

「もちろん。こちらは割と自由だし、何より夕食時にユーリア議員が言っていた事が気になつちやつて」

夕食時の会話で、お二人の前でイケスカに用事があるのは私だとユーリア議員はあつさり打ち明けた。ブユウ商事の事までは口にされていなかつたが。

少なくともお二人は危険人物ではないと判断されたのだろう。もしくは何かが起こつたとしても解決できる自信と力がある事を自覚しているからか。

「ちよつとした伝言を頼まれていまして、それをお伝えする為にイケスカへ寄るだけですから」

「伝言の為だけにこれだけの人達を動かすのだからよつぽどの事かしらね」

「そこは内緒です。リガルさん」

「あら残念。美しいものを共有し合つた仲なのに寂しいわ」

手で口を覆うような仕草をするリガルさん。揶揄われていると頭では理解しているつもりなのに罪悪感を感じてしまう。

美しいものが大好きな人だと認識をし始めたが、仕草や服装を見ていると可愛い的印象が先行してしまう。ここの感性は人それぞれなのだろう。

「でも気になる事は確かよ。イケスカ騒動で一躍有名になったコトブキ飛行隊とユーリア議員とも親しくしているもの」

「それは皆さんが優しいからですよ」

「イジツにそんなお人好しはいないわよ」

「いますよ、私の目の前に」

ハイハイ、トリガルさんから素つ気ない返事を送られてしまう。でも、先程まで交わっていた視線には、ズレが生じる。

本心を伝えていただけなので素直に受け取って欲しいな。と思う反面、目の前の光景に考える事がある。

「……ロイグ。貴女はいつからそんなに人からの好意に過剰反応をするようになったのかしら」

目の前には部屋の天井を見つめ、頬を赤く染め、落ちつかない様子で身体をゆらゆらと動かしているロイグさんの姿があった。

恥ずかしい言葉は禁止。にすべきなのだろうか。でも想いは言葉にしなければ伝わらないわけで。

イジツの人達は人からの率直な好意や感謝に弱い節が見受けられる。

弱肉強食なイジツの世界では、むしろ私のような人間が異質なのだろう。日本であれ

ば普通だけど。

だからといって止める気はないけどね。

怪盗団アカツキ その2

翌日、就寝前に見た夜の眺めも、今ではすっかりと朝へと変化した頃に、飛行船はイケスカへと到着した。

本日ここで行われる会談がイジツへと辿り着いた私にとって一つの山場になる。

ブユウ商事の代行を務めている執事さんに、イサオさんの事、曾祖叔父の事、伝えなければならぬ事もあり、教えて頂きたい事もある。

イケスカ側からの手筈で車が用意されており、現在は街中を移動中。

隣にいるユーリア議員からは「肩の力を抜いていつも通りに行えば大丈夫よ」と私の頬つぺたを突つつかれながらお言葉を頂く。

そうだ、私は一人で向かう訳でないのだ。今の内に頭の中で伝えるべき事を整頓する。

今日はいつもとより長い一日になりそうだ。

「ハルトとユーリア議員、出掛けちゃったねえ」

「それはそうでしょうに、元々はこちらが本命なのですから」

退屈そうにテーブルに肘を立て掌に顔を乗せているキリエ。

エンマはどこにいても変わらず、ガドールの飛行船に積み込まれている紅茶の味を堪能している。

今回、コトブキ飛行隊はイケスカでの行動は禁じられている。あれから一月か、まだ一月というべきか、未だイサオを支持する人達が多くいる町だ。

そのような場所にイサオの野望を打ち砕いだコトブキ飛行隊が飛行した日には、市民感情も含めて良い状況になるとは思えず、飛行船から降りて町に繰り出した日には何が起こるかは想像に容易い。

なのでコトブキの隊員は、ハルトとユーリア議員が戻ってくるまでは待機命令という名目で暇を持て余している状態なのである。

「とはいえだ、緊急出撃は出来るように注意を払っておくように」

「レオナったら固いんだから。現在の警備担当はガドール親衛隊の人達。何か起きてもイケスカ飛行隊が対応してくれるでしょう?」

「それは確かだが、それを口実に朝からアルコールを摂取するんじゃないぞ?」

「あら、バレちゃった」

ザラの愉快そうな態度を見て溜息をつく。顔を横に向けると読書に勤しむチカとケイトの姿が見えた。その時々、二人は海のウーミについて話をしている。

全身を目一杯使う動きで擬音を口にするチカを、言葉にして伝えてほしそうなケイトの様子は微笑ましく、自然と笑みが浮かぶ。

その時、こちらにやってくる二人の姿が見える。アレシマから飛行船に搭乗されたお客さんだ。

「ハーイ、コトブキのみなさん」

「ロイグにリガルか。おはよう」

「おはよ！ 随分とゆっくりとしているようね？」

「夜間警備の交代を終えてそれなりの時間が経つと、考える事は皆同じさ」

「暇を持て余したり、ハルトが心配になるとか？」

「昨日の今日だからな。だが、どちらかといえば今日は前者だな」

今日のハルトはユーリア議員と同行しているから何も起こらないだろう。無事にハルトが目的を達成できる事を祈るぐらいだ。

問題は私達の待機時間だ。予定通りであれば飛行船は夜には再び飛行を始め、ラハマに向かうのだから強行軍と言えばその通りなのだが、不意に出来る空き時間の消化に悩まされる。

外出をする事は出来ず、警備の為に体力を消耗するわけにもいかず、結果として皆と集まり談話をしているのが現状だ。

「一体、ハルトは何をしにイケスカに降り立ったのかしら？」

「我々の任務は飛行船の護衛だ。それ以上の事は教えられないな」

「あら、その言い方だと彼が何をしているのか知っているみたいね」

口元に手を当てて微笑むリガルの姿に自分が失言をした事に気づく。

「勿論、知っているわよ」

「ザラ」

「知ってはいるけど教えられないのは事実よ。飛行隊のお仕事は信用第一ですもの」

ウインクをして人差し指を口に当てる仕草は様になっている。

こうして私の失態を補ってくれるザラには頭が上がらない。

「ハルトを助けてくれたお二人には悪いがそういう事だ。すまないな」

「それもそうよね、意地悪な質問をしてごめんなさいね」

「いや、それよりも立ち話もなんだ、よかつたら座らないか？」

「お言葉に甘えて失礼するわ」

椅子に座る二人の動きからは優雅さを感じられる。私とは違う、家庭の生まれ育ちなのだろうか。

「コトブキ飛行隊の皆さんに会えて光栄だわ」

「そんな、光栄だなんて言われる程の事を我々は」

「してきたじゃない。今居るこのイケスカで」

確かに自由博愛連合との戦いに終止符を打てた場所ではあるが、私達だけでは為せた事ではない。

様々な偶然と幸運がこちらに向いただけであり、自信を持つて勝利をしたかと問われると疑問が浮かぶ。本当にギリギリな戦いだったから。

現に空賊は増える一方であり、穴の中へと消えていったと推測されていたイサオ自身もユーハングで健在しているのが判明してしまった。

それでも仲間を失う事無く、あの戦いを乗り切れた事は、私の密かな自慢だ。

「あの戦いは我々だけの勝利ではない。協力してくれた仲間達があつての勝利だ。我々ばかり誇張されてもこちらも困る」

「あら、隊長さんは謙虚なのね」

「事実さ、それより私の事はレオナでかまわない」

「りょーかい！ それでレオナに聞いてみたい事があつたの！」

少し前のめりになりながら、テーブルに両肘を立てて頬を覆うように手を置くロイグの表情は、とても楽し気で人懐い顔をしている。

今このタイミングで私に聞きたい事と言えば一つしか思いつかない。

「ハルトの事か？」

「あら、よく分かつたわね！」

「傍から見ても不思議な人間である事は確かだからな。だがハルトが何をしているのかは教えられないぞ?」

それもそのはず、ハルトは家族の為に穴を通じてイジツへとやってきたのだから。ただし、イジツの世界にはまだ不慣れな点が多く、こちら側の人間から見れば疑問が浮かぶような行動を取る事もあるので目が離せない。それがアレシマでよく理解できた。

「それは承知の上で聞きたいのだけど、ハルトってユーハングについて相当詳しい?」
「また唐突な質問だな」

「彼がアレシマでそう思えるような言動と写真を見せてくれたのよ」

リガルが取り出した写真には、歓迎会で私達に見せてくれたあの海の光景が映し出されていた。考えていた矢先から突拍子もない行動をしていた事を気づかされ、頭が痛くなる。

「あの馬鹿つ……」

「ハルト君も結構、自由気ままに行動する子よねえ」

「戻ってきたらまた説教をしないと」

「やっぱりこの写真って相当ヤバい物だったりする?」

「人によってだな。としか言いようがない」

「そうよロイグ！ こんなにも美しい光景がある場所を他の誰かに知られてしまったら大変な事になるわ！」

「ちよつと意味が違う気がするけどなあ」

「こほんと咳払いをして仕切り直すロイグ。」

「私の持ち物の中にユーハングに纏わる物があつてね。よく分からない物が多くて今まで保管していたのだけど、探し物の手掛かりでも見つからないかなつて！」

「保管だなんて都合のいい言葉ね。単純に放置してただけでしょうに」

「それは言わない約束！」

「何かを探しているのか？」

「んーちよつとした、オタカラ探しよ」

「お宝探しか、羨ましいな」

「……馬鹿にしないの？」

「目標がある事は良い事じゃないか」

「でも、あるかどうかも分からないオタカラ探しよ？」

「大変ではあるだろうが、夢があつて良いじゃないか」

「このイジツの世界は生きていくだけでも大変だ。」

「そのような世界で夢があり、それを追い求め続ける事が出来るのは幸せな事なのでは」

ないだろうか。

私もザラと二人で始めた飛行隊でここまで辿り着けたのだから、夢が叶ったと言ってもいいだろう。

そんな事を考えていると両手を握られる感触がある。ロイグからだ。

「レオナ！ 貴女って最高よ！」

「と、突然どうしたんだ!？」

「私の夢を聞いて笑わなかった数少ない人だからよ！」

「そんな！ 人の夢を笑える程、私は大層な人間ではないだけだ！」

「理由なんて何でもいいのよ！ 貴女の気持ちが嬉しかったのだから！」

両手を掴まれたまま上下に振られる。慣れないコミュニケーションで戸惑いが隠せないが、ロイグの嬉しそうな顔を見ると彼女なりに色々であったのだと察する。

「お宝探しが夢ってそれほど揶揄されるような事なのかしら？」

「土地柄の問題もあるでしょうけどね、大半の人間には鼻で笑われていたわ」

「でもリガルはロイグに付きあつてあげているのでしょ？」

「ただの腐れ縁よ」

「この後の話はロイグから聞いたものだ。」

探しているお宝はムラクモ空賊団と対峙していたとされる夜明けの鷹が残したとき

れる物。

虹の麓にあるという説を頼りにイジツ中を飛び回り、あと一歩という所で横やりが入り、最初からやり直し中なのだ。

その時にハルトと出会い、ユーハングについて詳しい素振りを見せた彼を見て、一度情報の洗い直しをしてみようと考え付いたそう。

「それでね！ それでね！」

どうやらこの話はまだまだ続きそう。

既にザラトリガルは違うテーブル席へと移動をしていた。他の隊員たちも我関せずを決め込んだらしい。

仕方ない、お誘いしたのはこちら側からだ。今日の待機時間はロイグの話を書く事で過ごす事にしよう。

飛行船へと戻る道中、車中から眺めるイケスカの風景はすっかり闇へと染められていた。

しかし、街並みがある方角からは光が至る所から漏れ、外灯からの光もあり、ラハマの町とは比べ物にならないくらい明るい。

これで夜空に浮かぶお月様にタヌキの姿が無ければ日本と勘違いしてしまいそう。

イジツイチの町とイサオさんが自慢をしていただけの事はある。凄かったですよ、イサオさん。

帰路の途中であるのだから、勿論隣にはユーリア議員がいらつしやる。

そして私の左手はユーリア議員の右手に握り締められている。これには色々と言がある。

帰路に着く間の車中では会話もなく終始無言であった。

私はひたすらに先程の会談の内容を整理しようと必死に脳味噌を動かしていたが、いかんせん元の出来の悪さもあつて順調とは言い切れず。

いい加減、脳味噌がパンクし始めた頃に、気が付けば足の上で組んでいた両手は転がり落ち、だらしなく座席の横に置かれていた。

それに気づいたのは、転がり落ちた手をユーリア議員が握り締めてくれたからだ。

感謝を伝える時にこちらから手を取る事はあつたが、ユーリア議員から手を握り締めてくれた事は始めてた。

不思議と知恵熱を起こしかけていたはずの脳が落ち着きを取り戻していくのが分かる。

少しだけ力を込めると同じように握り返して、逆に緩めると私を落ちつかせるように指先で優しく撫でてくれる。

頭を横に向けてユーリア議員の顔を拝見しようと思ったが、車窓に顔を向けられていたので表情までは分からなかった。

時折、外灯で映し出されるユーリア議員の横顔は、何かを決意した表情をし、凜として美しかった。

怪盗団アカツキ その3

帰還後、軽めの夕食を頂き、部屋に戻りベットの布団に顔を埋めていたら朝を迎えていた。自分が想像をしていた以上に脳味噌は疲労困憊の様子だ。

意識は未だに夢の世界へ旅立ったまま、寝ぼけ眼を擦りながらおぼつかない足取りで食堂へと向かう。

昨日、飛行船に戻ってきて早々に、飛行船内にいる間は食事の際に必ず顔を出す事とレオナさんから追加のお約束を頂いてしまった。詳細は後述で。

ふらつきながらも無事に食堂に辿り着き、その場にいた皆さんに挨拶をする。

案の定、視線を一身に浴びてしまうわけでして。チカからは髪ボツサボサ！ と笑われながら言われ、小さな手で更にボサボサにされる始末。

他からは身支度を整えなさい、髪を切りなさい、夜は早く寝なさいとお言葉を頂いてしまう。正論過ぎてぐうの音もでない。

あい、あい、と夢の世界から返事をしていたところ、横から突き出されたのはお馴染みのパンケーキ。差し出されたパンケーキの元に視線を向ければ、目をキラキラと輝かせたキリエの姿。

食べるでしょ？ 食べるでしょ？ と信じて疑わないパンケーキからの使者、もとい同志からの無償の愛情をお断りするべく、パンケーキを向けてきた手をキリエにお戻しをするが、抵抗を受ける。

相変わらず一口というには大きすぎるサイズを目の前に、食べれば寝覚める派と、朝からそんな重たい物は食べられません派との争いが始まる。

ここにパンケーキの押し付け合いが始まるが、夢の住人が勝てるわけもなく、キリエを基準とした一口パンケーキは無事に私の口の中へと押し込まれた。暴力的なカリリーの味がする。美味しい。

「あの子達、何をしているの？」

「ただのじゃれ合いですこと、気にしたら負けですわ」

「胸焼けしそうね」

「若さがあるとはいえ、朝からパンケーキはちよつとねえ」

無理矢理、口に収められたパンケーキをなんとか飲み込む事に成功。何か飲み物はと視線を動かしていたら、横から果実ジュースの入った樽ジョッキが現れる。

これまた太陽のような笑顔のチカ。ニカツと笑う素敵で可愛らしい表情に思う事があり、つい聞いてしまった。

「二人とも、私に何かご希望が？」

「パンケ「カレー!!」キ!!」

食事を終えて二度目の就寝に入るべく、部屋に戻り再びベットと再会を果たす。どうして人類はお布団に勝てないのだろう。

本来であればレオナさんにお時間を頂いて報告をすべき事があるのだが、アレシマから同伴されているお二人に聞かれたらマズイ内容の話も多々。

お二人を信用していないという訳ではないのだが、私がユーハングから来た事を知る人は少ない方が良いでしょうというのが基本方針。

それが昨日の夜に再び説教をされた原因でもある。調子に乗ってリガルさんに海が映し出された写真を差しあげた事がレオナさんにバレたから。お二人が道中共にする様な未来になるとはあの時は思わなかったのだ。

ついでにラハマに戻ったら、食欲魔人二人に其々のご希望の食事を振る舞う事が決定した。

パンケーキは大丈夫だが、カレーはどうやって作ろう。日本式の作り方をしたくてもカレールーが無い。ジョニーさんに聞いても無理そうだったらレトルトで誤魔化してしまうおう。無理を言う方が悪いという事で。

そうこうと考えている内に、意識は穏やかに遠のいていった。

会う度に寝ぼけてばかりね。とザラさんに笑われてしまう昼を過ごす。

私にとつて初めてのイジツ大移動。その最中、空賊と呼ばれる輩たちと初遭遇をした。

突如として船内に鳴り響くサイレンと共に現れた空賊は、コトブキ飛行隊ともロイグさん達とも違う戦闘機に搭乗して現れた。

後から聞けば零戦二一型という機体らしい。数はそれなりにいたみたいなのだが、機体に対して操縦の腕が追い付いていないところを見ると空賊になりたての可能性があるとレオナさんは言う。

機体数が多いおかげで入手がしやすく、性能も良い。その反面、防御力は薄い為、弾を当てればそこまでの脅威ではない。と教えて貰えたが、どう操縦すれば空中で動く相手に対して弾を当てられるのだろうか。震電から弾を抜いてるような私には未知の世界である。

ゼロ戦という単語であれば流石に聞いた事がある。当時の日本の戦闘機として代名詞の様な扱いをされているおかげか、多くの分野にわたつて名前を目にする事がある。

ただ、その名称の後ろに付けられている型番、二一型、三二型、五二型があると聞かされると頭の上にはハテナマークが浮かぶ。

ついこの間まで、プロペラが付いていれば大体飛行機だろうという大雑把な人間には詳細は不明なわけで。詳しい事はナツオさんに聞いてみるといいと言われた。

こういった話を改めてレオナさんから聞くと、コトブキ飛行隊は傭兵であり、本物のエースパイロット達の集まりなのだなど実感する。普段そのような風に見えないのは誰かさん達のせい。

そして夜を迎え、私がお借りしている部屋に一人の人物がやってきた。

「随分と寝ていたみたいなのに、疲れた顔をしているわね」

「すべき事が明確に分かってきたら、次はどうやって一つ一つをこなして行けばよいかを考えている最中で」

「言える事はただ一つよ、人に頼りなさい。ハルトが私に教えてくれたでしょう?」

「とはいえ何から頼るべきかと」

「悩んでいた訳ね。まあいいわ、一先ず私に付き合いなさい。見せておきたいものがあるのよ」

部屋にやってきたユーリア議員の後を追うように、後ろをついて行く。

その先にある展望室で再びユーリア議員が話しかけてくる。

「もうじき、ここからオフコウ山が見えるわ」

「何時の間にここまで戻って来たのでしょうか？」

「すつとろい飛行船でも飛行を続けていれば直ぐよ。不思議と空賊の襲来が少なかったのが不気味ではあるけれどね」

「ここに私の探し人がいるといいのですが」

「夜つて事もあるから、視界は余り良くないわ。上空からの下見程度と考えて頂戴」

「分かりました。ありがとうございます、ユーリア議員」

「別に帰り道だからかまわないわよ。あとその二人、そんな所で話を聞いているならこつちへいらつしやい」

「なんの事だろうかと考えていたら、ロイグさんとリガルさんが現れた。いつの間にからしていたのだろうか。」

「ごめんなさいね、聞き耳を立てるつもりは無かったのだけれど、中々入りづらい話をされていたみたいで」

「そうね、こちらにも訳ありな事は確かだわ。ついでに二人に手伝って欲しい事があるのよ」

「私たちにですか？ 一体何でしょうか？」

「簡単な話よ、ここからオフコウ山を覗いて何か変わった様子がないか、一緒に調べて欲しいのよ」

「あつさり言うけれど、夜間となると何かを見つける事は困難に近いわよ?」

「承知の上よ、別に何も見つからなくても咎めたりはしないわ。あと私の為とは思わずにハルトの為だと思つてやつて頂戴」

「ハルトの為ですか? ラハマに向かうのにわざわざ遠回りになる空路を利用してでもオフコウ山を見せたかつた?」

「ユーリア議員、それは本当なのですか?」

「ついでよ、気にするほどの事ではないわ」

四人でオフコウ山を見下ろす。

執事さんに見せて貰えた帳簿から生まれた幾つかの疑問と候補地、その一つがここだ。

オフコウ山の独特な形は、私の知っている空母と呼ばれる船の艦種によく似ている。

ユーハングの人達もそう捉えていたのか、ここを飛行機の離着陸の訓練として利用していたと伝えられている。

山のみもとから谷底まで飛行機の残骸が散らばり、訓練の過酷さと離着陸失敗の多さが物語っている。

「何度見ても残骸ばかりよね、(トーン)」

「かなりの数が地表に置かれたままになっていきますよね」

「そうね。これだけあるのなら死者が発生していてもおかしくないのだけど」

「死者ですか？ ハルトは一体何を探しているのですか？」

「墓よ」

「は、墓!?!」

「ゆ、ユーリア議員！ それは流石に！」

身振り手振りでその話はマズイとアピールをし続けたが、私を尻目にユーリア議員の話は続く。

「ハルトはね、家族を探しているのよ。既に亡くなられている可能性があったとしてもね」

秘密裏に事を進めていく予定が、ユーリア議員から私の目的をお二人に暴露されてしまった。

一体どういった意図があつて口にしたのだろうか。お二人の様子は少々気まずそうな表情をされている。

「生きているのかも分からない家族探す為に、託された震電と僅かなツテを頼つてラハマまでやってきたのよ」

間違つてはいない。だけど伝え方次第ではとてつもなく重たい話になるのね、私の目

的つて。

「私が言えるのはここまで。この先の事が知りたいのなら直接本人に聞きなさい。何か問題が発生したなら責任は私が負うわ」

「ユーリア議員！」

「ハルト、貴方が隊長さんからお説教をされたのは知っているわ。それが何故分かる？」

「その、私が迂闊な行動をした為に、注意と心配を含めてのお説教ですよね」

「それが分かっているのなら問題はないわ。それを踏まえてハルトに言いたい事があるの。この先もハルトが何かを思いついたなら好きなように行動しなさい」

「私の好きなようにですか？」

「そう、それがイジツに良い影響を与えてくれると私は確信しているの」

「また大げさな、アレシマ行きの時にも言いましたが私一人でイジツに変化が発生するとは思えません。それにまだ私は何も成してはいませんか？」

「私はハルトという理解者を出会えたわ。それで十分よ」

この時のユーリア議員の表情は今まで見た事のない、穏やかな笑みを浮かべていた。

その姿に見惚れていて、こちらが何かを言う前にユーリア議員は展望室から引き上げてしまう。残された三人の間にはぎくしゃくとした雰囲気が残される。

「すみません。突然重たい話になってしまい」

「あー……うん。びっくりはしたけれど、ハルトは平気なの？」

「家族ではある事は間違いないのですが、顔は写真で、声は聞いた事がない程、昔の方なのでそこまでは」

「そんなに離れた関係なのに探しに来たってわけ？」

「代理、ですかね。本来であればまだ生存している曾祖父が探しに来る予定でしたのですが、事情がありました」

「その事情を聞いたら、私たちに何か問題が発生するとう？」

「お二人には何も無いと思います。私が再びレオナさんに怒られるのと、雇い主であるマダムから何か一言を頂くぐらいですよ」

レオナさんからはそろそろゲンコツを頂いても仕方ない気がする。マダムならば「そう」の一言で済まされそう。

「ただ、私の目的そのものよりも、問題にされてしまうのが私と震電の関係だと思いません。イジツで起きた出来事を考えれば」

「託された震電、僅かなツテ、アレシマの評議会、イケスカへの用事。答えを言っているようなものだと思うのだけれど？」

「ええ、なので詳細と言われましても、もう一つ二つ情報が追加される程度だと思います」

よ」

「それを知った私たちが、何か事を起こすのではないか、考えないのかしら?」

「お二人のお言葉を借りるならば、ロマンと美しい物を共有し合った仲。ですから、大丈夫でしょ?」

お二人に問いかけるように発言する。私がロマンや美しいという言葉を使うのは身体がむず痒くなる。恥ずかしさ半分とアレシマでロイグさんからの質問を誤魔化した時のようなチクつとする罪悪感と。

こちらに視線を合わせたまま開かれるロイグさんの瞳、アメジストのように神秘的な紫。見つめていると穏やかな気持ちになれる優しい瞳。

反対に目を細めて微笑むように私を見つめるリガルさんの瞳、その瞳からは慈愛とも受け取れる視線を浴びる。サファイアに似た美しい青い瞳。

「分かつてるじゃない。私たちには今更よね」

「そう言ってもらえると肩の荷が下ります、リガルさん」

「あら、まだ敬称付きなのね、寂しいわ」

「これは癖みたいなものでござ承を」

「嫌よ、コトブキの様に名前で呼ばないのなら、ある事ない事を言いふらして周るわよ?」

「ひどっ！ そんなに名前呼びの重要性が高いんですか!？」

「高いわよ。私がハルトからの信頼にこたえられる、今できる精一杯の事だもの」

美しい人からの信用がヘヴィー級。パンケーキからの使者しかり、イジツの人達は自分の中の信念に共感を覚えてくれた人に対して真正面から応えようとする。

そして何か発生すると一緒に巻き込むという、台風のような人達でもある。

その中の一人であるリガルさんは、隣でぼうっとしているロイグさんにちよつかいを出し始めた。

「ロイグ？ どうしたのかしら、そんな呆けた顔をして」

「ごめんなさい。少し考え事をしていたわ」

「……今日はこれぐらいにしておいた方が良さそうね」

両手を軽く開くような動作をし、お開きを伝えるリガルさん。

「そうですね、時間も遅くなってきましたし、夜は早く寝なさいと叱られたばかりなので先に失礼しますね」

おやすみなさい。そう伝えて先に部屋から出ようとした瞬間、声をかけられる。

「ハルト!」

「はい？ どうかいたしましたか、ロイグさん?」

振り返り、言葉を待つが返事が来ない。口が空いたり閉じたり、隣人は先程とは別の

意味でジト目でロイグさんを見つめている。これは待つよりもこちらから喋りかけた方がよさそうだ。

「ロイグさん、私はしばらくの間、ラハマに滞在しています。お二人の用事が終わり、都合が良ければなのですが……」

なんだか非常に照れ臭い。何故ならどう考えても。

「お茶でもいいかがですか？」

デートのお誘いだよね、これ。

怪盗団アカツキ その4

たかが数日、されど数日、飛行船の窓からラハマの町が見えてきた時、ほつとする自分がある事に気がつく。

コトブキの皆とお二人は、ラハマにある駐機場に自分達の機体を下す為、飛行船から離陸していった。

その際にお会いしたロイグさんは、昨日の様な考え込むような表情ではなく、初めてお会いした時と同じように接してくれた。

「デート、楽しみにしているわよ！」

発艦する前にそんな事を言われ、驚きの余り口が開く。

幸いにもロイグさんの愛機である鍾馗のエンジン音のおかげで周りには聞かれなかつたようだ。

こうして考えると、デートのお誘いをした時の私は何かがおかしかったのか、それとも余計なお節介が発動したのか。

震電は飛行船の補給時に下して貰う事になっている。きちんとした整備が出来る人が限られているから念の為に。というのは建前なのは誰でも分かっている。

私が飛行船から震電を上手く離陸させる事が出来るだろうか。元々がお尻の大きな子なのだ、そんな子で発艦訓練すらした事のない私が飛び出せば結果は目に見えてい
る。

荷物をまとめ、ユーリア議員と共に飛行船を降りる。

出迎えに来て頂いたのでだろうか、マダム、アレン、リリコさんの姿を見つける。

「おつかれさま。ハルト君、彼女に何か無茶な要求はされなかつたかしら？」

「そんな事はしないわよ。色々と話し合いをしただけよ」

マダムの表情は少し驚きにも似た表情。マダムから見ても、行きと帰りでユーリア議員に起きた変化に気づいたのだろうか。

「……なによ？」

「いいえ、貴女がやけに大人しいと思っただけよ」

「私はいつもと変わらさずよ。やるべき事はこなしてきたわ。これで良かったのでしょうか？」

一度目を閉じ、再び開くマダムの瞳。会釈をしながらお礼を伝える。

「ユーリア議員。この度はこちらの都合により、突然の無理難題を無事解決して頂き、ありがとうございます」

「いいわよ、別に」

腰に片手を置き、正面からマダムを見つめているその姿は実に様になる。

その体勢のまま、横にいる私に首を向けて名前を呼ぶ。

「ハルト」

「はい、なんででしょうか？」

「世話になったわね。何かあったら直ぐに私を呼びなさい。あと、例の件に関してはどうするつもりなの？」

「保留でお願いします。必要になった時にはご厚意に甘えさせていただきますね」

「分かったわ。ハルトがそう判断するのなら私からは何も言わないわ」

その時、船内から連絡係が到着する。準備が完了したようだ。

「残念ながら時間ね。それじゃまたね、ルウルウ、ハルト」

私たちに後ろ姿を向け、手をヒラヒラと動かしながら飛行船内へと姿が消えて行く
ユーリア議員。

安全の為に飛行船から距離を取り、離れた場所からゆっくりと上昇していく飛行船を見つめる。

「ハルト君」

「はい」

「彼女に一体何をすれば、数日であそこまで変われるのかしら？」

「問われた事を返答していただけですが？」

「彼女はそれだけの事では変化を起こさないわよ」

でも実際にそうなのだ。手を取り、目を合わせ、想いを伝える。そしてよく怒られる。これは自業自得だから仕方ない。

「まあいいわ、後で今回の出来事について報告して頂戴」

「了解しました」

「じゃ、次は僕らの番かな？」

車椅子に乗せられたアレク、押し手にはリリコさん。足の動かない状態でも出迎えてくれる姿に嬉しさが沸く。同時に私に出来る事で足の治療が出来るものならしてあげたいという気持ちも。

「ハルトから貰った資料に興味深い内容の書類が見つかったよ」

「何が記載されていたのかな？」

「物の流れ、かな。ユーハングの人達も輸送には苦労していたみたいだよ」

「イジツって空路じゃないと碌に物資を運ぶ事が出来なからね……」

生物、瘴気、陸路が繋がっていない地形。安全なのは空の上。当時はまだしも今となつてはその空すら危うい。

「そんなわけで、今回のハルトが仕入れた情報も含めて意見交換をしたいと思うけど、ど

うかな?」

「勿論、喜んで。あ、でもその前にナツオさんをお願いをしておきたい事があるんだ」
「ナツオに? また何かをするつもりなのかい?」

「ケイトを乗せてあげたいんだ。震電に」

「おう! おかえり、ハルト。アレン達も一緒なのか?」

「ただいまです。ナツオさんにご相談がありまして寄らせてもらいました」

「相談? って事はコイツの事か」

布に被されて機体が見えない状態の震電。だが、独特なフォームは隠し切れないので、形を知っている人が相手なら簡単に判明してしまう。

「震電の塗装を塗り替える事が出来るかどうかの確認をしに来ました」

「塗装か、勿論できるぞ。でも良いのか? 塗装もそうだが、塗り替えるって事は飛ばすつもりなんだろう?」

「問題が起こる可能性はありますが、あれだけ飛行させてみたいと表情に出されると搭乗させてあげなくなるものでして」

「アレシマでもそういう事があったのか。ケイトにしちゃ珍しいが良い事かもしれないな。よし! それじゃ念入りに整備してから、塗り替えをすつか!」

「お願いします、ナツオさん」

「おう！ 任せておきな！ 塗装はどんな風に仕上げておけばいいんだ？」

そうか、塗装と言つても一色に染めるのからパターンまで色々あるのだった。

真つ赤な震電。この子に似合う塗装つてなんだろうか。正直、赤以外の姿は想像が出来ないが、まだ日本に居た時に資料で見た震電は暗緑色だった記憶がある。

だからといってイジツでその色もなんだかなあ。という感覚がある。私ではなくケイトが搭乗するのだから、そうなると浮かぶ選択肢は一つ。

「コトブキ飛行隊の塗装パターンつて出来ます？」

「出来るぞ、それで良いのか？」

「はい、飛行後にまた戻してもらおうと思いますが、それでお願いしたいです」

「うし！ 了解だ！ 念の為にマダムとレオナには伝えておいてくれよな！」

「分かりました。よろしくお願いしますね」

会釈してこのままアレンの病院に向かおうとする前に、再びナツオさんから声がかかる。

「ハルト！ 言い忘れてた事がある！」

「どうかしましたか？」

「アレンに使う器具、きつちり用意しておいたぞ！」

「本当ですか！ これでさっそくアレンのリハビリが開始できます。ありがとうございます。」

「ます！ ナツオさん！ 後で差し入れ持つてきますね！」

「ついに地獄の日々が始まるのかあ」

「自業自得ね。さっさと治してケイトを安心させなさい」

項垂れるアレンを横目に一度、病院へと向かう事にした。意見交換や今後の計画も含めて、色々と打ち合わせの予定。

道中、復活したアレンの期待に満ちた楽し気な声と比例して、リリコさんの正論が突き刺さる。それでもアレンはお構いなしに笑っている。

名前で呼び合うぐらいなのだから、気心が知れている相手なのだろう。そうだ、リリコさんに聞いてみよう。

「リリコさん、質問よろしいでしょうか？」

「何かしら、事の次第では高いわよ？」

「高い話も気になります、単純に料理の話になります」

「あら、パンケーキならこの間、頑張って作れるようになったじゃない」

「それとはまた別で、下手をしたら今夜にでもカレーを食べさせろというチ力からの要請が」

「無理ね。作れるかどうかじゃなくて、美味しく食べさせてあげたいのなら一晩は置か

ないと」

リリコさんお手製カレーは一晚派だった模様。ジョニーさんお手製は普通とチ力からの評価を頂いているみたい。がつくりとするジョニーさんの姿が目には浮かぶ。

やはりここは日本から持参したレトルトで対応するのが良いのだろう。許されよ、チ力。

「しかし、ハルトがあのだと知り合いになるとは思いもよらなかったよ」

アレンを病室まで送り届けたリリコさんは、次のバイトへと出かけて行ってしまった。私たちの話に興味がないところもリリコさんらしい。

「アレンの顔見知りの人数にも驚くところだと思うのですが」

「似たような事をしていると、不思議と出会うものなんだよ。ちなみに彼女たちについて何か知っている事は？」

「ロマンと美しいを追い求めているとしか」

「なら僕から何かを言えるような事は無いかな。ケイトにだって内緒にしているぐらいだからね」

人差し指を立てるイケメン。様になっているのだから嫉妬も湧かない。

アレンからの報告、イケスカでの出来事。お互いに伝えあい、悩み合う。

そして予想ながらも幾つか怪しげな箇所を複数見つける。影も形も見えなかった曾祖叔父の姿が絞り込めてきた。

その時、コンコンと柔らかなノックの音が聞こえ、扉に視線を向けるとケイトがそこにいた。

そこからはケイトも含めて三人で語り合い。三人寄れば文殊の知恵とはよく言ったものである。

気が付けば太陽は既に昇りきり、下降を始めている。話に興が入り過ぎていたかもしれない。

「今日はこのぐらいかな。いやー喋った喋った、話し相手がいなくて寂しかったよ」

「それはよかった。色々ありがとう、アレン」

「こちらこそ。趣味と実益を兼ねている事だから資料を貰えたおかげで捗るよ」

「……実益？」

ケイトからの素朴な疑問が聞こえたが、当の本人は知らんぷり。楽し気に今日の出来事を書き留める事に集中している。

「そうだ、ケイトにお願いがあるのだけど」

「分かった」

「まだ、何も伝えていないよ？」

「ようやくハルトから頼られた。ケイトはハルトを信用している。問題ない」

大丈夫か、の後に続きそんな言葉を発するケイト。こんなにも近くに信用値がストツプ高になられている人がいた。

ナツオさんからはリハビリ器具の作成が出来たと報告を頂いた事だ、しばらくはアレンの足の事を優先しよう。私の探し人は逃げたりしないからね。

「ケイトの信用に答えられる内容か分からないけれど、ケイトに震電に搭乗してもらい、飛行も含めて動作確認をお願いしたいのだけれど」

表情変わらず、されど空気は先程までとは違う。この兄妹はどうしてこうも煌びやかな雰囲気を出せるのだろうか。

また後で、二人にそう伝えてマダムに報告をする為の付き添いと塗装の許可を得る為に、レオナさんの元へ向かう。

ケイトから聞いた場所に、ザラさんと共にしているレオナさんを発見。

用件を伝えると快く承諾していただいた。塗装に関してはマダムに一言伝えておいた方が良いとの助言を頂いたので、お会いした時に何う事にした。

こうして、本日はハマに戻ってきたとは思えない程に慌ただしい日が終わりを告げようとしている。

賑やかを通り越してやかましいと思う程の楽しい食事会。案の定、パンケーキからの使者からの要望、レトルトで妥協してもらったカレーを美味しいと言ってくれるチカの実顔が心に突き刺さり、その心を優しくそっと包み込んでくれるタミルさんの存在。凄

い、何が、全てだ。

お二人は用事があつて参加できなかったのが実に残念である。

今日という日にお別れを告げ、明日を迎える為にベットへ身体を預けようとしたその時、扉から聞こえる控えめなノックの音。迷惑にならないように返事をして、扉をそつと開ける。

「こんばんは、ハルト。夜遅くにごめんね」

片目を閉じ、両手を口元で合わせながら可愛らしい謝罪から始まるその人。ロイグさんである。

怪盗団アカツキ その5

部屋に招き入れ、ロイグさんにはベッドに座る様をお願いをする。

私が座っている木の椅子は固く、クッションも無いので女性を座らせるのは気が引けたのである。

「ハルト、展望室ではごめんなさい」

「いえ、ロイグさん達をデートに誘う良い口実が出来たので私に謝れる事は何も。むしろ得をしている方ですから」

「あら、嬉しい。得をしたなんて言ってもらえるだなんて」

「事実ですから」

「この部屋はお世辞にも広いとは言えないが、このぐらいの広さは自分に合うよう落ちつく。」

そこにベッドと備え付けの丸いテーブルに今座っている木の椅子が一つずつ。椅子に座りテーブルで日誌を書くのも一日の終わりの楽しみ。

「あのね、ハルト。貴方に伝えておかなければならない事があるの」

「デートよりも前にですか？」

「残念な事にね。それでデートがおじやんになっても仕方ないと思うけど、それでも伝えておかないと私の気が済まないのよ」

なにやら決意は固いようだ。ロイグさんにここまで思わせるような出来事。なんであろうか。

「まず一つ。私たちの用事についてハルトには教えてなかったわよね？」

「ラハマに用事があるとだけは聞きましたが、それだけですな」

「私たちの用事、ハルトの素性を探る事だったの」

「私……ですか。何か分かりました？　なんて聞いてもよいのやら」

「勿論！　ユーハングに関しては特別と言って良い程、豊富な知識を持ち合わせている事が分かったわ。それに温厚で人の話を聞いてくれる人物だという事もね！」

ユーハングについては言うまでも無く。温厚かと聞かれても正直なところは分からない。これで結構テンパると口が悪くなるタイプだし……。

不意にユーリア議員から言われた言葉が思い浮かぶ。人一人が現れただけでこの状況よ。

「二つ。ユーハングに特別詳しいハルトに仕事を依頼したいの」

「仕事ですか。マダムと相談を踏まえてですけど、引き受ける事は可能だと思いますよ」
こちらの世界の日本が知れる機会があるのなら、私にとっても悪くない話だ。

曾祖叔父の居場所が絞り込めてきたとはいえ、現地調査に直ぐに向えるかといえれば難しい。コトブキの力扱いが無ければ移動もままならない人間だからね。

「そして三つ。ここが一番大切な話なの。聞いてくれる？」

「勿論ですよ」

ロイグさんが深呼吸をしている。その口から発せられる言葉の意味は一体なんだろうか。こちらまで緊張し始めてしまう。

「ハルト。私の名前はロイグ。怪盗ロイグという通り名で活動をしているの。そして怪盗団アカツキのリーダーでもあるの」

怪盗。日本人がこの言葉を聞いて最初に浮かぶのは一体なんだろうか。やはり三世？ それとも真実は……いや、この子は探偵だ。

聞き慣れない単語故、実際に存在したと思われる人物だと、釜茹にされたらしい石川五右衛門を思い出すだけで精一杯だ。

ぼーっとしながらロイグさんから語られた三つ目の話を考えている時に気が付く。不安げな目でこちらを見ているロイグさんの姿を。

「すみません。聞き慣れない単語で色々と思いつき出すのに一苦労していました」

「聞き慣れない？ 私たち結構派手に活動していたつもりだけど？」

「きつと私のいた辺鄙なところまで情報が伝わらなかったのでしょうか」

もしかして、イジツでは有名な怪盗団なのだろうか？ そうだとしたらマズイ、僻地住まいで押し通せるものだろうか。

脳味噌をコネコネしながら考える。その沈黙が終わりだとも知らずに。

「ハルト」

「なんででしょうか？」

「貴方に最後の質問よ。ハルトはもしかして、ユーハングからやってきたのではないかしら？」

突然の事で身体がビクツつと反応してしまう。

震電に搭乗し、ユーリア議員の発言、私がイジツで有名だとされる怪盗団アカツキを知らない、そこから更にイジツで起きた出来事を質問されたら……。

一息入れる。これはバレたらマズイ案件なのだろうか？ ロイグさんであれば大丈夫ではないだろうか？ 昨日、自分で発言したロマンと美しい物を共有し合った仲間という言葉。

あの時はリガルさんからは賛同を頂けたけど、ロイグさんからはまだだった。誤魔化すのであれば、このあやふやな物にしがみつくほか仕方ない。

「ちなみに、どうしてそう思われたか聞いてもよろしいですか？」

「それはまあ、展望室で聞いたユーリア議員の言葉と態度かな？ あの人がおウニ商会

のマダムと仲が良いのはよく聞かれる話だけれど、ハルトに対しての接し方はマダムのとはまた違った仲の良さを感じたのよ」

『私の好きなようにですか?』

『そう、それがイジツに良い影響を与えてくれると私は確信しているの』

何故、あの時ユーリア議員は私以外の人にも聞こえる様にこの事を伝えたのか。確信という言葉を用いてまで。

考えてみても分からない。ただ、恩を感じている人からの期待に応えたいと思う気持ちはおかしい事だろうか。

ただし、私以外の人が聞いた場合は。

「疑問が湧きますよね……」

「後は私たちの事を本当に信じてくれていた事が分かったから……かな」

「ロマンと美しい物を共有し合った仲。としか言ったつもりはないのですが?」

「普通なら鼻で笑われて終わりよ? しかも私たちが追い求めている物は、あるのかどうかも分からない夜明けの鷹が残したとされるオタカラなのよ?」

「それはまた壮大な夢とロマンに満ち溢れてますね」

「反射的に返事をしたが、うん、分からない。空を飛ぶ鷹と指使いが凄い鷹なら分かるのだけれど、夜明けの鷹は初めて聞いた。」

ただ、純粋に夢がある事が羨ましい。私の夢ってなんだっけ？　小さな頃はたくさんあつたはずなのに思い出せない。

そして夢を言葉にしなくなったのはいつからだろう。あ、これ良くない思考だ、やめやめ。

ダークサイドからの魔の手を振り切り、俯いていた顔を上げると、目の前にはイジツの山が見えた。肌色面積が多めの大きくて柔らかそうな、そのイジツの山から目が離せない。というよりも視線を外しきれない程、近づいてくる。

「もうもうっ!! レオナもハルトも!! 貴方達は最高よっ!!」

視界不良、なれど高揚感が高まる。頭を抱えられながら強く抱きしめられ、ロイグさんの暖かな体温が顔を通して伝わる。

私のオタカラはイジツに、ここにあつたという事で良いのではないだろうか。

パソコンの中にだけ存在しているベストなレンズ達よりも、最新鋭の機器を利用して見つめた世界よりも、この体験に勝る物などあるものだろうか。

今日に至るまで、夢も希望を成就させる為には自身で行動を起こさなければ何も叶わなかった。例え叶えたとしても触れ合う事は叶わない。所詮は画面の向こう側の存在だ。

だが、現実はどうだ。今まさにロイグ山に埋もれ、挟まれた挙句、髪をわしゃわしゃ

とされている。何故、みな私の頭を荒っぽく撫でるのだろうか。

ここで自身の異常事態に気が付く。不思議な事にあれほど湧き立つ高揚感、は嘘の様に消え去っていた。残されたものは、ただひたすらに純粹な感謝の気持ち。拝みたくなる程の有難さ。尊い存在。

自然と涙が流れ落ちている事に気がつく。人間、感極まると悟りをひらいてしまうのか、泣いてしまうものなのか。一つ勉強になりました。

「ちよつと！ 急に泣き出してどうしたの!？」

ロイグさんの両手で頬を押さえつけられる。少し強めの力で押さえられているおかげで唇が飛び出しているが、そんな状態の私をお構いなしに器用に親指を使って涙を拭ってくれる。

「内に秘めていたものが噴出してきただけなので気にしないでください。あと、少し離れていただけると」

顔が近いのだ。吐息さえ感じ取れるのではないかとというぐらいに。

最初は訝しい目で見つめていたが、何かに気が付いたのかイタズラを思いついたような笑みを浮かべている。

「ハルト、もしかして照れてる?」

「とんでもなく情けない姿をお見せしている気がして」

「そんな事はないわよ？　今のハルトも素敵よ」

そう言われるが、拝みたくなる気持ちで涙を流し、過ぎ去った高揚感の代わりに気恥ずかしさが浮上している状態。

眼も顔も赤く染まる私の姿を、ロイグさんがどう捉えてくれれば素敵だなんて思っているのか不明ではある。

「これでアレシマのお返しが出来たわね！　私ばかり慌てている姿を見られていて不公平だったもの！」

にひっ、という擬音が聞こえて来るのではないかと思うぐらいの満面の笑みで、やり返してやったわ！　と満足気なロイグさん。

アレシマで初めて出会った頃の調子に戻った事は確かなようだ。

怪盗団アカツキ その6

窓から朝日が差し込んでいるのが分かる。昨日の夜はロイグさんとの会話が盛り上がり、寝る時間が遅くなってしまった。

もう少しだけ惰眠を貪りたい。もう少し、あと少し、せめて朝食前まで。

そんな時、昨日とは違う力強い扉をノックする音。返事をするまでもなく誰かが部屋に入ってきた。

未だにお布団に潜り込んでいる私の肩を掴み、揺する。

「ほら！ さっさと起きなさい！」

少しずつ意識が戻り、焦点が合い始めた頃に訪れた人物はリガルさんだと判明する。

「おはやうござます……」

「ロイグもハルトも、昨日はどれだけ話に夢中になっていたのよ……」

解散した時間は日付が変わる少し手前だと記憶している。ほとんどは話を聞く側の立場ではあったけれど。

怪盗を始めた理由、仲間が出来た喜び、夜明けの鷹について書かれた日誌を集めた事。それらをアカツキと名乗る偽物連中に全て奪われたという話。

相手の情報を探り、偽アカツキ計画を企てている人物がいる事までは分かった。

その実行犯はロイグさんのご学友であり、命令を下しているのは、お上。という連中だという事も。

そこで一旦情報は途切れる。相手に怪盗団アカツキのアジトと呼ばれる場所が知られている以上、一時的に身を隠すように場所を移動しなければならぬ。

仲間達とはバラバラに行動し、身を潜めながら情報収集をしていたところ。だそう
だ。

だが、残念な事に有益な情報が手に入ったとは言い難いのが一つ、いままで集めた資料で解読出来ない物が多数あり、これらが何かヒントになるのではないかとロイグさんが考えているのが二つ。

そして、反場八つ当たり気味に震電でも盗もうとしていたところで、偶然アレシマで私を見つけ、今に至る。

「はあ……」

「何をため息なんかついているのよ。私が起こしてあげたのに失礼じゃない？」

私は未だにお布団に潜り続け、顔だけを出した状態で仰向け、腰に手を当てながら顔を覗き込むリガルさんの髪が朝日に照らされて煌びやかに輝いている。

「……おやすみなさい」

「ちよつと！ 何をまた寝ようとしているの！ ロイグみたいな事をしないで頂戴！」
夜遅くまで語り合った友人は私と同じ事をしていたらしい。元から朝は弱い人間が、夜遅くまで起きていればこうなる事は明白。

父親を起こす側だった自分も、リガルさんのように何とか父親を起こそうとしていたけれど、揺さぶるぐらいじゃ起きてはくれないんだよなあ。

それどころかアレをやってくる訳だ。私が行ってリガルさんに効くかどうかは分からないけれど、もう少し寝たいからやってみよう。

ベットの中心から少しだけ横にズレ、右手を横に伸ばしたまま左手でお布団を捲り上げる。

生物を飼った経験がある人には分かるかもしれない。つまるところ、一緒に寝ようという合図。

空いたスペースに右手でポンポンとベットを叩く。はよ、一緒のお布団でもうしばらく寝ようじゃないの。

……なにも反応が返ってこない。天井を見つめていた視線をリガルさんがいるはずの方向に向ける。いる事は確かだが、こちらを見つめたまま反応がない。

きつと照れているのだ。私も父親の睡魔への誘いを受けた時は気恥ずかしさがあったというものだ。だが、一度お布団に入れば幸福感しかない。暖かなお布団、人の温も

り、おかげで何度、誘惑に負けてお昼まで寝てしまったものか。

思い出を振り返っていると、ベットが沈む感覚を覚える。やはりお布団という魔の手からは誰しも逆らえないものなのだ。仕方ないのだ。

「……」

身体に衝撃が走る。無言で倒れ込んできたリガルさんは、勢いを利用して私の胸板に自身の右腕を打ち込む。

良い所に食らったようで一時的に呼吸が出来なくなり、痛みに悶える。

攻撃をしてきた当人であるリガルさんは、お隣にうつ伏せ状態のままベットに顔を埋めて動かない。

更なる攻撃がくるのだろうか、不安になりつつ左手でリガルさんにお布団をかける。特に抵抗なし。

予想外の出来事もあったが再び眠りにつけそうだ。永眠ではない事を喜びを噛みしめ、ハルト、二度寝します。おやすみなさい。

「貴方、相当な馬鹿よね」

勢いよく首だけこちらに向け、器用に頭を私の右腕に乗せてジト目で罵倒してくる。ちよつと怖い。

「馬鹿じゃないやい」

「なら阿呆ね。間違いないわ」

そちらは否定はできない。

ベットに手を付けて身体を起こすリガルさん。そのままちよこんとぺたんこ座りをして、少し呆れ顔で頭を傾けている。

「おふざけもこれぐらいにして、さっさと起きなさい?」

駄々をこねる子をあやすかの様に、声色は先程までとは違い、私のお腹を優しくポンポンと叩いてからベットから降りる。

ここまで優しくされてしまったのなら起きなければ。続くように身体を起こしてベットに腰を掛ける。

押し殺すように欠伸をして顔を上げる。覚醒とまではいかないが、ベットに再び潜り込む程の眠気は無くなったようだ。

「早く着替えて下りてきなさいよ?」

そう言葉を残して、リガルさんは部屋を出て行った。

身体を軽く伸ばし、ほぐす様に簡単な柔軟体操をして、着替えをする為に行動に移る事にした。

再びアレンのところに顔を出そうかな。マダムからお給金を頂いている身だしね。

「おや、二人とも久しぶり。元気にしてたかい？」

「アレン!! この町にいたのね!」

朝食を食べながらの会話、私のラハマでのお仕事はアレンの話し相手。それをお二人に伝えると、会いたいという言葉を貰う。

確かアレンも知り合いだと言っていたから、連れて行っても問題ないだろうという判断で、お連れした。

「どうだい、お宝探しの方は順調かい？」

「現在、手詰まり中なのと追われている身で」

「あらら、中々そちらも苦労しているみたいだね」

「でも、これぐらいじゃ諦めないわよ! こっちにだって秘密兵器がいるんだから!」

バツと両手で私をご紹介するロイグさん。そんな大層な人間ではないのにと思いつながら、アレンへのお見舞い品を頼張る。

「確かに。僕にユーハングの事を教えてくれる先生だからね、ハルトは」

「やつぱり! 昨日の夜だってユーハングと何か繋がりがあのかつて聞いてもはぐらかされちやつたわ!」

「おやまあ。ハルト、彼女達の正体については聞いたのかい？」

念の為に辺りを見回す。人がいる様子は無さそうだけど、喋っていいのかな。

「一応、大雑把に聞いてはおりますけど」

「あんなに夜遅くまで語り合ったのに！　大雑把にしか聞いてなかったなんて酷いわ！」

「リガルさんはあの時、居ませんでしたけど、何をされていたのですか？」

「夜だもの、さつさと寝たわ。お肌に悪いし。あといい加減、敬称を付けて呼ぶのを止めなさい」

「まだ慣れていません。ご了承ください」

「二人とも聞いてくれるかしら、今朝ハルトを起こしに行ったら彼が私をベットに……」
「あああああ!!　事実と色々違うけれど本日から名前で呼ばさせていただきます！　リガル！」

「あーずるいー！　私も名前で呼んでよー！」

頬つぺたを膨らませて私の腕をツンツンしてくるロイグさん。

大人の女性なのに可愛らしい仕草も似合うだなんて反則的な人だ。

「あはは。仲が良い事はよく分かったよ。そこまで仲がいいならご存知かもしれないけれど、彼女達は怪盗。怪盗団アカツキのリーダーとメンバーだよ」

「ロイグさんがリーダーなのは聞きましたけど、リガルさ……リガルもメンバーなので
すか？」

「そうよ。とはいっても入るも自由、抜けるも自由の緩い怪盗団よ」

「強制したところで良い事なんてないもの。あと、さん付けよ、ハルト」

めつというお言葉まで頂く。気を付けないと今度は何を言われるか、されてしまうのか検討もつかない。

「次にハルトについてだけど、彼は穴を通じてユーハングからイジツへと来たんだよ」

「そうでしょうね。ユーリア議員のおかげで大方予想は付いていたもの」

「人に助言を残すなんて珍しい、飛行船で見たユーリア議員の態度、ハルトから何か影響を受けたのかな」

「行きと帰りで様変わりしているようなら、原因は一つね」

「わたくし、一切の自覚が御座いません」

ユーリア議員の態度が濃く変わったのは、イケスカ到着後から帰りの車中までの間だ
と思う。

会談中は色々とありましたし、私としてはお礼と今後の協力を約束させてもらえて、
これから少しずつ恩を返せるかなと思う次第で。

ただ、どうしても物事には優先順位がついてしまうもの。

「整理を付ける為に私から改めてお伝えしますね。私は穴を通じてユーハングからイジツ
へと参りました。理由は曾祖父父がイジツで生きているか、亡くなられているかの確

認。それとイサオさん絡みも少々」

「やつぱり、あの震電はイサオがイケスカ上空で搭乗していたものなの？」

「はい。そして穴に飛び込んで着いた先が、私の曾祖父の土地の上空でした。イサオさんを保護した曾祖父は私を呼び出し、辿り着いた家でイサオさんと出会い、色々あり過ぎて今に至る。といったところですよ」

「それでイケスカにまで用事があつたのね」

「今してみれば、会つたら伝えて程度の言付だったので、行かない方が色々と楽だったかなと思う次第でございますよ」

深めの溜息をつく。言付を届けに行つたおかげでブユウ商事を私が継がなければならぬ展開になりつつあり、一体どうなるやらといった状態。

それでもアレンの解析と執事さんからの情報提供で、ある程度は曾祖父の居場所が絞れるようになったのだ。感謝すれど文句を言えるような立場ではない。

「貴方も中々苦勞しているわね」

「いやいや、イジツで出会えた人達のおかげで順調すぎるぐらいに事が進んでいると思つていますよ。下手をしたら空賊に拾われてたりする可能性もあつたわけですし」

「その時は、身ぐるみ剥かれて荒野で放り投げ出されていたわね」

「それが冗談でもない事をイジツに来てから実感しましたよ」

本当に、穴から飛び出した瞬間、キリエに追い掛け回されたぐらいで済んでよかったなあと思う。その後は誤解も解けて親しくなれたのだから。

「それで、ハルトは彼女たちの依頼を引き受けるつもりなのかい？ 結構物騒な状況になっっているみたいだけれど」

「まずはマダムのご許可を。情報の絞り込みがしたい事も事実。推定五か所の部分をせめて二か所にまで絞り込みたい。それが可能にできる方法としてはロイグさんの所持している、ユーハンクに纏わる物を解析出来れば可能かもしれないという期待」

「確かに、全ての場所を探すには人もお金も時間もかかるだろうからね」

ロイグさんは敬称付きで呼んだ事に不満があるらしく、私の頬を指先でツンツンと押しつけて抗議をしている。

「でも、その前にまずはケイトを震電に搭乗させて飛行させる事、アレンの足のリハビリのやり方を徹底的に覚えてもらう事が先決かな」

「アレンの足って治るの？」

「可能性がある。というぐらいいです。イジツとは違う方法で医療行為を行ってうまくいけば……ってところですよ」

「それって物凄く大切な事じゃない！ アレン！ 頑張りなさいよ！」

「疲れる事は嫌だなあ」

「ダダをコネている場合じゃないでしょう！　こんなチャンス、ハルトと出会わなければ得られなかったでしょうに！」

「それを言われると反論のしようがございません」

ガクツと顔を落として反省。上げた時には笑い話。

震電の飛行試験まで、用件を済ませる事に集中するでしょう。

怪盗団アカツキ その7

駐機場に立つ私とケイトにナツオさん。目の前にはコトブキの迷彩へと変貌を遂げた震電の姿がある。

隼一型のケイト機の仕様と少し違い、主翼の先は紫ではなく赤、胴体部分にエンマ機に似た赤い流線が描かれていた。

何故かパーソナルマークだけは未だにパンケーキであるが。

「ナツオさん。マークの方もケイトの物に変更してもよかったのでは？」

「そうしようかと思っていたのだがな、本人からはこのままがいいと言われてな」

「塗装はイザという時の事も考え、視認性を重視して識別しやすいコトブキの迷彩で妥協した。だが、本人を識別するパーソナルマークの変更だけは譲れない」

「ただのパンケーキだけじゃないのかなあ」

「この震電にはこのマークが一番似合う。それにハルトの震電だと思わせてくれる事心が落ちつく」

マーク一つでケイトが落ちついて搭乗できるのならそれでいいか。

ナツオさんの最終点検が完了し、後はこちらの準備を待つのみとなった。

既にケイトは震電に乗り込んで、こちらも最終確認をしている。

ちよつとした高さのある台を借りて、機体の外からケイトの様子をうかがう。

「渡した震電の手順書、読めました？」

「大丈夫、簡潔ながらも分かりやすく読みやすかった。緊急時の脱出方法だけは念入りに詳細が書かれていたが」

「何か震電に異変を感じたら、機体の事は気にせず脱出してください。大切な機体である事は確かだけど、ケイトの命の方が言うまでもなく大切だから」

「ハルトの言う通りだ。現状では一機しか存在しない震電だが、それでもパイロットの命の方が大切なのは言うまでもない」

「……ん、了解した」

少し遅れて返事をするケイトにナツオさんは感じる事があつたようで。

「随分と素直だな、ケイト。お前さんの事だから不時着ぐらいはつて考えていそうだと思っていたが」

「考えている。だが、今回はケイトの我儘を実現させてくれたハルトに従う」

「オマエ達も信頼関係が深まっているようで何よりだ」

茶化す様にして笑うナツオさん。表情を崩す事なく計器の確認に余念がないケイト。

私だけ照れているという状態。

「さっ、始めるとするか！」

「私はみんなのいる建物の屋上でケイトを見守っていますからね」

「了解した」

ハルトが小走りに震電から離れ、建物に向かって行く姿が見える。

ナツオ班長の指示の元、イナーシャハンドルが差し込まれエンジンの始動準備にかか
る。

アレシマで行った事と同様に、手渡された手順書を思い出し、機体の操作を始める。
点火。イジツには存在しないエンジンが再び音を立て火がともされる。

滑走路へと移動を開始、その間に飛行前の手順を再確認。

到着後、各所の稼働確認、スロットルを操作してエンジンの反応速度を確認する。想
定通り。機敏に反応を示し機体後部の排気口からは時折、エンジンから排気と共に火が
吹く。流石はナツオ班長。

後はプロペラを擦らない為に、機首を上げ過ぎないように離陸をしてあげればいだけ
だ。

……不思議だ。この震電の持ち主はハルトである事に違いはない。だが、その前はイ
サオの機体でもある。

穴の調査をしていたアレンを襲撃し、足を動かなくした張本人。その本人には富嶽生産工場戦で一矢報いる事が出来た。エンマの言葉を借りるならば、スツキリした。

のちにイケスカ騒動と呼ばれる戦いは終息し、一段落、とならないのが難しい。

依然としてアレンの足が治る見込みは低く、高度六十センチクーリルを保ったまま。何か治療方法がないかと空いた時間を利用して、空賊の活動が活発的になり、機体の修理が完了した順番に任務へ就く状態、集中的に調べ物をする時間も取れないまま。

そんな時、突如開いた穴から現れたのがハルトだった。

ユーハング工廠跡地へ行動を共にし、隠されていた物資を分け隔てなく分け与え、アレンの足についてもケイトの我儘を聞き入れてくれた。

ほんの僅かな可能性でも、当初はそう考えていた。

イケスカから帰還後、ハルトは自身の目的を前にしてアレンの治療を優先してくれた。事情があるのだろうが、嬉しい。

アレンの足を診察するように触れ、何かを呟きながら伸縮性のある物を見た事も無い巻き方で処置する。

正面からアレンを炊き抱える様に立たせ、合図と共に手を離す。ほんの僅かではあったが、アレンは自分の足で高度六十センチクーリルを超える事に成功し、再びベットの
上へ着陸。

一瞬だけだからと、本人はやんわりと否定をしたが、その一瞬ですらいままで不可能であった。

事実、アレンは自分の足で立てた時、瞬間的に目を見開いたのをケイトは見逃していない。

「まるで魔法使いだね、ハルトは」

「先人達のたゆまぬ努力のおかげですよ。足の筋肉を保持してくれた人達とかね」

こちらに振り返り、ケイトを見るハルトの視線。当たり前前の事を褒められると気恥ずかしい。

ナツオ班長が用意してくれた器具を使用して、少しずつ訓練を重ねて行けば、日常生活を送る分には問題が無い程度に回復できるのではないかと、ハルトが言う。医者ではないから予想だけど、と注釈付き。

ケイトはハルトに何を返せるのだろうか。本人はお世話になっているから別にと答えてくれたが。

今回、震電に乗せてもらえる事になったのもハルトからの好意によるもの。

こうして積み上げられていく目に見えないモノ、モヤモヤとする心にある何か。

離陸を終え、防風を閉める。何故だろうか、機体内部に風が循環したというのに、匂いなど感じられるわけがないのに、感じ取れるハルトの匂い。

イジツに存在する男性と違い、アレンとも違った男性の匂い、だけど不思議と心が落ち着くとも良い匂い。

深呼吸をする。先ほどまでであったモヤモヤとした心は消え去り、晴れやかになつていくのが良く分かる。

こんなにも穏やかな心境で戦闘機を飛ばすのは初めてかもしれない。

不意に笑みが浮かんでしまうのは、震電を飛ばせる喜び以外も含まれているのは仕方ない事。

建物の屋上にいるみんなに見える様に、アレンやハルトに見える様に、震電を大きく旋回させる。

「自分以外の操縦で震電が飛んでいるのを見るのは久しぶりだなあ」

建物の屋上につけば、そこは既にお祭り会場。

敷かれたシートの上にはザラさんのお弁当、エンマのお菓子、既に一杯始めているアレンとロイグさんの姿もある。

「ユーハンクでもイサオが操縦していたのか？」

「曾祖父が修理を施した後に、無理矢理二人で搭乗したりも」

「随分と無茶な鍛えられ方をされたようだな」

「おかげ様で。始めて隼一型に乗せられて、半月もしない内に震電ですよ」
「ハルトって隼に乗ってたの!？」

レオナさんとの会話にキリエが参入。珍しい事にパンケーキを食べていないが、手にはおにぎりとしフォンケーキ。その食べ合わせは大丈夫なのだろうか。

「イジツにくる為の訓練期間中にね。初めて乗った飛行機が隼。初めて自分で操縦した飛行機も隼だよ」

「おお……私より隼愛があるかも」

「隼でイジツに来ていたら、キリエに即撃墜されていただろうね。飛ばせるだけって程度の操縦技術だから」

「あ、あれは震電だったから! 隼だったら攻撃しないもん!」

全力で否定するキリエの姿に、レオナさんと二人で笑い合う。

そんな私たちを呼ぶザラさんの声。気分はちよつとしたピクニツク。
空を見上げればイジツの空を旋回している震電の姿。

そして聴こえてくる。かの国の人達が、口笛のようなエンジン音、Sweetest Soundと呼び、愛したエンジンの音色。

震電に向けて手を振る。ケイトに見えていればいいなと思いつながら。

「ハルトっ！　ホラホラっ、貴方が見つけてきたお酒なんでしょ？　一緒に飲みましょー！」

「僅かな間、席を外したというのにどれだけ呑んでいるんですか！　ロイグさん！」
「もう！　またさん付け！　そろそろお姉さん怒っちゃうぞー！」

無慈悲に引つ張られる頬つべた。押し潰されたり、引つ張られたりと、忙しい頬である。

「ほっははひへえー」

「この程度で酔っぱらってなんていないわよ！　リガルの事は名前と呼ぶのにつきつとリガルに弱みを握られたのね！」

「人聞きの悪い事を言わないでくれるかしら！」

聞こえていたのだろうか、横座りでエンマお手製お菓子を食している美しい人。

エンマと並ぶように座っているその姿は、二人が持ち合わせている気品をより魅力的に引き出している。

「ハルトにウツフンアツハンして誘惑して言わせてるんでしょ！」

「レンジみたいな言い方は止めてちょうだい！！　お酒取り上げるわよ?！」

「やーだっ！」

「なら、せめてその手で掴んでいるものを離してあげなさい。そのままだとハルトの

頬つぺたが腫れるわよ」

「むう」

渋々、ロイグさんが私の頬からそつと手を離す。細くて長い綺麗な指。

そのまま離れていくかと思いきや、解放された頬を労わる様に撫でてくれる。嬉しく思う反面、掴んだのもロイグさん。やや複雑な心境である。

助けてくれたリガルに顔を向けると、その瞳からは今のうちに言っておきなさいと言わんばかりの合図を受け取る。

私が恥ずかしいという理由以外は無いのだから、呼んでみよう、目の前にいる人の名前を。

「ロイグ、ありがとう」

撫でていた指は止まり、こちらを見つめたまま静止する。

だが、それも僅かな間。気が付いた時には再び私の頬をツンツンと連打をし始め、上機嫌に名前で呼ばれた事をリガルやアレン達に報告する。

やはり恥ずかしい。レオナさんやザラさんの様に、自然と敬称付きで呼ばせて欲しい人物を名前で呼ぶ事が。

日本にいた時は名前だけで呼ぶような関係の人はいない。あだ名で呼ぶ友人はいるが、それが可能なのは名字があり、名前があり、親しみを込めて省略する為であるから。

二つ名がまかり通る世界のイジツでは、今のところ名字がある人とは出会っていない。

イサオさん、マダム、ユーリア議員であつても、社名、敬称、役職等が名前の前後に付いてくるだけだ。

そういつた世界であるから、名前で呼ぶ事が重要なのだろう。親しい人からは特に。長々と理由を考えたところで、恥ずかしいという事実は変わらないのだけどさ。

それを誤魔化す為に、再び空を見上げる。ケイトは震電を流暢に使いこなし、素人目でも綺麗な飛び方をしているのが分かる。

私にもあのように震電を飛ばす事が出来るのだろうか。出来たとしても、今度は射撃が当たらないと嘆く未来が想像に容易い。

うん。イジツに居る間はみんなに頼らせてもらおう。無理をして死んでしまったら、ひーじいまで後を追ってきそうだ。

翌日。レオナさんに再びマダムとの面会をお願いをして、お会いさせていただく事になる。

私の後ろにはお二人が同伴。マダムに私の貸し出しを依頼するのだから、本日のメインははいうまでもなく。

結果から先に。許可が下りた。

私がオウニ商会の客人という立場であり、オウニ商会からすると私に依頼をお願いする立場だった事。

その依頼に関しては、マダム of 想像以上の成果が成されようとしている事。どうやらこれはアレンの足の治療とユーリア議員に関する事のようにだ。

そしてマダム個人の考えとしては、私の手伝いをしてあげたい。それがロイグ達の依頼を引き受ける事で、私の探し人が見つかる可能性が上昇するのなら、止める理由は無い。と。

「宿はそのままにしておくわ、すべき事を終えたら、ちゃんと帰ってきなさい」

うれしさの余りに胸を詰まらせる。言葉が出ない代わりに頭を下げる。

イジツの世界で、私が帰れる場所が出来た喜び。

「マダムの器量の大きさは凄いわ！」

「オウニ商会を束ねているお方だからな。それでも今回は私の知っている限りではかなり甘い処置だぞ?」

「ハルトに何かを感じているのかしら?」

「放蕩息子を心配する母親みたいね!」

もしそうだとすると、お母さん？ 母ちゃん？ ママ？ うーん、考えてみたけど何か違う気がする。

思考を巡らせていると、目の前にはサネアツ副船長のお姿が。マダムにお熱なこの人を先程の話に混ぜ込んでみた場合は？

「やっぱり父ちゃんかな」

「ええ！ ハルト君に父ちゃんと呼ばれるような事、あつたっけ？」

「いえ、マダムが母親だったならという話で、父親は副船長かなあと」

「そりやまた嬉しい事を言ってくれるね！ なんならもう一度言ってくれてもいいんだよ？」

「父ちゃん、腹減った」

後方にいる女性陣からの厳しい視線。三文芝居もいい加減にしておきなさいと。

「冗談はさておいて」

「まあそうだよねえ……」

「変な事を言ったお詫びです。よければどうぞ」

スキットルを取り出して副船長に手渡す。中身はいつものユーハング酒という名のウイスキー。

「いつもすまないね」

「お世話になっていきますから」

「そんな事を言ってくれるのはハルト君だけだよ」

泣くように腕を顔に押し当てる。気が強そうな女性達に囲まれた職場なんて、私には務まりません。

その女性陣を怒らせては私の身も危険に晒されてしまうので、副船長とはここでお別れ。

気を付けて行ってくるんだよ？ そう心配してくれる姿は、意外とお父さんが似合うのではないかと思う。

「ロイグ、リガル、大変お待たせしました。ラハマでの用件が一通り終わり、マダムの許可が下りましたので、お二人のお手伝いが出来るようになりました」

「なら善は急げ！ ってね！ 私たちのアジトへ招待するわよ！」

「仲間たちに連絡を済ませてあるから、みんな戻ってくるわよ」

「問題はアジトが荒らされていない事を祈るのみ！ きつと大丈夫！」

保証も何もないけれど！ と、前向きに語るロイグの姿。

こうして、私はラハマの町を再び離れる事となり、インノと呼ばれる場所にあるという怪盗団アカツキのアジトへと向かう事になった。

怪盗団アカツキ その8

インノへと旅立つ直前のラハマ駐機場。

私にとつて初めて自分で操縦する長距離移動。しかも機体は震電。

何事も無い事を祈りつつも、空賊に遭遇した場合は高度を上げて逃げる。そうしないとお二人の邪魔にしなければならないから。

震電の塗装に若干の変化が加えられた。大幅な変更をした訳では無く、ケイト仕様の震電から暗緑色を取り除いたぐらいであるが。

これぐらいの塗装変更をお願いしておかないとコトブキ飛行隊に大変なご迷惑をかけてしまうから。

こうして新しく塗装された震電は、機体全体が灰色、主翼先端と胴体前方にエンマ機の流線、そして酔っ払い共が描いたパンケーキマークである。このマーク、なんとかならんのかね。

今回は弾薬も積まれている。ケイトが搭乗した際に機銃の動作確認をしてもらったが「良い」の一言を頂いた。

素人なのでもう少し解説が欲しいところではあるが、ケイトが良いというのならば良

いのだろう。

問題は撃つたところ当てられない私の射撃能力であるが。

「アレシマ、イケスカへと向かったと思えば、今度はインノか。中々忙しそうじゃないか」

「手掛かりが何も見つからない、宙ぶらりになるよりは良いのかなと思っっていますよ」
「確かに。目的が明確である間は、逆に楽かもしれないな」

話ながらも作業を緩める事無く、機体の確認を行ってくれるナツオさん。

「ここ数日はずっとお世話になりっぱなしで頭が上がらない。整備班の方々には用意しておいた差し入れを渡しておこう。」

「うっし、これで作業終了だ！」

「ありがとうございます。ナツオさん」

「いいって事よ。それよかコレ、持っていけ」

「これは前回、手帳から書き写した整備手順書ですよ」

「そこに私なりの注釈を追記しておいた。ラハマから離れるんだ、信用できそうな奴に渡して震電をキチンと整備してもらえよ！」

中を見させてもらおうと、アレンに押し付……手伝ってもらい完成させた手順書に、ナツオさんが記載したであろう文字が書き加えられている。

少しずつだがイジツ語も理解し、読み書きが出来るようになった身ではあるが、残念ながら専門用語までは分からない。

ナツオさんの飛行機に対する愛情と情熱に、胸の内からこみ上げてくるものがある。

自分が整備出来なくても、機体に真正面から向き合える人に自身の知識を託す。

手に職を持たれている方からしたら、それがどれだけの重みのある行動であろうか。

「ナツオさん……」

「そんな泣きそうな顔をするな！ 私にできる事をしたまでだ！」

「そう言われましても」

「今度はハルトが出来る事をこなして来るんだろ？ 餞別だと思え」

私の胸に拳をトントンと軽く叩く。そして次の仕事へと向かうナツオさんの後ろ姿に、また涙腺が緩みそうなわけでありまして。

「うんうん。美しき友情かな」

「ハルトは泣き虫」

「否定できません」

見送りに来てくれたのだろうか、駐機場までアレンとケイトがやってきた。

いつも通り車椅子に乗りケイトに押されているアレン。この日常をケイトに渡したりハビリ書で変化が起こるだろうか。

まさか自分の足を折って手取り足取り教える訳にもいかない。

「あら！ 二人とも見送りに来てくれたの!？」

「部屋に籠ってばかりいると気が滅入ってしまうからね」

「そんな事を言ってケイトとの訓練から逃げ出してきたのではないかしら？」

「バレたか」

準備が整ったのか、お二人もやってきてしばし談笑。

その間にケイトが何やら取り出し、私に向けて差し出してきた。

「これは……手紙？」

「レオナからの預かり物。コトブキはケイト以外、任務に出た為、ケイトが預かってきた」

「開けて読んでもいいのかな？」

頷くケイトの了承を受けて、手紙を開封し、紙に書かれた文字を読み上げる。

ハルトへ

本来であれば見送りに行きたいところではあったが、こちらも任務がある為、すれ違
いになりそうだ。すまない。

代わりにケイトに手紙を託す事にする。

アレンの足の治療の事もあるので、しばらくの間、ケイトはラハマに滞在している。

何かあった場合は直にケイトに知らせる事。

慣れないイジツの世界でまだ見ぬ土地へと向かうのだから、不安になるかもしれない。

だが、共にするお二人の話をよく聞き、任務を達成して無事に帰還する事。それが一番だ。

その中でハルトの得たい情報を手に入れられる事を祈っている。

ああ、大切な事を書き忘れた。朝はちゃんと起きる事。三度きつちりと食事を取る事。身だしなみは整えて、髪は結っておくこと。

それから……

「レオナって心配症？」

「孤児院でお姉さんをしているから、ハルトを見ると気が気でないだろうね」

「つまり、私は未だに子供扱いされていると？」

「目が離せない。という点に関しては共通している」

「心配してくれる人がいるのだから、私たちから離れちゃダメよ？」

「この世界で迷子になった日には、身ぐるみ剥かれて飛行機からぶら下げられそうだ。

お二人のお尻……後を見失わないように気を付けなければ。

「さっ、ハルトの折角の門出だ。続きは任務を終えてからにしよう」

「それもそうね！ アレン！ ケイト！ また来るわ！」

「ハルトの事、お願いする」

「任せておきなさい。邪魔立てする奴等は全て潰してあげるわ」

「リガル、何故にそこまでの気合を。行ってくるね、アレン、ケイト」

機体に搭乗して整備の方に手伝ってもらい、エンジンを始動させる。

手を振り二人に合図。返ってくる同じ合図に一抹の哀愁。

前方に二機、赤をベースとしたロイグの鍾馗。胴体部分が桃色で主翼が鶯茶に似た色をしたリガルの飛燕。

所々に塗り潰した後があるのは、どうやら怪盗団アカツキのチームマークみただ。念の為に隠しているのだろうか。

先に離陸していく二人の後を追うように、震電をゆつくりと上昇させていく。よかつた、操縦方法を身体も覚えていたみたいだ。

三機でラハマの町を一度旋回し、ここから南西にあるインノまで向かう事になった。

「普通に飛ばせてるじゃない！ ハルト！」

「二応、ユーハングですつとイサオさんから指導を受けていましたから」

「でも射撃は当てられないと？」

「射撃訓練をした場合、色々と面倒な事になる環境でして。下手に撃つぐらいなら機体性能に頼って逃げた方が安全と判断されまして」

「そうね。機体の速さ、高度を考えればそれが無難かしらね」

「なので事前の打ち合わせ通り、ドンパチが始まりそうだった場合は上空に逃げさせて下さる」

「了解！ そうしてもらえれば私たちもやりやすいしね！」

「戦闘機を襲うような馬鹿なら私たちの敵ではないわね」

まさに戦力外。いいの、邪魔にならない事に徹した方がみんなの為だもの。

そんな笑い話をしつつ、順調に飛行が続けられた。

時折、大地を見下ろすと町らしきものが見える。

町自体は小さいけれど、良い町よ。トリガルが教えてくれた。落ち着いたら色々な町を巡ってみたい気持ちが沸いてくる。

その際には誰かについて来てもらおう。私一人で行動したら、絶対に何かが起こりそうだから。

インノと呼ばれる町が見えた。そこを更に通り過ぎ、山岳地帯を沿うように飛行をしていたところでロイグからの無線が入る。

「みんなもう帰ってきてるみたい！ 見慣れた機体が見えるわ！」

「なんだかんだで行動が早いわね」

「あの様子だとアジトに何か起きたわけでは無さそう！ よかったあ！」

「けど、目を付けられている事には変わりはないわ。ハルトに調べ物をしてもらったらまた移動しないと」

「そうになると、向かう先はやっぱりあそこかあ。嫌では無いのだけど面倒だなあ」

「匿ってもらえる場所があるのだから我慢しなさい」

お二人にしか分からない会話をされているが、私のすべき事には変わりはないさそう
だ。

果たしてロイグに必要な情報と、私に必要な情報を見つけ出す事が出来るか。一抹の不安と高揚感に包まれながら、アジトへ着陸を行う。

「ハルト！ 私が先に降りるから、よく見てるのよ！」

「了解です」

ロイグが先にアジトの滑走路に機体を降ろす。慣れた操縦で綺麗に着陸をする。

続いて私も着陸体勢に入る。整備された地面、いつも通りやれば問題ない。自分にそう言い聞かせて震電の車輪を地面に押し付ける。

徐々に減速していく震電、不備も無く、無事に静止する事が出来た。ナツオさんに感

謝せねば。

後ろからリガルさんも着陸へ。その前にロイグが機体から降り、仲間たちに会いに行こうとしていたその時、一人の女性が扉から飛び出してきた。

「ベッグ！ ただいまっ！」

両手を広げて受け入れ態勢万全のロイグ。感動の再会。かと思えば思いつきり横を通り抜けて震電の元へ一直線とやってきた。

背中越しに見える両手を広げたままのロイグの姿に哀愁が漂う。

機体をコンコンと叩き、グルグルと周囲を見回すベッグと呼ばれた女性。

防風を開けると、こちらに気が付いたようで話しかけてきた。

「この機体の持ち主はキミなのだ？」

「そうですよ、ベッグさん」

「どうしてベッグの名前を知っているのだ!? 初めて出会ったばかりなのだ！」

「そこで膝を付けて悲しんでる人が呼んでいたもので」

視線をロイグに合わせると、しまった！ という表情で急いでロイグに駆け寄っている。

ベッグさんが上手に誤魔化したのか、そのままの体勢で抱きしめるロイグ。その顔はとても幸せそうである。

「相変わらず賑やかね、ハルトもさっさと降りてきなさい」

「了解です」

リガルの言葉に答えるように、震電から降りる。一日ご苦労様。機体を撫でて労う。

「ロイグ、いい加減離してあげなさい。ハルトの事を仲間に報告しなければならぬですよ。」

「んーっ！ 仕方ない、これで許してあげるわ！ ベッグ！」

「助かったのだ！ リガル！ レアな機体を前に死んでしまうところだったのだ！」

「あの機体はハルトの物だから、許可を貰った上で触りなさいよ？」

「了解したのだ！ ハルト！ よろしくなのだ！」

「よろしく願いますね、ベッグさん」

「ベッグは整備士をやっているのだ！ 是非、震電を触らせて欲しいのだ！」

「ベッグー。今日は諦めなさい。説明しなくちゃいけない事がたくさんあるのよ？」

「嫌なのだ！ 今すぐ触りたいのだー！」

「はいはい、部屋に戻るわよ」

リガルがベッグさんの首元を掴んで強制連行。ベッグさんは器用に両手足をバタつかせながら抗議をしている。

ナツオさん。ベッグさんにあの整備手順書を渡したら、きつと大変な事になりますよ

ね。

不安を抱きつつ、後ろをついて行き、怪盗団アカツキのアジトへ足を踏み入れる事になる。

怪盗団アカツキ その9

所狭しと並ぶ料理の数々。アカツキの仲間達の再開と私の歓迎会も含めているとの事。大変嬉しく思います。

ロイグ、リガルは言うまでも無く。

長い髪をボンデリングのように巻いて、左右の頭にちよこんと乗せているモアさん。

頭から足まで覆うコートを着て、イジツでは珍しい眼鏡を身に着けているベツグさん。

ロイグと負けず劣らずのスタイルの良さに、前髪に特徴的な赤毛が混じるレンジさん。

身の丈に少し合わない白衣を着て、袖口を余らせているカランさん。

怪盗団アカツキのパーソナルカラーなのだろう。皆、其々に赤い何かを身に着けている。布であり、リボンやネクタイ、マフラーであったりと。

「そんなわけで！ 私たちが煮詰まっている現状を打開してくれる人と呼んできました！」

「ハルトと申します。打開できるかは分かりませんが、依頼された以上は頑張らせて頂

きます」

「来てくれたのは嬉しいが、調べ物ってロイグの部屋に散乱している物だろ？　なんか分かりそうなもんなのか？」

「散乱って失礼ね！　レンジ！　分かりやすく機能的に置かれていると言って欲しいわ！」

「だとよ、部屋掃除をやらされているモアからしたらどうだ？」

「もう少し部屋を綺麗にしてももらえると助かるのですが……」

「はい、すみません」

ロイグの部屋は機能性重視の配置になっていているらしい。必要な物が手を伸ばして届く集中配備型か、床が見えない程、適当に物が置かれた散乱型か。

レンジさんとモアさんの言う事が正しければ、調べ物をする為にロイグの部屋へとお邪魔させてもらうのは、私にはレベルが高すぎる。

お片付けをしていたかどうか、掘り出してもらい、この広間で調べる他、なさそうだ。「以前、ここへ来た彼とは違う人なのね」

「アレンならラハマで元気にしていたわよ。彼の足の治療とユーハングについて教えていたのがハルトなの」

「へえ、治療については興味があるわ」

「医者ではないので、ご期待に添えられるかどうか」

「アレンの足に何かをグルグル！ って巻いて立たせたのよ！ 訓練用器具を用意したり！」

「内科的な手法ね。後で詳しく教えなさい」

「ベッグは震電を弄りたいのだ！ 許可して欲しいのだ！ ハルト！」

「一度に言われましても！ 一つずつ順番に！」

追加で置かれた椅子、そこに私が座らせてもらう状態。隣にいるベッグさんからはどうしても震電を弄りたいという要請が激しい。

時折、クフフ……というカランさんからの含み笑いと視線も。

アジトの広間で行われている歓迎会。周囲を見渡すと本当に様々な物が置いてある。壁には絵画が幾つも掛けられており、目を奪われる。

どちらかと言えば、なんでこんなところにあるの？ と聞きたくなる物が。

「おう。何か気になる物でもあったか？」

「馴染み深い物から見た事がない物まで盛り沢山で、情報に埋め尽くされそうです」

「オマエ、分かるのか？ ソコの棚に飾られている刃物は？」

「刀ですね。ユーハング由来の武器です」

「ならこのバカみたいでかい置物は？」

「熊、ですよ。胸に特徴的な白い毛があるのでツキノワグマだと思えますが」

田舎に住んでいると、ある一定の時期に必ず警報が出される。

熊が出没しましたので付近に気を付けるように。との警告が。

「ここにあるのはまだしも、何故この剥製はポーズが付けられているのだろうか。」

「さすがね！ ユーハング由来の物だと分かって、名称まで当てるだなんて！」

「ただのガラクタじやなかったのか」

「ちよつと！ ツツキーの悪口は許さないわよ！」

「へいへい、どうも失礼しましたと」

謝る気がサラサラなさそうなレンジさんの態度にぶんすかしているロイグ。

既にお酒が回っているようで酒瓶を手にしている。それをモアさんに叱られてしょんぼりする姿は可愛らしい。

「ハルト、一つ聞いていいかしら？」

「なんででしょうか？ リガル」

「この旗はなんとなく分かるのだけど、アレは一体何なのかしら？」

視線の先には、壁に貼られた三角形の布地が二枚。

その一枚に書かれている文字は、洞〇湖。

剥製の熊、地名が書かれたペナント、やはり北の大地からやってきた物なのだろうか

……。

「あちらも旗の一種です。主に船舶で掲げられる旗なのですが、壁に貼られているのはお土産品として売られていた物かと」

「お土産って！ ロイグの奴、ユーハングの土産品を盗んではしゃいでたのかよ！」

先程の反撃と言わんばかりにお腹を抱えて笑いこけるレンジさんの姿に、ロイグが再びおこな状態に。おこななの？ おこなだよ！

「あの馬鹿二人は放っておいて、船って水に浮かぶ乗り物よね？」

「はい、その通りです」

「なら、ハルトから貰ったこの写真を撮影した場所も船だったのかしら？」

テーブルに置かれる、ぼやけた海と鳥が映し出された写真。この一枚からこのような事になるとは、誰が思いついたであろうか。

「そうです。曾祖父に呼ばれて向かう途中に撮ったものですね」

「ちよつと待ちなさい。イジツには先も見えないような大きな水溜まりはどこにも無いわよ」

「あら、伝えてなかったかしら。彼、ユーハングからやってきたのよ」

カランさんからの問いかけにリガルが答えると、辺りは嵐の前の静けさに。既に伝えられているかと思われていた事が伝わっていなかった。レオナさんの拳が今にも頭の

天辺に触れそうな距離まで近づいてきた予感がする。確認は大切。

大笑いしていたレンジさんですら黙って写真を見つめている状況下。先に口を開いたのはモアさんだった。

「あの、ハルトさん。今のは本当ですか？」

「本当です。既にご存知かと思っております」

「リガルウ！ みんなに連絡を入れてつてお願いした時に伝えていなかったの!？」

「あら、必要だったかしら？ ロイグからの呼び出しなんて盗むか自慢かのどちらかじゃない」

思う所があつたのだろうか、皆が頷く。

「実際に集まってみれば、ロイグのガラクタを鑑定出来る人を連れてきた話なのだ。だけれど震電を持ってきてくれたのでベツグは満足なのだ！」

「ベツグう〜」

邪魔なーのーだー！ と引っ付いてくるロイグを振り切ろうと必死にもがくベツグさん。

そのガラクタの山から私は自身の必要としている情報を見つけなければならぬ。夢の島を発掘して無事に見つけだす事が出来るのだろうか。

「このまま話を続けていくと危険な気がしてきたわ。一度、お互いの事実確認をした方

がよさそうね」

「同意です。掘れたまま進めると後々大変な事になりそうですから」

「そうね……。まずは二人から聞いたアカツキの現状を教えてくださいませんかしら」

「了解しました」

偽アカツキの登場により、情報を探る毎日。その為に偽名を利用して記者から情報を仕入れたり。

だが、そのタイミングでレンジさんの弟さんの事が発覚し、弟さんを救出する為に色々と仕込んでいたのだが、相手の方が一步上手であった。

人質を取られ、アジトまでやってきた偽アカツキならぬ、ラムダという女性。ロイグとは面識のある方。

その際に集めた航空日誌は全て没収され、夜明けの鷹についての情報源は全て奪われる形に。

人質は無事に解放され、弟さんもカランさんのお父様がいらつしやる病院へ運ばれ、生き残れる可能性が浮上した。

敵にアジトを知られたからには、襲撃される恐れもあって、一度アカツキは散り散りになった。という所まで。

「ほぼ合っているわ。詳細を付け加えると、人質になった子の中にチビツ子たちがいて

ね。その子たちは依頼主からロイグをある場所まで連れて来る事が目的だったのよ」

「その子たちは何処へ？」

「アジトが危険な事には変わらないわ。依頼主の元に避難させてしばらく待機しているようにしたのよ」

「ロイグはその子たちの依頼主に会いに行くつもりは？」

「当初はその予定だったわ。ダダをこねて少しだけ先延ばしになってしまったけど。そこでアナタを見つけたみたいね」

色々と偶然の重なり合いで今に至るのか。

「話を聞いて分かったと思うけど、このアジトに居られる時間は少ないわ。それでもアナタはロイグに見初められてここへとやってきた。可能な限り迅速に、必要な情報をかき集めて」

「分かりました。気を引き締めて取り掛かります」

返答に満足されたのか。特徴的な含み笑いが漏れる。

「そちらの確認は終わりましたか？」

「ええ、私たち現状は全てカレに伝えたわ。次はこちらからの質問だけど、何かあるかしら？ モア？」

「はい、ですが一つずつ聞く事になってしまいうのでハルトさんにご迷惑をおかけしない

かと不安です」

「知らない方が不安かと思えます。気にせず聞いてください。お答えしますから」

モアさんがこちら見て深呼吸。そして頭を下げてよろしくお願ひします。

こちらこそ、よろしくお願ひします。

そうして始まった、イサオさんとの出会いから私がイジツに来る事になった理由まで。

「そうか、オマエは家族を探す為にイジツまで来たのか」

「年齢的に生き延びている可能性はありません。ですが、ユーハングで消息不明だった人がこちらの世界にいる可能性があるとしたら」

「穴にだって飛び込むよな。分かるよ。骨の一欠けらでも見つけて故郷に戻してやりた
いよな」

「協力してくれた皆さんのおかげで、家族が眠っているであろう場所は幾つか絞り込め
ました。ただ全てを回る時間も人手もありません」

「それでユーハング由来の品を多く持っているロイグと手を組んだのか」

「はい。手持ちの情報ではこれ以上、絞り込む事が難しかったので」

その時、挙手をして発言待ちをしていたモアさんに話を振る。

「あの、ハルトさんは家族の為とはいえ、見知らぬ世界に飛び込んできて辛いのではないのですか……?」

「飛び込んできて早々に、コトブキ飛行隊に撃ち落されそうになった時が一番辛かったですよ」

「それって! とても危険じゃないですか!」

「誤解が解けるまでは死ぬかと思いました。震電の性能に救われたつとところですよ。それ以降はコトブキの皆さんに大変助けていただいて、辛いと感じた事は無いですね」

「そうでしたか……。ハルトさんは強い方なんですな」

「いやいや、全くです。ずっとみんなに助けて貰いながらここまでやってこれました。いつか受けた恩を返せるといいなと思いつながら」

こうして答えていると自分の情けない姿が前面に出てくる感じた。

でも実際に、私に出来るのは知識の提供ぐらい。それで何かの役に立てるならそれを頑張ろう。

モアさんに顔を向けて笑顔を向ける。ちよつと驚いた様子だったが、同じように笑顔で返してくれた。

「そちらの問題はイサオね。結局、あの震電はイサオの物なのでしょう?」

「一応、頂き物扱いになっています。どうせユーハングじゃ使わないし、性能は良いから

「使いなよ！　という」

「あの男がそんなにあっさりとお気に入りを渡すだなんて、貴方よほど好かれたのかしらね」

「分かりません。ただ一応お願いとして、現在のイジツの情勢やらを調べておくようにと言われましたが」

「帰ってくる気満々ね……」

「色々と約束事を取り付けて、一年間はユー・ハングに滞在してもらっている状態です。その間にイサオさんの興味を別の何かに切り替えないと、再び戦争が始まる可能性が……」

「どこもかしこも、爆弾だらけね」

心底嫌そうに溜息をつくカラランさん。本当にどうしよう。イジツも丸い説やら色々考えるが、実行に移すにはまだ時間がかかりすぎる。

脳味噌で響くイサオさんの笑い声。だが、イサオさんが現れなければイジツに来れなかったという事実。

そして私はイサオさんの事が嫌いではないという事。だからこそ、争う為にイジツに戻っては欲しくない。

目一杯、考えよう。何もせずに後悔するのだけは絶対に嫌だ。

怪盗団アカツキ その10

アジトに来て初めての朝。

前日に行われた再開と歓迎会でお酒をいただいた事もあり、いつも以上に意識が定まらない。相変わらず朝が弱い事が自覚できる。

無理矢理、身体だけはなんとか動かして身支度を整える。そうしなければレオナさんに顔向けが出来ない。

ゆつくりと時間をかけながらも、人にお見せできる姿になつたのではないだろうか。あとは脳味噌さんの覚醒待ち。

広間に顔を出して皆さんに挨拶を交わす。テーブルには既に色とりどりの食事が並べられ、とても良い匂いがする。

ポンポンと椅子を手で叩くりガルの姿が見え、そちらにお邪魔する事にする。

朝食を頂いたら直ぐにでも依頼を始めるべきだろう。少しでも早く情報収集が出来るのならそれに越した事はない。

少しずつ覚醒し始める脳味噌に気合を入れ、ロイグからの依頼を遂行すべく、作業に取り掛かりたい。

「ロイグのヤツが起きてこなければ、何も出来ないだろう？」

そう、取り掛かる予定であったのだが、待てど暮らせどロイグが起きてこないのである。

周囲の人達の様子を見る限り、どうやらこれが日常である様子が伺える。

ため息が漏れる広間でモアさんは諦めがついた様子で立ち上がりロイグを起こしに行く。

「やつとロイグの世話から解放されたわ」

一人だけ生き生きとしているリガルがそう語る。

しばらくの間、道中を共にしてきた二人ではあるが、その際もロイグは中々起きてこなかったようだ。

「宵っ張りなのよ。怪盗なんてやっていけば仕方ない事でしょうけど」

「タダのダメ人間じゃねえか」

「そんな事、今更でしよう？」

本人の居ぬ間に好き放題、言い合うアカツキの皆。

始めて出会った時のあの衝撃から追加されていくロイグの情報。

表情豊かで親しみやすい性格。整理整頓が苦手な朝がとて弱い。

完璧にも思えた存在がとて身近に感じられる要素が判明していく。だが、以前とし

て長身で綺麗な方である事には違いない。

……でも急ぎなのであればこういう時ぐらいは起きて欲しいな。ロイグの項目に自由の単語を追加しておこう。

「おはよう〜」

「もう！ ロイグったらそんな格好で広間に行かないでください！ ハルトさんもらっしやるんですよ！」

あれからしばらくの時間が経過した後、ようやく姿を現したロイグ。

モアさんが根気よく起こしたのだろう。少しだけ疲れた表情をしつつも、嬉しそうにしている姿に二人の信頼関係が伺える。

ただし、問題点が一つある。ロイグの今の姿だ。

アレを身に着けてない。アレ。

寝ぼけているロイグを無理矢理、着替えさせたのだから分らないが、上半身に身に着けておくべき物を身に着けていない。これが初期型か。

咄嗟に顔を横に向ける。視線の先にはカランさんがおり、こちらに視線を合わせてくる。

「別に顔を背ける必要なんてないわよ、あんな格好で出てくる方が悪いんだから」

「色々と道徳的な問題がありません」

「ユー・ハングから来る度胸はあるのにそういう所は慎重なのね」

独特の含み笑い。余った袖口。色白を超えて色素が薄いと表現しても通じてしまいうような程の透明感。

昨日の会話しかり、見た目の格好しかり、お医者さんなのだろう。

現時点で分かるのはこれぐらいだ。せめてマッドなお医者さんでない事を祈るほかない。

耳から伝わる騒ぎを聞いていれば未だロイグの恰好で揉めているようだ。

「別に見られて恥ずかしい体形してないし」

「そういう問題じゃありません！」

「時間の無駄よ、諦めなさい、モア」

「そんな事よりもお腹すいたのだ……」

全員揃ってから食事をする方式らしく、美味しそうな飯が目の前にして待ての状態で。

それを決めたのもロイグのようだ。自由過ぎるのも考えものなのだ。なこの賑やかな朝の景色を見て思う。

床に積まれていく書類と本の束。

レンジさんにご協力いただいたロイグの部屋から運び出してきた物だ。

現状でもかなりの数があるように見えるのだが、それでもロイグの部屋の隅に無造作に置かれていただけであり、本棚に置かれているのを持ちだしたら倍以上になるとの事。

これらを今から読み解いていく。夜明けの鷹や私の探し人の範囲を絞り込めるように。

一番手前にあつた本を手取る。一体何が書かれているのか、好奇心と不安に包まれながらもそつと本を開く。

『美味しいチャーシューの作り方』

頭に疑問が浮かぶ。チャーシュー、焼き豚、そうだよね、合っているよね。

一度、本を閉じて掠れた表紙を見つめる。僅かに読み取れた文字は間違いなく日本語。

書かれていた文字を意味する言葉は『家庭で作る美味しいラーメン』

そうか、君はイジツにラーメンを伝えにきたのか。海ならぬ穴を抜けて伝道師たちのように。

表紙は無骨にも題名だけが書かれている。文字の意味が分からなければ、ひらがな、

カタカナ、漢字で書かれた本も、よく分からないけど貴重そうな品に見えなくもない。

積まれている書籍を見て頭が痛くなる。専門用語が満載で書かれた物が見つかったらどうしようとか考えていたが、早々そんなものがある訳がない。

これは根気との戦いになりそうだ。

いくつかの山を崩し終えて分かった事がある。

書籍に関しては料理、日本文化に纏わる本が多いという事。これらを日本へ逆輸入出来れば資料として値がつかうのではないかと。

そして書類に関しては、これまたどこかの会社の内部情報が書かれていたり機密と書かれていた物も複数あるが、あくまで地球、日本では有効なのだろう。残念な事にイジツでは無用の物ばかりだ。

少しばかり溜息が漏れる。一番初めの書籍で分かつてはいたが、こうも関連性のない物ばかりかと。

逆にユーハンク、日本軍の資料が出てきたらそれはそれで大騒ぎになってしまうが、掠りもしないと中々厳しいものがある。

鑑定内容をロイグに提出する為、用意してもらった紙に内容を短文で書き込み、休憩も兼ねてゴロンと後ろに倒れ込む。

これは夢の島から情報を見つけ出すというよりも、ゴミか、それ以外かの選別作業かな。

それも大事な事だよね。モアさんからすれば、ようやく部屋が片付けられます！ ついで喜んでいたらいいから。

両手の指を絡ませて親指をクルクルと回したり擦らせて、精神を落ち着かせていると、不意に覆いかぶさるように影が差し込む。

「大丈夫なのだ？ お疲れのようなのだ！」

独特の口調に眼鏡を光らせて現れたベッグさん。レンズを通して見えるその瞳はトパーズに良く似た黄色。人懐こい笑顔と共に映す瞳は不思議と周りに希望を与えてくれる。

「なかなか希望の品が出てきませんよ」

「当たり前なのだ。ロイグが拾ってきたガラクタに希望を持つ方がおかしいのだ！」

与えられたと思っていた希望は、本人の口からバツサリと切り捨てられる。

しかし、よくぞここまで集めたものだと感じてしまう。

そこまでしてでもオタカラを探したいのだ。ロイグにとつての夢である夜明けの鷹のオタカラを。

覗き込むのに飽きたのか、ベッグさんが仕分けしておいた鑑定済みの書籍を手に取り

ページを捲っていく。

「何か面白そうなものはあったのだ？」

「料理本と告発文書が面白いと思えるならそこら中に」

「料理のレシピならモアに渡すといいのだ！ きつと美味しい物を作ってくれるのだ！」

確かに。今朝、頂いた朝食はとても美味しく、モアさん一人で作られたと聞いて驚いた。

テーブルに並べ慣れた彩のある食事。一時期ケチャップ丼にハマっていた己を恥じてしまう。あの丼は妙な中毒性があり、唐揚げと一緒に食べると更に美味しいのだ。

「ハールートー」

「なんだか嫌な予感がして聞き返したくないですけど、何ですか」

「震電を弄らせて欲しいのだー！」

「それについて一つ質問してもいいですか？」

「なんなのだ？ 言ってみるといいのだ」

「ベッグさんは皆さんの機体の整備を担当されているのですか？」

「勿論なのだ！ ベッグはアジトにあるみんなの機体を整備して改造まで施せる整備士なのだー！」

実際にロイグ、リガルの機体は不備無くここまで帰って来れたのだ。整備の技術力は既に証明されている。

後は単純に機械弄りが好きでたまらないのだろう。そして新しい物好き。

ナツオさんから託されたこの手順書を渡しても大丈夫なのではないか？

「ベッグさん、整備手順書とかは読まれるタイプですか？」

「読まないのだ！ ベッグは見れば分かるからちよちよいのちよいなのだ！」

「ではこの話は無かったという事で」

身体を起こして再び作業に戻る。

先程までの推測はちよつとした気の迷いだ。習うより慣れる派に渡しても意味のない物だもんね。

さあ次は何の料理本が出てくるのやら。

「ま、待つのだ！」

背中にも衝撃が走る。ベッグさんが器用に後ろからしがみついできて、首回りには腕を、腰部分には足をまわし固定する。身動きが取れない。

「ちゃんと読むのだ！ 震電に関する資料なのだ!？」

「ただの資料じゃありません。ラハマでお世話になっている方の注釈が記載されているとても大切な手順書です」

「了解したのだ！ きちんと読むのだ！ そうしたら震電に触らせてくれるのだ？」
「勿論です。読んでいただいて理解が出来たのであれば、ベツグさんに是非とも震電の整備をお願いしたいのです」

ほあああ、と感激しているような叫びが背中から聞こえる。

そのままの体勢でベツグさんを背負ったまま四つ足で歩き、持参したバッグの中に手を突っ込む。

背中を通じて精神が削られそうになるが、ロイグ、リガルの猛攻を退けた今の私ならば耐えられる。

「ありましたよ、ベツグさん。これを読んで内容を把握出来ましたら、また呼んでください」

「ハルト！ ありがとうなのだ！ 直ぐに読むから待つて欲しいのだ！」

「私はここで作業の続きをしていますから、慌てずゆっくりと読んでください」

気合を入れて再び作業を再開させなければ。

ベツグさんは私の近くで寝そべり、実に楽し気に手順書に目を通してている。時折、あの瞳がキラキラと輝いてとても綺麗だ。

今日の目標はこの山を終わらせる事。ペース配分を覚えれば明日以降は素早く処理できるだろう。

あれから数時間後、外は日が暮れ始めている。

身体を軽く動かすと所々で骨の鳴る音が聞こえる。同じ体勢で長時間、調べ物をしていたせいであろう。

そういえばベッグさんはどうしたのだろう。いたはずの場所に視線を向けるとうつ伏せ状態のままピクリとも動かないベッグさんの姿が見えた。

「ベッグさん、今日はもうおしまいですよ。起きてください」

「うう……。久しぶりに大量の文字を読んだのだ」

「それはお疲れ様。どう？ 覚えられた？」

「勿論なのだ！ これをまとめた人は機体の愛情が深い人なのだ！ 尊敬するのだ！」

ナツオさんは細かな部分も一切手を抜くことなく整備を行う人だ。

自身の技術力に奢る事もなく、機体と正面から向かい合う姿勢。

まさにプロである。勿論、手順書を書いてくれたヒーじいも。

「それじゃ、行こうか？」

「どこに行くのだ？」

「勿論、震電の所にだよ」

キョトンとしていた表情をしていたが、理解をしたのか喜色满面へと変化する。

頑張った後はご褒美が必要だと思ふんだ。私がそうだから。

「ハルト！ 本当に好きに触つてもいいのだ!？」

「いいですよ。お願いした通り手順書を読んでもくれましたから、ベツグさんになら任せでも大丈夫だと信じます」

「ありがとうなのだ！ 早速調べさせてもらおうのだ!？」

これだけ喜んでくれると許可した甲斐もあるというもの。

機体周辺をちょよこまかと走り回り、触れている姿が、ベツグさんの少し小さめの身長と服装がかみ合いとても可愛らしい。

操縦席に乗り込もうとびよんびよん跳ねるが、震電の特徴的な高さもあり、届かない。

近くに寄り、一言断りを入れてから腰部分を掴み、持ち上げる。

機体部分を掴み、這うように搭乗する。しばらくすると操縦席からは歓喜の溜息が聞こえた。ここまで自身の喜びを正直に表現をされると、こちらまで嬉しくなる。

現状では唯一の稼働状態にある震電。だが執事さんの話によれば、イケスカ動乱のドサクサに紛れて空賊共が資料を強奪。

その内、貴重ではあるが金を積めば買える機体になるでしょう。寂し気というよりも呆れた声色でそう教えてくれた事を思い出す。

それでも、この震電は私にとって思い出を共にする唯一の相棒だ。

怪盗団アカツキ その11

目の前にある山は、相変わらずその存在感を示している。その山を一つずつ鑑定をする為に作業をこなしてゆく。

昨日まで持ち合わせていた理想は既に置いてきた。目の前にある物は私の生まれ故郷の物だ。年代はバラバラであるがご先祖様たちの魂を感じとれる。

何故、そう断言できるのか。本日の鑑定品は浮世絵とか書道史に関する内容の物ばかり出てくるからだ。

久しぶりに漢字とカタカナ表記だけの物を見つけ、これは！ という期待をしているたら、タコと女性の絡み合いよ。鉄棒ぬらぬらジジイめ！ まじ卍。

飛行船でザラさんとお喋りした際の会話に、確かウキヲエという名前に変化してイジツで流行っている事、ご友人の方が画家だという話を思い出す。

これらをロイグにお願いをして売ってもらえないだろうか。少しでも参考になるのであればと思うが、ふと考える。

元はユーハンク由来である事は確かだが、既にイジツではウキヲエと名前を変えて一つのジャンルになっている。好意で渡すとしても無粋な気もしてきた。しかもこれ、春

画だし。

「腕組んで何唸ってんだ？」

不思議そうにこちらを見つめながら、話しかけてきてくれたのはレンジさんだ。

ロイグと変わらないその長身、動きやすさを重視しているのだろうか、フィットさせた服装からは身体の線がよく分かる。ロイグとはまた別のカッコいいお姉さんだ。

その瞳は赤色を灯し、ルビーの如く情熱を感じさせる。

「ご先祖様たちのねじ曲がった情熱と魂について思う所がありました」

「なんじゃそりや？」

仕分け済みの中からタコさんの春画を取り出し、レンジさんに渡す。

その絵を見て呆れたような表情をされる。

「ユーハングの人間は何を考えているんだ？」

「分かりません。およそ二百年前の人間が描いた物ですから」

「そりや分からんわ」

二人して溜息を漏らす。

現代日本であれば、ジャンルとして受け入れられているであろうシチュエーションの一つ。

では二百年前の日本と世界ではこの作品はどのように受け止められたのだろうか。

「少なくとも日本は受け入れてしまうのだろうか。二百年後の私ですら作品を知る事が出来ているのだから。」

物ですら擬人化させて愛でるご先祖様たち。

「しかし、こうして中身が分かる様になってくると、ますますユーハングの事がよく分かるん」

「イジツの世界においてのユーハングも当初は疑問が浮かぶことが多かったですが、こうして鑑定作業をしていると自分の世界がよく分からなくなってきました」

「ユーハングから来た人間ですら分からないなら、イジツの人間がユーハングについて分からんのも仕方ないか」

「でも、ウキヲエの書籍に関しては良い値段で売れると思いますよ。イジツで流行しているようですし」

「日本由来の浮世絵が流行り、感化され、自ら作品を作り上げようとしている人がいるのだから。」

「浮世絵の描き方は書かれていないけど、イジツにはない作品をみてひらめきが浮かぶかもしれないしね。」

「金かあ……」

「何か思うところがありませんか？」

「アタシの弟の話はロイグ達からは聞いたらどろ？」

「アタルさんですよ。一悶着あつて命の危機であつたけれど、心臓手術を行えば助かるとか？」

「大分端折られた気がするが、そんなところだ」

弟のアタルさんは、誰かさんの次期後継者の為に使われていった。姉の足かせにはなりたくないという想いで。

それをレンジさんが必死に金策をして取り戻そうとしていたところで、登場するのが偽アカツキならぬロイグの事を知るラムダと呼ばれる人。

そして誰かさんという名のスメラギ卿。イジツの貴族制度はどうなっているのだろうか、今度アレンに聞いてみれば教えてもらえるかな。

問題は、この二人に関しての情報があつたから分からない。スメラギ卿に至っては石油採掘で財を成したという以外は不明。

この調べ物の山で何かが引つかかるのだろうか。ラムダについてはロイグに考えがあるようだけど。

「アタルを買い戻す為に貯めておいた金があつたからな。それをこの間、ダグのヤツに預けてきたから当分は間に合はずだが……」

「確か門番をやられていた方でしたよね。今度は入院費やら諸々とかかると？」

「そういうことだ。いくらあつても直ぐに手元から消えてくなく」

自虐のように言う台詞も、微笑みながら言われては辛そうだななんて思えませんが、レンジさん。

しかし、やはりお金だ。どこの世界でも重要であり、お金が用意できなければ思うように行動が出来ない。

その点で私は運が良いとしか言いようがない。依頼という名目で仕事を頂いてはいるが、マダムに養ってもらっている状態と言つても間違いではないのだから。

……お金で思い出した。ロイグの言葉通りであるならば、確かこのアジトは元はユーハングの施設だと。

気晴らしも兼ねてオタカラ探しでもしてみようか。余計なお節介だろうけれど、在るかもしれないオタカラでレンジさんとアタルさんが再び出会える日が近まるのであれば。

そうと決まれば動くまで。地面に根を生やしたお尻を上げてレンジさんを誘う。

「レンジさん。オタカラ探し、しませんか？」

「……はあ？」

アジトの駐機場。バッグさんが今日も楽し気に震電を弄りまわしている姿が見れる。

後部の装甲が一部外され、エンジンが剥き出しの状態になっている。信じてるからね、ベッグさん。

「それで！ それで！ このアジトにオタカラが眠っているって本当なの!？」

「地下室は見た事がないというロイグの証言が正しければ、残っている可能性があまりす」

探索許可をもらう為に、家主であるロイグに事情を話したところ、目を輝かせて食いついて来た。

「まさかこんな身近にオタカラが残されている可能性があるだなんて！ トーダイなんとやらってユーハングの言葉があったわよね！」

「灯台下暗しですね。まだ確定ではないですけど」

「なあハルト」

「なんですか？ レンジさん」

少し厳しめの表情でこちらを見つめてくる。レンジさんの性格だ、きつと。

「さっきの話でアタシに同情しているのか？」

「いえ、全然、まったく」

「そこは真剣な顔つきに変化させて、違います……とか言い返すところだろ!？」

「そうは言われますが、何が出てくるのかまったく分からないのです。前回は偶然にも

資料とお酒が出てきましたけど」

「あの話の流れだと貸し借りの話に持っていくと思うだろ!？」

「レンジさんに貸せるほどお金を持っていたら、私は私の家族を探す為に使っていますよ」

「深読みすぎたアタシがバカだった……」

自身に呆れたのか、肩をがっくりと落とす。

お金を差し上げられる程、所持していない事も事実。

ですが、お酒が出てきたら私の分は差し上げようと思っっているのはまだ秘密。飲めないし、相場も分からないし、何よりまだ見つかったでもないからね。

ラハマ郊外にあったユーハンング工廠跡地以来の隠し部屋探し。いわゆるところのユーハンング式へそくり探し。

前回は事前準備不足しており、リリコさんとケイトのおみ足をお借りして行った歩幅計測。

後日、変態とリリコさんに罵られた未来があったような気がしなくもないが、今回は予め計測器具をロイグにお借りする事ができた。

「駐機場の広さもあり、大変地味で時間もかかる作業ですからお二人は何処かに腰掛けながらお待ちください」

「ハイハイ！ 私に手伝える事はありますかっ！」

「ありません。お待ちください」

口を尖らせて猛烈なブーイングをしてくるロイグを横目に作業開始。

これで再び隠し部屋を当てた場合、他にも多数あるというユーハンクの施設でも有効な手法になる可能性がある。

アカツキの皆さんになら手法を知られても問題ないと思いたいが、念の為に。

たまに見つけだして掘り出し物という付加価値を付けなければ相場はガタ落ちする一方だろうし。

何よりもユーハンクの置き土産なんていう素敵な言葉が無くなってしまふ可能性があるのは寂しい。

駐機場を歩き回り、壁と床に触れ、異常がないかを調べるが特に問題はなさそうである。

ロイグはする事がないと分かるとベツグさんと共に震電の観察に移行。
何故かレンジさんは元の位置から動く事なく私を観察している。

この数時間、お二人から見た私は不審者と呼ばれても仕方のない動きをしていただろう。ベツグさんは除く。

座ったり立ち上がったたり、壁を叩いては床の繋ぎ目に指を沿らせる。

残念な事にこの広い駐機場にはそれらしき隠し場所は無いようだ。

そうとなれば可能性が残されているのは、あの広間しかない。

だが、今の広間は本来置かれている物から鑑定品まで様々な物で溢れている。

生活する分には問題のない広さは確保されているが、物を移動させながらの作業となる。これはロイグに聞いてから行うべきだろう。

「ロイグ、質問をしてもいいですか？」

「なにに？」

「残念ながら駐機場にオタカラは無さそうです。残された場所は広間なのですが、物を移動させてもらわないと調べるのは難しいかと思えますが」

「そんなのレンジに頼めばちよちよいと移動させてくれるわよ！」

「アタシは運び屋か何かかよ!? ロイグもちったあ手伝え！」

「せっかく立派な体格しているんだから、こういう時に使わないとソンソン！」

「似たようなタツパのヤツに言われたくねえよ！」

楽し気なロイグを横目に溜息混じりの呼吸をするレンジさん。

ロイグの中では既に調査を実行するのは決定済みの様子。

家主から許可が下りるのであれば、こちらも頑張らねば。

駐機場場に比べれば僅かな広さ。夕食前には終わらせないとモアさんに怒られてしま
いそうだ。

頭の中で物事の整理をしていたら、いつもの場所に誰かの手が置かれる。

「あんま気にすんなって。アタシ達からすればいつもの事だ」

「なんだか大事になってしまい申し訳」

「それを言ったらアタシが変な事を言い出したせいだろうか？」

「そんな事はありませんよ！　むしろ思い出させて頂いたおかげで可能性が広がりましたから！」

「それじゃ、お互い様ってことでな」

笑みを浮かべてポンポンと優しく叩かれる。その優しさはアタルさんのお姉さんをして
いる時のレンジさんなのだろう。

それを私に分け与えてくれた事は素直に嬉しい。それがやる気に繋がるのだから自
分も大概だと思ふ。

「その時はよろしくお願いします」

「おう、任せておきな！」

広間で物を移動させながらの調査。

そして判明した箇所が一つ。その場所の前に立つと再び合間見るペナントと傍にある壁の一部。

この場所が正しければ、前回は床で、今回はどうやら壁に細工がされている模様。

ユーハング式へそくり探しの詳細を思い出しながら適切な壁を見つけ出して触れてみる。

軽く叩くと今までとは違う音が返ってくる。これはもしかすると当たりを引いたのでは。

その場所をそつと押すと、年代を感じさせず、すんなりと押し込まれている壁。聞こえてくる何かの軋むような音と共に迫り上るのは。

「ああー！ ツツキーの身長がどんどん伸びてくー！」

「いやいや、床が迫りあが……っておい！ 本当に隠し部屋なんてあったのかよ!？」

丁度、ツキノワグマのツツキーが置かれている床に僅かな隙間が出来る。

急ぎ色々な物を移動させ、ツツキーを無事保護する。

床を持ち上げて目の前に現れたのは下りの階段。当たりかどうかは中を覗かなければ分からない。ぬか喜びで終わる可能性もある。

ドタバタ騒ぎのせいで広間に集まるアカツキの皆さん。

「随分と冷たい空気が流れてくるな」

「食材保管庫にするのにピッタリの場所ですね」

「流石モア！ ついでにお酒も冷やせて便利そうね！」

「ここに置いたら調理酒として使っちゃいますよ？」

二人のやりとりを尻目に、レンジさんと二人で斜め階段を下る。

目の前にあるのはあの時と同じ扉。案の定、鍵が掛かっているようでレンジさんが何度かドアノブを動かすが、うんともすんとも言わず。

「ロイグ！ この扉、鍵が掛かってやがる！ 開けられるか？」

「任せて！ これでも私は怪盗よ！ カギの一つや二つお手の物よ！」

私と入れ替わる様にしてロイグは鍵開けの為に作業を始める。

「ハルト、ここには何が眠っているのかしら？」

「経験と希望的観測でいえば、当時イジツにいたユーハンクが書き残した資料と嗜好品ですかね」

「お酒なんて出てきても、私は飲めないわ」

「私だってそこまで飲まないわよ。その二人がのんだくれなだけよ」

辺りを見回すがベッグさんの姿だけ見当たらない。

駐機場のある方向に耳を澄ませると鉄の叩く音が聞こえる。隠し部屋よりも震電の興味が上回る様子だ。大丈夫だよ、その音。

その時、鍵の解錠音が聞こえて視線をそちらへと戻す。

「開いたわよ！」

「流石、怪盗を名乗るだけの事はありますね、ロイグ」

「そうでしょ！ ハルトにも怪盗ロイグを見せてあげないとね！」

「んで、誰が最初に入るんだ？」

「もちろん！ 見つけたハルトよ！」

「この家主さんでもいい気がします。私で良いのでしたらその権利はレンジさんに譲渡します」

「アタシかよ！ いやまあ発見者がそう言うんならいいけどさ」

ロイグと場所を入れ替わり、ドアノブを回して押すと軋み音と共に開かれていく扉。

ここからでも分かる。ラハマ近郊で見たあの隠し部屋よりも一回り大きな部屋。

その内部には辺りを灯す為の小型の照明が上からぶら下がり、棚と中身が入っていると思われる箱が幾つも並んでいる。

それとはまた別の頑丈そうな木箱が床に直接置かれている。

これはもしかして、大当たりなのでは。

怪盗団アカツキ その12

先に侵入したレンジさんが手前にあつた箱を一つ手に取り持ち出してきた。

それを開ける為に箱を調べてみると、どうやら組手で接合して固定をしている模様。

釘を使う程の事でもないのか、あるいは釘すら使えないほど資源が不足していたのか。それを知る由はない。

開かれた箱から出てきた物を見て一安心する。最近をよく目にするユーハングの置き土産が出てきたからだ。

「これって、ユーハング酒か!？」

「瓶の形や琥珀色の液体が一致していますので間違いないかと」

「アジトにこんな場所があるなんて! ハルトをここまで呼んで正解だったわ!」

「本来の依頼とは別件で喜ばれると複雑ですけどね。あと離れてください、幸せになつてしまうので」

「いいじゃない! 幸せは分かち合うように出来ているのよ!」

「ロイグは貴重なお酒が飲める事で幸せなだけなのでは……」

「それは言いつこナシよ! モア!」

驚く者、はしやく者、お酒に興味はない人達と様々。

「似たような箱ならまだ奥にあるんだが、何本眠っているんだ？ コレ？」

「中身が同じであれば、市場で一斉に売り出したら価格が下落するぐらいはあるかと」

「マジかよ!？」

驚きの様子で隠し部屋を見つめるレンジさん。

ラハマで見つけた箱の数よりも遙かに多い。勿論、あの中にはお酒以外の物もあるの
だろうが、それでも相当の数が手元にある事になる。

本日もまた宴会騒ぎになるのだろう。だが本命はこれではない。存在していても困
る物、存在しなくても困る物である、イジツに現れた日本軍の資料だ。

私の頭に顎を乗せているロイグをモアさんに引き取り願いを届け、無事受理される。
階段を下り、隠し部屋に入り周囲を探索する。

外から見えたとおり、レンジさんが持ち出してくれた箱が複数ある。それよりも大き
い箱が無造作に床に置かれている。

私の目の前に映るのは何も置かれていない机。近づき、机の表面を指で拭くと埃が付
き、線が出来上がる。

よく見ると引き出しが取り付けられているのが分かる。埃が舞うのを最小限に止め
る為にゆつくりと引く。

鍵などの抵抗は無く、私の意図通りに開かれていく。そして現れた物は一つに纏められた書類。

取り出して表紙を見つめる。赤色に染められた表紙に黒字で書かれている「極秘」の文字。

家族を探しに穴を通じてイジツへ。紆余曲折があつて辿り着いたのが機密文書。

ラハマ近郊で資料を見つけた時のアレンはこのような高揚感と緊張感を得ていたのだろうか。

私は緊張感の方が勝り、手が震える。他人に全て任せて目を伏せたくなる衝動も。

深呼吸をして落ち着きを取り戻そうとするが、何十年ぶりに開かれた部屋で行う動作では無かった。

埃で思いつきり咽て呼吸困難に陥る。逃げるように一旦部屋から出る事にした。

「コレはユーハンクが書き残していった資料なのね？」

「はい。表紙の文字が正しければ、五段階中の三段階に値する機密文書が書かれていますか」と

「それってどのくらい機密なのかしら」

手帳を取り出して確認をする。

「ひーじ……曾祖父から教えて貰った内容ですと、主に建物や外邦図と呼ばれる地図に
関する事みたいですよ」

「地図？ そんなものまで書かれているの？」

テーブルに置かれた機密文書にみんなの視線が注がれる。

「そういう事で家主さん、どうぞ」

「私が捲るの!？」

「うだうだ言つてないで早く捲りなさい！ このままにしていたら始まらないでしょう
が！」

「はい。薄いから、一度最後まで捲るからその時に意見を聞かせて頂戴」

周りにいるみんなに一言伝え、ロイグの手によつて封印が解かれていく機密文書。

出来れば重たい内容で無い事を祈りたい。この際、海軍から肉じゃがのレシピを入手
したとかでもいいから。

パラパラと捲られていく極秘文書。ひーじいに負けず劣らず達筆な文字で書かれて
いる。

詳細内容は後で見せてもらうとして、目に映つたのはイジツの全体図。

一部の地域に関しては拡大図が描かれており、ラハマ・イケスカと書かれた文字。

この地図が描かれた時点で馴染み深い地名が付けられている。

ユーハンクが命名したのか、その前から付けられていたのかは分からないが、そつと閉じられる機密文書。ロイグの言う通り、書類そのものは薄いが中身が濃すぎる。

「と、言う事で専門家のハルト先生のご意見どーぞ！」

「ヤベエ物を見つけてしもうた」

誰に触れる訳でもなく、両手が宙を泳ぎ、口元はガタガタと音を立てんばかりに震えている。

その手を両側にいたカラランさんとモアさんが握りしめてくれた。

「はいはい、落ち着きなさい」

「大丈夫ですか？ ハルトさん」

「ダメかもしれませんが。目に見えない衝動に駆られていて動悸が」

「そんな事を言う余裕があるなら平気よ」

そう言いつつも背中を擦つてくれるカラランさん。紫色をベースとした瞳に赤色が強調されている。目が合うと少しづつ昂った意識が落ちついていくのが実感できる。バイオレットサファイアのような美しい彩。

「大丈夫ですからね、私たちが付いていますよ。ハルトさん」

握った手を優しく撫でて落ち着かせてくれるモアさん。琥珀のような黄金色をした

瞳。その瞳は誰よりも優しく大きな愛情を秘めている。

「約一名、こんな騒ぎでも顔を出さないヤツがいるけどな」

「ベッグだったら！ こんな時まで機体弄りをしているのね！」

「それはそうよ。ベッグにとつてのオタカラはお酒や資料よりも珍しい機体でしょ？
既に見つけたようなものよ」

カランさんのご指導の元、深呼吸を繰り返して徐々に落ち着かせる。

モアさんまで一緒になって深呼吸をしている姿を見て自然と笑みが浮かぶ。荒波が
ようやく収まったようだ。

機密文書がこちらの視点からみて正しく上下になるように動かされる。

「さっ！ ここから先はハルトの仕事よ！ 是非とも内容を解いてみて頂戴！」

「先程とは違い、随分と楽しそうですね、ロイグ」

「だって！ 考えてみたら自分のアジトにユーハングの資料が残されていたのよ！ こ
れも一つのロマンじゃない！」

「また始まったわよ、ロイグの癖が」

呆れ返るリガルに同意するアカツキの皆さん。

ロマン。確かにロマンの塊のような物が出てきてしまった。

これが良い方向に傾くのか、悪い方向へと進んでしまうのかは分からない。

立ち止まったままではいられない。先に進む為には歩みを止めてはならないのだ。

夕食を挟みつつも作業は続けられていく。

ロイグから託された機密文書。冒頭に書かれていた文章は、イジツにおける日本軍の工廠建築予定地。

地図と照らし合わせて読むと、ラハマ、インノ、イツルマ等の今でも町として機能している場所に一つずつ。

それ以外にも訓練地として挙げられている幾つかの個所。このアジトもその内の一つだ。

そしてオフコウ山も。その近くにも何かを示す記号が書かれている。記号の意味については候補としか書かれていない。

ロイグにも分かる様に、解明できた記号を意味する言葉を紙に書き写す。

書道に関する書籍が出てきてよかった。これが無ければミミズ文字にしか見えない文字が幾つもあったから。

今にも爆発しそうな脳味噌を一度休ませよう。両膝に腕を置いて顔を下に向ける。

視線の横から伸びてくる腕、その手にはティーカップに注がれた紅茶が見える。

顔を上げてソーサーごと受け取ると、運んできてくれた人物が横に座ってくる。

作業していた物を一旦テーブルから全て移動させる。零れたら大変な事になるし、何よりも無粋に感じたから。

問われる事も無く、問い返す事もせず、一口目を頂く。アレシマで頂いたアールグレイの味がする。

「なんだか懐かしさすら感じられますね、この味」

「出会ってからそれほど月日は経過してはいないわよ」

「そうでしたか。最近は時間の進みが早く感じ取れて頭の整理が追いつかない状態ですよ、リガルさん」

「貴方のソレ、もはや癖みたいなものね」

「中々どうして、名前で呼び合うのは慣れていないもので」

照れるように頬を掻く。

「それで、何か分かったのかしら？」

「良い事も悪い事も」

「なら良い事から喋りなさい。それを聞いてから悪い方を聞くか判断するから」

「へーい」

良い事。

私の家族が眠っている墓がありそうな場所が二か所にまで絞り込めた事。

その内の一つはやはり調べべきか、オフコウ山が含まれてた。

つまり、私のイジツ探索もこの二か所を調べれば終わりを迎えられる可能性が出てきたという事。

「オフコウ山のすぐ側、確かソウウン峡谷だったはずよ。でも飛行船で下見をした時にはそれらしいものは見当たらなかったはずだけど？」

「もしかしたら、峡谷の底まで下りて横穴が作られているかもしれません」

「もう一つの方は……随分と遠いわね」

「近い町がイケスカですからね、それに谷にあるというのは同じみたいです」

「場所が絞られて良い事なはずなのに、向かうにはどちらも苦戦しそうな場所ね」

「ここから一番近いオフコウ山。そこから谷底へと下りるにはどうすればよいのだろうか。」

そして問題は下った後。残念な事にここは拡大図が無い。つまりは直接探さないと分からない可能性が高い。

「それで悪い事は何なの？」

「聞きます？ 人それぞれの感じ方にもよりますが」

「ここまで来たら聞くわ。良い事でコレだもの、悪い事で何なのか気になるわ」

悪い事。

それは怪盗団アカツキにとっては朗報なはずの夜明けの鷹に関するオタカラの話。

そして私をイジツへと差し向けたイサオさんと、イケスカに居る執事さんに関するお話でもある。

「……ハルト、それは本当なの？」

「あくまで私個人の仮説です。確定ではありません。むしろ間違っていて欲しい話です」

「その仮説が当たっていたとしたらイサオ達と何の関係があるの？」

「オタカラが眠る場所とイケスカにあるイサオタワーの場所がどうしても被るんです」

虹の麓にあるとされる夜明けの鷹のアジト、そしてオタカラ。

虹という言葉が文字通りの意味を指しているのなら、水が豊富にあり太陽の光を遮らない場所。イケスカの地でオタカラを巡り二つの伝説が対峙したと噂される場所。どうしたって考えてしまう。

「その話を聞くのは明日ね。既にみんな眠っちゃったわよ」

「もうそんな時間でしたか。つてりガルさんはどうして起きていらして？」

「途中で起きたのよ。そうしたら未だに起きている悪い子を見つけてね。こうして来たわけ」

全く気が付かなかった。それ程、機密文書の解読に集中していたのか。

はたまた悪い事に関して余計な推測をし過ぎたのだろうか。ダークサイドからの魔の手に負けて深い底まで意識が落ちていたのか。

悪い方向に思考が向くと中々抜け出せないのは何故だろうか。

「それよりハルト、何か他の楽しい話はないかしら？」

「寝なくていいんですか？ お肌が悪いとかなんとか」

「眠気が吹き飛ぶような事を教えてくれたのは誰かしら？」

「あい、すみません」

リガルさんを楽しませそうな話。頭に浮かぶのは何時だって青い海と白い鳥たちの姿である。

「リガルさん、前に差しあげた海の写真って覚えてます？」

「もちろんよ」

テーブルに置かれるぼやけた一枚の写真。

肌身離さずに持ち歩いているのだろうか。

そうだとしたら差しあげた身としても嬉しい。

「よく持ち歩いてましたね」

「私にとつてこの写真に映る光景は、いままでに美しいと感じたモノの中でも一番と私の中の本能が訴えかけてくるのよ」

「でしたら、その光景に動きと音が加わったらどうなりますかね？」

「……まさか!？」

イケスカ以来、久しぶりに操作をするスマホ君。

あの写真だって元は動画として撮影した物を無理矢理カメラで収めた物なのだから。

再生するファイルを選択してテーブルの上に三角立て。

「小さな画面ですみません。ですがリガルさんにはお見せしておくべきかと思いましたが」

返事が来ない。視線を向けると緊張した面持ちで姿勢正しく待ち構えている姿が見える。

画面をタップして動画が再生される。

ひーじいと呼ばれた際に選んだ移動手段と、何の気なしに撮影をしたこの動画が、イジツで最も有効的に使われる事になろうとは。

ここから先は、言葉にするのは野暮というものだろう。

怪盗団アカツキ その13

「さあハルト。昨日リガルに話していたオタカラについて教えて頂戴」

「もう一度だけ念を入れておきます。私個人の仮説ですからね？ 私心入り混じりですよ？」

「分かっているわ、それでも聞いておきたいの。私たちが見つけ出した航空日誌とハルトが見つけてくれた機密文書。それらを基に立てた推論をね！」

アカツキの皆さんが一同に集まった広間。

朝食を食べ終わり、私がロイグから依頼された内容の調査結果を報告する。

そして今日で私が怪盗団アカツキと共にする最後の日なのだろう。

呼吸を整えて、報告を始める。

まず最初に、航空日誌によつて得た情報は虹の麓に夜明けの鷹のアジトが存在し、そこに隠されたオタカラが眠っているという事。

サクラと呼ばれる記者から得た情報に飽くまで噂話程度の精度ではあるが、ムラクモ空賊団と夜明けの鷹がオタカラを巡つて対立していたという事。

そのオタカラはイケスカの穴から出現した何か。未知なる戦闘機との噂もあるが信

憑性は分からない。

ここまですを確認を踏まえて伝える。問題はここから先、オタカラという欲望に取りつかれた可能性がある人達のお話。

噂をそのまま事実として考えるのであれば、二つの伝説はイケスカに穴が発生した事を契機に姿を消す。

穴が出現した事は間違いない。このアジトから現れた機密文書にはラハマとイケスカに出現した穴から日本軍が出入りしていたとされる記号が記録されていたのだから。

オタカラは当時のイジツの人達では手の届かない所、湖の底に沈んで引き上げる事が困難である可能性と、出現した穴に魅入られて飛び込んで行った可能性もある。イサオさんのような人が居ればだけど。

現在のイケスカには湖に立派な橋が掛けられており、ユーリア議員と共に訪れたばかりのイサオタワーなる建物が鎮座している。

その建物の存在理由がオタカラを引き上げる為に作られた物だとしたら？

誰の手にも渡る事無く、引き上げる術も無く、現在も湖の底で眠っているとしたら？

虹の麓に夜明けの鷹のアジトがあるという。

イジツの人達は虹の存在を把握しており、雨が降ったあとに現れるという事までは知

識として知っているようだ。

ただし、実際に見た事がある人はいないともされている。

もし、日中のイケスカの地で二つの伝説が争いを行っていた時、水面を低空飛行で飛び、風圧によって水しぶきによって虹が発生していたら？

イサオさんと執事さん。このどちらかが夜明けの鷹の関係者か、或いは本人か。

風貌から推測すれば可能性として執事さんが上回る。ではイサオさんがあの位置にいるのは何故か。

ユーリア議員曰く、妙な運と財力だけで世界を渡っている世界で一番ズル賢いタイプ。

もし、この妙な運と財力が他者から提供されていた物だとしたら、イサオさん本人が持ち合わせている実力とカリスマが合わさった結果だとしたならば。

スメラギ卿。彼にイサオさんは見出され、何かかしらの取引をしていた執事さんと、アタルさんとラムダの様な関係になったのであろうか。

だが、そうすると執事さんの立ち位置が分からなくなる。夜明けの鷹の関係者だとしたら、引き上げた後のオタカラはスメラギ卿の元に行く事になってしまう。

それを夜明けの鷹が許すのか、ムラクモ空賊団は納得するのか。そんな訳がない。

二つの伝説が争い、手に入れる事が出来なかつた物を、金にモノを言わせたヤツに奪

われてたまるものか。

イサオさんを駆り立てるモノは野心と欲望。スメラギ卿の力を受け入れる事で自分の町を守る為、廃墟となった他の町の様にならないように、思い描いた明日という未来に向けて。

執事さんはあの時代に手に入れる事が出来なかつたオタカラを、仲間達や好敵手の夢を取り戻す為。

二人は手を組み、イジツに歯向かう事を選んだのか。

「……イサオさんの近くに居過ぎたせいなのか、怪盗団アカツキの熱にあてられてしまったのかは分かりません。機密文書を解読してからは頭の中はずっとこのような状態です」

この話の最も恐ろしい所がある。

「そして私は二人と面識があり、執事さんであれば連絡を取る事で事実か否かを確認出来るてしまうところです」

アジトに置かれた黒電話を見つめる。連絡先は聞いている。受話器を取り上げ、ダイヤルを回せば全てが分かるかもしれない。

それが良い事なのか、悪い事なのか、分からない。誰が判断をして誰が受け入れるの

か。

「でも、その方法は取らない方が良いと心が訴えています」

「……どうして？」

そう問いかけてくるロイグを見つめて、本心を伝える。

「当人から答えを聞いたオタカラに価値はありますか？ 航空日誌を集める事から始まったこの話を、怪盗団アカツキの活躍を、そんな無粋な行為で無駄にしたくないじゃないですか」

恥ずかしいけれど、想いは言葉にしなければ伝わらないからね。

はい、真面目なお話は終了！

執事さんとはともかくとして、イサオさんがそこまで考えているかと問われたら、否つて答えるよ。

本能特化型すぎるのだ、あのオツサンは。自身の欲望の為にシヨウトという町を吹っ飛ばしているし、ラハマにだって爆撃を仕掛けた人だ。

誰かに喋る事でようやく頭がスツキリとしてきた。やはり魔の手からの誘いは恐ろしい。貯め込むとあり得ないだろうという事さえ事実のように思い込んでしまう。

唐突として誰かの手が、私のいつもの定位置に置かれ、粗々しく動かされる。

それは一度だけでは済まされず。二度、三度と続き、その人の性格が手の動きを通じ

て伝わる。

上目遣いで辺りを見れば、アカツキの皆さんの笑顔と笑い声。時には行動で示す方が伝わる事もあるようだ。

「よし！ それじゃみんな！ 行くわよ！」

「一番渋っていた人に言われてもねえ、でもいいわ、お金持ちのお祖父様に会いに行こうとした事は評価してあげる」

「あの話を聞いた後でもブレないのな、この尻軽女」

「うるさいわね、この脳筋女。お金は悪くないのよ、いつだって悪いのは使う側の人間なのだから」

「ならリガルは悪女なのだ！ 悪い女なーのーだー！」

「今更よ、ベツグ」

「あはは……」

怪盗団アカツキの次の行動が決まった。

マヨナカ探偵団というチビツ子三人が組んだ隊があり、本来はその子たちの依頼主に会わなければならなかったのだが、ロイグが駄々をコネて引き延ばしていたのだ。

依頼主はロイグの知り合い、もとい育ての親ともいえる祖父だという事。余り会いた

くないそうだ。

ラムダやスメラギ卿よりも先手を打つ為にも、チビツ子たちに依頼をしてまでロイグを呼び寄せた祖父に会わなくてはならないと。

「向かわれる事については何も問いませんが、なぜ私まで震電に搭乗してみなさんに付いて行く事になったのでしょうか？」

「素直に会いに行くのも悔しいじゃない！ ハルトが付いてきてくれるなら、おじいちゃんだって見た事のない機体を見せつけられるし、少しは溜飲が下がるってことよ！」

拝啓、墓場で眠っているであろう曾祖父父へ。

お会いできる日が少しでも伸びました。不義理な曾孫をお許しください。

決して誘惑に負けた訳ではありません。私は依頼を終えてラハマに帰還しようと考えていたのです。

両手をガツチリと握られ、潤んだ瞳と艶やかな唇から放たれた「お願い、付いてきて……」という言葉と共にロイグの谷間へと引き寄せられた両手を救いたただけなのです。

すごく、よかったです。

広すぎる。

駐機場から徒歩三十分ってどんな立地条件なのだろうか。暮らしていて不便ではなからうか。そもそも個人で駐機場持ちってどれだけお金持ちなのだ。余計な事をつい考える。

ここからはマヨナカ探偵団の三人に案内されて道をひた歩く。

ようやく辿り着いた立派な家、ここがロイグの育った場所。室内にお邪魔して辺りを見回し、皆がそれぞれに感じた事を口に出す。

その時、突如として表れる一人の男性。

ロイグと同じ髪色に白髪が混じり、年齢を感じさせるが、その口から発せられるテンションが高めの発言の数々。久しぶりに孫と会えて嬉しそうなおじいちゃんである。

ロイグとの会話を聞いていると私を呼びつけたひーじいを思い出す。その後ろに同じようなテンション高めのイサオさんも。

イジツへ来てからどのくらい時間が経ったのだろう、後で手帳を覗いてみようか。

「ところでロイグ、彼は一体何者かね？ まさか！ 私の考えを先読みしてひ孫を見せてくれる準備をしていたのか!？」

「おじいちゃん！ 変な事を言わないで！ さつき説明した通り、ハルトには夜明けの鷹について調査を手伝ってもらっていたのよ!」

「そうですわよ！ ハルトはあんな痴女に靡くような薄っぺらい男ではありませんわ！ お祖父様！」

「その痴女は私の孫なのだが……」

「メンドクセエから、一度黙ろうな。つてベッグとハルトがいねえ」

痴話騒ぎから逃げ出すようにベッグさんと共に機体が置かれている格納庫へやつてきた。

あのまま話を聞いていたら深みに嵌りそうな気がしてならない。このままでは夜明けの鷹のオタカラが手に入るまで付き合う事になりそうな程に。

モアさんが暴走を始めた時に、これはチャンスなのだ。という声が聞こえてベッグさんの後ろを付いて来たのである。

戻る頃にはモアさんも落ち着いているだろうし、夜明けの鷹の子孫の話もまとまるのではないか。

格納庫には多種様々な機体が所狭しと並んでいる。ロイグの祖父は機体コレクターとしても有名なのが良く分かる程に。

隣にいるベッグさんは、それはもう嬉しそうに辺りを見回し、機体に触ろうとしていたので止める。

「離すのだ！ 機体がベッグを呼んでいるのだ！」

「駄目ですってば！ よそ様の機体ですよ！」

「ロイグのおじいちゃん機体なら、ベッグの機体のようなものだ！」

「どんな理論ですか！ 三人とも！ 見ていないで止めるのを手伝ってほしいのだ！」

「口調、うつつてるよ〜」

「そこでなにをしているのだ！ ここはお屋敷の人間以外は立ち入り禁止の場所なのだ！」

その声の主に視線を向けると、ベッグさんとよく似た格好の女性がいた。

「ニツカ？ ニツカなのだ!!」

「ベッグ？ ベッグなのだ!!？ こんなところで会えるとは思わなかったのだ！」

「それはベッグも同じなのだ！」

私の手からすり抜けてニツカと呼ばれている人と再会を喜ぶベッグさん。

和気藹々としている姿と、特徴的な口調で頭が混乱し始めた。

「一体なんなのだ？」

「ワタシに聞かれても分からないわよ！」

一度、使用すると癖になる口調を整えるとして、目の前にはベッグさんによく似た女性性が一人。

見た目の服装と会話を聞いている限りでは、とても親しい関係にあるようだ。そんな二人を探偵団と眺めていると、誰かの足音が聞こえる。

もう一人、誰かがこちらにやってくる。

「あー！ ししよー！」

「誰が師匠だ」

「ししよー？ ニツカの師匠さんなのだ？」

「そうなのだ！ ししよーの整備技術はピカ一なのだ！ お願いして弟子にしてもらったのだー！」

「人の足元にしがみ付いて離さなかっただけだろ。それに弟子とは認めておらん」

「そう言いつつも整備作業を見せてくれるのだ！ ツンデレジジなのだ！」

「こちらにやってきたのは一人の老人。」

髪は完全に白髪で染まり、少し猫背気味になっているが、足腰は丈夫なようでキチンとした足取りで歩いて来る。

「しかし今日は騒がしいな。一体何事だ」

「この家のじーちゃんの孫が帰ってきたんだよ」

「ついでにニツカの幼馴染であるベツグも付いてきたのだ！」

「……それで後ろにいる奴は誰だ」

「ベツグ達の仲間なのだ！ ハルトって言うのだ！」

「ハルトと申します」

頭を下げて会釈する。返事はない。

「ししよー！ 自己紹介ぐらいしたらどうなのだ！」

「そんなもん必要ない。その内帰るだろ」

「そりやそうだけどさあー、それでも必要だと思うのだ！」

「そうよ！ 名前ぐらい教えてあげなさいよ！ ジジイ！」

「嗚呼煩い、分かったから黙れ」

チビツ子たちの猛攻に諦めがついた様子のご老人。

こちらに顔を向けてぶつきらぼうに言い放つ。

「サブジューとも呼べ。この家のジジイに拾われて整備士のような事をしている。これでいいか？」

「ししよーはね！ 機体の整備以外にも飛行技術が凄いのだ！ 機体を鳥が飛ぶかのよ
うに優雅に飛ばすのだ！ 流石ししよーなのだ！」

「鬱陶しいぞ。少し黙れ」

「嫌なーのーだっ！ 尊敬するししよーの事を他の人に自慢できる数少ない機会なの
だー！」

サブジー。まさかご存命だとは思ってもよらなかった。

長き間、イサオさん達から協力をするように迫られ続け、その度に姿を暗まし、最後は命を狙われて撃墜された人。

トンビのような飛び方をしてイサオさんを驚かせた程の飛行技術の持ち主。

こうして直接お会いする事になるとは。かなりの高齢なはずだが。

ユーリア議員と相談をして一時的に待ったをかけた状態のお節介がここに来て再び浮上を始めた。

キリエやナオミさんにこの事を伝えるべきだろうか。今の私にお節介を焼く程の余裕があるのだろうか。

今の二人に会わせたらどうなる？ 精神的に何らかしらの変化が発生するのは確実。二人とも既に凄腕の傭兵、戦闘機乗りだ。

そうした場合、今後の仕事に何か影響が発生するのではないか、懸念すべきは……。
「んがあああ!!」

「いきなりどうしたのだ！ お腹でも下したのだ!？」

自ら頬をつねる、馬鹿な事を考えている自分を恥じる。

この荒野で強く逞しく生きている人達の事を、私如きが推し量る事が出来るであろうか。

生きていれば嬉しいに決まっている。死んでいれば悲しいに決まっている。

そこへ相手に対して今後の精神状態がどうたらと考える方が失礼だ。

あ、でもキリエだけはちよつと不安。いざとなれば新作パンケーキで励まそう。

変顔になっていたせいかわ探偵団に笑われる。ついでと言わんばかりにニツカさんもベッグさんも笑いきじやないですかね。

サブジーは表情を変えずに後部を掻きながら立っている。

「お前は一体何をしに……」

その先の言葉は続かなかつた。胸を押されるようサブジーが床に膝を付ける。

「ししよー!」

「ベッグさん!」

「カランを呼んでくるのだ!」

先程の雰囲気から一転、重苦しい雰囲気へと包まれていく。

怪盗団アカツキ その14

「大丈夫、命に別条はないわ。大勢の人と会って少し疲れがでたのよ」

「よかったのだあ……。カラン？　ありがとうなのだ！」

「どういたしまして。こっちのベッグは素直ね」

「酷いのだカラン！　ベッグは元々素直なのだ！」

「欲望にでしょ？　処置は済んだわ、しばらく安静にしてあげて」

「助かったよカラン君。このジジイは頑固でな、前にも似たような事があったのだが医者嫌だと駄々をこねよって」

部屋から戻ってきたカランさんからの報告を受けて、ほっとする。

いきなり大勢で押しかけて、一人で勝手に思考を巡らせて奇声まで上げていた自分を恥じる。

イサオさん達の話しを聞いていた時点でご老人なのだから高齢だと分かっていたのに。

流星にひーじいと同じ年代ではないと思うが……。

「無事でよかった……」

「ん？ ハルト君はこのジジイの知り合いなのか？」

「私ではありませんが、友人が十数年間探している方かもしれません」

「ほう！ よければ詳しく教えてくれないかね。荒野で大の字に寝そべっているのを見つけて面白半分ですてきたのだが、このジジイは無口でイカン。きつとムツツリジジイだな！」

「物凄い経緯と断言する理由も知りたいところですが、先にこちらから教えられる範囲でよければ」

サブジイは、キリエに空を教えた人であり、飛び方を教えた人。ナオミさんはサブジイから技を盗んで覚えたとレオナさん達から間接的に聞いた。

二人にとっては師匠と呼んでも過言ではないだろう。

共通点はそれ以外にも。ある一定期間を過ぎた時、突如として姿を消す事である。

その理由はイサオさん達からの追跡を逃れる為に姿を暗ます為であるが、この部分を伝えるべきか否か、悩んでいる。

「ふむ、イケスカ動乱以降、名を上げたコトブキ飛行隊に所属している娘に、荒野の雌豹と呼ばれるナオミか」

「まさかおじいちゃんの傍に居るだなんて思いもよらなかつたわ」

「そうだろう？ 帰ってきてよかつただろう？」

「おじいちゃんだって知らなかった癖に。でもそうね、帰ってきてよかったわ」

その言葉が聞けて嬉しいのだろう。歯を見せる程の笑顔で笑うロイグのおじいちゃん。

ロイグも微笑むようにしておじいちゃんの顔を見ている。

少しだけ開いていた距離が縮まったのであれば何も言う事はない。

「しかしこのジジイ。エースパイロットを生み出す程の操縦技術を持ち合わせていたのか。それも二人も」

「こちらに来てからも飛行をされていた様子ですが」

「時折だが機体の保守作業の一環で飛ばしてもらっていたぞ。あまりに綺麗な飛び方をするものでな、好きな機体があれば一つくれてやると言ったのだが、いらんと言われたしまったわ」

「そうでしょうなあ……」

「それについても知っているのかね？」

「搭乗していた機体であれば」

「ふむ」

腕を組んで何かを考え始めるロイグのおじいちゃん。

「嫌な予感がするわ。おじいちゃんがああしている時の姿って、その後が大変な事にな

るのよ」

「ロイグのジイサンだからなあ」

「突拍子もない事を言い始めそうですね」

「ハルト。私の評価が辛辣なのだけど」

「行動力溢れて皆を引っ張ってくれる頼れるリーダーって事ですよ」

花を咲かせるように満面の笑顔を見せてくれるロイグ。

ヨイショ一つで機嫌を直してもらえるのならお安い御用でござる。

「悪い子ね、ハルト」

「リガルさん程ではありませんよ」

二人して悪党がしそうな笑い方をして誤魔化す。フフ怖。

組んでいた腕を元の位置に戻し、決心がついたようにこちらに喋りかけてくる。

「よし！ ハルト君よ！ 私は決めたぞ！」

「なんででしょうか？」

「あのジイグについて全てを教えてくれるのならば、私の可愛い孫娘をキミにくれよう
！」

「男女間の問題が噴出するような条件はお断りします」

「何故だ！ 身内鼻屑だが美人で長身でスタイルも抜群だぞ？ それとも平たい方が好

きなのかね？」

「そういう問答が始まると日が暮れても終わらないからですよ！ 単純にこの件については他言無用でお願ひしたいだけです！」

「欲の無い人間は信用できんのだが」

「あるから！ ちゃんとあるから！ 今ここにいる全員に聞かれると危険が及ぶ可能性があるんですよ！」

「ふむ……それならば部屋を用意しよう。そこで私と二人だけであれば教えてくれるか？」

「ちよつと待つておじいちゃん！ 私が間に入るわ！」

二転三転とした返答は、ようやく一つの答えに辿り着き、話し合いの場を設ける事ができた。

「ししよーの事なら私も知りたいのだ……」

「ごめんね、直ぐには無理だけど、ちゃんと教えるから」

「本当なのだ？ 絶対なのだ！」

部屋ではロイグのおじいちゃん、ロイグ、私という並びで椅子に座る。

私一人であれば信用してもらえるか怪しいところではあったけど、隣には心強い味方

が
いる。

心を落ち着かせ、話し合いを始めよう。

サブジーはユーハングの人間である可能性が高い事。

突如として姿を消すにも理由があり、イサオさん達からの再三の協力要請を断り続ける為に姿を暗ましていた。

だが、最後は協力する気が無いと判断され、命を狙われる事になる。

最後はイサオさんの手によって撃墜され、機体は谷底へ。

直接的な生死の確認はされなかったが、撃墜地点等を考慮すると生存は無いと判断される。

以前、穴の調査をする為にキリエに依頼したアレンから、謎の集団から襲撃を受けて墜落、谷底で死んだふりをして難を逃れたと聞いた。

サブジーもそうやって死んだふりをする事でイサオさん達の目を誤魔化したのだから。そこは本人に聞かなければ分からないが。

サブジーに関して知っている事はここまで。

「なるほど、あのジジイにはそういう過去があったのか」

「イサオの奴は昔から色々と暗躍していたのね」

「そういう事もありましたので、あの仮説が出来上がってしまったわけです」

なるほどね。考えながらも頷くロイグ。

「だが気になる事がある。なぜハルト君はここまで知っているのかという事だ」

「人払いをして頂いた理由はそれです。大つぴらにするのは良くないと思ひまして」

「つまりだ、君はユー・ハングから訪れたという認識で良いのだな？」

「その通りです」

「ここへは穴を通じて来たのだろう、だが何故だ？ イジツへ来る理由は？」

「おじいちゃん。ハルトは家族を探しにイジツへやってきたのよ」

ちよつとした身の上話。

もう生きてはいないであろう曾祖叔父のお墓探しの旅。

ロイグのアジトを探索させて貰った事で、機密文書を手に入れる事ができ、墓所があるとされている箇所については絞り込めた。

オタカラに關しても仮説を立てる事が出来、一定成果と共に依頼が達成され、私は私の家族を探す為に一旦ラハマへと帰還しようと思つていたのだが。

「孫の我儘でここまで連れて来られた訳なのだな」

「我儘を言われた事は否定しませんが、自らの意志で付いてきましたよ」

「何かオネダリされたのか？」

「潤んだ瞳は卑怯だなあと」

「泣き落としてきたのか！ ロイグも立派な女性になったものだな！」

「もう！ おじいちゃんも！ ハルトも！ 椰揄わないでよ！」

ロイグは間に入ってくれてよかった。

どうしても私の身の上話をする、寂しい空気が漂ってしまうからね。

「さて、ハルト君。情報提供をしてくれた礼がしたい。なんでも言ってくれたまえ」

「お願いが一つ、私の友人たちにサブジーを会わせるまでの間、逃げ出さないように見張っていて欲しいです」

「それだけでいいのか？ ハルト君に対して謝礼も用意出来るぞ？」

お金。とつても大事。あつて困る物ではない。

それでも、ここで受け取るのは何かが違う気がする。

「私はここに至るまで様々な人達によつて助けられてきました。そのおかげで私の家族が眠る場所もほぼ検討が付きました。一部ではありますが、その人達に対して恩返しが出来そうな事が目の前で起きています。私のお願いはただ一つ、彼女たちにサブジーを会わせたい。それだけです」

「ハルト君の言い分はよく分かった。だが、それでは私の気が済まないのだよ。お互いに何か良き落としどころはないかね？」

「一つだけ、提案があります」

「なんだね、言ってみたまえ」

「サブジーが搭乗していた零戦三二型の引き上げをお願いしたいです」

「三二型か、私の格納庫にもあるが、それでは駄目なのだろうな」

「サブジーにも彼女たちにも思い出の詰まった機体です。それにお祖父様も興味が湧く理由があります」

「私が？ ハルト君の搭乗してきた震電ならともかく、零戦三二型なら腐る程見て来たのだが」

「サブジーの零戦三二型はユーハング製。イジツ生産の機体ではなくユーハングで生産された機体の可能性があります」

ほお、今までとは違う。驚きも含まれた声。

「その機体を引き上げ、修理を行い、飛行できる状態にして頂きたい。彼女たちと再び同じ空を飛べるように。こういうのは駄目ですかね？」

腕を組んだままこちらを見つめているロイグのおじいちゃん。
じつと、二人で目を合わせて動かない。

ロイグの落ち着かない様子と、時計の針が聞こえる。

いつまでも続くかと思われた睨み合いとも言える目の合わせあい、それは突如笑い始めたロイグのおじいちゃんによって終わりを告げる。

「すまんすまん。こんな馬鹿みたいな話を聞かされたのは随分と久しくてな」

「やはり無理なお願いでしようか？」

「いや！ そういう意味ではないよ。自分の事を二の次にしてまで行動する人間を久しぶりに目の当たりにできて嬉しくてな」

「そうよおじいちゃん！ ハルトはいつだって自分よりも友人や仲間達を優先してくれる人なんだから！」

「ロイグも大分、気に入っているようだな。どうだ？ 本当に考えんか？」

「私の家族を見つけ出してからにしてください。これを達成させる前にユー・ハングへ戻った場合は嫁探しに行ったのかと曾祖父に怒られてしまいます」

「そうかそうか、楽し気に大笑いのおじいちゃん。」

横目を向ければ私も含めて照れているのを隠し切れないロイグの姿。

私は家族を、ロイグはラムダとオタカラを、どちらも一息つけないとそういうのは厳しいと思うの。

「よし！ 話がまとまったぞ！」

居間に戻ってきたおじいちゃんに皆の視線が集まる。

「私は今からそこで寝てるジジイの機体を回収しに行くぞ！ ニツカ君！ 探偵団諸君

！ 手伝いたまえ！」

「ししよーの使つてた機体なのだ!? ついて行くのだ!!」

「それって私たちの力は必要なのかしら?」

「必要だとも! 座標は教えてもらつたがな、確定ではないのだ。探偵団の知恵を借りられれば直ぐにでも見つかると思うのだがなあ」

「し、しようがないわね! 私たちマヨナカ探偵団の力で機体の一つや二つ見つけだしてあげるわよ!」

「良い様に使われてる気がする」

「よゆうよゆうだよ」

「寝ているジジイも運べるように屠龍で向かうとするか!」

「ちよつと待ちなさい、安静にしておかないと疲れが取れないわよ」

「すまないなカラン君。このジジイからは目を放すなとハルト君からの厳命でな。荒っぽく飛ばないように気を付けるから許してくれたまえ」

「ハルト。何を約束したのかしら、事によつてはこの注射、貴方にも刺してもいいのよ?」

注射はやめて! 昔から苦手なの!

私に迫ってくるカランさんを尻目に、早々と準備を終えて家から飛び出していくおじ

いちやんズ。

誰か止めてくれる人は!? 周りにいる皆さんに視線を合わせるが誰も、目を背ける!

「大丈夫、チクつとするだけだから」

……クフフ。その含み笑いと共に注射を打たれたのである。やっぱり注射は痛いのだ……。

「痛かったよお……」

ただの栄養剤と言われたが、痛いものは痛いのである。サブジーにも打ち込んでいたらしいので、今頃は悪態をつけるぐらいに体調が回復しているだろう。

夜の帳が下り、辺りは既に暗闇、だけど空に浮かぶ大きなお月様のおかげでそこまでの暗さは感じない。

モアさんの手料理を美味しく頂き、各自用意された部屋で明日に向けて寝るだけ。

だが、中々寝付けなくて部屋を出て広間に行こうとしていたら、素敵なバルコニーを発見。

お邪魔させてもらう事にして、椅子に腰掛けて月を見つめている。

イジツの空に浮かぶ月はいっだってタヌキの姿。ウサギさんはどこへ行ったのだから

うね。

「あら、ハルト。こんな時間まで起きてたの？」

「ロイグさんこそ、どうしたんですか？　こんな時間まで」

「部屋で調べ物をしていたのよ。帰省した時でもなければ確認出来ない事もあってね。お隣、いいかしら？」

「どうぞどうぞ」

二人して空を見上げ、月を見つめる。

「雲一つない夜空ね」

「本当に。月光浴は精神を落ち着かせると聞きますよ」

「そうなの？　私がこうして落ち着いていられるのは他の理由があると思うんだけどな」

何度目だろうか、ロイグに頬を弄ばれるのは。

手で触れ合いう事が出来る距離で横並びになるように座り、ふたりぼっちの反省会と明日から始まる夜明けの鷹の子孫たちを探す事について。

私はここでお留守番の予定。怪盗としての能力も無いし、空戦が発生しても何も出来ない。

それならばと、ロイグの提案もあり、部屋にある小説を眺めて皆を待つ事にした。久

しぶりの読書に胸が高まる。

防犯上、この家を空けておく訳にもいかなないという理由もあるけどね。

月明りを含めてた夜に目が慣れてきたおかげで、周囲が良く見渡せる事ができるようになった。

勿論、隣にいるロイグも含めて。月明りで照らされた彼女はとても綺麗で見惚れてしまう。

それに気づいたロイグがイタズラ心満載の顔でじゃれ付いてきたり。

僅かな時間だけど、心休まる貴重な時間。私が隙だらけの時に必ず現れるお二人さん。

アレシマで間違えて書いた最初の手紙もあながち間違いではないのだろうか。

怪盗団アカツキ その15

アカツキの皆さんは三つの班に分かれ、夜明けの鷹の子孫を探しに向かう為の打ち合わせをしている。

その様子を目に映した後、昨日の夜、ロイグから借り受けた一冊の小説を読み始めた。イジツ語に翻訳されたユーハングの小説。ロイグはこの中のどれかを見て怪盗を指したと言っていた。

この空き時間に怪盗を始めたきっかけとなる小説を読めればいいなど、その時は考えていた。

「ハルトさん。一人になるからといってご飯を抜いたりしてはいけませんよ」

「あい、気を付けます」

「毎日、きちんとお風呂に入って着替えをして身なりに気を付けてくださいね」

「あい、善処します」

「善処じゃダメです！ 帰ってきた時に出来ていなかったら怒りますよ！」

「はいいい！ すみません！」

曖昧な返事で誤魔化そうとしていたが、あっさりとは看破されてモアさんに怒られてし

まった。

「今日のお説教対象はハルトか」

「心配する対象が増えて大変ね、モアママも」

お家でだらだらと夢の読書タイムでも、モアさんからの良く出来ましたのハンコを頂かなければ雷が落とされてしまう。

日常では目覚ましぐらいしか使っていなかったスマホのアラート機能をフル活用して、必ず朝は起きて朝食を忘れずに食べなければ、モアさんお手製スタンプカードにハンコを押してもらえない。

そんな夏休みのラジオ体操のような事を考えていると、どこからか飛行機のエンジン音が複数聞こえる。

「おじいちゃん達、帰ってきたのかしら？」

「その割には早くない？ 昨日の今日よ」

「忘れモンでもしたんじゃないのか？」

「……んー？ 確かに屠龍のエンジン音も聞こえるのだ。でも他の機体……疾風のエンジン音も聞こえるのだ!!」

「まさか！ ラムダ達にこの場所を知られた!？」

その問いかけに誰が答える隙もなく、荒く扉が開かれた。

突入してきたのは覆面姿で武装した人が数名。銃をこちらに向けている。

「貴方たち！ 一体何者なの!？」

「答える義理はない。我々の用事は貴様たちではない、震電とそのパイロットだ」

「こちらにやってくる一人の覆面。体格の良さから男性だと思われるが……」

「私の事など気にも留めず、両手足を縛り上げられてさるぐつわを付けられる。」

「んんー!!」

「ハルトに手荒な真似はしないでちようだい!!」

「動くな、女。我々に関わらなければこれ以上の事はしない」

「すまんな小僧。儂らに付き合ってもらうぞ」

「団長、震電の確保に成功したとの報告が」

「よし、長居は無用だ。引き上げるぞ!」

「口調からして私を担ぎ上げている人は年配の方なのだろう。だがそういった気配は一切感じさせない程、力強い。」

「身体をよじらせてみたものの、振り落とされる事すら叶わない。」

「先程も言った通りだ。これ以上、我々に関わらなければ貴様たちには何もしない。我々の邪魔立てをしなればな」

「団長と呼ばれる人が発煙筒を投げつける、部屋は煙で覆われ、その隙に私は部屋から

運び出され屠龍の後部座席に無造作に放り込まれる。

顔を上げた時に見えた、空に映る機体は紛れもなく私の震電であった。

「ちよつと何なのよ、もう!!」

ハルトが正体不明の奴等に攫われてからまだ僅かな時間。

それにも関わらず既に奴ら全員は空の上。手際が良すぎる。

「アイツ！ 何者かに狙われるような事をしていたか!？」

「ハルトを、というよりも震電を狙ったように見えたわね」

「大変です！ 早く助けにいかないと!」

「無理よ。奴等は既に空の上、むやみに追いかけてようとしても姿さえ見つけられないわ」

「じゃあどうしろっていうんだよ！ このまま放っておくわけにはいかないだろ!？」

「みんな落ち着いて!!」

私の大きな声が周囲に響き渡る。

「誰がハルトを攫ったのかを考えるよりも、まず相手はどこに向かったのかを確認しないと」

「それに関してならベッグにお任せなのだ！ 機体を弄らせて貰った時に、内緒で震電に発信機を取り付けておいたのだ！ 持ち物には自分の名前を記入しておくのは基本

なのだ！」

「色々と聞きたいところだけど……。ともかく発信機を受信するのに特別な機材は必要なの？」

「そんな面倒な物はいらないのだ！ 無線の周波数を合わせれば、近くを飛行すると発信機から発せられる電波を受信して音が鳴る仕組みなのだ！」

「ベツグ!!」

「ぐえあー、ぐるしいのだあー!!」

加減もせずに抱きしめてしまったせいで呼吸が出来なかったようだ。

「だとしてもだ、アタシ達だけで見つけられるものなのか？ 人海戦術で探すとしても人手が足らなすぎるぞ」

「確かにね、そこで一つ提案があるわ。けどこれを行うと私たちが怪盗団アカツキである事がバレる可能性が非常に高いの」

「……最後まで聞いてみないと判断はできないわ」

地面に落ちていたハルトの手帳を拾い、中を開く。

ハルトらしい整理された文章の中にいくつかの連絡先が書かれている。私でも読める文字で。

「ハルトが託してくれた手帳にオウニ商会も含めた連絡先が書かれているわ。片っ端か

ら連絡をいれて協力してもらおうのよ」

「オウニ商会つーと、コトブキか！ 確かにハルトの事情に関しても良く知っている相手だな」

「あそこのマダムは例えどのような状況下であっても依頼としてなら引き受けてくれるでしょうけど……報酬はきつちり請求してくる人よ。素直に応じてくれるかしら」

「金銭で応じてくれるなら、ハルトが見つけたくれたアジトのオタカラでも売り払いましょー」

「手早くお金を集めるならそれしかないわね」

「最後に、みんなに確認の為に聞くわ」

周囲は静まり返る。これは確認をしなければならない事。怪盗団アカツキとして。

「私はハルトを取り戻したい！ ハルトをこのままにんか絶対にしておけない！ ハ

ルトは私たちの仲間だから！ 取り戻す為にみんなの力が必要なの！」

「今更愚問ね、ハルトは私と美しい物を共有できる唯一の人間よ。このままにしておくわけがないじゃない」

「ベツグに震電を弄らせてくれた恩があるのだ！ ハルトを救出してもつともーつと震電を弄らせてもらうのだ！」

「アタシも決めてあるぞ。まったく世話のかかる弟が一人増えたみたいなやつだな、ア

イツは」

「ハルトさんにはまだまだ料理のレシピを教えてもらいたいです！ 作った料理を一杯食べて欲しいです！」

「……私？ まあ教えて貰いたい事は山ほどあるけど、こういうときはコインで決めるのが私たちの流儀じゃなかった？」

ポケットから一枚のコインを取り出す。このコインも思い出深い物になっている。

「なんだか久しぶりですね。コインで決めるのも」

「それだけ選択に迫られるような事も無く平和だったって事よ」

「確かにな、んじやさっさと決めようぜ！」

「表が出たら乗る、裏が出たら降りる。みんな決めて頂戴」

「そんなもの、言うまでもないわよ」

「せーのっ！」

『表!!』

ここは一体どこだろう。訳も分からず拘束されたまま屠龍に積み込まれてそれなりの時間が経過した。

横を向くと誰かの操縦で震電が飛んでいる。

それ以外にいくつもの機体が編隊を組んで飛行をしている。残念な事に私には機種までは分からない。

「どうした？ 気になるものでもあったか？ 小僧」

「ふやふえふえふあふえん」

「そうだったな、喋れる訳がないな。もうしばらくだ、我慢してくれ」

『翁、任務中の死語は慎め』

「すまんすまん」

私を拘束して屠龍に乗せた老人は翁と呼ばれているようだ。

『団長、三時方向に機体が見える』

『こちらに向かってきているか？』

『いや、方角は変わらずだ』

『ならそのまま低空で基地に向けて飛行を続けろ。全てを手に入れた我々の作戦は短期

決戦だ。支障はない』

『了解』

全てを手に入れた？ 震電の事も含まれているのだろうけど、何か引つかかる。

この人達は一体何者だ？ せめてそれが分かれば……。

何も出来ない状況を受け入れる他なく、彼等の基地までエスコートされていく。

「燃料と弾薬の補充をしておけ、夜には出るぞ」

団長らしき人の指示で機体から降りてきた人達が作業を始める。

整備も補充も自分達で行っている。この基地自体は人数が少ないようだ。

……問題は目の前に見えている巨大な機体だ。

あれは富嶽。以前、イサオさんがラハマに向けて送り込んだと言っていた大型の爆撃機。

本人曰く、デカイ！ 快適！ 言う事なし！ の爆撃機と自慢していたのを思い出す。

あんな物を用意してこの人達は一体、何をしようとするのだ。

「お疲れさん。ほら行くぞ」

同じ屠龍に搭乗していたじーさまにあっさりと担がれて建物内へと連れて行かれる。

「団長、連れてきたぞ」

「ご苦労。翁、いつも手間をかけさせるな」

「気にするな。それでこの小僧をどうするつもりなんだ？ 震電だけが目的なら連れて

こなくてもよかろうに」

「聞いてみたいのだ。あの震電をどこで手に入れたのかを」

「搭乘させてもらったけど、アレは間違いなくイサオ様が使用していた機体よ。本体そのものは大分弄られているけれど、操縦席付近は設計図通りの物だわ」

「ならば、イサオ様と面識があるという事か。もしくは」

腰に備え付けられていた銃を抜き出し、こちらに向けてくる。

「何かしらの方法でイサオ様から強奪したかのどちらかだな」

「なんにせよ、さるぐつわを外してやらな喋る事もできんよ」

「舌を噛んで死のうとは思うなよ？」

唯一動かせる頭で了解の意思表示をする。そんな恐ろしい真似は出来ません。

じーさまの手でさるぐつわが外され、ようやく深呼吸が出来る。

幾度か繰り返したのち、始まるのは尋問。

「貴様に聞く、イサオ様と面識はあるのか」

「あります」

「何時、どこでだ？」

「イケスカの穴からイサオさんが消えた直後。貴方たちで言うところのユーハングです」

歡喜の声上がる。

この人達は執事さんが言っていた、所謂イサオ信者と呼ぶ人達だろうか。

そうであるのならば、スマホに残してあるデータを見せればどうにかなるのでは。だがそれを行うにはまず両手を解放してもらわなければならない。

怖い点が一つ。下手に証拠があると云って、スマホだけを取り上げられた場合。

扱い方を聞いてくれるならともかく、操作が分からないから知らんで終わらされた日には、私の人生まで終了してしまいそうだ。

「イサオ様は生きておられるのだな？」

「腹立たしいぐらいに元氣一杯ですよ」

突如、襟首を掴まれて宙に浮く感覚を覚える。慣性に従い揺れる縛られたままの両手足。

「口の利き方に気を付けなさい！」

「副長、下したまえ」

「ですが！」

「命令だ、下せ」

苦渋の顔をしながらも、放り捨てるようにして下ろされる。

バランスが取れるわけもなく盛大に尻もちをついて、尾てい骨の辺りが痛い。

訂正、少なくとも副長と呼ばれる人には皮肉も通じない。この人がいる限り、話にならない。

たとえ映像を見せる事が出来たとしても「イサオ様、そんなこと言わない」とか屁理屈こねて破壊するに決まっている。

じーさまの手によって地べたに座るような体勢に戻される。

「小僧を相手にムキになつても仕方あるまい。素直にイサオ様が生きていらした事を喜ぼうじゃないか」

「そうだな、翁の言う通りだ。生きておられるのを信じ続けるのと、確定では心構えが変わるだろう」

「ならば、何故イサオ様は帰還されずに小僧が震電に乗ってきたのだ」

「それは本人に聞いてみなければ分からないな」

再び視線がこちらに集まる。

覆面を外す事無く目だけがこちらを見つめてくる姿は恐怖を感じるのに十分だ。

「問おう、何故貴様が震電に乗ってイジツへとやってきた？」

「イサオさんとはあまり関係の無い話ですよ」

「震電に搭乗してきたというのにか？」

「それはイサオさんのご厚意によるものです」

「では何故、貴様はイケスカに足を運んだ。貴様の行動はアレシマ以降、全て把握している」

「私の探し物を知る為にはイケスカにいらつしやる執事さんに会うのが一番だと教えて頂いたもので」

銃口が再びこちらに向く。恐怖も抱く反面、実感も湧かない。撃たれば死ぬのだからなど。

あまりに非現実的な状況下のせい、未だ現実との境目があやふやだ。

「とぼけるな！ イサオ様の執事とお会いしたならば我々の行動は把握しているだろうが!!」

「何をおっしゃっているのかまったく分かりません」

「この機に及んでしらを切るつもりか！ 団長！ 時間稼ぎをするような奴を相手にする必要はありません！」

「焦るな副長。計画実行までには猶予がある」

「ですが！」

「副長。お前さんがイサオ様に忠誠を誓っている事は誰も疑わない。だが少し頭に血が上りすぎだ。外の空気でも吸ってこい」

「しかし！」

「しかし、ではない。一度この部屋から出ていけと言っておるのだ」

歯を食いしばり耐える様子副長。

「何か分かり次第、内容は伝える。翁の言う通り、ここは我々に任せたまえ」
「……了解です」

洩々という態度をまったく隠す事なく部屋から出て行く副長。

男二人が小さくため息を付く。

「お前さん、肝が据わっているな」

「恐怖の余り漏らしそうですよ。それでもイサオさんに睨まれた時の方が恐ろしかったです」

「ほう！ イサオ様に睨まれるような事をしでかしたのか！ 中々どうして面白い小僧じゃないか！」

「翁。お喋りは控えて頂きたい」

「どうしてだ？ 儂は小僧の話に興味が湧いてきたのだが」

「会話を交わして親しみを覚えれば不都合な事も起こるでしょう。そう教えてくださったのは翁ですよ」

「確かにな。だが湧いてしまった好奇心はどうも抑えきれん。それに小僧の話を聞いておかねば後悔しそうでな」

「いつものカン、という奴ですか」

「良く分かっているじゃないか。ならば尋問は儂に任せてはくれぬか？」

「……くれぐれもお気を付けを」

「そちらもな、団長殿」

そして残されたのは翁と呼ばれる老人と私の二人だけ。

この方であれば対話が出来そうな気配はする。

会話を聞いている限り、事実上この人が一番上の様にも。

「さて、小僧。貴様がイジツにやっってきた理由を全て話してもらおうか」

「それなりに長い話になりますよ」

「日が暮れるまでには時間はある。喋ってみ」

初手でイサオさんの話をするべきか、自身の事を喋り会話を重ねてから、あの映像の事を伝えるべきか。

このジーさまは私に興味を持ってくれたのだ、下手な事はせずに自分の事を喋ろう。私の発言のせいで日が暮れる前に何か事を起こされては困るから。

怪盗団アカツキ その16

『そう、ハルト君が誘拐されたのね』

「申し訳ございません、マダム。依頼申し上げておきながらこのような状況になってしまいました」

『こんな事になるだなんて誰にも分かりやしないわよ。それで貴女達は どうするつもりなの？』

「北へ向かって行つたのを頼りに、一度ラハマへ向おうと考えております」

『他に頼れる人はいるのかしら？』

「ハルトが残してくれた連絡先にユーリア議員と……」

『イケスカにいるイサオの執事ね、悩んでいるのなら連絡した方がいいわ』

「何故……でしょうか？」

『敵であれば相手にされない、味方であれば何か教えてくれる可能性も。過度な期待はしない事ね』

「ご助言ありがとうございます。連絡が済み次第、私たちもそちらへ向かいます」

『了解したわ。こちらも依頼の為に出席しているコトブキに連絡を取り次第、教えてい

ただいた周波数を使って搜索を始めるわ』

「よろしくお願ひいたします」

マダムへの連絡を終え、大きく深呼吸。

あの人はどうも苦手だ。嫌いではないのだが、全てを見透かされているように感じる時がある。

でも頂いた助言は確かだ。次はユーリア議員に連絡を入れよう。

もう！　こういう時に限って私の身内は誰も側にいてくれないんだからっ！

『もう一度、言ってみなさい』

「申し訳ございません。ハルトが何者かに誘拐されました」

何かが軋むような音が受話器を通じて聞こえてくる。

ユーリア議員のお怒りはごもつともだ。

お気に入りを入りを、もしかしたらそれ以上の人が攫われたのだから。

こちらにも聞こえる程の大きなため息。ハルトは何をどうしたらこの方と良好な仲を築き上げたのだろうか？

『それで、貴女たちは今、何をしているのかしら』

「オウニ商会のマダムへ連絡を。この後、イケスカにいるイサオの執事に連絡を入れ次

第、ラハマに向かう予定です」

『ラハマへ？ 何かアテがあるようね。それにあのクソジジイの連絡先なんてよく知っているわね』

「仲間が震電に取り付けていた発信機と逃亡して行く方角が北だった事、ハルトが残してくれた手帳のおかげです」

『救出したら手掛かりを残してくれたハルトに感謝しなさいよ。私もラハマへ向かうわ』

「ユーリア議員もですか!？」

『あら、私がラハマへ向かつてはいけないのかしら?』

「いえ、少し驚いてしまっただけです」

『流石に一人身では行かないわよ。親衛隊と傭兵を一人連れて行くわ』

「ナオミさんでしょうか」

『よく知っているわね。ハルトから聞いておいた情報を使わせてもらうわ。そうすれば必ず飛んでくるでしょうからね』

この人は本気だ。あらゆる手を使ってでもハルトを救い出そうと考えている。情報というのはサブジーという方の事だろう。伝えるべきだろうか。

こういう時、ハルトならどうする……? ?

「ユーリア議員。その情報についてお伝えしておく事があります」
『何かしら。手短かに』

「サブジーと呼ばれている方の事でしたら、私の実家で保護されておりました。ハルトも確認済みです」

『……』

しばしの沈黙。

『その話。他に誰か知っているのかしら？』

「私の仲間と家族、友人たちのみです。サブジーと直接係わり合いを持つ方々にはまだ」
『ならそのまま黙っていなさい、イケスカのクソジジイには特に』

「了解しました」

『聞き分けの良い子ね。飛行船で貴女たちにハルトの話聞かせてよかったわ』

意外だ。あのユーリア議員からこのようなお言葉を頂く事になるとは。

『事は一刻を争うわ。その件に関してはこちらに任せて。貴女たちも連絡が済み次第、ラハマに向いなさい』

「了解しました。よろしくお願い致します」

『もし、あのクソジジイが関与していたら伝えておいてくれるかしら。絶対に許さない。と』

本日味わった恐怖の中でも一番と言っても過言は無いだらう。

銃口を向けられるよりも恐ろしい一言。

ハルト、貴方は本当にどうやってこの方と仲良く出来たの……？

『ほう、ハルト様が』

「はい、手帳に連絡先が記載されてましたので、事実確認も含めて連絡をさせて頂きました」

『事実確認。我々の犯行ではないかと申し上げたいのですな』

「……はい。犯人が搭乗していた機体は疾風と屠龍。どちらも黒色で統一されており、チームマークも描かれていませんでした」

『ふむ。イサオ様が為された事を知っておられるのなら、疑うのも無理はないですな。しかし大胆不敵ですな、流石は怪盗団アカツキのリーダー。と申し上げるべきか』

「私たちの事を知っているの!？」

『貴女たちが何者であるのか、何を探しているのか、誰と対立をしているのか、存じ上げております』

イジツは未だイサオの手中にあるのか。

だが主無き今の状況で手綱を引いているのは。

『私の事を知りたくば仲間たちと協力して辿り着きなさい。手引きされたオタカラには価値がありませんからな。夢も、ロマンも』

価値が無い。やはり、何かしらこの人は夜明けの鷹について知っているのだろうか。

『ああ、もう一つ手がございました。ハルト様と恋仲になられては如何でしょう。ハルト様はブユウ商事の次期会長になられる方ですからなあ』

顔が熱を持ち、急激に赤くなるのが分かる。それと同時にとんでもない情報まで伝えられた。

「ハルトがブユウ商事の次期会長？」

『おや、聞いておられませんでしたか。もつとも、社外秘が早々漏れる状況は芳しくありません。ハルト様のご厚意と考えておきましょう』

頭が混乱し始める。あれだけ身近にいたハルトの考えが分からなくなる。

『歳を重ねると本来の目的を忘れていけませんな。老婆心ながらも一つ、空賊共によつて奪取された富嶽の内、一機が雲に隠れながらそちらへと向かっていたようです』

「ふ、富嶽ですか！ 何のために!?!」

『さあ？ イサオ様ですら成功させる事が出来なかつた作戦を成し遂げる事で自分達の溜飲を下げるおつもりか。はたまたこれをきっかけに発起するつもりなのでしうか』

「随分と他人事のように言われますね」

『他人事でございませぬ。ブユウ商事としても、イサオ様が率いていた自由博愛連合としても。主無き今、イサオ様の意志を引き継ぐとお考えの方は腐る程。問題はイサオ様のご存命である事を知らない事でしょうか』

イサオがこの世界からいなくなつてから、空賊の襲撃は増加の傾向にある。

巨悪が存在していたおかげで、小悪党共が鳴りを潜め、一定の平和が保たれていたのは皮肉な話だ。

『もしくはハルト様の事ですから、自身を攫つた犯人たちに舌先三寸で説得にかかつておられるかもしれません』

「例え相手が誘拐犯であっても、ハルトはうわべだけのうまい言葉で人を騙すような事はしないわ!!」

『……そうでございましたな。良くも悪くも素直な方でありますから。だからこそ、イサオ様もどこか惹かれる部分がおありだったのでしよう』

しみじみ思う事があるのだろう。この人について気になる事は山ほど。だけど今はそれを確認する時ではない。

「情報ありがとうございます。私たちはこれよりハルトの搜索を始めます」

『お気をつけて。ハルト様によりしくお伝えください』

富嶽。まさかここで聞く事になるとは。

でも教えてくださったという事は、今は敵ではないという事？

軽く首を振る。それを考えるのは後だ。もう一度、マダムに連絡を入れなければ。イサオが富嶽を利用した町は二つ。シヨウトとラハマなのだから。

「ロイグ。用事は済んだかしら」

「遅くなってごめん。連絡出来る所には全て伝えたわ。内容については空で」

「ロイグ！ 機体のチームマークはどうするの？ 前回のように一時的に隠しておくのだ？」

「いいえベツグ。もう隠すような事はしないわ。このマークは私たち怪盗団アカツキを示す大事なマークだから」

「けどよ、ラハマにコトブキやらが集まるんだろ？ バレたらヤバくないか？」

「大丈夫。堂々としていれば意外とバレないものよ！」

「念の為に聞くけど、バレたらどうするの？」

「そこは怪盗らしくパーっと逃げ出せばいいのよ！ ハルトを救出した後ね！」

「ロイグ……今度は私たちが誘拐犯にされてしまいますよ！」

それはそれで楽しそうな生活が待っている気がする。

仲間たちと、ハルトと一緒になのだから。

ラハマに到着後、向えてくれたのはレオナだった。

彼女に謝罪する私に対してレオナは。

「顔を上げてくれ、こちらから責める理由は一切無いんだ。大切なのはこれからだ。何、ハルトなら無事さ」

そう言つて私を軽く抱きしめて背中を優しく叩いてくれた。

もう……本当に貴女って人は。

自分だつて大変な状況なのに、人を労わる余裕を見せてくれるんだから。

「みんな集まつたな？ それでは作戦会議を始める」

「そちらにいらつしやる方は？」

「私に依頼を申し込んできたお客様よ。守秘義務があるので詳細は教えられないけれど、信用できる方よ」

「……マダムやレオナさんがそう仰るのであれば、了解致しました！」

こちらを向いて姿勢を正し、正面から見つめてくる。

イツルマ特有の真っ白な自警団の制服に身を包み、赤髪でやや小柄な体格。クリソベリルキヤツアイによく似たその瞳からは、思いやりの気持ちが伝わってくる程、純粹

な金眼。

「カナリア自警団、団長のアコと申します！　ロイグさん、よろしくお願いします！」

「よろしくね、アコ。それとありがとう。自警団の方と聞いていたからびつくりしちゃって」

「気になさらないでください。私の率いている自警団は他と違って色々ありますので……」

遠い眼差しを始めるアコの姿。あちらはあちらで問題が山積みのようなね。

「自己紹介は済んだかしら？」

「申し訳ございません！　ユーリア議員！」

「そんなに怯えなくてもいいじゃない」

「そういう貴女も、少しはそのおっかない気配を押しえなさい」

「眉間に皺を寄せた恐ろしい女でごめんなさいね、ルウルウ」

少し不貞腐れるユーリア議員の姿に肩を上げるように呼吸をするマダム。

視線をレオナに向けて、話を進めるように指示を出す。

「現状を確認する。誘拐された人物の名はハルト。犯人は機種や色、手口からみて元自由博愛連合の人間である可能性が高い。それを裏付けるように提供された情報の一つに富嶽の存在が確認された」

「初代羽衣丸を占拠した奴等かしら？ 忌々しいわね」

「これらの情報とハルトを攫った際に放った言葉の内容から推測するにあたり、奴等の目的の一つは富嶽によるラハマ爆撃の可能性が浮上してきた」

「二度ならず二度も、それも今度は一機で行おうとしているのだから、余程自分たちの実力に自信があるのか、ただの大馬鹿野郎のどちらかよ」

「我々に出来る事は一つ。犯人が計画を実行する前に襲撃し、富嶽の破壊とハルトの救出を行う事である」

「あの、質問よろしいでしょうか？」

「どうした、アコ」

「震電に取り付けられたという発信機を元に犯人の居場所を特定し、富嶽を破壊するまでは分かりません。ですが誘拐されたハルトさんを救出する方法は……？」

「それについては私たちに任せてくれないかしら？」

「ロイグさん達がですか？ でもどうやって？」

「勿論、みんなの力添えは必要よ。協力して貰えるならハルトの救出に関しては任せて頂戴」

「随分と自信があるようだが……」

空中戦に関していえばコトブキに任せた方が適任だろう。

「私たちだって負ける気はしないけれど、ここは役割分担が必要な大事な場面。職業柄、潜入捜査はお手のものよ！」

怪盗団アカツキ その17

「なるほど。七十年前にイジツからユー・ハングが消え去ったとされる時に、あちらには戻らずにこちらに残った可能性があるのか」

「はい。ですがユー・ハングではイジツの世界について詳細は残されておらず、曾祖父が何十年もかけて情報をかき集め、ようやく穴を見つけられた程に情報が少なかつたのです」

「曾祖父殿が残りの人生を賭けて見つけた穴。それが突如、異変を来たし、そこからイサオ様が飛び出してきた。ここまでは合っているか？」

「はい。大まかな流れですが合っています」

「それで、小僧の家族はこのイジツで生きていると思っているのか？」

「無理でしょう。イサオさんの情報収集能力を駆使しても該当する人物は居なかつたようです。もし今も生きていた場合は百歳を超えておりますから」

「百歳か……イジツでは無理だろうな」

日本に居た頃だつて三桁の太台に乗つても達者に動ける人はそうそうない。

「それで、墓場探しに切り替えたのか」

「はい。おかげ様で眠っている場所については幾つか絞り込む事が出来たのですが」

「農らの登場で計画がおじやんか」

「はい。全くもってその通りです」

口を開けて笑い出すじーさま。

この一件がなければ、きつと夜明けの鷹の子孫から情報を得て、何か進展したかもしれない。

その後で怪盗団アカツキがオタカラを手に入れた後に、きつと私のお墓探しが再開されていたのだろうな。

「それに関しては謝罪する」

「お気になさらず。あの人達と共に行動していれば、もう一月ほど先の話になっていたでしょうし」

「小僧、お主はよく変わり者だと言われんか？」

「勝手気ままに動きすぎて首輪を付けておきたいと言われた事ならありますよ」

「誰が言うたかしらんが、農もそう思うわい」

やはりそう思われてしまうのか。

自分ではそこまでの事はしていないつもりなのだが、あくまで日本ではという前提で。イジツでは異分子扱いなのだろう。

未だ縛られたままの両手足。落ち込んだ事を相手に伝えるように身体を床に倒す。ひんやりとしたタイルが気持ちいい。

「小僧がイジツへとやってきた理由は分かった。ここから先はイサオ様の事について聞かせてもらおうぞ」

「それはかまいませんが、私の言う事を信用しますかね？」

「難しいな、だが聞いて判断するのはこちら側だ。知っている事は全て喋ってもらおう」

「そうなるよイサオさんがユー・ハンクに辿り着いてからの話になりますけど」

「それでいい。今のところ会話を邪魔する奴もおらん。喋ってみ」

曾祖父に呼び出された家の玄関先にイサオさんが居た事。

イジツの世界で好き放題暴れていた話を聞いてドン引きした事。

空に上がるロケットを二人で見えて興奮した事。

自分でも驚くぐらいに、いつのまにかイサオさんとの思い出がたくさん出来上がっていった。

「一つ、疑わしい事がある」

「なんででしょうか？」

「イサオ様は相変わらずお変わらないようでも想像は実に容易いが、今聞いた話だと我々

が受けた任務の説明と食い違いが発生する」

「はあ……つて任務？」

「何かがおかしい。小僧はイケスカで執事から今回の事について何も聞かされてはいないのか？」

「何か、という意味では一つだけ決まった事があります。イサオさんと執事さんの策略で私が次期ブユウ商事の会長に任命されそうな事です」

「なんだと!? それは一体どういう事だ!!」

「問い詰められても答えようがありません。イサオさんからの伝言を伝えたら執事さんからの承の返事が返ってきている状態で止まっているだけですし!」

「我々はイサオ様亡き現状を打開する為、自由博愛連合を再び復活させる為の第一弾としてラハマへの攻撃を決めたと聞かされていた」

「質問。そもそも執事さんから直接聞いた話なのですか？」

「……いや、イサオ様の執事から直接聞いたのではなく、イサオ様直轄の部下であった者から聞かされただけだ」

「なんだか随分と雲行きが怪しい話になってきましたが……」

「これはマズイ事になったかもしれないな……」

その時、サイレンがけたたましく鳴り響く。

スピーカーから敵襲の声。

それと同時に団長と呼ばれる人が部屋に入ってきた。

「翁。残念ながら相手が一枚上手のようだ。空に上がり露払いをしてくれ」

「団長、その前に伝えておきたい事がある」

「どうした？」

「我々の任務は何者かによって仕組まれた可能性が出て来た」

「……その小僧に誑かされましたかな？」

「残念ながら儂は正気だ。小僧側の視点から見た話すと、我々からの視点で見た今回の任務には余りにも食い違う点が多い」

「……例えば？」

「この任務はイサオ様の執事が指示した作戦ではなく、直轄の部下による者の偽りの作戦である可能性が浮上してきた」

「だが、あの方からの指示では執事からの極秘任務だと」

「我らは自分たちの考えに固執し続けた。イサオ様亡き今、意志を引き継ぎ自由博愛連合を再び復活させ、イジツを手中に収めるという使命を。それ故に今回の任務は我々に都合が良すぎる」

団長と呼ばれている人の目が細くなり、思考に耽っている様子が分かる。

じーさまも団長からの答えを待つように立ち尽くす。

出撃命令が発せられているにも関わらず、兩人共に動きはない。

今なら話をすれば通じるだろうか。

イサオさんと執事さんのあの映像を見せつける事で、これから始まる戦闘を中止させる事が出来るのであろうか。

「すみません。一つよろしいでしょうか？」

「なんじやい小僧。今は話を聞いている場合では……」

「イサオさんから預かってきた言付を聞いてみませんか？」

「……それが貴様の手によって都合よく改変されていない証拠は？」

「確かイジツでも映画がありましたよね？ 銀幕役者と呼ばれる人達もいるとか」

「観に行ける場所が限られておるせいで衰退の一途を辿っておるがの」

「映画のような映像をユー・ハングの技術で今ここでお見せできる事が出来るとしましたら、どうしますか？」

静寂が訪れる。

相手がちちらの話に乗ってくれるのであれば、この戦いをまだ止められる可能性があるが、

意外にも口を開いたのは団長と呼ばれる方からだった。

「師よ、貴方の教えに背く事をお許してください」

「気にするな。再三、教え込んできた儂が好奇心に負けて始まった事だ。師弟揃って救いようのない馬鹿じゃない」

「貴様、その映像とやらを見せてもらおうぞ」

「では、両手の縄を解いてください」

「妙な行動を起こすなよ、貴様の命はこちらが握っているのだから」

その時、走りながらこちらに向かつてくる足音が聞こえる。

勢いよく開けられた扉の先に現れたのは副長と呼ばれている方。

「翁！ 出撃命令が出ているのにまだ話し合いをしているのですか！ 敵の偵察部隊がやって来ているのですよ！ 今の内に空へ上がらなければ一方的な戦いに、それどころか争う前に計画が終わってしまいます！」

「団長、副長の言い分も、もっともだがどうする？」

「……翁は出撃を、こちらの件については私が」

「了解した。何れにせよ、オウニ商会とコトブキはケリを付けなければならん相手だしな。その前哨戦か」

「団長！ 私に震電への搭乗許可を！」

「慣れない機体で出撃するつもりか？ 死ぬぞ？」

「他の隊員たちの士気を向上させる為にも必要です！ 許可を！」

「……許可する」

「ありがとうございます！」

「あの、すみません。もう一つ」

「なんじゃい。小僧の要求がどんどん増えていくの」

「震電から脱出する際は、必ず後部のプロペラを自爆させてから飛び降りてください。そうしないとプロペラに絡まれて死んでしまいますから」

「っ！ そのような状況にはならん！」

踵を返すように部屋から出て行く副長。

足音からも激怒しているのが伝わる。

でも伝えておかないと本当に死んでしまう訳でありまして。

そんな様子を見て何かおかしかったのか、じーさまは大口開けて笑いよる。

「敵を心配する阿呆がここにおるわい！ これ以上面白い事は早々あるまいよ！」

「私が攫われた場にいた仲間たちと、コトブキ飛行隊を信じていますから」

「では、その希望は儂が打ち砕いてこよう！ その後、再び小僧の話聞かせてもらおうとするわい！」

実に楽し気に部屋から出て行くじーさま。

結局は戦う事になるのね。早期の作戦実行を恐れた余り自分語りが長すぎたか。人生思うようにはいかないなあ……。

取り残されるように部屋には私と団長だけ。

変化といえばこちらに向けられていたハズの銃口が仕舞われている事。

「私一人では貴様の両手を解放する事は困難になった。だが、こちらとしても確認すべき事が発生した。映像を観る事が出来るというユー・ハングの技術とやらと、操作方法を口頭で教えてもらおうぞ」

「それで構いません。ご自身の目と耳でイサオさんからの言付を確認してください」

怪盗団アカツキ その18

「ロイグたちの能力に疑いを持つ訳ではないけれど、どうやって潜入するつもりなのかい？」

「これを見て頂戴。ハルトが私たちのアジトから見つけ出して解読してくれた地図よ」

アジトから発掘されたユーハングの機密文書。そこにハルトが私にも分かる様に解読してくれた紙と手帳を並べる。

アレンはとても嬉しそうにそれらを隅々まで眺める。

「素晴らしい資料だね。イジツにユーハングが居た頃に作成された地図か。落ち着いたら是非とも僕にも見せてもらいたいよ」

「無事に済んだらね！ 犯人が北へ逃げて行った事、地図上でラハマから北に、イツルマからは西の方角にユーハングの訓練施設がある事が分かったの」

「そこへ富嶽が加われれば、着陸できる地点としても必然的にこの訓練施設に奴等が居る事になる可能性は十分ありえそうだね」

「でしたら私の団員たちから連絡が来るのも時間の問題かもしれません！ そちらの方角にも搜索隊を派遣してありますから！」

「それで、潜入はどうするんだい？ 図を用意してそちらに意識が向いている間に、近くに着陸でもして入り込むのかい？」

「半分正解で半分間違いな」

「ほお、答えを聞いても？」

「勿論！ これから日が沈み夜になるでしょ？ 真つ暗な荒野に着陸するのは危険だ

し、だからと言って救助を諦めるつもりは無い。そう考えながら地図を眺めていたら答えが目の前にあつたのよ！」

敵がいるであろう訓練施設に指を指す。

「訓練施設、そういえばここは何の訓練をする場所なんだろうね」

「その答えは手帳に書かれていたわ！」

「へえ、何をしようとしているんだい？」

「パラシュートを装備して機体から飛び降りる、空挺降下と呼ばれる行動よ！」

「団長、本当に私たちはみなさんのお手伝いをしなくていいんですか？」

「残念ですがイヅルマとラハマ間の協定はまだ協議の途中です。両町の協定に正式な辞令が発令されていない以上は私たちに出来る事はこれが限界です」

「リツタ、アコの言う通りよ。私たちに出来るのはここまで。後はあちらさんを信じる

しかないわ」

「シノさんの言う通りです！ リツタさんのおかげで震電と基地を見つけられる事が出来たのですから、大戦果ですよ！」

「そうですか？ 団長に褒めてもらえる嬉しいです！」

「さあ帰還しますよ！ 私たちの仕事はまだ他にも沢山ありますからね！」

皆さん、ご無事で！

「相変わらず、私たちは置いてきぼりね」

「仕方ないじゃない。私たちが出しゃばるような真似をしたところであの子たちの邪魔になるだけよ」

「……それでも歯がゆいわ」

軽く爪を噛むユーリア。その癖は止めなさいと伝えて以来、久しく見る仕事。

待つという行為。それはとても不安で、じれったくて、今すぐにも加勢してあげたところだけど、それは叶わぬ事。

世代交代。私たちはもう戦闘機に搭乗して物事を解決する立場では無い。

その代わり、あの子たちが帰ってくる場所を精一杯守り通すのみ。

「夕日に去っていった者は、朝日と共に帰ってくるという」

「何よ、それ」

「ストレンジリアルから始まる伝承みたいなモノよ」

呆れるように建物へ戻っていくユーリア。

その先にはいつもの姿で待ち構えているアレン。あの姿も時期に見れなくなるの
でしょうね。

気を付けていつてらっしゃい。私の小鳥ちゃんたち。

「カラン！ 富嶽からの対空射撃が凄いのだ！ 安易に近寄れないのだ！」

「別に近寄る理由なんてないわよ。私たちは困なのだから」

「そうは言うけれど一撃ぐらいお見舞いしてやりたいのだ！」

「無茶しないの。一部の敵は既に私たちを追い回しているのだから、ここで落ちたら口
イグトリガルに迷惑がかかるわよ」

「うう！ 我慢するのだ！」

「いい子いい子」

この間に、コトブキに向けて無線を入れる。

敵基地に三時の方角を頭にして富嶽が駐機。上部に備え付けられている機銃から攻
撃を受けている。

駐機場にいる疾風と震電らしき機体が可動をし始め、空へ上がるのも時間の問題。富嶽に関しては機銃掃射以外の動きは無し。直ぐには動けない模様。

モアは大丈夫かしら。これだけ派手に機銃の音が聞こえていけば、もう一人のモアが表に出てきそうなものだけど。

「各員、聞いての通りだ。敵基地では富嶽による対空射撃が始まった」

「それって囷に引つかかったって事？」

「ああ、二人が敵偵察部隊を撒きつつ現状を報告してくれている。大した奴等だよ」

「後はロイグとリガルが基地に潜入して、ハルト君の救出と可能であれば富嶽の動きを止められればいいのかしら？」

その時、深い溜息が聞こえる。

「アタシとしてはまどろっこしい事をしてないでさっさと撃ち落したいんだけど」

「そんな事したらサブジューの情報が聞けなくなっちゃうよ、ナオミい」

「ユーリア議員から聞いてすつ飛んできたものの、報酬の対価はジジイが撃墜された場所を教えるだけ。割に合わない気がしてきたわ」

「それでも……。操縦席にサブジューが居れば諦めも付くし、居なければ可能性だつて」

「……そうね。私とした事が気が立っていたわ。ごめんねキリエ」

「ううん！ ホラ！ きつと大丈夫だよ！ ハルトを救出する事が出来れば何か新しい情報だってあるかもしれないし！」

「前向きねえ。でも今はそれが必要かもしれないわ」

「だってハルトだもん！ いつもおかしな行動ばかり取っているけれど、みんなの事を最優先で考えてくれる人だし！」

「レオナ、今の内に相談が」

「どうしたケイト、出来れば手短に。ここの渓谷は狭くて操縦に思考が」

「震電の相手をケイトに任せてもらえないだろうか」

「震電を？ なにか勝算が？」

「ハルトにお願いで飛行試験をさせてもらった際に、震電の得意分野、苦手分野を把握した。相手が震電に搭乗してきた場合、それらの情報を駆使して相手が機体に慣れさせる前に撃ち落とす」

「なるほど、だがいいのか？ ケイトが震電を撃ち落とすのは色々と思う所があるのでは？」

「ハルトが言っていた。大切な機体である事は確かだが、命の方が言うまでもなく大切だと。ケイトは早急に震電という不確定要素を排除し、隊の安全を少しでも上げたいと考えている」

「……そうか。了解した。エンマ」

「ケイトの援護ですわね。いつも通りですわ、お任せあれ」

「エンマ、ありがとう」

「あら珍しい。雪でも降るのかしら」

「イジツに雪は降らない」

「分かりませんこと、穴から人がやってくる時代ですもの」

「ロイグ、準備はよろしいですか？」

「モアこそ、機銃の音が聞こえてきたけどまだ平気なの？」

「この距離でしたらまだ大丈夫みたいです」

「リガル―準備できたかー？」

「ちよつと！ モアみたいに心配事の一つや二つ無いのかしら!？」

「あーリガルなら大丈夫。きつと成功するわー」

「今ここでカラン特製の催涙剤を使うわよ？」

「やめろ！ 洒落になってねえから！」

「そろそろ降下地点ですよ！ 気を引き締めてください！」

ほれみる怒られた。誰のせいよ誰の。

後部ハッチを空けて下を覗く。こういった理由で外へ飛び出すのは初めてだ。

「ロイグ、準備はできたかしら？」

「リガルこそ！ その頭に付けているゴーグルが飾りじゃない事を証明してよね！」

「貴女はそのバカみたいにデカイモノをちゃんと収めてから飛び降りのよ！」

「わ、分かってるわよ！ もう！ それじゃ行ってくるね！ モア！ レンジ！」

「二人ともお気をつけて」

「さっさとハルトを連れ戻してこいよ！」

意を決して機体から飛び出す。両手足を広げて身体を安定させ、機体に干渉しない距離になったらパラシュートを開く。

私たちを乗せていた二機は、少しでも私たちが降下している事を敵にバレないように、進路を変えながらベッグとカランに合流しようとしている。

もうすぐ着陸、下手に足を付けて着陸をするとそれだけで足が折れてしまう。

ハルトの手帳には、足を軽く曲げたまま横に跳ねるようにして転がれば比較的安心して着陸が出来ると書かれていた。文章の後にハテナが付いていたのがちよつと怖かったけど。

私たちの目の前には既に地面が見える。ハルトを信じて今降り立つ！

地面に足が着く感覚、それを正面から受け止めず、流す様にして対処する。

重力に従い降りてきた身体にズレが生じる。そして荒野の土埃を巻き上げるようにして私の身体が転がる。

しばらくして勢いは収まり、身体に異常が無いかを確認する。一通り動かしてみたが痛みもなく問題ないようだ。

リガルは？ 見回すと私と同じように身体が土埃で汚れている。でも怪我はなさそうだ。

「もう！ 美しい私が埃まみれじゃない！」

「怪我無く降りただけいいじゃない！ 風の流れも穏やかだったおかげで、ほらー！」

私が指を向けた先には訓練施設があり、上部に通気路は見えるが窓らしき物はこちらには配置されてない。

パラシュートを外し、警戒をしつつ建物裏へと辿り着く事が出来た。

目の前には疾風と屠龍が何機か、内部にはまだ何人か残っているのだろうか……？

上空に向けて機銃掃射をしている富嶽も見える。

「リガル、本当に貴女に頼んでいいの？」

「あら、心配なら今すぐにも役割を変えてもいいのよ。私がハルトを助けに行くわ！」

「ダメっ！ ちゃんとかじ引きで決めたでしょ！ お願いね、リガル」

「はいはい。そっちも必ず成功させなさいよ。コトブキが来る前に終わらせてくるわ」

手をひらひらと動かしながらも機敏に富嶽へと近づいていくリガル。私は私の仕事をこなさなければ。

もう少しだけ我慢してね、ハルト。

「続々と機体が空へ上がってくるのだ！ ロイグ達はまだなのだ!」

「流石に危ないわね、せめて」

「カラン！ 横から来ているのだ!」

「なっ!？」

このままでは疾風の機銃からは避けきれない。

被弾して落とされるのはまだしも、横からでは下手をすれば操縦席に。

「うううおおおーっ!!」

相手の機銃が火を噴く前に敵機を落としていく一機、モアの鍾馗だ。

「なにチンタラ飛んでんだよ!!」

「あ、はい、すみません」

「二人とも無事だったのだ!？ 予定通りロイグ達を落としてきたのだ?」

「おかげで機体が軽くなったぜ。リガルの奴、尻がデカくて重いんだよ!」

「助かったわ、モア」

「そんな事よりも敵の偵察部隊ぐらいは叩き落してもいいんだろ？ コトブキに全部持つていかれるのも癪じゃねえか！」

「でも今回の私たちの役割は囿よ、あくまで状況確認をしてコトブキに伝えるのが役目よ」

「それで撃墜された奴、手をあげろ」

「はい、私です。すみません」

「富嶽からカランお手製の催涙剤の色が見え、機銃掃射が止まったら成功！ それが大メならコトブキが富嶽に損傷を与えた後に敵を全機撃墜だ！」

「うっし！ 手始めに女の尻をいじらしく追いかけて回してくる偵察部隊を落とすぜ！」

「……女？」

「れっきとした女だよ！ カランの母親みたいな言い方止めろよ！」

派手に機銃をぶつ放しているわねえ。

おかげで音に気を付けなくても簡単に近づけてしまったわ。

搭乗口が開いている。まだ誰かが乗り込もうとしているのかしら。周囲に気を付けないとね。

再びゴーグルを身に着け、鼻と口を囲うように布を巻く。

現在、富嶽には操縦席に二名、リーダー担当かしら、一名に機銃を下品にぶっ放している奴が二人。

出し惜しみは厳禁ね。カランから預かってきた二つを全て使い切つて一度で終わらせてしましましょう。

そうしないとコトブキに富嶽ごと吹き飛ばされちゃうわ。

ピンを抜き、一つは操縦席に向けて放り投げる、もう一つは腹の真ん中辺りから機銃掃射している奴に向けて。

中から慌てるような声と共に、催涙剤が発生した音が聞こえる。

わざわざ夜でも視認しやすいようにと色付きにするんだから、薬剤調合が趣味なのも考えものね。

一息入れてから機内に突入する。目を押さえて苦しそうにしている奴等がゴロゴロというが、容赦なく顔を踏みつけて気絶させていく。

上部の敵は全て排除。あとは腹の真ん中。慎重に身を隠しながら進むと、しゃがみ込むようにして辺りを見回している奴が一人いた。

危ない。素直に行ったら撃たれるところだったわ。

でも残念ね、そんなにうるちよろと不安げに周りを見渡していたら、美しい私を見つけて出す事はできないわよ。

こちらに向いていた視線が外れた時に、色付きの煙を利用して即座に近寄る。相手も反応するが、遅い。手を掴み背中に回して捻り、顔面を機体にぶつけて気絶させる。

ふう。これで富嶽は無効化されたかしら。後はこいつらを一か所に集めて物騒な物を没収すれば問題ないでしょ。

さっさと終わらせて、ハルトを助けに行かなくちやいけないんだから。

怪盗団アカツキ その19

『コトブキ！ 聞こえるか?! 富嶽が噴火した!! 繰り返す、富嶽が噴火した!!』

「了解した！ 後は我々に任せてくれ！」

噴火。すなわち潜入したりガルが富嶽の機能を停止させた事を意味する。

「これでこちらが気を付ける点は施設に損害を与えない事。そしてあの疾風を撃ち落とすだけだ。」

「全員聞こえたな！ 次は我々の出番だ！」

「今回は空に護衛対象はいないわ、地上にいるハルト君はロイグに任せて全力で行くわよー！」

「やつとかあ！ 前回はうやむやにされた勝負だけど、今回は負けないからね！」

「私とタイマン張って逃げ切れるかな!?!」

「ケイトは震電を撃墜した後に合流する」

「それまで皆さま、ごゆるりとお楽しみくださいませ」

「コトブキ飛行隊！ 一機入魂！」

『はい!!』

「元氣一杯ね。そういうとこ、羨ましいわ」

コトブキとナオミが溪谷から抜け出し、機体の高度を上げていく。

視線に入った富嶽からの対空射撃は無し。リガルのおかげで目の前の敵に集中できる。

敵偵察部隊は三機、本体は離陸したての機体も含めれば十一機。震電を除けば全て黒塗りの疾風か。

ならば、狙うならまずは。

「悪いけど、一番槍は頂くわよー」

我々の後方にいたナオミが機体を一気に加速させ、離陸したばかりの疾風に狙いを付ける。

奇襲に成功した我々を止められる敵はいない。

偵察部隊と一部先行した部隊はロイグの仲間たちによって距離が離されている状態の為、援護も間に合わない。

ナオミの正確無比な射撃により、最後尾にいた疾風が一機撃墜される。

「星一つー!」

「あーっ! それ! 私の役目だ! 最近ようやく電光石火のチカって二つ名が広

まってきたばかりなのに！」

「あらごめんなさいね、一人で傭兵活動しているとチンタラ飛んでられないものでね」
「くううう!! キリエ! ナオミよりも絶対に多く落とすぞ！」

「りようかい! ナオミにばかり良い格好させられないかんね！」

「敵本隊がこちらに向けて反転を始めた! 体勢が整う前に一機でも多く落とすぞ！」

隼一型の高度上昇力と疾風の旋回能力、どちらが上回るか!?

相手の内、二機がこちらの射程圏内よりも早く体勢を整え、こちらに機体を向ける。

その内の一機は……震電か!

「あの機体でここまで早く旋回出来るのか!？」

「憎たらしいけど良い腕してるって事ね。隊長機かしら?」

「部隊から離れた震電を落とすのは今が好機」

「疾風は私とザラ! 震電はケイトとエンマ! 後から追いついてくる本隊をキリエ、

チカ、ナオミで足止めを！」

「レオナー? 別に落としても構わないんでしょ?」

「勿論だ、遊撃として好きに暴れてくれ！」

「さっすがー! 話しが分かる人って私大好きよ! キリエ! チカ! 私のケツを死

ぬ気で追いかけて来なさいよ！」

「なんでナオミから命令されなきゃいけないんだよ！ キリエもなんか言えー！」

「言葉遣いが下品だよ、ナオミい」

「そういう問題じゃないだろ!!」

私と正面から向き合うように疾風が降下してくる。

射程圏内に疾風を補足する。射撃を開始するがエルロンロールで綺麗に躲される。

機体横を通り過ぎ、後方からザラの射撃も開始されるがそちらも尾翼操作だけで避ける。

あれだけの操縦技術にも関わらず、交差する際にこちらに発砲する意思が無い。どういう事だ？

考える暇も無く次の攻撃姿勢に入る為に旋回を始める。

例え疾風とは馬力の差があろうとも、旋回性と機体の軽さでは隼が上だ。

だが疾風も自身の機体性能を生かしてピッチアップによる百八十度ループ、再び正面からの一騎打ち。これではキリがない！

「ザラ！ 私が囷になる！ 相手が旋回に入った隙を突いてくれ！」

「了解！ だけど無理は禁物よ！」

「相手がどういう意図があつて攻撃をしてこないのかは知らないが、チャンスがある内

にカタを付けるぞ！」

先程と違う点はお互いに水平飛行の状態です。正面から攻撃を行おうとしている事だ。

再びこちらからの射撃を試みるが、掠りもしない！ おまけに相手は前回同様、発砲もせず、再び機体同士が交差する。

急旋回を行いザラの援護体勢に入る。先ほどの繰り返しのように疾風の狙いが私からザラへと変化した。

「ザラ！ 気を付けろ！」

正面からの一撃離脱戦。ザラの射撃が開始されるが再び回避される。

疾風からしても絶好の機会であるにも拘わらず発砲をしない。

一体どういう事なんだ。思考を張り巡らせる前に無線機から疾風に搭乗しているパイロットの声が聞こえる。

『これが噂に名高いコトブキかね』

「貴様！ 何故攻撃を行わない!!」

『失礼、こちらにも都合があつてな。しかし隼でよくぞここまで』

「機体性能を言い訳にするつもりはない！」

『だが実際に、疾風による一撃離脱戦を取られてはお得意の格闘戦には持ち込めまい。このまま上にいる儂の部隊が合流すれば、君たちは羽をもぎ取られていく鳥にしかなら

ん』

その言葉の直後、上空から爆発音が聞こえる。

一機の戦闘機が被弾、徐々に高度を落として行くのが見えた。あれは敵の疾風！

『生きとるか？ 脱出しろ。命令だ』

その言葉に答えるように疾風のパイロットが機体から脱出し、パラシュートを展開させる。

羽衣丸を占拠した奴等とは違う？ あいつ等は自分の命を賭けてまでイサオの命令を遂行させようとしていたが、これではまるで。

『先程の言葉は訂正しよう。やはり君たちはここで落としておくべき存在だ。小僧に恨まれようがな』

「小僧？ ハルトの事か!? お前たちは一体何を!?!」

言葉を交わすよりも先に、三度目の正面からの一撃離脱。

今度は相手の発言通り、私たちを撃ち落とす為に射撃をしてきた。

こちらは射撃体勢が整わず回避に専念するのが精一杯だ。

ザラが射撃を試みたが当てる事は叶わなかった。

一体どうすれば！

『知りたくば、我々を撃ち落とした後に直接聞いてみる。下で団長と小僧が話し合いを

しているからな』

四度目、相手は再び私たちよりも高度のある位置から下りてくる。

対策を考えねばギリ貧だ。この敵に地形を利用した戦法が通じるだろうか？

眼前に現われる疾風。射撃に備えるが一つの違和感に気づくのが遅れた。

降下してくる疾風の機体が先程までのような速度を出ていない。まさか！

こちらの射撃を物ともせず錐揉み状態になりながら私を追い越してザラの真上さえも通り過ぎる機動に出る。

疾風から放たれた機銃がザラ機の主翼を撃ち抜く。

「ザラっ!!」

これまでの正面からの一撃離脱はこの為か！ 自分の優位性を崩してまでの賭けをしてまで！

『騙したようですまん。元は零戦乗りの儂からすれば、一撃離脱よりもこちらの方が性に合っておるわ』

被弾したザラは機体を水平に保つ事に成功し地上へと不時着。最悪の事態は回避できたか！

相手の無茶な機動のおかげで後ろに付く事は出来た。

だが未だ攻略法が思いつかない。最後の手段としてはイケスカの執事に行ったあの

方法か……。

後ろを取られたというのにも関わらず、悠々自適と飛んでいる疾風が腹立たしい！

「まったくなんですの！ すれ違い様に射撃を行うだけの戦法を取り続けるだなんて！」

「機体の特徴からすれば合理的。本来であれば疾風で行うはずの機動をそのまま利用している模様。イサオの操縦が歪であっただけ」

「それについては同意しますわ！ そのイサオに被弾させたケイトからは何か妙案はございませんこと!?!」

「ある。だがそれには準備と相手を信じる事が必要」

「信じるですって？ このダニ共を!?!」

「ケイトも空賊は嫌い。このような事を起こした奴等も嫌い。だが震電を落とすにはこの方法しか浮かばない」

「っ！ それで何をなさるおつもりで」

エンマが最後まで言葉を発する前に、戦闘機から煙を出しているのが見える。

「あれはザラ！ 大丈夫ですこと!?!」

『私は大丈夫だから！ あの疾風は危険よ！ 誰かレオナの援護を……』

「ザラ！ ……もう！ ケイト！ 貴女の事を信じていますよー！」

「了解した。ケイトはエンマの真後ろを飛ぶ、エンマはこちらを意識せずにいつも通り飛行を」

「分かりましたわ！ 私に向けられた弾に当たらないようにお気をつけあそばせ！」

二人だけの編隊飛行。相手からエンマ機と重なる様に見えるよう位置に付く。

これまでのエンマの射撃、回避行動。相手の震電からの射撃、回避行動。

僅かな回数ではあるが、次に行くであろう行動を計算に入れる。

エンマであれば、あの震電であれば、どちらに当てても射撃行動を行うのか、それを回避する為にどちらへと操縦桿を倒すのか。

震電に搭乗している相手の徹底された戦闘技術。それを信じるしかない方法。それを行うとしてケイト。

今後はアレンのする事について何かを言えなくなる気がした。

この考えが浮かび、行動に移そうとしているケイトは、アレンの妹なのだと思いつたから。

「攻撃！ 来ますわよー！」

再び震電と正面から対峙するケイト達。

ハルトの機体、ケイトも搭乗させてもらえた、思い出のある機体。

それを今から落とす。思い出も大切だが、今はもつと大事。

ハルトなら笑って許してくれる。ケイトはハルトを信じているから。

エンマが震電に対して、震電がエンマに対して射撃を行い、回避行動に移る。

今まで見て来た行動と、これから行う回避行動、それらを予測するならば……。

震電が回避するであろう方向に機体を向ける為、操縦桿を倒し、相手の姿を待つ。

「ケイト!!」

見えた。震電を至近距離で捉える。射線軸からは僅かに外れているが、問題ない。

ケイトが行いたい事はただ一つ。お尻の大きな子に隼の主翼先端をぶつけるだけ。

機体諸共なんて事は流石にごめんである。

機体と共に全身に衝撃が走る。大変苦しいがそのおかげで何かに当たった事だけは

確認出来る。

早急に機体を水平に保つ為に操縦桿を握る。その間に不時着できそうな場所を把握。

敵基地付近に存在する比較的真っ直ぐな地面を見つけ、擦りつけるように機体を押し

え、隼は土埃にまみれながらも停止した。

痛む身体を動かし、防風を開けて外を確認する。

震電のプロペラ部分に当たるとされる主翼は、先端だけでなく翼の半分ほどを持って

いかれた状態へと変化していた。

これはナツオ班長に怒られる。少しの覚悟と共に、視界にザラの機体が目に入る。

既に防風は開けられており、操縦席にはザラの姿が見えない。

基地へと潜入を試みたのであろうか。なんという行動力。ケイト、驚愕中。

この位置からは距離が置かれた場所であらうか、同じように土埃が立ち、機体が不時着したのが分かる。

プロペラが根本から消え去り、不時着時に破損したのであろうか、片翼が丸々失われている。

言うまでもなく震電だ。プロペラが消え去っているという事は、破損したプロペラを自爆させ安定性を求めたのか。

相手は機体を捨て、パラシュートで脱出するかわれたが、震電に搭乗していたパイロットは不時着を選択しようだ。少し意外である。

破損した震電の片翼は大地に突き刺さる様に自立している。

描かれているパンケーキとフォークの絵の様に。

怪盗団アカツキ その20

目の前にいる一人の男性。

周りの方々からは団長と呼ばれている人。

じーさまが出撃の為にこの部屋を出てからどれくらい経つただろうか。

何度目かの衝撃音が地面から伝わり響き渡るのが感じられ、その度に心が揺れる。

アカツキの皆さんではない事を、コトブキの皆ではない事を。

団長は今、真剣な眼差しでイケスカで撮影した執事さんが映し出されている映像を見つめている。

「そうか……我々が成そうとしていた事は無意味であつたか」

「意味の有無は私には分かりません。ですが私たちが争う理由は無いかと」

「イサオ様の言付通りであれば、我々は処分されるだろうな。時期ブユウ商事の会長になられる小僧に手を出し、攫つたのだから」

「そんな事はさせませんよ。只のハリボテか、飾りの名誉職だとしても、事実確認をしない限りは手出しはさせません」

映像を見つめていた視線がこちらへと移る。

先程までのような情熱と力強い意志を秘めていた瞳はどこへやら。

まるで捨てられた犬か猫のような弱弱しきさえ感じられる程に。

「小僧、貴様はこの様な目に遭つてもまだ先へ進もうというのか」

「進みますよ。まだまだ知らない事だらけのこの世界。唯一、分かつてきた事すら確認出来ていないのですから」

大まかな場所を掴んだまま、未だ会いに行けていない。この旅の第一目標である曾祖叔父の確認さえ出来ていないのだ

蛇行するようにあちらへ行つたり、そちらへ行つたり。それが嫌だったかと問われれば、否と答えますが。

「……小僧。いや、ハルト様はお強いのですな」

「背中が痒くなるので小僧でいいです。あと私はイジツ基準で考えればまったくこれっぽちも強くありません。そこらの子供にさえ撃ち落とされますよ?」

「それはあくまで戦闘機の操縦技術であろう? 精神的な事さ」

「私からすればイジツの人達の生命力と行動力には驚かされる事ばかりです」

「お互い、無い物ねだりか、あるいは隣の芝生は青く見える、という事か」

「ユー・ハングの諺をよくご存じで」

「師がそういった知識を好むおかげだな。時折、私に投げつけて来るのだ。分からないと答えた時の師は憎たらしい程、良い顔をするぞ」

「あのじーさまならそういう事をしそうですね。人をからかうような事を言つて相手を落ち着かせようとしたり」

「だが、戦闘機の腕は確かだ。我々でも落とせる者がいるかどうか」

「どれだけ凄いのですか、あのじーさま」

「腕前を買われ、イケスカ飛行隊の指導教官になられたお方だ。おかげで我らは未だにヒヨッコ扱いさ」

自虐的な笑みを浮かべているようだ。

目元しか分からないが、それでも先程よりは瞳に力を感じる。

「今すぐ停戦命令を出し、双方の被害を……。いや、我々の負けだ。今すぐ戦闘を中止させ、降伏しよう」

その時、部屋の出入口から声が聞こえ、誰かの姿が写る。

団長に銃を向け、鬼のような形相でこちらの方を見つめる一人の女性。

言うまでもなく、ロイグだ。

「動かないで！ 両手を挙げて、ゆっくりとこちらを向きなさい！」

「富嶽の対空砲をすり抜けて降り立ったか。大した度胸の持ち主だ」

「仲間たちのおかげよ。貴方たちに攫われたハルトを返してもらおうわ！」

「ああ、好きにしたまえ。我々は降伏する」

「降伏？ 一体どういう事かしら？」

もう一人、女性が現れて部屋へと進入してくる。

眉間に皺を寄せているが、ロイグに比べれば、幾分か表情は柔らかいリガルさんの姿。

両手を挙げて立ち尽くしていた団長を膝立ちさせ、持ち物検査を始める。

銃にナイフと様々な物が部屋の外へと放りだされる。

「言葉通りだ。ハルト様から話を聞き、イサオ様の言付を聞かせて頂いた。我々が君たちと争う理由が無くなったのだよ」

「それで降伏？ 都合が良すぎるのではなくて？」

「そうだな、都合の良い事を言っている自覚はある。だが、私が停戦命令を出さなければ、我々は弾も燃料も尽きるまで君たちと戦い続けるだろう」

「ロイグ！ リガル！ お願いです！ 団長に停戦命令を行わせてください!!」

団長の持ち物検査をしていたリガルに視線を合わせて懇願する。

しばらくの間、見つめ合っていたままであったが、小さく頷き、無線機を取りに部屋を出て行く。

「妙な事を口走ったら……」

「分かっている。好きに撃ちたまえ。ただし角度には気を付ける事だ。万が一、弾が私の身体を貫通したら後ろにいるハルト様にも当たるぞ？」

ロイグの顔が苦々しい表情へと変化する。

コロコロと表情を変化させ、親しみを持たせてくれるロイグに、銃を人に向けさせて、このような表情をさせてしまった事に後悔の念に駆られる。

戻ってきたリガルが団長に無線機を手渡し、私を一旦、横へとずらしてから、縛られている両手足を解放していく。

半日ぶりだろうか、自由に動かせる両手足を軽く動かしつつ、顔を上げてリガルに感謝を伝える。

今にも泣きだしそうなその瞳。何か上手く伝えて私は大丈夫だと伝えたかったのだが、その前にリガルに頭を抱えられるように抱きしめられる。

服越しに伝わる心音、暖かな温もり、頭の先には吐息と流れ落ちてきた涙。

団長の停戦命令と降伏を伝える声が、少しずつ遠い世界へ旅立つかの様な感覚へと変化していくのが分かる。

「大丈夫？ 立てる？」

「ちよつと厳しいかもしれませんが」

「肩を貸すわ。一先ずその椅子まで連れて行きましょう」

ロイグとリガルの手によって立たされ、一度部屋から出されるようだ。

部屋に残された団長は先程までの私のような状態にされ、その場に座り込み、頭を下げている。

「ハルト、貴方、軽すぎよ。もう少し食べないと」

「小食なもので申し訳」

「ロイグは無駄にでかいモノが付いているものね」

「リガルこそ、その大きなモノをなんとかした方がいいんじゃないかしら。引つかかった、って聞いたわよ」

「カーラーン!! よりにもよってロイグに喋ったのね!!」

私を挟んで口喧嘩を始める二人。

半日ぶりなのに懐かしさを感じてしまい、笑みが零れる。

だけど両耳は両人の声でそろそろお辛い状態になってきたので止めて頂きたい。

女性の身体的特徴に関して、悪態のキャッチボールをするのは私が間にいない時に行って欲しい。

部屋の出入り口まで辿り着いたところで、相手側の人間が覆面を被ったまま室内へと入ってきた。

「動かないで！ 団長の話は無線を通じて聞いていたのでしよう！ 覆面を脱ぎ捨てて大人しく投降しなさい！」

「……団長の話は本当か？」

「本当よ。話の続きが気になるのなら、投降して団長本人から聞きなさい！」

「そうか。ならば聞く必要はない」

腰に手をまわし、取り出した物は拳銃。

何かを考えるよりも先に、腕が動いた。

半日以上、縛られたせいで硬直していた身体は、私が何かを考えて決心をするよりも前に、私の望んでいた通りの行動を起こしてくれた。

両足に力が入り、借りていた二人の肩を突き放すように押し出す。

視線には相手の拳銃。それが火を噴くよりも先に、長く綺麗な足が拳銃を握る相手の手を蹴り上げようとしているのが見えた。

ザラさんだ。どうやってここまで辿り着いたのか分からないが、無事でよかった。

伸ばされた足が相手の手に触れ、拳銃が蹴り飛ばされるかと思われた。

だが、残念な事に相手も握りしめた拳銃を離す事無く、角度を変えられたままの状態
で引き金が引かれる。

乾いた音が室内に響き渡る。その後を感じる、謎の衝撃。

分かる事は、あれだけ力を込めて立っていた両足から脱力にも似た感覚を覚え、膝立ちの状態へと変化し、今にも倒れそうだという事だ。

『ハルト!!』

怪盗団アカツキ その21

顔に何かが当たる。

暖かくて、水滴のような何かが。

そのおかげで徐々に意識を取り戻していくのが分かる。気絶していたのか。

自身の顔を包み込む誰かの手の温もり。私の頬をよく弄んで楽しんでいた方の手。

後頭部からは柔らかな感触。この手の持ち主に膝枕をしてもらっているようだ。

左手も固定するかの如く、力強く握り締めている人がいる。割と容赦ない力加減ではあるが、誰かは分かる。リガルだ。

ゆっくりと目を開けると、無事を祈る為か、流れ出る涙を少しでも堪える為なのか、目を睨り大粒の涙を流しながら泣いているロイグの姿が見えた。

背中を丸めて俯き加減のロイグの瞳から直接流れ落ちてくる涙。どおりで顔中が水浸しな訳だ。特に口元と首筋の辺りが。

では額の辺りまで濡れているのは何故だろうか。

目に映る光景を観察する。ロイグの顔。泣かせてしまったのは申し訳なく思うが、とても綺麗だ。

問題は、顔そのものは半分程度しか見えていないという事。全体が見えている訳ではないのだ。では何が見えているのか、皆まで言うな。

神秘に満ち溢れた山々から流れ出る豊かな水源。峡谷には川が出来上がり、そこから山の麓へと水が流れて行く。

人々は川の水を手で救い上げ、飲み干す事で喉の渇きを癒し、生きてきた。それは昔も今も変わらない。

時には川に直接、頭を沈めて気の済むまで喉の渇きを癒した人もいるだろう。行儀は悪いだろうが、気持ちは大変分かる。

つまりだ、私も谷間から流れてくる水を飲み干したい。出来れば顔を埋めて！

その瞬間、額にデコピンを食らう。

誰かと手の先に視線を移すと、カランさんの姿が見えた。

「起きたじゃない。どう？ 体調の方は？」

「なんだか力が抜けてうまく動けません」

「動いちやダメよ。貴方は撃たれたのだから」

「……はあ？」

カランが指さす所を見て見ると、右の鎖骨部分辺りに応急処置が施された状態である。

「不幸な事にね。敵が決死の想いで引き金を引いて発射された弾は、天井から跳弾してハルトの鎖骨に真上からぶち当たった。理解は出来た？」

「生きているって素晴らしいぐらいでしたら」

「そうね、今のところは生きていられるわ……」

「なんですか、その意味深な答えは」

「いえ、このまま二十四時間程、放置されれば死ぬのになつて」

「二十四時間つて結構持ちますよね！ 応急処置をしてもらつたし！ 自分一人だけじゃないですし！ 今のところ死ぬような状況じゃないですよね!？」

「そうとも言いわ。クフフ……」

こんな時でも冗談を忘れない、ユーモアの塊みたいな人である。

「カランさん」

「今度は何かしら」

「手当をしていただき、ありがとうございます」

はいはい、そのような返事をしたのか肩を上げて仕草で済ませ、違う方の診察に向かつてしまわれた。

「……ハルト？」

「はい、ハルトですよ。ロイグ」

手で覆われている顔がロイグの手によって多種多彩に変化していく。もはやロイグの癖なのかね。

「ロイグ、リガル。怪我はありませんでしたか？」

ロイグは未だ名前以外の言葉が出てこないのか、リガルが喋り始める。

「おかげさまで、どこかの誰かさんが突き放してくれたから、尻もち程度で済んだわよ」
「自分でも信じられない程、身体が勝手に動きまして」

「別に責めてなんかいないわよ、ただね」

握っていた私の左手を、リガルは自分の頬へと導く。

「貴方は馬鹿よ」

「はい、馬鹿です、すみません」

「そこは否定しなさいよ。阿呆だ。って返せないじゃない」

「えーと、じゃあ馬鹿じゃないです」

「お婆か」

「ひどっ！ 結局お馬鹿さんじゃないですか！」

もう一言ぐらい返しておこうと思ったが、リガルの瞳からも同じように涙が見える。

その涙を拭う為に片側だけが親指を動かして優しく拭い取る。

それでも溢れ出てくる涙は、私だけでは止める事は出来なかった。

「……ハルト」

「はい、何でしょうか？ ロイグ」

「貴方は何であるの時、私たちを突き放して自分だけ狙われるように仕向けたの？」

「守りたかつたんだと思います、お二人を」

「そんな事は分かっている!! だけどハルトの事を守りたいのは私たちも同じなのよ!!」

「私も同じです。そしてまた、同じような事が起きてしまったら、また同じ行動を取ると
思います」

頬を思いつきり引つ張られる。私の顔は再び人にはお見せ出来ないような見苦しい
姿へと変貌している事だろう。

でも良いのだ。ようやくロイグが微笑んでくれたから。

「怪我人を相手に話し合いを始めて済まないな、ハルト」

「気にしないでください、レオナさん。何かありましたか？」

「まず初めに。ハルトをラハマの病院へと運ぶ為に一〇〇式輸送機をこちらへ呼び寄せ
る事になった」

「それってユーリア議員が搭乗されている飛行機ですか？」

「そうだ。我々の戦闘機では安定した飛行とイザという時の為の処置が出来ないからな。こういう流れになった」

「何故だか分かりませんが、機体の持ち主もやってきそうなのですが」

「……すまないが、対応を頼む」

目を逸らしながら頼み事するレオナさん。やっぱりこの人もそう考えてるんだ。

「二つ目だが……私たちと対峙した敵に関してだ」

「何かありましたか？」

「ハルトに向けて発砲した奴以外は、一切抵抗せず、武装解除を行った後は大人しくしているよ。だがな……」

「何か？」

「可能であれば、ハルトの直轄部隊として働きたいそうなんだ」

「はあ……。はあ!？」

「そこからは儂が詳細を話そう」

やってきたジーさま。特に手足も縛られておらず、ごく普通の足取りでこちらへやってきた。

「小僧……ハルト様を撃った奴がいただろう？ あ奴は我々に今回の任務を申し付けてきた側の人間でな。我々の行動を逐次、報告していたのだ」

「もう小僧で良いですって。その人はどうなっているんですか？」

「聞ける情報は全て聞き出した。方法は聞かない方がいい。大丈夫、五体満足で死んだりしませんよ」

「さいですか……って今回の戦いで死者は!？」

「幸いに誰も死んでおらんよ。みんな強運だよ」

「落とされた身からしたら、恐怖以外の何者でもないわよ」

「今度はザラさんがやってきた。どうやらこのじーさまの攻撃を受けて被弾し不時着した様子。」

じーさまは元気そうに大笑い。

「儂にあの手を使わせたのだから誇ってよいぞ。儂の一撃必殺だから」

「あんな奇天烈な動きから機銃を食らうのはもうごめんよ」

苦笑いをしながらもきっぱりと否定するザラさん。

膝をついて私の顔を覗き込む。

「ごめんね、ハルト君。私がもう少し上手く出来ていれば撃たれずに済んだかもしれなかったわ」

「それは言いっこ無しにしましょう。お互いにこうして生きていますから」

「……もう、誰それ構わず優しくしていると、いつか誰かに後ろから刺されちゃうわよ

「？」

「前から撃たれたので当分は大丈夫だと思えますよ」

開かれるザラさんの目、そして呆れたように笑い出す。

「そういう子だものね。病院に辿り着いて一段落ついたら、飛行船で話していた通り、頑張ったハルト君にはお姉さんがいっぱいご褒美をしてあげましょう！」

「マジで？ マジで？」

「ふふつ、何がいいかしら？」

「えーつと、えーつと、フガツ!!」

左右別々の手によって再び両頬を引っ張られる。

「この話の続きはまた今度ね」

微笑みながら立ち上がり、手をひらひら動かして離れて行くザラさん。

「ハルト、今の話、詳しく」

「単語で喋られると怖いですよ！ ロイグ！ ちゃんと後で話しますから！」

「ふむ……。小僧はイサオ様とは別の方向で人心掌握に長けているのやもしれんな」

「じーさまの目は節穴ですかね。節穴ですね」

「小僧は容赦ないの……」

「翁。私たちもよろしいでしょうか」

た。　　じーさまから言葉が聞こえた方へと視線を移動させると、副長とケイトが立っ

「儂が言うのもなんだが、手短にな。一応怪我人だからの」

「カランさん曰く、直ぐには死なないようだけど、負傷？　重傷？」

「軽傷。三十日未満の治療を要する人に該当する」

「流石ケイト。物知りですなあ」

「ハルト様はなんといいいますか、穏やかを通り越している気がします」

片膝をつき、こちらを覗き込む姿は所謂、女騎士。イジツの世界は夢いっぱいだ。

「ハルト様、これまでの数々のご無礼をお許しく下さい」

「許した」

「……」

「許しましたって、本当に。罰則を求めるような顔をされても何もありませんよ？」

「なんで？　どうして？　そんな表情をされてもこっちも困る。困り顔が可愛いよ、この人。」

もし、ザラさんと出会わなかったレオナさんはこの人の様になられていたのかも、いや人を比べてはいけない。

「一つ、お願い事をしてもらいたいのですか？」

「一つと言わず、いくらでも。団長からはそのように指示を受けております」

「それについてはまた後で、富嶽を利用したいと考えているのですが」

「富嶽をですか？ 一体何をなさるおつもりでしょうか？」

「本当はイサオさんと一緒にと考えていたのですが、土産話ついでに下見をしてみようかなと」

「すみません。何をおっしゃっているのか……」

また困り顔にさせてしまった。

「富嶽に搭乗して、可能な限り高度を上げて、イジツの果てを見に行こうかと」

その後、副長は駆り立てられるように富嶽の警備と整備を入念に行うと約束してくれた。た。

今すぐにでもと室内から飛び出そうとしていたところを、団長に拘束され自分たちの置かれている状況について説教をされている。

「ハルト」

「あい、ケイトはどうしたのかな？」

「震電について伝えたい事がある」

「副長が搭乗して出撃したような記憶が少々。それがどうかしたの？」

「敵として現れた震電を止める為に、震電に損傷を与えてしまった事について謝罪したい」

「いやいや！ それは仕方ないよ！ 無傷で震電を降ろす方法なんてないでしょう!」
交わっていた視線がほんの僅かずらされる。何を考えてたの？ いやケイトの事だから実際に行つたんでしょ！

「ケイト、何をしたのかな？」

「敵として現れた震電はイサオの様な歪な機動を取る訳でもなく純粹に機体性能を限界まで利用する為徹底した一撃離脱戦を使用し隼に搭乗しているケイトたちでは通常手段では撃墜は不可と判断された為仕方なく選択した方法であり本来はこのような手段を選択する事はケイトとしても遺憾である」

「……震電に何をしたの？」

「隼の主翼先端部分を震電のプロペラに当て、無理矢理落とした」

右腕を上げてデコピンでもしようとしたら、激痛が走る。

そうでした。撃たれた肩はこちらでした。おかげでぼんやりしていた意識がハッキリとする。

「ハルト、無理に動いてはいけない」

「動かしたくなる様な事を発言したのは誰かな!？」

「ケイト。コトブキの安全を優先させる為に震電を落とす事になり……」

「ケイト、怒るよ?」

僅かにずれていた瞳が再び交差する。不安そうな目をしても駄目なものはダメ。

でもケイトがそのような手段を取るのだから、本当に危うかったのだろう。

ぺたんこ座りのケイト。無造作に床に置かれている指先をなんとか掴む事に成功する。

想いは言葉に、時には行動で、その両方を行った場合は?

「ケイトがさ、その考えに至り、行動に移したのなら、本当に危険な相手だったと思うんだ」

頭だけを動かすケイト。

「コトブキの事を考えて、自分に出来る行動が何かを追及したら、その手段になったんだよね?」

再び、同意するように動かす。

「だからさ、今度は行動に移す前に、守りたい人たちに、仲間たちに一言伝えようね」

まさか、あの一言からケイトがこのような行動を取るとは思わなかった。

こういう行動を起こさせてしまった一端は自分の発言も影響しているのではないか。

考えすぎかもしれないが、何時かレオナさんからちよつとした失敗談とそれからの話

を聞いた事があり、そう思ったのだ。

「じゃ、この話はこれでおしまい！ エンマに大層怒られたでしょ？」

「想定以上のお怒りだった」

「なら私が怒る必要なんてないね！ ケイト、無事でよかったよ」

人に何かを説くような身ではない。

何時だって教えを請う側の人間。

それでも伝えたい気持ちはあるものだ。

大きな欠伸が出る。目の端に掴まれた両手の先はスベスベとして柔らかい。勿論、後頭部も。

「こんな時に変な事を言ってもいいでしょうか？」

「何かしら？」

「今、私の人生で最も幸せな時間だと言い切れるのです」

怪盗団アカツキ おしまい

あれから約二週間後。

ラハマの病院で治療を受け、しばらくはアレンのお隣で入院をしていた。

撃たれた箇所は鎖骨に当たり、骨に埋まる様に弾が止まっていたと医者が話していた。

嬉しそうに摘出した弾を贈り物と称して渡すのは如何な物かと思うんだ。

アカツキの事から。

あの後、怪盗団アカツキは一度、ロイグのおじいちゃん家まで戻る。

おじいちゃん達が帰ってきた時の、ロイグの形相は凄まじいものだったとレンジさんが笑いながら教えてくれた。

夜明けの鷹についても再び、念入りに洗いざらい聞き出し、子孫と思われる人達を見つけた何人かと接触できたようだ。

今度はロイグのおじいちゃんが財を成す事に成功したと聞かされた、戦闘機レースを主催する人と接触するとか。

ついでに私からのお願い事も伝えてもらい、無理矢理ながら承諾を得たらしい。ベツグさんとニツカさんは大忙しだろうなあ。

コトブキについて。

入院中、マダムが面会に訪れてきてくださり、提示された請求額に目玉が飛び出るかと思つた訳でありまして。

その後、「本来ならば」という言葉と共に破れていく請求書を見つめてちよつとだけ安堵した。訂正、滅茶苦茶助かりました。

マダムのセレブジョークは心臓に悪いのである。

機体が破損した組は、再び短い休暇へ。

病室に訪れたザラさんからは、褒め褒めわしやわしやむぎゅーを頂く事に成功する。お酒臭かったのがザラさんらしいけれど。

ケイトは毎日、病室へと足を運んでくれて、ご飯を食べさせてくれた。

雛鳥に対する親鳥みたいで恥ずかしかつたのだが、利き手を動かせず、左手で食べるよこぼしてしまうので仕方ないのだ。

アレンはアレンでロイグから提供された資料に夢中になり、ケイトに怒られている。

その他、諸々。

ユーリア議員に対してサブジーについて問い詰めるナオミさん。

撃墜された場所を伝えて、そこへキリエを連れて向かおうとした瞬間、新しい情報を追加するユーリア議員。

「今更そんな場所に行つた所で何も残っていないわよ」

「それつてどういう事よ!」

「ハルトに聞いてみなさい」

「ここは病室。ユーリア議員が手に持つ物は私のご飯。運ばれる先は言うまでもなく私の口。現在、餌付けされ中。」

「ナオミさん。富嶽を飛ばす日までお待ちいただけませんかでしょうか?」

「富嶽が飛ぶのとサブジーに何の関係があるのよ?」

「サブジーらしき人の機体を、イジツの最果てで見たという情報がありまして、場所が場所なので富嶽から搜索しようかと」

「……アンタ、嘘だったら酷い事になるわよ?」

「嘘を付く理由はありません。何ならパンケーキに誓いましょうか?」

「それで通じるのはキリエだけよ!」

「じみに悪口を言われてる気がするんだけど!」

渋々といった様子を隠す事無く病室から出ていくナオミさん。
キリエはまたね！　と言つて出て行つた。

何かを言いたげな視線を送りつけてくるユーリア議員。その口が開かれる。
「ウソツキ」

前日までの出来事。

マダムに電話を借りて、イケスカにいる執事さんと連絡を取る。

私の直轄部隊の援助と真相を探る為のお願いを伝える。

「ブユウ商事の長となる風格をお持ちになられてきましたな」

「誰のせいですか！　あと会長職についてはまだ確定ではないし！」

「お任せ下さい、ハルト様の指示が無くとも書類の偽装など一つや二つ、お茶の子さいさいでござります」

「それで得をするのは全面的にイサオさんと執事さんですよね!?　やめて!!」
直轄部隊。

団長、副長、翁と富嶽運用兼整備部隊でまとめられていた形を少し変化させた。
というのも、じーさまが私の元に連絡役として残ると言い始めたから。

あの愉快そうな顔は絶対にそれだけじゃないと思う。

その結果、団長と副長で再編成された部隊はアレシマで飛行隊として登録をする事に。

イケスカ所属にも戻れないし、ブユウ商事所属にも出来ないからね。

食い扶持を稼ぎつつ、真相を探りながら空賊共を潰してもらおう事にした。援助と情報交換は密です。

「しかし、ハルト様は私めの事について何かお聞きにならないのですか？」

「今更聞いて何が始まると言うのですか。みんな個人的な思いを抱えて生きているのは当たり前前の事でしょうに」

「ですが、ご質問頂ければこちらとしては返答する意志がございしますが」

「これ以上の荷物は背負えないので結構ザマス!! イサオさんを連れて戻るまで部隊の事を頼みました。あとキラメキ卿とか偽の指示を出した奴を見つけたら全力で!!」

「スメラギ卿でございませす。了解致しました。全力で取り掛かせていただきます」

「よろしくおなしゃす!!」

電話を切り、肩を下ろす。

あつちのジジイもこつちのじーさまもそつちのおじいちゃんも皆好き勝手に動きすぎなんじゃない!!

クスクスと上品な笑いをするマダムの姿。

「ハルト君、貴方って面白い子ね」

「どこら辺が面白く見えるのですかね？」

「精一杯、頑張っている姿が、ね」

笑ってはいけないのだけれど。そう紡がれる言葉を聞いて恥ずかしくなった。

そして現在、富嶽に搭乗して高度約一万キロクリールを飛行中。

道中、高度を上げるまでアカツキの皆さんに護衛をしてもらい、通常の地図とロイグから借りている地図を比較しながらイジツの果てへと進行中。

操縦席にはじーさまとリリコさん。

通信席にはアレンが。

窓辺にある一つしかない座席にはユーリア議員がお座りになられている。あれ？

私まだプレートが埋め込まれている怪我人なのだけど。

与圧装置を搭載しているだけあり、普段と変わらぬ姿でいられる。富嶽って凄い。

私は現在、富嶽の床の上に座っている。座布団を引いてあるから特に不便では無いのだけれど……。

「その姿を見てみると懐かしいよ。ケイトは昔、お気に入りぬいぐるみを持っていてね。そうやってよく抱きしめながら寝ていたなあ」

「アレン、余計な事は言わなくていい」

「枕を抱きしめて寝る癖を直してから言うべき台詞だよ」

私より重ねられた座布団の上でぺたんこ座り。

身体を固定するようにケイトの腕が後ろから抱きしめるように伸びている。所謂、あすなる抱きの腰版。

それは密着と言つても過言ではない距離。左肩にはケイトの顎が乗せられており、吐息が耳にかかる。

皆まで言うな。ケイトは着痩せするタイプなんだ！

「お楽しみ中に悪いが目標地点が見えてきたぞ」

ついに西側からイジツの果てへ。

窓辺に移動する為に立ち上がろうとすると、ユーリア議員から手が伸びてくる。

お借りするように手を重ね合わせるが、ちよつと過剰な握り締め方じゃないですかね
!?

そういつた事もありつつ、外景を覗けるところまでやってきたのは良かったのだけ
れど……。

「積乱雲のせいで下は強風と大雨、アノマロカリスが吹き飛ばされながら空を飛んで
るし。上はそこから中で雷だらけ……」

「まあ、そうよね」

「え？」

極当たり前のようにユーリア議員から返事が来る。

「当然だろうの」

「当然ですね」

「当たり前の結果かな？」

「イジツで知られている現象をこの目で確認が出来て、ケイトは嬉しい」

「えーっと、もしかして皆さんご存知で有られましたか？」

「もちろん。熱弁をふるう人に対して現実を押し付けるのは野暮というものでしょう

？」

「あああああ!!」

リリコさんからの衝撃的な発言に心も身体も震える。会いたくて！ 会いたくて仕方なかっただけなのにみんな知っていた!!

悶えている最中に左肩を優しく叩かれる。ユーリア議員だ。

いつもと変わらない綺麗な瞳。優しい表情。一つだけ問題なのが、左手を自身の口に添えている事。

穴があつたら入りたい。

「空がとても青くて綺麗ですね」

「そうなの。我々は空を飛んでいるにも関わらず、上を見て飛ぶ事が少ないのだろうな。ほんの僅か、顔を上げれば一面に広がる青空で視界を埋め尽くせるというのに」

「この景色を見せてくれた事は感謝しないとイケませんね」

「おお！ 富嶽の姿が見えてきたぞーっ!!」

チカの声と共に富嶽へと視線を合わせる。

イジツの果てを見て来た後に、一度、例の基地に帰還して何かを運び込み、ラハマで見せたい物があるとハルトから聞いている。

責任者である以上は全てを聞いているが、それを言葉にするのも野暮というものだろう。成功するか分からないと当人が言っていた事だから。

ラハマにある小高い丘の上。そこへケイトを除いたコトブキ飛行隊の隊員。ロイグにリガル、そしてナオミがいる。

「待てと言われて待ち、来いと呼ばれて来れば、富嶽を見せたいだけなのかしら」

「ハルトならそんなまどろっこしい方法は取らないと思うよ、ナオミ」

手元の時計を見る。そろそろ始まる頃だ。

「時間だ、ハルトからの言付では富嶽の下方辺りを見つめて欲しいとの事だ」

「富嶽の下？　って爆弾積んでる場所から水が流れ落ちてきてんじゃん！」

「あらまあ、ナンコーの火災消化の時に使いたかつた贅沢な手段を使用していますわね」
皆、其々に思う言葉を投げかけながら富嶽を見つめている。

落下する水が霧状に変化し、地面へと向かつて行く最中、七色の何かが見え始める。

「これは……」

「うはあ！　あれって虹じゃない!?　色々な色で光ってキラキラしてるよ!!」

「これが虹なのね……」

「ふふっ流石はハルトね。この私に更に美しいモノを見せてくれるのだからー」

町にいる人達も気が付いたのだろう。窓を開け、空を見上げて眺めている人達もいる。その光景と一緒に一粒ほどの大ききさでしか見えない何かも。

「もう一つ、ナオミとキリエに言付を預かっている」

「へあ？　私にも？」

「虹を見たなら、街中を向いて欲しい、と」

「街中あ？　別に変わった様子なんて無かった……」

ナオミの言葉が途中で途切れる。

周囲に響き渡る富嶽のエンジン音。そして虹。これらによって隠されていたもう一つの用件。

こちららに向かつてくる一機の戦闘機。

全体を濃緑色で染め、垂直尾翼にはキリエが使用しているパーソナルマークによく似た鳥の絵。

私たちがいる丘を中心に旋回を始めるその機体は、零戦三二型。

搭乗者は言うまでもなく。

「サブジー……サブジーだ!!」

「キリエ!! 行くわよ!!」

「ど、どこへ!? だってサブジーが!!」

「だから!! そのサブジーを追いかけろんでしょうが!! ここで逃したらまたどこかへ姿をくらますわよ!!」

戸惑うキリエがこちらに顔を向ける。

行つて来い。そう一言だけ伝える。素直に頷き、ナオミの後を追いかけて走つて行つた。

「私がハルトから預かっている用件は以上だ」

「あの時、頑張った甲斐があるってものだね!」

「そうですわね。こんなに素晴らしい景色を見せて頂けたのですから」

「私たちも仕事だけを理由に飛ばず、もう少し肩肘張らずに空を飛ぶのも良いかもね」

「ああ、そうだな」

兵器として生み出された富嶽。それをこのような形で、皆の顔を空へと上げてしまうモノへと変化させてしまうのだから。

人一人が現れただけで、この大騒ぎだ。

「凄かったわ、ハルト」

「本当に。惚れ直したわ」

「あら、怪盗殺しが本気になっちゃったわけ？」

「どこかの金持ちが今以上に美しいモノを見せてくれるなら、話は別よ」

「そんな人、いる訳ないじゃない」

「ロイグこそ、どうなのよ？ 敵はそれなりに多いわよ？」

「そんな事、決まっているじゃない。でもその前にハルトに送り付けてあげなくちゃ！」

「相変わらず好きね、貴女も。何を送り付けるのか当ててあげましょうか？」

リガルと顔を合わせる。

言わなくても分かっているのだろうけど、私にとっては大事な事だから。

ちゃんと言葉にしておかないと！

『予告状!!』

ハルト。実は私、一つだけ貴方に嘘を付いていたの。

アレシマで見た、紙に書かれていたユーハングの文字。読めないふりをしていただけ、実は読めていたの。

だけど意味までは分からなくて、頭にずっと引っかかり続けていて、聞くにも言い出しにくくて。

実家に帰省した際に、ふと昔読んだ小説の事を思い出したの。

イジツ語で訳されていた小説の中でも、一際印象に残る不思議な言葉。

男性が女性に向けて放つその言葉は、当時の私には理解が出来なくて、その言葉に対して返答をする女性の言葉も理解できなかつた。

月が綺麗だと問われているだけなのにつて。

部屋中を漁り、ユーハング文学に関する書籍を探し、おじいちゃんの部屋にまで入り込み、ようやく一冊の本を見つけた。

そこに書かれていた、文字を意味する言葉。

もやもやとしていた心が晴れた代わりに、鼓動が抑えきれなくなつた時、窓からバルコニーにいるハルトの姿を見て、全てを理解した。

貴方に送る予告状の内容は最初から決めてあるの。

封を開けて読み上げた瞬間、驚いてくれたならとても嬉しい。

私、死んでもいいわ。

怪盗団アカツキ その後のロイグと

心臓というものは、どうしてこうも身勝手に鼓動を早めたり、時にはぎゅつと締め付けるような行動に移したり、穏やかな心を保つ事が出来たりするのだろうか。

私はとある人からお手紙を頂いた。それは予告状と呼ばれている物である。

もう一人については……。そちらはまた別の機会にしておこう。女性と会う前に他の女性の事を考えていたら拳で殴られても弁明できない。

私がまだこちらの世界に来たての頃、アレシマで追われているところを匿ってもらい、感謝の印としてお手紙を渡した事から始まったお話。

当時は何も考えず、何かに導かれるようにしてとんでもない文章を書いてしまった。それは破棄をしてメモ書きにすればいいやと当時は思っていたのだけだ。

だが、本日待ち合わせをしている女性が目敏くその紙を拾い上げ、読み解こうとし始めた。

日本語で書かれていた物だったので、当時はそこまで気にも止めずにおり、書かれている内容について問われたら、貴女は綺麗だと返せるぐらいに余裕はあった……。気がする。

手元にある予告状はとても可愛らしい装飾が施され、怪盗団アカツキのマークが描かれてある。

ラハマで治療に専念していた時に届いた予告状。何故、私の元に予告状が届いたのだろうか？ 考えても仕方ないと思い、ペーパーナイフをお借りして中身を見る事にした。

予告状の中身は、本日待ち合わせをしている女性からの物であった。ただし、一つだけ問題があったのだ。私にとっては。

そこに書かれていた文字は一行だけ。とても簡素で他の人が見た場合は一体何の事だと思おうであろう。

しかし私には理解が出来た。予告状に書かれていた短い文章は、アレシマで出会った時に日本語で間違えて書いたお手紙の内容について、返答として使われている文章だったから。

彼女は当時から知っていたのか、それとも何かしらの方法で答えに辿りついたのかは分からない。

それを知る為にも、お互いの気持ちを確認する為にも、少しだけ遅くなってしまうデートを始めたいと思う。

「お姉さんを無視して考え事かしら、ハルト?」

「いらつしやい。お待ちしておりました。ロイグ」

始めて出会った時と変わらない。むしろ他人同士であったあの頃よりも、もっと魅力的になったお姉さんが待ち合わせ場所に現れた。

椅子に座っている私に向けて、少しだけ前屈みになり、こちらに視線を合わせる為に首を傾けている。

こういうちよつとした仕草が見た目麗しい姿との違いを引き立て、可愛らしさを強調しているのだろうと考えてしまう。

先手を取り、上手くデートでリードをしたいと試行錯誤していたのに、仕草一つでこれからどうすれば良いのか吹っ飛んでしまう。

そんな私の状況など露知らずのロイグは店員に注文を頼む。珍しく樽ジョッキとは縁のない飲み物を注文している。

「珍しいですね。いつも通りの物を注文されないのでですか?」

「だって……。デートでいきなり樽ジョッキを注文する女性はハルトからしたらどうなのかなあーって」

私から視線を外す様に顔を背け、照れつつも指先を弄りながらそう私に伝える。先手を打つだけでなく追撃まで入れてくる。それにまたキツチリと当たってしまう自分の

情けなき、ロイグの巧みな攻撃故か。こういうのは卑怯なのではないか。

不意打ちどころか真正面から攻勢をかけられる。上手く返す方法は無いものかと考
えるが、私の視線はもによもによと動くロイグの艶やかな唇に目を奪われたままだ。

いつもとは違い、薄く紅色に染まるその唇。ロイグも今日は私とデートなのだと思
してきていたと思うと嬉しさが湧いて来る。

「いつも通りのロイグも好きですけど、アルコールはもう少し暗くなつてからにしま
しょうか。丸一日お付き合いして頂きますから」

「すー、好きって！……って言われても、樽ジョッキで飲み干している姿を好きと言
われて女心としては複雑なんだけど！」

「始めて出会った時からそうだったじゃないですか。そのせいかどうしてもロイグは樽
ジョッキって印象が先行するのと、美味しそうにお酒を飲んでる姿が目につかんで」

「私も普段は紅茶にしようかなあ……。ってハルトはやっぱり紅茶なの？」
「ここで頂いたアールグレイが美味しかったもので」

そう伝えると顔をぶくうと膨らませて怒る……。いや、いじけてしまったロイグがい
る。

私にアールグレイを注文してくれた人はもう一人の女性だったせいもあるのだろう。
でも心休まる私にとって大切な思い出の味なのだ。

この気持ちもロイグに共有して欲しいな。あの時、私がどれだけ二人に助けられた事か。

「ロイグ。よかつたら一口、如何ですか？」

「一口？ って何を？」

「勿論、アールグレイの紅茶ですよ。私があの時、この一杯でどれだけ心を落ち着かせる事が出来たのかロイグにも共有して欲しくて」

「どこにでもある普通の紅茶だと思っただけ？」

「この場所で、このお店で、ロイグとこの気持ちを共有したいと思つたのです。無理にとは言いませんが」

「む、無理じゃない！ そっか、共有かあ……へへっ」

ロイグの前に自分の使用していたカップをソーサーの上に乗せ、音を立てないようにゆつくりと置く。

きちんと保温されているティーポットから空のカップへと紅茶が注ぎ込まれていく。この時、茶葉からとても豊かな香りがする。

差し出されたカップ。注がれた紅茶。ロイグはソーサーとカップに手を伸ばし、香りを楽しみ、紅茶に一口。その仕草は紛うことなきお嬢様。

気品に満ち溢れ、貴族の令嬢だと勘違いされても仕方ないと思わせる程、違和感を感じ

じさせない。

傾けられたカップから少し遅れて動く喉。音を立てず、日常的な行為とも思わせるのだが、次第に顔を俯かせていく。口に合わなかったのだろうか。

「ねえ、ハルト」

「なんででしょうか？」

「アールグレイって心を落ち着かせる効果があるのよね？」

「はい。心と身体をリラックスさせてくれる効果がありますが、どうかしましたか？」

「心臓の鼓動が、先程よりも落ち着かないのだけ……」

ロイグの視線がカップに注がれている。

唇を当てた場所であろう。そこには薄っすらとロイグの紅色が付いている。

ああ、そうか、間接的な何かになってしまったのか。緊張のしすぎでそこまで頭が回らなかった。

善意の行動だとはいえ、指摘されてようやく気が付いた自分も恥ずかしさを覚える。

「所謂、間接キスになっていましたね」

「そういう事は言葉に出さなくていいから！」

「大事な事だと思っただけ」

「大事だけど！ 恥ずかしいの！ ハルトは恥ずかしくないの!？」

「ようやくロイグとデートが出来る機会に巡り合えて、嬉しくて舞い上がっている状態なものでして」

「もう！ そうやって上手く誤魔化すんだから！」

「本心です。頭の中では必死に本日の計画表を立てていて、ロイグに何をしたら喜んで貰えるかずっとお悩み中です」

ロイグの照れた姿を見て吹っ飛んでいた本日の予定を少しづつ思い出す事に成功する。

この連日、暇を見つければアレシマの観光マップを覗き込み、何処へ向かうか、何をするか、一緒に楽しんで貰えそうな場所はと思考を重ね続けてきた。

おすすめスポットをザラさんやエンマ、羽衣丸の操舵手をしているアンナさんとマリアさんに聞いた事も。果てはキリエにオススメのパンケーキまで聞く程に。

そうして得た情報を元に緻密な計算を行い、向かう先のお店が休業日だなんてオチがつかないように調べ上げていたのだ。

なんだか偉そうな事を言っているが、いざ本人が目の前に現れ、これからデートを始めましょうという現実を目の前になると、緊張のあまりに頭が真っ白になり、先程までどこかにすっ飛んでいたのですが。

仕草一つで私を混乱状態に貶めている本人は、何か面白い事に気づいた様で実に楽し

気でイタズラ心満載の表情を浮かべている。

「ふーん。今のハルトは私の事だけを考えていて、私に夢中なんだ？」

「そう言われるとロイグの顔を直視する事が出来なくなります」

「さつきのお返しよ！ でも、嬉しいなあ！」

「嬉しいですか」

「ハルトが私の為に必死に考えてくれているんだもん。それだけで愛しくてたまらないわ」

「今日のロイグは押しがお強い」

「決まっているじゃない！ 先手必勝！ 今日中に勝負をつけておかないとね！」

久しぶりに感じるイジツの女性の肉食的なまでの勢いと力技。

では私は草食か？ 今回に関しては違うと言い切っておこう。本日は私も全力で相手務めさせて頂きます。

そうしなければロイグに大変失礼な事をしてしまうから。それどころか後ろから刺されても仕方がない事だ。ああでも怒った顔も凄く綺麗で可愛らしく感じてしまう。知らず知らずに病にかかっているのかも。

始めて経験する病。動悸息切れ食欲不振に注意力散漫、暇されればその事しか考えられなくなる。まさに大病だ。

でも本日はその病に身を任せよう。ロイグの事だけを考えていたいから。

店を出て身に任せてのアレシマ散策。という訳ではないが、目的地の道中には目移りしてしまう様々なお店や物で溢れかえっている。

時折、足を止めてお店を冷かしてみたり、ちよつとした着せ替えごっこの様な事をしている。

ロイグがいつも着ているノーカラーコートとを別の物に変えてみたり。襟付きのスタンドカラーコートやトレンチコート。正直に言ってしまうと全てが良く似合っている。

そこにチロリアンハットの帽子を被せてみれば、華やかで人目を引くほど流麗な線を見せつける美人さんの登場だ。

ロイグは自身の姿を見て思いついた事があつたのだろう。私に向けて銃に見立てた指を差し、放つ。可愛らしい発砲音付きで。

そんな事をされたらこちらはいとも簡単に撃ち抜かれてしまう。せめての抵抗として上半身を動かして避けるような仕草で返す。

避けられた!? そんな表情をするロイグはもう一つの手もこちらに差し向けてくる。流石に二丁銃を扱うような相手には勝てない。肘を曲げる程度に手を挙げて降伏。

それを見て満足そうに見つめてくるロイグ。それでも指を戻す事無く、私の心臓の真

上に指を押し付け、再び聞こえる発砲音。

「バーン!!」

降伏するも空しく、私の心臓はロイグの手によって撃ち抜かれた。

「コート一つ変えるだけでも印象が変わりますね。とても良くお似合いですよ」

「ありがとっ！ ハルトはどれが好みだったかしら？」

「個人的にチェスターコートとシルエットが素敵でした。盗みを行う時には派手すぎて駄目かもしれません」

「派手にやるのは好きだけど、そういう時に着て行くコートではないかなあ」

「まあそうですね」

「ただし！ デートとなれば話は別だけどね！」

そう言いながら私の腕に自分の腕を絡ませ、急接近を仕掛けてくるロイグ。

突然の事で対応が出来ず、完璧な奇襲を決められ近距離で目と目が合う。

やられる。いや、そう意味であるのなら、私は既に撃ち抜かれている。

喰われる。こちらの方が正しい気がするが、結局のところ攻められている側なのは変わりない。

どうすればこの場を乗り切れるのか。むしろ逆にここから攻め返したらどうなるの

だろうか。

考えを巡らしているおかげで一つだけ気づいた事がある。圧倒的優位に立っているはずのロイグの表情だ。

引き締まっているとも緩んでいるとも掴みとれない表情。もしかして行動を起こしておいて自分でも照れているではないか。口の両端が僅かに震えているので隠しきれない。

そんなロイグの姿を見て冷静さを取り戻す。と言いたいところではあるのだが、抱きしめられている腕を今風に言うならば、凄いでかい何かに固定されているのだ。

表情に現れないよう必死に顔に力を入れているのだが、それが逆に仇となってロイグと似たか寄ったかの状態に。

「もう！ 笑わないの！」

「すみません。撃墜されかけたところに救いの手が差し出されたかと思っただけです。」「畏だったもので」

「むう。あとちよつとだったのね！」

「前半戦で落とされていたら後半戦は一体どうなることやら」

「素直に落とされてくれてもいいんですけど」

「パツと素早く私から離れるロイグ。」

自身の手を頭の後ろ側にまわし、何処か遠くを見つめるようにしながら口笛を吹いている。時折、空気が漏れる音が聞こえる。

再びこちらに顔を向けてくれた時、視線が交わり、照れるように微笑み、笑い合う。しばらくして、こちらからロイグに向けて手を差し出す。慣れない事の連続で本来の目的を失いそうになっていたが、本日はデートなのである。

喰うか喰われるか、それは一先ず横に置いておこう。この貴重な時間をめいっぱい楽しまなければ。とびっきりの思い出になるぐらいに。

こういった事に慣れてないのなら、慣れていない人間なりに。

私が差し出した手に、ロイグは自分の手を重ねてくれた。

一度だけ、この手を離さないと誓うように握る。それに応える様に握り返される手。

お互いにお互いの指を擦る様にして確かめ合う事で、ようやく本来の距離感に戻った感覚がある。

それはロイグも同じだった様だ。先程までの力の入れようとは違い、肩の力が抜けたように落ち着いている。

再び視線が重なり合う。照れるような事もなく、これが当たり前前の様に振る舞う。

これを日常に出来るかどうかは、この後の頑張り次第だ。

オーシャン・サンフィッシュホテル

本で行われたデートの最終地点である。

このホテルの高層階に一つ部屋を借りている。ここでロイグと一緒に見たい光景がこれから行われるのだ。

この時期に見晴らしの良い部屋を借りる事が出来たのは運だけではない。あの手この手と頭を下げてようやく手に入れたのだ。

バルコニー部分に椅子とテーブル。樽のまま置かれたお酒であったり、ボトルに入れられたお酒であったり。ロイグが注文していた時にも思ったが、消費出来るのだろうか。私は下戸と言っても過言ではないぞ。

とはいえだ、これから先の事を考えれば一杯頂いておく方が無難だろうか。

いや、やはりこういう事を伝える時は素面の状態で伝えるべきか。でもロイグは呑んでる状態だろうしなあ。

イベントが始まるまでもう少し時間がある。考えてみよう。

サンフィッシュホテルに辿り着く前、肩の力が抜けて純粹に楽しむ事が出来た日中の出来事。

事前にアレシマの広間で神出鬼没に現れるという美味しい屋台があると聞いており、情報収集を行った結果、本日この時間に高確率で遭遇する可能性が非常に高い事が判

明。なんていう会話をロイグと交わしながら広間の方へと歩いて行った。

辿り着いた先には、一部に人ばかり。地面に置かれた看板を確認すると、間違いのないこのお店だ。

順番待ちの列に一緒に並び、前の人から手渡されたお店のメニュー。これがまたどれも美味しいと評判なのだ。

ロイグからは「何にするの？」と聞かれたが、実はもうこっそりと決めていたりする。事前情報が正しければ、このクレープが大変美味しいと評判なんですよ。ロイグに伝えると「それじゃ私もクレープにしようかな」と言われる。

なら違う味を注文して食べ比べをする事に。二人別々の味のクレープを注文する。

店員さんから渡されたクレープを大切に扱いながら、広場中央の縁石に座りいただきます。

私の頼んだ抹茶クリーム。アレシマ限定商品らしい。一口食べて抹茶のほろ苦さを通常のクリームがカバーするように包み込む。甘すぎず苦すぎずたまらない。この際、材料はどこで仕入れているのだろうとかは気にしては駄目なのだ。

ロイグはベリークリーム。酸っぱい味に甘さが絡み丁度良い味になっているようだ。

お互いにクレープを差し出し、一口頂戴する。ロイグの言う通り、酸っぱさと甘さが同居していても美味しい。

堪能しているとロイグから「動いちやダメよ」と指示が下る。大人しくその場で動かずにいると、近寄ってくるロイグの姿。

とはいえ、動くなどの指示がある以上は何か理由があるのだろう。じつと我慢をしてると、頬の辺りに暖かな感触がする。

流石に私でも分かる。きつと私の頬にクリームが付いていたのを、ロイグが……その、拭き取ってくれたのだ。

唇以外にも柔らかなものが頬に当たり、沿う様にして動かされる。

ありがとう。感謝を伝えると、酷く挙動不審なロイグからカタコトの返事が来る。

その様子を見てみると、こちらまで感染する様に気恥ずかしさが全開になり、ロイグの顔を注視出来なくなる。

傍から見ているれば私たちはどの様に見えるのだろうか。仲の良い兄妹か、いや、姉弟か。

それを乗り越えて行きたい。ロイグの隣に居る事が不自然と思われない様に。

目の前に邪魔をする遮蔽物の無い夜空に打ち上げられる花火。夜空に火薬の綺麗な華を開く度に「たーまやー」の一言を乾杯代わりにして樽ジョッキを飲み干すロイグ。花火が始まった頃、バルコニーに配置してあった椅子から手すりの傍に移動し、二人

並んでこの光景を眺めている。

打ちあがる時に聞こえる、火花に取り付けられた笛の音。上空で爆発して遅れてやってくる大きな音。一瞬だけ眩い光を放ち、隣に居る人の横顔を映し出してくれる。

手すりに腕を置き、そこに自分の頭を置きながらロイグを見つめる。お酒が回って来たのか、その表情はうつすらと赤みを帯びている。

その姿を見つめながら今日の出来事を想い浮かべる。

本日のデートで喜怒哀楽の内、哀以外の表情は見れたかな。自分の為に泣いてくれたあの姿も、神秘的で夢心地ですらあったけれど、表情としてはさせたくない。

この日の為に色々と思考に耽っていたり、企てたりと頑張ってきたが、それも全てはこの気持ちを伝える為。

きつとガチガチになりながら、舌とか噛みそうになりながら伝える自分の姿を思い描いていたが、現実はこちらでだけ優しかった。

私の視線に気が付いたロイグが、首を傾げながらこちらに問いかけてくる。
「ロイグさん、好きです」

ちよつとだけ優しいはずの現実は、あくまで円滑に伝えるだけであり、呼び方までは援護をしてくれなかった。

私から発せられた言葉を聞き、固まっていたロイグは、次第に身体を震わせ笑いを堪

えるように俯いていく。ここ一番でやらかした。

溢れ出ている涙も感動して流れ出た訳ではないだろう。それでも楽しそう、愉快そうに、笑い泣きをしているロイグの姿を見つめていると、まあいいかと思わせてくれる。

こちらに伸びる手、正面を向かされた後、力強く抱きしめられる。勘違いでないのなら、離すまいという意志を持ちながら。

しばしの間、その体勢のまま時間が過ぎる。夜空に浮かぶ綺麗な花火も、今宵だけは舞台装置となる。

少しずつ緩まれていく腕の力に身体を委ねる。途中、耳元で囁かれ、ロイグの吐息がかかる。

囁かれたその言葉に自分の身体が硬直するのが分かる。言葉の意味もそうだが吐息も含めて全身に何かが走る要因になった事は確かだ。

そのまま首筋に力強くロイグの唇が押し付けられる。そこに残されたモノは、きつと紅色のマーク。

「ふふっ。これでハルトも立派な怪盗団アカツキの一員ね！」
そして。

この言葉の続きが紡がれるよりも先に、花火によって映し出されていた二つの影は再び一つとなる。

怪盗団アカツキ その後のリガルと

ふと目が覚める。

身体はそのままに視線を動かし周りを見渡すと、見慣れた病室の風景。

周囲は僅かに明るい、朝というには少し早い。

眠気もあるような、無いような。とても微妙な時間帯に目が覚めてしまったようだ。

ぼんやりとしながら今の自分の置かれている状況を考える。

銃弾によって折れた鎖骨も、手術済み、容態の安定も確認。本来なら既に退院してもいいみたいなのだが、誰かさんの相手をするのに入院していて貰っていた方が都合がいいと言われてしまう。

その誰かさんは、日々歩行訓練を続ける毎日。研究ばかりに熱心になって歩けなくなったら私までケイトに怒られてしまう。

とはいうものの、私が日本に帰還するには、誰かさんの協力が必要不可欠である事は確か。

訓練は続けて貰いたい。だけど穴の研究も進めて欲しい。

ぬーんと唸っていると、誰かさんはアツサリと次回の穴が開く日時を口にする。あれ、割とすぐじゃない？

『伝えるのを忘れてたよ』なんてあつげらんかんに放つ。このイケメンめ！

でも私自身が別行動を取っていたり、攫われたりと色々あったから、伝える機会も早々無かつただろうから仕方ないか。

そうだなあ、退院したらオフコウ山にいるはずの曾祖叔父とご対面をしなければ。

随分と遠回りになってしまったけれど、この旅の目的だからね。

それとお世話になった人達にお礼を伝えに行かないと。

何一つ知らないイジツの世界に、イサオさん絡みの人間が現れたにも関わらず、こんなにも優しく私を向かい入れてくれた人達には感謝してもしきれない。

誰から会いに行こう、やっぱりマダムから？ そんな事を考えていたら、窓から何やら物音が聞こえる。

上体を起こし窓枠に近づきカーテンをそっと開くと、窓の外には白髪に褐色肌の素敵なお姉さんがいらした。

視線が合うと微笑みと共に小さく手を振ってくれる。こちらもお返しに同じようにして手を振り返す。

早朝から大変美しい人を見させていただきました。おやすみなさい。

『ちよつと！ 私を無視して寝るんじゃないわよ！』

お怒りの声と抗議のノックが窓枠から聞こえる。

それでも時間帯を気にしているのか音量は小さめ。

流石、潜入捜査を得意とする怪盗だ。きめ細やかな配慮が行き届く。

しばらくじつと窓の外を観察してみたが、美しい人は大変慌ただしい。

表情はコロコロと変わり、窓を叩くりズムも変則的。

そして徐々に弱気になりつつある言動と力の強弱。

イジツの人達に最も効果的な戦法は、華麗にスルーだと思ひ始めた。

「もう！ 私がせつかくお見舞いに来て差しあげたのに、あの対応はどういう事かしら？ ハルト？」

「お見舞いは大変嬉しいのですが、まだ朝の五時なのですが」

「でも貴方だつて起きていたじゃない。問題ないわ」

「たまたま目が覚めていただけです」

「つまり、私たちは既に離れていても通じ合える程、波長が合う仲になったという事かしら？」

「アクセル全開すぎて何を仰られているのか理解できません」

一人ご満悦そうに語るこの方は、リガルさん。

今更言うまでもなく怪盗団アカツキのメンバーであり、あの時とつきに私が銃弾から守ろうとした人。

結果的にリガルさんやロイグさんは無傷で済んだのだが、私が負傷してしまい、心配をさせて泣かせてしまった人でもある。

でも後悔はない。こうして今もリガルの笑顔が見れるのだから。

「リガルさん、私に何か用事があつてこの時間に？ 普段なら朝食の時間帯に来てくれますよね？」

そう、リガルさんはほぼ毎日、私に会いに来てくれる。

私に餌付けをしてくれたり、車椅子に乗せて散歩に出掛けたり、時にはロイグさんと病室でお世話勝負。被害者は私。

ロイグさんはあの後、アカツキの皆とロイグさんの実家に滞在中。

オタカラの為にやらなければならない事、調べなければいけない事、沢山ありすぎてハルトに会えない！ と頭を抱えて嘆いているとお見舞いに来てくれたモアさんが教えてくれた。

『色々な事がありましたけれど、私はあの虹の姿は一生忘れられません！』

博打棒だったけれど、その一言はとても嬉しかった。

ちよつとした過去を振り返れば、いつだってやってくるのは頬を掴む手。

引つ張られていく感覚と共に、いつしか伸び切ってしまうのではないかと心配になる。

「ハルト。いま他の女の事を考えていたわね？」

「アカツキの皆の事を考えていたので当りといえば当りかと」

「貴方は今、目の前にいる女性の事だけを考えなさい、いいわね？」

「ふあふあふいふあふいふあ」

伸ばされた頬のおかげで碌に返事も出来なかったが、通じたのであろうかりガルさんの指が離れていく。

自分の手で頬をコネコネして元の形へと戻し、ようやく落ち着く。

「すみません、質問をしておいて考え事をしていました」

「私が相手じゃなければ許されない行為よ、罰が必要ね」

「出来ればお手柔らかにお願いしたいのですが」

「さあて、どうしてあげましょうか」

口元に手を置き、含み笑いをしながらこちらを見つめている小悪魔お姉さん。

何をされてしまうのだろうか。自分の鼓動が早まるのが分かる。

私がいるベッドに座り、横並びの状態。

先程は手が伸びてきた、今度はリガルさんの顔が近づいてくる。

それだけで自分の顔に熱が帯びるのが分かる。

最初の頃は、何かの冗談かと思うぐらいに美しいという言葉をよく口にする人だと思っていた。

けど、こうして間近で見つめると本人も本当に美しい、綺麗な人だ。

雰囲気のみ込まれているのだろうか、目が離せない。

そのままリガルさんを見つめてっていると、視界の外から現れた手でデコピンをされてしまった。

ちよつとした痛みと共に目に映るのは、再び微笑みをくれるリガルさんの姿。

「なんてね、少し私に付き合ってくればそれで構わないわ」

「何か始まるのかと思ひ、動悸が収まらないのですが」

「あら？ このまま押し倒した方が効果的だったかしら？」

「い、いえ！ 出掛けましょう！ どこにでもお付き合いしますよー」

私の言葉に、ニヤリとした表情を浮かべるリガルさん。まさか嵌められた？

「それじゃ、行きましょう」

リガルさんの愛機である飛燕に乗せられて、空へと舞い戻る。

確かに出掛けよう、どこにでもとは言ったけれど、まさか戦闘機に乗って移動する程の場所とは。念の為に書き置きを残しておいてよかった。

操縦席で飛燕を操るリガルさんは鼻歌混じりに楽し気である。

その姿を見ていると心配する事もないかと思ひ始める。

私とお出掛けをするというだけなのに、あんなにも楽しそうな姿を見せられては、こちらまで嬉しくなってしまう。

「着いたわよ、ハルト。私が貴方と来たかった場所がここよ」

「ここって、ドルハでしたっけ？」

「来た事もない町をよく知っているわね。ならこの観光名所も知っているわよね？」

「あーと、えーと、はい……」

この町はイジツでも貴重な自然が残されている場所。

緑豊かな環境を体験出来る町であり、それらが観光名所として貴重な収入源という事もあり、自然保護に力を入れている。

そして一番の売りは、人間が湖に入る事が許されている場所があるという事。

イジツで唯一、水着を着て人工的に作られた浜辺で日光浴や水遊びが許されている。

所謂ところのリゾート地である。

「この町に来たという事はつまり」

「まさか森林浴を楽しむ為なんて思っていないでしょうね？」

「やっぱり湖の方ですよね」

「あら、ハルトは私の水着姿を見たくないのかしら、今日の為に色々と用意してきたのに……」

「滅相もございません！　むしろご褒美をありがとうございます!!　ただですね……」

「ただ？」

「泳げないんですよ、私」

静寂の間、そして始まるリガルさんの笑い声。

なんとか止めようとしているみたいのだが、ツボにでも嵌ってしまったのだろうか、止まる事を知らない。

一通り吐ける息を吐き出したせいか、ようやく収まりの様子が伺える。

「もう！　急に面白い事を言わないで頂戴！」

「海のあるユー・ハングから来た人間が泳げないなんて言ったら情けないと思われてしまいましたそうで」

「そんな事で情けないだなんて思わないわよ。逆に聞かせてもらえて一つ確信が持てた

わ

「確信ってなんでしようか？」

私の傍に近寄り、耳元に口を寄せる。そこから発せられる言葉。

「ハルトは私を意識してくれているって事よ」

ゆつくりと離れていくリガルさんの表情は、少し赤みを帯びていた。

目の前に広がる森林と砂浜、そして湖。

ここだけは別世界と言っても過言ではない。日本にいた時ですら実際にお目にかかれた機会がない程の光景が映る。

歩きたびに鳴り響く砂、埋まる足、後ろに続く足跡。

パラソル一式をお借りして良い場所をと思っていたのだが、貸し切りかと思う程、人の気配がない。

むしろリガルさんなら貸し切るぐらいはやりそうだな、なんて事を考えると笑みが浮かぶ。

適度な場所を見つけ、荷物を下ろし設営開始。

パラソルを固定してシートを引き、背もたれが出来る椅子を近くからお借りして準備万端。

あとはリガルさんを待つだけ、シートの上に座り足元の砂と戯れる。

なんだろう、準備万端とか言い放ったにも関わらず、時間が経過していくにつれて鼓動が早まるのが実感できる。

これは初めて出会った時からの想い？ 二人で海の映像を眺めた事から始まった？ 私の為に泣いてくれたあの時から？

思考と共に心臓の鼓動が脈打つ、リガルさんに抱いている特別な感情が浮き彫りになつてくるのが分かる。

そうでなければこんなにも緊張はしない、水着姿でやってくるであろう女性を待つ間に、胸が苦しくなる事も無い。

町へと入る前のリガルさんの一言が思い返される。

『ハルトは私を意識してくれているって事よ』

自分の意志が明確になりつつあると、途端に落ち着きを無くしていく。

リガルさんと会ったら何を喋ろう、何を伝えよう、というかここで一緒に何をすればいいんだ。

頭を抱えながらゆらゆらとうごめくその姿は、第三者から見れば奇妙な行動にしか見えなだろう。

ただ、それを最初に見つけてくれたのは、リガルさんだった。

「面白い動きをしているわね、ハルト」

声が聞こえると同時に、ピタリと動きを止める。

鈍い音でも聞こえそうな速度で頭の位置を声の主に合わせて視界を合わせる。

白い髪、褐色の肌、上下赤色で揃えられたビキニに花柄のパレオ。

顎を少し引き気味に、腰に手を当て、自信満々と魅せつけてくる素晴らしいプロポーション。

脳内会議などする必要もなく、ただただ拝みたくなるその姿。

だが、その前に魅せて頂いた手前きちんと伝えなければ。

口を動かして言葉を発しようとするが、緊張のあまりうまく動かない、なんだこれは。

「あら、美しい私に言葉も出ないって感じね」

頭を上下に動かして意思疎通を図る。実際にそのとおりなのだから。

優雅な動作でシートの上に膝を置き、私と目線の高さが同じぐらいになるリガルさん。

真正面から見つめられ、瞬きすら惜しい気持ちで、じつとりガルさんの瞳を見つめている。

サファイアに似た美しい青い瞳。このまま吸い込まれそうにもなるが、これだけは言わなくては。

「とても綺麗です、リガルさん」

青い瞳が開き、驚いた表情をするが、次第に細められていくその瞳、そして慈愛の微笑み。

よかった、最低限だけどなんとか感想は伝えられた。

思った事をそのまま口にするだけの事が、これほど難しい事だとは思わなかった。

尚も体勢は変わらず、見つめ合う状態が続く。

私の心臓はリガルさんにも聞こえているのではないかと思うほど、跳ね上がったままだ。

いいのかな、こんなに美しい人を独占して、美しい人からの視線を独占していても。

見つめられたままでは思考が定まらない。それどころか呼吸をするのさえ忘れてしまいうそだ。

浅く息を吐き、浅く息を吸う。そして幾度か瞬きをした。

気が付けば、唇と唇が重なりあっていた。

突然の事で頭が真っ白に染まる。

慈愛の瞳は閉じられ、私の首に回された手。

重なり合った唇はとても柔らかく、温かい。

私の両手は自然とリガルさんの両頬を触れ、優しく撫でる。

何度も、何度も、時折、吐息が漏れる事があつても触れ続ける。そして頭の後ろ側へと手をまわし、抱えるような体勢になる。

片方の手はリガルさんの美しい髪を愛でるように触り続け、重なり合つた唇はそれだけに止まる事を知らなかつた。

周りの事など一切気にせずに、ひたすらお互いの愛情を伝えあう。

湖以外からも水の音が聞こえ、森林から来る風よりも熱い吐息、足が埋まるほど柔らかな砂より蕩けそうな唇。

ただ幸せだった。

永遠に続くかとも思える行為、それは息切れを起こして止まつてしまう。

それでも離れたくなくて、リガルさんの手を引いて私の上にお招きをする。

シートの上に倒れ込む私の身体と重ねるようになり、頭を私の真横に置くりガルさん。

声を出そうとすると、人差し指で唇を押されてしまう。

「待つて、ハルト。私から伝えさせて」

頭を僅かに動かして頷く。

離れて行く指先の代わりに、再びリガルの顔が近づく。

「私はハルトが好き。私に海を見せてくれたハルトが好き。私に虹を見せてくれたハルトが好き。私たちを守る為に怪我をしたのは許せないけど、それ以上に嬉しい、けど二度と私を守る為に怪我をするのは止めて」

青い瞳からは涙が零れ落ちてくる。

それさえも美しい世界。

「今日の為に色々と準備をしたわ。ハルトを手に入れる為に。最後は『怪盗殺し』なんて異名を返上しなければならぬぐらいに強硬手段を選択したほどに、それほどライバルが多かったのよ、貴方気づいていたかしら？」

考え込むように視線を少し上げるが、リガルの唇により思考を阻止される。

「私以外の人は考えなくていいわ。ハルトは私の事だけを考えて、そしてお願い、私の希望する答えを頂戴」

上体を起こす為にリガルさんの肩に手を置き、少しでも移動してもらおう。

再び視線が同じ高さになり交じり合う視線。

希望する答え、それは分かる。では自分の気持ちはどうなんだろうか。

リガルを見つめっていると、青く綺麗な瞳は不安に駆られており、時々、涙が落ちる。なんだ、自分の答えも決まっているじゃないか。

自分の鈍感さに苦笑いにも似た笑みが出てしまう。

大きく深呼吸、ゆっくりと息を吐き出し、正面を見つめて自分の気持ちを伝える。

「リガル、貴女が好きです」

ビクツと動いたリガルの身体は、そのまま硬直してしまふ。

そのかわりに、青い瞳からはとめどなく流れ落ちる涙。

全く動かないリガルの代わりに両指で涙を拭うが、流れ落ちる量に対応しきれない。

これならば一層、枯れるまで付き合った方が一度リセット出来て良いのではないか。

リガルの腕を取り、私の首に回す。

私はリガルの身体を引き寄せる為に腰の辺りに腕を回した。

何度も背中を撫で、耳元で愛を囁く。

そうしている内に、リガルは意識を取り戻し、私に抱きつきながら涙を全て流し終え

た。

「なんだかまだ夢の世界に居るみたいだわ」

「残念ながら現実ですよ、リガル」

あの後、泣き止んだリガルは真つ先に化粧直しに向かった。

十分綺麗なのと思うのは男性側の都合。女性には女性の都合があるのだ。

周りを見渡すと、しわくちやになったシートであったり、お互いの涙やらで凄惨事に。

その中でも一番褒め称えてあげたいのは、我が息子なり。

貴君の耐え忍ぶその姿には感銘を覚える。よくやった！ 感動した！

よし、ちよつくらご褒美タイムだ！ と思つていたところでリガルが戻ってくる。すまないがまた耐えてくれ。

「自分で仕組んでおいてこう言うのおかしいけれど、上手くいったのよね？」

「上手くいきました。私はもうリガルの事しか考えられないぐらいに」

「本当に？ 本当よね？」

「これから先、リガルにどんな美しいものを見せてあげられるか悩むぐらいに」

私の片腕にしがみついてくるリガル。

顔を上げこちらを見つめてくる。その仕草は反則だ。

「ハルト、美しいものを見せてくれるのは嬉しいわ。でもそれ以上に見たいものがあるの」

「なんででしょうか？」

「これから先、貴方と一緒に過ごす世界よ」

再び重ねられる唇は、すんなりと引き離され、変わりにその場に立ったりリガルから手が伸ばされる。

「ハルト、私を見て、ずっと、たくさん、この先も、貴方の記憶を埋め尽くすぐらい、私

を見つめていて。貴方の隣にいる時の私は、一番美しい姿をしているから」

怪盗団アカツキ その後のモアと

室内を漂う良い香り。

左側からはトントンと、右側からはコトコトと。

味見がしたいのか、下から伸びる幼い子の手と、それを咎める女性の声。

家庭の温もりが感じられる、台所のオーケストラはまだまだ続く。

病院から退院後、するべき事をこなし、イジツに居られる僅かな時間。

せつかくイジツに、ラハマで落ちつける時間が出来たのだから、ゆつくりと街中探索でもしようと考えていた。

だが、それも怪盗団アカツキの手によってあっさりと崩れ去っていったけれど。

カランさんからは『士気向上要員』という謎の役職を承る事になる。

その理由は、約数名からハルト成分が恋しくて堪らないというお悩み相談を受けた事から始まる。

「ロイグもリガルもさっさと行動に移せばいいのよ。それが今更、恋する乙女のようにモジモジとして、診断と称して惚気話を聞かされ続ける私の身にもなって欲しいわ」

「あの、匿名希望者のお名前が公表されている気がするのですが」

「いいわよ別に、貴方だつて二人からの好意には気づいているのでしょぅ?」

「お見舞いに来て頂いた様子をみれば、少なからず」

身なりのお世話をしてくれたり、餌付けをしてくれたり、手を握ってもらつたり。

あれ、でもそれだけで考えると様々な人達から労つてもらつた事になる。

コトブキの皆はしかり、マダムやユーリア議員からも。勿論、アカツキの皆からも。

やばい。もしこれらがカランさんのいう好意であれば、私は人知らず後ろから刺され

ても仕方ない程のフラグを立てていたのか!?

「まっ、しばらくあの二人の相手をしてくれると助かるわ。主に私が」

「カランさんが楽しみたい為だけに攫われたんですかね!？」

「利害一致しただけよ、クフフ……」

口元がヒクヒクと動いている私の姿を見て、ご満悦そうなお医者様。

イジツのお医者様は皆マツドだ。

この荒野で人を治す職業についているのだから、これぐらいの精神力を保持していないと治療行為なんてやっていられないのだろう。

こういつた経緯もあり、士気向上とお留守番も兼ねてロイグさんのご実家にお邪魔す

る事になった。

ロイグのおじいさんからは『孫を守ってくれてありがとう』と頭を下げられる。

元はといえば私絡みの事に皆を巻き込んでしまった事もあり、こちらも詫びる。

呆けた顔でこちらを見つめるおじいさん。そうだ、この感性は日本人気質によるものか。

どうしたものかと思っていれば、嬉しそうに高笑いをして人の肩をバツシバシと叩いてくる。

治療済みとはいえ中々の痛み、引き攣りそうな表情を堪えるようにしていると、今度は首に腕をまわされる。

「どうだねハルト君！ 本気でウチの可愛い孫娘を手に入れるというのは？ あの様子だと本人も満更でもないようだぞ？」

「例えお付き合いする事になりましたも、私はもうすぐユーハンクに戻らないといけないのですか？」

「だからこそだよ、イジツに自分の最愛の人がいる場所を作り、そこへ戻るといふ目標を立てればみんな幸せだ！ そうは思わんかね？」

「その時は、セットでイサオさんも戻ってきますけどね」

「アヤツもかあーっ！」

頭を抱えるロイグのおじいさん。でもイケスカの頃のようなイサオさんでは無いと思いますよ。なんとなくですけどね。

ロイグさんの事は当人同士という事で一方的に逃げ出す事に成功する。

そうそう、サブジーはあの後、二人の手によって見事御用となり、澁々ながらも二人の我儘に付き合っているようだ。

捕まえる為とはいえ、サブジーの機動に惑わされる事も無く、確実に実弾を主翼にブチ当てて強制的に降ろしたナオミさんの行動力は恐ろしい。

キリエが『何も出来なかった』と凹んでいたのが印象に残っている。

サブジー曰く『腰を痛めなければ撒けた』と私にマツサージをさせながら呟いていた。なお、当人は日本へ帰る気がない模様。

ニツカさんは動けないサブジーを相手に聞きたい事を根掘り葉掘り聞けて嬉しそうだ。

屋敷に攫われた当初は慌ただしい日々であったが、最近は小説を読む時間が出来るぐらいに落ちついてきた。

機体の点検作業を眺めていたりとのんびり過ごしている。

夜明けの鷹についても進展があり、少しずつではあるけれど、再びオタカラを目指し

で進んでいるみたいだ。

最後まで付き合いたいけれど、残念ながら日本へ帰投するのも私に課せられた大事な任務。

最後まで、なんて思うようになっていく自分がおかしくてつい笑ってしまう。

「なんだか楽しそうですね、ハルトさん」

後ろから聞こえる声に反応するように身体を動かすと、そこにはモアさんがいらした。

女性陣の中でも小柄な女性。それでも空へ上がればあの怒声。無線から聞こえていた声の主がモアさんだと知った時の衝撃は計り知れない。

「アカツキの皆さんと出会ってから色々あったなって振り返ってました」

「最初はびっくりしました！ ロイグ達が連れてきた方が、男性にも女性にも見える方でしたので」

「私も体格は小柄な方で、髪もそれなりに長いですからね。間違われても仕方ないかと」

「でもたくさんの事を知っていました！ 海の写真を見せていただいた時は驚きました

よー」

「何気なしに撮影していたものが、ここまで有効活用されるとは当初は思いもよりませんでした」

二人してクスクス笑い。

せつかくだからとモアさんからお茶のご招待を受ける。謹んでお受けいたします。

招かれた先は、屋敷の台所。

釜の上にあるのは大きな寸胴の鍋。何かを煮込んでいるようだ。

「椅子に掛けて待つててくださいね」

言われたとおり、テーブルとセットになっている椅子に座り、モアさんの後ろ姿を見つめている。

エプロンを身に着け、お湯を沸かす準備に食器やちよつとした軽食を手慣れた様子で用意していくその姿は、ちよちよこと動いておりとても可愛らしい。

流星はロイグさんの保護者。これほどテキパキと家事をこなせなければ、ロイグさんのお世話は出来ないのだろう。

「あの虹は本当に素敵でした！ 富嶽を利用してあんな事を考えて実行しちゃうのは、きつとハルトさんぐらいですよ！」

準備も終わり、対面で始まるお茶会。

出会った当初の話から始まり、虹について熱く語るモアさんの熱気が凄い。

虹に関しては、ラハマでも話題になっていた。

病院で安静にしている時ですら、色々な場所から話が聞こえていた。

窓の外では、子供たちが富嶽に見立てた物を取りながら走り回る。

そんな子供たちから発せられる言葉は、爆弾が落とされる時の音ではなく、水が落ちる時のビシャビシャと一風変わった音を発しながら走り回る。富嶽の威厳を一気に底まで落としてしまった気がする。

「それでも、ラハマのみなさんからすれば、自由博愛連合から攻撃された恐怖を上書きしてしまふほどの印象を受けたんだと思います」

「イサオさんが何か言っていたなあ。あと少しのところ穴が消滅したとかって」

「あはは……そういえばユー・ハングにはイサオがいらつしやるのですよね？」

「今頃何をしているやら。曾祖父がいる限りは無茶な事は出来ないと思うのですが」

「不思議ですね、イジツで大暴れした人がユー・ハングでハルトさんと出会い、ハルトさんがイジツに来る事になるなんて」

「出会った当初は色々と思惑があつて無理矢理、私をイジツに向かわせたって感じでしたけどね」

苦々しい顔をする自分を見て、モアさんは可愛らしく笑う

「それでも、こうして私たちは出会う事が出来ました」

「確かに、そこだけはいくら感謝してもしきれないぐらい」

「ハルトさんに助けていただいたおかげで料理のレシピもたくさん増えました！ あとロイグの部屋を綺麗する口実も貰えました！」

今度はこちらが笑う番、余程ロイグさんのお部屋の惨状には手を焼いていたみたいだ。

「まさかオタカラについて探していたらレシピ本ばかり出てきたのには笑ってしまいましたよ」

「あれだけの量のユーハングの本がある事を知ると、本当にイジツとユーハングは繋がっていたんだって思います」

「二ヶ所は利用して来た為、出入口が把握できたので分かりますが、他の穴は一体どこと繋がっているのだろうか」

「そう考えると、世界はまだまだ不思議な事に満ち溢れていますね」

紅茶を冷ますように息を吹きかけて、一口飲むモアさん。

不思議な事。確かに不思議だ。穴は全て日本、地球に繋がっている訳でない。他の世界にだって繋がっている可能性があるかとアレンが言っていた。

今はまだイジツの生活を楽にさせる物で済んでいるが、それ以上の物が現れたとしたら……。

じっと考え込んでいたら、モアさんの手が伸びてくる。

「大丈夫ですよ、ハルトさん。良い事も、悪い事もたくさんありましたけれど、私はまた何か起きてても良い事が起きると確信していますから」

「確信ですか？」

「はい、穴について知っていた人達は、きつと今のハルトさんのように眉間に皺を寄せるぐらい心配する事もあると思うのです」

私の頭を撫でるモアさんの手は止まらない。

「でも、実際に穴からやってきた人間は、ユー・ハング人だった。そのユー・ハング人はとても温厚で、困っている人をみかけると手を差し伸べる、とても優しい人でした」

聖人君主のような事をしたつもりは無いんだけどなあ。

「怪盗団なんて名乗っている人たちのお願い事まで引き受けちゃうぐらいですもん！私が保証しますよー！」

「モアさんに保証されてしまった。これで無敵だ」

「そうです、無敵さんです。ふふふっ」

モアさんから無敵の称号を与えられてしまった。

これで何も恐れる事はない、そのはずなのに涙腺が緩んでくるのは何故だろう。

「ハルトさんは泣き虫さんですね」

「イジツに来る前はこんなに感情が揺さぶられるような人間じゃなかったと思うのです」

が

「私は泣き虫さんなハルトさんも好きですよ」

モアさんから手招きをされる。

ポンポンと叩かれた場所は、モアさんのふともも。

「こういう時は思いつきり泣いた方が楽になれますよ。私の膝でよければお貸しします
！」

「泣く為だけに用意された環境が贅沢だ」

「はい、贅沢仕様です！ 頑張ったハルトさんにもご褒美が必要ですから」

さあ、と言われて両手が伸ばされる。

これを断り切れる程、私は強くない。

自分の膝を床に着き、モアさんの手が伸びてくる。

優しく抱かれた頭は、ご指定された場所へと誘導されていく。

「気にせず沢山泣いてくださいね。今は私しかいませんから」

頭を撫でてくれるモアさんの小さくて暖かな手、顔からもモアさんの体温が伝わってくる。

ただそれだけなのにも関わず、瞳から止まる事を知らない涙。

色々な理由があつてイジツに来る事になり、様々な人達と出会い、触れ合う。

イジツの世界を好きになるほど、穴の恐ろしさが身に染みて分かるようになってきた。

自分だってその穴から来たというのに何を言っているんだろうか。少しばかりの苦笑い。

それでもモアさんから良い事に分類されてもらえてホツとしている自分がいる。

全身の力が抜けていくのが分かる。

このままずっと、モアさんに頭を撫でてもらいたいぐらいに。

きつととても情けない姿なんだろうな、でもモアさんに見られるのは恥ずかしさを感じない。

不思議だ。まだまだ知らない事だらけだ。それでも分かった事はある。

人と出会い、意志を伝えあい、触れ合う事で世界が広がる。

分かっているが出来ていれば苦労はしない。の話だよ、これは。

モアさんの手が心地よい、未だに涙を流しているのに眠気が襲ってくる。

耐える事を知らない身体は、眠気に身を委ね、ゆっくりと意識が沈んでいく。

私の膝の上で泣きながら寝てしまったハルトさん。

あれだけたくさんのがあつたのに、ずっと頑張っていらしていたから少しでも力に

なれたのならよかった。

ハルトさんが解読してくれた料理のレシピのおかげで、たくさんのレパートリーが増えた。

それをみんなに振る舞い、美味しいと言って貰えるのが物凄く嬉しい。

居なくなってしまった家族の為に、今居る家族と別れ離れになる可能性があつたにも拘わらず、ユーハングに来てくれたのがハルトさんで本当によかった。

ハルトさんの長い髪を優しく撫でる。少しだけ高まる鼓動。それが何かはまだ分からない、けど。

「ハルトさん。お別れをしなければならぬ時期もあるかもしれませんが、私たちは仲間ですからね、忘れちゃ嫌ですよ？」

怪盗団アカツキ その後のカランと

鎖骨から取り出された一つの銃弾。

それは銀色のトレイの中に転がったまま、机の上に置かれている。

手術を終えたばかりのハルトの顔には、大量の汗が発生している。

手元にあるハンカチでその汗を拭う、その度に聞こえてしまう、意識の無いハルトの泣き声にも似た誰かを呼ぶ声。

ここで寝転んでいる人達の中に、ハルトが求めている人はいない。

それが私を少し寂しい気持ちにさせられる。

本日も訓練室なるものが正式に稼働し始めた病院で、アレンと共に身体を動かす日々が始まる。

その際には必ずケイトが同伴しており、アレンがサボらないようにジツと監視を続けている。

ケイトの機体は、あの戦いで再び修理に回されてしまったので、手持無沙汰のようだな。なんていうかごめんなさい。

そしてもう一人、私が撃たれた際に傷の手当をしてくれたカランさんもいる。

どうやらアレンの足について興味があるようで、歩けなかったアレンの足を観察してみたり、リハビリを繰り返して一時的に立てる様になったアレンの様子を見た時は、驚きの表情をしていた。

「それ、切らず治したって事なの？」

「いやいや、流石に手術をして骨とかを固定したよ。肉体的に問題無い状態になったはずだけど歩けない状態になってしまっただけね」

「訓練をサボっていたからとか？」

「否定はできないなあ」

どこからかスキットルを取り出し、一杯飲もうとするアレンの腕を反射的に掴むケイト。

じつとアレンの目を見つめ、何を訴えたいのか、流石に誰でも分かる。

スキットルを取り上げられたアレンは露骨に項垂れる。

「片足だけなら復帰も可能だっただろうけど、両足だったのが痛かったなあ」

「でも先程、その両足で立ったじゃない」

「それこそまさにハルトのおかげさ。ユー・ハングの医術で無理矢理ながら立たせる事によって、身体に感覚と癖を覚えさせる。アレもなかなか辛かったなあ」

「医術と言われたら本業の人に怒られます。ただ父親が似たような状態になった時の事を思い出せただけですよ」

「それでも、ケイトはハルトに感謝する。無理難題を押し付けたにも関わらず、実現させてくれたハルトには感謝してもしきれない」

「僕の足が治る為なら何でもする。つて言い切っちゃうぐらいだもんね」

あははつと笑うアレンを横目に、少し恥ずかしそうな素振りを見せるケイトの姿。スキットルを取り上げられた事への反撃だろうなあ。

あの言葉は確かに勘違いをしても仕方ないと思うんだ。私も最初はそう考えてしまったから。

「顔がニヤけてるわよ、ハルト」

カランさんからご指摘を受けて両手で自分の顔を触るが、特に変化はない。嵌められか!?

「あら、どうやらハルトも当初はそのように受け止めていたようね」

「あははつ、ケイトは可愛いから仕方ないよね」

「……恥ずかしい」

押揶いの対象が私に変化する。こちらまで羞恥心で顔が赤くなりそうだ。

あの時は、ケイトが続けて発言した言葉の内容によって、そういう意味ではない事が

判明したからよかったものの、もし勘違いをしたままだったら……？

何も変わらなそう。ヘタレですし、異世界に来て早々、カワイコちゃんなんて出来る程、凶太くないし。異世界でなくても出来ないとかはこの際無しで。

どつと疲れが溢れ出て、先程のアレンと同じ様に項垂れてしまう。そんな私の姿を見て聞こえてくる各自の笑い声。

「こんなテープ状の物を巻く事で立てるようになるだなんて」

休憩を挟んだ後、再びアレンの足を実験台に、ケイトが手際よくアレンに処置していく姿をカランに見せる。

伸縮性のある布を長く切り取り、手順に従って足に巻いていく。

布がずれないようにしっかりと固定をして、強めに引く時にアレンの声が漏れるのはちよつと楽しい。

私の記憶による再現故、足はいつもより少しばかり無骨な形で分厚くなるが、ガツチリと固定されているのが分かる。

カランはその状態のアレンの足を触診して念入りに調べている。

「もう私よりも上手だね、ケイト」

「アレンがやる気を起こしてくれたのが一番の理由」

「流石の僕でもここまでして貰えたなら期待に応えなくなるものさ」

「基本的に筋肉を一ヶ所に集めるようにして固定するのね」

「立たせるのが第一でしたから、力を入れる場所を分散させずに一点に集中させればって思ったわけです」

「なるほどね。こういう方法もあるのね」

自分自身に納得させるように呟くカランさん。

内科的処方……になるのかは専門者ではないから分からないけれど、両足を同時にやられてしまった際の治療法として使えるだろう。

後は訓練室に置かれる事になったナツオ班長お手製の器具も。

病院には壁際に沿って人を支える平行棒はあっても、それはどちらかといえば片足を負傷した人向け。

アレンの場合は車椅子のまま二つの平行棒の間に進入し、ケイトの助力を借りつつ腕の力で身体を起こし、平行棒に捕まりながらゆっくりと一歩ずつ歩くのを繰り返す。

それ以外にも、座りながら間接の可動域を増やす為、足を上下左右に動かしたり、筋肉を衰えさせない為にマッサージをしたりと。

アレンをテーピングで立たせて以来、ケイトは大変忙しい日々を送っている。

だけど何かを言うわけでもなく、淡々とアレンの手伝いをしている。

アレンも口では揶揄う様な事を言って振る舞っているけれど、訓練を怠らずにこなしている姿を見てれば、この二人は似た兄妹なのだなと思う。

「想像以上だったわ、ハルト」

「そう言っていただければ幸いです」

私のベッドの上で横並びで会話中。

気が付けば丸一日、アレンを実験台にした講習会を開いていた気がする。

対象者は、流石に疲れが出たのか隣にある自室でヘトヘトになっている。

『サボっていたアレンにはいい薬』そう微笑みながら喋るケイトは『また明日』とアレンに伝えて去っていった。

その時のアレンの表情は中々貴重だと思いつつながら、自室でカランさんと今日の出来事を復習中。

「テーピングで人を立たせる……よく考え付くものね」

「筋肉の衰えと、その後の訓練を考えると、軽傷であれば巻いて固定する選択もあるみたいですよ」

「こつちみたいに切ってボルトで固定して石膏で固めておしまい。じゃないのね」

「ユーハンクも昔はそれしか選択肢が無かったみたいですけどね」

ふうと悩まし気な吐息。

「ハルトの肩も、ユーハングならどのように治療されるのかしら?」

「イジツと変わらないと思いますよ? 骨が繋がったらプレートを外す為にもう一度手術をして取り外し、あとは自然治癒でしようか」

「こちらだとそのままね。骨が繋がったなんて開かないと分からないもの」

やや俯き気味になる。ここら辺ばかりは技術力の問題も発生してしまい、個人で対応するのは難しい話になってしまう。

「イジツは見た通り、荒くれ者が多くて怪我人ばかりでしょう? あちこちで喧嘩して空戦して外傷ばかり、そちらの治療は空賊辺りでも実験台にしてれば良い治療方法が見つかるとはだろうか」

「けど?」

「みんな空ばかり眺めていて、地上にいる人達の事はあまり興味が無さそう。大半の人達は地上に居て、外傷よりも風邪による頭痛や発熱、腹痛の方が多いはずなのに。子供なら尚更ね」

考えてみるとラハマにある病院もここ一件だった気がする。

ここは外科も内科も小児科も含めて処置してくれる総合病院みたいなものだ。

もしかしたらイジツでは珍しい部類に入る病院なのだろうか。

「子供が熱を出しても治療費が高いから病院を受けさせる事も出来ないなんて話もよくある事よ」

「カランさんも高額費を請求してると聞いたような聞かないような」

「支払える奴等からは貰っているわよ、子供たちから治療費を寄せせなんて直接的な事を言えるわけじゃない」

むうとした表情をして、指先を私の頬でグリグリと動かす。

相も変わらず透き通った肌。細い指先。少しむくれて膨らんだ顔とこちらを見つめてくるバイオレットサファイアに似た情熱と冷静が入り混じる瞳。

こうしている時のカランさんは、女性というよりも少女という雰囲気がよく似合う。

だがあくまでそれは見た目だけ、実際は夢と現実の間を戦うお医者様だ。

「私は私のやり方で人を救う為にも、もっと知識が欲しいわ。ハルト、知っている知識を全て教えなさい」

「教えなさいと言われましても、家庭で対処できる程度の治療方法だけで薬剤の調合まで出来るカランさんに教えられる事なんて」

「あるわ、今日一日見せてくれた医療行為だつてイジツでは試された事がないものよ」

「アレはまあ身内の事故から発生した際に覚えた医学の一つではありましたがね」

「ゴダゴダ言わずに知っている事を吐きなさい」

カランさんから両手が伸びてくる。

それを華麗に捌いて回避してやる！ と意気込むまではよかった。

誤算があるとすれば、自分の身体の状態と、カランさんの勢いが予想よりも強かったという事だ。

手が重なりあい、押し返そうと思うが、力が入らずにカランさんに押し倒されるとい
う情けない状態に。

弾き出された両手は恋人繋ぎ、カランさんの頭は私の心臓の真上。女性の香りと柔ら
かさに自分の鼓動は早まるばかり。

その状態にさせた張本人に全て聞こえている模様。穴があつたら入りたい。

手は緩めているので好きなだけ外してください。

そして姿勢を正して元の位置にお戻りいただければ幸いです。

私はまったく力が入らなく、金魚の様に口をパクパクとさせて息をするので精一杯。

しかし、カランさんはこちらの予想とは違う行動を取る。

手は更に力が込められ、指先が埋まる。

頭が動いたと思いきや、心臓の真上にあつた頭を傾けて、耳を直接当てる体勢に。

その為、カランさんの身体は先程よりも私の近くに寄り、視線を下に向ければ表情が
見える。

窓の外は既に夕焼け、その光がカーンさんを包み込む。
茜さす君に見惚れてしまい、息をするのも忘れる程、この世界は美しかった。

「少しスッキリしたわ、……ありがとう」

辺りは暗闇で覆われている。

病室の扉と窓から僅かに零れる光でお互いを認識している状態だ。

幻想的な世界は徐々に薄まり、やがて消えていった。

その後もしばらくあの体勢のまま、口を開く事も無く時が過ぎ、今に至る。

そしてゆっくりと離れて行くカーンさんに寂しさを覚える。

再び二人横並びで座る。先程と違うのは、掌一枚分の隙間すらない程の近さ。

何を喋ろうか、そう悩んでいるうちにカーンさんから話しかけられる。

「どこか焦っていたのかしら、私」

「何かありました?」

「何も、ただハルトの心音を聞いていて、心が落ちついていくのが分かったのよ。忙しく動き回っている自分があるなって」

「心音を聞かれてる人の事も考えて欲しいのですが」

「あら、私みたいなので興奮して鼓動が抑えきれなかった変態さんに何を言えと」

「カランさんで欲情するのは変態じゃないです！ 鏡で自分の姿を見てきてくださいよ！……この美女め！」

「その美女に対して辛く当たると、酷いわハルト、抱きしめ合った仲なのに」

「なんだかすつごくモヤモヤしますね、その言葉」

顔を合わせて呆れながら笑う二人。

「カランさん、もしよければですけど、私とユー・ハングに行ってみませんか？」

「私がユー・ハングへ……？」

「ちよつとした気分転換と環境の変化で見つかるものもあるかと、まあその先にはイサオさんも居るんですけどね」

イジツの天敵の存在に頬を掻く。

「……ありがとう、ハルト。純粹に嬉しいわ。でも今は行けない」

「やっぱりアカツキの事が気になりますよね？」

「そうね、ここまで来てあの子たちを放っておくような事は出来ないわ」

「私もこのタイミングで穴が開かなければなあ……」

「ハルトは十分、力になってくれたわ。後の事は私たちに任せてくれなにかしら、一応仲間

間でしょ、私たち」

「あれだけ頑張ったので仲間として承認してくださいよ！」

「冗談よ、貴方は怪盗団アカツキのメンバーなのだから」

ベッドから立ち上がり背伸びをするカランさん。

そのまま私の正面に立ち前屈みに。

気が付けば、僅かにあつた距離はゼロとなり、想いを伝える場所が重なり合う。

「私を落ち着かせてくれたお礼、ユーハンクに誘つてくれたお礼、それと……美人だと言つてくれたお礼よ」

それじゃまたね。一言残して病室を出ていくカランさん。

何が起きたのか分からない。ただ意識が戻るにつれて分かるのは……。

布団に潜り込み、カランさんにしてもらえた行為について喜びが爆発してどうにかなりそうな自分だけが取り残された。

病室から出て扉の横にある壁に寄りかかる。

先程までいた室内から、ハルトの声が漏れている。実験は成功したようね。でも、私自身の実験も成功してしまつたみたい。

ハルトと同じぐらい、激しく動く心臓の鼓動。異性に対する愛情。

私の両親はよく実験で結婚し、私を生めたなと思う。

私には真似出来そうにない。そんな両親を見ていたから結婚をする気は無かつたけ

れど、考えが変わってきた。

それは室内で唸っている馬鹿が付く程のお人好しのせいね。

「ハルト、無事にユーハングへ戻るのよ。そして必ずイジツに帰ってきて。でなければ私が貴方を追いかけに行くわ」

怪盗団アカツキ その後のベッグと

ラハマにある一画。

そこには隣接するように建てられているオウニ商会が所有する倉庫と格納庫。

私の救出作戦において破損状態に陥ってしまったコトブキ飛行隊や怪盗団アカツキの機体は、一時的にここに運び込まれ部品の取寄せを待つ状態である。

他にも敵対していた相手が搭乗していた疾風も、破損機体だけはここに残した状態で置かれ、可動可能な機体はそのままアレシマで傭兵部隊へと転向中。

『傭兵に転向するには、ちと機体が目立ちすぎるかもしれない』敵対関係であった翁と呼ばれるじーさまがそんな事を呟いていた。

それともう一つ、私と共に奪われた機体も眠っている。

震電だ。

病院暮らしもそれなりに慣れてきたある日。

窓から差し込む太陽の光に身体を委ねながら日向ぼっこを満喫していた時に、お見舞いに来てくれたベッグさんの一言から始まった。

「ハールート！ 破損した震電の修理がしたいのだ！」

「はあ、それは一向に構いませんけれど」

「わーい！ さすがハルトなのだ！ 気分がいいのだ！ では早速作業に取り掛かるのだ！」

「ちよつと待て、直すにしても部品が無いぞ」

高揚した状態で病室を出て行こうとするベッグさんの目の前に現れたのは、ナツオ整備班長。

その言葉に反論するようにベッグさんの口が開く。

「大丈夫なのだ！ これでもベッグは機体修理だけでなく部品の作成も出来る天才技術士なのだ！ 問題ないのだ！」

「ほお、その天才技術士様はどこから素材を集めてこようとしているんだ？」

「もちろん、倉庫に転がっている他の機体の破損部品からなのだ！」

有無言わさずベッグさんの頭にナツオさんのゲンコツが落とされる。

ぐえあーという叫び声。それはそうだ、あそこにある物は基本的にオウニ商会の所有物。

それを勝手に修理の為とはいえ利用しようとする発言を、オウニ商会に所属しているナツオさんが許す訳もなく。

ナツオさんにフードを引っ張られた状態で再び私の居る病室に戻り、各自椅子なりベッドの上なりと好きな所に座る。

「大体な、震電は独自規格が多くて隼一型や疾風の部品を流用したところで満足がいく部品が作れるとは思えないぞ?」

「やってみなければ分からないのだ! やる前から諦めるのはベッグの流儀に反するのだ!」

「同じ整備士として気持ちは分かるんだがよ、もし設計図も無しに始めたとしてもだ、震電の修理が完了する頃には、ハルトはユーハングに戻つちまつてるぞ?」

「なぬっ!? ハルトはもうユーハングに帰つてしまふのだ!」

「次回、穴が開いた時に必ず帰還しろとお達しを頂いているので」

「それは何時頃なのだ!」

「アレン曰く、一か月後ぐらいですかね」

その言葉に分かりやすい仕草で落ち込むベッグさん。

流石の天才技術者でも一月という短い期間では、修理を終わらせる事は困難のようだ。

「そーいやユーハングに戻る時の機体はどうするんだ? 震電は知つての如くあの状態だろ?」

「流石に富嶽で帰る訳にもいきませんし、かといって他に所有している機体もなく、ついでに言ってしまうえば震電と隼一型しか操縦方法を知らない訳でして」

ナツオさんの呆れた表情と大きなため息。

イサオさん直伝による強行訓練と、予め用意されていた機体が隼一型だったもので、どうしても操縦出来る機体は偏ってしまう。

イジツで操縦方法を学び、実地訓練を行う時間さえあれば、他の機体も飛ばせるようになるのだろうか？

だとしたら日本人としては是非とも一度、零戦を操縦してみたい。様々な媒体で見かける機会が多かったから。

そこでふとイジツで知った出来事を思い出す、その象徴とも呼べる零戦も様々な型番がある事を。

私が今まで媒体を通して見て来た零戦と呼ばれた機体は、一体何型だったのだろうか？
そもそも零戦を使用していたのかさえ怪しい。

……そこに触れてはならない気がしてきた。それに折角イジツにいるのだから実物を片っ端から見ればいいだけではないかという事実が気が付いてしまったから。

ベッグさんは落ち込んだまま、ナツオさんは何かを考え中、私は今まで見て来た零戦の型番を思い出す事に必死になる。

そこへ誰かがこちらへと向かつてくる足音、しばらくして病室の扉を叩く音が室内に響く。

「若いのが三人とも項垂れて何があつたというのじゃ?」

「あ、ジジイなのだ」

「ジイサンもハルトの見舞いか?」

「零戦つて何型まであるんですか?　　じーさま」

其々の呼び方の通り、翁と呼ばれる人物が病室にやつてきた。

片手に持ち歩いてきた物はお見舞い品であろうか、毎回律儀な人だなど思う反面、嬉しい気持ちと笑みとなり浮かぶ。

手短な椅子を手に取り、跨ぐようにして座りこちらに顔を向けるじーさま。

お互いの悩み事や問題を共有する事で何か方法は無いかと、ご老公にお知恵を借する事になった。

そうしたところ、震電に関しては一つの希望が見え始めた。

「設計図ならあるぞ。副長が震電に搭乗した際に実物との違いを確認する為、使用していたからの」

「どこにあるのだ!?　副長つて人に会いに行けば見せてもらえるのだ!」

「いんや、わざわざ会いに行かんでも儂が預かつとるよ。儂がここで小僧の連絡役を

買って出た時に渡された……って儂の身体を弄つても持ち歩いておらんわ！」

「なら置いてある場所に今すぐ取りに行くのだ！ ベッグは一刻も早く震電を修理しなければならぬのだー！」

ベッグさんの怒涛の勢いに困惑気味のじーさまと、疑問を浮かべるナツオさん。

「ベッグはなんでそう震電の修理を急いでいるんだ？ 何か理由でもあるのか？」

じーさまとじゃれ合う手が止まり、顔をこちらに向けて私を見つめるベッグさんの瞳。

私が原因となると、やはり日本に帰還する事が影響しているのだろう。

帰還するまでに修理を終わらせ、再び震電に搭乗して帰還して欲しい……とか？

そう問いかけると頷いて返すベッグさん。

「ハルトには震電を好きに触らしてくれた恩があるのだ！ 受けた恩はキチンと返さな

いとベッグの気が済まないのだ！」

「でもアカツキのアジトにいた間は、ずっとベッグさんに整備をお願いをしていました

し、おあいこって事では駄目なんでしょうか？」

「ダメなのだ！ あの震電はイジツでも唯一無二の機体で、ベッグが見て、触れて、弄ら

せてもらえた機体の中でも最上級のレアな機体なのだ！ その機体を出会ったばかり

のベッグに託してくれたハルトの信頼にベッグは応えたいのだ!!」

普段は無邪気で好奇心旺盛なベッグさんが、こればかりは譲れないとばかりに熱弁を振るう。

その熱意はとても嬉しい。私が日本に帰還する際に、愛機である震電で帰還して欲しいと願うベッグさんの想いは胸を打つものがある。

だが、私としては攫われた時に助けていただいた恩もある。

むしろ本来ならばこちらが返さなければならぬ順番でもあるのだが。

受けた恩の繰り返し、とはいえその為に無理無茶はして欲しくない。どうしたものか。

相も変わらず、脳を回転させてもこれだという答えが浮かばない自分に心がやきもきとする。

「当事者として話を聞いていると耳が痛いわい」

「ハルトの『命の方が大切』を忠実に守った結果、ケイトが震電を撃墜したのも原因の一つだけだな」

ニヤニヤとした表情を浮かべながら笑うナツオさん。絶対に分かってて笑っている。

この機体から全てが始まったとも言える位、震電は大切な機体である事は確か。

確かなのだけれど……やはり皆の命の方が大事だなあ。

腕を組んでらしくもない姿で一人納得していると、今はこの場に居るべきではない人

物の姿をナツオさん越しに見てしまったのである。

物音一つ立てず、ナツオさんの真後ろを取る一人の人物。

ナツオさんは視線が自分の後ろに集まるのを不思議に思ったのか、笑うのを止めてゆつくりと後ろを振り向く。

そこに居たのは紛れもなく……。

「ケ、ケイト!? あ、いや! これは違うんだ! 言葉のあやと言うべきか! むしろよく撃墜出来たなって話しであつてだな!」

表情を一切変えず、尚も立ち尽くしたままのケイトの姿。

ナツオさんが身振り手振りを使いつつ必死に弁舌を振るうが、最終的には。

「すまん、ケイト。私が悪かった。今度ハンブルグサンドを奢るから許してくれ」
「ん、許した」

ナツオさんが謝るといふ珍しい光景を見てしまった。

病室にケイトが加わり、机を用意してじーさまが持つてきてくれた震電の設計図を広げる。

そこで行われている三人の女性たちによる会議。

私は話についていけるはずもなく日向ぼつこの再開、じーさまは楽し気な表情で彼女

たちを見守りつつお見舞い品を口に運んでいる。

「小僧は幸せ者じやの」

「はい、それは間違いないかと。見ず知らずの人間を受け入れてくれた方々には頭が上がりません」

「そんなに自分を過小評価するもんじゃない。少なくとも儂らは小僧のおかげで救われたようなものだ。彼女らも何かかしら小僧の影響を受けているのは間違いない」

「だとすれば、私も皆さんの影響を受けて良い方向に向けて来たのかなと、最近思います」

「そうなの、負の連鎖があるなら正の連鎖だつて起きてもおかしくないな」

お見舞い品にある果物を一齧り、それ私宛に持ってきてくれた物ではないのだろうか
と心の狭い事を考えてしまう。

「だからこそ、小僧に賭けてみたくなつた。儂らを誑かした連中が何者なのかを知る為に、イサオ様と手を組んでイジツをどう変えようとしていくのかを見届ける為に」

「イサオさんや私だけでは無理ですよ。皆の協力は不可欠です」

「ならばイサオ様をユー・ハンクに閉じ込めておいた方が、小僧にとつては都合が良いのではないか？」

「かもしれません。けどイサオさんと約束したんですよ。イジツの隅から隅まで探索し

て、生き残る可能性を一緒に探しましょうよつて」

ロケットを打ち上げてみたりとかね。

その為の準備は膨大に山積みなのですが。お金とか、お金とか。

じーさまは嬉しそうに大笑い。貴方もイサオさんと共にコキ使われる未来が待つているとも知らずに。クフフ……。

「やはり面白い奴だの、お前さんは」

「精一杯、生きていくだけなのですけどね」

「イジツで生きていくならそれが一番だ。さて、儂はお邪魔するぞ。設計図は見終わつたら小僧に渡しておいてくれ」

自分で持つてきたお見舞い品の半分ぐらいを消化して、じーさまは病室を去つて行つた。

それと共に女性陣の会議も一区切りがついた模様。

ナツオさんはベッグさんの肩を叩いて慰めるようにして立ち去り、ケイトも『また来る』と一言だけ発して病室から出て行つた。

先程と同じ様に項垂れたままのベッグさん呼び寄せ、ベッドに二人横並びなるように腰を掛ける。

「ハルト、ごめんなのだ……。ナツオやケイトと相談して考えてみたけど、どうしても間

に合わないのだ……」

「いいんですよ、ベッグさん。お気持ちは受け取りましたから」

「それでもベッグは……」

いつだって周りを明るくしてくれる彼女は今にも泣きだしそうな顔をしている。

そこまで震電や……私の事を考えてくれていると思うと、嬉しい。

そつとベッドから立ち上がり、彼女の目の前に立つ。

少しだけ顔を上げてくれたベッグさんは、不思議そうにこちらを上目遣いで見つめている。

その仕草は、小柄な体型も相まって少女の様にも見えてしまう。一部はとっても大人なのだけだ。

私はその場で床に両膝をつき、ベッグさんの両手を手に取る。

「ありがとうございます。ベッグさん」

「お、お礼を言われる事は何もしていかないのだ！」

「お気持ちだけでも十分、なのですが一つお願いをしてもよろしいですか？」

「お願い？ 何なのだ？」

「私がイジツに戻ってくる間、震電を預かってもらえないでしょうか？」

突然の提案に驚きの表情を隠せないベッグさん。

色々と考えた末、これがいいのかなって。

「勿論、その間は好きに震電を弄って頂いて構いません。例えば修理をして利用していただいても結構ですし、震電に搭載しているイジツでは未知のエンジンを分解してみるのも良いかと」

「ハルト……ベッグでいいのだ？ 本当にベッグでいいのだ？」

「ベッグさんだからこそ、お願いしているつもりです。よろしくお願い致します」

頭を下げてお願いをしようとしたところ、こちらに両手を広げて飛び込んできたベッグさんが目に映る。

慌てて支える様に身体を伸ばすが、勢いに負けてベッグさんと一緒に床へと倒れ込む。

広げられていた両手は首にまわされて、フード越しにお互いの頬が合わさる。

乗りかかる身体の体温と女性特有の柔らかさ、頬擦りをされている感触に自分の顔が熱くなるのが分かる。

それでも、全身で喜びを表してくれているのが分かる。それがとても嬉しい。

先程までの姿とは違って変わって、元気一杯といった様子で声を張り上げるベッグさん。

「ハルトがイジツに戻ってきたら、パワーアップしたベッグ様を見せてあげるのだ！」

怪盗団アカツキ その後のレンジと

ゆっくりと両腕を肩の位置まで上げる。

一旦下ろして一呼吸入れる。

再び、同じ位置まで腕を上げる。痛みもなく順調にここまで腕が上がる様になった。鎖骨が折れた右側の腕に関しては、残念ながら肩より上に伸ばす事はまだ叶わない。ただ、それでもようやくある程度の事は、自分で出来るようになったという事だ。

手術直後は右腕を動かすのは違和感を感じ、左腕でご飯を頂くとうすればポロポロと落としてしまい、お見舞いに来てくれる人達に餌付けをしてもらう日々であった。

自分の不器用さに泣きたくなる時もあったが、ようやくそういった日々ともお別れだ。

私は曾祖父父を探すという本来の目的を達成すべく、身支度を整えてとある人物に会いに行く為、行動に移す事にした。

「無理ね、その肩では」

ある人物とは、全てが謎に包まれているウエイトレスのリリコさん。

本日も見慣れた服装で受付のお仕事に励んでいるようなのだが、誰一人と来ず、留守番状態である。

それでもお給料が支給されるようで、気怠そうにしながらも私の相談事を聞いてくれる。

「オフコウ山の山頂なんて既に調べ尽くされた後よ、可能性があるとすれば崖を下るしかないわ」

「建物に何か隠された仕掛けとかありそうな気配はありませんかね?」

「無い、とは言い切れないけれど、残されている建物なんてボロ家もいいところよ。遭難する人が出るたびに木板が剥されていくもの」

何か思い出すような事でもあったのか、口元を緩めながらそう語るリリコさん。

夜間とはいえ飛行船でオフコウ山を上空から眺めた時も、周囲にはそれらしいものは見当たらず。

もし私の探し人があの場所に居るとしたら、地表では分からない場所、山なり崖なりを掘り進めた先にいる可能性も。

結局はそれらを確認する為にも、一度はオフコウ山へと向かわなければならぬ事は確かだ。

「貴方も大変ね、あっちへ行ったりこっちへ行ったり」

「それでもこの短期間で目星となる場所が見つかるのですから、頑張った甲斐があまりすよ。なんて自分で言うのも変ですけど」

「良いんじゃないかしら。本当の事を馬鹿にする様な人はいないわよ」

肘をついた腕に顎を乗せたまま、こちらに視線を配り、微笑みながらリリコさんが言う。

自分で冗談交じりで言う言葉よりも強烈に心へと刺さる。

恥ずかしさの余り机に顔を伏せるようにして隠れていると、クスクスと笑うリリコさんの声が聞こえた。

「やあ、ここにいたんだね、ハルト」

「見舞いに来たのに当の本人がいないから探しちゃったぞ」

あの後もリリコさんと相談というお喋りが続いた。

ここ最近の出来事についてであったり、私が居ない頃のコトブキの話であったりと話題は絶える事無く。

そうしていたところ、車椅子に寄せられたアレンと、それを押すレンジさんがやってくる不思議な組み合わせに遭遇する。

「ケイト以外の人に車椅子を押されているなんて珍しいですね」

「コトブキに急な依頼が舞い込んだみたいだね、待機組も整備班の機体や赤とんぼを借りてお仕事に出掛けて行つたよ」

「妹がいない事をいい事に、オマエの病室で飲んでいたんだぞ、コイツ」

「いやはや、自分の部屋で飲んでる姿を病院の人に見られると怒られてしまうもので、ついつい」

「怒られるのは当たり前だろ！ 病人がどうの以前に昼間つから酒を飲むな！」

お怒りのレンジさんを、いつも通りのらりくらりと交わしていくアレん。

私の部屋に酒瓶が転がっていたら、病院の人から怒られるのは私なのだろうか？

疑問が湧く中、もう一つ気になる事がある。

「アレんは私に何か用事でも？」

「穴について報告する事があってね。二週間後にハルトが利用してきた穴が再び開くよ」

「そうでしたか、なんだかあつという間にこの時を迎えてしまったという感覚です」

「寂しくなるなあ、僕の喋り相手になってくれる人がまた減ってしまうよ」

「おいしい！ シレつと重大発表をしておいて何とんだよ!? イジツに穴が開くんだろ!?!」

「気にするだけ無駄よ、貴女もハルトがイジツへ来た経緯は知っているのでしょ？」

「生きてるか死んでるかも分からない家族を探しに来たんだよな。そうだよ！ あと二週間で見つけなきゃいけないんだろ!？」

「まさにその事をリリコさんにご相談しておりました」

現在の進展状況を確認する意味も含めて、アレンとレンジさんに状況報告。

障害として立ちふさがるのが、崖下に下りるといふ行動。

私の肩の治療にもうしばらく時間の猶予があれば……つて、肩さえ問題なければ下れる事が前提で話が進んでない？ 私イジツ人じゃないよ？

「崖かあ……。レンジ、君に一つお願い事があるんだけどいいかな？」

「お？ アタシになんか用か？」

「ハルトを背負つて崖を下りてきてくれないかな？」

唐突な提案をレンジさんにするアレンの行動に、こちらが驚いてしまう。

だが、レンジさんは腕を組みながら思考中。まさか考える余地があるとも言えるのか。すか。

解かれた腕と共に、こちらへ向かってくるレンジさん。

私の腰を掴んだと思えば、掛け声を一言、苦も無く持ち上げられてしまう。

この視点から人を見るのは、赤ん坊の頃以来ではないだろうか。

「うん、問題なさそうだね」

「私の精神力がズタボロなのですが」

「ハルトの精神を天秤に掛ける事で探し人が見つかるかもしれない、どうする？」
「レンジさん！ 是非ともお願いします！」

持ち上げられたままの体勢で頭を下げてお願いをする。

レンジさんは口の端を上げて笑う。

赤毛混じりの髪に、ひよこつと生えるように頭の先に立つ髪が揺れる。

見つめ合う瞳は何時だつて情熱に満ち溢れている。

「あちらの問題は無事解決。あとはリリコ次第かな？」

「ここから先は有料になりまゝす」

「こちらも問題なさそうだね。よろしく頼むよ、リリコ」

「私が断るって選択肢は浮かばないのかしら？」

「リリコが特別手当ても貰わずに、話し相手になつていてる時点で浮かばないなあ」

「……はあ、仕方ないわね、あの綺麗な青空を見せてくれた分ぐらいは働くわ」

事が決まれば即実行。

その日の内に必要な物は揃えられ、日が沈んで昇り始めた頃には空の上。

リリコさんが操縦する赤とんぼと、レンジさんの隼一型は何事も無くオフコウ山へと

降り立つ。

念の為、数件ある建物を覗き込み、へそくり術を行使するが何も出ず。

壊れた鉄塔がある観測所らしき建物も調べる事にした。

広さに関してはさほど変わりない。

中に置かれている物も机や椅子、違いといえ、剥き出しの地面でも木板の床ではなく、石床だ。

気になって触っていたところ、レンジさんが何処からか床をひっくり返すのに適した棒を拾ってきてくれる。

幾つか気になる場所を、棒を利用してひっくり返してみたところ、棒が出て来た。一瞬、頭にハテナマークが浮かぶ。

一緒に鍵もあつた事で救われた。

「鍵が見つかるとオタカラに近づいた！　って気がするな！」

「オタカラと言つても墓場だけどね」

「そう言うなよりリコ、ってアタシも人の事は言えないか」

「気になさらず、墓場である事は確かですし、イジツ的に考えればオタカラが眠る場所でも合っていますから」

気重に考えても仕方ないですしね。

結局、山頂部分で見つかったのはこれだけ。

後はこの崖を下りていく他は無きそうだ。

「私が道を作るわ、後からゆつくりと教えた通りに下りてきて」

ユーハング工廠跡地へと一緒に足を運んだ時と似た、動きやすい服装へと身を包んでいるリリコさんは、手慣れた手つきで崖に杭を打ち込みながら下りていく。

この高さから眺める地面は恐怖でもあるのだが、人間こんな時でも邪な事を考えてしまうもの。日頃着ているウェイトレス姿だったらこの世の絶景ともいえるお山と谷間が見えたのだろうか、とか。

追加料金頂きます。とか言われてしまいそんな思考を頭から振り払う様に、軽く頭を動かす。

そうこうしている内に、リリコさんの素敵なおみ足は、無事に崖下にある地面へと辿り着く。

レンジさんと二人して拍手なんかしてみたり。

崖下からの合図を受け取り、今度はこちらの番。とはいえ私は薪を運ぶような背負子に座っているだけ。

僅かにあった不安は、レンジさんにあっさりと背負われてしまう事で、逆に凹む事になる。

「ちよいとばかり怖いかもしれないが、目でも瞑ってれば直ぐ済むさ」

アタシに任せとけ。その頼りになる発言は、一人っ子の私によく効いてしまう。

もしも自分に姉と呼べる人がいたのなら、こういう事を言ってくれたりもするのになって。

現実？ そんな世界の事、私は知らない。

「うーっし！ 一先ず難題はクリアしたな！」

「出来るとは思っていたけど、実際に見せつけられると驚きだわ」

「この際、出来ると思われていただけ、他の連中よりマシだと考えていた方が良くいんだろ
うな」

「レンジさん、ありがとうございます。おかげで探し人が見つかる可能性が広がりました」

「おう！ オマエはホント素直で良いよな！」

頭に伸びてきた手が私の髪をわしゃわしゃとする。ここまで連れてきてくれた事を考えると、好きにして下さいと言いたい気分だ。

その様子を呆れ気味な態度を取りつつも、見守ってくれるリリコさんにも感謝を。

再度、仕度を整えて辺りを見渡す。

アノマロカリスはおろか、生物がいるのかすら怪しいぐらいに、何か動く様子が無い。

離陸に失敗したと思われる機体や、油が染み込んだ地面。時折、渓谷に吹く風の音だけが聞こえる。

レンジさんには休憩と荷物の見張りも兼ねて待機してもらい、リリコさんと共にオフコウ山を一周してみる事にする。

岩肌に触れながらリリコさんと一緒に何かないかと、お互いに意見交換をしながらも探すが、残念な事に何も見つからない。

「何もありませんでした」

気が付けば目の前にはレンジさんの姿。

現状報告をしてガツカリとしてしていると、何処かへ向けて指を指すレンジさん。視線をその先に向ける。

「ここで休憩させてもらった間、辺りを見回していたんだがよ、意外とソウウン峡谷の方にあるんじゃないか？」

「そう思いついた理由は？」

「山を掘った所で出来る空間は限界があるだろ？ それなら一層、地面と繋がっている峡谷側を掘り進めた方が可能性があるんじゃないかってな」

「確かに、見つけようとする場所が墓場であれば、それなりの空間と換気が出来るぐらいの大きさは必要ね」

「だろ？ 他に手が見つかからないなら行ってみようぜ」

「はい、是非とも」

こうして再び三人で行動を共にし、ソウウン峡谷へと足を運ぶ事となった。

ソウウン峡谷側の崖に近づいてみて分かった事がある。

道中は油の匂いと機体の残骸。それでも死体……屍と呼べるような物は転がっていないという事。

一部の崖には機体が突っ込んだのだろうか、自然に出来たとは思えない削られ方がした岩肌と油らしきものが崖に染みついている。

其々にこの惨状をみて思った事を口にしていく。

私は崖に近づき、指で触れてみる。

石くず、埃、油と様々な物が汚れとして指先にこびりつく。

流石に機体がぶつかるような場所には無いだろう。そう考えながら視線を動かすと、ふと気になる場所が見つかる。

そこまで近づき、再び崖に触れる。

先程触れた岩肌とは何か違う、試しに軽く叩いてみると、空洞でもあるのか響くような音が聞こえた。

慌てて二人を呼び寄せる。

三人で辺りを調べていると、人工的に作られたと思われる穴が見つかる。

そこへ山頂で見つけた棒をレンジさんが差し込み、横から棒を押す様にして力を込めると、静かに壁が動き出す。

開かれた道筋、そこから漂う匂い。

人が亡くなられた時にお葬式で嗅ぐ事になる、あの匂いだ。

慎重に内部へ潜入すると、横道が見え、覗き込むように中を伺うとちよつとした部屋が見つかる。

そこには金庫も置かれており、リリコさんが鍵を使い金庫を開ける事に無事成功。

金庫に入っていた書類の束を手渡され、選別していくと、戦没者名簿と書かれた一つの書類を見つめる。

激しい動悸と短い間隔で呼吸が続く。それを落ち着かせてくれる為に呼吸を整えようと必死になる。

それに気が付いたのか、レンジさんは頭に手を、リリコさんは背中を擦ってくれる。

「大丈夫だ、ハルト。アタシらがついてる」
「少なくとも、一人ではないわ」

その言葉に背中を押され、覚悟を決めて中身を調べていく。何人者の名前が並び、その途中で視線が止まる。

私が探し求めていた人の名前が、そこにあつた。

その後、奥へと続く道を進むと墓標が建てられた部屋を見つけ、曾祖父が眠っている場所も見つけられた。

手を合わせてお参りをする。二人も同じ様にしてお参りをしてくれた事がとても嬉しかった。

曾祖父に報告する為にも、必要最低限、必要な箇所を写真に収めて、墓場があつた場所を明記して山頂へと戻る事にした。

オフコウ山の山頂へ戻ってきた頃には日が暮れ始め、安全を期してここで一泊する事になった。

用意していただいた夕食を頂き、今日の出来事を三人で喋りながら、頭でまとめようと努力をするのだが、注意力散漫状態。

リリコさんに早く寝なさいと促され、お言葉に甘えて先に寝させて頂く事にした。

毛布を頭まで被ってしばし目を瞑るが、頭の中はぐるぐると。想像していたより精神力が削られているようで。

これでは寝れない、諦めて星空を眺めていると、誰かが覗き込んできた。イタズラっ子にも似た顔で見つめてくる、ルビーにも似た赤い綺麗な瞳。

「やーっぱり起きてたか！」

「やっぱり寝れませんでした」

「そんな気はしてた。様子を見に来て正解だったぜ」

「何なのでしょうね。写真でしか見た事がない顔、実際に会った事もない血の繋がった人、それなのに頭の中はぐちゃぐちゃに」

「見つけてまだ数時間だろ、そんなもんだって」

「そんなものでしょうか」

レンジさんと会話をしつつも、未だに意識はふわふわと。

何かを考える事もせず、星空を見上げていたら、急に毛布が捲られて誰かが入り込んでくる。

驚いてそちらに視線を向けると、レンジさんの顔が正面に見える。

「今日だけは特別だ。アタシがハルトのお姉ちゃんになつてやろう！」

「マジですか、お姉ちゃん」

「おう！ だからよ」

伸びた手に頭を抱えられ、胸元へと押し付けられる。

大きくて、柔らかくて、暖かく、心が落ち着きを取り戻しつつある中で、眼の奥が熱を持ち、涙がこみ上げてくる。

情けなくも大粒の涙を零しながら、レンジさんの胸元に顔を押し付ける。

抱えられた頭をあやす様に撫でられて、それがまた心地よさを感じる。

「今の内に目一杯泣いて、スッキリさせてまた明日から頑張ろうぜ。なに、アタシもついでるからよ！」

怪盗団アカツキ ラーメンチャーシュー味玉ギョーザ

私の手元には一冊の本がある。

色褪せたページを一枚づつめくり、そこに記載されている内容を頭に詰め込んでいく。

始まりは材料の用意から。決められた分量と共に手順が書かれており、ある程度料理が出来る人であればご家庭でも作れるように出来ている。

それらは日本の一般的な家庭環境を前提とした内容であり、イジツで本に書かれたどおりの物を再現するのは困難を極めるであろう。

だが、私にはやり遂げなければならぬ使命があるのだ。インノにひっそりと存在する怪盗団アカツキのアジトで。

「ハルト、これを読んでくれないかしら？」

「はあ、いいですけれど」

あの騒動以来、久しぶりの帰還となるアジトでリガルさんから手渡されたとある一冊の本。それは調べ物を任された際に見つけた料理本の一つである。

相も変わらず簡素な表紙に日本語で書かれている文字は『家庭で作る美味しいラーメン』

君と再び出会えるなんて思いもよらなかつたよ。

「これはラーメンについて書かれていた本ですよ。リガルさんは食べた事があるので
すか？」

「もちろんよ！ あの美しい透き通るようなスープ！ もちもちのコシのある麺！ 忘れてはならないチャーシューと味玉！ それにギョーザよ！」

「ラーメンだ。紛れもなくユーハングと同じ。でもどこでラーメンと出会ったのですか
？」

「とある町へ仕事の為に偵察へと向かった際に偶然屋台を見つけたのよ。赤い提灯をぶら下げて暖簾にはユーハング語らしき文字で書かれていたのを見て、今日はこれだわ！
って感じたわ」

「運命の出会いというやつですか」
「そつ、私とハルトの様にね」

小首を傾げてウインク一つ。リガルさんの唇に触れていた綺麗な指先から解き放たれる情熱的な愛情表現。

大変嬉しく思うのだが、正直照れる。それを悟られないよう本の内容に集中するが、

バレないわけがない。顔が赤くなっているのが自分でも分かるから。

「この美しい私からの愛情を受け止めてくれないだなんて、つれないわ」

「私にとつてリガルさんは高嶺の花です。本当に綺麗な人だと思っておりますので」

「……ありがとう。でも余り自分を過小評価しすぎない事ね、私が悲しくなるわ」

「以後、気を付けます」

「もう！ 言つたそばからそれなんだから！」

リガルさんの抗議と連動するように揺れ動く短めに整えられた綺麗な白髪。見つめていたくなる程の魅力を振り切るように再び本へと集中する。

先程の話を聞く限り、何処の誰かは分からないがイジツでもラーメンを作り上げた方がいらつしやるようだ。それも日本にあるのと変わらない程の物を。

もしかしたら私と同じところからやってきた方なのかもしれない。

「つまり、リガルさんはその時に出会ったラーメンの味と再会したいという事でしょうか？」

「そうよ！ アジトからこの本が見つかった時は運命を感じたわ！」

「再び屋台に直接食べに行かれた方が早いのでは？」

「それが出来ていれば苦勞はしないわ。出会いはたった一度だけ、以来いくら探しても見つからないもの」

怪盗でも見つける事ができないラーメン屋ってなんだろうか？

「それで台所を借りたいという話になったんですね」

「はい。ここへ戻ってきて早々にこういう事になるうとは思いませんでした」

「ふふっなんだかハルトさんらしいですね」

モアさんからすると、別段突拍子もない行動とは思われていないようだ。イジツでラーメンを作る事が私に課せられた使命なのだろうか。

冗談はさておいて。日本とは違い一から全てを作らなければならない状況。だが、全て本の材料どおりに作り上げるのも不可能である。

ある程度は妥協をするとして、一先ず麺を作る事にしよう。モアさんには部分的にだがイジツ語に翻訳したメモ用紙を渡しており、具材を担当してもらえる事になった。

よし、ではレシピ通りに集めた材料を使い、麺を作ろう。

水、塩、重曹をよく混ぜ混ぜするのだ。塩は贅沢にラハマ産。重曹に関してはサイダーがあるのだから見つかるだろうと予想したところ、モアさんから扱っているお店を教えてくださいという事で用意が出来た。ついでに久しぶりのしゅわしゅわを味わい深い溜息が出る。

そこへ強力粉、薄力粉を濾しながら入れる。この二つも妙にスイーツが充実している

イジツならいけるだろう、いけましたのパターン。意外となんでもあるよね、イジツ。後は卵を投入して手を使いひたすら混ぜ混ぜ。なんせ人数が人数なのでここが一番大変な作業かもしれない。

「ハルト！ 楽しそうな事をしているわね！ ワタシにも何かやらせなさいよ！」

いつのまにやら台所へやってきたマヨナカ探偵団のウメコから指示が飛ぶ。既にミカンとユズハはモアさんと一緒に作業を手伝っている様子。

「あつちの作業に飽きた？」

「ギクツ！ そそそんなことある訳ないじゃない！ でもアンタが大変そうだから手伝いに来てあげたわけよ！ ありがたく思いなさい！」

「あざまーすー」

「何よ！ そのやる気のない返事は!!」

とはいえ、現状ではウメコにお願いする事はないのだが、先に後でして欲しい事を伝えておくべきだと判断する。

「ウメコちゃんにはもうちよつと後でお願いする事がありますので、それまでお待ちを」「ちゃん付けで呼ぶなー！」

背中と腰に心地よい力加減でポカポカと叩いて抗議をするウメコちゃん。手を止めずにひたすら混ぜ混ぜ。

アカツキが六人、探偵団が三人、ついでに私の計十名分の麵を作るのだ。一大作業ともいえよう。しかも直ぐに食べれるわけではないので真つ先に終わらせないと。

格闘を続けておおよそ二時間ほど、冷静に考えたと怪我明けの人間に作らせようとするリガルさんも中々の悪党ではないかと思ひ始めた頃によくやく生地が出来上がる。

これを清潔な袋に詰め込み、地面に敷いた新聞紙の上に置き、更に新聞紙で挟み込む。

「そんなわけで探偵団の皆様、靴を脱いで踏んでください」

「これを踏むの!? 食べ物を粗末にはいけないわよ!」

「普通であればそうなのですが、麵作りにおいては必須作業なのです。生地は汚れないように対策をしておりますので躊躇なくどうぞ」

「お先に……」

「不思議な感覚」

「あつ! ミカンもユズハもずるいわよ! ワタシも!」

大きな塊となっていた生地は三人娘のおみ足により徐々に平らへと変化していく。ブドウ踏みならぬ麵踏み。

それを二度三度と繰り返し返していく。一度だけモアさんもやりたそうな表情をしていたので実演していただくことに。

「この高さだとハルトさんと同じ視線になるんですね。なんだか新鮮です」

不安定な生地の上で転ばないよう両手を握り締めている時に言われると、先程と同じく照れが発生してしまう。

そのまま生地を踏み踏みとしていくモアさんは徐々に下降していき、普段と変わりない位置まで戻ってしまった。シンデレラタイム終了でございます。そんなにしょんぼりした表情をしないで。

こうして出来上がった生地は再び袋に詰められ、しばしの間眠りにつく事になる。

終わりと言いたいところだけれど具材のお手伝いもしなければならぬ。リガルさんの口ぶりでは、チャーシュー、味玉、ギョーザは必須の予感。

順番でいえばチャーシューと味玉か。本と睨めっこをして再び作業へと戻る事にした。

イジツにおいて家畜というのは大変貴重な生物のようだ。現にギユウギユウランドというところで飼育されている程度だとか。

なので豚が用意出来ない。牛も。となれば庶民の味方、アホウドリの力を借りるしかないだろう。

むね肉を半分程漬ける事が出来るように水、しょうゆ、砂糖、酢、しょうがを入れて中火で煮込む。

本来であればみりんが必要だ。しかしここはイジツ。でも私は穴の先からやってきた日本人。という事で代用品としてダイバーゼンと砂糖を混ぜ合わせた物で対応する。

「おま!?! それを料理に使うのかよ!?!」

「貴重品ではありませんがこれもラーメンの為。許されたし」

「何が許されたし。だよ!?! ってかりガルも神妙なツラして頷いてんじゃねえ!!」

ついでだからこのタレで味玉作っておこう。

そして夜へと突入する。モアさんとリガルさん全面協力により滞りなく進み、後は餃子とスープを作るのみ。

餃子に関してはモアさんによるイジツ風にアレンジが施されているが、見た目は日本でみた物と同じ。二人でつまみ食いをした結果は言うまでもなく美味しい。

スープ。ラーメンにおいて重要な位置づけであることは間違いない。しかし今回はあくまで『家庭で作る美味しいラーメン』なので醤油を基本とした鶏がらスープとなる。それにリガルさんが伝えてくれた透き通るようなスープというのもきつとこの味だろう。イジツで出来そうなのはこれと塩ぐらいだから。

アホウドリを無駄なく利用し、煮込んでいる間に横で麺を刻む。隣からは餃子の良き

香りが胃袋を刺激する。

これだけの量があると、みんなで一齐に食すとせつかくのラーメンが冷めてしまうとなれば。

「全員分は用意してあるので食べる順番を決めてください」

「言うまでもなく私が一番よ!!」

「リガルは最後よ」

「最初に食べさせたらうるさいのだ」

「なんでよ!! 私のおかげで食べれるのよ!! 感謝しなさい!!」

「感謝するのはモアとハルトの二人にだと思ふなあ」

「ロイグに同意するぜ」

「アンタたち! 後で覚えてなさいよ!!」

「それでは探偵団の三人から用意しますね」

台所へと戻りモアさんに順番を伝えると苦笑いの表情を見せる。私たちが最後のはいうまでもない。

器を用意し注がれるスープに茹でた麺を投入。ねぎにチャーシューや味玉をのせていく。メンマが欲しいけれど流石にイジツでは竹が無いわけで。代用のたけのこまで探してたら日本へ帰れなくなってしまう。

そこへモアさん特製の餃子をのせたお皿をお盆へ置いて完成。

「お手伝いしていただいた三人には最初に食べてもらいましょう」

「ふ、ふん。別に嬉しくなんてないんだからね！」

「ここで意地を張つてどうするのウメコ……」

「いただきます」

この子たちも割と自由だよね。運び終わり再び台所へ。

後ろから聞こえる美味しいの一言は、今日の疲れを吹き飛ばしてくれる。

「ついに私の出番ね！ 待ちわびたわ!!」

「お待たせしました。どうぞご賞味あれ」

リガルさんと同じラーメンを食べたというカランさんとベッグさんからは高評価をいただく事に成功したが、はたして美しい人からの判定は。

手を合わせていただきます。優雅な動きで箸を扱い麺をすする。

無言のまま動かされる口元に視線が集中してしまいが、それはすぐに解消されてしまう事となる。

「ハルト！ 貴方は素晴らしい仕事をしたわ!! あの屋台で食べた一口めの味！ 固すぎず柔らかすぎずに程よい力加減で途切れる麺！ 美しいスープはあっさりとしてい

るにも関わらず麺との絡み具合が絶妙な味加減！ このチャーシューはどうやって作りあげたというの!? アホウドリの肉でこんなにも濃厚な味わいとろけるような食感を生み出せるなんてイジツを探しても貴方だけよ！ 味玉も！ 中まで味が染み込んでいて一つだけしか食べられないなんて罪よ罪！ そしてギョーザ！ 見た目はそのままに私たちの好みの味に変化させるなんてモアは天才よ！ ああもう私幸せすぎでどうにかなりそう!!」

「(最後にまわして正解ね)」

「(想像以上にうるさいのだ)」

「(リガルのラーメンに対する想いは想像以上ね)」

「(つーか美味しいなら黙って食えよ)」

自分で食べても美味しいと感じる。成功してよかった。隣で食すモアさんを顔を向けると笑顔で返してくれた。

探偵団三人には少し量が多かったのだろうか。ごろごろと寝っ転がり我関せずで突き通している。

こうしてリガルさんより手渡された一冊の本から始まったラーメン騒動は、一旦の終結を迎える。

「やだ!?! 麺を口に含みながらチャーシューを食べると味が変わるじゃない!! 美しい

とはいえない行為が私を誘惑してくるわ!! もしこれを味玉やギョーザで試してみたなら……はっ! 私はもしかしてイジツの理に触れようとしているのかしら!」

この人にラーメンライスの存在を教えたらどうなるのだろうか……。

丑三つ時、足音を立てずに部屋から出て台所へと向かう。

実はラーメン用の麺を作っていた時に他の物も作れるのではと思考し、材料に潜ませ別に打っていたものがある。

その名はそば。またそばか。そんな声も何のその。結果だけ先に伝えれば正直満足の違いの結果とはいえない。

当たり前であるがイジツでそば粉なんてものが早々手に入る物では無かったこと。市場で手に入れた物は小麦粉と混ぜ混ぜの更に混ぜたもの。

おかげでそばなのかうどんなのか分からない代物が出来上がってしまう。しかし作ったからには食さねば勿体ない。幸い醤油は一般的だったので問題なし。みりんの代用品が作れる事はラーメンの時に実証済み。ならばささっと作ろうかけそばを。

自分が食べるだけなので目分量で適当に汁作り。ダシ汁は……ラーメンの時に作ったのを足してしまえ。

しばらく汁を煮込ませた後にそばを投入。油が浮いているのはご愛敬という事で。

器に移して完成したかけそば。醤油の色に染められた汁にそばとネギをのせただけという。理由をつけてかき揚げも用意すべきだったかもしれない。

椅子に座って食べるものでもないし、このまま立ち食いでいただきま……？

本能が叫んでいる。後ろを振り向くなど。だがしかし振り向かなければ人生が終わるとも。どうすればいい。

悩んでいても始まらない。意を決して器と箸を持ったまま振り向く事に。

「ハールートお、その美味しそうなものは何なのかしらあ！」

「あ、あの、その、美しいとは到底かけ離れているものでして、はい」

「私の分」

「は？」

「私の分も用意しなさい！」

「はいいい!! 今すぐ!! むしろこれお先にどうぞ!!」

熱々のかけそばはリガルさんの手に渡り、私は再び自分の分を作り始めた。

直ぐに食べ始めるのかと思えば私の分が出来上がるまで待つていてくれるようだ。

『ついて来なさい』リガルさんの指示により器を持ったまま後ろをついていき、そのまま外の景色が見れる場所へと案内される。

本日のイジツは星月夜。星の光により夜中でも明るい世界に二人きり。かけそばを

持ったまま。

もう細かい事は気にしないでおこう。温かいうちにいただきますよ。美味しいか分からないですけど。

「あら、大丈夫よ。私のカンがこれは良いものだと言喜に湧いているわ」

リガルさん。私は時折、貴女の事がよく分からなくなりますが。

イジツのグルメ？ いや、貴女はきつと、荒野のグルメ。

カナリア自警団 if 20話

カナリア自警団 その1

「はあ……いざとなれば私が立て替えるよう伝えておくわ。それじゃまたね、ルウルウ」
ち、ちよつと待つて!?! 流石にそこまでお世話になるわけには! 伝えようとする前にユーリア議員は飛行船に搭乗するため歩みを始めた。その時、マダムから声がかかる。

「ユーリア議員、このままお帰りになられると後悔をされるかと」

「それはどういう意味かしら? ルウルウ」

「こちらに目配りをするマダム。私ですか?」

「用事があるのはハルト君なの。だけど貴女がハルト君とここまで仲が良くなっているとは思ってもよらなかつたわ。だから引き止めたの」

「回りくどいわね、一体何があるっていうのよ?」

お別れの挨拶をして再び会いましょうで終わるはずの流れが一転して不穏な空気に包まれる。

その原因は私に関する事らしい。一体何があつたのだろうか? それはマダムの口

が開かれることにより判明した。

「イヅルマから使者がいらしているわ。現在は町長が対応してくれているのだけれど。その時に伝えられた用件はイヅルマでの震電の再調査の要望、所有者であるハルト君の議会会への出頭要請よ」

「わ、私ですか!?! それって何かエライ人たちの前で喋らないといけないやつですよ
ね?」

この世界に辿り着いてからそれなりの時間が経過したが、まさか証人喚問のような事を要請される身になるとは。

彼等の言い分をそのまま受け止めるとすれば、震電の所有者が私だからという。

アレシマで演説を聞いた後も披露した震電が、イサオさんが搭乗していた機体であると疑いを続けているのだろう。

実際にそれは事実である。しかしこれを公表すれば話は複雑化する事は間違いない。

そうなればイジツで曾祖父父を探す目的がある私の旅に制限がかかる事は考えるまでもなく。マダムから聞かされた内容が頭の中をぐるぐると。

結局のところはここで悩んでいても始まらない。イヅルマからいらしたという使者の方からお話を伺わなければ詳細は分からないのだ。

「ルウルウ、今すぐその使者に会わせなさい」

「ユーリア議員。仮にもラハマとイヅルマの話し合いの場にガドール議員である貴女が現れたらまた好き放題言われるわよ?」

「私がアレシマであの震電とイサオの関係性は無いと発言した内容を否定するような行動を起こしているのよ。話を聞く権利ぐらい私にはあるわ」

「呼び止めた私が言う事ではないのだけれど、大人しくして頂戴ね」

マダムとユーリア議員の話し合いは一先ずついたようだ。こちらを向いて話を始めようとするとマダムの表情は申し訳ないという意志が伝わる。

「ごめんなさいね、ハルト君。こんな事につき合わせてしまった」

「いえ! ああの震電の所有者は私ですから。ですがイヅルマに震電が運ばれてしまうような事になってしまったら」

「そうね、あまり良い事にならないのは確かだわ。可能な限り私たちがそういった事態にならないよう努めるわ」

マダムの憂いを帯びた表情を見つめていると罪悪感で胸が苦しくなる。ラハマに戻ってきたばかりなのに空気が重く苦しい。

それを打ち払う様に拳手をして発言をするアレンの姿。

「今回は僕も同伴させてもらうから大丈夫だよ。ハルト」

「アレンも来てくれるのかい!」

「もちろん。色々とキナ臭い感じがするしね。何より僕のお喋り相手を正当な理由なく取り上げられるのはゴメンだから。リリコも付いてきてくれるからイザという時も安心さ」

「マダムからのご命令でもあるから気にしないで」

「そうだとでもありがとう！ アレン！ リリコさん！」

二人が来てくれるというのは大変心強い。そうだ、まだ要求が通るわけではないのだから。

それにこれだけの人たちが私の力になってくれると明言してくれる。これ以上、頼りになる言葉は他にあるだろうか。

そしてもう一人この場に現れた方がいる。駐機場からこちらにやってきたのレオナさんだ。

「マダム、コトブキ飛行隊はどうすればよろしいでしょうか？」

「会談が終わるまで待機してもらえるかしら。これ以上は連れていけないわ。ごめんなさいね」

「いえ！ 了解しました！ 連絡があるまでコトブキ飛行隊は待機します！」

背筋を伸ばしたままの状態で見線がこちらへ。マダムも気づき、何か伝える事があればと仕草で返す。

「ハルト、不安かもしれないが決して一人ではない事を忘れないように」

「はい！　ありがとうございます！　レオナさん！」

私からの返事に頷きコトブキの皆の元へ踵を返すレオナさん。

よし、後ろ向きに考えず頼れる人たちに甘えながらも乗り越えよう。お世話になった分は後で返していけばいいのだから。

「イツルマ所属カナリア自警団の団長を務めておりますアコと申します！」

「同じく隊員のシノです！」

町長室にいらしたのはイツルマのカナリア自警団。白い制服に身を包み敬礼の姿勢で自己紹介をしてくださる二人に名前を告げてから頭を下げる。

座るようにと町長から勧められ腰を下ろすが、気が付けばど真ん中に座らされている形に。

「いやあー戻ってきて早々に呼び出す形になってすまないねえハルト君」

「いえ、私の問題ですから気になさらないでください。町長」

「使者のお二人には申し訳ないのだけれど、先程の要求をもう一度喋っていただけるか
しゅー

「あ、あの！　皆さんの後ろにいらっしやる方は……」

「私の事なら気にしないでくださる？　話を聞きに来ただけだから」

団長のアコさんからのご指摘も何のその。表情を一切動かすことなく鉄仮面のまま淡々と返答するユーリア議員。

ただし圧が凄い。背中越しかからでも感じ取れる程に。ピリつく場の空気と終始引き攣った表情をされている自警団のお二人。

「は、はい！　では先程お伝えさせていただいた内容を確認の意味も含めて復唱させていただきます！」

対面する形で座っていたアコさんが再び立ち上がり内容を伝えてくる。

「イツルマ議会より、アレシマで行われた評議会で幾つかの疑問が残されており、それらを払拭する為にもラハマに駐機されている震電の再調査の要望と、その所有者であるハルトさんから詳細な説明をお聞きしたい為、イツルマへの訪問をお願いに参りました」

「何よ、私の説明だけじゃ足りないわけ？」

「ひい！　い、いえ！　そうわけではないと思いますが！　私たちも命令を受けてから即飛び立つようにと言われまして……」

「そんなに怯えなくてもいいじゃない。ここに議会の連中ではなく自警団がいる時点である程度は想像できるわよ」

「……」理解感謝致します」

声を張り上げるわけでもなく一定の音量を保ち続けるユーリア議員の喋り方に、お二人は恐怖を掻き立てられている様子。

私の隣にいらつしやるマダムも呆れ気味。町長はその間でまあまあと口にしながら落ち着かせるような仕草。

「先程も伝えたけど、ハルト君はラハマの所属という訳ではないから私に出来る事といえば、こうして場を設ける事しか出来ないんだよ」

「所属。という意味ではオウニ商会の預かりとなるわね」

「そして私の良き理解者でもあるわ」

女性が二人、腕組みをしながら私にとって心強いお言葉を頂く。

マダムのお言葉は客人であった私を食客へと格上げしていただけたという事だろうか。

時間が経つほどユーリア議員の中で私の立場が謎の右肩上がり。始めてお会いしてからしばらくは罵倒される側だったというのに。

「立場の話は一旦横に置くとして。ハルトはどうしたい？」

「どうしたいかと問われてもお二人の言葉だとほぼ強制のような」

「そんなことはないよ。嫌なら嫌だと言えば終わる話さ」

車椅子に座るアレンから与えられた選択肢。嫌か、そうでないか。

「この説明だけでは、拒否をする以外に選択肢が浮かばないのですが」

「まあそうだよ。素直に従えば震電は調査の名目でくまなく調べ上げられて、ハルト自身もしばらくの間はイヅルマから身動きが取れなくなると思うよ」

「震電の再調査だけを許可をした場合はどうなります？」

「却下。一つ要求をのみ込んだらそのまま身ぐるみ剥がされて何も残らなくなるわよ」

「私たちは悪党でも空賊でもありません！ 自警団です！ そのような事は決して致しません！」

「アンタたちに文句を言っている訳ではないわよ。問題は議会の方。大方パロット社絡みで起きた事件の対応が遅れた事に批判がきて、その帳尻合わせも含めてアピールでもしたいんですよ」

前後左右と各所から聞こえる声。パロット社絡みってなんだろう？

疑問が浮かび聞こうか聞かまいかと考えていたその時、隣いるマダムが手を叩くことにより慌ただしい空気が静けさを取り戻す。

「私たちが協議をしても仕方ない事よ。ハルト君、答えを聞かせて頂戴」

「いめんさー」

両手を前に揃えて頭を下げる。

その答えに深い溜息をつく自警団のお二人。彼女たちにとってもこの命令は本意で

はないという事だろうか。

「まっそうよね。私だって同じ立場ならそう答えるわ」

「シノさん！」

「取り繕う理由が無くなったのだからいいじゃない。私たちだってこの内容を知らされた時は部長に抗議したじゃない。こうして伝えて返事が貰えただけ上出来よ」

「そう言っていただけだと助かります」

「あの、やはり駄目でしょうか？ ハルトさん」

「震電は先程申し上げたとおり。私自身についてはやるべき事があり、時間制限付きなのです」

「やるべき事？ 時間制限？」

不思議そうにオウム返しのアコさん。拒否する理由を伝えれば諦めてくれるだろうか？ 喋れる事といえば家族を探しに来たと濁すぐらいだけだけれど。

悩みながらも周りを見渡すと視線が合う人物がいる。しばらくそのまま目で通じ合えるのかどうかを試してみたが、彼は微笑みを返すだけであった。

「ごめん。言い訳として使わせてもらうね、アレン。」

「車椅子に座っているアレンの足を治さなければならぬのです。本当に足が動かなくなる前に」

機能回復訓練。いわゆるリハビリと呼ばれる行動。

おぼろげながらに思い出す訓練方法と、旅立つ前にナツオさんへ依頼し用意をしていた。ただいた機材。

それらを並べるにはアレンの部屋では手狭という事もあり、病院から少し広い部屋をお借りする事となった。

アレンの前には車輪の代わりにゴムでしつかりと固定されたU型の歩行器。

後ろには倒れ込んだ場合でも怪我をしない為にベッドが用意されている。

その上では大人しく私の手により足へ処置を施されているアレンの姿と、処置方法を学習兼お手伝いをしてくれるケイトの姿。

「大勢の人たちに見つめられると照れるなあ」

気が付けば広いはずの部屋には大人数。コトブキの皆にマダムとユーリア議員。そしてカナリア自警団の二人もいる。

「足になんか巻いてるけど、それだけでアレンが立てるようになるの?」

「さあ? 答えを知るのはハルトのみですわ。チカ」

「案外お酒飲ませた方が動けたりして」

「その案はいいね、実にいいよ。迅雷ちゃん」

「いい加減その呼び方はやめて！」

飄々とした姿で会話を続けているアレンたち。こちらはケイトの質問や疑問に答えながらの作業。意外と身体が覚えているものだなと思う。

「これでアレンが再び動けるようになればケイトの心配事も減るわね」

「逆じゃないかしら？ また研究の為に好き放題飛び回るでしょ？」

「ケイトも同感。しばらく大人しくして欲しい」

「だそうですよ、お兄さん」

「善処するよ。とはいえこの足が動くかどうかはハルト次第だけだね」

「そこで私に話を返しますかね。正直分かりませんか？ 本職というわけではないのですから」

「大切な妹のお願い。是非とも叶えてあげて欲しいなあ」

自分の事なのに他人事のように言い放つお兄ちゃん。ケイトもそんな熱心にこちらを見つめないで欲しい。本当にどうなるか分からないのだから。

「あの、これで本当にアレンさんが立てるようになるのですか？ ハルトさん？」

「これだけを見ていれば正直なところ、俄かに信じ難いけど」

「お二人の意見はごもつともだと思えます。私だつてどうなるか分かりません。けど」
「けど？」

「これだけ期待をされたら応えなくなるのも人の性。ですかね」

自分で発言しておいて恥ずかしくなる。本来は誰かにお節介を焼くような人間ではないのだから。

それでも見えず知らずの人間を向かい入れて、私の目的のお手伝いをして下さる皆さんに恩返しをしたいという想いに嘘偽りはない。

そのことを証明する為に吞兵衛には頑張ってもらわないと。

処置が済み、アレンを引っ張り起こしてベッドのふちまで移動させた後に背中を叩く。

「みんなアレンの事を心配してくれているんですよ」

「それじゃ、期待に応えないといけないね」

ベッドのふちに腰掛けているアレンはU型の歩行器に手をかける。

最初は腕の力で起き上がり処置を施した足を直立させるように手伝いをして地面と接地した事を確認。

私に出来る事はこれぐらい。経験知識としてはあるが付け焼刃なのは言うまでもなく。後は全てアレンに任せるしかない。

大丈夫、たとえ吞兵衛でもイジツ人。日本人とは身体能力の基礎値が違う。

アレンの腕からゆっくりと力が抜けていく。歩行器を掴んでいた手は徐々に広がり

をみせ、やがて手は歩行器から離され自分の足で立つ姿が目映る。

「不思議だ。足に力を込めている感覚はないのに立っている。震えがきたりもしない。ハルト、君は魔法使いかな？」

「三十歳を過ぎればなれるみたいですよ。悪化させるとまずいからそのままベッドに倒れてください」

「もうしばらくこの高さを眺めていたいんだけど。ダメ？」

「駄目」

ベッドの上からアレンの身体にしがみ付き後ろへと下げる。そのまま重なるように私の上に押し掛かるアレン。

よかった。無理矢理感否めないけれどアレンの足はまだ自立歩行の可能性を残している。このまま訓練を怠らずに進めていけば近いうちに歩く事が出来るのかもしれない。

そんな事を考えていれば部屋の中はお祭り騒ぎ。放心状態のケイトの両腕を左右から掴んで揺らす者。安堵のため息をつく大人組。何故か『当然よね』といわんばかりの者。驚きを隠しきれない二人組。

相も変わらず重なったままの状態でアレンが話しかけてくる。

「ハルト、君にまた借りが出来たね」

「そういうのはいいからお礼を言つて、そっちの方が嬉しい」

「あはは、君らしいね。うん、そうだね。ありがとう、ハルト」

「どういたしまして。これからはケイトの監視下による地獄の訓練が始まるだろうから覚悟してね」

「たまにはサボつてもいいかな?」

「その時は呼んでくれれば連れ出すよ」

「本当かどうかも分からない他愛のない話。本来予定には無かったイジツでの出来事。僅かだとしても友人の手助けが出来た事は喜ばしく感じる。」

カナリア自警団 その2

その日の夜。

開催された食事会。そこに掲げられる看板は多種様々である。

コトブキ飛行隊の任務遂行達成、アレンの回復祈願、カナリア自警団の歓迎会と大騒ぎ。

仮設で開かれたジョニーズサルーンは人だかり。主役の一人であるアレンは、好きなだけお酒が飲めることもあり、幸せな表情を浮かべている。

「アレンさんの足の治療をしたのが、ハルトさんだとは思ってもありませんでした」

「マダムからアレンさんの話し相手として雇われたとは聞いていましたけど、こんな騒ぎにまで発展するなんて」

「みんな理由を見つけて騒ぎたいだけなんじゃないかな」

「あはは！ それ言ってるかも！」

お互いに顔を会わせながら笑い合うアンナさんとマリアさん。

私が相手でも態度を変えず気さくに接してくださいますが、これでもお二人は羽衣丸の操舵手と副操舵手である。あんなにも巨大な飛行船を操舵するなんて肝が据わっている。

それをいってしまえば管制官として働いているアテイさんにベティさんシンデイさんも。羽衣丸の女性陣は大変お強い。

「気になっていたんですけど、ハルトさんはどうしてカウンター内で調理をしているんですか？」

「パンケーキの使者とカレーの使者から約束を守れとせがまれました。二人とも飲み物のおかわりは如何です？」

「あー！ それじゃ同じなので！」

「私もー！」

手渡された樽ジョッキに同じ物を注ぎ入れていく。こうした作業を行っている方が性に合うのだろう、落ち着ける。

おかわりをお二人に手渡して最後の仕上げを始める事にした。

パンケーキに関してはリリコさんお手製に少しばかり材料と手順を変更していただいただけであるが、リリコさんから評価を得られたので一安心。

カレーに関しては一晩寝かさないといけない物……とまでは言わないけれど、時間が足りない事も事実なので、日本から持ってきたレトルトで対応をする。チカ以外はカレー中毒者ではないだろうからね。

今回一番手間取ったのがハンブルグサンド。なんせイジツで食べれる魚はお値段が

非常に高いらしい。一般人がおいそれと食べれるものではないと。

では、イジツのハンブルグサンドとは一体なんぞや？ 話を聞く限りでは何かを揚げた物がパンズに挟められた食べ物らしい。手堅く考えれば肉だと推測出来るのだが。

そうなるとハンブルグサンドとは名乗ってはいるけどハンバーガーなのだ。それを目指して作ればイケるのでは。駄目だろうか。

不安に駆られつつも用意していただいた材料を使い作り上げていく。

作るからにはユーハングの食感と味を再現した物にしようと思い、白身魚と触感が似ているといわれる鳥のささみから手を出す。本当は鶏がいらしいのだが、そこまで望んでも仕方なし。

塩胡椒を振りまいてマヨネーズで揉み揉み。衣も付けて油でじゅわーっと揚げる。いい香りが辺りを漂い始め、食いしん坊さんがこちらの作業を見つめてくるが見て見ぬふり。

切り終えて水に浸しておいたタマネギをパンズにのせ、きつね色に揚げたささみのフライをその上に追加する。マヨネーズを一列ささっとかけて蓋をするようにして完成。

味付けが塩胡椒とマヨネーズという素材の味しかなさそうな作りなのだけど大丈夫なのだろうか。やや不安を感じる。

お皿にのせて形を綺麗に整えてからケイトの元へ運んでいく。

「ケイト。ユーハ……私の地元で食べられているハンブルグサンドをこちらの食材で再現してみただけよかったら試食してくれる？」

「是非。一つ疑問がある」

「なに？」

「ハルトは何故、ケイトにハンブルグサンドを用意してくれたのか」

「アレンから好物だと聞いて。折角のお祝い事だから作ってみようと思つてさ。二人分も三人分の好物を作るのも大して手間は変わらないから」

咽るような声と胸を叩く音が聞こえたが気にしない。

ハンブルグサンドをのせたお皿をケイトの前に置き、空いた席にお邪魔する。

大きな円形のテーブルにはコトブキの皆にアレンと自警団のお二人。そこへ所狭しと並べられた料理の数々。どれもが良い匂いを漂わせて胃袋を刺激する。

何から頂くかと考えていれば、隣にいるシノさんから話しかけられる。

「貴方つて本当に変わっているわね。昼間は足の治療をしたかと思えば、夜はこうして誰かの為に料理をしているのだから」

「こちらでお世話になる方々へ私が出来る恩返しですから」

「会談の時から気になっていたけれど、貴方つてラハマ出身ではないようだけど？」

「物凄く辺鄙な場所で田舎暮らしですよ。おかげでこのような騒ぎを引き起こしてしま

うぐらいに」

「そうよね、このタイミングで震電に搭乗して現れるぐらいですものね」

からかうように笑うシノさんにつられて私も笑う。この騒ぎもきつとイサオさんの想定内なのだろう。

でも、こうして様々な人に出会いきっかけにもなるのだから不思議なものだ。

私の横からそつと腕が伸び、テーブルの上に置かれた物はリリコさんお手製のパンケーキ。首を動かせばご本人がいらつしやる。

「キリエたちの相手も済んだのだからそれでも食べて休憩しなさい。ラハマに戻ってきてからロクに落ち着けていないでしょう？」

「言われてみれば確かに。お言葉に甘えさせてもらいますね、リリコさん」
「素直でよろしい」

リリコさんからの微笑み。料理を置く為に伸ばされていた手は、私のいつもの場所に撫でる様に置かれる。よほど良い高さなのだろうか。

折角のご褒美を冷ましては勿体ない。ナイフとフォークを使い一口サイズを作りあげて口の中へ。うん、凄く美味しい。

テーブルを挟んで反対側にいる神妙な顔をしたキリエから意味深な視線を浴びる。あれはきつと『パンケーキいいよね……』『いい……』的な多くを語らずとも分かるだろ

う。私は分かっているぞアピールだ。

実際に晩御飯の時間にお互いしてパンケーキを食べているのだから否定が出来ない。美味しい物は美味しいのだ。

「ハルトさんは、ご家族の方を探す為にラハマへ来られたという事ですか？」

食事を挟みながらも自警団のお二人とも会話が進む中、私の事について話題が挙がる。

その事について疑問を抱いたのであろうアコさんから問いが飛ぶ。

「そうです。本当は私ではなく曾祖父が探索を始めようとしていたのですが、諸事情がありこうなりました」

素直に穴の先からやってきましたとは言えるわけもなく、アレシマで行われたユーリア議員の演説をお借りして対応。

その言葉を聞いたせいなのか、今度はレオナさんが神妙な顔つきで相槌を打つように頷いている。あれは何であろうか？ 隣にいらつしやるザラさんは頬を掻きながら困り顔。

「そうでしたか……ハルトさんの大変な時に、一方的にこちらの要望をお伝えてしまい申し訳ないです」

「いやいや！ そちらもお仕事でありますでしょうから気にしないで下さい！ ご期待に沿う事は難しいですが……」

「けど、チャンスなのかもしれない。意外とね」

酒瓶を口に付けて好き放題飲み続けていたアレンから予想外の発言が飛ぶ。

「日中、あれだけ人を脅かす事を言っておいてどうしたの？ アレン？」

「いやあーお酒が入って頭が回るようになってね。一つ思いついた事があるんだ」

「一応聞いてみる」

「うんうん、人の話をきちんと聞いてから判断が出来るのはハルトの良い所だね」

「それでチャンスってどういう事なのかしら？」

「ハルトの事情は二人にも伝わったと思うけれど、彼は自分の家族を探しにここまでやってきたんだよ。それも生死不明のね」

「生存されている方を探しに来たのではないのですか!？」

「残念ながら棺桶に片足を突っ込むどころか亡くなっている可能性の方が高いのが現状ですね」

「失礼な事を聞くけど、そこまでして探す理由って何？」

「当事者である曾祖父なら即答出来るのだろう。けれど今ここにいるのは私。であればなんて答えればいいのか。」

イサオさんが日本へとやってきた事で始まったこの騒動。それでも曾祖父にとって蜘蛛の糸を辿る唯一の機会。

それらを含めて考えれば、答えは一つなのかな。

「残された家族の為、曾祖父の為ですかね」

「家族……」

「生きていれば丸儲け。亡くなっていったとしても墓場が分かればお参りに行けるようになりますし。どちらにせよ八十年近く離れ離れだと聞かされれば何とかしてあげたくなくなるのも曾孫の思いであります」

「……ちよつと待つて。八十年つて言ったわよね？　ハルトの曾祖父さんつていま幾つなのよ？」

「百歳超えてからは数えてないみたいですよ」

開いた口が塞がらないとはこのような光景を指すのであろうか。

既に聞かされていた方々は『やっぱりそうだよねえ』といった反応を示している。

「そんな状況なので生存は当てにせず、町を巡りながら情報を得るのが主な行動でしようか。手詰まり気味になっていきますけど」

「そこでだ、話を戻すけどこれを良い機会だと考えてイヅルマへ足を伸ばしてみたらどうだい？」

「向かう先で起きるであろうリスクはどう回避するつもりで？」

「生死不明の家族を探す為に遙々やってきた若者を議会の人間たちが政治利用の為に扱う事は、イヅルマ市民が許すであろうか？ 愛と正義で平和を守る自警団が許してなるものだろうか？」

酔っ払いが芝居がかった口調でお二人に訴える。そうはいつでも自警団にそんな権限はあるのだろうか？ 大人しくオフコウ山を探索した方が大穴狙いになるがイヅルマへ行くよりはリスクは低いのではなからうか？

私のそんな考えも他所に盛り上がりを見せる一部の界限。

「カナリア自警団の団長としてハルトさんの身は、誰が相手であろうと絶対にお守りします！」

「アコがそう言うなら私は従うわ。この命令自体、怪しくて仕方ないもの。それでもハルトがイヅルマへ来てくれるなら自警団の職務を全うするまでよ」

「イヅルマへは私も同伴しよう。ハルトに関してはマダムから一任させていただいていいからな」

まさかのレオナさん参戦。何だろう。私以外から漂う一体感。今までにない何か熱い一体感を。

風……なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、私以外の方に。

どこかで見たような文面が頭を過つていく。このままだとお酒と場の雰囲気流されてイヅルマへ行く事になりそうなのですが。

置いてきぼりの私を差し置いて盛り上がる四人組。そこへ参加者が増えることにより始まる作戦会議。私の身の安全から始まり震電の調査回避までを練り練りし始めるほどの状況に。

そりゃ私だつてイヅルマへ行けるのであれば行つてみたい気はする。図書館があれば調べたい事は山ほどあるし、その町特有のユーハンクに纏わる事も知りたいのは確か。

だけど、このタイミングは本当にチャンスと呼べるのだろうか？ 一人疑いの眼差しでアレンを見つめていると聞き慣れた声が、部屋の出入口から聞こえた。

「流石はハルトね！ 行動が早いことは良い事よ！」

「ここでそんな台詞を聞かされても何の事だかさっぱりなのですが、ユーリア議員」
「アレンから話は聞いたわよ。私の演説を聞いた後にこんな戯けた事を要求してくるイヅルマの連中相手に、むしろこちらから乗り込んで黙らせに行くよ。大人しそうに見えるべき事はきつちりとやりに行くなんて私の理解者なだけあるわ！」

開いた口が塞がらない。隣にいらつしやるマダムはおでこに手を当てて呆れ果てている模様。それが普通の反応ですよね。

「アレン、ユーリア議員に何を言ったの？」

「もしユーリア議員のお怒りが収まらなかつた場合、ハルトが切っ掛けで町同士の問題に発展してしまう可能性があったからね。そうならない為にも今回の件についてはハルトが自分自身で解決するみたいだよって伝えただけなんだけどなあ」

「私がそんな性格だと何時何処で何時何分に判断したんだよお！」

アレンの肩を掴み顔を近づけて叫ぶ。本来なら揺さぶってやりたいところだけどアルコールを摂取している人間にそれは危険だ。

そのまま威嚇する様にアレンを見つめていたが、私の肩に誰かの手が置かれる。

「ハルト、気持ちには理解できる。もう少し力を込めても良いとケイトは提案する」

「ケイト、真剣な眼差しをしても口の端にマヨネーズを付けたまま喋っても可愛いだけだよ」

ケイトの方へ振り向き、ポケットから取り出したハンカチを渡そうとするがピクリとも動かない。この兄妹はちよつとしたところが良く似ていると思いながらそのままマヨネーズを拭い取る。

幾度か瞬きをしてケイトが再び口を開く。

「だが、アレンの言うとおりチャンスでもある。この問題をハルト自身が対処出来れば震電に関する出来事にある程度の解決策となり、今後の探索活動がしやすくなるとケイ

トは思案する」

「後の事も視野に入れて今動けつて事かな？」

頷くケイト。ユーリア議員に用意してもらったシナリオに震電だけでなく私自身が現れる事で今度こそ潔白を証明する必要があると。

正直、中身は真つ黒でなんとかグレーに薄めている状態であり、私が口を開いたら全ておじやんになるのではないかと不安にもなる。

……私の頭では答えはいつまで経つても決まらない。ならば友人たちの提言を信じ
てイヅルマへ行こう。

「イヅルマへ向かいます。カナリア自警団のお二人にはもの凄くご迷惑をかけてしま
い
そうですが」

「それはなんていうか」

「今更つて感じよね」

お互いに顔を合わせて笑い合う二人。信頼し合っているのがよく分かる。

「ほら！ 言つたとおりでしょ！ ルウルウ！」

「……はあ。貴女と親しくなれるだけの事はあるわね」

カナリア自警団 その3

「ハルト、必要な物は揃っているか？ 忘れ物はないか？」

「大丈夫です。元々最低限の物しか持ち込んでいませんし、イザとなればイヅルマで購入入……出来ますよね？」

「それについては問題ない。飛行船業によって栄えた町だから人も多い、日用品などであれば店を探すのに困る事はないぞ」

よかった。マダムから頂いたお給金が役に立つ時が来たというもの。使わないに越した事はないのだけれど。

「そういえば思ったのですが、飛行船の技術ってもしかして？」

「ああ、穴の出現でもたらされた物が元だと聞いている」

イヅツの世界を飛び回るあの飛行船も日本、というよりも地球のどこへ繋がった穴からやってきたのだろうか？

でも、実物が穴を通りやってきたというのは少し考えにくい。なんせ本当に大きいから。

そうなる日本軍の誰かが凶面を持ち込んだのか、または穴から部品が降ってきたと

考える方が現実的かな。

視線に映る建造中のまだ骨組みが垣間見る事が出来る羽衣丸を見つめながらそんな事を考えていた。

「ザラ、すまないがしばらくの間、頼んだぞ」

「任せておいて、レオナ。そちらも気を付けてね」

隊長と副隊長の引継ぎをする光景を目にしながらも、マダムに伝えておかなければならない事があり、お傍に近寄らせてもらおう。

「マダム。再びご迷惑をおかしてしまい大変申し訳なく思います」

「些細な事よ。私はハルト君がするべきと考えての行動ならば、それに従うべきだと考えているわ。それに」

「それに？」

「アレンの件やユーリアの事を含めれば、むしろこちらがお礼を伝えるべきだわ。ハルト君、本当にありがとう」

「へあ!?! いや! まだ何も成果は出ていないのですが!?!」

「アレンに関しては希望が生まれました。ユーリアに関しては想定外の出来事だったけれど、彼女の嬉しそうな姿を見れば一目瞭然よ」

マダムの微笑みと言葉。正面から言われると照れをとおり越し、身体がむずむずとしてきて何も言えなくなる。

「自信を持ちなさい。皆が貴方の力になりたいと思っているわ。もちろん私もね」

「ありがとうございます。この御恩をどのような形でお返し出来るか分かりませんが、まずは私に出来る事を精一杯こなして来ようと思います」

「それでいいわ。お互いに自分出来る事をこなしていきましよう」

マダムから伸びた手、重ねるように握手を交わす。暖かい手から安らぎのような安心感を受け取る。

そこへスツと現れるのは言うまでもなくユーリア議員。両手を腰に当てて何かを言いたげな雰囲気。

「ハルト、私に何か言う事はないのかしら？」

「お礼の言葉であれば沢山ございますが、お時間はよろしいのですか？」

「ユーリア議員、貴女の船はそろそろ出発時刻と聞いておりますが」

「ルウルウとハルトが親し気に話をしている時に、そんな事は知った事ではないわ」

「それはそれでどうなのでしょううか」

一度咳払いをして場を立て直す。

ユーリア議員と正面に位置する立つ。始めてお会いした時とは随分と印象が変わる

事があつたけど、それも良い思い出。

「ユーリア議員。私と震電の為您にご助力を頂き誠にありがとうございます。遅くはなりますが必ず御恩を返ししたいと考えております」

「そんな堅苦しい言葉はいいわよ。でもそうね、ハルトの目的が達成出来たのならガドールに來なさい。歓迎するわよ」

「ガードルにですか？ それは嬉しいですね」

「歓迎するわよ。私の屋敷で飛行船の話の続きを時間がある限り好きだけにするわよ」

「それはなんとというか一晩では終わらなそうな雰囲気がありますが」
「私が満足するまでは帰さないわよ」

口の端を吊り上げるユーリア議員の姿。実現に至つたら何徹することになることやら。

マダムと同じ様に握手。力強い返りで自信に満ち溢れているのが手から伝わる。

「それじゃ今度は本当にお別れね。またね！ ルウルウ！ ハルト！」
「こちらを振り返る事無く飛行船に搭乗し、ラハマから離れていく。」

「ハルトさん！ 準備の方は整いましたか？」

「お待たせしました、アコさん。荷物の積み込みも終わりました」

「随分と少ないようだけど、大丈夫なの？」

「もし滞在期間が長くなればイヅルマで必要な物を購入すれば良いとレオナさんから教えていただいたものですから」

「このような件でイヅルマへ呼びする事は恐縮ですが、全てが済みましたら是非町を案内させて下さい！ 私たちの町をハルトさんにも是非知って欲しいです！ もちろんレオナさんにも！」

「ありがとう。お二人には苦勞をかけてしまうかもしれないが、よろしく頼む」
「こちらこそ！ よろしくお願い致します！」

レオナさんの返答にアコさんとシノさんの綺麗な敬礼が返される。

「ハルトー！ 何かあったら直ぐにチカ様を呼べよ！」

「分かった。一番槍のチカが真っ先に駆けつけて来てくれるんだね」

「さっすがー！ 分かっただけじゃん！」

背中を容赦なくバシバシ叩いて来るチカ。これも信頼関係の証だろうか。

でも、こういうスキンシップは嫌いではない。むしろ好きな方である。

「ハルト、わたくしは貴方の決断を支持致しますわ」

「ありがとう、エンマ。それでも、皆に頼りつ放しなのは変わらないんだけどね」

「この場合、突如降り注いだ困難を自らの意志で行動を起こし、困難を乗り越えるという明確な意志を周囲に知らしめる事が大切ですね。それが出来れば自ずと結果は後からついてくるものですよ」

エンマの言葉を心に刻む。その結果が良い方向に繋がるように少しでも頑張らなければ。

「ハルト、今回は一緒に行く事が出来なく申し訳なく思う」

「アレンの事もあるからそこまで甘えることは出来ないよ。でもその代わりにお願い事があるんだ」

「ハルトからのお願ひ。ケイトに出来る事であれば何でも」

「私がイヅルマへ行くようにけしかけたアレンを厳しく訓練してあげてね。もちろん適度な休憩や休息日をきちん取りながら」

「ん。了解した。アレンにお灸をすえるよい機会」

ケイトの表情が僅かながらに緩み、微笑みを見せてくれた気がする。

「ハートル、今度はいつ帰ってくるの？」

「長期間ではないと思うよ。キリエも心配してくれているの？」

「そつちはレオナが一緒だから特に心配してないけど、ハルトの作ってくれるあのパンケーキが今度は何時食べれるのかと考えると夜も……」

「はやく寝なさい」

ラハマからしばらく離れる為、コトブキの皆とちよつとしたお別れの挨拶を終わらせ、久しぶりに震電に搭乗する。

イサオさんを搭乗させて日本へ現れた時の震電とは大分様変わりしているけれど、イサオさんと曾祖父の共同作業によりこの震電は再び空へと返り咲く事が出来た。

エンジンは全取替。代替品のエンジンを積み込み、空冷から液冷に替わる事による換装作業。それにともなう改修も。

よくぞあの短期間でここまでと思いながらも曾祖父は一つだけ悔い残ると言っていた箇所がある。

それはスターターモーターとブースターコイルボタンの実装だという。優先順位を付けていく事でどうしても後ろにまわされた結果、未実装となった。

なんでもこれが実装出来ていれば、操縦席での作業は必要となるが、イナーシャハンドルを利用しなくてもエンジンを発動させる事ができるとか。

今でこそオウニ商会のお世話になる事で、ナツオ班長の手による整備から始動までお手伝いをしていただけているが、もし出会わない可能性があったとしたら……まっ、その時はその時か！

イサオさんと曾祖父に叩き込まれた事を忠実に。計器を見逃さず一つずつ操縦席にあるレバーを操作していく。

焦らず正確に。計器の針が指定の位置を指している。ナツオさんに合図を送り、イナーシヤハンドルが回される事で独特の回転音が聞こえ始め、始動。

前の震電には無かった胴体部分にある、あばら骨のようにも見える場所から排気と唸り始めるエンジンの音。

エンジン始動をさせるだけでこの有様。イジツでも自由自在に飛ばせる環境が整ったら少しは操縦の練習を行わないと行動に支障がきたしそうである。

その時、無線から声が聞こえた。先程までレオナさんと会話をしていたザラさんからだ。

『ハルト君、大丈夫？』

「自分で震電に搭乗するのは久しぶりで緊張しています」

『そんなに緊張しなくても大丈夫よ。レオナもいる事だし、案内をしてくれる自警団のお二人もいらつしやるわ。安心して』

「あい、頑張ってみます」

とはいえ肩は強張り身体はなんとなくふらふらと。その姿を何処からか見ているのだろうか、言葉が続く。

『なら楽しい事を考えましょう？ イヅルマでの事が済めばあの二人が町案内をしてくれるんでしょ？』

「確かに。落ち着いたら図書館や本屋さんに行きたいです」

『あらあら、まるでケイトみたいね。そんなハルト君に一つお願い事があるのだけどいいかしら？』

「なんででしょうか？」

『町を案内してもらえる時は、レオナの事をよく見ていてくれないかしら？』

「それはどういう意味でしょうか？」

『レオナはああ見えて新しい物に興味津々な性格でね。この間なんて飛行船でも訓練が出来るからって機材を購入して名前まで付けちゃって』

新しい物好き。自分の使う物に名前を付ける。私の知っているレオナさんの印象とはかなり食い違う。

「なんていいですか、意外です。私の知っているレオナさんは自立した大人の女性なのですが」

『ふふっ、レオナだって隊長の前に一人の人間ですもの。でも、そういう部分があっても良いと思わないかしら？』

「大変良いと思います。可愛いは正義」

『よかったわ。可愛いは正義。ユーハングの言葉は面白いわね』

ザラさんの抑え込むような笑い声が無線から伝わる。自分で発言をしておいて羞恥心が湧いてくる。

『それでも、新しい物が全て良い物だとは限らないわ。詐欺の可能性だつて捨てきれないもの。だからレオナの事、ちゃんと見てあげてね。ハルト君』

「了解しました。大丈夫だとは思いますが頭に入れておきます」

『そう言ってくれる思ったわ。それじゃ気を付けて行つてきてね、ハルト君』

駐機場から飛び立つ四機の機影。ラハマを一周し、向かう先はイズルマへ。

お二人の搭乗している機体は紫電と呼ばれている。カナリア自警団のチームカラーなのだろうか、機体は制服と同じ白を基本としている。

先導をするように二機は私たちの前を飛び、その美しい姿を私に魅せてくれている。

真ん中に私の震電が。そして殿はレオナさんの隼が優雅に飛行をしている。

そう、私以外の皆はとても綺麗に空を飛んでいるのだ。

『ハルト、貴方はもう少し機体を安定させて飛ぶ事は出来ないの？ 後ろを頻繁にフラつかせて飛行されると気になって仕方ないのだけど』

「すみません。とにかく機体を飛ばして何かあれば即座に逃げろという訓練しか受けて

いないもので。あとはこの機体も中々の曲者で」

『大丈夫ですよ、シノさん。ハルトさんは人より操縦が下手なだけです。そんな方でもお守りするのが私たちの役目ですよ!』

心にグツときた。むしろグサツと。アコさんの悪意の無いド正論すぎる発言にぐうの音もでない。

『ま、まあこういうところも含めて事情があるんだ。すまない』

『い、いえ! レオナさんに謝れる事では! 私も少し言葉が過ぎました! ハルト、ごめんなさい』

「大丈夫です。一つだけ気になる事があるのですが聞いても平気でしょうか? シノさん?」

『アコの事なら諦めなさい。私も既に経験済み。何度あの悪意の無い言葉を聞かされたものか……』

何かを悟るかのような口ぶり。つまり気にしたら負けだという事なのだろうか。

『私、何か変な事を言いました?』

「いえ、道中お世話になるかと思いますが、よろしくと思わせて」

『お任せください! ハルトさんと震電は私たちが責任を持ってイツルマまでお連れ致しますから!』

こういう風に会話をしている分には何も問題がなさそうなんだけどなあ。

カナリア自警団 その4

『ハルトさん！ レオナさん！ イヅルマの町が見えてきましたよ！』

無線から聞こえるアコさんからの声に視線を動かす。飛行船の造船業で栄えたと言われているだけの事はあり、町の隅には幾つもの駐機場がある。造船所も含まれているのだろうか。

『いつ見ても圧巻する光景だな』

「レオナさんは来た事がありますか？」

『仕事で何度かな。だが、用事が済めば次の町へと移動の繰り返しだったから、ゆっくりと滞在した事はない。今回も仕事……とは余り思いたくないが、ハルトの件が無事に済んだらお二人に町を案内してもらえるのは楽しみでもある』

その言葉には、照れ臭そうな思いがのせられている。でも言葉を聞いた二人は嬉しそうだ。

自分たちの町を紹介できることを喜びで表現できるのであれば、それは素直に羨ましい。そういう意味でいえば、私が穴の先から来た事を伝えられないのは少しばかり寂しい。

アコさんからの指示に従い指定された駐機場へと着陸を行う。

震電において着陸とは大変細かな作業が必要である。今更言うまでもなくお尻が大きい子であり、それ故に重心が後ろに下がり気味。プロペラを破損させないよう機体を水平を保ちつつ速度を落とさなければならぬ。

隼一型から転換訓練を受けた際に散々言われた注意事項を何度も繰り返して思い出す。地上と接地した事を計器で確認、身体でも感じ、押し付けるように機首を動かす。

静止距離はどうしても他の人たちよりも長くなってしまふ。これは機体の問題というよりも操縦者の技能が未熟なのが原因。

この旅の目的を無事に終える事が出来たら真面目に考えよう。イジツに来る前の限られた時間で空を飛ぶことと降りることが出来るようになったとはいえ、周りの人たちから見れば不安を覚える光景だろうから。

指定された格納庫の場所まである程度近づいたところで指示が出る。エンジンを切り、全身を座席の背もたれに委ねる形になってようやく一息つくことができた。

操縦席から見える三つの人影。一人はアコさんやシノさんと同じ制服を着ているのでカナリア自警団の隊員であろう。もう一人は幼い男の子といった印象を受ける。

そして三人目、底の厚そうな丸眼鏡をかけており、口周りは髭で覆われているご老人

の姿。この方が震電の調査に携わる責任者なのだろうか。

風防を開けて立ち上がろうとするが、静止するよう合図を出される。

「そのまま乗っておれ。いまから押して格納庫に入れるからな」

「分かりました。よろしくお願いします」

言われたとおりそのまま操縦席に。ゆっくりとだが押される事で動き出す震電。指示に従い機体の操作をしていく。そして機体は無事格納庫の中へと収められてた。

冷静に考えると三人で震電を押しているの？ 改めて思うけれどイジツ人つてやばくない？ アレシマでイナーシャハンドルを回した私が言う台詞じゃないかもしれないけどさ。

自警団の方に荷物下しを手伝っていただいた後、慎重に操縦席から降りる。これがまた結構な高さでおつかない。主翼の根本辺りは乗っても平気みたいなのだけど、今回は降りるだけなのでぶら下がりがりながら。搭乘する時は流石にはしごが欲しいけどね。

「貴方がハルトさんでよろしいですか？」

「はい、間違いありません」

「自分はカナリア自警団所属のリッタと申します！ こつちにいるのは弟子のハヤトです！ そしてこちらにいらっしやるのは私の師匠でありますジノリさんです！」

「ハヤトです！ よろしくお願ひします！」

「ジノリじや。この馬鹿弟子どもには師匠などと呼ばれとるよ」

「もう！ 師匠は何時になつたら馬鹿弟子呼ばわりを止めてくれるんですか！」

「尻が青いうちはまだまだじやな」

もう！ と怒りながらも表情は嬉しそうなリツタさんを見ていれば、師弟関係は良好のようになによりだ。

「遅れてすみません！ みなさん自己紹介は済みましたでしょうか？」

「団長！ シノさん！ いましがた終えたばかりですよ！ って団長の後ろにいらつしやるのはコトブキ飛行隊の隊長さんじゃないですか!？」

「そう畏まらないでくれ。えっと……」

シノさんがフオローするようにこの場にいる人物の名前をレオナさんに伝えていく。

「では、レオナさんはハルトさんの護衛のような形でいらしたという事ですか？」

「そのようなものだ。私の雇い主であるマダムからの命令と、私個人の要望でここにいらる」

「アレシマでガドールの高飛車が震電について説明をしていたんじや。オウニ商会とも繋がりがあるのは一目瞭然じやな」

「にも関わらずイツルマ議会から震電の所有者へ突然の訪問要請。一体どうなっている

のかしらね……」

「それについては団長たちが留守の間、エルさんが色々調べてくれましたよ！ 戻って話を聞いてみましょうよ！」

「エルが!? 分かりました。一度自警団の詰所に戻って情報を整理しましょう！」

「賛成よ。ただジノリさんに聞いておきたい事があるわ」

「なんじゃい。これがイサオの震電かどうかって話しか？」

「そうよ、見て思った事を教えて欲しいわ」

シノさんからの言葉を聞き、顎髭を触りながら思考に耽るジノリさんの姿。私の心には気が気でない状態。

「調査も何もしていないから確証はない。イサオが搭乗していた震電かと言われれば違うと答える。だが、幾つか疑問は残るところもある」

「疑問って何かしら？」

「発動機じゃよ。元々震電に搭載されていたとされる発動機とは全くの別物じゃ。ここへ降り立つ前から震電から聞こえていた発動機の音は、他の機体も含めて聞いた事もない。小僧、これをどこで手に入れたんじゃ？」

「辺鄙な田舎暮らしをしていたらまたまた手に入れた物だと曾祖父から聞きました」

「ならその辺りの話をうまく誤魔化すんじゃな。これ以上の面倒事は避けたいじゃろ

「？」

おつかないと思いい込んでいたご老人から助言を頂いてしまう。真実を伝えられない事が心にチクチク。

「二先ず情報を共有する為に全員で集まりましょう！ ハルトさん、レオナさん、一緒に自警団まで来ていただけますか？」

「了解した。現状確認は大切だからな」

「私も了解しました。むしろお願いします。一人にされると何が起こるか分からないので一緒に居させてください」

私の情けない要望に皆さんの表情が緩まる。呼ばれた理由も含めてイヅルマで一人ぼっちにされるのは流石に怖いのである。

イヅルマ。

前もってレオナさんから聞かされていた、穴からもたらされた飛行船の技術によってイヅツでも指折りの造船業として栄えている町。

人の数も多く活気に溢れている反面、荒くれ……というのは適切ではない。ちよいとばかりガタイのよい男性の姿をよく見かける。

「すみません。本来なら直ぐにでも町を案内したいところなのですが」

「気にしないでくれ。全てが終わってからも遅くはないさ」

レオナさんに賛同するように頷く。観光ができる機会があるのならゆつくりと周りたいたいもんね。

申し訳なさそうな顔をしつつ、アコさんの歩みは止まる事なく自警団があると思われる方向へと進んでいく。

そして一つの建物の前で歩みは止まり、一緒に建物の中へ入るようにと声がかかる。いくつかの扉を通り過ぎた後、一つの部屋へと案内された。

「ただいま戻りました！」

「お姉様!! ご無事で何よりです！」

「アコ、シノさん、お帰りなさい」

「ただいま。色々とあったけれど議会の命令通り、震電とその所有者に来ていただく事ができたわ。あくまで協力って姿勢でね」

「その意味も兼ねてラハマからコトブキ飛行隊のレオナさんにもお越しいただきました！」

「オウニ商会所属コトブキ飛行隊隊長のレオナだ。しばらく世話になる」

「まあ! それなら歓迎会を開かないと!」

「こちらが嬉しくなる言葉を発言をするエルと呼ばれた女性。」

自警団の制服を身に纏い、穏やかな微笑みを配る。艶やかな金色の髪は腰の辺りまで伸びており、溫和で気品に満ち溢れる雰囲気をお持ちのお方だ。

それ以上に気になるのが制服の上からでも分かる気高き双丘。制服の上からでも分かる母なる大地の恵みと癒しはそれだけにとどまらず、エルさんが両手の指先を首元の辺りで組む仕草のおかげで気高き双丘は両腕に挟まれる事により、一つの形へと変貌を遂げる。

大地の勝手気ままな行動により呼び起こされた天変地異。制服の一部は双丘の間へと吸い込まれていき、辺りは一転して地獄となる。

これが正統派の地力。肌色成分を一切見せることなく魅せつける色気と母性、そして自身を包み込む制服を利用してしまうほど無慈悲な力。なんとか殺しとはこういう事を言うのか。自警団の愛はここにあり。

「あれ？ ヘレンさんはどこへ？ 集合するようにつて連絡を入れておいたはずですが」

「んあ……お帰り……」

「あつ！ ただいまです！ つてまたそこで寝ていたんですか！ 今日に来客者がいらつしやるんですからきちんと身支度を整えてください！」

「ふあーい……」

ソファからむくりと起き上がってきた一人の女性。ふわふわとした長い緑色の髪には可愛らしいリボンが付けられている。

寝るために制服のボタンを外していたのだろう。自警団の制服を着崩し、スカートの深いスリットからは綺麗なおみ足が垣間見ることが出来る。

スラっとした足からふとももへの黄金ライン。本来ならばこの光景だけでも私の心は激しく舞い踊る。

だが、そうならない理由がある。ヘレンと呼ばれたこの女性からは恥じらいを感じ取れない。この姿が彼女にとって自然体であり、ありのままの姿なのだろう。そう、それで終わればよかったのだ。

ヘレンさんが軽く欠伸をしたあと、硬直した身体をほぐすかのように両手を上げて伸ばす。その際に私は見てしまったのだ。幼き頃、決して直接見つめてはならないと言われていた太陽の存在を。

横から見ても分かる存在感。制服の下に身に着けている布を邪魔だと言わんばかりに主張するその丸み。脇からそつと光を照らす肌色は熱を帯び、腕を通じて指先へ。解き放たれるのは太陽の恵み。

ひーじい。イジツの母なる大地と太陽の恵みは私には眩しすぎたよ。気が付けば私の頭は項垂れ、目を瞑っていた。

その様子を不審げに見ていたリツタさんから声がかかる。

「ハルトさん、急に項垂れてどうしたんですか？」

「見ないふりをするのも人生にとつて必要なんだなと」

「あー……私たちからすれば日常風景ですけど普通は違いますが……」

「察していただけで何よりです」

「でも、安心しました！ ヘレンさんのだらしない姿をジーっと見つめる人だったらどうしてやろうかと思っていたので！」

「リツタさんも結構過激ですよね!？」

両手を顔の前に出し、指をわきわきと動かすその姿。その愛らしい動きから推測するに、くすぐり攻撃でも仕掛けてようと企んでいたのだろうか。

「ハルトさんからは、何やらフツチと似た気配を感じますよ！」

「フツチ？」

「私の弟です！ 何度殺しても悪戯を止めない悪ガキですよ！」

素敵な笑顔と、にひひーという声が聞こえる。兄妹のお姉ちゃんでしたか。

となると、姉が弟を殺すという表現と悪ガキという言葉。絶対にくすぐりなんてヤワな攻撃ではない事だけは確かだ。イツルマへ滞在中の間はいつも以上に気を引き締めなければ。

私が夢と希望と他人の身体的特徴に視界と思考を奪われ自己嫌悪に陥っているその間に、アコさんとシノさんは部長と呼ばれる方へ今回の任務について報告をしているようだ。

エルさんに『腰を下ろしてお待ちください』と言われるがまさに先程までヘレンさんが寝転んでいたソファへと案内をされる。

何故かヘレンさんがそのまま端に座ったままでもいらつしやり、ポンポンとした手つきでここへ座るように仕草を送ってくる。

少しばかりの気恥ずかしさを感じつつもお邪魔させてもらうことにし、私の隣にレオナさんが座る。最近は何故か中央に座らされる事が多いとか考えながら。

エルさんから差し出された紅茶を口にし、レオナさんと自警団の方々と会話をしているところへ、一人の男性が近寄ってくる。

制服の上からでも分かる恰幅の良い体格、口には立派なお鬚が蓄えられている。アコさんたちからは部長と呼ばれている方だ。

「ラハマから遙々お越しいただきありがとうございます。イヅルマ航空自警団で部長を務めておりますアルバートと申します」

「これはご丁寧に。オウニ商会所属コトブキ飛行隊で隊長を務めているレオナだ。そし

「てこちらが今回イヅルマ議会からの要請にご協力していただくこととなる」「ハルトと申します。よろしくお願い致します」

私の頭がペコペコと下がるのは先祖代々の遺伝なので仕方ないのである。

「お二人は現在のイヅルマの状況についてご存じでしょうか？」

「いや、一時町が封鎖される程の事件が起きていたとしか」

「私は元々辺鄙なところから来たので何も」

「では、私どもの恥を晒す話になりますが、よければ聞いてもらえますかな？」

何の事だろうか。レオナさんと顔を合わせ、同時に頷づき、部長さんの話に耳を傾ける事となった。

カナリア自警団 その5

イヅルマで起きた出来事。それは、ラハマでユーリア議員の口から耳にしたパロット社から始まる一連の事件に纏わる話であった。

この町にもなかなか強欲な有権者たちがいらっしやったようで、裏から町を実質的に支配をしていた。

その強欲な有権者たちは、イヅルマを栄える機会となったあるモノを手に入れて独占したいと考えていた。

私の旅が始まった理由でもあるモノ。それは穴である。

その為には自分たちの都合のよい駒として利用する為、自警団の上層部にも首輪が付けられる事となり、これが原因で自警団員が亡くなる事件が発生する。

この事件を境に自警団から離脱する者もいた。その中の一人がパロット社の社長であったウタカと呼ばれる人であり、イヅルマを巻き込んだ騒動の実行者でもある。

「イヅルマにも穴が開いていたのか!？」

「はい。とはいっても突如現れた濃い雲に阻まれて視認する事は出来なかつたんですけどね」

「突然無線が通じなくなるし、あの時は焦ったわよ」

「その雲もあつという間に消えていったもんね〜」

その空にいたであろう三人が状況を語る。

話を聞いていると穴は不完全なモノだったのではないかというのが一つ。

もう一つが行方不明とされているアコさんのお父様が搭乗していたとされる機体を見たというアコさんの証言。

その場に出現したのであろう穴が開いていたのか、不完全だったのかは誰にも分からな
い。だが事件はウタカを捕まえる事により終わりを告げ、ウタカ自身はイズルマに悪習
をもたらししていた有権者たちを白日の元に晒すことに成功した。

しかしこれで話が終われば苦勞はせず、物語は次の舞台へと移る事となる。

町を守る為にあるはずの議会に市民の目は厳しく、古くからいる議員と若手議員の間
では新しいイズルマの有り方について連日討論が続く日々。

そしてその厳しい目は自警団にも。

自警団上層部が関わりを持っていた事に加えて、それを暴く為に自警団の範疇を超え
る行動を取ってしまったカナリア自警団には、一部の人たちから批判の声もあつたよう
で。

それでも彼女たちは自分たちの行動に悔いは無いようだ。

市民の皆さんから信頼を取り戻す為、日々任務と活動を続けていた矢先の出来事が今に繋がる。

「ユーリア議員には、あの様に言っただけでしたが、私たちにも非がある事は確かなのです」

「そうは言うけれど、あの時アコが行動を起こさなければイツルマはどうなっていたか分からなかったわ」

「そうよ、アコ。それにカナリア自警団はみんなアコを信じて行動をしたのだから」

「お姉様ならきつとやり遂げてくれると私は信じていました!」

「自分もです! 団長についていけばきつと解決できると!」

「団長が私を必要だと言ってくれたから」

カナリア自警団の団結力を見せつけられる。お互いを信じ合い、お互いの為に行動を起こせる勇気のある人たち。

隣にいるレオナさんの瞳が緩みかけているのは、何かしら共感を得る部分があったのだろうか。そつとハンカチを手渡す。

しかし、ここに来て再び穴の問題に遭遇する事になるうとは。小さくて短い時間のモノであればそれなりに出現するとはイサオさんからも含めて聞かされていたけれど。

しかもアコさんはご家族でいらっしやるお父様が穴が原因で行方不明になられてい

る状態という。

もし、本当に穴の先へ向かわれてしまったのならば、その穴の先が私の知る世界へと繋がっているのであれば。そんな余計なお節介が浮いたり沈んだり。自分の目的すら達成出来ないというのに。

「あ、あのハルトさん？ 私はお父さんは必ず生きていると信じていますので、そんなに暗い顔をなさらないでください」

「すみません。他人事の様には思えなくてつい。私もアコさんのお父様は無事でいらしているの信じておりますよ」

「ありがとうございます！ ハルトさん！」

少しだけ話から脱線をする事を考えていたとは言いにくく、誤魔化してしまった。それでも無事でいられることを信じているのは本心に違いはない。

こちらに向けられたアコさんの無垢な笑顔。短めに整えられた赤色の髪がサラリと動く。

他の団員たちとは違い動きやすさを重点においているのか、制服にショートパンツを着用している。おかげで綺麗なおみ足が丸見えでございます。

団員たちにも慕われており、まさに団長として相応しい人物なのだろう。時折、悪意のない言葉が放たれるのは……ご愛敬なのかな。

「本日お越しいただいたにも関わらず、ずいぶんと長話をしてしまいましたな。今日はこのぐらいで終わりにしましょう。議会には私の方から連絡を入れておきます」

「よろしくお願い致します」

「ところでお二人は、本日はどこへお泊りになられる予定で？」

「急な事もあり特に決めてはいないんだ。町のどこかで空いている宿があればいいのだが」

「イツルマへ行く事が決まってから一晩明けての行動。宿を決める時間も無く、気が付けば空に浮かぶ太陽は沈み、辺りは既に夜の景色。」

そこへアコさんから提案される。

「それでしたら私たちの寮で良ければお部屋を用意させていただきますよー！」

「いやー！ 流石にそこまで面倒をかけてしまうわけにはいかない！」

「ですが、ご協力していただけるハルトさんとその護衛に携わるレオナさんを町の宿に泊まらせるというのも警備上の問題がありまして……」

「自警団としてお願いの意味も含まれていますから、考えてはいただけませんか？」

「エルさんの言葉に腕を組んで悩み始めるレオナさん。貸し借りが苦手な人だから色々葛藤があるのだろう。」

私にも一つ問題が。その寮は私が踏み込んでもよい場所なのだろうか。カナリア自

警団だけでも女性が六人いらっしやる。つまりは女性寮ではないかと。

今聞かないで後々騒動になるのもゴメン被るので手を挙げて聞いてみる事にしよう。

「すみません。その場合、私も寮へお邪魔させていただく事になるのでしうか？」

「もちろんです！ エルが言っていたように歓迎会も行いたい事ですし！」

「それは大変嬉しいのですが一つ気になる点があります！」

「気になる点？ 何かありましたか？ ハルトさん？」

「私まで女子寮へ連れて行くとうとは考えていませんよね？」

『あつ』何かに気が付いたと言わんばかりの空気が当りを包む。

「よく考えてみたらハルトさんってお名前は……」

「小柄で髪も長いとはいえ冷静に考えてみればそうよね……」

「でも温厚そうな方ですし、寮の決まりを守っていただければ大丈夫ですよ」

「わ、私は不安です……」

「ミントさんが不安になる理由ってあるんですかね……。まあイザとなれば自分が弟と同じ目に遭わせてあげますから！」

「zzz」

賛成が一と反対が一、そして眠りについていてる方がいる。こればかりは流されてたまるものか。女子寮でお世話になるのは文字通り世界が違い過ぎて胃にまで穴が開きそ

うだ。

首を横に振り拒否の態度を示す。

「世間からの目が厳しい時に、取るべき行動ではないと思うぞ？」

「レオナさんに激しく同意。私も気疲れして明日以降の行動に支障をきたすことになりそうですので」

「まあそうですよねえ……」

「ハルトの護衛であれば元より私の仕事だ。気持ちだけ有難く受け取っておくよ」
隊長と団長の間でしばし話し合い。

聞こえてくる内容によれば、どうやら町の中を移動する際には自警団から一名同伴させて欲しいとのこと。

彼女たちの立場から考えれば見張りの意味も勿論含まれているだろう。それでも先程聞かされたイヅルマで起きた一連の出来事を包み隠さず教えていただいたこともあり、純粹に自警団としての任務を全うしたいという気持ちがあると信じたい。疑い始めるとキリがないから。

「それでは行きましようか！ ハルトさん！ レオナさん！」

「よろしく頼む」

「どこへ行かれるの？」

「話を聞いていなかったのか？ アコに我々が世話になる宿を案内してもらうことになったんだ」

「大丈夫ですよ！ ハルトさんがおつちよこちよいなのは何となく察していましたから！」

めり込んでいた言葉の槍が奥深くへと押し込まれる。そう、純粹なだけで悪意はないはずだから。シノさんを含め同情的な視線をいただく。言葉を放った張本人はそんな視線も露知らず。

「無事に話も決まりました事ですし！ 本日のカナリア自警団の業務は終了です！ みなさんお疲れ様でした！」

『お疲れ様でした!!』

「こつちですよ！ ハルトさん！ レオナさん！」

宿へ直行するのかと思えば、少しだけ寄り道をさせて欲しいとアコさんからのお願い。

『何かあるのか？』とレオナさんが問い返すも『着くまで秘密です！』と言われてしまい、二人して頭を傾げながらアコさんの後ろをついて行く。

外灯が灯された石畳の道を歩き、辿り着いた先は広場。ここが町の中心地であり、街

中で迷った場合はここを目印にすれば一先ず安心と教えられた。

「私がお二人に見せたかったのは広場から見える景色です！」

辺りを一望するように見渡す。広場を中心に各方面へ続く道があり、建物からは光が漏れる。

道先には駐機している飛行船の姿と係留柱。その先端から光が灯る。他の道先には造船中と思しき骨組み姿の飛行船も見受けられた。

ラハマとは、また別の世界を感じられ、これがイツルマの世界であり日常風景なのだろう。レオナさん共々感服の思いに浸かり、自然と溜息が漏れていた。

「これは凄いな」

「夜限定の景色って感じですね」

「はい！ 日中は市民の皆様が外出していらつしやいますからゆつくりと見る事が出来ないんです。その光景も私は好きなんですけどね」

「今回はたまたま夜景を見る時間だったと？」

「そのとおりです！ 夜なので周りは暗くて当たり前なのですが、所々から人のいる気配を感じられる光が見える夜景も私は大好きなんです！」

「確かに。誰かが居てくれるという安心感は代えがたいものがあるな」

「それに私の両親が守ってくれていた町、私が守る町と考えると愛着が沸くといえます」

か……えへへ」

「帰る場所があるというのは素晴らしい事だ。その場所を守る職務についているのなら尚更だろう」

レオナさんは、羨ましそうにアコさんを見つめている。

私の帰る場所は決まっている。けれどイジツに来てから一つ増えた。そしてこの町もそうなるの良いなど、素晴らしい景色と照れ臭そうにしているアコさんの姿を見て思ったのだ。

「それでは、私はこれで失礼しますね！ おやすみなさい！ また明日です！」

「ありがとう、アコ。おやすみ」

「また明日もよろしくです」

敬礼をして去っていくアコさんの後ろ姿。自警団でもない自分が敬礼で返すのも失礼だと思い、姿が見えなくなるまで手を振っていたり。

宿の紹介から手続きから始まり自警団のお墨付きの方だと紹介してもらえ至れり尽くせり。宿の主人の表情を見ていけば、にこやかな笑顔。日々の活動の積み重ねを見ていた人たちは事件の一つや二つでは信用は揺るがないのだ。

案内をされた部屋で荷下ろし。それほどの量は持ち運んでいないので対して時間も

かからずに終わる。

どちらかといえ、この後に行われるレオナさんとの話し合いだ。

コンコンと控えめに扉の叩く音。小さめな声で返事をし、扉を開けるとレオナさんがいらした。両手にはお盆に乗せられた食事まで。

「主人から夕食の事を聞かれてな。まだだと答えたら残り物でよければ食べてくれと言われて持ってきた」

「そう言われてみれば、昼食も取る暇がありませんでしたね。ありがたいことです」

「自警団には、昔から世話になっているからと主人から聞かされてな。断りきれなかつたよ」

苦笑い気味なレオナさん。ご年配の方であれば人一倍気になさる方もいらつしやいますよね。

部屋の中へと案内し、付属されている丸いテーブルへと食事を置いてもらった。

「折角いただいた食事だ。暖かいうちに頂いてから今日の事を振り返るとしよう」

「賛成です。いただきます」

両手を合わせてからそう呟く。お盆にのせられた食器の上には色々な食べ物がのせられている。

パンから始まり暖かなスープ。中途半端に千切れた葉っぱ類から唐揚げにジャガイ

もまで。ここら辺がご主人曰く残り物の部分なのだろう。

それでも空腹には耐え難い匂い、口に含めば美味しさが広がる。

自警団の皆様の第一印象から先程アコさんに見せていただいた夜景の話まで、話題は尽きる事無く食事が終わる。

「ごちそうさまでした。水を一口飲み落ち着いたところで話は本題に入ることになる。

「イヅルマでも穴が開いていた可能性があったとは」

「驚きですね。それもこの町の有権者たちが独占を企んでいたとも」

「あのような考えを持つ者がイサオ以外にもいたとはな……」

レオナさんからすればイサオさんの野望を打ち砕く事に成功した事で、コトブキ飛行隊の実力は証明され、名誉を得た。

だが、現状はイサオさんがイジツから消えた事により空賊が活発化。治安悪化の一方である。

そこへ今回の出来事を聞かされてしまえば、コトブキの隊長として何か思う事があるのかもしれない。それについて私が何かを言える立場では無いことも。だけどこれは伝えておこう。

「イジツに来る前に、イサオさんは自分か消えた後のイジツは闇鍋だと例えていました」

「イサオが？」

「自分以外の人間が成り上がる最大のチャンスではないかとも。実際に空賊も活発化し始めていると聞いて、イジツの各所で綻びが見え始めているようにも感じられます」
「確かに。あの騒動が終わりを告げた後も飛行隊としての仕事は増える一方だ」
「この闇鍋はいつしか爆発するとイサオさんの執事さんとお会いさせていただいた時に仰っていらつしやいました」

レオナさんが神妙な顔をしたまま黙っている。自分たちが命懸けで阻止した出来事が他の者たちも企んでいた事、巨悪の根源を叩いたはずなのに収まる事を知らないイジツの治安悪化。どうしたって考えてしまうものだと思う。

このままだと重たい空気のまま進行せざるおえない。少しでも話の舵を切ろう。

「アレンが私をけしかけてイヅルマへ向かわせたのは、こういう事が各地で起きていると伝えたかったのかも知れません」

「町ごとに穴の研究は進められおり、穴から恩威を受け取る為に独占をしよう？」
「全てが全てとは思いたくはありませんが、そういう一面もあるよと」

お互いに項垂れて溜息。一つを超えればまた一つの問題が浮き彫りとなる。

「とはいえ、考え始めたら本当にイジツ全体の問題となってしまう。これは私たちがだけで何かを出来る範疇では無いかと」

「そうだな。まずは自分の出来る事を確実にこなしていくのが一番なのだろう」

「私もそう思います。という事で暗い話は止めにしませよ！」

控えめな手拍子でこの話はおしまい。考えてもキリがないからね。

レオナさんも顔を手で覆い、軽く頬を叩いて気持ちを切り替えた様子。

「自警団の話聞いていて気になる事が」

「アコの父親の話だな。突如開いたであろう穴に飛び込む形になりイジツから消え去ったと」

「これがもし私の世界へ繋がっていけば……と考えてしまうのは変でしょうか？」

「いいや、ハルトらしいなと思う。だがハルトにも目的がある。それを達成するまでは自身が穴の先からやってきた事は伝えない方が良く。下手な希望は時として人を傷つけるだけだ」

「同感です。イジツの出来事であればつい……という言い方も失礼ですが、ユーハングとなると搜索規模が広すぎて難しいの一言です」

「結局、自分の手の届く範囲が限界なのだろうな」

「それでも先へと進まなければ、ですよね？」

「ああ、その中には私たちでなければ救えない事もあるはずだ。腐っている暇はないさ」
決意を新たに今できる事を精一杯頑張ろう。そう誓うのであった。

カナリア自警団 その6

昨日は久しぶりの震電の操縦から始まり、イツルマの出来事を教えていただくという怒涛の一日であった。

その事が原因とは言いたくはないが、レオナさんが部屋を出て行かれてから張りつめていた糸が途切れるように。気が付けば布団の中へ忍び込み眠りについていたようだ。

扉からコンコンと叩く音が聞こえ、布団に入ったままの状態で返事をするレオナさんが入ってきた。

「おはよう。今日はお寝坊さんだな。それも仕方ないか」

「あい、最近はこちらと起きれるようになってきたと思いましたが、今日は駄目だったみたいです」

「今日は目を瞑ってあげよう。明日からは頑張るんだぞ」

レオナさんは窓を開けて部屋に光を取り込む。その光が眠りから覚めたばかりの私には眩しくてつい頭まで布団を被ってしまう。

「太陽の光が眩しいー」

「まるでホームにいる子供たちのようだな」

呆れるようにそう言われてしまい、指先で頭をツンツンと突かれる。子供たちと同じだと言われてしまえば奮起も沸くもの。こんな身形ですがこれでも成人しているのだ！

被っていた布団から抜け出してベッドのふちに腰をかける事に成功。よく出来ましたといわんばかりに所定の位置に手が置かれる。

まだほんの僅かな付き合いであるが、レオナさんはとても面倒見の良い方で、ザラさんとはまた違った方法で他人をやる気にさせるのが上手である。

それは自分の信念を行動に移して実行する姿であり、周囲に目を配らせて気遣いをしたり、はたまた人を褒めたり、相手を怒らせない程度に煽ることでやる気をださせたり。本人は失敗だらけだと謙遜するけれど、そういった失敗がきちんと糧となつて今のレオナさんがあるんだろなど、お世話になりっぱなしの私が身を持って実感させていただいております。

「身支度を整えたら下にある食堂に集合だ。二度寝は厳禁だぞ？」

「了解しました。ちよつとだけ身体を動かしてから直ぐに向かいますね」

頭から手が離れ、レオナさんは部屋から出ていく。

一先ずは身支度を整えよう。寝る前に放り投げた衣服を扇ぎ、埃や汚れ、ほつれた部分が無い事を確認して一枚ずつ着ていく。

その後、イジツへ来る前から始めた体操を手早くこなす。未だに身体から骨の音が鳴るのは何故なのだろうかと思議に思いながら。

食堂へ下り立つとレオナさんが片手を挙げてこちらに合図をしてくれた。先に食べられているわけでもなく私を待っていてくれたようだ。まさしくこういうところが人に慕われる部分なんだろうと思ひながら席に座り、運ばれてきた朝食を一緒にいただく。

「ハルトさん、レオナさん、おはようございます。本日は私、エルがお二人の担当を務めさせていただきますね」

朝食後、その場で食休みも兼ねて待機をしていたところ、宿にエルさんがやってきた。

決まり事の中の一つである自警団から一名同伴をさせるという話。これはカナリア自警団からの提案という事になったのだろうか。

イヅルマの自警団は規模が余所よりも大きいと聞かされている、部隊も幾つかに分かれています。誰が来るのだろうかと密かに心配していたのは内緒の話である。

「よろしく頼む。本日、我々の行動はどうすればいいんだ？」

「ひとまずは昨日と同じ自警団の詰所に向かわせてもらいます。部長が連絡を入れてくださったことで議会から人が訪れるようですので」

「了解した。では案内を頼む」

「はい。では参りましょうか」

こうして再び自警団のある場所へと足を運ぶこととなる。

前を歩くエルさんを見ていて思ったのだが、エルさんってどこかのお嬢様なのだろうか？

昨日は大地の恵みに意識を全て持っていかれていたせいで何も考えていなかったけれど、何処となく雰囲気や口調から気品のようなものを感じられる。

いやまあエンマっていう例外もいるのだから人を見た目で判断してはいけないよね。反省。

「昨夜、アコがお二人の見送りをした際に町の事を喋っていたりはしていませんでしたか？」

「丁度、ここの広場から見える景色について楽し気に教えていただきました」

「やはりそうでしたか。アコってばハルトさん達にイヅルマへ来ていただけなのが余程嬉しかったのね」

「随分と親しそうだが、エルとアコは？」

「幼馴染なんです。アコが自警団学校を卒業したと同時にカナリア自警団の団長に任命された時、団員はあの子一人だけで……それで私にもカナリア自警団の団員になって欲しいと言われた時は嬉しくてお母様の反対を押し切って入団してしまいました」

「それはなんとというか思い切りましたね」

「頼られて嬉しかったこともありまずし、何より刺激的な毎日が送れるのではないかと思うと、いてもたってもいられなくなっちゃいました」

エルさんが可愛らしく伝えてくるけれど、後半部分は聞いてはならない事を聞いてしまった気もする。でもアコさんとの仲の良さは十分伝わってきた。

「それにしても学校を卒業と同時に新設された自警団の団長に抜擢とはこれまた如何に？」

「アコのお父様がイツルマの伝説的な英雄であられたというのも理由の一つでしょう。そこへ昨日お話させていただいた悪習も重なることでアコが団長へと抜擢されてしまったのでしょね。でも私は今こうしてカナリア自警団の団員として働くことが出来て楽しいです」

「始まりはどうであれ、全てが悪い方向へと向くわけではないということだな」

「仰る通りです。おかげさまで刺激的な毎日で飽きる事がありません」

「私は日々平穩に暮らして生きていきたいものです」

あらあらとエルさんが可笑しそうに笑う。イジツの人たちも生まれ育ちに差はあれど、本質は変わりなさそうなのがよく分かる。

「ただいま戻りました」

「お帰りなさい！ エル！ ハルトさん、レオナさん、おはようございます！」

自警団の詰所に辿り着き、昨日と同じ部屋へと案内されると朝から元氣一杯のアコさんから挨拶がくる。

私とレオナさんも返すように挨拶をしていると気づいた事がある。他の団員の方がいない？

そんな素振りに気が付いたのか、アコさんがお答えしてくれた、

「他の皆さんは警備に出掛けています。空から街中と手分けをしている状態ですね」

「随分と忙しいみたいだが……他の自警団はいないのか？」

「それが……あの事件の後という事もあり、調査の為に活動停止にされている自警団もありまして、動けるのが私たちカナリア自警団だけの状態なんです」

「それはまた大変ですね」

「いえいえ！ 市民の皆様からの信頼を取り戻すためですから！ 特に大変とは思っていませんよ！」

アコさんの力強い言葉。自分の仕事に誇りを持って職務に励んでいるのが分かる。隊長しかり、団長しかり、人を率いる事が出来る人は必ず何かしらの人を魅了させるものを持ち得ているように見える。

「そういえば本日は議会の方がこちらにいらつしやるとエルさんから聞いたのですが」

「はい！ 今回ハルトさんをお呼びした件についてと、評議会へ登壇していただく前に一日会いたいという方がいらつしやいました」

「事前にお会いするのは構わないのですが、大丈夫なんでしょうか？ どちらかといえば議員さん側のルールの問題とかなのですが」

「事前に申請書を出しておけば問題ないよ。何よりアンタを呼んだ奴はそれらを一切無視した奴らだけだね」

背後から聞こえる張りのある女性の声。気が付けば目の前にいるアコさん、エルさん、そして奥にいらつしやる部長さんまで敬礼をしていらつしやる。

ゆつくりと身体を声の聞こえる方に合わせると、一人の老婆……と表現するには失礼な気がするほど、覇気のある女性が立っていらした。

「アンタがハルトでいいんだね？ こちらが噂のコトブキの隊長さんかね」

その声に応えるようにお互いに頷く。

「私の事は議長とでも呼びな。それか既に引退済みの身を引つ張り出されたババアとでも」

「議長と呼ばせてください！ つて議長？」

「おおお久しぶりでございます！ 入口では何ですから！ ささつこちらの方へ！」

部長さんの焦りの声と共に対応室へと案内され、座るようにと勧められるのでそれに従う。

レオナさんはお仕事モードに切り替わったのか、遠慮するといった仕草をして私の真後ろで直立している。そのお姿は凛々しく格好いい。

「さて、手始めにこちらからいいかい？ このたびは我々イヅルマからの突然な要望に応えていただき感謝の言葉を伝えたい」

「いえ、最初は驚きました但友人たちの勧めもありましたので。それに今回は力強い護衛がついてきてくれるという事もありましたので」

「コトブキ飛行隊、それも隊長であるレオナを護衛に連れて来させるとは。あの子にとって余程、重要なんだねアンタは」

「あの子とは？」

「アンタたちからはマダムと呼ばれているルウルウの事さ。あの子が飛行船を、羽衣丸を所有する際に色々とおあってね」

あのマダムが誰かのお世話になるという姿は余り考えられないけれど、嘘を言っているようには見えない。

「しかしこちらの奴らが色々無理無茶な条件を突き付けたにも関わらずよく来たね。イヅルマへ行くように勧めた友人とやらの顔が見て見たいよ」

「私たちもカナリア自警団のお二人も全員が酔っ払いに良い様に言いくるめられたんですよ。私に至っては利があるかもよって促して」

「それは面白い話だ。いつかゆつくりと聞かせてもらいたいものだが、先に本題に入ろうじゃないか」

引き締まる空気。イヅツへ辿り着いてから幾度か経験した聞き取り調査。こればかりは何度繰り返しても慣れそうにはない。

「イヅルマを取り巻く現状は聞いたかい？」

「そちらにいらつしやるアルバート部長から」

「なら話は早い。あの出来事が公になってから一部では火消しに躍起になる奴らで一杯さ。自分たちはイサオとは違うと」

「独占するのは一つの穴か、複数の穴か。穴の為に余所の町を焼き払うか、焼き払わないか」

「誰しもイサオの行動を見ればそうも考えるだろうね。だからこそイサオの象徴ともいえる震電にはどうしたって敏感になっちまう」

議長さんの深い溜息。こうしてイヅツの人たちから直接イサオさんの行動を聞かされる、とんでもない悪党であることがよく分かる。普段付き合う分には陽気で手品好きの変なおっさん程度の感覚だというのに。

深呼吸の後、お年を召されているとは思えないほど、鋭い目つきでこちらを見つめてくる議長さん。

「ハルトや。あの震電は本当にイサオの所有していた機体ではないと言い切れるんだね？」

「はい。震電は私の曾祖父から委ねられた機体です。決してイサオ……の機体ではありません」

つい癖でさん付けで呼びそうになる。これも早めのうちに慣れておかないと。

でも、こうして正面から否定をするのは何だか胸が痛い。イサオさんの震電が呼び寄せたこの事態。それでも全てが悪い方向に向いているわけではないと、後ろにいるレオナさんの存在を感じながら思う。

カナリア自警団 その7

私の言葉を信じてもらえるか、信じてもらえないか。それはまた別の問題として。

目の前には、私が搭乗してきた震電の機体。イツルマへ辿り着いてから格納庫に仕舞われ、丁寧に扱われているようだ。議会からすれば重要な証拠品となりうる機体だからか。

「いやはや、生きてるうちにこんな機体を見ることになるうとはね」

「もう少し丁寧に触らんか、ババア」

「私ほど機体を優しく扱う人間は他にいないわい、ジジイ」

あの後、議長さんが震電を直接見たいとの要望に応えるため、格納庫まで足を運んだ。

その際に格納庫にいらしたジノリさんと出会うことで始まる口喧嘩。というよりもじゃれ合いかな。二人の間をハヤトさんが困り顔で右往左往としている。

「アコさん、あのお二人はお知り合いですか？」

「そのようですね……私も初めて知ってびっくりしています」

震電の機体をぐるりと周りながら尚も機体に触り続ける議長さんに対してジノリさんが抗議の声を挙げる。

それはまるで大切なおもちゃを好き放題にされている子供の抗議にも見えてしまう。

「あらあら、あの様子だとお二人の付き合いは長そうね」

「口喧嘩をしているようにしか見えないのだが……」

「喧嘩するほど仲が良いって事ですよ。多分」

「これはもうしばらく経過を観察する他なさそうである。」

「あの騒動以降、噂として聞いちやいたが、本当に後ろにプロペラがあるとはねえ」

「ユー・ハングがまだイジツに居た時ですら製造はされず、設計図のままだった機体をイサオは作り上げたんじゃないや。その熱意だけは羨ましいわい」

「それは技術者としての本音かね。実際に使用された側はたまったものじゃなかっただろっ？」

議長は私の後ろにいるレオナさんに向けて言い放つ。なんとも言いようがないと
いった感じの表情をしているレオナさん。

「それじゃ再度確認だよ。この震電はイサオの機体ではないんだね？」

「見れば分かるじやろうに。鷹の目と呼ばれたその目もついに耄碌しおったか」

「ハッ、私は外見じゃなくて中身で信じるタイプなのさ」

「よく言うわい。機体後方、発動機が搭載されている部分をよく見るんじゃない。本来で

あれば震電の形体を見れば空冷の発動機が使われていたんじゃないやろうが、この機体はまるで飛燕のようなじゃ」

ジノリさんが議長に向けて説明をしている最中、時折こちらに視線を向けてくる。

「コヤツから詳細な説明を受ける前でも分かる。空冷式の機体を液冷に転換しおった。そしてこの発動機は異質じゃ。ユーハングともイジツとも受け取れぬ違和感を感じて仕方ない」

「ハルトや、この機体を用意し、改修を施したのはお前さんの家族なんかい？」

「そうです。技術者である曾祖父が本来であれば自分で探索の旅に出る為に用意した機体です」

「その曾祖父とやらの名前を聞いても？」

曾祖父の名前。私にとっては馴染み深い名前であるのだが、いかんせんガツチガチの日本人名である。イジツに居た頃のユーハングを知っていそうな年代の議長に教えた場合、疑われるのではないかと。

せめてユーハングと関わり合いのあったイジツ人辺りで話を収めたいところではあるが、直ぐに思い浮かぶのは名字ぐらいいだ。誤魔化せるかな？

「えっとシキモリと言います」

「シキモリ？　　こういつちやなんだが変わった名前だねえ」

「何でもユー・ハングがまだイジツに居た頃に関わり合いがあつたらしく、その時に名前分けをしてもらつたと聞かされています」

何かを突つ込まれるぐらいなら先にこちらから仕掛ければいけるかな？　嘘の中にほんの僅かに本当の事を言ううと真実味が出るとかなんとか。

周りの反応を見れば特に問題なさそうに見えるのだが、レオナさんまでそうなのかつて表情をされているのが少し不安である。演技だと思いたい。

それでも無事にやり過ごせた。その考えが甘いとも露知らず。

「その名前、何か引つかかるな」

「は、はあ。まあ本人もユー・ハングの人たちと交流出来た事を今も自慢げに喋るぐらいですし」

「そうではないのだが……ああもう時間切れか」

ポケットから懐中時計を取り出して時間を確認する議長。気が付けばお昼も近い。

「残念ながらこの話の続きはまた今度聞かせてもらうさね。ハルト、明日からアンタも議会上に登壇してもらう事になるから覚悟しておきな」

「はい！　と言われましても何を喋れば良いのやら」

「聞かれた事を素直に答えればいいさ、それに……」

「それに？」

「未だイズルマに蔓延る膿を吐き出す絶好の機会になりそうで私は楽しみだよ」

高笑いをしながら格納庫から出ていかれる議長。あの人怖い。

その姿を溜息を吐き出しながら見送るジノリさんの愚痴に近い独り言。

「まったく、久しぶりに会ったかと思えば何一つ変わらん」

「昔からあのような感じの方なのですか？ ジノリさん」

「何一つ変わらんよ。アコはあんならんでくれよ」

疲れたわい。そう言い残してジノリさんとそれを追いかけるようにハヤトさんも格

納庫から出ていかれた。

「この震電。議会の方々はどうなさるおつもりなのかしら」

「どうしてもイサオと同じ機体だと通したい方もいらつしやるようですけど……」

「イザとなれば私も証言に加わろう。あの空でイサオの搭乗する震電と対峙しているか

らな」

「でもあの議長の口ぶりだと、まるで泳がせろと言わんばかりの台詞にも聞こえたので

すが」

事の発端は、アレシマでユーリア議員の説明を無視してまで、この震電がイサオさん

の機体であると実物を見せても信じ切り、私を呼び出したという事。

呼び出した人達がエンジンを換装させた姿を見て見ぬふりをしているのか、そもそも

イサオさんが搭乗していた時の震電を知らないだけなのか。

私が議会にお呼ばれするまで一日残されている。何を求められ、何を行えばいいのか。考えるにはまだ時間が残されているのが幸いだ。

「それが何でいま私は空の上に居るんですかね?！」

『当たり前でしょう! 今回の事が無事に済んでもハルトの旅は続くのだから、変な所で死なない為にも今のうちに私が訓練してあげないと!』

突如として始まるシノさんの熱い教育。それもこれも食堂での出来事が原因である。

あの後、お昼が近い事もあり食堂へと案内されたところ、警備に出掛けていた団員の方々が戻られた。

丁度いいからと交流会の意味も含めて皆さんと食堂でご飯をいただく事になったのだが……。

「はい、ハルトさん。あーん」

「あ、あーん?」

「あら、もしかしてハルト君と呼んだ方がよかったかしら?」

「そういう問題ではないと思いますが」

隣に座られたエルさん。食堂には無い豪華なランチが並ぶ中、どれも美味しそうだと

眺めていたら始まる餌付けタイム。

当初は上記のとおりお断りをさせていただいたのだが『私、悲しいわ』と言わんばかりの仕草をされ、カナリア自警団以外の人たちからは殺意の視線を一身に浴びる羽目に。

どうすればいいのさ!? 周りにいる皆さんに視線を配れば大人しく食べさせてもらえといわんばかり。え、これエルさんにとつて日常的な行動なの？

悲しむエルさんの姿、はよ食べという皆さんからの視線。諦めていただく事にした。

一口、二口、時折口元を拭き拭き。なんだか子供の頃に返る気持ちで一杯。そして増々強まる視線。美味しいはずのランチの味がしねえ。

餌付けされていた最中にふと気づいた事がある。エルさんは私に食べさせるのに途中で自身は食べていらつしやらない。それはよくない。元々私が自分で注文をしておいたカツ丼を箸で一口サイズに。

「エルさん、お返しのあーんです」

「あら？ まあ！ 私、誰かにしていただくのは初めてです！」

「そうなんですか？ エルさんの食べる分を大分頂いてしまったのでお裾分けも兼ねてと思ひまして」

「誰かに食べさせて貰えるなんて嬉しいわ！ それじゃ頂いてもよろしいかしら？」

「どうぞどうぞ」

エルさんの小さな口が開かれて、箸にのせられたカツとご飯が無事にエルさんの口の中へ。

可愛らしく動かされる口元。飲み込む姿。同じ物を食べているとは思えないほど上品である。

「美味しいわ！ アコが毎日食堂で選ぶのも分かる気がしてきたわ！」

「そうでしょ！ カツ丼が一番です！」

「ああ、お姉様の食生活を見直す為に私が料理を学ばなければ……！」

「この間のシノさんみたいなのは勘弁してくださいね」

「あれは少し間違えただけよ！ 今度は上手く出来るわよ！」

「パンとミルクがあればいいや〜」

「なんとというか、コトブキの隊員たちも大分個性的だとは思っていたが、意外と普通なのだろうか……」

自警団の皆さんの姿を見ていたレオナさんが自問自答をし始めちゃってるし!? レオナさんが標準ですから！ 正気に戻って！

怒涛の昼食も一息。食堂の片隅にあるラジオからは議会の喧嘩にしか聞こえない討

論が聞こえてくる最中、シノさんから一つの提案をいただく。

「ハルト。貴方はしばらくイヅルマに滞在する事になるのよね？」

「期限がどの程度かは分かりませんが、そうなるかと」

「ならその間、私がハルトの操縦技術を一から叩き直してあげるわ」

「申し出はありがたいのですが、一応証人として呼ばれているわけでした」

「それなら問題ありません！ ハルトさんはお昼前に議会へ向かわれて二時間ほどお時間を頂く予定となっておりますが、それが終われば自警団の同伴があれば行動に制限は無いと通達がありました！」

「なら問題ないわね。ハルト、機体性能に任せきりではなく技術も身に着けないと震電に乗り続けるのは命に関わるわ」

シノさんの真面目な声色。心配してくださったの提案だというのがよく分かる。やはり震電に乗り続ける以上は避けて通れない道なのだろうか。

「ついにその時が来たという事かな」

「レオナさんまでそう言いなさりますか」

「良い機会じゃないか。私のような我流に近い飛び方よりも正規の訓練を受けた者から教えてもらった方が学ぶのは早いぞ？」

「そうですね！ ハルトさん！ 例え今のハルトさんが人よりも操縦技術がどうしよう

もなく下手であっても一般人ぐらゐまでは引つ張り上げられるのが自警団の強みですから！」

アコさんの容赦ない言葉によつて心に刺さつていたのは、槍ではなくて銚なのではないか？ 引き抜きたくてもかえしが付いており引き抜けない。

周囲も明らかに……つてヘレンさんは寝てるし。いつもの事なんですな。

「ま、まあアコの言つている事も一理あるわ。私でよければ指導するわよ。どうする？」
少し考える。実際にこれからの事も考えれば、自警団から操縦技術を教えてもらえるのは貴重な機会だ。

ここへ来る前にケイトにも言われた。今後の話と後の事も視野に入れて今動けという話を含めれば答えは一つか。

「シノさん。よろしくお願い致します」

「了解したわ。私の訓練は厳しいわよ！ ちゃんと最後までついてきなさいよ！」

「うえーい」

「そこは『はい！』でしょ！」

こんなやりとりがあり、今に至る。まさか即行動となるとは思ひもよらなかつたけれど。

『忙しく操作をして機体を動かしているのに泣き叫ばないなんてやるじゃない!』

「ここへ来る前は習うより慣れろですつと後部座席に座らされていましたから!」

『あらそうなの? それならこれはどうかしら!』

私たちが搭乗している機体は、赤とんぼと呼ばれている機体。前の操縦席と後部席があり、当然私は後部席に搭乗している。

シノさんは操縦席に搭乗しており、操縦桿を握りしめて機体を激しく揺らす機動を行っている。

右ロール、左ロール、時には空と大地がひっくり返り、バレルロールで元の姿勢へ。

それでも割と平気でいられるのはイサオさんの地獄のような訓練の賜物だと思う。あれに比べれば今のところ目を回さずにいられるし、酔って何かを吐き出したくなるような事もなく済んでいる。

『あらあら、ハルト君つてば意外と頑丈なのね』

『こちらへやってくる前に相当扱かれたとは聞いていたが、あれだけ揺さぶられても泣き言一つ言わないとは驚きだ』

『意外とシノさんの指導に堪え切って立派な自警団になれるかもしれないわね』

『いや、自警団に入団はしないとは思いますが……それでも可能性が広がるのは良い事だな』

『これだけやっても平気だなんて腹が立つわね!』

「そこは褒めてくださっても良いのでは!?!」

『私を本気にさせるなんていい度胸してるじゃない! これならどう!!』

「おお……飛行機ってこんな動き方出来るんだ」

『何を感じしてるのよ! もう!』

カナリア自警団 その8

ついにイズルマ議会へ登壇をしなければならぬ日がやってきた。

議長さんからのアドバイスを素直に聞けば、問われた事には素直に答えろと。

しかし、その後に発言されていた『イズルマに蔓延る膿を吐き出す絶好の機会』という言葉がどうにも頭の隅に残ってしまう。

だからといい、直接面会する以上の事をしてしまえば、議会の長である人物が私を呼び出した連中と同じような手法を使うようなものだ。

流星にそれは避けるべきと判断したのだろう。私を呼び出した人達と同じ穴の貉になるのは誰だって避けたいものだ。

「ハルトは議長の言葉どおり、素直に問われた事を返す事だけに集中した方がいいと思うぞ?」

朝食後、起きたてほやほやの頭では如何すべきかと思ひ浮かばず、レオナさんに相談をしてみる事にした。

寝ぼけ眼の私の話を真面目に聞き、それに対して的確な助言をしてくださる。

「やはりそれが無難ですよね」

「そうだ。何よりハルトは政治家でもない。ましてやイツルマの所属でもない。立場だけで言ってもイツルマからの無理筋な要請を正そうとしてこの場にいるんだ。それ以上の上の事には深入りすることは無いと私は思う」

レオナさんの言葉は至極真つ当で、私の考えもそれと同じに変化してきた。

イツルマの問題はイツルマの人間が解決すべき事だもんね。緊張からなのか少し考えすぎていたようだ。

こめかみをグリグリと押して軽い痛みと共に眠気を飛ばそうとする。その姿がおかしく見えたのか、控えめながらも笑うレオナさんの姿。

「すまない。何だか無性に楽しくてな」

「イツルの人たちから見れば、私の行動はやはりどこか変わっているみたいなので良く笑われます」

「確かにそういう意味も含まれているのだが、なんて言えばいいのだろうか」

テーブルに肘を立てて両手を合わせたか閉じたり。橙色の綺麗な瞳も右へ左へ忙しく動く。普通に考えたと行儀が悪いのだろうか、なんだか可愛らしくみえてしまう。

「変な事を言ってしまうかもしれないか？」

「レオナさんになら何と言われましても。信じてますから」

「ありがとう。実は言うとはルトがこうして私を頼ってくれるのが嬉しく感じるんだ」
「頼られる事がですか？ 正直、頼み事ばかりしている気がして申し訳なきで胸が一杯なのですが」

「それはコトブキ飛行隊としての私だろうか？ 実際に今も仕事でこうして行動を共にしている事は確かなんだが、こういう相談事を聞かされるとコトブキとは関係ない、私個人を頼りにしてくれているんだなと思うんだ」

なるほど、確かに言われてみれば私の悩み事を聞いてくれる相手は酔っ払いが多かった気がする。なんせ雑談しているだけでお給金が貰える立場だったもので。

「多分、イツルマに滞在中はこういう相談事が増えると思いますけど……」
「ほう、それは一つ楽しみが出来たな。何かあればすぐに私に言うんだぞ？」

指を立て片目を閉じながらそう話すレオナさんはとてもお茶目だ。でもその仕草のおかげもあってとても親しみを感じる。姉がいれば……とは思うが、どちらかといえばご近所にいる世話焼きお姉さんに憧れるような心境だろうか。

そんなことを思い描いてしまうのは、本日の担当者は弟殺しの異名を持つ方がいらしたからだ。

「本日お二人の担当を務めさせていただきます、リツタです！ よろしくお願いします」

！」

少し大きめの帽子に赤みを帯びた短めの癖つ毛。笑顔を絶やさずこちらを見つめている紫色の瞳。

カナリア自警団の中ではミントさんと並んで身長が小さめの愛らしい方である。

「さて！ 本日の予定なのですが、昨日と同じく自警団の詰所に一度足を運んでいただく事になっております！ その後については歩きながらお伝えします！」

エルさんの時と同じように二人してお願いしますと伝え、リッタさんの後ろを歩いて行く事に。

「どうやら議会の方から詰所にお迎えが来るように手配がされているみたいなんです
よ」

「その場合、私はハルトと一緒に行動を共に出来るのか？」

「問題はそこなんですよお。ハルトさん側にも護衛の方がいらつしやるからその方も同伴出来るようにしないと協力してくれませんよ！ って伝えてはいるんですけどねえ
……」

お二人の話の聞いている限りだと、議会へは私一人で行く。というよりも連れて行かれるようだ。

「護衛の任務を任されている以上、同伴が出来なければ意味がないのだが」

「そうですねえ。団長や部長が色々と頑張っているみたいなのですが、本日のところは難しいかもしれません」

「参ったな……」

「一先ず今日は何が何でも自警団から一人派遣しようという方針で決まりましたので、不肖ながら私リツタがハルトさんと議会へ行く事になりそうです！」

「こちらを振り向いて敬礼の姿勢をとるリツタさん。親しみやすい口調で話してくれるが彼女も団員。やはり何か護衛術でも学んでいるのだろうか？」

「こちらの不安をかき消すかのように眩しい笑顔を向けた後、再び身体を前に向けて詰所までの道を歩く。」

「ここまで思った事が一つ。リツタさんは少し大げさな程、身振り手振りを行いながら全身を使い自分の意志を伝えようとしている。」

「その度に揺れる短いスカート。ふわりと舞うことで綺麗なおみ足はさらによく見えてしまい、片側の足にはホルスターが装備されているのが見える。その存在のおかげで私は正気でいられるだから不思議である。銃は怖いのだ。」

「カナリア自警団つて上半身はきつちりと制服で決められているのに、それ以外はかなり服装自由だよなあ。」

「失礼します。こちらイヅルマ議会から派遣されてきた者です。ハルト様はいらっしゃいますでしょうか？」

宿から詰所に辿り着き、しばしの雑談を楽しんでいれば、もうお呼ばれされる時間となっていた。手を挙げて私だという事を議会からの使者に伝える。

「恐れ入りますが、我々と共に議会までお越し願いたい」

「その前にカナリア自警団より議会に対し要望がございます」

「一体なんででしょうか？ 護衛であれば私共が責任をもつてお連れいたしますが」

「その事について疑うつもりはございません。ですがハルトさんがお連れした護衛の方も一緒に一緒にさせてください」

「それにつきましては我々に申されましても返答致しかねます。我々はハルト様をお連れする様にと命令されておりますので」

「でしたらカナリア自警団より一名同伴させてください。イヅルマ議長に対し証人の護衛に関して意見書を提出させて頂きたいのです。それに本日はハルトさんが議会に登壇される大事な初日。少しでも緊張をほぐす意味も含めて」

アコさんが背筋を伸ばし、堂々と使者に意見を伝える。その姿は様になっており、まさにカナリア自警団を率いる団長として相応しい姿といえる。ミントさんが両手を組んで瞳を潤ませながらお姉様と独り言を呟いているのがちよつと怖い。

果たしてどうなるや、と思えば相手の対応は柔らかくアコさんからの申し出はすんなりと通る事となった。

「結局、議会からいらつしやつた人たちも元自警団であつたり、それに関わり合いのある人たちが多いんですよ」

議会に向かう道中にリツタさんがそう教えてくれた。つまるところ最低限仕事はするけれど面倒事は対処したくないから直接エライ人達に伝えてくれという事だろうか。「なので団長が議長に対して意見書を提出するから一名連れて行けーって申し出をしたのが、彼等にしてみれば、これを断れば発生するかもしれない責任を誰が取るんだーって話になり、自警団から一名同行させるだけで責任が逃れられるなら連れて行くのが良いと判断したからではないでしょうか」

「なんとも言葉にし難い状況ですね」

「それだけあの事件の反響が大きかったって事なんでしょうね。イヅルマの治安も不安定になっていきますし」

「幾つかの町を訪れましたが、イジツ全体が不穏な空気に包まれている。という言葉はよく耳にしましたよ」

「やっぱりそうですかあー。大丈夫かなあ?」

歩きながらも器用に顎に手を当てて悩み事のリツタさん。自警団員としては頭の痛い問題なのだろう。空賊は増加の一途を辿っているようだから。

使者の方に案内をされ辿り着いた先にある建物は、周りにある物よりも随分と大きい。議会を開催するだけの場所だけある。ラハマなんて土俵で議会を開催すると聞いたのに。

「では、こちらへ」

そう告げられ建物の中へ。幾つもある部屋の一つへ連れていかれた後、呼ばれるまで待機をされていて欲しいと言いつつ、部屋を出た一部の使者はそのまま扉の前で左右に分かれ私の護衛を開始する。

「意外とガチガチに守ってくださいるんですね」

「要請ともいえる要望に応えてくれたハルトさんに何かあれば、市民の皆さんから無断行動を行った議員以外の方も一緒になって叩かれるでしょうからね。呼ばれるまでは何も出来ませんし気楽に過ごしましょう！」

そういうとリツタさんは靴を脱ぎ始め、部屋にあるソファに横向きに座り足を伸ばしている。朝の時に以上に全体がよく見える綺麗なおみ足に拝みたい思いで一杯になる。特にホルスターが巻かれている部分を。銃の恐怖をふとも超えてしまったのだ。

「ほらほら！ ハルトさんもそんなに礼儀正しく座っていないで、ヘレンさんみたいに寝ててもいいんですよ？」

「流石にその度胸はありませんが、お言葉に甘えてみます」

「それがいいです！ さあさあさあ!!」

リツタさんと同じ様に靴を脱ぎ、肘置きに頭を乗せて試しに横になつてみる。何故だろうか、この狭さからくる窮屈な思いが苦痛ではなくちよつとした幸せと安心感をもたらしてくれるのは。

折角だから目を閉じてみよう。あ、これ寝れる。一人つきりで連れて来られたらこんなことは考えもしなかつただろうけど、傍にいるリツタさんのおかげで緊張や不安と戦わずに済むかも。

これを見通してアコさんはリツタさんを選んだのだろうか。なんて敏腕な団長だろう。あとは悪意のない言葉が無くなれば……。

「いやいや、自分が言っておいてなんですけど、実際に寝るとは思いもありませんでしたよ、ハルトさん……」

「ではこちらへ。議長から名前を呼ばれたら登壇していただき、自己紹介をお願いします」

「……あい、あい」

「ハルトさん！ 起きて下さい！ そろそろ出番ですから！ そこまでヘレンさんの真似をしなくてもいいですから！」

気づけば眠りに落ち、聞こえてくる声に従い目を開けてみれば私の身体を必死に揺り起こそうとするリツタさんの姿。

夢心地のまま指示どおり身なりを整えて、気が付けば扉の前に立っていたわけで。

『ではこれより、議題となっております震電の所有者であり、我々議会からの急な要請に快く応えていただいたハルト氏に登場していただきます』

「ハルトさん！ 大丈夫ですからね！ 自分もついていきますから！ ちゃんと名前を言うのを忘れないでくださいね！」

弟さんと妹さんを持つお姉ちゃんが私に発破をかけてくる。ここで頼つぱたを引つ張つたりと物理的な起こし方をしてこないのがリツタさんの優しさだと思いたい。

一度深呼吸をして酸素を送り込む。聞かれた事には素直に答える。自分の名前をきちんと伝える。使者の方によって開かれる扉。

よし、覚悟を決めて行こう。

カナリア自警団 その9

飛行船内でユーリア議員と会話をした時に、自由博愛連合へ加盟をしようとするガドール評議会を止めるため、自身が議会へ登壇した際の話の思い出した。

『丸めた紙が飛んでくるなんて可愛いものよ。それなりに固い名札からどこぞの馬鹿はイナーシャまで飛ばしてきたのだから』

流石に冗談であろうと思ったが、あの時のユーリア議員の表情を見ていれば本当なのだと思ひ込ませざるおえなかった。

『私にも野望があるの。イケスカ騒動によりイジツ全体が揺れ動いている今、空賊離脱者支援法が無事に通過されたあかつきには、私に暴言はおろか物まで投げ込んだ奴ら全員にケツからイナーシャぶち込んで正気に戻してやるのよ!』

口角を上げて微笑みながらそう語るユーリア議員はとても素敵でした。そしてその話は満更嘘でもないのだと、私の目の前で起きている事態に頭を悩ませる。

入場前のお目覚め一発。開かれた扉を一步ずつ前へと進み壇のあるところまで辿り着く。

議長に向けて一礼、議会にいらつしやる議員の皆様に一礼。これが作法として正しいのかは分からないが、私の話を聞いてくださる方への敬意は忘れずに。イヅルマのシンボルマークつてどれなんだろう。

私が何故ここにいるのかをアレシマで演説をされたユーリア議員の話を元に進めていく。

事情により自身が向かう事が困難になった曾祖父の代わりに家族を探しに。

操縦の下手な私でも万が一、襲われた際に逃げ切ることを前提として用意してくれた機体が震電であること。

その震電がイジツを揺るがした事件であるイケスカ騒動に大きく関わっていたとは知らなかったということ。

イヅルマ議会からの要望にお応えしたのは、私と震電は自由博愛連合とは無縁であり、アレシマの時と同様に実際の機体を再びイヅルマ議員の皆様に見ていただくことが、私に出来る精一杯の誠意であると判断をさせていただいた。

嘘か誠か。イサオさんが自分の物に名前を書く性格であれば全て台無しなんですけどね。

静まり返っていた議会は徐々に人の声によって満ち溢れる。

その中で耳に届いた幾つかの内容。

『幼い子供があんなにも堂々とした立ち振る舞いを』

『イジツは広い。渡り歩いて暮らす者たちも数多くいる』

『これに応えずしてイヅルマの正義はどこにある!!』

という肯定的な? ご意見。

逆に私を呼び出したと思わしき議員達からはこんな内容も聞こえた。

『見せてもらうだけでなく、機体の調査まで話を進めなければ』

『あの空を飛んだ私の友人たちがイサオの機体だと断言している!』

『そんな甘い対応で済ませようとしているから悪習が今まで続いたんだ!!』

最後の言葉をきっかけに、議会は私を置いて大荒れ状態へと突入する。

議会を飛び舞う資料と思しき丸められた紙。席に立てられていたはずの名札。そして回転しながら空を飛ぶイナーシャハンドル。

イジツの人達ならば当たっても怪我で済むのだろうか。私なら多分死ぬ。

前日、食堂のラジオを通じて聞いたお互い意見という名の言葉のぶつかり合い。ただの罵りも含む。

イヅルマにいる間は『悪習』と『パロット社』の話題には気を付けようと、この光景を目にしながら心に誓う。

「静肅に！ 静肅に！！ 黙れ小僧共！！」

手にした木槌を加減もせず打ち込み続ける議長。不安の感じ、議長の姿が視界に映るよう身体を半分そちらへ向けてみると、鬼がいた。

見なければよかつた。後悔先に立たず。片方からは罵詈雑言、もう片方からは木槌を力強く叩く音。そして不安は的中してしまふ。

何かが破損する音、それと共にこちらへ向かつて来る物体。視界に入るのは先程まで議長の手によつて叩かれていた木槌の頭の部分。

勢いに任せて回転してこちらに飛んでくるが、不思議なことに動きがゆっくりとしている。

まさか私の中に眠る何かがついに目覚めたのだろうか。前日、シノさんの厳しい訓練を受けた影響か。第六感、シックスセンスというものか！

ならば避ける事も容易い。笑みさえも浮かべる余裕を持ちながら身体を動かし回避をしようとするが、脳からの命令に身体が反応しない。

その代わりに次々といままで見てきた光景が脳裏をよぎる。最近出会ったばかりのカナリア自警団の皆様から始まり、時間が巻き戻るようにお世話になってきた人達の顔が浮かび上がる中、破損した物体が私の頭部に当たる直前、浮かび上がってきた人物は言うまでもなくイサオさんである。

全ての元凶めえ！ 僅かな恨み言を唱えながら頭部に衝撃が走り、私の意識はそこで途切れる。

ただの走馬灯でした。

ゆつくりと瞼が開かれていく。その隙間から見える天井からは人工の光が照らされており、建物の中にいる事が分かる。

頭部に走る僅かな痛み。その場所に手を当てると大きく膨らんだコブが出来上がっていた。

当たり所がよかったというべきだろうか、破損した箇所が当たったわけではないように一先ず安心。

「ハルトさん!? 大丈夫ですかあ!!」

私が動いたことで発生した物音に気が付いたのだろう。カーテンを開けてこちらを覗き込むと驚いた表情と共にベッドへ駆け寄り、両手について顔を覗き込んでくる。イジツの人は距離感が近い。

細いまつ毛にくりくりなおめめが見開かれており、気づけば帽子を脱いでおり、ふわとした髪の毛の頂点には髪が一房立って揺れ動いている。なんだか可愛いのか詰め合わせみたいだ。

「意外と大丈夫みたいです」

「よかつたあ……笑いながら倒れていると呼び出しを食らって慌てて駆けつけたんですよー」

「きつと恐怖で顔が引き攣つたせいだと思います」

第六感に目覚めたと勘違いしていたとか真実を伝えたら呆れ果てることに違いない。特に弟さんを持つお姉ちゃんなら尚更だ。

律儀に手袋を外して慎重に私の頭に触れるリッタさんの手が心地よい。そんな夢心地のような空間に突如、叫び声と共に現れる一人の人物。

「ハルトオオオ!! 私が来たからにはもう大丈夫だぞ!! 怪我はないか!? 怖くなくなつたか!?!」

「ここから先は許可が下りた方以外はお通し出来ないのです! 落ちついてください!」

最近、とても頼りになるお姉さんといった印象を受けるレオナさん。

その両腕にはここまで私を護衛してくれた議会からの使者が二人ほど引きずられる形でしがみ付いていた。止めようと掴んだはいいけれどレオナさんの勢いを止められなかつたのだろう。リッタさんも驚きの声をあげる。

「レオナさん!? 一体どうやってここまで!」

「カナリア自警団の皆とラジオを聞いていたらハルトが倒れたと聞こえてな！ 居ても立っても居られずこちらに駆けつけて来た！」

「だからといって護衛の人達を二人も引きずってここまで来れるものなんですかね!」
「大丈夫だ！ それなりに鍛えているからな！」

レオナさんからの返答にリツタさんと二人して頭にハテナマークが浮き上がる。そういう問題なのだろうか。

使者の方たちはレオナさんから手を離して溜息をついている。害はないと判断したのだろう。それでも尚、落ちつかない様子のレオナさんが同じ言葉を繰り返しながら私の隣で身振り手振りを続ける。

「レオナさん」

「どうした!? 痛むのか!? いまイジツイチの医者を呼んで来るからまつ……」

こちらから話しかけただけでこの反応。瞬時にレオナさんの手首をつかんだ自分を褒めてあげたい。

「お医者様を呼ぶほどではないので大丈夫です。でも一つお願いがあります」
「私に出来ることなら何でもいいぞ！ さあ！」

凄く心ときめく言葉を聞かされたけれど、今はそれに触れる時ではない。

「ちよつとだけでいいので、頭を撫でて下さい」

「すまなかつたね、ハルト。私もあのボンクラ共相手につい頭に血が上っていたようで力加減を間違えてしまったさ」

「大丈夫です。大した怪我ではありませんから」

私の髪の毛をボサボサになるほど撫でまわし、落ちつきを取り戻したレオナさんの後に、議長がやってきて謝罪を受けることになる。

「紙はともかく名札とかイナーシャを投げるのは規制しましょうよ。怪我だけでは済まないと思いますよ」

「持ち込みについては制限をしているんだがねえ。そういう知恵ばかりはよく働くのよ」

「なんとまあ、流石議員になれるだけの能力があるというべきでしょうか」

「そこを援護されるのも空しいもんだよ」

なんと表現し難い顔をされる議長。それもそうですよね。

それからはアコさんから提出された護衛の件については了承を得られたこと、明日は選ばれた議員を連れて実際に震電を目視したいこと、再び謝罪を受けるなどをして本日はこのまま直接宿へ戻ることになった。

「歩くのは平気ですか？ ハルトさん？」

「お二人にナデナデしてもらえたので逆に元気になりました」

「意外と甘えん坊さんなんですなぁ」

「私でよければいつでも撫でてやるぞ？」

レオナさんの中で私はホームの子供たちと同じ扱いにまで立場が変わってしまったように。

優しく扱われて嬉しい気もするし、成人として扱って欲しい気もするが、レオナさんを落ちつかせようとする為に頭を撫でては失敗だったかもしれない。

今日は反省すべき点が山ほどあるなぁと考えながら、帰り道を歩く途中。威勢の良い掛け声が道端から聞こえてきた。

「寄ってらっしやい見てらっしやい！ ユーハングから伝わる最新機器の紹介だー！」

世界は違えどああいった客寄せみたいな掛け声は変わらないんだ。

そんな事を考えながらも足を止めることなくそのまま通過をしていく。何事もなければ。

しばらくしてから違和感を感じたのだ。隣を一緒に歩いていたレオナさんの姿が無いことに。

レオナさんを探すように身体ごと動かしながら辺りを見渡す。

いた。先程の聞こえた客寄せの場所をど真ん中に陣取って話を聞いてる。

「どうだいお姉さん！ これさえあれば雨の日だって身体を鍛える事が出来るってもんだぜ！」

「いや！ しかし私にはもうおへやではしるくんが……」

「その名前から推測すると下半身を鍛えてくれるお得意様がいるようだな……しかしこっちは上半身だぜ！」

「上半身!? それは一体!?!」

レオナさんのやや後方に位置しながらリツタさんと共に客寄せが紹介している商品を見つめる。

「こういうのは取り締まらないんですか?」

「うーん。人もそれほど集まっていますし、中々対応が難しい状況ですねえ」

客寄せが紹介している物は高さの違う段違い平行棒。普通であれば体操などの競技に使われるのだろうけれど……あそこに置いてあるのは衣服を収納するハンガーラックか、はたまたタダの布団干しでないの?」

「高い位置にある平行棒。これは狭い所でもぶら下がる事で背筋を正しく伸ばし、棒を掴んだ腕を動かせば自身の重みで腕力が鍛えられるスグレモノ！」

「確かに！ ダンベルを使わなくても済みということか！」

「それだけじゃないぜ！ 正しく道具を使いこなせる自信があるのならば、腹に力を込める事で腹筋も鍛えられる！」

「道具を正しく使いこなす、か。確かにそれは重要だ。しかしそれならば低い方はどう使うんだ？」

「お姉さんはお目が高い！ こちらも同じように上半身を鍛える物だ！」

「それでは高い位置にある物と同じではないのか？」

「……実はここだけの話がある。聞いてくれるかい？」

人目を気にするような素振りを見せ、レオナさんに近づき小声で喋り始める。とはいえ地の声が大きいから丸聞こえなのですが。

「お姉さんは知っているかい？ 筋肉ってーのは生きているんだぜ……」

「生きてる!? まさか、流石にそんな事は」

「聞いた事はないか？ 悩み、悲しみ、傷ついた時にこそ、全身から唸る筋肉の声か！

俺達を使えと叫ぶ声か!! 努力を惜しまず積み重ねた分だけ応えてくれる自分の筋肉たちの産声か!!」

「ツ?!」

客寄せの言葉に何か感じ取ることがあったのだろうか。両腕の先には拳が握られ、顎を僅かに下げる。へー、レオナさんにもその身体をそこまで絞るには眠れない夜もあつ

たんだー。

はよ帰りましょう。無言でレオナさんの袖を掴むが、逆に手を握られてしまい何も出来なくなる。いや迷子にはならないですし。どこかへ行ったりもしませんって。

そんな中、客寄せは半歩下がると突然上着を脱ぎ捨てる。そこに現れたのは見事な肉体美。やつぱりあれなのかな、お胸とかクイッククイッと動かせちやうタイプなのかな。

「低い位置の平行棒つてのは、そんな生きた筋肉に効率よく負荷をかける事で成長させてくれるスグレモノだ！ 今なら現品限り！ 早いものが」

「はい、カナリア自警団です。公衆猥褻の罪で逮捕しますよー」

「チッ！ ポリ公のおでましか！ 捕まる訳にはいかねえな！ またなお姉さん！」

「待ってくれ!! その機材を私に!!!」

大丈夫ですって、ユーハングの知識ならここにおりますから。

カナリア自警団 その10

本日の朝食の時間は、反省会の一言である。

お互いがお互いに思うところがあり、自身の行動について見直さなければならぬと思う出来事が起きた。

私は自信過剰と甘え癖。レオナさんは帰り道での出来事についてだそうだ。

尚、私の事を心配して議会に乗り込んできた事は問題とは考えていないとのこと。そういうところが卑怯だなあと思う。

「昨日は大変ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

「いや……こちらこそ醜態を晒してしまい申し訳ない」

「それについてですが、事前にザラさんから聞いておりましたので問題はございません」
「ザラから？ それは……少し恥ずかしいな」

イツルマに来てからレオナさんの様々な一面を見てきたが、この恥ずかしそうな表情は心に突き刺さるものがある。格好良くて綺麗なお姉さんの照れた姿。ここがラハマで限られた場所であれば写真に収めてザラさんと共有できたものを。

とはいえ、そのままモジモジとされている姿を観察し続けるわけにもいかないので、

気になった事を幾つか聞いてみることにした。

「あの、レオナさんは身体を鍛えるのが趣味なのですか？」

「そうだ。最初は自己鍛錬のつもりで始めたのだが、いつしか身体を動かしていないと落ちつかなくてな」

「鍛えられた身体を見るのは好き？」

「……」

言葉に出さなかつたけれど、親指と人差し指を薄く重ねるといふ仕草をしてくれたおかげで分かった。好きなんだ。

「あの客寄せの人の肉体はレオナさん的にはどうだったんですか？」

「全体の筋肉のバランスよく鍛え上げられていたな。だからといって見せ筋と呼ばれる筋肉とは違い、日頃から肉体を使う職業に就かれているのは間違いない。あの腹筋が私にそう訴えかけてきたのだから」

恥ずかしがり屋のレオナさんを見ていた方が良かったのかもしれない。こんなに筋肉について流暢に語りだすとは思ってもよらなかった。

「確かに。肩なんか小さな雷電でも乗ってるかと思うぐらい盛り上がってましたけど」

「小さな雷電？　面白い例え方をするんだな、ハルトは」

イジツに来る前に見たあるモノを思い出してしまったのだ。決して悪意のある言い

方をしているつもりはない。イジツでならどう例えるのだろうかと考えていただけなのだから。

「ハルトからしたらあの男の大胸筋から腹筋にかけての線はどう例えるんだ？」
「飛行船の駐機所」

だつてあの大きな身体にムキムキに鍛え上げられたお腹とお胸。二隻は停留出来るんじゃないだろうか？ お胸の先に係留柱が立っていたし。

口元をプルプルと揺れ動かしている人物が一名。ツボにでも嵌ってしまったのだろうか。実際に私も聞いた時は笑いを堪えるのに必死だったから分かる。

幾度となく顔を上げたり下げたりして正気に戻ろうとするレオナさん。それでも最後に聞きたい事があるようでもう一か所について聞かれる。

「す、すまない。最後にもう一つだけ。あの男が逃げ出した際に見えた広背筋についてはどうなんだ？ 背中だけあつて先程より範囲も大きくても広いぞ？」

「アレと争ったレオナさんに言っても大丈夫なのか不安なのですが」

「大丈夫だ。いくら私でも何となくだがハルトが言おうとしている機体は察しが付く」
「ならそれでおしまいでもいいじゃないですか？」

「ハルトの口から聞いてみたいんだ」

真剣な目つきで私を見つめてくるポンコツお姉さん。どうしても口に出して欲しい

模様。それで気が済むならいいですけどね。

「背中に富嶽が宿つていそうな大きさでしたよね」

当然のように笑いを抑えつけようと必死になるレオナさん。顔は手で覆い隠され、体を折り曲げて耐えるその姿は、私の中の幻想が綺麗に消え去っていくように感じる。

コトブキの皆から話に聞けば、富嶽を相手に相当苦勞をされたようなのに。いや苦勞したからこそ笑い話に変換できるのだろうか。それは当人が知るのみである。

「お待ちせしました。本日は私ミントが担当をさせていた……レオナさん？ どうかされたのですか？」

「そつとしておいてください。昨日の今日で反省点があると自問自答をされていたようですから」

「はあ……分かりました。何かあれば気兼ねなく相談してくださいね」

「ああ……ありがとう、ミント……」

息も耐え耐えといった様子のレオナさんにどうしても不安を感じる様子のミントさん。

「（ハルトさん、本当に大丈夫なのでしょうか？）」

「（リツタさんから昨日の出来事について何か聞かれましたか？）」

「町に上半身裸で逃げ回る露出狂が現れたとの報告は受けましたが……」

「(あんな変態を見たのは初めてだったんですよ。それでびっくりしているだけかと)」

実際はあの後も話が続いてレオナさんはずっと笑い転げていただけなんですけどね。その疲れが出てるだけかと。

「レオナさん！ 元氣出してください！ もしよろしければ私が身に着けた実戦古武術をお教えますから！」

「は、はあ？ ありがとう？」

イヅルマに来てから混乱の種を撒いているのは、私ではないかと思いはじめてきた。

昨日伝えられたとおり、震電が置かれている格納庫にはそれなりの人数が集まっている。

議員と呼ばれているだけあって派閥とかの問題もあり人選を選ぶのも大変なんだろうなと他人事のように考えながら、彼等はジノリさんから話を伺っている。

「何遍も言うようじゃが、イサオうんぬん以前にこの震電は設計図にあるはずの正規の発動機とはまったく別物を積んでおるんじゃないぞ」

「私がアレシマで見た機体そのままの状態だな」

「だが！ 富嶽生産工場を襲撃したという友人からの証言ではイサオの機体そのままだ

と！」

「だ、そうだ。コトブキの隊長さん。濟まないが話を聞かせてもらえないかい？」

議長の言葉に頷き、口を開くレオナさん。

「私が見たイサオの搭乗していた震電は、エンジンが空冷でプロペラももう少し大きい。それに対してハルトが所有している震電は、エンジンが液冷に転換されており、後方部分に関しては大分様変わりをしている。イサオに落とされた私の言葉を信じるのならね」

皮肉を交えながらのご説明。

「それにイケスカ戦では震電は羽すらついていなかったんだ。そして奴の最後は欲望のままに穴の中へと突入して消え去った。そこまでが私が見てきた光景だ」

「だが、震電の形をした機体は目の前に存在する。多少の差異はあれどね」

「震電の設計図は、既にイケスカから流出したと耳にしておるんじゃないが？」

「ハルトや、そこについてお前さんが言うべきことはあるかい？」

「震電に関しては曾祖父が全てを知っているとは思いますが、確認をする場合は一度戻る必要がある為、事実確認も含めて数週間のお時間が必要となってしまう。ですが曾祖父はユーハングの人達がイジツに居た頃に付き合っていると聞いていました。もしかしたら……という推測程度の事しか私には分かりません」

各々思考に耽り格納庫はしばし静寂に包まれる。

「イサオが穴の向こうへと消えたのは誰もが知っている。だが奴は穴の先で生き延びていた！　そしてイサオは自分が戻る前に自身の震電を改修させ、自分の代わりに用意し自由博愛連合の残党と接触しようと思んでいる可能性だってある！」

「……その想像力は捨てがたい。が、それならば何故身代わりとなるハルトはわざわざ家族探しという名目で敵対していたラハマへ現れるのかい？　機体にある自博連のマークだって残すだろう？　今ではこんな洒落たパンケーキに食器まで描かれているというのに」

すみません。それは酔っ払い二人の犯行です。そしてかなり答えに近い回答をさせていて私の動悸が激しくなる。

「なによりも重要な事がある。もし百歩譲ってアンタの言い分が正しいとしても、この子にはガドールの女とオウニ商会がバッグについている。反イケスカ連合の中核にいた二人がだ。それさえも無視して決めつけようとするのなら、議長としてイヅルマを守る為に行動を起こさないとはいけなくなる。その意味は分かるね？」

その言葉に黙るしかない議員。あのお二人にご助力をいただけたという事はイヅツにおいて大変な強みであったのだと実感する。

「イヅルマの未来の為にはアンタのような発想も必要さね。その力を今後貸してはく

れんか?」

「もちろんです。イツルマの為であれば。震電の真相も諦めたわけではありませんが、今は飲み込んでおく事にします」

「ありがとうございます」

議会の人は各々思い耽ながらも格納庫を後にする。残された私たちに議長から挨拶があるようで残って欲しいと言われた。

「これで一先ずは震電に関する話に一区切りがついたかね。ハルトや、アンタが協力してくれたおかげで助かったよ」

「私もイツルマ議会からの誤解が解けて安心しております。これで再び家族を探しに行けると」

「イツルマからもう旅立つつもりかい?」

「出来ればこの町でも情報収集をしたいなど考えてはおりますが」

「ならこの騒動のお詫びと早期問題の解決に手を貸してくれたお礼をしなければならぬね」

「イエ、ケツコウデス」

「素直に受け取りな!」

もう政治家と関わるのはこりごりです。地味コツ作業に戻って本を読んだりユーイング工廠跡地に向かってお宝探しをしたいのです。目標が変わっている気もする。

「とはいえ、私の権限で出来ることは少ない。騒動の後という事もあり市民の目も厳しいからね」

「あの、本当に結構ですから」

「カナリア自警団の諸君。整備顧問のジノリ、整備員のハヤト。ハルトがこの町にいます。この子が困るようなことが起きたならば手助けをしてあげてはもらえないだろうか」

私の言葉は華麗にスルーされ、議長の頭が彼女らへ向けて下ろされる。正式な命令は出せず、けれど個人的なお願いをしたいという意志の表れからくる行動であろうか。

「もちろんです！ 我々カナリア自警団は困っている人を見捨てたりは致しません！」

「家族探しとなれば機体の整備も必要じゃろ。可能な限り力になってやるわい。なあハヤト」

其々の言葉に頷く人達。どうしよう、嬉しくて涙腺が緩んできた。二度も断つたのに。

「しばらくイヅルマに滞在するのなら、訓練の続きが出来るわね！」

「頭を怪我したのでちよつとだけお休みさせてください」

「……治つたらちやんと私に報告するのよ?」

頭部に怪我をした直後は危険だとシノさんも判断してくれたようだ。

「そういえばハルトさんは、ラハマでご家族の方を探すためにイツルマの図書館や本屋に行きたいと仰っていましたよね? 問題も無事解決したことですし、よければ案内をさせていただきますよ!」

「お姉様! 私も付いて行つてもよろしいでしょうか!」

「もちろんですよ、ミントさん! 本に詳しいミントさんが来てくれるなら百人力です!」

「ああ! お姉様が私を頼りにしてください! それだけで私は……!」

うっとりとした表情をしたまま虚空を見つめているミントさん。出会つてまだ期間
は短い分かることがある。団長であるアコさんが好きと。やはりラブの方だろうか。

「アコさん、ミントさんがどこかの世界へ旅立たれていますけれど」

「大丈夫ですよ、ハルトさん。何時ものことです!」

ニッコリという表現が正しいと言い切れるほどの素敵な笑顔を向けてくれるアコさん。個性的なナナリア自警団をまとめている団長である貴女が一番の……いや、これには触れてはならない気がする。やめておこう。

カナリア自警団 その11

私がイツルマへと到着し、震電に関する問題に一区切りがついてはや幾日。

アコさんとミントさんに案内をしていただいた図書館へ足を運び、イジツにおけるユーハングを求めて資料と日々睨めっこの毎日を送る。

「ハルトさん、こちらの本にもユーハングに纏わる事が書かれていましたよ」

「ありがとうございます、ミントさん」

日頃から図書館へ足を運ぶことも多いというミントさんは、私の探している本の内容を伝えると、どこからともなく本を見つけ出して、こうして運んできてくださる。

その中にはイジツの人が記載したのであろう、ユーハングの姿や形、情景が本を通して伝わってくる。

聞いた事のある地名、まだ知らぬ地名、それら事柄をミントさんやレオナさんに質問をしながら用意した紙に記載していくことが私の近況である。

「ハルトさんはユーハングの文字や意味が理解できるのですね」

「ハルトをイツルマへ向かうように仕向けたアレンという男が研究者でな。あいつの相

手を出れるほどユーハングに精通しているぞ」

一部の人達はもちろん知っている。私はそのユーハングと呼ばれている穴の先からやってきたということ。

それ以外の人達には家族の影響で理解出来るようになったと通している。最近とても嘘や誤魔化しが上手になってきた自分の事が分かるのがなんともはや。

「あ、それってウキヲエですよね？」

「ミントさんはウキヲエにご興味が？」

「はい。私も元々絵を描いたりすることもあり、興味があります！」

「よければ一緒に読んでみませんか？ 文字の部分を朗読する程度しか出来ませんけど」

「いいんですか!? ありがとうございます！」

私の隣の席に座り、両手を膝に置いて行儀良くと座るミントさん。

紫色の髪を一つに束ねて三つ編みに。頭には小さな帽子がちよこんと乗せられ、髪と同じ色の半纏を羽織っている。

そこへ手袋やタイツを身に着けているせいも、シノさんやエルさん以上に肌色が見えない程である。

シノさんやリツタさんによると、この可愛らしい見た目で熊を倒すことが出来るほど

の古武術の使い手であるという。イジツって毒吐いたり爆発したりする生物以外いたんだ。しかし熊をも倒すつてイジツの人は半端ない。

ミントさんが持つてきてくれた本は多少ながら埃を纏っていているが、既に払ったような形跡が見受けられる。

よく見れば人の手のような形、隣にいるミントさんの手を見つめれば白い手袋が少しばかり汚れていた。

「すみません。手袋を汚させてしまったみたいで」

「気にしないでください！　なんかこう私にもビビツとを感じるものがあつて自分を止められなくて！」

髪で片目が隠れている状態であるが、照れたように微笑んでいるのは分かる。

そのお気遣いに甘えるように改めて表紙に書かれている文字を読む。

「月刊浮世絵」

「ゲツカン？　ウキヨエ？」

馴染みがあるようで無いような、といったやや困り声で復唱するミントさん。

表紙全体を見直してみると、隅っこに凄くお安いお値段が書かれている。初版が安い連載誌か何かだろうか……。

ページを捲ると私には見慣れた色合いが目映る。年数のせいなのか保存状態が悪

かったのかは分からないが、掠れてはいるもののカラーページには浮世絵が掲載されている。

「この色合い！ ユーハングとおぼしき文字！ 極まれに流通されているというウキヲエを紹介する本ではないでしょうか!？」

机に両手を置いて身を乗り出す勢いで食いついてきた人がいる。頬や鼻先に触れるミントさんの髪がくすぐったい。あと凄く幸せな香りがするけれど我慢の子。

興味津々なのが良く分かったので、本の半分以上をミントさんが座る席の方へと移動させる。むしろそうしないと私が色々と困る。

「すすすすみません！ 興奮の余り己を乱してしまいました!！」

「これってそんなにレアな本なのですか?」

「もちろんです! 何でもコレクターと呼ばれる方々が血眼で探していると噂されるぐらいですから! ああまさか見る機会が訪れるなんて……」

両手を析るように組み、新しい世界へ旅立とうとするミントさん。思い込んだら一直線の姿は多少ではあるが羨ましく感じる。

「私はウキヲエについて知識が無いものですが、流行りの画家さんとかはいらっしゃるのです?」

「ホクサイやクニシゲの作品の影響で少しずつではありますがウキヲエ画家を志す人達

がいらっしゃいます。ですが依然としてホクサイとクニシゲの作品と評価がとても高く人気です。ただそれ故に作品そのものがとても高額で取引をされていて、一般人では作品そのものをお目にかかる機会が中々無いのが現状ですね……」

肩を落とすミントさん。取引をしている資産家達が本当にその作品が欲しくて購入している事を切に願う他ない。日本……ユーハンク全体で考えてしまうと、投資対象として見なされている部分もあるから。

しかしながらイジツに存在するホクサイとクニシゲの作品とは一体なんぞや？まさか現物が穴を通じて降ってきた？むしろ当時の日本軍のエライ人達が持ち込んで来た物とか？どこでも日本を作りたがる人達に頭が痛くなる。

「ハルトさん！……ここは何て書かれているんですか!？」

「えーっと、ホクサイは改名をする事でも有名であり、三十回以上も名前を変えたとも言われている」

「さ、三十回もですか……」

「二芸に長けた方をする事は分かりませんね」

そのページには北斎の名を問われれば頭に浮かぶであろう、大波が印象的の神奈川沖浪裏と書かれた絵が掲載されている。

これ程の絵が二百年以上も前の人が描いた事への驚きと、現存していたという衝撃。

日本だってその間に色々な事があったのにな。

「これはイジツから消えてしまった海の絵ですよ？　海とはこんなに荒れているものなのでしょうか……？」

「絵なので多少は誇張されている面もありますが、強風が原因で海が荒れている時はこういう現象も起こるみたいですよ」

「ハルトさんは海の事についても詳しいんですね。まるで見た事があるように語られていらつしやいますし」

「残念ながらここに書かれている文字を翻訳しただけですよ」

勿論、そんな事は書かれていない。イジツで暮らすユーハングに詳しい人間を演じるのは難しい。

「ハルト、私からも質問してもいいか？」

「かまいませんよ。どうかされましたか？」

「その絵に描かれているユーハングの文字にどうしても気になる部分があつてな……」

それは作品の題名にも書かれている『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』この富嶽の部分が気になるのではないだろうか。文字の頭に棒が無い方の富嶽ですよ。

「富嶽の文字が気になりますか？」

「まああんな事があればな」

「ユー・ハングで一番有名な山の別名っていうだけですよ。なので背中に富嶽が宿つているといふ表現もあながち間違いでないかと」

思い出し笑いを必死に堪えているレオナさんの口元がヒクヒクと動き始めた。図書館なので我慢してくださいね。

気を取り直して次のページ……あ、これ駄目な奴だ。ミントさんの目に止まる前に閉じようとした瞬間、手首を握られる。いくら何でも俊敏すぎやしない？

「どうして急に本を閉じようとされたのですか？」

表情は笑顔なれど、瞳の色が先程より輝きが失せ、発せられた声は低い。

北斎について忘れていた事がある。この人は風景画から春画まで何でも描く人であつたという事を。

そして『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』の次に紹介されていた浮世絵は『喜能会之故真通』いわゆるところのタコと女体の合わせ技。月刊浮世絵とかいうタイトルの癖に初回からフルスロットルで突っ走ってやがる。

今も私の手首を握るミントさん。その細指からは到底考えられない力が込められ始めた。もしかして古武術とかあまり関係ない、力こそパワー系の方？

「ミントさんに質問です。絵を描かれる際に裸を主題にして書かれた事はありますか？」

「へっ!? ああああの! その! あ……あります……」

「次のページにはホクサイが描いた春画と呼ばれる絵が掲載されていたので、図書館で見ても大丈夫なものなのかと不安になり閉じようとしたのです」

「あ……なるほど! つてすみません! 私つたらまた先走ってしまいました! 手首、大丈夫ですか……?」

クツキリとミントさんの指の後が残り凹んだままではあるが、誤解を招くような行動を取った私にも責任がある。おあいこという事にしてしまおう。

「大丈夫ですよ。ミントさんもそういった絵を描かれた経験があるのですね」

「なんていいいますか……ほとぼしる情熱と勢いに任せたらウキヲエとはまったく別の物が出来上がってしまい、どうしたら良いものかと」

「やっぱリアコさんですか?」

「なんで分かるんですか!? お姉様には絶対に内緒にしてください! お願いします!」

あちらこちらと空を切っていた両手が目の前で合わされてお願いのポーズ。日頃の行動を見ていれば分からない方が難しいと思う。

「たまたま聞いてしまっただけなので誰かに言いふらしたりはしませんよ」

「よかったあ……あの絵がお姉様にバレてしまったら何て言われてしまうか想像すると

「夜も寝れなくなってしまうところでした」

「話を戻しますが、つまるところそういう絵が次のページに掲載されているのですが……どうします?」

「見ます! こんな貴重な機会を! ましては文章まで理解出来るタイミングはハルトさんがいらつしやる今しかありません!」

「本当に? 本当にいいの?」

「このミント、一度言った言葉を取り消すようなことは決して致しません!」
「ならば仕方なし。とくとご覧あれ」

ミントさん自身でページを捲るように催促する。警告はしたよ? たくさんしたからね? 知らないよ?

私の思いとは裏腹にミントさん慎重にページの端を掴み、開く。やあ! タコと女体の合わせ技だよ!

この場もミントさんの身体も凍る様に硬直する。しばらくした後に壊れかけたゼンマイ人形の如くこちらへ顔を向けてくる。私、沢山警告したよ。

「いやああああ!!」

図書館に響くミントさんの声。その瞬間、身体に衝撃が走る。何をされたのかは分からないが、私の意識を一瞬で刈り取る何か放たれた事は確かだ。

「図書館の方から抗議があり、暫くの間、両名は施設の利用禁止との通達を受けましたよ」

何処からともなくエルさんの声が聞こえる。

その声に導かれるように私の意識がゆっくりと戻りつつあるのが分かる。

先程まで見慣れない景色の中で棒立ちしている自分がいて、よく知る顔の人達があちらへ戻れと手振り身振りで追い返そうとしていた。戻ってもイジツつていう別世界に居るんだけどね。

目を開けて周囲を見渡すと、どうやら自警団の詰所に居るようだ。

ヘレンさんの如くソファに倒していた身体を起こすと、ミントさんからの謝罪の嵐がやってくる。

「ごめんなさい！ 余りにも衝撃な絵だったものでつい！」

「つい、で殴られた訳ですか」

「丁度、良い場所にいらっしやっただけで」

「そんなに衝撃的な絵だったのかしら？」

気になる様子の子のエルさんがお伺いを立てる様に質問をしてくる。

「えっと！ その！ あれを言葉で表現するのはちよつと……」

「ユー・ハングに生息しているタコっていう海の生き物が女性に襲い掛かっている絵ですよ」

「ハルトさん!!」

思い出したのか、顔が赤くなるミントさん。逆に興味津々なエルさん。この対照的な反応はなんだ？

「そのタコって生物はどうやって襲い掛かっていたのかしら？」

「八本の足を器用に使い、女性の身体に絡みついて口を無理矢理……」

「もう！ それ以上は言っては駄目です！」

ミントさんの両手が私の口を覆うようにして塞ぐ。図書館の一件を気にしているのだろうか、重ねるように合わせた手から伝わる力はとても柔らかく押され、喋れなくされてしまう。

レオナさんの呆れ顔、エルさんの物憂げな表情は一体何でしょうか？

「ふう……海の生き物ですら想像上で私に刺激的な思いをさせてくれるというのに、現実にいる誘拐犯たちのだらしなさが情けないわ」

正直、何を言っているのかさっぱり分からないが、理解した事がある。

イジツはヤベーやつしかいないのではないか？ この過酷な環境下で生き残りを賭け、毎日が空戦のエンジンジョイでエキサイティングな日々を送っているのだから。むしろ

私が異端者。分かつてた。

月刊浮世絵に書かれていた文章が頭を過る。

一期は夢よ、ただ狂え

閑吟集の一節。ここだけをくり抜けば『人生は一時の夢、ならば心奪われるものに打ち込め』だろうか。意識しすぎだろうけれど。

イジツに当てはめる言葉としてはピツタリではないだろうか？ 例えヤベーやつしかいないとしても、皆何かしらの目的や目標を持って生きているのだから。

そう考えるとユーリア議員は少し変わった道を歩んでいる事になる。衰退の一途を辿るイジツをこのままにしておけないという思想から起こす行動は、周りを敵だらけにする。

だが、それでも行動を止めないのはユーリア議員がイジツで最も夢を見ている方という事なのだろう。

その夢に私という存在が少しでも力になればと思う事は不自然だろうか。お世話になっているカナリア自警団の皆様に対しても。

器用に身体をくねらせているエルさんを見つめながら、そう思うのであった。

カナリア自警団 その12

「ハルト、話がある」

「？」

イツルマへ辿り着いてから行われる様になった朝食時の定例会議。いつものように談話中の最中、レオナさんの口から改めて話を変えようとすると素振りを見せる。

口に物を含んでいたため、首を傾げるようにして応える。

「どうかしましたか、レオナさん？」

「震電の件とハルトの護衛についてなんだが……」

「な、何か問題でもありませんか!? ミントさんに吹き飛ばされたのを止められなかったとか!？」

「あれを対処するのは不可能だ。読んでいたウーミのページが風圧で捲れた程だぞ?」

そんな一撃を食らって私は生きてたのか。ミントさんが直前で手加減してくれたとか? それとも緊急処置を行って蘇ったとか。それっぽい気がしてきた。

「一応、見せる前に警告をしていたんですけど」

「彼女の想像を超えてしまったんだろうな。芸術とはいえ少しばかり過激な絵だったか

ら」

薄く頬を染め、視線を逸らしながらそう答えるレオナさん。見たんですね、あの合わせ技を。咳払いをして場を仕切り直す。

「ともかく、震電については一段落つき、ハルトの安全もあの時以外は特に問題ないと判断した」

「レオナさんの許可なく一人で町を歩き回るなどとも言われていましたし」

「うむ、護衛をすると一言で表しても護衛される側の協力も必要不可欠だ。その点についてハルトは護衛対象として守りやすく、肝が冷えるような事は……」

笑顔で語りかけてきたレオナさんが瞼を閉じ、沈黙する。私の予想としては、議会で気絶した時の事まで考えていると思うんだ。

イズルマへ来て二回も気絶して、その両方が味方とも呼べる人達が原因という。

「流石に同士討ちまでは計算できないと思いますが。相手が相手ですし」

「冷静に考えていると、私は護衛任務を遂行出来たと言えるのだろうか……?」

「出来てますから、そこまで深く考えていると拗らせてしまいますよ?」

「す、すまん。ザラにもよく注意されてしまうのだが、一度考え始めると止まらなくてな……」

「なら考える前に、私に伝えたい事から始めましょうよ」

「その事なんだが……カナリア自警団が信用できる相手だと私が判断し、ハルトの身の安全を確保出来た状態であり、イツルマ滞在が予定よりも伸びそうな場合は報告の為に一時帰還せよと、マダムから事前通達されていてだな」

「レオナさんの話を聞いて、気絶した部分をマダムがどう捉えるか、ですかね」

「……やはりまだ私が離れるわけにはいかない！ マダムには失礼だが郵便で報告書を提出するでしょう！ 私の友人に郵便配達員をしている双子がいてな、しばらくすればイツルマへ訪れると話を」

「大丈夫ですから！ 大丈夫ですって！ マダムなら私の行動に頭を痛めるだけでしょうから！」

帰る、帰らないの謎の押し付け合いが発生し、騒がしい朝の始まりを告げた時、何時もの様にカナリア自警団からお迎えがやってきた。

「おはよう。ごはん、食べないの？」

本日の担当はヘレンさんの様だ……が、お腹から盛大な音を立てながらテーブルの上にある食事を眺めている。

「うめー」

「おかわりが必要でしたら言ってください。追加注文しますので」

「まじか」

まじです。元々イヅルマでの滞在費用は全て議会が支払ってくれる事になっている。レオナさんに支払うべき費用はマダムのご厚意で割引が効いている。お給料から天引きされるんだけどね。

第二羽衣丸が建造中であり運輸業が再開出来ていない事と、コトブキ飛行隊が隊としての活動がまだ限定的な事が理由だそうさ。

本来ならば隼の修理も部品集めやらで時間がかかるところを、予備機を駆使してまでも私が通ってきた穴の調査へやってきたそうさ。

どうやら私がイジツへやって来たことが、様々な人達の予定を狂わせた模様。一人一人が現れただけで、本人の知らぬところで大騒ぎ。

「ハルト、おかわり」

「あい」

「朝からよく食べるな。いや、決して悪い事ではないのだが、普段は何を食べているんだ？」

「コッペパンとミルク」

「そ、そうか……。無礼なことを聞いてしまったな。ハルトの言うとおりの好きだけ食べてくれ」

「さんきゅー」

それはきつと勘違い。自警団で働いているのだから食べるのに困ることは早々無いとは思うのだけれど。

用心棒として働くのと、自警団としてお勤めするのでは、やはり感覚が違うのだろうか。

高給取りなのは間違いない。用心棒だと思っけれど、機体そのものから弾薬、燃料に至るまでの事はよく分からない。

自警団は全て町が負担しているんだろうなとは思っ。いわゆるお役所勤めのはずだから。

「ごちそうさま〜」

お腹一杯と満足そうな笑顔と言葉。しかしながらコッペパンとミルクだけで、そこまですでワガママに育つのだろうか。

いけない、最近では自分のペースが崩されている気がする。カナリア自警団の皆さんと出会った辺りからだろうか。慢心せず精進していかなければ。

「それじゃいこっか〜」

「あ、その事なのですが、レオナさんとの話がまだ終わっていません」

「あれ、帰るんですよ?」

「へ?」

渋るレオナさんをなんとか説得して駐機場まで足を運ぶ。ヘレンさんから話を伺えば、レオナさんは既にアコさんへ話を通してあり、私の身はカナリア自警団が責任をもってお守りすると返事を頂いていたそうだ。

そのため、本日最初に訪れる場所は詰所ではなく駐機場である事もヘレンさんに伝えられていた。知らぬは私だけなり。

「ハルト、大丈夫だぞ。アコにきちんと説明をしておいたからな。それでも心配であればやはり私がのこ」

「大丈夫です! こうして今もヘレンさんに護衛して頂いてますから!」
「うえーい」

その返事は逆効果ではないだろうか。見事にレオナさんは心配そうな顔でこちらを見つめたまま立ち尽くしている。

失礼と一言断りを入れて、体の向きを変えたあとに背中を押す。そうしないと何時まで経っても飛び立つ準備をしなさそうに見えたから。

「可能な限り早く戻る。その間、ハルトの事は頼んだぞ?」

「おっけー」

「い、いってらっしゃい。大人しくしていただきますので」

尚も不安げな顔をこちらに見せるレオナさん。図書館へも行けなくなりましたし、詰所で調べ物の整理をしていますから。

私とは比べ物にならないぐらい綺麗に離陸をして大空へと舞い戻る隼の姿。こうして見送ると一抹の寂しさを覚えるのだから自分でも不思議である。

「それじゃ、いこっかー」

詰所に向かうものだと思えば違う方向へ歩みを進めるヘレンさん。

「何処へ行かれるつもりで？」

「ハルトがあたしの傍からはなれなければいいんだよねー」

「それは間違いないのですが……何処へ？」

「あたしのいえー」

「は？ 家？ いえーい？」

カナリア自警団 その13

レオナさんが搭乗する俎を見送った後、ヘレンさんが突拍子もないことを言い出した。

家。それは帰るべき場所であり、大半の人達にとつて心安らぐ場所でもある。今からそこへ行くと、綺麗なおべべについている口から放たれたわけで。

慢心するなど自分に言い聞かせたばかりだというのに、ヘレンさんの何気ない一言で心が揺さぶられる。

私も人の子ですし、生きている以上は色々とあるわけにして『終電、終わっちゃったね』的な問題を提出されれば時刻表を取り出して『まだ間に合いますよ』と返事をするタイプでありますし。

自分でも何を言っているのか分からない程、混乱の渦に陥れる訳だが、ヘレンさんの向かう先は来た道ではなく隣にある格納庫。あ、あれ？

後ろを大人しく付いて行くと、そこにあるのはカナリア自警団の塗装が施された紫電とイズルマ仕様の赤とんぼ。ジノリさんとハヤトさんが二人で準備をしている姿が見受けられる。

未だ状況が理解出来ない。家に向かうはずなのに機体が準備されている。それも二機。どういふことなのだろうか？

「おいすー」

「相変わらずマイペースな娘じゃの。そっちは口を開けてどうしたんじゃ？」

「さあ？ いえにいこーって誘っただけだよ？」

「……それ以外の事をちゃんと伝えたか？」

「んーにゃ」

私の目の前にいる二人から深い溜息が聞こえる。その反応が正しいよね？ 私の反応は間違っていないよね？

「いつも思うけどよ！ お前は どうしてそんなに言葉足らずなんだよ！」

「なんでー？ ハヤトには通じてるじゃん」

「通じてない！ ちゃんと人に伝わるように喋れよ！」

「むうー、ハヤトだつて私と目を合わせて喋れないくせに」

抗議をするように近づいて行くヘレンさん。心なしか後ずさりを始めるハヤトさん。

「やめろお！ それ以上俺に近づくなあ！」

「なんでー？」

「俺が入院中に傷口広げたり、男の純情を弄ぶ悪魔だからだよ！」

「そんなこと、あつたっけ？」

「つい最近の事じゃないか！ 知らぬふりして近づくなよ！」

既にハヤトさんは壁際まで追い詰められている。それでも尚近づくとヘレンさん。何をなさるおつもりだろうか？

「あ……あ……」

「ようやく、目を合わせてくれたね」

そう言つて微笑むヘレンさん。それとは対照的なハヤトさん。逸らしていた視線が合うほどの距離になれば自然と背丈の問題も発生し、当然ながらまだ少年というべきハヤトさんの視線は一転に集中するわけで……。

「お、大きい……もの……」

「男の人つて、みんな好きだよねーこれ」

ヘレンさんが両腕を組む。ただそれだけなのにあの太陽は形を変える。服の上からでも十分すぎるぐらいに。思考が飛び始めている私にも効くからやめて。

「お……おまえなんか！ おまえなんかあ!! うわあああん!! ドスケベー!!」

自我を取り戻した瞬間、暴言なのか真実なのか判定し難い泣き言を叫びながらハヤトさんは格納庫から泣いて出て行ってしまった。その気持ち、凄く分かる。

「また逃げちゃった」

「近寄り過ぎたのでは？」

「むう……話をしたかっただけなのに」

「無理を言うな、まだ子供じゃぞ？　あまりからかうもんじゃない」

「へーい」

幼き少年と青年に大ダメージを与えるヘレンさん。今度から親しみを込めてハヤト君とでも呼んでみようか。お互いに共通する悩みを抱えているわけだし。

再びジノリさんの溜息が聞こえ、こちらに話を振り始めた。

「おまえさんも議会で酷い目に遭ったばかりだろうに」

「半ば不慮の事故みたいなものですから」

「当たった箇所は大丈夫なのか？」

破損した木槌が飛んできた場所へ手を伸ばし、労わる様に撫でる。当初はタンコブが出来上がりそれなりに痛みもあつたが、今ではシノさんと飛行訓練を再開出来ている。眩暈らしき現象も無いので大丈夫だ。

「おかげさまで腫れも引いて痛みも無くなりました」

「それはよかったの。あの娘っ子もおまえさんを鍛えるのが楽しみになってる様じゃからな」

教えを乞う側としては、常にシノさんの罵倒を食らう訳でして。でもそのおかげか少

しずつ機体进行操作するという感覚を身に着けている感じはする。

「ボヤいてたぞ。おまえさんの操縦は歯車がかみ合わない時計みたいだよ。可能性を秘めている箇所があるにも関わらず、それを發揮出来るような操縦技術を持ち合わせていないとな」

「一撃離脱が前提の機体でしたので、それに合う戦法ぐらいしか教えてもらえる時間が無かったとも言えます」

「なかなかどうして、おまえさんも急ぎの身か？」

「時間制限がある事は確かです」

詳細はアレン頼みになってしまいが、少なくとも一ヶ月は猶予がある。一ヶ月しか無いとも言える。

そう考えるとイヅルマで知る事が出来た内容の整理が終わったら、一度ラハマへ帰るのが正解だろうか。その際にはお世話になった方々へ挨拶に行かないと。

「考えごと、終わった？」

「うわあ!!? びっくりした!」

「ハルトにまで驚かれた」

「いやいや! こんな間近に綺麗な顔があれば誰だってびっくりしますって!」

「ほむう」

何事も無かったように後ろへ下がるヘレンさん。私の心臓が激しく動いているのが分かる。きつと顔も赤くなっているのだろう。

「はあ……そろそろ行かなくていいのか？」

「あ、ごめん。行くね」

「気を付けて行けよ、娘は大丈夫だろうが、おまえさんは特にな」

「ありがとうございます。行つてきますね。つて家ですよね？」

「飛んだらちゃんと伝えるから」

「お、お願いしますよ、ヘレンさん」

ヘレンさんは紫電に搭乗し、私は赤とんぼへ乗り込む。後ろに誰もいない状態で飛ぶのは初めてだ。シノさんの罵倒……もとい激励がどれだけ励みになっていたかよく分かる。

イツルマから飛び立ち、紫電の後ろを赤とんぼで必死に追いかける。シノさんの訓練によりイツルマへ来る前よりは良くなったと思いたい。機体性能に差がある二機の間隔が一定を保たれているのは、ヘレンさんの巧みな操縦によるものだろう。

『すびい〜』

「寝てるんかい!? 起きて！ 起きてください！ ヘレンさん！」

なんで飛ばしながら寝れるのさ!!　そもそも家って何なの?　自宅なの?　実家なの?　せめてそこだけでも教えて!

『んあ、もう着いた?』

「知らんがな!　というよりもなんで私を家に連れて行こうとしているんですか?」

『配達があつたんだよね』

「配達?　何かお届け物でも?」

『んーにや、お父さんが牛乳屋なんだー』

「なるほど、それで?」

『護衛の仕事と重なっちゃったからさ、手伝って?　ハルト』

つまり、も何もそのままではないか。配達の手伝いをする為にご実家に向かっている、それに私も手伝って事だよね。

「それは構わないのですが、私に出来る事なんですか?」

『大丈夫だよ。シノから訓練を受けているでしょ?　日に日に上達している姿を見てたから』

何時の間に。自分でもイツルマへ来る前よりは多少はマシになったとは実感している。更に地図の読み方や、自分のいる位置を知る為に地上の目印などを教えて貰えた事によって、行動範囲は広がったと言えるだろう。イツルマ周辺限定で。

「でも空賊が出てきたら一巻の終わりだと思えますけど」

『最近イヅルマも色々あったからね、そんな状況で好き好んで現れる可能性は低いと思う。それに』

「それに？」

『危なくなったらあたしを呼んで。直ぐ駆けつけるからさー』

ハヤト君、君の言う通り、この人は悪魔だと私も思うよ。こんなに魅力的で頼りになるお姉さんが同じ人間だとは思えないもの。

「ただいま」

「おう、遅かったじゃ……そいつは誰だ？」

「配達を手伝ってくれる、ハルトだよ」

「お世話になります。ハルトと申します」

サングラスを掛け、髭を蓄えるいかついお顔。正直怖い。それは正解だと直ぐに分かる。

「お前はヘレンの何だ？」

「は？ ああ、えつとヘレンさんには護衛をして頂く立場であり、私は護衛対象とでも言えбайいのでしょうか」

「護衛？ お前はヘレンに守られる様な奴なのか？」

「はい。お世話になっております」

「お父さん、ハルトは」

「ヘレン、居間にお前の好物を用意しておいた。好きに食べていいぞ」

「お父さん、だいすきー」

ヘレンさん！ ちよつと待つて！ なんかお父様が物凄く誤解をされている気がするんだ！ それを解くためにも居て……もさらに誤解を生みそうだ。

「これでゆつくりと喋れるな。何をしに来た？」

「ヘレンさんが最初に言われましたように、配達のお」

「俺の娘を気安く名前で呼ぶとは、良い度胸をしている」

「きちんと敬称を付けているのですが」

「ヘレンも立派な大人だ。親がどの言うつもりはない。だが惚れた女の後ろに隠れているような奴にくれてやるつもりは無い」

「ちよ!? 違います！ そういう関係ではございません！」

「母親によく似て育ったヘレンの傍にいて何の関係もないだと……。今度は俺に対しての挑戦状か、度胸だけは一人前のようなだな。久しぶりに相手をしてやる」

「へ、ヘレンさん!! お父様を止めてください!!」

「貴様にお義父さんと言われる筋合いはない!!」

見た目渋いオヤジなのに、中身は娘にデレデレなオヤジじゃないか! 気が付けば今から決闘を始めんと言わんばかりに覇気を醸し出すお父様。やべえ、イジツつてやべえ。振り幅に中間地点が無く、片側ずつしか存在しない。

「お父さん、違うつてば」

私を救ってくれる可能性を秘めた悪魔は、口に物を頬張ったまま再び現れる。戻ってきてくれただけでも感謝をすべきだ。そう思い込む。

「自警団の仕事でハルトを護衛することになって、今日は私が担当だったんだよ」

「……仕事? カナリア自警団のか?」

「そつ、ちゃんと団長から許可を貰って連れて来ているんだよ。しかも配達の手伝いまでしてくれるつてさー」

ヘレンさんの言葉によろやく事態を把握してくれたのか、若干俯きつつサングラスの位置を調節している。尚、配達の手伝いをする事になったのを知るのはつい先程の様。

「あ、あの」

「悪い、誤解をしていた様だ。許してくれ」

「いえ、私もきちんと説明をすべきでした。あらぬ誤解を招いてしまい申し訳」

姿勢を正して頭を下げる。愛する娘さんの為とはいえ少々過剰とも思える言動。そこから推測する邪な考え。それも含めての謝罪である。

「コツペパン、うめー」

全ての元凶は、私たちを見つめながらもお腹を満たしていた。

「そうか、議会の連中に呼び出されてイツルマへやつてきたのか」

「はい、ですがそちらは一先ず落ち着いたので、今度は私個人の用事を済ませようと思いい、カナリア自警団の皆さんには引き続き護衛をお願いします」

落ち着きを取り戻したヘレンさんのお父様、ジョージさんにこれまでの経緯を伝える。

「お前さんも人探しか……」

「もっ？」

「いや、忘れてくれ。こちらの都合だ」

「団長のお父さんの事なら、もう知ってるよ」

「えっと、行方不明になられた原因が、穴へと進入したのではないかと推測されている話。で合っていますか？」

「……驚いたな、そこまで聞いていたのか」

「護衛として来て頂いていたコトブキ飛行隊のレオナさんがいらした事もあつての説明だと思えます。アルバート部長から一通りの事は」

「コトブキ、それも隊長を務めている人物が護衛とはな。いや、震電が絡めば不思議なことではないか」

「ハルトはユーハングに詳しいみたいだからね」

「なら、穴について何か知っているのか？」

「通つてきました。突入から脱出まで時間差がありましたよ。こんなこと言える訳がない。実際、日本へ帰る為にはアレンの助力が必要不可欠だ。

「私の友人であれば。ですが彼曰く、必ずしも穴はユーハングに繋がるといふ訳では無さそうです」

「アコの父親、トキオがユーハング以外の世界に辿り着いた可能性もあるということか」

「はい。ただし机上の空論であるとも。実際に飛び込んだのは」

「アイツとイサオのみ、か」

「ジョージさんの言葉に頷く。そのイサオさんは元氣一杯、日本を満喫していますけどね。」

でもそう考えると、トキオさんが穴へと突入し、日本へ辿り着いていたら海上でも無い限りは生きていないかと思う。少なくとも二人は片道切符でも穴の先へ辿

り着けたのだから。

「お父さん」

「どうした？ ヘレン」

「無茶だけは、しちやだめだよ」

普段と同じ声、同じ姿にも関わらず、ヘレンさんの言葉には重みを感じさせるものがあつた。

カナリア自警団 その14

『ありがとね、ハルト』

「いえ、お力になれたのなら幸いです」

『なったなった。もうちよい力を抜いてもいいと思うよー』

「ヘレンさんはもう少し覇気を出された方が良いかと」

『よく言われる〜』

一晩明け、あの時のヘレンさんとは打って変わっていつも通りの様子だ。気の抜けるような声、それでもどこか頼りになる、私の知っているヘレンさんの姿だ。

あの瞬間は冷や汗が止まらなかった。過去に何かあったのだと思う。そうでなければあの重く、そして悲しみが含まれた言葉を発する必要はないのだから。

ヘレンさんの言葉と共に、辺りの空気が静まり返る。

親子の間で何があったか分からない。ただ親が子を想う気持ちがあり、子が親を想うところもある。

この空気を打ち払う為にも、本来の目的についてお二人に聞こう。

「配達はどうするんですか？」

「あ、忘れてた」

「まずはそれを終わらせてからだな」

そこからは淡々と作業が進み、私の搭乗してきた赤とんぼの後部座席にはミルクが積まれる。

『零すなよ？』片方だけ器用に口角を軽く上げるその表情、チョイ悪オヤジのように笑みを浮かべせながらそう伝えてくるジョージさんに、ヘレンさんは『いつもシノを乗せてるから大丈夫だよ』と。

それはシノさんに絶対に言わないでください。何故か私の訓練が三割増しで厳しくなる未来が見えてしまうので。

ヘレンさんと途中まで共に飛行し、私の担当する配達先が見えてきたところで一旦お別れ。

『おわつたら、すぐ戻るねー』返事をすれば、私と飛行していた時とは目に見えて違う速度で空を飛んで行く。

赤とんぼに積まれたミルクを死ぬような思いで引き下ろし、ヘレンさんが戻るまで配達先のご自宅でお邪魔させて頂ける事になった。

「オマエさん、見かけん顔しちよるな？」

「今日はヘレンさんからのお願いでお手伝いをさせて頂いています」

「それじゃ断れんわな！ あの娘子はアレがこうで！ ココがこう！ と来たもんじゃからな！」

ガハハと年齢を感じさせないご老人の高笑い。どうやらヘレンさんの魅力は年代関係ないようだ。儂も、もし若ければ。その言葉はご老人の後ろにいらした奥様に聞かれていたようで、止める暇も無く良い音が周囲に響き渡る。

目が合った奥様とはカラ笑いで済ませた。少しずつイジツに馴染んできたのではないのだろうか。女性を怒らせてはいけないのは、世界が変わっても共通。

「ただいまー」

「ただいまです」

「おう、お帰り。ご苦労さん」

ジョージさんから手渡されたのは牛乳。緊張で喉が渴いていた事すら忘れていた。ありがたく受け取り、いただきます。

ゆつくりと飲む私を尻目に、ヘレンさんは一気飲みで白髭を付けながらゲップをしている。なんてチグハグな人だろうか。

「あたしは寝るー」

「ゆっくり寝ろよ」

「つて事は本日はこちらで一泊ですか？」

「日も暮れ始めた。飯と寝る場所ぐらいは用意してやるから泊まっていけ」

「ありがとうございます。甘えさせて頂きます」

泊めさせて頂けるのならは無理する必要もない。時間制限のある旅とはいえ、ご厚意を無下に扱う程の急ぎではない。

「ヘレンがいない間に聞きたい事がある」

「私に答えられる事であればなんなりと」

夕食を頂き、一息入れる時間。ヘレンさんは寝たまま起きてこない。

「穴とは一体なんだ？」

「哲学を振られましても分からないとしか」

「なら、穴はなぜ突然現れる？」

「分かりません。人為的に開かれた事はないようですが、自然発生、災害。どちらにせよ人に来る事は、穴が出現した際に消滅させる事が可能だという事実のみかと」

天井を見つめるジョージさん。思うところありけり。

「穴を見つけて探しに行きたいのですか？」

「……」

「私からも質問をしてもいいでしょうか？」

「なんだ？」

「ジョージさんは、アコさんのお父様とはどういったご関係なんですか？」

「そこは説明されていなかったのか。聞いても余り面白い話じゃないぞ」

イカルガ自警団。イツルマにおいて少数精鋭のエリート部隊として名高いという話から始まり。

その団長にしてアコさんのお父様である、トキオさん。

副団長にしてヘレンさんのお父様である、ジョージさん。

隊員ながらも撃墜数トップのアコさんのお母様である、ミヤコさん。

「そして元パロット社の社長にして、クロサギ自警団の団長だったウタカだ。あいつも全部一人で背負い込みやがって」

「お話を聞かせて頂きありがとうございます。ようやく散らばった点が線で結ばれた気がします」

「トキオ以外は終わった事さ、気にするな」

立ち上がり、戸棚から何かを取り出したあと、私に差し出す。そこには一枚の写真、そしてイカルガ自警団とおぼしき三人の姿が写っている……が。

「逆光のせいもあって良く分かりません」

「俺が持っている写真はそれだけだ。顔が知りたければミヤコ……いや、確かアコが持っていたはずだ」

「なるほど、でも見せて欲しいとは言いつらいですね。知ったところで……という面もありますし」

「そんな事で傷つくような娘じゃない。機会があれば聞いてみればいい。ヘレンがここまでお節介を焼く程の人間なら大丈夫さ」

様子を見ながら、大丈夫そうであれば話を振ってみようかな。私もお節介なんだけど、お節介なんだけれど、日本へ戻れた時にもしかしたらつていう考えが振り切れない。ただ、その場合は絶対に私の事を知られてはならない。レオナさんからも『希望は時として人を傷つける』と言われている。

私は一体どうしたんだろうか？ こんなにも人と関わり合いを持つようになるとは。

『とーちやく〜』

「ふう、お疲れ様でした」

イツルマへと無事に辿り着く事が出来た。一度だけ戦闘機の集団と出会ったが、ヘレンさんに挨拶をして何事も無く去っていった。挨拶のノリからして明らかな上下関係を感じさせる。

格納庫へ二機が近づき、一時停止をすると、何時もの見慣れたジノリさんの顔を視線を送れば、私に向けて親指を何処かへ向けている。

その先には教官、いやシノさんが両手を腰に当てて立っていたのである。

「あんたたちいい！ 許可なく外泊とはいい度胸してるじゃないのー！」

「あ、シノ。おいつす」

「おいつす、じゃないわよ！ みんな心配……それはともかく！ 提出した許可書通りの行動をなさい！」

『うえーい』

「二人してなに声を揃えてるの！ 返事は『はい！』でしょう！」

帰還して早々にお小言を頂いてしまう。最初の掛け声なんて、刑事ドラマに出演していた往年の名女優のような叫びっぷりだ。

二機は再び格納庫内へと収納され、張りつめていた気は……シノさんとの会話で解けてたか。

「ヘレンはそのまま詰所に向かってアコに報告しなさい。ハルトはこのまま私の訓練を受けて貰うわよ」

「へーい、またねーハルトー」

「またです、ヘレンさん。教官殿、小生も休憩を頂きたく」

「赤とんぼを飛ばしたぐらいでバテるような訓練をしてきたつもりは無いけど？」
「おしっこ」

「もう少し言葉を選びなさいよ！」

「お花摘ませてください」

「……なんか腹立つわね。まあいいわ、さっさと済ませてきなさい」

「あざーつす」

頭を手で押さえて呆れながらも許可を頂いて颯爽とおトイレへ。赤とんぼは風を感じられて好きなのだが、その反面もう少し厚着をしないと用足しが近くなっていけない。

やあ、久しぶりだね、震電。どうやらまた君にお世話になる時がやってきたようだ。

と、悦に浸るほど離れていた訳ではない。用事やらで格納庫には足を運ぶこともあった。ただ、そんな冗談を言いたくなる程、機体は綺麗に磨き上げてあり、指で軽く触れても埃一つ付きやしない。

「ハヤトがの、目を輝かせながら磨いておったからな」

「師匠！ それは言わない約束でしょう！」

「あ、なら乗ってみます？」

「馬鹿たれ、自分の愛機にそう簡単に人を乗せるもんじゃない」

「そうですとも！ 機体はその人に合わせて調節されるんです！ ハルトさんも紫電に乗れば問題ナシですね！」

「とにかく私を紫電に乗せたい事だけは伝わりました。リツタさん」

いつの間にか格納庫にいらしたリツタさん。どこかですれ違ったのかは分からないが、紫電が大好きな事はよく分かった。

震電。思い出は沢山、愛着も沢山。だからといい独占したいかと問われれば、なんとも。

大切な機体であることは間違いない。イジツに来れたのも震電のおかげだ。それでもなんて言葉で表せばいいのやら。

「おまえさんから借りとする整備手順書があつてよかつたわい。そうでなければ見た事も無い発動機をどこから弄ればよいか頭を悩ませるところじゃったぞ」

「それはよかつたです。ラハマでお世話になつている整備士の方が持つていけと渡してくれた物ですから」

「ソヤツはこの発動機を調整した事があるのか？」

「ユーハンング語で書かれている原本がありまして、そちらをイジツ語に翻訳して手渡した後は、整備士であるナツオさんにお任せしていたのです」

「ほう、オウニ商会に所属していると聞く女子だな。どおりで文字がまるっこいわけじゃ」

私には結構乱暴な殴り書きにしか見えないが、イジツ語という視点からみればそういう風に捉えられるのだろう。原本と呼ぶべき曾祖父の手帳は、達筆すぎるといふ難点も抱えていたけど。

「ほら、そろそろ行くわよ？」

「ふっふっふー、ついに自分の紫電を見てもらう機会がやってきましたよ！」

「リツタさんも訓練ですか？」

「そうです！　と言いたいところなんです、実際はパトロールです！　しかも今日は少々厄介な相手といえますか」

「パロット社が製造した小型飛行船の納品日なのよ」

「あれ？　パロット社ってまだ存在しているのですか？」

「残念な事に。例の事件で取り潰しも提案されたのだけど、そうなると造船に携わっていた人達が職に溢れてしまう。直ぐには新しい職を紹介する事も出来ないって話にまで発展してね」

「どこも世知が無い世の中といいますか」

「腕利きを余所の町に取られてしまうのも癪だと考えるヤツもいるという事じゃ。ほ

れ、行ってこい」

「あい、行ってきますね、ジノリさん」

「師匠！ 行ってきまーす！」

こうして私は震電と、シノさんとリツタさんは紫電に搭乗し、訓練組とパトロール組、それぞれの空へと別れるはずだった。

カナリア自警団 その15

「ヘレンさん、遅いですねえ……シノさんからの伝言をちゃんと聞いてくれたかな？」
提出された書類には、外泊の事は記載されていないかった。

でもそんな心配は杞憂に終わる。考えてみればヘレンさん、それにお父さんのジョー
ジさんもいらつしやるのだから、むしろ襲撃があった場合は相手を心配すべき程だ。

それにハルトさんの操縦は、シノさんの訓練により日に日に上達しているのが分か
る。一緒にいらしたレオナさんと共に訓練を眺めていた時があった。

双眼鏡を片手に詰所の屋上でレオナさんと空を見つめている。

「シノは教え上手なのかな。ハルトの危なっかしい操縦が格段に減っているのが分かる
よ」

「上手だとは思いますが、訓練内容が厳しくて。それに文句を言いながらも淡々とこ
なしていくハルトさんもなんていうか……」

「本人もずつと気にしていた部分でもあるからな。イヅルマで教えてもらえる機会に巡
り合えるとは思わなかったんだろう」

そうは言うけれど、スパルタの領域を超えていると思うんだ。シノさんの教え方
て。

私たちに教えてくれようとしていた頃と同じぐらいの熱量で叩き込んでいて、それを
吸収していくハルトさん。あの二人、相性が良いのかな？

「赤とんぼを使った実戦訓練に座学か。図書館で調べ物をしながらよく頑張るよ」

「きちんと寝れているのか不安ですよ」

「それについては大丈夫だ。私がしつかりと体調管理をしているからな」

軽く胸を叩くレオナさん。こんな方だったんだ。コトブキ飛行隊の隊長をされてい
る方だから、どちらかといえばシノさんの様な方だと勝手に思い込んでいた。

担当したみんなが言っていたなあ。仲良く談笑しながらご飯を食べてる姿は姉弟の
様だと。

お二人も出会ってからそれほど時間は経っていないと伺っているけれど、今こうして
会話をしているレオナさんは、どうみてもハルトさんのお姉さんだ。

「ああ！ それは駄目だハルト！ 中途半端な操縦は叱られ……やはりシノから怒られ
ているではないか。今の操縦は後ろに私がいても怒るぞ？」

……ちよつとだけ、心配性なお姉ちゃんって感じかな？

「焦つては駄目よ、アコ。ヘレンの事ならそのうちやつてくるわ。彼女の性格も考えればね」

「どうして泊まる事になったのか聞き取りをしなければいけないのに」

「きつとお父様が焼きもちを焼いてしまわれたと思うわ。当初ヘレンも日帰りの予定だったのだから」

「本当かなあ？」

「ふふつ、ならヘレンのペースにハルトさんが苦戦を強いられた結果、というのはどうかしらっ？」

「ああ……それなら分かる」

ヘレンさんは、普段の生活がとにかくくだらない。脱いだ服はそこら辺に放り投げっぱなしだし、私が何度注意しても直らないのだから、ハルトさんも苦勞したんだろうなあ。

「念の為、リツタには先に上空パトロールへ向かわせたわ。ヘレンが戻ってきたら私もそちらへ向かうわね」

「うん！　お願いね、エル！」

「私とお姉様は地上から小型飛行船の警備ですよね？」

「そうですよ、ミントさん。頼りにしていますからね！」

「はい！ お姉様に近寄る不届き者は全て私が排除します！」

「いやあ、今回は私じゃなくて小型飛行船なだけど……まあいつか」

「ミントさんが同行してくれるなら百人力だ。傍にいてくれれば地上では間違いなく安全だと言いつ切る。」

「ただいま〜」

「あつ！ お帰りなさい！ ヘレンさん！ 聞きたい事は山ほどありますよ！」

「手短におねがいね〜」

「はい！ 分かりま……つてちがう！ ヘレンさんからお話を聞きたいんです！」
「泊まった以外は、何も問題なかったよ〜」

「そのこの泊まった部分をもう少し詳しくお願いします……」

「んーとね、お父さんがハルトに喧嘩を売ってね、そのせいで配達が遅れたんだ〜」

「まあ！ そこを更に詳しく教えてくれないかしら？ ヘレン」

「えーとねー、お前はヘレンの何なんだーって」

「一人感極まる様子のエル。好きだよね、そういう話。つてまた脱線してる!？」

「ジョージさんがハルトさんに喧嘩を売る事が原因で配達が遅れ、帰還する事が困難だった。で合っていますか？ ヘレンさん」

「さすが団長。大体合ってる」

「これで大体なんですね」

ヘレンさんのペースは本当に独特だ。無理に合わせようとするれば、こちらのペースまで崩されてしまう。

聞き取り調査を書類に記載して、一先ずこれで昨日の件についてはメにしておこう。

「あーそうだ、団長ー」

「どうかしましたか？ ヘレンさん」

「お父さんから伝言を預かってたー」

「ジョージさんから？ 一体なんでしょうか？」

「ハルトにお父さん達が写ってる写真を見せてあげてつてさー」

「お父さん達の？ つて事はイカルガ自警団の写真で良いのかな？」

「たぶん、夜二人で何かを話していたみたいだけど、その事じゃないかなー」

ジョージさんとハルトさんと話し合い？ 気になる部分も多いけれど、まずは今日の任務をこなさなければならぬ。

「分かりました。その話の続きは本日の業務が終わってからにしましょう！」

「今日の楽しみが増えたわっ」

「エルさんが考えているような事では無いと思いますけど……」

「団長ー、あたしはどうすればいいのー？」

「ヘレンさんは詰所で待機しててください！ 私とミントさんは地上から小型飛行船の警備。エルとリツタさんは上空パトロールを。シノさんはハルトさんの護衛と訓練が本日の予定です！」

「うえーい、寝てていい？」

「誰かいらした場合は起きてくださいよ？」

「おっけー」

起きななさそー。けど、そうも言っていられない。そろそろ出動しなければ。

「それでは！ カナリア自警団！ 出動！」

『はい!!』

「イヅルマへ来る時に比べて大分上達したじゃない！ 意味のないふらつきも減って様になってきたわよ！」

「教官殿のご指導のおかげであります！」

「ふふっ、そう言われると悪い気がしないわね！ 今から私の指示通り操縦して、リツタに訓練の成果を見せつけてあげなさい！」

「了解であります！」

「なんですか、この茶番は？」

「ご機嫌取りです。冗談は置いて、こういう風に会話をすると訓練が円滑に行える事が判明したのです。」

シノさんの指導により叩き込まれた操縦技術と知識。実際に反トルクの影響でふらつきながら飛行していた震電は、訓練のおかげで形になりつつあるのではないかと自分でも思うほど。赤とんぼという偉大な機体に感謝しなければ。

「それじゃいくわよ！ 右ロール三百六十度！」

操縦桿を右へ倒し、世界が回転する。倒すなら倒す、戻すなら戻す、中途半端は事故に繋がると散々叩き込まれた。

備え付けられた計器の針が素早く動き、瞬間的に重力を頭の先で感じた後、再び機体は水平へと戻される。進行方向、機体の向き、計器を確認して動作を行う前に近い状態になっている事を確認した。

「震電に搭乗してからの初訓練としては上々ね、ハルトが震電の感覚を覚えるまでは赤とんぼで行った訓練の反復よ！」

「教官殿！ ありがとうございます！」

「感謝は行動で示してみなさい！ 次！ 左ロール三百六十度！ 先程と同程度の精度でやりとげなさい！」

「自分で行うならまだしも、人の操縦を見ていると目が回りそうですねえ！」

実際、自分で操縦している分には特に気分が悪くなったりはしない。イサオさんとの訓練も最初は脳味噌が認識しないのか、辛い事も多々あったが、日が経つにつれて身体が慣れたみたいだったから。それでもイサオさんの操縦は、大丈夫だと分かっているも怖いのだ。

再び来た道に戻るかのようには震電は回転する。操縦桿を戻した瞬間ばかりは、身体が持つていかれそうになるが、計器を見る限りでは無事、指示通り行えたようだ。

「まあまあね、どちらでも同じ精度で行えるように続けていくわよ」

「それじゃシノさん。自分はこれよりパトロール先に向かいますね！ ハルトさん！ 震電の訓練が終わったら紫電が待っていますよ！」

「特別メニューまであるんですか!？」

「もちろんです！ その時は自分が教官になりますから、覚悟しててくださいいねー！」
ふっふっふーと不気味な笑い声と共に機体を傾け、離れて行くこうとする瞬間、シノさんの声が聞こえた。

「待ちなさい！ リッター！」

「どうかしました？ シノさん」

「貴女の仕事が舞い込んできたみたいよ。前方に複数の機影！ イヅルマへ真っ直ぐ飛んで来るわ！」

「ええ!! 団長たちに連絡は!？」

「今からするわ! 悪いけど、パトロールよりもこちらの手伝いをしてもらう事になりそうね!」

「もちろんです! ハルトさん! 私たちの後方について絶対に離れないで下さいね!」

「了解しました!!」

もしこれが空賊であれば二度目の遭遇戦となる。前回のコトブキのように攻撃を止めしてくれる相手ではないだろうが、今回はシノさんとリツタさんがいる。指示に従い、欲を出さずに飛ぶ事に集中すれば。

高まる鼓動を押さえようと必死になりながら、先程までいた位置から移動をして、お二人の後方へと移動する。

出来れば違うと思いたいが、胸騒ぎがする事も確かだ。

カナリア自警団 その16

『こちらはイツルマ所属カナリア自警団です！ 前方の戦闘機、応答してください！』

『まっ、分かっていたけど何も反応しないわね』

『こちらからの呼び掛けに応答せず。迂回をする気もなさそうですね！』

『いまアコに連絡を入れたわ！ エルとヘレンが上がって来るから、それまで私たちで対応するわよ！ ハルト!!』

『はいい!!』

『私が許可をするまで射撃は一切禁止！ 私の後ろを死んでも離れるんじゃないわよ！』

『了解です！』

『シノさん！ 相手がイツルマの防空圏に侵入してきました！』

『相手は六機、部隊を三つに分けられたら面倒ね。先手を打って数減らしを狙うのはどうかしら?』

『賛成です！ ふっふっふー！ 自分の呼び掛けと防空圏に侵入してきたのが運の尽きですよー!』

『それじゃ行くわよ！ カナリア自警団を甘くみない事ね！』

二人が搭乗する紫電の回転数が上がるのが、目と耳を通じて伝わる。私は命令通り、とにかくシノさんの後ろをくっ付いていかないと。

震電のスロットルレバーを奥へと押し込み、操縦桿を握り直す。視線はずっとシノさんの紫電を見つめ、回避運動にも対応出来るようにしなければ。

イジツにやってきた瞬間に比べれば何倍もマシンなんだ。あの時は緊張の余り、力んでペダルを踏み込んだおかげで運よくキリエの射撃を回避出来たんだ。

二人は二機一組の綺麗な編隊を組み、相手の射撃軸をずらす為だろう、僅かながら機体を左右に振りながら相手に向かっていく。

対して空賊と思われる六機は、編隊と言えるような飛び方をせず、機種すらバラバラ。座学で習った事がそのまま正解に繋がるのであれば、零戦五二型、三二型、二一型となる。

相手の搭乗基準は分からない。一番手前にこそ五二型が飛んでいるが、他は特に決められていないらしく順序不同だ。

お互いに搭載されている装備は九九式二〇耗機銃。そこへ追加して相手には九七式七耗七固定機銃を搭載されている。

口径こそ小さく、威力もそれなりであるが、弾道や発射速度は優れており、数も十分

出回っている。

イジツでは最も基本的な機銃であることから、後ろを取れない状態からの交戦開始時には十分注意すること。座学の時にシノさん念を押す様に教えられた。

編隊を組んだまま相手との距離が近づくその時、光が見えた。

『こんな距離から撃つたところでまぐれ当りもしないわよ』

『やっぱり空賊ですかねえ。最近は大入りと思っていたのに』

『相手の都合なんて知らないわよ。だけど私たちがすべき事は一つよ』

『そうですね！ 油断せず！ 確実に落としてやりましょう！』

私とは違い、職務を全うするのが当たり前とも受け取れる発言をするお二人。なんとも心強い。

更に相手の機体が近づくと、二人はまだ射撃を開始しない。そんな事をお構いなく相手から機銃掃射が行われる。心臓の鼓動を気にする前に呼吸をするのを忘れてしまいうさだ。

五百、四百と距離が狭まり、私の方では三百を切るのではないかと思う辺りで、ついに二人が動き出す。

『いざー！ 尋常に勝負！』

リツタさんの声と共に、僅かに撃ち出される機銃。その瞬間、紫電が動きだす。シノ

さんの動きに後れを取るまいと、模範するかのように必死に震電を動かす。

相手の機体そのものを避ける様に、機体を僅かに上昇させ、右ロールを行いながらすれ違う。一瞬ながら煙らしきものが目に映った。

このまま終わりかと思えば、主翼が地面へと向いた瞬間、シノさんは旋回体勢に入り、次の敵へと照準を合わせる。赤とんぼで後部に乗せられた時にも思ったが、一つ一つの動きが正確で素早い。

『星ひとつです！』

『やるじゃない、リッター！ こちらも五二型の被弾を確認したわ』

『やっぱりシノさんですね！ これで相手が三つに分かれる事は回避できました！ 本日も自分の紫電は絶好調です！』

屈託のないリッターさんの声。日頃から紫電の愛情を隠す事無く喋る可愛らしいその姿。それだけではなく操縦技術も凄いとアコさんから聞いた話は本当であると確信する。

『ハルトさんはちゃんと息してますかね？』

『息どころか、ピッターと私の後ろを付いてきてるわよ！』

教官殿からお褒めの言葉らしきものを頂くも、私は操縦で思考が奪われ口が動かない。

二人の発言を聞く限りでは、相手の機体は六機から四機へと数を減らし、最悪の事態は回避された模様。

あとはエルさんとヘレンさんが到着すれば、形勢逆転なのだろうか？ その前に落とさきるのではないかと思うぐらい、二人の動きは鋭い。

『ハルト！ 聞こえているわね！ 確認の為に呻き声でもいいから返事をしなさい！』
「へい！」

『意外と余裕そうですね、ハルトさん』

『はい』を言うよりも楽なだけという理由。訓練時なら喋れたけれど、射撃音のせいなのか、金魚か鯉かと思うほどに口を動かしている。

不思議なことに身体は動く。これが脳から伝達されて動いているのか、身体に直接叩き込まれた結果なのかは分からない。ただ今もシノさんの後ろを飛んでいる事だけは確かだ。

『よく聞きなさい、ハルト！ 例え相手が空賊であろうとも、二対二なら後ろの取り合いになるわ！ つまりこのままだと震電の後方に一機来るわよ！』

「どうすれば!?!」

『私が一度目の合図を出したら操縦桿を押しして下降しなさい！ 二度目の合図の時には操縦桿を引いて上昇！ そして視界に映る二一型を私だと思って追いかける事！ 理

解したわね!？」

「りょー!」

シノさんのやりとりの間にも、先頭を飛んでいた三二型が行動を開始する。

誰かの後ろへ付いて行く事しか出来ない私がいる状態では、私たちはこのままでは相手の機体に挟まれる。それを打開する為の作戦なのだろう。

自分の後を追いかけて来ない事に気づいた三二型が、私の後方へ位置づける。その瞬間に聞こえるシノさんの声。

『今!』

声と共に動く身体。震電は地面が見える方向へ機首を向ける。速度が出て恐怖を感じるが、私というお荷物がこれでシノさんの思惑通りに事が進められるのなら耐えなければ!

僅か数秒の出来事は、時として長く感じる事がある。それはイズルマへ来て二度の気絶から学んだ事の一つ。それもどうなのだろうか。

『今!!』

操縦桿を引いて全身に重力を感じる。辛い事は確かだが、イサオさんから味わわされた機動に比べれば!

空へと機首を向けられた震電が映し出したものは、二一型の機影。こいつの後ろを取

り続けていられば。

『自警団を舐めるな!!』

怒気が含まれたシノさんの叫びと共に、紫電から放たれる機銃の音。それと同時に聞こえるのは交戦開始時にも聞こえた鉄を裂く音。

確認したいところではあるが、シノさんからの命令に背くわけにもいかない。もしかして一瞬で落としたの？ 嘘でしょ？

『コイツを落としたりリツタの援護に向かうわ!』

『よろしくお願いします〜!』

あちらは二対一のままなはずなのに、心なしか余裕すら感じられるリツタさんの声。イジツはヤベー奴等で沢山。だけどそれは頼りになる証拠でもあったのだ。

私の前にいる二一型をどうすればよいのか。判断を乞う前に無線から聞き慣れた声を耳にする。

『こちらはアコ! みなさん聞こえていますか!』

『アコ、どうしたのかしら? 指示通りシノさん達と合流するところよ?』

『今朝、話をした飛行船がある方角を見てください! 動き出し始めているんです!』

今朝? 飛行船? アコさんから聞かされる内容が理解出来ないが、私でも分かる事がある。

こんな時に飛行船を飛ばそうとしている人は、正気の沙汰とは思えないという事だ。

カナリア自警団 その17

『ハルト！ その二二型は放っておいていいわ！ 今すぐ私の後ろに付きなさい！』
「うい！」

シノさんの指示通り、震電を操り再び定位位置へと舞い戻る。先程まで追っていた機体へ僅かに視線を移せば、二二型は既にイヅルマから逃げ去るような進行方向を飛行している。

『お待たせ、リッタ』

『エルさん！ ヘレンさん！ 来てくださったのですね！』

『正直、あたしまで来る必要あったー？』

『あるに決まっているでしょう！ 自警団なんだから！』

『おふう……シノは厳しい』

アコさんの緊迫した声とは裏腹に、空にいる隊員たちの声は賑やかだ。それがとても心を落ち着かせてくれる。

リッタさんを追い回していた敵機もこちらの味方を確認したのか、二二型と同じく撤退を決めたようだ。

けれど、アコさんの言う飛行船とは一体なんのことだろうか？

『アコ、そちらはどういう状況なのかしら？』

『パロット社から引き渡し完了した小型飛行船が、こちらの指示を無視して飛行を開始始めたんです！』

『このクソ忙しい時に何を考えているのよ!?!』

『こちらにも護衛がいるから問題ないと一方的に告げた後、無線を切られてしまいました！ それ以上にこちらでも大変な事が起きています！』

『団長！ 一体何が起きたというんですか!?!』

『あの小型飛行船には立ち合いで訪れていた議員が搭乗されていたのですが、先程甲板に現れたと思ったら何かを落としまして……それです！ ミントさん!』

『団長、なんだったー?』

『文字が書かれています！ ってこれはユーハンク語？ 見た事がある文字なのですが、確か意味は……辞表?』

辞表。役職についている者や、公務員を務めていた方が辞める際に使用する言葉。このタイミングでお仕事辞めますってどんな状況だよ！

『こんな時にふざけるのも大概にして欲しいわね！ 一体どこの誰よ!!』

『えっと……震電の聞き取り調査の為、格納庫へ訪れた際に、最後までイサオの機体だと

主張をされていた方です！』

『ソイツって！ 自分の意見を無理矢理押し通してハルトをイズルマへ来させた張本人じゃない！』

『こちらでも理解が出来なくて混乱しています！ ですが例え元議員になられたとしても、調査の為に飛行船を止めなくてはいけません！ カナリア自警団はこちらの援護を！』

『分かったわ、アコ。空の事は任せておいて。ミントはアコの安全を任せたわよ』

『了解しました！ お姉様に害をなす者達は全て排除します！』

『最後に一つだけ！ 護衛と呼ばれていた機体は疾風！ 私たちが確認出来ただけでも三機です！』

『いくら疾風とはいえ、足の遅い飛行船で三機だなんて。随分と余裕があるようじゃない』

『実際によゆうだと考えているんじゃないの？』

『それはそれで腹が立つわね……』

『はいはい！ 質問です！ ハルトさんはどうされますか？』

足手まとい一号です。一号しかいませんが。

どう考えても邪魔にしかならない状況下。空賊らしき相手も去った事を考えれば、私

は地上へと戻り皆さんの足枷を外した方がいいと。

『ねー、もう遅いみたいだよー』

ヘレンさんの声に皆が集中する。護衛と主張する疾風が三機、こちらに向かつてくる姿が見えた。

『なら、私はハルトの護衛を務める事に集中するわ。エル、今更だけど指揮系統を貴女に返すわね』

『はい、返されました。リッタ、ヘレン、私たちであの三機の対応をするわよ』

『了解です！ エルさん！』

『ほーい』

三機は編隊を組み、疾風に対して警戒態勢へと移行する。シノさんは相手との距離を凶りながらも小型飛行船の動きに注意をするようだ。

『こちらには飛行船の護衛を務めている隊の長だ。カナリア自警団と敵対する理由はこちらには無い。このまま飛行船を離陸させ、引き渡しを完了させて欲しい』

『そうはいきません。例えパロット社から引き渡し済みとはいえ、現在イツルマ上空は警戒警報が発令されています。こちらの指示に従って頂きます』

『……その指示に従えない場合は？』

『私たちもそちらと敵対するつもりはありませんが、自警団としての職務を全うするま

です』

緊迫した空気が無線から通じてくるのが分かる。その間にも小型飛行船は離陸を始め、イツルマから離脱を図ろうとしている。

『元議員については、こちらから雇い主に便宜を図るようお願いしよう』

『もしもあなたの方がこちら側の立場であればそのような主張が通るとお思いですか？』

『まあ……無理だろうな。だが、それでも我々にも矜持というものがある。それに自警団……イツルマ所属であれば尚の事、あの飛行船を止める事は不可能だという事は理解しているはずだ』

『今なら飛行船のガスを抜く程度の事は行えると思いますわ』

『それをさせないのが、我々の任務だ』

三対三。お互いを睨み合うように、戦闘状態に突入しても優位に立てるように、位置を細かく変更していく。

もしもだ、私が地震の特性を生かして可能な限り上空へと逃げた場合、シノさんがあそこへ加われたならば、この展開に動きがみられるのだろうか。

それとも、逆にそれが引き金となつて戦闘開始に陥るのだろうか。こればかりは経験がない私には理解は出来ず、シノさんと共に小型飛行船が悠々と空を飛び始める姿を眺めるだけの状況だ。

外見は通常の飛行船と同じく、船内にガス袋を配備する船体であり、操舵室となる部分がその下に付くように。

唯一違うのは、操舵室の下には私が知っている海や湖などの水に浮かべるような形の船体が付けられている事。地上に着陸出来るようにした為か、船底は平面となつてゐるが。

このまま見つめるだけで終わるのだろうか。地上にいるアコさんやミントさんが何か手を打つ方法を考へているのだろうか。それもこれも、全ては無線から聞こえる議長の声によつて終止符を打つ事になる。

『イヅルマ上空にいる全ての戦闘機に告ぐ、小型飛行船をそのまま通し、全ての戦闘行為を一切禁ずる。これはイヅルマ議長である私の命令だ。全ての責任は私が取る』

『議長?!』 ですが相手はこちらの指示に従わず、明確に拒否を続けたままです。何より市長を無視してまで私たちに命令を出すおつもりですか?』

『ああ、そうだよ。だからこそ責任は全て私が持つのだ。アンタたちには迷惑をかけるつもりはないよ。その疾風、聞こえているだろう』

『聞こえている。我々として敵対する理由はない。この様な判断を下して頂いた事に感謝する』

『ハッ! あくまで今回は見逃してやると言つていただけさ! さっさとあのボンクラ

「ごと飛行船を連れて消え去りな！」

『……了解した。ご婦人とは近いうちにまた会う事になるだろう』

『もう少し女性の扱いに慣れてから来るんだね！ 小僧！』

議長という言葉に疾風の隊長は笑いを隠さずにいる。そして翼を振り、相手の味方機と共に小型飛行船の方向へと進路を変えていった。

私たちはそれを見守るほか、無かった。

「一体なんなのよ、あいつらは！」

「分かりません。ですがパロット社に対して聞き取り調査を行わなければならない事は確かです」

「何名かは拘束したのですが、上からの指示だとしか聞けませんでした」

「あの疾風、最初に相手をした奴等とは全然違つて統制が取れていましたもんねえ。何者なんでしょう？」

「ただ者ではない事は確かね。私と交渉していた際も、焦りの色を感じさせなかったのですから」

「でも、町と飛行船を人質にされていなければ、あたし達が勝つよ。それはぜったい」

へレンさんの言葉に頷くカナリア自警団の皆さん。

私が……という考えは捨てよう。ここで自虐的な事を発言しても何も価値がない。

シノさんの指示通りに動けただけ良かった。そう思う事にしよう。

アコさんが意識をこちらへ向ける為に軽く手を叩き、笑顔で言葉を伝える。

「後で議長がこちらへとやってくるはずですよ。それまでは一旦休憩にしましょう。町を守る。という義務を果たせた事は、素直に喜びましょう！」

その言葉に皆さんの強張った肩が、一旦下ろされる。私も深呼吸をしてようやく鼓動が収まる感覚を受け入れそう。

「ハルトさん、本来であれば予定していた震電の訓練をこのような形になってしまいましたし訳ありません」

「アコさんが謝る事はありませんよ！ それに私はずっとシノさんの命令に従って機体を動かしていただけですから！」

「あら、久しぶりに操縦する機体であそこまで動かせれば上々だと思うけれど？」

「あまり褒めないでください。それだけしか出来ていないとも言えるんですから」

「ハルトさん！ シノさんのお尻はどうでしたか？ とーっても魅力的だったと思うのですが！」

「リッター！ 機体で後ろに付くのと私のお尻がどう関係あるのよ！」

「シノは見た目よりも大きいから」

「ヘレン！ 貴女まで何を言っているのよ！」

「すびいー」

「寝たふりをして誤魔化すんじゃないわよ!!」

そのやりとりのおかげか、笑い声が聞こえ、先程までの空気は消え去り、私の知っているカナリア自警団が戻って来た。

議長が訪れる僅かな時間かもしれないが、全身の力は抜け、今になってようやく地上に戻ってきたのだと実感する。

一丁前に足の先で地面をグリグリと動かしてみた事は、ここだけの秘密である。

カナリア自警団 その18

「すまない、待たせたね」

「議長！ こちらも丁度良い休憩時間がとれましたので気になさらないでください！」

「ありがとう、アコ。早速だけどこれからの事について作戦会議を開きたい。カナリア自警団は全員揃っているかい？」

「勿論です！ 会議室も手配済みです！」

「アンタって子は……ここ最近の騒動も悪い事ばかりじゃないと思わせてくれるわね！」

「そんな事はありません！ 私に出来る事を日々こなしているだけです！」

「時間があればいくらでも撫でまわしながら褒めてあげたいところだけど、今は早さが重要だ。ハルトはいるかい？」

「はい、こちらにいます」

「本来であればアンタは、カナリア自警団が護衛をする対象でもあるんだが、事が事だけにアンタの意見も伺いたい。会議に出席しな」

「了解しました」

「アルバート!! 会議室を借りるわよ!」

「はい! お好きなかだけご利用ください!!」

会議室へと集まるカナリア自警団と私と議長の面々。私の意見と言われても何を聞かされるかは分からない。

ただ、ここまでできたらお手伝い出来ることがあるならば、可能な限り力を貸したいと思ふのも心情。

「まず簡単に本日の出来事を振り返るわよ」

一つ目は地上で起きた出来事から。アコさんとミントさんから話始める。

小型飛行船の引き渡しに元議員が立ち会う事になっており、アコさん達はその方の護衛も含まれていた。

ただ、小型飛行船へと乗り込もうとした際に、自警団諸君はそこで待ちたまえと元議員から指示が下され、渋々ながらも待機をしていた。

その後、イズルマへ向かう所属不明機が発見されて、其々に無線を通じて指示を出していたところ、小型飛行船に搭載されている発動機が動きだし、離陸を始めようとしていた。

停止させる為にミントさんと小型飛行船へと近づいた矢先、甲板から元議員がこちらに向けて警告射撃を行ってきた。

要求はただ一つ、何もするな、と。

「その時に投げ捨てられたのが、辞表でした……」

「考えたくはなかったが、当初現れた空賊は奴等に時間稼ぎとして雇われた可能性が高いわな」

「でも、あそこまでのリスクを抱えてまで飛行船を手に入れる目的は？」

「一つだけ思い当たる節がある。イケスカ騒動時のオウニ商会が行った方法だ」

「それって……まさか！　飛行船に爆薬を積み込み、ブースターを利用した超高速による穴の破壊!?!」

「そう、当時はそれでイケスカの穴を封じる事が出来た。だがそれを穴ではなく町に利用されたら？」

「そんな事が起きてしまえばイヅルマは致命的なダメージを受けてしまい、全ての機能が停止……そこまですようとするとする人達って！」

「元自由博愛連合の連中である可能性が極めて高い、ということだよ。物流の要である飛行船の生産を止め、イヅツに物が出回らなくさせ、弱り切ったところを叩き潰して制圧する。誰が考えたのか知らんが、中々のエゲツない作戦である事は確かだね」

飛行船にブースター。確かにその話はイサオさんやアレン達も含めて聞いた。穴の破壊に使われた方法を、今度は町で利用しようと考えているのか。

「二つ目。これはハルトにお願いしたい」

「何でしょうか？」

「市長室に向かい、電話を利用してイヅルマの現状をルウルウに伝えてほしいのさ」

「電話って、ラハマと繋がるものが存在していたんですか!？」

「ああ、あるんだよ。使える様にしたはいいが、そこぶる維持費が高くて飛行機を飛ばした方がマシな程にね」

「では、今回もそうされた方が良いのでは？」

「時間との勝負だ。ここで僅かにケチって町が消える可能性がある限りは私が許さん」

リスクを可能な限り潰していく方法なのだろう。それについては異議なしである。

レオナさんがイヅルマから去って一日でこんな事になろうとは。

「三つ目については全員が戻ってきてからとする」

『あら、ハルト君から電話なんて思いもよらなかったわ。一体どうしたのかしら?』

「マダム、イヅルマで起きた事について手短かに説明をさせて頂きたい事が発生しました」

『聞かせて頂戴』

「イヅルマでパロット社より小型飛行船の引き渡しが行われました。その時にイヅルマへ空賊らしき機体が現れ、その対応をしている最中に小型飛行船が可動し始め、離陸。」

止めようにも街中である事と、護衛に疾風がいた事もあり、見送るしかないまま戦闘は終了しました」

『その小型飛行船、何が目的で利用されるとハルト君は考えているかしら？』

「皆さんと考えた結果、最悪の場合はイケスカに現れた穴を破壊する為に使用された羽衣丸と同じような用途で町に向けて使われるのでは、と」

『でしようね。イヅルマの造船能力を奪い、物資の流れを停滞させるつもりでしょう』

「こちらにいる議長も同じ事を言っておられました。マダムとは知り合いだとも」

『議長？ あああの人の事ね。随分とお世話になった事は確かよ。それでこうして電話会談を設けさせていただいたのね』

「私という護衛対象がいる以上、マダムに連絡を入れるのが筋だと申しております」

『あの方らしいわ。でもありがとう。最後に一つ聞いても良いかしら？』

「なんなりと」

『護衛に付いていた疾風、機体は何色だったか覚えているかしら？』

「全て黒色でした」

『……そう。相手は間違いなく自由博愛連合の残党。その中でもイサオ直属部隊に所属している奴等ね』

「そうでしたか……そちらは議長に伝えさせて頂きますね」

『よろしくお願いね、あとレオナから話があるようだから聞いてあげてくれるかしら?』
「勿論、喜んで」

受話器の先から薄つすらと聞こえるレオナさんの声、遠慮をしているようだが、マダムに押し切られて受話器を受け取ったようだ。

『ハルト、レオナだ。そちらは無事か?』

「おかげさまで五体満足で生きております」

『それはよかった……私もラハマへ戻つてから可能な限りの事はしているのだが、イヅルマへ戻るにはしばらく時間がかかりそうだ。すまない』

「気にしないでください。むしろこの状況下。もしかしたらラハマにも何か起きるかもしれません。その際にはレオナさんがいらつしやればコトブキの皆も安心して任務を行えるでしょうし」

『だが、その……私はお前が心配なんだ。ハルトは少し抜けているところもあり、目を放せば直ぐにどこかへ行ってしまいそうな気配もあり、私が手を握つてあげないといつの間にか消えてしまうのではないかと』

レオナお姉ちゃん。心配してくれるのは嬉しいのだけれど、完全に孤児院の子供たちと同じ扱いに突入し始めましたよね。そんなレオナさんも勿論好きだけどさ。

「ちゃんとレオナさんの言付通り、一人では町を歩き回るような事はしていません。必

「ずカナリア自警団の方と一緒にいますから。約束を破ったりはしていませんよ?」
『……うん、そうだな。ハルトは約束を守れる人間だ。私がない間でも約束を破らないように気を付けるんだぞ?』

「あい、レオナさんもそう遠くないうちに何かが起こるかと思います。お気をつけて」
『ありがとう。マダムに……代わる必要はもうないようだ。これで切らせてもらうぞ』
「了解です。また会える日を待っていますね」

受話器を置いて通話を終了させる。

何時も通りのマダムの声色。イツルマでしばらく一緒に生活をしていたせいなのか、レオナさんは大変心配症になっている模様。

それでも久しぶりにお二方の声が聞こえ、お互いの無事を喜びあえるのは、凄く嬉しい。

さて、用件も済んだことだし、市長にお礼を伝えて詰所に戻るべきだろう。

「んっんーママあ……」

「よしよし、市長は疲れているのですよ。甘いものでも食べて心を豊かに致しましょう。

はい、アーン」

「アーン」

イツルマの闇を見た。

「ただいま戻りましたわ」

「ただいまですー」

「お帰りなさい！ エル！ ハルトさん！」

「あら？ アコだけ残っているの？」

「はい、他の隊員の皆さんは議長からの指示もありまして別々に行動を開始しています。私はその連絡員とでも言えばいいのでしょうか」

「それも重要な仕事よ。こちらに関してはハルトさんがラハマへ連絡を入れてくれたわ」

「どうでしたか、ハルトさん？」

「報告すべき事が一件ありました」

「なんででしょう？」

「護衛と呼んでいた黒い疾風は、イサオ直属部隊に所属していた者だという事です」

「イサオの……という事はやはり、自由博愛連合が絡んでいるという事なのでしょうか？」

「確証はありませんが、恐らく。そして議長とマダムのご意見は同じで、小型飛行船には十中八九、イケスカの時のような利用方法をされるであろうと申しております」

神妙な顔をして思考に耽るアコさん。イジツではどう捉えられているのかは分からないが、明らかにミサイルとしか思えない。

「だけどミサイルは機械制御で撃ち放たれた後は自動で飛んでいく。イジツの飛行船を利用する時点で人が……ってあれ？ 確かイヅルマでも自動操縦が絡んだ話があったような……。」

「アコ、眉間に皺が寄っているいわよ」

「エルう、それはどうしたって無理だよお」

「大丈夫よ、みんな出来る事を精一杯こなして、最悪を回避しようと動いているのだから。皆を信じて、ね」

エルさんが優しくアコさんを包むように抱きしめる。この二人は幼馴染なんだっけ。素敵な距離感があつて羨ましいなと思う。

「私は防空パトロールに向かうわ。アコの事はお願いね、ハルト君」

「エル！ そんなに根を詰めなくても！」

「そこまで疲れたわけではないのよ。私も私に出来る事をつて思っているだけなのだから」

軽く手を振って詰所から出て行かれるエルさん。アルバート部長すらいないアコさんと二人だけの空間。

考えてみたらこんな状況は初めてかもしれない。必ず誰かがいたから。

「そういえばハルトさん。イカルガ自警団の写真を見たいとジョージさんから聞いたのですが?」

「ジョージさんが? いつの間に」

「ヘレンさんに伝言を託していたみたいですよ。よろしければご覧になりますか?」

「その、よろしいのですか?」

「問題ありませんよ! むしろお父さん達の事を知って頂けるのは嬉しいものです!」

「あらあ、アコつたらそんな事を考えてくれていたのね。お母さん嬉しくて涙が出そう」
聞き慣れない声が扉から聞こえる。視線をそちらに向ければ赤髪の綺麗な女性が立っていた。その後ろにはまさかのジョージさんも。

「おおお母さん!! どうしてここに!?!」

「少し気になることがあったから、お忍びで来ちゃったわ」

「どこがお忍びなんだか」

「あら、ジョージ。貴方もヘレンが心配でやってきたんじゃないのかしら?」

「俺はたまたまだ。配達のついでに立ち寄っただけだ」

「相変わらず素直じゃないんだから、そちらにいらっしやる方がハルトさんかしら?」

「はい! 申し遅れました。私、ハルトと申します」

「あらご丁寧にどうも。ジョージからは聞いているかもしれないけれど、私はアコの母親のミヤコよ。よろしくね」

「うううう、なんでこのタイミングで来るのかなあ」

「女のカン、つてやつかしら。余り良い状況とは思えないみたいだもの」

「ヘレンは？」

「ヘレンさんであれば、議長と共にパロット社へ立ち入り調査へ同行しています。最初はかなり渋っていましたけれど……」

「相変わらずな子で安心したわ。それで私たちが来る前に、二人は何をしようとしたのかしら？」

「ジョージさんからの伝言を思い出して、時間のある今の内にハルトさんにイカルガ自警団の写真を見て頂くかと思っております」

「まあ！ 若い頃の写真を見られるのはなんだか恥ずかしいわ」

「今も大して変わらん」

「あはは……少しだけ待っていてくださいね！」

アコさんは自室に置いてあるのだろう、写真を取りに部屋から出て行った。

取り残された私は、アコさんのお母様とヘレンさんのお父様と対面するようにソファに座っている。圧迫面接であろうか。

「ジョージ、聞いてもいいかしら？」

「コイツに何故写真を見せようとしている事か？」

「ええそうよ。見せる事については問題ないけれど、貴方がヘレンを通じて見せる様にと耳にしたものだから」

「相変わらずの地獄耳だな。だが理由はある。コイツは穴について詳しいという事だ」

「穴に詳しい？ 彼が？」

「ああ、理由はそれだけだ。何かを期待しているわけではないが、穴の事を知っているのであれば、トキオの顔ぐらいいは覚えておいてもらえれば何かあるかもしれないな」

「……貴方はまだ」

「アイツは死んじやいない。それだけは確かだ」

確かにトキオさんのお顔を拝見させていただければ、可能性はある。それは日本に戻った後の話になってしまうけれど。

扉から息切れをしているアコさんの姿が見える。走って取りに行ってきたのだろう。

「遅くなってすみません！ 仕舞っておいた箱を探すのに手間取りまして」

「日頃からちゃんと整理しておかないとダメよ？ お母さんが手伝ってあげましようか？」

「それだけはご勘弁を!!」

親子の会話を尻目に、ジョージさんが写真を選別していく。そして一枚の写真を私の前に出す。

「これがアコの父親にして、イヅルマの英雄であるトキオの顔だ」

テーブルの上に置かれた写真には、笑顔でこちらを見つめる一人の男性。英雄と呼ばれている方とは思えない程、親しみやすい表情をしている。

「懐かしいわねえ。一人で写る写真は余り好きでは無かったはずなのに」

「誰かが隙を付いて撮影したんだろう。広報用にも使いたがつていたからな」

「……あの、ハルトさん、大丈夫ですか？ お顔が優れないようですが」

ジョージさんから見せていただいたトキオさんの顔写真。それを見た瞬間、脳が極端なまでに思考を開始する。

これはどこかでみた事のある顔だと、既に日本で見た顔だと。脳が叫んでいるのが分かる。

心配をしてくれるアコさんが、私の手を握って下さるが、それさえも反応が出来ない程に身体まで硬直している。

そしてどの程度、時間が経ったかは分からない。ただ答えがはつきりとした。私はこの人と出会っている。

だが、それを伝えれば私が穴の先からやってきた事がバレる。震電に関しても嘘をつ

いていた事がバレる。嘘で塗り固めた設定が、たった一人の男性に全て崩されようとしている。

「……その様子だと、お前さん。トキオと出会った事があるみたいだな」

「ええ……それも何年も前というよりも、つい最近とも受け取れる表情をしているわね」
「ハルトさん……」

嘘をついた代償か。軽蔑をされても仕方のない事だ。自警団に拘束されても仕方のないほどに。

レオナさん『希望は時として人を傷つける』と言いましたが、相手にすら本人だと確信させられる物を所持している私は、どうすればよろしいのでしょうか。

アコさんの手を握り返す。アコさんも握り返してはくれるのだが、その瞳は不安の色が隠せない。

逃げ出す事も出来ない、回避をすることも出来ない。ならば打ち明けるしかない。これが私にとってどうなるか、全くの不明だが。

「二つずつ、お伝えさせて頂いてもよろしいですか？ もう嘘を付く理由が無くなってしまうので」

カナリア自警団 その19

「既にお気づきかと思いますが、改めて伝えさせて頂きます。私は穴の先からやってきた、こちらではユーハングと呼ばれる場所から来た人間です」

慎重に、一言でも誤解を招かないよう言葉を選んで喋る。辺りは静まり返ったまま、誰一人として言葉を発しない。

「見せていただいたトキオさんの写真。この頃からは少しだけ年齢を感じさせるお顔をされていましたが、イジツに来る前に似た方を見た事は確かです」

「……それを示す事は出来るのか？」

「私が所持しているユーハングの技術であれば、写真、動き、声を確認する事が出来ます」
「声も聞けるの!?!」

「私はトキオさんの声は知りません。ですが皆様であれば聞いた瞬間、分かるかもしれ
ません」

「アイツの声なら腐るほど聞いてきたさ。本人であれば間違う理由がない」
「確認なされますか？」

「……お願い、私に彼の声を聞かせて」

ミヤコさんの懇願とも取れる声色。生きていると信じ続けても、穴という不確定な存在の為に迎えに行く事も、本人が帰還する事も出来なかったところに私が現れる。

人一人。ユーリア議員、貴女の言葉はいつだって正しい。

アコさんの手をそっと放して、ポケットからスマホを取り出す。海の画像や動画ばかりを見せてきたこの子には、曾祖父の元へ辿り着くまでに撮影した様々な写真と動画が保存されている。

その中には、道中バイクのオーバーヒートによって立ち往生をしていた私を助けてくれた人の事も。バイクと共に荷台に乗せて頂き、そこから見えた壮大な大地を撮影していた。

音量を高め調節して、皆さんが見やすい位置に三角立てをして設置する。

「大きさがこれだけしかないので、少々見えにくいかと思いますが、繰り返し再生するよう設定をしておきました」

三人の表情が其々、生きている事を確信し続けていた者、声と姿を見て本人であつて欲しいと願う者、戸惑いを隠せない者。

それも全て、この動画を再生することで何かが変わる。

北の大地で出会い、トラックの荷台に乗せられてから、様々な風景が映し出される。

私はこの時、物珍しさに動画を撮影をしていた。日頃、山ばかり囲まれた場所に居たから、久しぶりに見るこの風景全てが新鮮だったのだ。

そんな私が面白かったのだろう、助けてくれたトラックの運転手さんが荷台にいる私にわざわざ話しかけてきた。

「そんなに珍しいものか？」

「ずっと陸の孤島と呼ばれるような場所で山ばかり見ていましたから」

「なるほどな、それならこの広大な大地にある自然の実りが珍しくても仕方ないか」

「ええ、凄いです。広大過ぎて果てはあるのかと思うぐらいに」

「そうだな、俺もこの景色を始めて見た時は目を疑ったものだ」

「こちらの生まれでは無いのですか？」

「ここから少し遠いところから来たからな。まっ長いこと居れば愛着も沸くさ！」

なるほど。何かを機に移住してきた方なのか。最近では田舎暮らしが世の流行と耳にする機会が多い。住んでいる者からしたらどこに魅力を見つけたのか不思議な事が多いのだけだ。

ゆつくりと走るトラックの荷台でヘルメットを脱いだ顔に風が当り気持ちいい。私のバイクもこれで元氣を取り戻してくれると嬉しいんだけど、おハヤブサーー！ なんてね。

手にしているスマホを落とさないよう、運転を続けて固まっていた身体をほぐす為
に手足を伸ばす。

時折、聞こえるコキつとした音が移動距離と経過時間を物語っている。海側から内陸
部に移動しているとはいえ、広すぎる気もする。

「折角だ、道の駅で休憩していくか！」

「お時間は大丈夫なのですか？」

「生き物全て、休みがなければ生きてはいけないのさ」

「哲学的な事を申されていますが、なんていうか要するにアレですよね？」

「正直に言おう！ サボりたい！」

走行中だというのに風切り音を越えて大きな笑い声が周囲に響く。自分に正直に生
きてますね。でも気持ちちは分かります。

しばらくして道と田畑以外は何もないかと思われた大地に、ちよつとした大きさの建
物が見えてきた。こちらの建物はスケールが違う。

手慣れた手つきで駐車場に止められるトラック。荷台から降りて地面に足を付け、再
び背伸び運動。こちらにやってきたおじさん。よくよくお顔を見ると、以外とお若
い。

「おっし！ オッサンがソフトクリーム奢っちゃる！」

「マジで？ マジで？」

「マジだ。何食いたい？」

「その前におトイレ行きたいです」

「あ、俺も」

二人して笑いながら用を足す為に移動をした。もちろんこの時はスマホを一時的に止めていましたが。そこまでの領域には達していないし、今後も予定はない。何より犯罪だ。

パラソルが立てられた場所に置かれたテーブルと椅子に腰を掛けて二人してソフトクリームを頬張る。この暑さにこの冷たさは犯罪だ。

「しかし最近の機械は凄いな。こんなもので写真やら何やら撮れるんだろう？」

興味があるのか、スマホのレンズを覗き込んでみたりと面白い動きをするおじさん。技術の進むスピードは驚異的です。余所見をしていると、気が付けばあつという間に置いていかれてしまうのですから。

「そうらしいです」

「らしいってお前さんが使っているじゃないか？」

「こんなに利用するのは今回が初めてですよ。特に棒とか三脚は」

何時使うのだろうかと思ひながら購入した物が、ようやく日の目を見る機会が訪れた

のだ。今使わずして何時使うといったところか。

「とはいえ、こうして自分用の日記代わりに使うぐらいで、誰かに見せたりとかはほとんど無いんですけどね」

「あー、なんとなくだが分かるぞ。俺も若い頃は写真が苦手で避けていた。何で自分が写っている姿を人に見られるのは恥ずかしいんだらうな？」

「不思議ですよ。見知らぬ人に見られる可能性があるとむず痒く感じるとか？」

「それかもしれない」

気が付けば二人してソフトクリームを完食してしばしの雑談。

「そういえばお前さんの名前は？」

「ハルト、式守ハルトと申します」

「やっぱりあの爺様と同じ名前を背負っているのか！」

「それなりに昔から続いているみたいですよ。おじさんは？」

「おじさんは、おじさんだ！」

「うわっ、卑怯すぎる。お礼も出来ないじゃないですか」

「別に礼が欲しくて助けたわけじゃないからな。そんな事は気にするな」

手が伸ばされ、頭を荒く撫でられる。髪型がボサボサな状態にされていくのがよく分かる。

「ああ、でも一つお願いしてもいいか？」

「私に出来ることでしたら何なりと」

「そう固い言い方をしなくてもいいよ、ちよいと俺の事を撮影してくれよ」
「構いませんよ、カメラをそちらに向けてるだけですから」

レンズをおじさんがいる方向に向けて、倒れないように三脚を固定する。これなら多少、風が吹いても問題ないだろう。

「んっんっ、なんか妙に緊張したり羞恥心が湧いてくるな、これ」

「ただのレンズなのに不思議ですよ。写真ですか？ 動画ですか？」

「声が聞こえる方で頼む」

「それじゃ動画で。はいどうぞ、喋って下さい」

「もうかよ！ 心の準備はナシか!？」

「手軽で何度でも撮影出来る物ですから。まあ気にせずどうぞ」

軽く咳払いをするおじさん。人はどうして話題を変えたい時は咳払いを選択するのだろうか。あと気まずい空気の時とか。

「あーその、なんだ。これを見てもらえる機会があるとは思わないが、折角なので撮影してもらおう事にした」

「もう少し落ち着いて」

「さつきまでと距離感が縮まってないか!？」

「餌付けしてもらったので」

「ハルトはそれでいいのか……。まあ、いま名前を言ったしよ……。少年?」

「さつき一緒にトイレへ行きましたよね? せめて青年で。成人はしているので」

「す、すまん! 正直な事を言えば少女だと思っていた!」

「よく勘違いされます。それはいいから自分の事に集中して、はやく、やくめでしょ」

「トゲのある言葉にしか聞こえないぞ……。そんなこんなでたまたま出会ったハルトの手伝いの元、撮影をしてもらっている。長い間、離れ離れになっているが、俺はこうして五体満足で元気に暮らしているぞ。ちゃんと戻ろうと調べ物だっしてしているんだぞ?」

「忘れてるわけじゃないからな?」

「どなたかへの伝言でしたか、というか私、黙っていた方がいいですわね」

「構わないさ、独り言じゃ味気ないだろう? それに一緒にいるぞって証にもなる」

「確かに。でも相槌程度にしておきます」

「急に距離感を離すのな! まっ、こうして出会った人達とも仲良くやっているよ。ミ

ヤコとアコに会えないのは寂しいけどな」

「ミヤコさんとアコさんって言うんですか。むしろ妻子持ちでしたか」

「おう! 俺の嫁さんは綺麗だぞ! だからアコもきつと美人に育つさ!」

「へー」

「ソフトクリームを奢るといった時との差よ、俺の妻と子に興味ナシか」

「あつちは忘れていたりして。亭主元気で留守が良い」

「この子つたら！ 本性を露わにしてきたぞ！」

「現代っ子なもので、さーせん」

「はあ……俺は信じているぞ？ 覚えているよな？ 单身頑張っているから！」

「そんなに心配なら電話でもなされたら如何です？」

「それが出来ればなあ。まあこうして撮影してもらっているのも訳があるのさ」

「何だかボトルメールみたいですね」

「なんだそりゃ？」

「瓶の中に手紙を詰めて海に流すんですよ。不特定の人に送る方法なのですが、運よく拾った人がその手紙を見て、自分で実現可能な事が書いてあれば奮起しようとし、自分が駄目でも知り合いに頼んだり。でも大半は、これを読んだら返事が欲しくなって連絡先が書いてある程度みたいですが」

「そんなに真面目に聞かれても恥ずかしいのですが。世代的におじさんが好きそうな感じはするけどさ。」

「海かあ、そんな連絡手段があるとはなあ」

「特定者に対して、なんてのは無理ですよ？ どう考えても」

「だが、人の繋がりで届く可能性はあるんだろ？」

「まあ……そういう事例もあるみたいですが」

「なら俺はそつちを信じるさ。なに、こういうのは意外とあっさり本人に届くものさ！」

「余程の事がない限り、無理だと思ふな」

「現実主義者めえ！」

おじさん、本当に届きましたよ。イジツの事だとは露知らず、お仕事で単身赴任をされているのかと思っていました。奥様と娘さんのお名前まで聞いていたのに、おじさんの写真を見せてもらった事で全てを思い出したのだから。

ずっと日本、地球の何処かの話だと思っていたからさ、イジツでは自分の事で精一杯で伝えるのが遅くなったよ。ごめんよ。

この先も続く映像。そこではジョージさんの事や、ウタカさんについて話をされていた事が、今になって理解できた。

内側からこみ上げてくる何か。余り良い感情ではない事は確か。本来なら一人で行動はしてはいけないのだが、この場に居るのが辛い。

何を言う訳もなく、今も続く映像に全てを託して会議室から出ていく。

風に当たり、考えをまとめたい。この先起こり得る、自身についても、飛行船や疾風の問題も、イサオさんからの宿題も、全てを乗り切る為に。

自己嫌悪に浸るわけにはいかない。まだ、私の目的を達成できた訳ではないのだから。

だからこそ、今だけ瞬間的に気分を底まで落とし、次に進む為に自分自身を調節しなければならぬ。

その為に、ちよつとだけ一人になりたいのだ。

カナリア自警団 その20

底まで落とした気分を持ち上げる方法。幸いな事に私はそれを知っている。

それは私の羞恥心を感じさせた出来事を無理矢理思い出し、声を上げながら走り回る事。客観的に見てもどうしようもないことは分かっている。

だけど、これが最も手っ取り早い方法で、私の中に潜む自己嫌悪を引き出し、感情を丸め込め、ポイ捨てが出来るのだ。大概は紐が付いているから捨てられないのだけだ。

迷惑と分かっちゃいるが、そうでもしないとあの人達とは顔も合わせられない。ここ最近、覚え始めたイズルマの町をひたすら疾走していく。

頭を押さえる様に耳を塞ぎ、大きく口を開けながら、体力が尽きるまでひたすら走り続けるしか私には方法が無いのだ。

息も絶え始めた頃、ようやく心が落ち着きを取り戻す。ああすれば、こうすれば、そんな事を考えていたら先へ進めない。無理矢理な処置だが、今回も上手くいったようだ。

周囲を見渡せば、そこは見慣れた景色となった広場であることに気が付く。辺りもすっかり闇へと変貌を遂げる。

日々、体力作りをしているとはいえ、こんな時間になるまで走り回っていたのか。筋肉は裏切らない。それは体力も。

目に止まったベンチに腰を下ろして、俯きながら呼吸を整える。しばらくの間、こうして幾度か息を吸っては吐いていけば、落ち着いた頃にはまた詰所へと戻れるだろう。もつとも恐ろしいのは、皆さんからの視線だ。怒られる事は確かだよなあ。軽蔑はされるだろうなあ。

震電、どうなっちゃうんだろうなあ。一層の事、逃げ出し……たくは無いな。それだけにしてはならないと思う。

結局、腹を括って詰所に帰るしかない。自己嫌悪は追い払えても、不安はどうしたつて残るのだ。

顔を上げてベンチから立ち上がるうとした瞬間、私の名前を呼ぶ人の声と影が見えた。

「ハルトさん！ 見つけましたよ！」

顔を上げれば、先程まで一緒にいたアコさんの姿が目映る。私を探してくれていたのか、息が乱れていて肩が上下に動いている。

「ミツカリマシタ」

「もう！ 突然、会議室から飛び出して行くんですから！ 一人で行動しては駄目だとあれほどレオナさんにも言われていたでしょう！」

「ゴメンナサイ」

「隣、座つてもいいですか？」

どうぞ、の意味も含めて端に移動する。アコさんが隣に座る事により、このベンチは満席だ。元々が小さめに作られてあるようで、アコさんとの距離は近い。

「走つて落ち着きましたか？」

「おかげさまで、よくご存じですね」

「あれほど分かりやすく居場所を伝えてくだされば、私にも分かりますよ」

「追いかけてきたんですか!？」

「いやあーハルトさんつて、足が速いですよね！」

「(言えない……エルに上空からハルトさんを確認してもらったら、同じ場所を周回していると聞いて、力尽きるのを待っていたなんて)」

息切れを起こさせてしまうほど、私の心の調節につき合わせてしまったのか。それでも私よりまだ余裕がありそうところは、やはりイジツ人。根本的に何かが違う。

「すみません、突然消えてしまつて」

「大丈夫ですよ、ちゃんと気づけましたから」

「アコさんもお父様の映像をゆつくりと見たかったのでは？」

「んー確かに。でもお父さんの元氣そうな姿を一目、見れたから。後はお母さん達に任せればいいかなって」

「アコさん、お強い」

「いやいや！　なんていいいますか。お父さんがまだイカルガ自警団の団長として働いていた頃は、多忙でなかなか家に帰ってこれなかつたんですよ。だから正直に言う……あんまり覚えていないんです、お父さんの事」

両手の指先をツンツンとしながら照れ臭そうにそう語るアコさん。世界は違えど、誰かを守る職業に付いていらつしやる方は、どここの家庭でも同じなんだなあ。

「私の父親も自警団のようなどころに勤めていますから、僅かにですが分かりますよ」

「ハルトさんのお父さんもそうだったんですか!？」

「父親だけでなく、祖父も、曾祖父も。なんだかそういう家系の元に生まれたみたいですよ。それでも一度として同じ道を歩めとは言われなかつたなあ」

大学に通っていたら曾祖父に呼び出されて、気が付けばイジツ。他の二人はこの事を知っているのかな？　一切話さず、触れず、出会わずに來てしまった。

「私は自警団学校に入学して、本来なら卒業後に駆け出しの団員として始まるはずだっ

たんですが……。皆さんにとってお父さんの娘という立場の私は使いやすかったみたいで」

頬を掻きながら少し困り顔のアコさん。本人が望まなくてもそういう事を仕掛けてくる人はいるよね。直接的ではなくて、興味を持ってもらおうと行動する人なら助かるのだけれど。

「エルさんに少しだけ伺っておりました。カナリア自警団は一人から始まったと」

「はい。最初は人集めから始まり、お飾り自警団と呼ばれながらもお仕事をごなしていき、最後にシノさんが加入してくださり、六人になったときはとても嬉しかったです！」

「シノさんが最後つてちよつと意外、でもないか。自分に厳しいお方ですし」

「あれでも性格は丸くなったんですよ？」

「うそでしょう!?!」

「ホントです！でもハルトさんの訓練に付き合っている時のシノさんは、私が出会った頃のように見ていて懐かしいです」

なるほど、訓練中の教官殿が昔のシノさんだったのか。ツンツンで誰かが立ち入る隙も無かったんだらうなあ。

今も時折、キツイ物言いをされる事はあるけれど、上手く操縦出来れば、きちんとお褒めの言葉を頂くことが出来る。嬉さと恥ずかしさが交じり合うせいで、大抵、変な返

事になってしまい怒られてしまふけれど。

「シノさんはきつとああいふ性格だから直接言わないと思いますが、宿舎ではよくハルトさんの話をされているんですよ？」

「それはお恥ずかしい。怒った話ばかりでしょう？」

「それがですね！ 私たちも驚くぐらいとつても褒めているんですよ！ 自分の話を良く聞き、素直に受け止め、訓練に生かしているつて！」

言われた事を復習しているだけです。そうしないと前回覚えた事はどうしたの！ つて雷を落とされるから。でも最近はそれも良……。まだ私には早い世界だ。素直に褒められたい。羞恥心に再び着火点。

「エルは自分の知らない世界を教えてくれるつて嬉しそうに話をしたり」

「あの世界は知らない方が良い気がするのですが。でも市長とお会いした時に私も知らない世界を見させていただいた気が」

「あはは……。エルは甘えさせ上手ですからね。ハルトさんも口元を拭いてもらつていたじゃないですか！」

そうだよ、お昼ご飯食べていた時にあーんしてもらつてた。口元を拭き拭きしてもらつた。イツルマの闇は私の闇でもあつたのだ。着火点その二。

「リツタさんは大きな弟が出来たみたいだ！ つて。少し目を放すとすぐ何かを仕出か

すところとか!」

「仕出かすのか、巻き込まれているのか、議論の余地がありそうですが、レオナさんも一緒にいたからなあ」

「二人ともハルトさんのお姉ちゃんしてますもんね!」

二人とも心配性なお姉ちゃんである。むしろ私が甘えん坊なせいじゃないかと最近思い始めた。平気で撫でてえ……撫でてえ……。と要求していますし。着火点その三。

「ミントさんはユーハングの絵に纏わる話が沢山聞けて嬉しかったようです!」

「アコさんもウネウネした絵を見ますか? そのうちミントさんに描かれてしまうかもしれないよ?」

「それはちよつと……」

流石のアコさんも若干引き気味に。文学少女かと思えば、中身は超武闘派という事に初見で見抜けるものなのだろうか。

熊すら倒せる一撃をお見舞いされて、今も生きている事に感謝しよう。鉄棒ぬらぬらジジイのせいで着火点その四。

「ヘレンさんは……何も言ってますね」

「人に興味があるのかさえ怪しいところなのですが」

「ですが! 誰かの為に親身になって動いているところは、私がヘレンさんと出会って

からはまだ二度目です！ 誇っても良いと思いますよ！」

その誇りは甘えではないだろうか？ やはりイツルマへ、カナリア自警団と出会ってから気……は抜いているつもりはないけれど、甘えん坊になつてゐる事は確かだ。家にいえーいした時の勘違いにより、着火点その五。

「こうして並べられると、イツルマへ来た当初の目的を忘れそうになります」

「それはもちろん！ ハルトさんの誤解を解く為ですよ！」

「その誤解が真実だった今は？」

「私のすべき事は変わりません！ ハルトさんの身は全力でお守りするのが私の仕事ですからー！」

「あの震電は元々イサオさんの機体で、イサオさんの手引きによつてイジツへやつてきたと知つても言えますか？」

「勿論です！ 自警団に勤める者として、イケスカ騒動を起こしたイサオについて発言するのは難しいですけど、騒動を起こしたのはハルトさんではありませんから！ 罪を憎んで人を憎まず！ つてあれ？ なんか違うような？」

自分の言葉に首を傾げて考えるアコさんの姿に、笑みが零れてしまう。

やつぱり、アコさんは立派なカナリア自警団の団長だ。誰が何と言おうと、この人がいなければ成り立たない。そう思わせてくれる程に。

「もう……ハルトさんは、本当に甘えん坊さんで、泣き虫さんでもあったんですね」

気づかない内に涙が流れていたようで、アコさんがハンカチを取り出して涙を拭き取ってくれる。だつてさ、嘘ついて怒られるだけならまだしも、軽蔑されるかなあとか考えてたなんて言えないじゃん？ 気が動転していたりとか原因はあるけどさ。

「拭いても拭いても止まりませんねえ……。あつ！ んーでも恥ずかしいけれど……」
成すがままにされた私は、少しずつこれから先の事を考えられるまでに復活してきた。手始めに私の正体を皆さんに伝え、その後は……。

「は、ハルトさん！ このままでは埒が明かないので！ その！ 粗末な場所で申し訳ありませんが！ よろしければどうぞ!!」

背筋を正したアコさん。そのお顔は既に赤く染まり、僅かに動かされている手が招く場所。それは膝の上。ひざまくら。

涙が止まらずじつと座っている人間と、自身のふとももを手で小刻みに叩き続ける人間。これを他の人間が見たらどう感じ取るのだろうか。

この場合の正解は？ 分からないけれど、感情の赴くままに身体を委ねよう。

アコさんの綺麗な足を傷つけないように、そつと優しく頭を乗せた。頭部から伝わる人肌。涙で歪んだ世界でも分かる、アコさんの綺麗なお顔。先程よりも優しく拭われる涙。これはもう着火点どころではなく、爆発するほかない。

「うわあ！ 大丈夫ですか、ハルトさん！ さつきよりも涙を流す量が！ そそそ粗末な膝で申し訳ありません!!」

「さらさら、ぬくぬく、ムチムチ」

「いま最後になんて言ったー!!」

全力で両頬を引つ張られて伸び切る私の姿。良いと思うんだけどなあ、健康的で。私には勿体ない程の場所だ。

願わくば、ミントさんに知られる事にならないよう、祈るしかない。再びあの世界で、あの人達と再会するにはまだ早すぎる。

「ハルトさん、泣き収まったらでいいので、一つお願いをしてもよろしいでしょうか?」
「なんなりと」

「えつと……。先程はお父さんの事はお母さんについて言いましたけど、本当はお父さんの話を聞きたいんです。何をしていたのか、どんな人だったのか、もつと聞いてみたいです」

「私との出会いは、ほんの僅かな時間でしたよ?」

「いいんです! あんなに親しそうにお父さんと会話をするハルトさんから聞きたいんです」

「分かりました。もう少しだけお待ちください」

「ゆっくりでいいですよ。泣きたい時は好きなだけ泣いた方が心と身体に良いですから。それに私もこうしていると落ち着くんです。不思議ですよ、ハルトさんって」
そう言われてもこちらから何か言える訳が無い。荒ぶるイジツ人にほんの少し安らぎを与える存在。ペットか何かじゃないかな？

もう少しだけ泣かせてもらったら、思い出話をして、また頑張ろう。出来ればカナリア自警団のみんなと共に。

「ムチムチ」

アコさんにこの一言は禁句だ。あやすように撫でる掌が、瞬時に拳へと変形する程だから。

カナリア自警団 その21

イツルマが闇に溶け込み、星々の光と窓辺から漏れる光が町全体を覆う頃、アコさんと続いていたお喋りは一度、終わりを迎える。

『大丈夫ですよー』そう私を励ましてくれるアコさんのお顔をいまだ直視出来ないのは、羞恥心だけなのか。

ともあれ、足取り重くも詰所へと戻り、謝らなければならない人達がいる事は事実であり、なんだか幼少の頃を思い出す体験だ。いくつになっても怒られることは慣れない。

「ただいま戻りました！ ちゃんとハルトさんを捕まえてきましたよ！」

「捕まりました。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

戻ってきて早々ながら、謝罪の言葉と頭を下げて態度を示す。これ以外、言葉や仕草を思いつかないのだ。

詰所にはカナリア自警団の皆さん、ミヤコさんにジョージさん、議長や部長さんもいらして、少し手狭にも感じられる。ここにいる全員を代表をするかのように、議長が一歩前へ。

「頭を上げな！ そのままじゃいつまで経っても話が進みやしない」

「しかしながら私が仕出かした事は皆様に対して大変失礼に当たる事でもあり私自身も皆様に対してどのような顔を合わせても良いものかと思うと頭など到底上げらっ!!」

下げた頭部に衝撃が走る。長々と言い訳の為に口を動かしていたら、議長から一撃を頂いたようで痛みがじんわりと伝わる。

「言い訳にその口を使うのなら、私らにきちんと説明をする方に使いな!!」

「はい!! 分かりました!!」

そのやり取りを横で見っていたアコさんは、頬を搔きながらも笑みを浮かべていた。

「あの人の無事を知れた事が、私にとって何よりの報告だったことがハルト君には分かるかしら?」

「ワカリマセン、ミヤコサン」

「貴方がユーハンクからやってきた事や、震電を所有していた理由を全て吹き飛ばしちゃうぐらいなんだから」

笑みに包まれたお顔。間違いなく惚気話を聞かされているのは理解した。でも考えてみれば曾祖父がイジツへ来ようとした理由と似た話なのだから。

「生きていると疑う事は無かったが、これを見た限りではユーハンクに馴染み過ぎてい

ないか？」

家畜を搭載していたと聞いていたから、畜産を営んでいるのだろうか？ 曾祖父とも知り合いらしいし、二人の間に何かがあつた事は確かだと思ふけれど。詳しい事に関しては、日本に戻らないと分からない。

「お二人から見て、本当にあの方がトキオさんで間違いないのですか？」

「勿論、ずっと見てきた顔と声ですもの。でも昔よりもちよつとだけ渋くなつて格好良くなつていたかしら」

「子供たちが大人になるぐらいさ。それに自警団の制服を身に纏つていた頃よりも、顔つきが穏やかになりやがつて」

「あら、そこがいいじゃない。忙しくてまともに家へ帰れなかつたあの頃が大変だったのよ」

「違うない」

思い出話に花を咲かせるお二人の間に、割り込むように議長が入り込む。

「トキオが無事に生きていた事は何よりの報告である事に違いない。が、聞かなくてはならない事もある。ハルト、答えてもらうよ」

「了解致しました。私の知っている事であればなんなりと」

「アンタは七十年前に消え去つたとされるユー・ハングの人間である事に違はないね

？」

「はい、あの穴の先からやってきた、皆さんが言うところのユーハングの人間です」
 「そしてアンタの名前の前に『シキモリ』が付いている事も間違いは無いんだね？」

「はあ、私の名前を正確に伝えますと『シキモリハルト』になりますが」

両腕を組んで椅子にもたれる議長の姿。なんとも意味深な態度であるが、私の名前を聞き直してどうしたものや。

天井を見つめたまま無言でいた議長が、大きくため息を付き、再び私に視線を合わせる。その内容は私を驚かせるものであった。

「ハルトの目的である探し人。私が知っている人物かもしれない」

「知っているんですか!？」

「私自身が見たわけじゃないよ。私の母が世話になったユーハングの人間に、その名前が合ったと聞かされたのさ」

「議長の母上に? 世話?」

「私が生まれる前の話さ。命の恩人でタネガシからイヅルマへ逃げ出せたのも、あの人のおかげだと、よく聞かされていたものさ。今更思い出すなんて歳は取りたくないね」

「命の恩人ですか。それはなんとも」

「ハルトは何か聞かされていないのかい? その人に関する事を」

探し人について。曾祖父の弟であり、私の曾祖叔父に当たる人。一通の手紙に穴に関する事を曾祖父に伝えて日本から消えてしまった人。そして……。

「曾祖父曰く、ただ怠けたいだけの人だと聞かされています」

私の発言の後、皆の視線が一つに集まる。その先にいる人物はいうまでもなく。

「何事も無かつたように寝てますね」

「へ、ヘレンさん！ 起きてください！ 大事な話の途中ですよ！」

リッタさんが懸命に揺さぶり起こそうとするが起きる気配は無い。

我、関せずなのか、今日一日の疲労が出始めたせいかは分からない。多分、前者だと思ふ。

「それだけかい？」

「それだけです。だからこそイジツへ来たとも言えますが」

「確かにそうさな。母は怠け者が怠けたいだけの理由で救われたって話しかね」

口調は荒つっぽくも、笑いながらそう語る議長。私から何を申し上げてよいものやら。

なんせ手紙にも面倒だとか、当時の軍人さんとは印象の違う内容ばかり書かれてあったものだから。

でも、そんな性格の曾祖叔父だからこそ、救われた人がいるんだ。これだけでも曾祖父に伝えられる事が出来れば、きつと何かを感じ取ってくれるだろう。あちらは兄弟な

のだから。

「はいはい！ 自分も質問よろしいでしょうか!？」

「なんででしょうか？ リツタさん」

「あの震電はイサオが搭乗していたものなのですか!？ 積まれている謎の発動機はユー・ハングのものですか!？ ユー・ハングにはイジツに残された機体以外もまだまだ沢山の機体が眠って……」

「震電や発動機の前にイサオとの関係よ!!」

「シノさん！ 横やりはズルいですよ！」

「ハルト！ 貴方は本当に探し人の為だけにイジツへ来たの？ イサオと何か密約を交わしていないでしょうか!？」

密約。イケスカに向かい執事さんと出会い、ブユウ商事の再興は……どう考えても密約だよね。

「イサオさんから頼まれた事がありました」

「それは私たちに教えられることなの?」

「皆さんがどう受け止めるか分かりませんが、お伝えします」

イサオさんの只の気まぐれとも思えた執事さんへの言付。頂いた返事の内容について、私と一緒に頭を悩ませるユーリア議員等々。

「えっと、ハルトさんはイサオが率いていたブユウ商事の時期会長になられるわけですか?」

「絶対に嫌なのですが、そのような流れを作らされてしまったわけです。ミントさん」

「そもそも、色々理由はあれどイサオの言う事をそのまま聞くわけじゃないでしょうね?」

「そうしたいのも山々なのですが、イサオさんがこのタイミングでイジツに戻ってきていたら、またこの世界は争いの渦に巻き込まれるわけでした。それを避ける為に私が駆り出された経緯もありつつ。それに……」

「それに、なによ?」

「出会いが皆さんと違うせいなのか、私はイサオさんが嫌いじゃないんです。変な人だし、とんでもない大悪党にも関わらず、どこか惹かれているところはあります」

これは本当の事。だからこそ、あの異常なカリスマ性と行動力を良い方向に向けて欲しくて私は動いているのだから。その『良い方向』も人其々なのはいうまでもなく。

「でも、小型飛行船から始まった今日の騒動は、マダムルウルウの言葉が正しければ、元自由博愛連合のイサオ直属部隊の犯行よね? それについてはどうなのかしら?」

「イケスカにおられる執事さん曰く、『イサオさんを盲信する連中がいると』」

「その人達に問いかけ……たらイツルマにいる人達全員にイサオが生きていた事が知ら

れてしまいますね」

「はい。そして彼等は私の言葉には耳を貸さないと思えます。せめて場を設けることさえ出来れば」

「そんな事は無理だね。空賊を雇ってまで小型飛行船の奪取、それを換装させてイヅルマでイケスカの再現を行おうとする奴等だ。素直にこちらの話を聞くとは到底おもえんよ」

アコさんの問いかけ、議長の言い分。どちらも正しく、事実上相手の犯行を阻止、または失敗させる方が現実的という状況下。残念ながら力には力で対抗しなければ、蹂躪されるのが世の常である。

「なら、また私たちも手伝っちゃおうかしら？」

「おおお母さん！ あんまり無理しないでよお！」

「アコ、私にはハルト君の力になりたい理由が出来ちゃったのよ。それがイヅルマを守る事に直結するのなら尚更。ね、ジョージ？」

「そうだな。まだ聞きたい事もあるが、終わらせてからでも十分間に合うだろう。そしてトキオの事を伝えたいヤツが一人いる」

「分かつとるよ。ウタカに、だろう？ 私も小型飛行船について本人に直接聞かないといけない事がある。パロット社へ乗り込んだ程度じゃ分からない事も含めてね」

「その、ウタカさんは今どちらにいらっしやるんですか？」

「幸か不幸か、自警団の取り調べが今も続いてたおかげで、ここの敷地にある独房に収まっとるよ。刑務所に送られる前でよかつたと言うべきかね」

「逃げずに罪を償う道を選んだ結果だ。だからこそアイツにも伝えたい。トキオは無事である事を」

「後はウタカに会う為に、今日か明日かを選ばなきゃならない」

「それについて議長に具申させて頂きたいことがあります！」

「なんだい、アコ？」

「本来、取り調べの際には決められたルールがありますが、今回の出来事は今すぐにでもウタカさんと面談をした方がイヅルマの安全へと繋がるかと」

再び天井を仰ぐ議長。アコさんの意見と自分の考えは一致している模様だが、悩んでいる理由は今後の事についてだろうか。

「ふう、そもそも小型飛行船を見逃せと指示した時点で私はお役御免だ。なら最後までキツチリ仕事を果たすでしょうかね」

「あ、ありがとうございます！ 議長！」

「ハルト、アンタはどうするつもりだい？」

「身から出た錆ではありませんが、イヅルマを守るのに私の力がお役に立てるのであれ

ば、好きなだけコキ使ってください。それが皆さんに嘘を付いていたお詫び……とも違
うかな」

「あら、それとは別なわけ？」

「イヅルマが好きなんです。カナリア自警団の皆さんと一緒に行動を共にしていたから
かな？　だからこれは自分の意志です」

改めて言葉にすると恥ずかしい。けれど意志は明確にハッキリと言葉にして伝えな
ければ。回りくどい態度は後々尾を引く事になるから。

「ここに居る皆は、其々ハルトに聞きたい事は山ほどあるだろう、だが今はイヅルマを守
る事に集中してはくれないか？　その代わり、終わったら好きなだけハルトの事を好き
にしていぞ。議長……私個人が許可する！」

「せめて話だけにしてくださいよ！」
「それを決めるのは彼女たちさ」

カッカカッカと笑い始める議長を尻目に、各自の目が獲物を見つけた時の視線になつた
のを、私は見逃さなかった。

カナリア自警団 その22

幾つかの扉と通路を渡り、建物内を歩くこと数分。辿り着いた先には、鉄格子の扉と護衛をする自警団らしき人物の姿。

先程までとは半分に人数が減っているとはいえ、警戒されるのも無理はない。

「その線でお止まり下さい。この先は留置所です。面会時間は既に過ぎておりますが、どのようなご用件でしょうか？」

「カナリア自警団団長のアコです。こちらにいらつしやるウタカさんにお会いさせていただきますのですが」

「繰り返しになりますが、面会時間は過ぎております。が、許可証をお持ちであれば話は別です。お持ちでしょうか？」

「(ト)こちらに」

「確認作業を行いますので、しばらくそのままお待ちください」

アコさんから許可証を受け取った団員は、そこに書かれている人数の確認をするように目を配らせる。アコさん、ミヤコさん、ジョージさん、そして私の四人。

その後、小部屋へ移動をして整合性を図るようだ。

今回、議長は許可証をアコさんに託したあと、早急に町全体で対策を練る必要があると言葉を残して詰所から去っていった。

あの事件の時に、空を飛んでいたと聞かされた人物の中で、シノさんとヘレンさんがこの場にいない理由。

「大人数で押し寄せる必要なんてないでしょう？　会うべき人間が会って、話をすべきよ」

「なら私も必要ないと思うのですが」

「ユー・ハングを証明する事が出来るのは、ハルトだけでしようが！　明日から射撃訓練を初めて少しでも戦力になってもらうからね！」

「うえい、教官殿」

「なんべん言えば分かるのっ！　もう……信じているからね、ハルト」

微笑みながら私の胸をコンコンと軽く叩くシノさん。日頃の鬼教官の姿はどこへやら。この信頼は裏切ってはならない。

問題はヘレンさんだ。リツタさんが懸命に揺らしても起きないのだから、起こすのは相当苦勞しそうであり、そこまでして起こす必要性もあるのかという問題も。

「ハルトさん！　見ていないで手伝ってくださいいよお！」

「親御さんのいらっしやる前で娘さんに触れるのはちよつと」

「ほう、俺がいなければ問題ないのか？」

「問題ないです」

刹那に感じる圧力が再び……かと思われたが、ミヤコさんがジョージさんの足を踏みつけて阻止して下さったようだ。

こちらに向けて『早く起こさない』と仕草を送られる。とはいえ、実際問題としてどうやって起こしたらよいものか？

「そもそも、ヘレンさんを起こせた事つてあるのですか？」

「ここまで爆睡しているのは初めてで！　こうなればイザという時の納豆を取り出すほか」

「リツタ、それだけは止めなさい」

あのエルさんから発せられたとは思えない程、低い声。苦手なタイプでしたか。話題を逸らす為に話を変えたかったが、気になる事がある。

「あれ、というより納豆つてイジツにあるんですか？」

「私の実家で試験的に作り始めた物なんですよ！　ユーハングの食べ物なんですよね!!
食べ物ですよね!!」

ヘレンさんそつちのけで納豆について前のめりに問いただしてくるリツタさん。近

い！ 近いです！ フワツとした毛先が鼻孔に触れてくすぐりたい。

「食べ物です。ちゃんとした発酵食品です。好き嫌いは分かりますが、食卓に並べられる程度に身近な食べ物です」

「良かったあ……。話をして実物を見せると、みんな食べ物じゃない！ って言われてたんですよ」

「ユーハングでもそう言われる方もおりますから。イジツでは尚のこと仕方ないかと」

「ちなみにハルトさんはどういった食べ方をされますか!？」

「た、食べ方？ 普通に醤油を数滴垂らした後、まぜまぜしたらご飯の上に乗せるだけですがあ!？」

突然掴まれる私の手、リツタさんの小さく柔らかかなその手を感じる暇も無く、押し寄せてくる力に耐えるので精一杯だ。

「流石です!! シンプルながらも王道を行くその食べ方!! フツチにハルトさんの爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいですよ!!」

「ふ、フツチさんはどのような食べ方をされて?」

「お茶碗が汚れるからってホカホカのご飯に乗せないですよ!!」

それもおもつともな理由だと思えますよ。洗い物をする時に楽な方は、いうまでもないですし。

「一つ伺つても良いですか、リツタさん？」

「なんなりと！」

「納豆にトッピングはアリなんでしょうか？」

「ありです！ 美味しさを引き立てさせる物ならなんなりと！」

「ね、ネギは？」

「ありです!!」

「か、カラシは？」

「ありです!!」

意外と許容範囲が広がった。生卵は流石に厳しそう。一般家庭ではイジツはおろか、日本ぐらいではないだろうか、食せる環境が作り上げられたのは。

「あ、あの！ ヘレンさんを起こさなくてもよろしいのでしょうか？」

「ああ！ すみません、ミントさん！ 納豆について語れる同志がいたもので！ さ

さつとヘレンさんを起こしてください、ハルトさん！」

ついにはパンケーキの同志から納豆の同志にまで。イジツの奥深さを知る。

とはいえ、実際どうやって起こせばいいのだろうか？ 揺すつても駄目、くすぐるの

は……もつと駄目だ。耳元で囁けば起きるのだろうか？

ならば何を囁けと？ ご飯だよって伝えれば起きるのだろうか。熟睡相手に通じる

か？

もう少し威力がありそうな言葉。なら先程までリツタさんと会話をしていた内容と、食堂でご飯を頂いた時に小耳に挟んだ内容を口にしてみよう。

『ヘレンさん、ヘレンさん、起きないと納豆とシノさんの手料理ですよ』

突如、開かれる目。鋭い眼光がこちらに向けられる。どっちが駄目なのだろうか、やつぱり納豆？

「おはようございます。目が覚めましたか？」

「死ぬところだった」

そのレベルで嫌なのか……。

結局、私の頑張りなどヘレンさんの『めんどろ』で片づけられてしまったわけで。

今は檻の先へと通された後、机と椅子しかない部屋へと案内された。

どうやらここへウタカさんが連れられてくる模様。しかしながら場所が場所であり、人物が人物なだけあるので、看守らしき人物が何人か。

ウタカさんから聞くべきことは、小型飛行船の存在と自動操縦の可能性について。伝えるべき事は、トキオさんの生存。

捜査に協力的とは道すがらアコさんから聞いてはいるが、後者に関して信じてもらえ

るものだろうか？

看守がいる時点で、あの映像を見せるわけにもいかず。全てはミヤコさんとジョージさん頼りだ。

お二人から伝えられる言葉であれば、トキオさんの生存を、これから起きるであろう出来事に力を貸してくださいさるだろうか。

全ては、今から始まる。

「すまない、待たせたな」

「いえ！　こちらこそ、夜遅くに訪れてしまい失礼致しました！」

「罪人に気をつかう必要はないさ。それに珍しい顔と見慣れない顔がいる」

「ウタカ、貴方に伝えたい事が出来たのよ。それもいい先程ね」

「見慣れない顔がいるのはそのせいかな？」

「ああ、コイツが俺達をここへと連れて来させた理由でもある」

「ほう……」

ウタカさんの視線がこちらへと向けられる。本来であれば接点は何一つ無いのだから、こうして出会う理由は無い。

だけど、こうして出会ってしまった。これが良い事か、悪い事なのか、私が判断すべ

き事ではないだろう。

「ごめんなさいね、アコ。貴女のおかげで部外者である私達がウタカと面会させてもらえるというのに、伝える方を優先してしまつて」

「大丈夫だよ。お母さん達は、イヅルマでは誰もが知る元自警団員だから特に問題はなかつたみたい。ハルトさんに比べれば説明が不要で問題なかつたよ」

「忘れた頃にやってくるアコさんの無垢な笑顔と言葉。本日も切れ味は抜群です。何かもの言いたげな二人の視線を感じるが、私の事なぞ気にせず。」

「ウタカ。あの人が、トキオさんが生きていたのよ」

「……そうか」

「もう、貴方までジョージの様な反応をするのね。それじゃ良い人が出来てもジョージと同じで別れちゃうわよ?」

「その話はマジで止めろ。今言う事じゃないだろう」

あれ? 別れた? ヘレンさんのお母様がいらつしやらなかつた理由つてもしかしてそれ? また一人で盛大に勘違いをしていた自分がいる事を思い出し、顔が熱くなる。

「彼が伝えてくれたのか?」

「そうよ、ハルト君つて言うの。彼も私達と同じで探し人を求めてイヅルマへやってき

たのよ」

「それを証明出来るものはあるのか？ 二人が言葉だけで信じるとは到底思えないが」

「ある。顔だけじゃなく、声まで聞かされたからな。俺がトキオの生存を信じ続けていたとはいえ、別人をアイツだと思ひ込むほど老碌してはいない」

「……なるほど。ここでは言えない何か起きたという事は理解した」

「相変わらずそういう事を察するのは早いわね」

「ハルト、といったか。伝えてくれた事に感謝する」

「いえ、偶然みたいなものですから」

「我々はその偶然を追い求めて生きてきたのだ。久しぶりに良い話が聞けて私も嬉しいよ」

僅かながら口角を上げて笑みらしきものを浮かべるウタカさん。

「君の探し人は見つかったのか？」

「残念ながら未だ。居たとされる場所は幾つか知る事が出来ました」

「すまない、我々ばかり良い思いをさせてもらい」

「とんでもない！ そのおかげで様々な人達と出会えましたから」

照れ臭さも相まって視線を周りにいる人達に向けてしまう。笑われてるのはご愛敬。

ウタカさんが一つ呼吸をして再び表情を戻すと、あちらから話を切り出される。

「ここにカナリア自警団の団長が居るといふ事は、話はこれだけでは無いのだろうか？」

カナリア自警団 その23

「ウタカさん、教えてください。あの小型飛行船は一体何なのでしょうか？」

「見ての通りだよ、アコ君。我々が現在使用している飛行船のご先祖様。とでも言えばよいか」

「ここまでできて貴方のナゾナゾに付き合う理由は無いのだけれど？」

「すまない。だが、問われた内容に答えるとしたら、それ以外に返す言葉が見つからない」

「素直にアレに關した話を伝えればいいだろう」

「そうだな。茶化したつもりはないが、不快に感じたならば詫びよう」

「いえ！ 大丈夫です！ 是非その話をお聞かせ下さい！」

「了解した」

ウタカさんから聞かされた小型飛行船に纏わるお話。事の全てはイヅルマで起きた出来事から始まる。

イヅルマを支配していた自警団上層部、及び町の有権者を排除するパロット社の計画を全て終えた時、ウタカさんが行おうとしていた事の一つ。それは穴の先にいるトキオ

さんを救い出すという目的。

それを遂行する為に用意された物は、穴へと進入出来る大きさの飛行船。

だが、現れる穴の大きさがどの程度か不明。現在、製造されている主要の飛行船では通れない可能性も大きい。その為の予備として製造されたのが小型飛行船であった。

穴に突入した際に、支援用途として最低限の物資の輸送。しかし、小型とはいえ飛行船を動かす為には人員が必要であり、それを解決するのが自動操縦装置である。

自動操縦装置によつてどの程度まで操縦が可能なのかは分からない。少なくともウタカさんの説明を聞く限り、戦闘機から無線によりある程度の操舵が可能なことだ。

可能な限り自分一人で事を済ませようとする辺り、イツルマの男達は寡黙ながら内に秘める意志の強さは人一倍。女性が強いのはイジツ特有……でもないか。

「あれ？ でもパロット社はあの飛行船を取引の為に譲渡されるはずでしたよね？」

「そうなのかね、アコ君」

「はい。町の方針により技術者保護の為にパロット社は解体されず、今回の引き渡しについても彼らに支払う給料の為、現金化する必要があるからと聞かされていたのですが……」

「それが嘘か真か分からないわ。ただ、現実は一人の議員が離反を起こして小型飛行船と共に去り、その護衛として雇われていたのは、イサオ所属部隊の黒い疾風。で合つて

るかしら？」

「うん、お母さんの言ったとおりで合ってるよ。疾風についての情報はラハマのオウニ商会から教えていただいたんです」

「ほう、カナリア自警団にはオウニ商会と通じる人物がいたか。はたまた……」

「ウタカさんなら察しておられるでしょうが、ハルトさんを通じてです」

「アコさん達と出会った理由が、離反した議員が起こした強行手段による呼び出しなのですけどね」

私をイヅルマへと呼び出した真実は分からない。小型飛行船を奪取したあの時、もし私が震電に搭乗していなかったら、そのまま奪い去ろうとでも考えていたのだろうか。

真相は闇の中。

「全て、今日の日の為に用意したのではないかしら？　まるで誰かさんみたいね」

「私なら時間をかけて念入りに事を起こすさ」

「起こすな。もう少し人に頼れ、馬鹿野郎」

元はライバル同士だと知らされている大人の三人組。其々、想いはあれど、願う事はただ一つ。かくも偶然の重なり合うとは誰が想像出来るであろうか。

日本から探し人を求めてイジツへ。そこで出会った人達の中には、ユーハングへ行つたとされる人物を探すイジツの人の姿。その人物と出会った証拠を持ち合わせていた

私。

そして議長のお話を伺うに、私の探し人である曾祖父が、生存していた際に居た場所は、タネガシ。タネガシ？ あれ？ どこかで聞いた様な……。

頭の中で絶叫が響く。そうじゃん！ イヅルマで調べ物をしていた時に、資料の中で見かけたタネガシという地名。そこは様々なマファイアが存在し、その中にはゲキテツ一家の名前も！

アレシマで出会ったフィオさんが、私を部下にすると口にしていた際に、確かゲキテツ一家という名前が出ていた。勢力を拡大させる為とか言っていたから、少なくとも何かしらこのマファイアと関わり合いがある人達だ。ならばフィオさんと共にしていたあなたのお優しいローラさんまで!?

「大丈夫ですか、ハルトさん？ 急に顔色が悪くなっていますか……」

「今日の出来事をまとめたら、私の探し人を探すのに回避できない未来が存在してしまう事に気が付いてしまっただけ」

「具合が悪くなるほど深刻な未来なんですか!？」

「かなり、それなりに、結構深刻な問題として。でも、その未来を迎える為にも、この課題を無事に済ませなければ」

「ハルト、君は面白いな。町を破壊しようとする奴等が現れる事を課題と表現するか」

「無い頭を回転させて思いついたんです。イヅルマで起きた当時の出来事について、私は資料と人を通じてしか内容は分かりません。ただ、彼等の存在はイサオさんと大いに関わり合いがあり、宣戦布告とも取れる大胆な方法で小型飛行船を手に入れる」

「そして自分達が敗戦した方法でやり返し、自由博愛連合の意志をイヅツ中に知らしめる、か。だとしたら狙われるのはイヅルマよりラハマの可能性が高いと思うが」

「大胆に行動を起こした事は、彼らの復讐の手始めにイヅルマを。という意志を私達に伝えたかったようにも思えます」

「なるほど、事前に自分達の行動を見せつけた後に彼等の目的が達せられたならば、十分すぎる程の価値があるな。それに彼等を支えている者の中には、私が排除した者達も含まれているのだろう。そうでなければ短期間でここまで事が進むとは思えない」

「そこまでしてイヅルマを!？」

「奴等はおもちゃを取り上げられたんだ。痼癩だつて起こすさ」

「それが小さな子供であれば、可愛げがあるのだけれどね」

それが理由で自由博愛連合に手を貸していたとしたら、本当にどうしようもない話だ。イサオさん不在で誰が指示を出しているのかさえ不明だというのに。

「だが、自動操縦つてのはそこまで精密に動かせる物なのか？」

「ある程度だ。想像しているような機動はできんよ。それが飛行船であれば尚更。アコ

君がよく知っている」

「あはは……」

「例えそうだとしても、イケスカ騒動の再現を狙っているのなら飛行船には爆薬が搭載、おまけにブースターによる高速接近、どうやって止めようかしら？」

「上部にあるガス袋を撃ち抜き、墜落と共に爆破を起こせばいいが、問題が二つある」
「一つは護衛部隊の存在でしょう？ もう一つは？」

「推力に任せて飛行する物は、推力を断ち切らねば止まらない可能性があるという事だ」
「仮にその手段を選ぶとしたら、全てのブースターを撃ち抜かなければならないのかしら？」

「いや、左右どちらかを集中して破壊すればいい。自動操縦ではそこまで精密に補正は出来ない。片側のブースターの勢いに任せ、飛行船の進路が変更された後に落とせばいい」

「それが出来る状況ならいいんだがな」

ジョージさんの言うとおり、護衛はイサオさんの所属部隊。それが何機現れるのかも不明。唯一救いなのは、索敵さえ怠らなければ小型飛行船を見つけ出すのはそれほど難しい問題ではないという事だ。

「自分で発言しておいて何ですが、相手の成功率は元々低いですよ、この作戦」

「彼等を支えている出資者に対する活動も含まれているのだろう。だが、成功すれば効果は言うまでもない」

「相手からすれば奪った物だけで行える作戦。もしかしたら何か隠し玉でも抱えているのかもしれないわね」

「だとしても、イツルマで使用する確率は極めて低いだろう。今回の行動は自分達の存在を余りにも大衆に晒しすぎている。例えば何かを持っていたとしても、この様な作戦で使用するとは到底思えない。そこまでして彼等がイツルマに執着する理由も見当たらないのだから」

「はあ、広報活動は方法を選んで欲しいわね」

ため息をつくミヤコさん。呆れてしまうのも無理はない。結局のところ、根源はイツルマの元有権者たちの暴走とも取れるのだから、中々どうして闇が深い。方向性であれば市長を目指して欲しい……のも問題かな。

「私達が出来る事とすれば、日頃のパトロール任務を強化する事ですわね！」

「アコ達は本体が現れるまで体力を温存しておくべきだわ。イツルマの主戦力部隊であり、代表となるカナリア自警団なのだから」

「う、うえ!!? お母さん!!? そんなに褒めても何も出ないよ!!?」

「事実よ。索敵なら私達や他の自警団員が行えばいいだけよ。ね、ジョージ?」

「そうだな。これを止めるのはカナリア自警団の役目だ。サポートは俺達に任せておけばいい」

「ジョージさんまで!？」

この話の流れでいけば、シノさんとの射撃訓練はお流れになるのかな？　そもそも私が空に上がっても出来る事って無いよね？　大人しくしていれば……。

「それにね、アコ。何も出ないと言うけど、ちゃんと出せるものはあるわよ」

「へ？　何かあるの？」

「ハルト君をお母さんに貸して貰うわね。大丈夫、キツチリ仕上げておくから」

何も起きず過ぎさせる訳が無かった。仕上げるって何を？　何かされること前提の言葉ですよ。そつと私の肩に置かれるのはジョージさんの手。

「諦めろ。空賊が現れた時にシノの後ろを飛行し続けられたんだろう？　生きていれば

良い事もある」

「最後の言葉が不穏を感じさせるのですが、ジョージさん」

「ちよつとだけ、私からもハルト君に技術を教えたい事があるのよ」

「教官殿はシノさんだけで十分なのですが!？」

「あら、一途なのね。けど心配しなくても大丈夫よ、彼女の教えに少しだけ上乘せさせるだけだから」

「少しなの!? 本当に少しで済むのかな!」

「二人とも君に礼がしたいのさ。私からの分も添えて頑張りましたよ、ハルト」

ウタカさん。そんな簡単に言いますけれど、お二人はイツルマで伝説とまで謳われた元イカルガ自警団ですよ? ミヤコさんに関してはおつかない二つ名が付けられていたと記憶しておりますが!

「頑張ってください! ハルトさん! 上手になれる事は良い事ですから!」

「この状況下で上手くなる必要性ありますかね! 猫の手を借りたいほど戦力不足でも無いですよね!? ナンデドウシテ!」

「イザという時の為に、保険は掛けておくべきなのよ。期待が出来そうな子がいるのなら、特にね」

「うっそだー」

本音がつい零れてしまう。毎日が空戦のイジツであれば、私よりも上手い人材なぞ街中を探せば見当たるだろうに。

僅かながらミヤコさんに対して必死の抵抗を試みていると、看守に動きがある。どうやら面会時間の終了のようだ。こちらはそれぞれどころでは無いというのに。

「ハルト、最後に再び問いたい事がある。なぜこの問題を課題と表現をしたのだ?」

「そう言われましても。過去問は、予習と復習で解決できるからですよ」

私からの答えに辺りは静まり返る。そんなに黙らなくても。カナリア自警団という立派な人達が居るのだから、私が解決できるような事は無いわけで。空戦が関わる事で私に期待しないで欲しいのだ。

「その返答であれば、私からの課題にも応えてもらおうね！」

「私の知っている入試問題に空戦はありませんでしたよ!!」

カナリア自警団 その24

イツルマの上空から見下ろす街並み。それはいつもとは違い、人々は慌ただしく何かを準備を初めている。

市長から通達された内容に、町の住民が自分達でも何か出来る事はないかと役割を求め、議員や自警団の指示に従っている。

避難が可能な人達は、他の町へ一時的に疎開するように。それが不可能な人達は、自警団が指定した町にある堅牢な避難所へ集められる事になった。

その中でも、元自警団員の人達は早急に集められ、交代で町の素敵を担当する事になる。そこには私を議会へ行く際に護衛をして下さった人の姿も。

彼等は何時現れて、イツルマに牙を剥けるのは分からない。ただ、こちらとて素直には、そうですね。で済ませるつもりが無いのが町全体から伝わってくる。

熱狂とも言える雰囲気の中、私は震電と共に哨戒任務とは名ばかりのミヤコさんから指導を受けている最中である。

『あら、そんなに難しい事かしら?』

「上空から下降して標的と同じ高度になり次第、目標を射撃する。言葉にすれば簡単そ

うにも思えますけど」

『簡単よ。どのタイミニングで操縦桿を引き、どの距離から射撃を開始すればいいのか理解すれば簡単の中させる事ができるわ』

「ミヤコさんに質問があります!」

『勉強熱心ね、シノさんが気に入るわけだわ。それで何かしら?』

「これって明らかに私も小型飛行船のブースターを破壊する役目を担っていますよね!?!」

『あら、バレちゃった』

「流石に何度も繰り返し行われると私でも感づきますっつてば……」

ミヤコさんからの課題を改めて言うのであれば、震電の特性を利用して私はイヅルマの上空で待機し、指示が合った場合、小型飛行船の真後ろに付くように下降して、ブースターを破壊するというものであった。

この訓練は本当に保険なのだろうか。まさかこの重要な任務を私に行わせる訳ではないと思いたいのだが、疑う暇もなく指示に従い回数をこなしていく。

幸か不幸か、急速に速度が上昇していく下降中に関しては、身体的な問題は特に見当たらない。イサオさんやシノさんに散々恐ろしい目に遭わされた結果なのか分からないけれど、重力により身体が機体へ押し付けられながらも目を瞑る事なく計器を見つ

め、操縦桿を引く瞬間に比べればそれほど苦だとも思えず。

問題なのが機体を水平に合わせた後、そこから標的に標準を合わせて発砲する事だ。

ミヤコさん曰く、直進しか出来ない標的なのだから、練習を怠らなければ当てる事はさほど難しくはない、との弁。

不安なのは護衛部隊の存在、イサオさん所属部隊の人達が何機で現れるのか。小型飛行船からこちらを引き離す為に囮部隊も出てくる事は確かだろう。

唯一の救いなのが、こちら側は人手不足では無いという事だ。現役の自警団から様々な理由で退職された方まで様々だが、キツチリと自分たちの仕事をこなせる素晴らしい人達がいる。

一連の状況から考えれば、短期決戦となる可能性が高い。今日現れるのか、明日襲い掛かるのか、それは私には分からないが、可能性としてはどちらかが確率が高いと対策会議で聞かされた。何故、私がある場面に問題無く居られたのかは不明である。

『あら惜しいわね、もう少し落ち着いて近づいてから射撃を開始するように。やり直し』
もう何度目だろうか、小高い丘に置かれている大きな岩に対して射撃訓練を開始し初めて、失敗し、そのまま上空へと戻されるのは。

自分から予習と復習と口走ってしまった事が原因である事には違いない。あくまで座学についての発言だったのだが、イジツの人達にはお構いなしの様で。

他の機体では早々お目にかかる事が難しい空へと容易く上昇する震電。水平を保ち、ミヤコさんの合図と共に再び下降を始める。

近づく地上、速さの問題なのか、機体を制御が出来ているおかげなのか、正面を視線で見ているだけでは変化に乏しく、それが逆に恐怖を覚える。

ただし、こちらには機体に備わっている計器がある。視野で確認出来ずとも、忙しく動く針を見逃さず、来るべきタイミングで再び操縦桿を引き、機体を水平へと保つ。

そこから僅かな時間で標的を照準機に収め、機銃を放つ。震電に積まれている五式三十耗固定機銃四挺。高威力なれど弾薬の少なさが問題であり、撃ち続けると直ぐに弾切れとなる。

シノさんやミヤコさんからも、その部分については念を押されており、タンタンとリズムに合わせるように指を動かす様に機銃を発射させている。

そして幾度となく行われた練習は、ついに標的である岩へ当てる事に成功をする。真正面でないのだが、震電に搭載された四挺の威力は素晴らしく、目標物は半分以上吹き飛んでいる。

この光景を見せつけられたならば、保険の意味も薄らながらに理解が出来る。イザという時に私がブースターの攻撃を実行し、破壊する事が出来れば、皆さんの僅かながらのお手伝いにはなるのだろう。

『ほら、私の言った通り、やればちゃんと出来るじゃない』

「偶然という可能性も無きにしも非ずでは？」

『シノさんがあれだけ褒めていたのだから、これぐらいは出来て当然よ』

「何かの機会で数回、褒められた記憶しかないのですが」

『あの子も照れ屋さんなのよ。それに応えるのもハルト君の役目でしょ？』

「いい様に言い包められた気がします」

『ふふっ。それじゃ一度、補給の為に戻りましょう。哨戒の交代時間にもなりますからね』

「はい。ありがとうございます、ミヤコさん」

『どういたしまして。今日中に現れそうになかったら、今度は確定するまで付き合ってもらうわね』

鬼教官が二人に増えた。しかもこちらはシノさん以上のスパルタ式。置かれた状況下のせいだとはいえ、お手厳しい。

地面好き。本当に大好き。足元がふわふわしないだけでこの快適さ。空を飛ぶという行為は本当に夢が有り、浪漫の塊である事は確かなのだが、地上暮らしが私には一番似合っている。

行儀が悪いが、格納庫の隅にあつた机に頭を乗せて休憩中。ジノリさんやハヤト君は大忙しである。

申し訳なさも感じつつ、襲い掛かる眠気にどうしても耐えられなくなってきたその時、頬つぺたを誰かがツンツンしてくる。

閉じかけていた目を開けば、シノさんがいらした。

「屋上から見ていたわ。やれば出来るじゃないの、ハルト！」

「教官殿がお褒めの言葉を下さる。これはきつと夢」

「私が褒めるのがそんなに珍しいわけ!? 起きなさいよ！」

「頭がパンクしそうで無理です」

「そこで身体が重いか言うわけじゃないのね。あそこまで訓練したなら普通は疲労困憊で機体から降りるのも一苦勞すると思うのだけど？」

「シノさんに沢山鍛えてもらいましたから。身体は平気なのですが、機銃掃射のテンポがいまいちよく分からなくて。あと水平を保つのがこれほど神経を使うとは」

「ハルトにとって射撃訓練は初めてだったものね。それも含めて、ミヤコさんの指導によく耐えたわ。偉いわよ」

そんな事を口にしつつ、意地悪そうな笑みを浮かべながら人の頬つぺたをツンツンし続けるシノさん。鬼教官殿にここまで褒められると照れが生じてシノさんの顔を見て

いられなくなる。

「そんなに照れなくてもいいでしょうに」

「褒められるのは慣れていないんです」

「……そつか。昔の私と一緒にね」

「シノさんにも経験が？」

「あるわ。話してあげてもいいけど、流石に今は時間に余裕が無いからまた今度、ね」

片手を腰に当て、視線を合わせる様に前屈みをしながら人差し指を口元に。目元にあ
るホクロも相まってとても可愛らしい仕草だ。

「しかし、相手はいつやってくるのかしら？」

「もうじきじゃ、これが予定通りの行動ならば、既に飛行船の換装は済んでこちらに向
かっておるじゃろ」

「その割にはこちらの素敵に引つかからないみたいだけど？」

「案外、小型船という特性を生かして渓谷の中でも飛行しているかもしれんな」

「そうなるかと人が操縦している事になるじゃない!？」

「あくまでイツルマに近づくまでの道中じゃ、搭乗している奴等は所定位置まで小型船
を運ぶこと。そして最終確認が済み次第、船から降りて自動操縦装置に任せるつもり
じゃろう」

「それならまだいいけど、爆薬を積んだ飛行船を人が乗ったまま落とすのは流石に抵抗があるわ」

「そこは深く考えん方がいい。明確な敵意を持つてイヅルマへ攻撃を仕掛けてくる連中じゃ。相手の都合まで考えていたらキリがありません」

「とにかく小型飛行船の進路をイヅルマから引き離す事を優先、ですかね？」

「そうだ。こちらがすべき事は黒い疾風の撃墜ではない。そして相手もこの作戦にそこまで執着心があるとは思えん」

気が付けばジョージさんがいらしていた。私とミヤコさんの交代で空へ上がる様子だ。その姿は渋いの一語。何をさせても格好いいオヤジである。娘さんが関わってはいけない。

「次は空の貴公子と謳われたジョージさんの飛行が見られるのね！ こんな時に不謹慎だけど、自警団に所属してよかった……」

「その異名で呼ぶのはやめろ、マジで」

「恥ずかしいのですか？」

「この歳でその呼び方をされてみる、顔から火が出る思いだ」

「ジョージったら、昔は平然としていたのにね」

「あれは若気の至りだ。空に上がるぞ」

「はいはい、いつてらっしやい」

ミヤコさん含め、全員でジョージさんをお見送り。相手は何時来るのだろうか。私が緊張していても仕方ない事なだけけどね。ただの保険なんだし。

「団長、鹵獲した飛行船の最終確認が済みました」

「イツルマの様子は？」

「現在のところ、哨戒機を複数飛ばしておりますが、こちらの存在にはまだ気づいていない模様」

「了解した。提供された情報にあったレーダーのクラッターに上手く紛れ込む事に成功したようだな」

「あやつ等を褒めてやらんとな。本来であれば飛行船を操縦させる様な連中ではあるまいに」

「前哨戦とはいえ無理をさせた事には違いない。後で礼を伝えさせてもらおうとしますよ、翁」

「後は自動操縦装置によりパロット社へ飛行船を進行させ、爆破させれば我々の勝ちですな」

「果たして上手くいくものじやろうか？」

「さてな、今回の作戦立案者にでも聞いてみてくれ。我々は最低限の事だけをすればいい。決して無理はせず、人的被害が発生しそうであれば撤退も視野に入れておけ。復讐する機会は何らでもある」

「イサオ様が戻られるまでの間、このような形で戦闘が続くのでしょうか?」

「しばらくは。それも我々に課せられた義務さ。イサオ様の敵となりうる奴等を自由博愛連合の存在を見せ続ける事により警戒させ続け、疲労困憊になったところを突く。とはいえ、結局は我々も耐え忍ぶ日々が続くだけだろう」

「それでもイサオ様を帰還を。いざとなれば我々も穴に突入して探し出すのも役目ですか」

「可能な限り最後の手段にしてもらいたいわい。現状で出来る事はまだ山ほどあるからの」

「さて、諸君。作戦実行までまだ猶予はある。それまで各自準備を怠らないよう。ここからが本番だ」

カナリア自警団 その25

慌ただしく働く人達を横目に、休憩も兼ねてエルさんがお茶を提供してくれた。

カナリア自警団も詰所で待機をしている余裕は無く、こうして格納庫近くで出撃待機のまま、皆さんは手持無沙汰にしている。ヘレンさんは以下略。

「仕方ない事ですが、私達の役割を考えると、こうして待機するのも立派な職務です！」

「そうそう。慌てても良い事は起きませんからね。こうして緊張を解しながら待つのが一番よ」

「自分達だけ何もしないというのは、なんとというかむず痒いといえますか、初めての経験なので慣れないです。お姉様」

「師匠に機体の作業を手伝わせて欲しいって言ったら大人しくしてろ！　って怒られてしまいましたよ！」

「それはそうでしょう。私達は相手の本体が現れた時に出撃する専用部隊なのだから！」

「なんだかシノさん嬉しそうですよね」

「エースとしての血が騒ぐんじゃないかしら？ 久しぶりに齒応えのある相手の様ですか」

「齒応えとは言いますけれど、相手はあのイサオ所属部隊の黒い疾風ですよ？ そこらの空賊とは目じやない強さだと思うのですが？」

「だからこそよ、あいつらを一機でも落とせれば、今後の行動に多少なりとも制限を掛けられるでしょうからね」

「でも今回は町の護衛が最優先です！ あくまで疾風は第二目標なのをお忘れなく！」

私の隣では、何事も無く夢の世界に旅立ったままのヘレンさんと共に、カナリア自警団の皆さんの話に耳を傾けていた。

皆さんやる気に満ち溢れている。自警団として町を守るといふ重大な出来事が始まるのだから、当たり前とも言わべきか。

イズルマへ訪れてから怒涛の日々を過ごしたが、今日が一番の山場である事は違いない。何故なら耳を塞ぎたくなる程の警報音が鳴り響き、事態が動き出した事を示しているからだ。

『方位二百二十度の方向に黒の疾風を確認！ 数は六！』

鳴り響く警告音と共に、無線からは相手の位置が伝えられ、その方向は小型飛行船が

去っていった方角とは、やや反対側の位置を示している。

「ようやく一息ついたばかりだというのに、タイミンクの悪い人達ね」

「お母さん、やつぱり出撃するの?」

「当然、こんな騒ぎを起こした子達にはそれなりのお仕置きが必要だわ」

「大丈夫だとは信じているけれど、気を付けてね」

「ありがとう、アコ。貴女達も本体が来たらよろしく頼むわね。それじゃ行きましようか、ハルト君?」

「はい?」

「貴方はこの戦いの大事な保険なんだから、最後に飛んでいたら意味がないでしょう?」

「さつきまで射撃訓練を受けていましたよね、私!」

「大丈夫よ。シノさんが言っていた、かみ合わない歯車はちゃんと調節し終えたから。

後は私の指示に従えばいいだけよ? それともこんなオバサンの言う事は聞けないタ

イプかしら?」

「滅相もございませぬ!! 教官共々、鍛え上げて頂いたこの力をご自由にお使ください

い!!」

「うんうん、素直で良い子ね。それじゃ行きましようか」

ナントカとは言えない日本人。訓練して頂いたとはいえ、あくまで小型飛行船のプー

スターを破壊する為の射撃訓練。これで動いている戦闘機を相手に戦えと仰るの难道か？

とはいえ、私が考えたところで仕方ない。再び震電に搭乗し、先程までいた空へと戻ろうではないか。出番がない事を祈りながら。

「(お母さん、妙に楽しそうで不安だなあ……。ハルトさんに無茶させないといいんだけど……)」

再びイツルマ上空へと舞い戻る。そこには交代で先に空へ上がっていたジョージさんや、元自警団といった方々まで歴戦のつわもの達が集う。

『お待たせ、なんだか同窓会みたいね』

『出来れば地上で行いたいものだ』

『あら？ ジョージが乗り気だなんて珍しいわね。こういった事は苦手じゃなかったかしら？』

『苦手ではない、好き好んで集まる気が無いだけだ』

『はあ、相変わらず堅物ね。それより相手の様子はどうかしら？』

『イツルマの防空領域の手前で行ったり来たりだ。相手も自分達の役割を理解して侵入だけはして来ない』

『一層の事、操縦を誤って防空領域を超えてくれたならば事が早く済むのにね』

『物騒な事を言うな。それに持久戦であればこちらに分があるんだ。嫌でも仕掛けてくるや』

『だとしても、囀部隊に私達の時間をあげる義理もないわ。ハルト君、ちよつとこちらに来なさい?』

ミヤコさんの指示に従い、編隊の前方へお邪魔します。黒い疾風が良く見えるのはいいのだけれど、これはつまり。

「私はエサ役ですかね?」

『理解が早くて助かるわ。前方で三百六十度、右旋回をしてきてくれないかしら?』

「撃たれる可能性は?」

『相手が短気で知性の欠片も持ち合わせていなければ、震電を見ただけでも撃ってくるでしょうけれど、今のところその様子は無いから大丈夫よ』

「信じてますからね?」

『骨は拾ってやる』

「ちよ!?! ジョージさん!?!」

『あら、冗談を言うだなんて。子供が出来ると貴方でも変われるものなのね』

私の後方では和気藹々と和む雰囲気を醸し出すつわもの達。こちらは心臓が張り裂

けそうな勢いで動いているというのに。

シノさんから座学で教えられたイヅルマ防空領域。一度ここで空賊と出会った事もある。目印となる地上物と計器を見逃さず、絶対に領域を超えないよう一定速度を保ちながら旋回を行ううしかない。

操縦桿に込められた手の力を一本一本ほぐす様に動かしたのち、右へと倒し、手前に引く。震電の主翼は地上へと向けられ、進行方向は右へ。この時点では相手からの反応は無い。

六十、百二十、百八十度の右バンクを済ませても、相手からの発砲音から無線まで一切反応が無く、ミヤコさんの指示通り一周を終えてしまった。

『こういう敵を相手にするのは嫌ね。仮にも主人と同じ機体で挑発させたのに無反応だなんて』

「私としては何事も無くて助かったのですが」

『あら、ハルト君の格好良いところ、お母さん見て見たかったわ』

「色々とツツコミを入れたくなりますが、ここから先は会議で言われた通りの行動を起こしてもよろしいのですか？」

『お願いするわ。パイロットのハヤト君もまだ子供だから完全に癒えていないこの状況で飛ばす訳にはいかず、それ以上に搭乗機体である雷電は整備中のまま。今この状況下

でハルト君に不意打ちを仕掛けられる機体は存在しないから、自由に大空を飛んできなさい』

「了解しました。また後で」

私の第一任務とも呼べるべき事を終え、イツルマへ機体を向ける。そのまま操縦桿を引き、これまで以上に高い空へと向かうべく、震電が上昇していく。

幾度となく背中押し付けられる重力を感じてきたが、上昇で感じるのと下降で感じるのはまた違った感覚を受ける。

高度は約三千五百クーリル。この空はまだ青く、視線を上げれば宇宙との狭間とも呼べる黒ずんだ青色が見える。いつかイツツでイサオさんとロケットを飛ばしてみたいな。

そんな思いを一度、断ち切るように地上を上空から探索する。小型とはいえ飛行船。赤とんぼが飛行する高度よりも高い位置から調べれば、何かを見つけられる可能性も高まる。

警戒すべきは相手から狙われた場合の対処法。仮に相手の機体である疾風が私に狙いつけ、高度を上げたまま現れた場合、機体の性能を引き出せる限界高度は、約三千二百クーリルと教わった。

それでも上昇速度、位置した高度での最高速度はこちらが上であり、逃げ切る事に集

中すれば何とかなるといった話だ。逃げ切るのが前提なのが我ながら情けないけれど。

だが、それも先程、相手の前で旋回した際に何もされなかった事を考えると、可能性としては低いのだろうか、はたまた囀部隊はその役割を果たす為に耐えていただけなのだろうか。慢心せずにいくならば後者で考えていた方が良さそうだ。

モコモコ帽子の暖かさに癒されながらも、イツルマ上空を旋回しながら周囲を見渡す。雲一つない晴れ空、各地に散らばる赤とんぼの機影が映える。

その際に、景色に僅かな違和感を覚える。確か気になる事があれば赤とんぼに指示を送り、素敵してもらいなさいと言われていたが、冷静に考えてみるとこの立ち位置ってかなり重要なのではないだろうか？ そういう重要そうな事は誰も言わないよね？

「こちら震電、赤とんぼ一号機、応答願います」

『こちら赤とんぼ一号、何かあったか？』

「そちらから見て正面、四十度の方角に反射するものが見えました。索敵お願いしてもよろしいですか？」

『了解した。気にせず命令してくれ、そう指示を受けている』

指示を出した赤とんぼは、私の指定した方角へと機体を向け索敵を始める。

人に指示するなんて生まれてこの方、初めての経験かもしれない。それをイジツで、しかも戦闘に突入するのが前提の状況下でやらなくてはならないとは。

色々と思考しようと頭が動き始めようとするが、この場においては必要の無い事だ。切り離すように目の前の事に集中する。

『こちら赤とんぼ一号、震電から指示があった場所を探索したら破損した機体が転がっていた。これが光に反射して上空で光る様に見えたと思われる』

『こちら震電、了解しました。赤とんぼ一号、ありがとうございます』

見間違えて済んだというべきか、お手数おかけして申し訳なさもほんのりと。

しかし、上空から眺めていれば飛行船の一つや二つ見つかるものだと考えていたけれど、なかなかどうしてそれらしき姿は見当たらず。

まさかと思いながら更に上空も見つめてみたり、震電の周囲を見渡すが、やはりそれらしきものは存在せず。一体どこへ？

その答えは、赤とんぼ二号機から伝えられる事になる。

『こちら赤とんぼ二号！ イヅルマより東南東、百度の方角より新たな黒い疾風が六機！ 飛行船の姿は……嘘だろ?!』

『赤とんぼ二号！ 何があつたんだ！ 正確に報告しろ！』

『地上から突然、飛行船の姿が現れました!! 外装を陸上迷彩の布を被せ隠蔽していた模様！ ブースターの配置は、上部機体の腹部中心に二連が二基、後方両左右に三連が二基、下部の胴体部分にも両左右に三連が二基取り付けてある模様！ まだブースター

は点火していません!』

小型飛行船とはいえ、よくぞその量の迷彩布を用意出来たものだと感じしてしまう。それ以上に私達に気づかれなければならないようここまで近づいていたなんて。バレていたらその場で爆破されて作戦そのものが終わるといふのに。

上部胴体にブースターを取り付けられたのは分かる。だが、下腹部と下部胴体にまで取り付けるとは。下腹部に取り付けられたブースターによる風圧や熱量の関係で操舵室に人は居られないのではないかと想像する。まさに人が居ない事を前提とした利用方法か。

船のような形をしている下部胴体には、爆薬が詰め込まれている事は間違いない。それが何キロ載せたのか、はたまたあの狭そうな空間に何トンを押し詰めたのか。こればかりは分からない。

無線は先程とはうって変わり、騒がしくなっている。そちらに耳を傾ければ、囀部隊を相手にしていたミヤコさん達も戦闘状態へ突入し、カナリア自警団は本命の相手をする為に順次、空へと上がっている。

あの小型飛行船のブースターが点火されたなら、速度はどの程度出す事が出来るのだろうか。確かラハマ、イズルマ共に最終防衛線は二キロクーリルと伺っている。

小型飛行船が見つかった場所は、ここから十キロクーリル先と赤とんぼ二号機の人が

叫んでいた。

町からはかなり近い場所に位置するが、これからブースターが点火されこちらに向かつて来る事を考えればおおよそで十分ほどかかると推測する。それでも十分しか時間がないとも言える。

周囲にいた他の部隊が牽制の意味も含めて小型飛行船と、それを護衛する黒い疾風に集結していくさまが私のいる空から良く見える。

カナリア自警団は四部隊が出現してから搭乗待機をしていたのだろうか。既に全機が空へと上がり、編隊を組みながら向かっており、四部隊の方では一機から煙を上げている機体が見える。あれをやったのは間違いなくお二人のどちらか。

私は継続して周囲を警戒しているが、ここから更に本命が現れるのだろうか。そこが不な部分ではあるが、小型飛行船という主目標が現れた時点でこちらに意識を集中するべきだろう。

突如、爆発と言っても過言ではない程、周囲の空気が響き渡る。ブースターが点火されたのが確認でき、小型飛行船はイツルマへと進行を始めた。

『クソツ！ 俺達じゃ相手もさせてくれないのかよ！』

『疾風を飛行船から離せればそれでいい！ こちらは数を失わず、気を引きつけていれ

ば、後はカナリア自警団が何とかしてくれる！」

『最初はただのお飾り自警団かと思えば、気が付けばこちらの主戦力部隊か』

『彼女たちの努力あってこそだ。いい加減、俺達も昔の思い出にばかり目を向けている場合じゃないって事さ』

『なんせ、あのジョージがよく喋るぐらいだからな！』

昔話に笑いが止まらない様子だけど、それでも自分達の役割をキツチリとこなす他の自警団員。

「すみません！ お待たせしました！ カナリア自警団、ただいま参りました！」

『みなさん、まだまだ余裕がありそうでなによりです』

『後は自分達に任せてもらえれば根性でなんとかします！』

『お姉様と居られる町を破壊するだなんて絶対に許せません！』

『飛行船の護衛に六機とか、囀部隊も合わせた方がマシだったと思わせてあげるわよ！』
『おなかすいた』

「ヘレンさん！ 後で好きな物を食べさせてあげますから！ ちよつとだけ頑張ってくださいー！」

『団長がいうならがんばる』

何時どんな時でも自分のペースを狂わせることがないヘレンさんが羨ましくもあり

つつ、もう少し普段の生活をすっかりして欲しいと考えてしまう。

いやいや！ 今はそれを考える時ではない！ 小型飛行船を止めないと！

私達六機、駆けつけてくれた他の自警団員が四機、そしてお母さん曰く、保険として上空にいるハルトさん。何かあれば叫ぶようにして呼び出せとは聞いているけれど……。

目前にいる黒い疾風、イサオ所属部隊と呼ばれるだけあり、一筋縄ではいかない。

陽動を仕掛けてみても乗らず、撃ち落そうとすれば、木の葉の様に舞う。私達を牽制するように的確で最低限の射撃、疾風という機体性能に負けず劣らず搭乗者の能力も高い。

『チクシヨウ！ 被弾した！』

「直ぐに退避してください！ 後は我々が！」

『隙みーつけ』

ヘレンさんの声が聞こえたかと思えば、小型飛行船から爆発音が聞こえる。位置は腹部中心にある内の一基！

『おっちゃんの仇は討つておいたよ〜』

『ありがてえ、嬢ちゃん！ 全部終わったなら何か奢らせてくれ！』

『まじか』

「流石です、ヘレンさん！ 出来れば同じ個所にある一基も破壊出来れば直進能力を下

げる事が!」

『団長! 相手の動きが鋭くなってきましたよ!』

『油断大敵。ここからが本番のようね』

リツタさんやエルという通り、ある程度の様子見をしていたようだが、ここにきて急に動きが鋭くなる疾風。

一機、また一機と他の自警団員の方が被弾をしていく中、ミントさんが再び中心に残されていた一基を破壊。

「ミントさん! 凄いです!」

『引きつけてくださった皆さんのおかげです! 後は左右どちらかに集中すればよろしいですね、お姉様?』

「そうです! 飛行船後方に移動し、片側の三連ブースターを破壊出来れば、後は勢いと慣性で船体が曲がるとウタカさんが教えてくださいました!」

『言うのは簡単だけど! 私の後ろについた疾風が振り切れないわ!』

『同じく! この人達、やっぱり凄いな』

『敵を褒めてる場合ですか、ヘレンさん! 自分は一機後ろに付けましたよ!』

『私をお姉様の元に行かせないなんて、ユルサナイ』

「こちらの数が減っていくに従い、各機に徹底マークをされてしまう。手が空いている

機体は、あちらが二機、こちらは三機。どうやって隙を伺おうか考えていると、自警団員の方から無線が入る。

『団長さんたち！俺があいつらの的になるから、その間に二人でどうにかしてブースターを破壊してくれやしないか？』

「そんな無茶です！無理な事はさせられません！」

『数で勝っている内に手を打つべきだ、それが今なんだよ』

それは確かだ。既に小型飛行船は当初の位置から進み、イツルマまで残り七キロクルルまで迫っている。

最終防衛線は二キロクルル。最悪、自爆行為に走られたならば、安全の為に四キロクルルまでにブースターを破壊したい。

決断が閉まられる中、エルがそと私に問う様に話しかけてくる。

『大丈夫よ、アコ。あの人を信じて私達がブースターを破壊しましょう』

「でも危険が！」

『それも承知の上よ。もし怪我をされたなら、お見舞いに行きましょう。きつとみなさん喜んでくれますわ』

「そんな事でいいのかなあ？」

『ふふつ、そういう事が大事なのよ。さつ始めましょう。相手と数が勝っていて、私達よ

りも遙か上空にいる人に意識が向かれています間にね』

隙を見つけて上空を眺める。まだ空には震電に搭乗したハルトさんが残っている。シノさんとお母さんの訓練に耐えきったハルトさんは、当初とは別人の様に操縦が上手くなっている。

空賊と鉢合わせしたあの時も、シノさんの命令通り機体を動かせたのだ。初の実戦だっただろうにシノさんの動きに合わせていけるぐらいだもん。元々何か持ち合わせていたのかもしれない。

お母さんは保険だ何だと好きな事を言っていたけれど、私達にはまだ戦力が残されている事がどれほど心強いのか。本人に聞かれたら全力で否定されちゃうけど。

……本当に私が危なくなつて助けを呼んだら、来てくれるのかな？ ハルトさん。

カナリア自警団の動きがまばらになつていく。

追う者に追われる者。徹底したマークにより、自由に動く事が出来ず、落とす事も困難な状況下。お互いに正面から交差しても、相手も割り切っているのか付かず離れず。その中で一つ動きがあった。

アコさん、エルさんともう一機の機体が、後方にあるブースターを破壊すべく動き始める。

一機は黒い疾風に猛然と切り込み、二機の編隊を崩す事に成功。エルさんがその内の一機を射程に収めるが、残念な事に射撃は当たらず追撃を始める。

切り込んでいった一機は、相手からの射撃により機体から煙が上がり高度を下げている。

その僅かな隙にアコさんが下部の胴体にある左側の三連を二基とも破壊する事に成功する。小型飛行船は僅かなズレを発生させ、僅かながら左寄りに船体が傾きつつあるが、依然としてイヅルマへと向かって行く。爆薬満載の位置にあるブースターを的確に撃ち抜けるなんて、さすがカナリア自警団の団長だ。

しかし、この上空にいても僅かながらに感じる視線。これはあの黒い疾風から送られてくるものだろうか。

お前の事を見ているぞ。何か仕出かそうとするのなら受けてたつ。そのような意志表示に思えて仕方ない。

私は空戦なんか逃げる以外、経験した事が無いと言うのに。シノさんから教わった知識と機体の操縦。ミヤコさんから教わった付け焼き刃とも言える射撃訓練。これで歯車が合わさったと二人はいうのだから、本人にも理解が出来るように教えて頂きたい。

小型飛行船に取り付けられたブースターのうち、破壊すべき場所は上部機体の後方にある左側の三連二基のみ。

リーダー担当官から伝えられた言葉通りなら、イヅルマまで残り五キロクルル。最大限の安全を確保する為には、あと一キロクルル以内でこなさければならない。

私が動き出すなら今、なんだろうが、指示もなく飛び出せる程、身勝手な行動は出来ない。出来ないのだが……。

周囲に気を配りながらも機体を徐々に動かし、飛行船の後方に位置する場所まで移動をしている。ここから下降していけば、あの訓練通りになるのかどうか。

出番が無ければ越した事はないのだが、私ですら今だろうなと思う事は、熟練のパイロット達であれば尚のこと理解している様子で。

『ハルトさん!! お願います!!』

アコさんの叫び声に近い要請に応えるべく、機体を急降下させ、射撃位置にまで機体を持つて行こうとするが、この距離感が相手の思惑でもあった。

『この機会を待っていたぞ』

黒い疾風から聞こえる無線。それと同時にカナリア自警団を追撃していた相手の機体が全てこちらへと向けられる。

「そんな!?! ここまで来て飛行船の護衛を止めるのか!?!」

『我々からすれば、貴様こそが目障りな存在なのだ。震電に搭乗すべき人物はあのお方のみ。ここで朽ち果ててもらおう』

「イサオさん共々、面倒な人達ですよね！ 本当に!!」

私に合わせ上昇してくる複数の疾風。そこから幾つもの弾薬が吐き出され、砲火の海に晒される。

こちらとて素直に直撃してたまるものかと、操縦桿を操り、レバーを踏みつける事で回避を続ける。逃げる事は得意の中に、機銃から放たれる弾薬も項目に含んでよろしいでしょうか!?

勿論ながらこの光景に恐怖は感じるけれど、目はちゃんと開き、身体は素直に動く。目の前なんて機銃から放たれた弾薬が、それこそ花火のようにキラキラと輝いて見えてしまう。

機体を横切る度に、日常では聞く事のない音が遅れて聞こえてくる。これら一発でも操縦席に当たれば終わりなんだろう。けど、あくまでなんとなくだが、今日はそういう日では無いような気がするのは何故だろうか。

まあ、イヅルマへ来てから二度気絶した日だって、そんな事は微塵も考えていなかったけどさ。

一機、また一機と交差していく。私が引き金を引く時は、この人達に向けてではない。訓練通り、飛行船に取り付けられたブースターを射貫く為だけにあるのだから。

その時、突如横から掃射してきた疾風は、リツタさんに追撃されていた機体だ。当た

るも八卦当たらぬも八卦。どうやら今回は後者の模様。

私を落とそうとした疾風たちは、アコさん達の援護のおかげで近寄ってくる気配はなし、全てを乗り越えて、ミヤコさんと訓練をした位置へと震電を運ぶ事が出来た。照準器にブースターを収め、後は射撃をするのみ。

何か叫ぶべきか、言うべきか、そんな相手なんて存在するのだろうか、十分すぎる程の人物が頭に浮かぶ。大体は悪い人であり、イジツの全ての元凶でもある、憎たらしくもあり、友達とも呼べてしまいそうな人の名を。

「イサオさんのバカたれめ!!!」

私の叫びと連動するように、震電から弾薬が飛び出し、それらはブースターへと吸い込まれるようにして的中させる事に成功した。

カナリア自警団 おしまい

震電に搭載された五式三十耗固定機銃、四挺が同時に火を噴き、小型飛行船の進路を変更させる事に成功をしたあの日から数日後。

イヅルマ郊外へと向かう小型飛行船は、ガス袋とブースターの全破壊により、不時着するような体勢で地上へとその胴体を押し付け、爆破した。

僅かながらその爆風による余波を受け、町にある建物では窓が割れたりと被害はあったものの、人的被害はゼロ。これは住民の皆さんや自警団員といった方々の努力の結果であらう。

黒い疾風について。

彼等は小型飛行船のブースターが破壊されると知るや否や、撤退命令を出し、四部隊共々イヅツの空へと消え去っていった。

余りの手際の良さ、元々彼等にとつて小型飛行船によるイヅルマ襲撃は本位では無かった事が伺える。現にイヅルマの駐機場の片隅には、小型飛行船と共に去っていったはずの議員がさるぐつわをされ、全身を縛られた状態で見つかったのだから。あの時の口約束を守る辺りは律儀といふべきか、なんといふべきか。

最終的に彼等に狙われたのは、震電に搭乗していた私であった。各機の搭乗者の技量に任せ、カナリア自警団の動きを封じ、私が空から降りてくる事を狙っての行動。

相手の作戦成功率が低い事は、対策会議でも指摘されていたが、まさか本当に護衛すべき小型飛行船を破棄するかの行動を起こしてまでも私を狙ってくるとは思いもよらなかった。

あの猛攻で撃墜されなかった事は、本当に運がよかったとしか思えない。でもそれだけで無い事も重々承知している。

私の為に付きつきりで訓練をしてくれたシノさんや、私がブースターを破壊するまで疾風を牽制し続けてくれたカナリア自警団の皆さん。誰一人として欠けていたら作戦は成功しなかった。

イサオさんからの出題された問題の一つは、やはりあの疾風の事だろうか。執事さんもイサオさんに盲目的な人達がいると伝えられている。

今回は敵同士で戦う事となったが、イサオさんが再びイジツへ舞い戻るまでの間、戻ってきた後の事を考えると、出来れば早めに手を打って起きたいのも事実。けど無線で交信出来たのもあの一瞬だけ。

中々どうして、一つ終わるとまた一つ難題が浮かび上がるものだと、目の前にある震電の機体を眺めながら黄昏てしまう。

「今回ばかりはコヤツも無傷とはいかんかった様じゃな」

ジノリさんの発言通り、震電は疾風からの攻撃を全て回避出来た訳ではない。赤く染められた機体には、所々に銃弾の掠り傷、主翼に描かれたパンケーキマークのど真ん中には穴が空いてしまっている。メープルシロップを流し込むには丁度良さそうな穴だ。飛行中は気づかなかつたけれど、これでよく機体を安定させて射撃が出来たものだ。

「しかしコヤツの整備を後回しにしてもよいのか？ お前さんの成果でいえば優先的に修理を受ける事もできるじゃろうに」

「この町を守ってくださった方々は自警団の皆さんです。私はあくまで保険として準備をして、今回はたまたま使用する事になっただけなので」

「欲の無いヤツじゃの。いや、でもお前さんらしくて良いのかもしれない」

「そりやそうさ、私が認めた人間だからな！ ようやくハルトの良さに気が付いたか、ジジー！」

「なんじやい、元議長のパバアめ」

議長、今は頭に元が付く。今回の一連の騒動に一区切りがついたタイミングで辞表を提出され、受理された。

本人曰く『清々したわ！』と笑顔で言われてしまえばそれ以上は、何も言えない。元議長にはイツルマで大変お世話になり、私の探し人に関しても話を聞かせてもらえた。

「一つだけ気になる事がある。私とイサオさんの関係について尋ねて来ない事だ。これは私から切り出すべき話なんだろうか。」

「元議長、一つよろしいですか?」

「ハルトとイサオの関係についてかい?」

「よく分かりましたね。何も言われないのでこちらから伝えるべきかと思い、話を切り出したのですが」

「長く生きてれば何となく察する事が出来るようになるんだよ。確かに気になる点は幾つもある。だがそこまで根掘り葉掘りと聞いても仕方ない」

「仕方ない、ですか」

「人一人で出来る事なんざ限られているという事さ。でもそうだね、二つほど聞いても良いかい?」

「なんなりと」

「ハルトはまた穴を通じてユーハングに戻る手段を持ち合わせているんだね?」

「友人のご助力があつての事ですが、帰還する方法はあります」

「帰還した後は、ハルトも自身の探し人の事で大忙しだろうが、これだけは聞いておきたい。イサオとトキオがイジツへ戻ってくる際に、ハルトはどうするんだい?」

「トキオさんとはタイミングが違うかもしれませんが、イジツへ戻ってきます。まだ

ユーリア議員ぐらいいしか知りませんが、イサオさんと執事さんの策略により、どうやら一年後に私がブユウ商事の新しい会長にさせられるみたいなので」

目を見開いて驚く元議長、呆れるように溜息をついているジノリさん。イサオ所属部隊と交戦した人間が、今度はその人達の上に立つと言っているのだから。

「ハルトは本当にそれで良いのかい？ ユーハングつてのは逃げ出したくなる程、物騒な所なのかい？」

「平和で平穩そのものですよ。ただ、イサオさんと一緒に過ごす期間があつて、これだけ能力がある人をこのまま終わらせてしまうのが凄く勿体ないというか」

「私達からすれば悪党だが、ハルトからすれば年の離れた友達になつてしまった訳か」

「そうですね、友達です。突拍子もない出会いから始まり、私がイジツへ行く羽目になつた事も、恨み節を言いたくなるほど憎たらしいのですが、力になりたいという気持ちも湧いているのだから、カリスマを持ち合わせている人物は厄介だなんて思います」

不思議だよね、イサオさんつて。でもあの人や執事さんも含めて、一緒にイジツで口ケツトを飛ばす事が出来たら楽しいだろうな。

それにユーリア議員と空賊離脱者支援法についても力になりたい。少しでもイジツから空賊や孤児の問題が解決へと示す事が出来るのであれば。

その為にも、つて考えても結局はイサオさんの手綱を絶対に離さずに、食らいつくぐ

らしいか方法が無いんだけどね。

「ハルト、アンタの探し人がこのイジツで見つかる事を私は切に願っているよ」

「ありがとうございます。ただ、余りタネガシには行きたくないなど」

「イヅルマへ来る前に何かあったのかね？」

「アレシマで自分達の事をゲキテツ一家と呼ばれる方々に部下にしてやる！ と街中を追われた経験がございまして」

私の発言にしばし固まる元議長。それも僅かな間で、大笑いを始めた後に私の両肩を叩く。そりや笑うしかないよね。私も半分やっつけばちで元議長と笑って誤魔化す事にした。ジノリさんは容赦なく大笑い。

格納庫に響く三人の笑い声。再びこの町で脅威にさらされる事なく談笑が出来る喜びに浸かっているところに、駆け足で誰かがやってくる音が聞こえた。

「ハルトさん！ こちらにいらしたんですね！ 探しましたよ！」

「アコさん？ そんなに急いでどうされたんですか？」

「市長が急遽イベントを開くと言い出しまして！ カナリア自警団も参加する事になりました！」

「それはまた急な。町の危機を救った自警団をアピールしたいのでしょうか？」

「かもしれません。旧来のイメージを払拭したい目論見もある……のかなあ？」

「アイツの場合は、単純に支持率も関係しているだろうね。低空飛行のまま辞職に追い込まれる矢先にこの事件ときたもんさ」

「中々どうして、悪運の強いヤツじやな。巻き込まれる方はたまったものじゃないかの」
「其々に事情を抱えているみたいで大変ですな」

「他人事の様には言わないでくださいよ、ハルトさん！ 呼ばれているのは私達だけじゃなくてハルトさんもなんですから！」

「結構です。ここでお茶を頂きながら資料整理もしたいので」

大衆に晒されたのはどうやら彼等だけでは無かった。真つ赤な震電が上空から急降下し、銃弾の嵐を掻い潜り、ブースターを破壊して小型飛行船の進路を強制的に変更させた姿というのは、どうやら人々の印象に残る出来事であったようである。

嬉しい反面、慣れない経験をさせてもらう事となり、ゆつくりとしたい時はこうして格納庫にお邪魔させてもらう事態となっている。

図書館の出禁が解除されたのは嬉しかったなあ。今のままでと、また騒がしくさせてしまい迷惑がかかりそうだから行く事は控えているけれど。

「ダメです！ 早く仕度をしてください！」

「人目に晒せる程、整っていないので勘弁してください」

「何を言っているんですか！ 十分、格好良いですから問題ないですよ！」

おお……そんな事を言われたのは初めてだ。素直に照れ臭い。

私の意識など露知らず、アコさんは自分で発言した事を気に止めるような事もせず、私の腕を引っ張り連れて行こうとする。その行動は、意識せず本心から来る発言と受け取って良いものなのか！

「これじゃ堂々巡りだね。お互いの意見の間を取って、ハルトには例の着ぐるみでも着てもらえばいいじゃないかね？」

「なんじゃ、あの奇怪な着ぐるみまだ残っておったんか？」

「奇怪ではありません！ カナリアくんです！ あんなに可愛く出来たのにどうして皆さんには不評なんだろう……」

多分、目元がどうしても不安を駆り立てるデザインになっているからでは。しょんぼりとしているアコさんにそれを伝える事は、私には無理だ。

「それであればギリギリ、なんとか、妥協して」

「もう！ 分かりました！ それで良いですから詰所に寄ってから現場に向かいましょう！」

「あい、了解です」

「二人とも、足元に気を付けてな」

ありがとうございます。感謝の言葉を伝えてアコさんと共に詰所へと走り始める。

慣れ親しみ始めたイヅルマの町。見慣れぬ町の景色は、既に自分の一部となりつつある。

街中へと入ろうとする矢先に、アコさんが急に速度を緩め、足を止める。何かあったのだろうか？

「ハルトさん、聞きたい事があるのですが」

「なんででしょうか、アコさん？」

「もしもこの先、カナリア自警団に何か起きた場合や、私個人がハルトさんに助けを呼んだ場合、ハルトさんは駆けつけてくれるのでしょうか？」

「もちろん、私で良いのなら。なりふり構わず震電に搭乗して向かいますよ。ああ、でもイジツにいられる間の限定的な期間になってしまいますけど」

「……十分です！　ありがとうございます、ハルトさん！」

こちらに振り向きながら感謝の言葉を伝えるアコさん。その時に見えたものは、イジツの空の様に晴れやかな表情をしたアコさん姿であった。

「市民の皆様、大変長らくお待たせしました！　イヅルマでは続け様に難題と直面することがありました。ですが、それに負ける事なく市民の皆様を守り続けてきた、カナリア自警団。そしてご協力者であるハルトさんの登場です！」

急遽、設営された会場には大勢の人達で溢れている。カナリアくんを着ているとはいえ、周囲の視線が集まり、緊張で足が上手く動かない。

「大丈夫ですか、ハルトさん？」

「こちら側は自分が支えます！ ゆっくりと歩いて下さい！」

カナリアくんの短い手をミントさんとリツタさんに掴んでもらいながら段差を昇る。転んでも頭が取れるタイプで無いのが救いといえれば救いだ。

「またアレをやらなきやいけないわけ？」

「あら、楽しいではありませんか。市民の皆様にも名前を覚えてもらう為にも必要な事ですよ」

「ねむうー」

其々の想いを口にしつつも、笑顔は絶やさずに登壇する。

そんな中、会場にいる人並みの中でレオナさんの姿が目映る。呼吸を整えるように僅かながら上下に動く身体を見る限り、急いで駆けつけてくれたんだろう。あの日、一旦別れてからまだそれほど日が経っていないのに、懐かしさで胸が一杯になる。

カナリアくんの中に私がある事を知るはずもないが、この短い手を振ってそれとなくアピール。あ、周囲を気にしながらも小さく手を振り返してくれた。ザラさんへ良い土産話が出来た。

編隊を組むように並ぶカナリア自警団と、その後ろに用意されていた台に乗るその他一名。自己紹介をすると事前に聞いていたが、どうもその方法は独特なようであり、私はどうしたらよいものだろうか？　カナリアくんを着ているし、隅っこで黙っていればいいか。

「いきますよ、みなさん？　せーの！」

アコさんのからの号令により、カナリア自警団の自己紹介が始まる。

「元氣いっぱい、夢いっぱい！　カナリア自警団の突貫娘、リッター！」

「いつでも一生懸命！　カナリア自警団の妹担当、ミント！」

「優しくあなたを包みます。カナリア自警団の癒し担当、エル」

「寝てもさめても夢の中！　カナリア自警団の寝ぼすけ娘、ヘレン」

「冷たい視線で射抜いてあげる。カナリア自警団のクールビューティ、シノ」

「あなたの心に手錠をかけます！　カナリア自警団のカリスマ団長、アコ！」

『愛と正義で平和を守る！　わたしたち、カナリア自警団！』

沈黙を貫くのが正解だった様だ。私にアレは出来ません。せめてと思い、慰め程度に片足を上げ、両手を羽ばたくようにポーズを取り、存在だけは主張しておこう。

イヅルマの空を守る自警団のお仕事は大変だ。日頃から市民の皆さんに認知してもらえるよう活動を行い、まだ若くて小さな羽で空だけでなく地上も見守らなければなら

ないのだから。

それでも、ここにいる大勢の人達の笑顔を守るお仕事が出来るとなれば、大変だとは思わないんだろうな。私らしくもない事を思う。

そのせいだろう、余計な事を考えていたら足が攣りそうである。もう駄目かな、駄目かもしれない。皆さん、ごめんなさい。

「うわあ！ ハルトさんが!!」

前のめりで倒れかけた時に、誰かの声がかナリアくんを着ている私に聞こえた。

その声の主は、きっと其々によつて聞こえ方が違うのだろうなあ。なんてまた考えてしまったり。

カナリア自警団 その後のアコさんと

イツルマにある自警団専用の大きな格納庫の片隅で、私は一人、資料の整理をしている。

静寂に満ちたこの空間に響くのは、資料を捲る音、それらをまとめる為に書きだすペンの音、そして私の唸り声。

やはりタネガシに足を運ばねばならないのだろうか。私がイジツに滞在できるであろう残された時間を考慮してみるが、明らかに足りない。

今から新しい土地へと向かい、聞き込みから資料の入手、現地調査を行うのは、中々の過密スケジュール。

私の中でもっとも不安材料なのが、タネガシを牛耳るのがあのゲキテツ一家だという事。あのフィオさんとローラさんが所属しているマフィアだ。

タネガシで余り見かけない人間が現れたならば、誰かかしらを通じて情報はお二人に伝わるだろう。そこから私の存在を知るなんてお茶の子さいさいだ。アレシマで私がお二人から逃げ出した過去も考えると、一度捕まったら早々離してくれない事は明白。

誰もいない空間で溜息一つ。まだまだ問題は山積みだ。

普段であれば、この格納庫ではジノリさんとハヤト君が、あの戦いで破損した機体の修理と点検作業に追われている姿を見かける事が出来る。

作業が行われている際に耳へと伝わる様々な作業音が心地よい。時折、ジノリさんの叱咤が飛び、大きな声で返事をするハヤト君。

自警団の仕事が終わる頃にはリツタさんもやつて来て、より一層賑やかになる。その時間は私の密かな楽しみとなっていたりする。

いま二人の姿が見えない理由は単純で、連日の機体整備によりやく一区切りが付き、本日は休日になるとジノリさんから事前に伝えられているからだ。

私は私である事件の後、イヅルマ市民の皆様からの熱気に満ちた褒め殺しに耐えきれなくて、少しばかり距離を置く為、格納庫にある作業机で資料整理をしていた。褒められる事に慣れていない人間からすれば、あの経験はまさに未知の領域である。

事件後、当初はそのような日々が毎日続いたが、市民の皆様からの賑やかさも大分落ち着きを取り戻した矢先、あの突発イベントが行われて、その際にカナリアくんの中にいた事が知られてしまい、今度はどこへ行つても『あの時は派手に倒れたな!』とからかわれてしまう事に。

我ながら大変恥ずかしい失敗ではあるが、最近ではイヅルマの人達の話のタネになる

のならいつか、と開き直す事にした。

一息つく為に軽く背伸びをして身体を動かす。

その際にどうしても目に止まるのは、格納庫の隅に移動させられている震電の姿である。

修理の急ぎが必要ない事も既に伝えてあるので、しばらくの間は、あの時に受けた銃弾による掠り傷や穴の空いたパンケーキマーク姿の震電が見る事が出来る。

震電の状態を見る度に、イズルマの空にはちやんと私もいて、目的を果たして帰還をする事が出来たのだなと何故か他人事の様思う。

あの銃弾の嵐の中でよく五体満足で生きていられたものだ。

「あつ！ やはりまだこちらにいらつしやいましたか！ ハルトさん！」

「アコさん？ こちらまで足を運ばれるだなんて何かありましたか？」

「そろそろお昼の時間が近いのですが、まだ詰所に戻られていないと聞いたので、様子を見に来ましたよ！」

発言とは裏腹に、やや照れ臭そうに頬を掻きながらそう私に伝えるアコさん。

近くに置かれている時計に視線を移すと確かにお昼の時間が近い。朝から作業を初めていれば、いつの間にやら気が付けばこんな時間に。

「わざわざお伝えに来て下さったんですね。ご足労いただきありがとうございます」
「気にしないでください！ こちらへ来る道中も街中のパトロールが出来ますから、むしろ丁度良かったです！」

空に浮かぶイジツの太陽に負けずとも劣らず、素敵な笑顔をこちらに向けてくれるアコさんが眩しい。

今日だけでなく、あのイベントの時も前のめりで倒れた私を介抱してくれたのはアコさんであった。

他の隊員の皆さんから聞いた話では、呻き声と共に前のめりに倒れた私を仰向けにした後、颯爽にカナリアくんの上で前転し、勢いそのままに担ぎ上げて病院へと向かったらしい。それはもしやレンジャーロールと呼ばれる担ぎ方なのでは。

アコさんの心配も他所に、カナリアくんは動きづらさはあれど地面に倒れた程度では、私でもかすり傷の一つも出来ない程に頑丈な着ぐるみなのだが、そこへまた一人、騒がしい人物が現れる。言うまでもなくレオナさんである。

どこからか私がカナリアくんの中にいる事を聞きだしたのだろう。その後は、両サイドから私を心配してくる声が聞こえ、最終的にお医者様から頼いと病院から叩き出されていく二人を思い出す。

「なんだか楽し気な表情をされていますけど、何かありましたか、ハルトさん？」

「あのイベントの時に介抱していただいた事を思い出しまして」

「あつ、あれはハルトさんが急に倒れ込んで来るのがいけないんですよ！ 突然の事でびっくりして本当に心配したんですから！」

「ご心配おかけさせました。おかげさまでこうして元気になっております」

格納庫に人二人。他愛のない会話が大きな建物内で声が響く。コロコロと表情を変化させるアコさんを見ているのが楽しい。

「ハルトさんって、本当に目を離れた際に何かを起こすタイプですよね」

「本人からすると一切自覚は無いのですが」

「レオナさんとお話をさせて頂いた際に、ハルトさんあるあるで物凄く盛り上がりましたよ？」

椅子に座ったままの私に近づき、覗き込むように身体を折り曲げて見つめてくるアコさん。少し意地悪な表情が見える。

「いつのまにそんな出来事が」

「私達が騒ぎすぎて病院から追い出された後になんですけどね……」

「私は念の為、病院で一泊させられていたのでそんな事があつたとは知りませんでした」「ちゃんと隊を率いる者同士、意見交換もしたんですからね？」

「疑いませんって。何か実りある話がありましたか？」

「はい！ 大変勉強になるお話聞かせてもらいました！ 流石、あのコトブキ飛行隊の隊長をされている方だと！」

「私は隊長として仕事に専念されているレオナさんの姿を見た記憶がおぼろげなのは何故なのでしょう？」

「きつと、ハルトさんの前だと自然とお姉さんになってしまふからだと思えますよ？」

「楽し気に声を出しながら笑うアコさん。そんなレオナさんをよく見てあげてね、なんてザラさんからお願ひされていたのは内緒。」

それでもイツルマに来てからレオナさんの新しい一面が見れた事が嬉しくも思う。

「さつ！ ハルトさん！ お昼ご飯を食べに一旦戻りましょう！」

「うえーい」

「時々、ヘレンさんみたいな返事をしますよね、ハルトさんって」

「こういう返事をしてアコさんは許してくれると私は信じているのです。これを教官殿に向けて言った日にはそれはもう大変な事に」

「シノさんの対応が普通だと思えますけど……」

「ならばアコさんは器が大きいという事で」

「結局、からかっているんじゃないですか！ もう！」

「ごめんなさい。でもアコさんを信じているのは本当ですからね」

「私だってハルトさんの事は信じてますよ！ 私達の為にあれだけご協力をして頂いただけでなく、イツルマの危機を救ってくださったんですから！ それに……」

「それに？」

「お父さんの事も含めたら、私はどうすればハルトさんに恩返しができるのでしょうか……」

「明るい表情が俯き加減に。お父さんの件についてはオタガイサマな案件だと思うのだけど、アコさんの中では違うのだろうか。」

「気にしない方がいいと思いますよ？ こう言っては何ですが、偶然の重なり合いといか思えませんでしし」

「それでも！ お母さん達の喜ぶ姿を見せてくれたのは確かです！ 私もお父さんの元気な姿が見れてとても嬉しかったのも事実です！」

「んーそれじゃ食堂でカツ丼を奢ってください」

「私のお父さんの存在価値がとて低くないですか!？」

「そうは言われても、あの時あの方がアコさんのお父さんだと知る由もなく」

「それはそうなんですが……なんだかモヤモヤとするんです！ 私の納得が出来るハルトさんへの恩返しを考えてください！」

「私ですか!？ 既にイツルマの素敵な夜景を見せて頂きましたし、私がユーハングと

知られた際にも慰めてもらいましたから、むしろ頂いてばかりなのですが」

「それは一旦忘れてください!」

強硬姿勢を崩さないアコさんであるが、顔が赤いのはきつと私に膝枕をしてくれて頭をナデナデした時の記憶が蘇っているからではないかと思う。

私もあの時の事は良く覚えている。人生初ではないかと思う出来事でもあり、それも容姿端麗のとても可愛らしい女性にしてもらったという事実。

最近思うのだけど、イジツにいる今が私のピークなのではないかと。その代わりイジツ基準や出来事に驚かされる事も多々あるが、それさえもイジツの世界を楽しむスパイスになっているようにも考えられる。でも空戦はやっぱ怖いのだ。

「私の納得が出来る恩返しの方法は思いつきましたか、ハルトさん?」

「言葉にされると不思議な感覚に陥りそうですが、一つ浮かびましたよ」

「本当ですか! それは一体なんですか! 私 チェックは厳しいですよ!」

両手をワキワキと動かしながら今か今かと待ち望むアコさん。提案が却下された時点ですぐりの刑に処されてしまうのではないかと不安になる程に。

「写真を撮りませんか? 考えてみたらイジツへ行き、アコさんと出会ったという証拠を用意しておかなければ、お父さんに信じてもらえないのかなと」

「写真ですか、確かにそれは良い案ですね! でもお父さんに私がアコだと分かっても

らえるかな？」

「後日で良いので、アコさんとミヤコさんのお二人が喋る姿も撮影出来れば問題ないかと」

「確かに！ お母さんも一緒ならお父さんもきつと信じてくれる……つてちがーう!!」

頭を抱えながら提案を拒否するように叫ぶアコさん。今日は一段と身振り手振りが大げさだと傍から見ながら思う。

「これじゃハルトさんに恩返しをするどころか、またお世話になってしまいうじゃないですか！」

「別に気にしなくても。それに必要な事だと思いますし」

「それはそうなんですが！ うぐぐ……」

隊を率いる人間は、皆何処かかしら譲れない部分を持ち合わせているみたいだ。でも他に案と言つても……あつ。

「なら私と一緒に一枚どうですか？」

「……ハルトさんと一緒にですか？」

「はい。ただお互いに密着しあつての撮影になってしまうので無理にとは言いませんが」

「それです！ それでいきましよう！ 私とハルトさんが一緒に写っていればお父さん

も文句は言わないでしよう！」

さつきまでお世話になるから嫌だと言っていた気もするが、アコさんが乗り気のうちに済ませてしまおう。

手招きでアコさん呼び寄せ、私の隣へと誘導する。密着するぐらいの距離感、アコさんから甘い香りを感じとれる程に。

取り出したスマホ君で自撮りの体勢に。手を伸ばして画面に私達二人が収まるようにピントを合わせるのに四苦八苦。

二人で位置を移動したりと試行錯誤を重ねた結果、お互いの頬が触れあう程の距離に。背丈は余り問題にならなかつたところが泣ける。

「このまま試しに一枚、撮影してみますね」

「な、なるべく早めでお願います！」

吐息さえ感じられそうな状況下で試しに一枚。映し出された二人の姿は、慣れない事から来る緊張で顔が強張っている。当たり前前といえど当たり前前か。

「表情がアレですけど、無事に撮影出来たので良しとしましょうか」

「駄目です！ こんな表情をしている私の姿をハルトさんにお渡しできません！ やり直します！」

目的が変わっているのではないかと思しながら、アコさんの指示通り何度も撮り直

す。

最初は強張る顔も、次第に慣れてきたのか、いつもと変わらぬ表情を出せるようになってきた事が枚数を重ねて確認できる。

ただ、自然体の姿を撮影出来る様になるたびに、アコさんが自身の身体をこちらへ預けてきている状態に。私の鼓動が高まっている事がバレやしないか不安になる程に。

「撮影するにも手が限界にきそうなので、これで最後にしましょう」

「分かりました！ ハルトさん、最後の一枚は私達だけの秘密にする事は出来ませんか？」

「勿論、構いませんよ。最初はそれが目的で撮影を始めたはずですから」

「そ、そうですよね！ ありがとうございます！」

気合を入れ直すように両手は拳を作り、覚悟を決めた表情を向けてくるアコさんを見て抱く感情は『可愛い』の一言。

出会った当初は、発せられる悪意の無い毒舌に驚かされたりもしたが、イヅルマで共に過ごす内にそれもアコさんの魅力の一つではないかと思ひ初めてきた。

イヅルマで発生した事件を通し、市長が始めた突発イベントの前に私へ見せてくれた晴れやかな笑顔。

そして自分自身の胸の高鳴り。やっぱりそういう事なんだろう。

最後の一枚を撮影するべく、再び密着といっても問題ない位置に立った時、自然と口から言葉が発せられる。

「アコさん、撮影前ですけど一言よろしいでしょうか？」

「何かありましたか、ハルトさん？」

「こうして出会ってから短い間ですけど、思った事があつたんです」

「思った事……ですか？」

「私、アコさんの事が好きです」

「はあ……つてうええええ!!」

告白して返事の第一声が奇声ですよ。でも可愛いと思ってしまうのは、あばたもえくぼ。秘密裏に連射モードにして撮影しとこ。

万が一、撮影時にアコさんの体勢が崩れて倒れないようにと、腰へ手をまわしておいたのも正解かもしれない。

実質、私の腕の中でも顔を赤くしながらモゾモゾと動く愛らしさ。短く整えられた赤髪がサラサラと揺れ動く。

「伝えたい事を伝えられたので撮影しますね」

「ちよつ!!? 待ってください、ハルトさん! 心の準備が!」

「はーい、撮りまーす」

アコさんの言葉を遮るように撮影準備。腰に回していた手をこちらへ引き寄せようとしたその時、アコさんからの抵抗が無くなる。

撮影する為にスマホの画面をタップしたその瞬間、不意に頬へ感じるのは、熱のこもった柔らかな感触。

画面に写し出されている姿を見れば、アコさんからの頬への口づけが記録されている。唐突な事を言い始めた私が固まってしまう。

長くて短い甘いひととき。それでも次第に離れていくアコさんが、ただただ恋しく。

「この写真は絶対に他の人には見せちゃダメですからね！」

念を押すようにその一言を発した後、アコさんは逃げるようにして格納庫から出て行った。

これは告白に成功したという事だろうか？ 心臓の高鳴りだけは収まらずに私と共にいる。

追いかけて言葉で直接聞きたい。その想いを止められる術もなく、私はアコさんを追いかける為に格納庫から飛び出していったのであった。

カナリア自警団 その後のエルさんと

闇。

暗黒を象徴する言葉でもあり、光が欠如された状態を意味する。

闇は誰しもが持ち合わせている。普段、表に出ない側面のことを意味する場合も多い。

今回は後者のお話。一人の麗しき女性が持ち合わせていた、聖母の様な優しさに心の枷が解き放たれ、傷ついた戦士達に纏わりついていた闇が、光へと導かれていく様を御覧頂く事になるのだろう。

「いやいや、私は戦士でもないですし、何より嫁派なのですが」「ハルトさん、お口が止まっていますよ?」

私がイベント会場で前のめりに倒れ、気を失い、次に目が覚めた場所は病院の内部。目の前に差し出されたフォークには、一口サイズに納まるように小さく切り分けられた果物が刺されている。

幾度となく断りを申し入れたのだが、そこはイジツ人。更にエルさんの性格が加算される事により、有無を言わず、食堂でされていた様に、再び餌付けを体験する羽目に

なった。

起きたてのホゲホゲとした脳みそに喝を入れたいところなのだが、エルさんから放たれる母性に甘えたい、もう一人の自分が必死に抵抗をしてくる。

最近、自分がとても甘えん坊だという事が垣間見える機会が多く、羞恥心で押し潰されそうになる。何が悲しくて私のテレテレ姿をお見せしなくてはならないのだ。

「お医者様からは、本日は安静にしていればお身体に問題は無いとご説明を頂きました」「そうでしたか。私が気を失ってからどれほど時間が経過したのでしょうか？」

「まだ数時間程度ですよ。先程まで自警団のみんなとレオナさんもいらしたのですが、大勢で見守っていても仕方ないとお医者様から怒られてしまいました」

首を軽く傾げ、照れた様子の表情のエルさん。お姉さんという言葉がよく似合う方が見せてくれた、貴重な姿に拝みたくなる。決してママンとは呼ばない。

「あれ？ レオナさんも来て頂いていたのですか？」

「はい。ハルトさんが倒れ込んだ際に発せられた呻き声で、カナリアくんの中にハルトさんがいらした事に気が付いたと言っておりましたよ」

耳が良いのレベルを超えているような気もするが、この場合は気にしたら負けなのだろう。思えば初めてレオナさんと出会った時に呟いた独り言も、キツチリと聞かれていたのだから。

一人で納得をしていると、唇に押し付けられる切り分けられた果実。視線をエルさんに向ければ、何時もの穏やかな表情に戻っていた。

「はい、あーん」

「あーん」

諦めの境地とは、こういう事を言うのだろうか。自然と口が開かれ、果実の甘みが広がる。いつの間に用意して頂いたのだろうか。

「エルさんは病院に残って下さったのですか？」

「ええ、アコにお願ひしてハルトさんを見守らせて頂いていたんです。可愛い寝顔でしたよ」

「エルさんって、意外と意地悪さんだったりしません？」

「ふふつ、自分でも不思議だと感じていますよ。寝ているハルトさんの頬つぺたをツンツンさせてもらったり、こちらが癒されてしまいました」

今度は頬を赤く染め、それを隠すように両手で覆い、くねくねと左右に身体を動かすエルさんの姿。普段のギャップ差も相まってとても可愛らしい。

だが、この愛らしい姿の裏側には、人を駄目にする闇が潜んでいる事を忘れてはならない。私は直接目にしたのだ。この町の市長が……。

「あらあら？ また考えごとをなされているのですか？ ダメですよ、栄養をしつかり

摂り、心も身体もきちんと休ませてあげなければ」

ベッドの上で上半身を起こしていた私の身体。両肩を掴み、優しく押すように横に就かせてくれるエルさん。その際、顔に触れる金色の髪は、柔らかく清楚な香りが私の思考を奪い去る。

いつもの定位置に手が置かれ、ゆっくりとした手の動きで撫でられている最中に、目に止まるのが空色の花弁のブローチと首回りのチョーカー。

さり気ない箇所にお洒落を身に纏う真正正銘のお嬢様。一般的な家庭とはかけ離れた身分に生まれ、生活をしていると、人の為に行動を起こす事は義務だと教育されることがかなんとか。ノブレスオブリージュ、だっけ。

今こうして手厚く介護をしてきているのも、貴族の義務から来るものなのだろうと考える事にした。そうしないと闇が深すぎるのだ、エルさんは。

このまま身を委ね、目を瞑り、眠りにつけば何も問題はない。そうすればエルさんの甘やかせ気質も落ち着きを取り戻し、詰所へと戻られることだろう。

私の闇とエルさんの闇が融合することなく、この場を切り抜けられる最善策。ホゲホゲの脳みそから生み出された閃き。完璧だ。

そうとなれば一刻も早く眠りにつかねばならない。エルさんの暖かい手を感じ取りながら全身の力を抜き、睡魔が訪れるのを待つ。

しばしの間、訪れる沈黙の時間。手の動きに合わせるように呼吸をする私の息遣いが、室内に伝わる。

次第に訪れる眠気に身体を委ね、私は意識を手放す事に成功した。現実逃避ではない、戦略的撤退である。

「えいっ」

覚悟を決めた様にも聞こえつつ、内に秘める衝動を止める気も無さそうな、実に愉快そうな声。

発せられた当人を知る人たちからすれば、とても幼く聞こえたであろう。実際に聞いた私も、誰の声を理解するのに戸惑ったのだから。

声と共に私の身体へ衝撃が走る。突然、胸元を中心に重みを感じ、目を開くと、視界を遮るかの様に、先程感じていた柔らかく清楚な香りが顔中に広がる。

視界では何が起きたのか分からない。しかしながら身体に感じるとれる確かなもの。大きくて、柔らかくて、暖かく、それが気高き双丘である事に気が付くのに時間はかからなかった。

「エルさん!! 何故にゆえ私の上に覆いかぶさっているの?!」

「あら? 気が付いちやった。私の事は気にせずゆっくりと休んで頂戴」

「この状況下で休める人間がいたら尊敬しますよ!!」

私との会話を実に愉快そうな声で受け応えるエルさん。左耳から聞こえてきたので、全神経を使い、そちらへ頭を動かす事に専念する。そうしなければ、制服の上からでも自由に形を変える気高き双丘に、意識全てを奪われてしまうからである。

一ミリたりとも頭以外を動かすまいと必死になつているところへ、首元に息を吹きかけてくるエルさん。全身に喜び走るが、それがさらに幸福の連鎖を生み出す事により、穢れた大地が今や今やと塔の建築を伺い始める。そこだけは機能してはダメなのだ！

「エルさん！　お願いですから！　一旦離れて頂けませんか!?!」

「私、そんなに重かったのかしら……」

「いえ！　まったく!!　一欠けらも!!!」

「ならもう少し、このままお邪魔しちやいます」

重さという概念を持ち出すのならば、全く問題にならない。先程よりも力が抜かれ、寄りかかるエルさん。自分以外の存在を感じられることが、これほどまでに心地よいとは。

右肩にはそつと置かれたエルさんの左手。真横には、エルさんの潤んだ瞳、耳まで赤みを帯びた顔、艶やかな唇からは悪戯心満載の吐息が私の首元に当たる。

その度に全身が震えそうになる自分の身体を、理性と共に抑えつける。

当然、私の目は見開き、口は半分以上、開いたまま。エルさんの綺麗な髪が巻き込まれていなくてよか……たとか思っている場合ではない。

このままでは脳と身体が、お互いに意見の一致を確認し、感情を切り離れたまま合理の元、エルさんに対して行動を起こしてしまうのではないだろうか。一揆！ 一揆だ！ 一刻も早くバカヤロー解散をしなければ！

私に残された僅かな理性と、それに従ってくれる身体の箇所を確認する。幸いにも両手両足が応えてくれる。

取るべき方針が見えてきた。無理矢理にでも上半身を起こし、エルさんにはそのまま私の足上にお座りをしてもらう。

それだつて正直なところを言えば、刺激が強すぎるのだけれど、この状況よりは冷静になれる自身がある。

唇から放たれる甘色吐息と、変幻自在の母なる大地がタツグを組むと、人は皆、正気ではいられなくなる事を、身を持って知りました。

上半身を勢いで起こす為に、両足を揃えたまま上げて角度を付けていく。この姿を第三者が見ていたら何と言うのだろうか。

そんな『かもしれない』を想像するよりも、すべき事を優先しなければ。私の理性とか、邪な思考や、局所的な意味合いも含めて。

「エルさん！ 失礼します！」

「まあ！ ついにその時が来たのね！」

「どんな時だよお!?!」

でも一言断りは入れたからね！ 上げていた両足を下ろし、勢いそのまま上半身を無理矢理起こす。

その際に、エルさんをベッドの上から弾き飛ばさないよう、両手を使い保護する様に抱え込む。

結果として出来上がった図案は、エルさんをお姫様抱っこしている状態になってしまったわけなのです。

私の右肩に置かれていたエルさんの左手は、ギュッと服が握り締められ、潤んだ瞳は今や大きく見開かれている。

思わず見つめ合う状況になるが、先程に比べれば幾分か楽になったことは実感できる。それでも私に寄りかかるエルさんの暖かな身体と、ご立派過ぎるお山に意識を奪われそうになるのだが。

呼吸が乱れる私の姿が面白いのか、腕の中で笑い始めるお嬢様の姿。

「ハルトさんと一緒にいると、楽しい事ばかり起こりますね」

「当の本人は、毎日を必死に生き延びようとしているだけなのですが」

「その結果、私をこうして抱き上げて下さったのですね！ 初めての経験ですが、ハルトさんがお相手でよかったです」

「誤解を招きそうなことを言わないでください！ 限界が近いんですから！」

「あら？ 誤解をされて困るようなことは言っておりませんよ？」

エルさんの左手に力が込められ、華奢な身体は更に私の身体に押し付けられる。そのまま左肩にはエルさんの頭が置かれた状態。これはあれですか、当たってるんじゃないかと、当ててんのよ的な。

だがしかし、こちらは一度は危機を乗り越えた身。現在クールタイムが発動中。今の内に気になっていたことを伺うべきか。

「そもそも、何故にエルさんは、私を相手にこんなにも親しく接してくれるのですか？」
「ハルトさんが、一向に甘えてくれなくて、私は悲しくて……」

「いあいあ、あーんをして頂いた時点で、物凄く甘えさせて頂いているのですが」
「でも、アコの膝上ではあんなにも可愛らしい姿を見せてくれたのに、私には見せてくれませんか！」

「見てたの!？」 とうるか空から見えるものなの!？ そもそも日も暮れた夜でしたよ!？」
「私も自警団の一員ですもの！ きちんと訓練を受けておりますよ！」

絶対に自警団は関係ないと思う。訓練は……すれば見えるものなのか？ 現代日本

人とイジツ人を比較してはならない。

「つまり、あの時の様に甘えん坊になつていた私の姿を、エルさんの前でも現して欲しいというわけですか」

「はい！ 勿論それだけが理由ではありませんが、ハルトさんがイツルマに滞在している間に、様々な事がありましたでしょう？」

「確かに。とはいえ、半分以上は自身のことに関与していましたし、仕方ないかと」

「いけません！ その考えが徐々に心と身体を蝕み、気が付いた時には傷つき疲れ果てた戦士へと……」

「いや、私は別に戦士というわけでは」

私の唇にエルさんの指先がそつと触れる。表情を伺えば、今にも『めっ』と怒り出しそうなお顔が隣に。

どうすればいいのだろう。素直に甘えれば良いという答えは出ているのだが、私のちっぽけな自尊心が抵抗を試みている。

エルさんが納得して頂けそうな方法。他にないものだろうか。考えれば考えるほど沼に嵌まり込み、結局はいつも通りの方法しか浮かばないのである。

両手に抱き抱えているエルさんを、私の身体に押し付けるように力を込める。その瞬間から頭の中で掌に摩擦が発生する程の拌みカーニバルが開催。今なら必ず当たる！

いや、当たっている！

「エルさん、甘えさせてもらいながらで申し訳ないのですが、話を聞いて頂けますか？」「勿論です！ なんでも私にお話してくださいね！」

「私は誰かに甘える事に慣れていなくて、今こうして両腕の中に、これほどまで魅力的な女性を抱き抱えていることが信じられない程です」

「まあ……。ハルトさんは、ずっと一人で戦っていらしたのね」

「そこはもうスルーします。簡単に申し上げますと、エルさんを甘えさせたいのです」「私を……ですか？」

「はい。他者に安らぎと癒しを与えられるエルさんが、とても素晴らしい方なのを言うまでもありません。ですが、私はエルさんから頂くだけでなく、一緒に分かち合いたいと考えております」

「分かち合う、ですか？」

「例え相手が戦士であろうと、自警団員であろうと、一方的に与えるだけの関係は、お互いに良くないと思うのです。私はエルさんから頂いたこの幸せを、エルさんにお返しをしたいのです」

本音の本音。一人より二人。受けた恩は、きちんと返すのが式守さんの家訓。というのは重たいだろうか。

それでも、私の腕の中で大人しく抱かれたままの女性に対して、このような想いを抱いてしまう事はいけないことだろうか。

私の一方的な話を真面目に聞いて下さっていたのだろう、エルさんは何も喋らない。ただただ私を見つめている。

これも良い機会、エルさんの身体を持ち上げベッドの縁に腰掛けるように下ろす。

こうして私の苦しくも幸せで満ち溢れた時間は、終わりを告げる。

「あの、ハルトさん……」

「なんででしょうか？」

「ハルトさんは、私も誰かに甘えたり、幸せになつて欲しいと言つておられましたよね？」

「はい。私はエルさんから沢山の愛情と幸せを受け取りました。それを是非ともエルさんと分かち合い、共有をしたいのです」

私の言葉が切つ掛けだったかは定かではない。ただ、エルさんの綺麗な瞳から涙が流れ始め、その姿さえも綺麗だと思つてしまう。

「え、エルさん！ 大丈夫ですか!？」

「私、これほどまで殿方に想われたことは初めてで、その相手がハルトさんだと思つと嬉しくて！」

「それは大変光栄ですが、一先ず涙を拭きましょう！」

ポケットから出したハンカチで、エルさんの目元を優しく触れて涙を拭う。

「本当に不思議な方。これが独占欲というものでしょうか？」

「独占欲ですか。エルさんがそういった欲望を口に出されるのは初めてでは？」

「はい！ そのお相手がハルトさんで私は嬉しくて！」

途中までは普通の会話内容だったと思うんだ。自分の想いを言葉にして伝え、私はこう思いますよと伝えなくては。ずだ。

山場を無事に乗り越えたと言っても過言ではない。この後に聞かされるエルさんの言葉を聞かなければ。

「不束者ですが、末永くよろしくお願い致しますね」

「ちよつと何を言っているか分からないのですが」

「さあ！ こうしている場合ではありませんわ！ 爺や！ 出てらっしゃい！」

「こちらに、お嬢様」

「うえあ!! どなたですか!!? むしろどこから現れたんですか!」

「これは申し遅れました。お嬢様のご実家で執事をさせて頂いております。爺や、とでもお呼びください。」

「は、はあ。ご丁寧にどうも」

「ハルトさん！ 今から私の両親に会ってください！」

「ナンデ？ ドウシテ？」

「それは勿論！ ハルトさんの求婚をお受けする事に決めたからですよ！」

「私、求婚とかお付き合いしてください的なことを言いましたかね！」

「私とこの先も一緒に、愛と幸せを分かち合いたいと！ これほどまで情熱的で心を揺さぶられる求婚は初めてでしたわ！」

「その会話で！？ それで結婚を前提にお付き合いとかの話に繋がっちゃうの！」

「前提ではありませんよ。決まったことですから！」

先程まで涙を流していた顔は何処へやら。今やキラキラと輝きさえ見えるエルさんの表情。

これはアレシマ以来、再び訪れた私の人生の分岐点。ここを逃げ切れなければ、鐘の代わりにアノマロカリスが爆発し、ライスシャワーの代わりにパンケーキが投げ込まれる教会コースへ。脳内では解散詔書を読み終えて、万歳三唱が鳴り響きは……じめてたまるかい！

まだ目的を完遂していないのに結婚しました。なんてことになってしまったら、曾祖父やイサオさんからも、生涯ずっと嫁探しにイジツへ行つたのか？ と揶揄われてしまふ！

相手は二人、ここから病室を抜けて誰かに、レオナさんに助けを求める事は出来るのであろうか？

一人は女性のエルさん。もう一人はご年配の男性。

だが、私は学んだのだ。イジツ人に純粋な力で逆らう事は、到底不可能だと。あれ、詰んでない？

そこで思い出す。これでも私は病人扱い。本日は安静にしていなければならぬ身である事を。これを利用して援軍を呼ぶしかない。

「エルさん！ ご両親に会う話は一度横に置くとして、私はお医者様から安静にしている様にと言われているんですよね!? なので病室からは動けませんよ！ 絶対に動かないよ！」

「そうでした！ 私ったら、嬉しさの余り、少し気が早かったかもしれませんがね」

「そうですとも、そうですとも。きちんと順序を踏んでからでなければ。大切な事ですから。なので爺やさんにお願いが」

「何でございましょうか？」

「アコさんとレオナさんが詰所にいらつしやると思うので、こちらへ呼んできては頂けませんか？」

「愛を誓う為に証人をお呼びするのですね。承知いたしました。旦那様」

「この状況下、絶対に楽しんでいきますよね？」

「そんな事は御座いませぬ。お連れするお時間は何時間後がよろしいでしょうか？」

「まあ！ 爺やつたら！」

「今すぐに！ 最速でおなしやす!!」

「承知いたしました」

意外な事に、私からのお願いを受け入れてくれた爺やさん。お二人を再び病室へ連れて来てくれる模様。最初から素直にエルさんに甘えておけば、万事解決していた気がしなくもない。

だが、少なくともこれで援軍がやってくる事は確定した。常識人のお二人が来て下されば、この捻じれた会話内容は、元に戻されるだろう。常識人のお二人が来て下さ

安堵の息。寝起きからフルスロットルで流石に疲れが現れ始めた。

起こしていた上半身を再び倒し、無理矢理ではない眠気と疲労が瞼を重くし始める。寝ても大丈夫なのだろうか……。

エルさんに視線を向ければ、当然のようにこちらを見守る穏やかな笑顔。本当に敵わないや。そう思うと自然に言葉が口から放たれる。

「エルさん、お願いがあるのですが」

「なんででしょうか？」

「その、眠りにつくまででいいので、手を繋いでほくれませんか？」

「……はい。喜んで」

私の右手を大切に、愛おしそうに手に取り。指を絡め合い、撫で合う。それがとても心地よい。

瞼を閉じる。求婚とか、結婚とか。私にはまだ分からない事だらけ。それでも決して嫌だという感情は浮かばなく。

一つずつ、お互いの理解を深めながら、この先も……。

瞼の裏側で何か答えを見つけたはずだが、意識は自然と手放していた。

カナリア自警団 その後のリツタさんと

自警団の建物内に併設されている食堂。その片隅に私とリツタさんが隔離されるように、隅へと追いやられている。

目の前には湯気が立ち上るホカホカの白米。イジツでもお米を食べられる事に感謝しなければ。

では何故、私たちは部屋の隅へと追いやられているのか。言うまでもなく、リツタさんのカバンから出された納豆が原因だ。

藁の中から取り出された、発酵した大豆が、異臭を巻き散らしながら糸を引く。この光景は、納豆を食さない人から見れば、その異様な光景に間違いなく頭を抱えることだろう。

苦手だと言う人達は、食す前の見た目と臭いで好き嫌いを決めてしまう人達が大半なのだろう。一口目が最も勇気が必要だから。

「味そのものは美味しいと思うのですけどね、納豆」

「今日は特別に食堂への持ち込み許可が下りましたが、普段であれば取り付く暇も無く追い出されるんですよ……。それに最初の頃なんて食べ物扱いすらされていなかった

「たんですー！」

「その対応ですと、今でも食べ物扱いをされていらないと思いますが」

「ぐぬぬ！ ユーハングから伝わる伝統的な食べ物だというのに！」

「確かに。古くからある食べ物であると聞いた事があります」

「どのくらい前からあるんですか？」

「うーん。誰でも年中食べられる様になった年代で言えば、今から二百年前ですかね」

「二百年!? そんな大昔から食べられていたんですか!？」

「ユーハングがこちらにやって来た頃には、リッタさんの言われている通り、非常食であり、栄養食として食べられていたと曾祖父に聞きました」

それでも、やっぱり好き嫌いの問題は大きかったとも。生理的に駄目な人は、どう頑張っても駄目だろうから。

「私のご先祖様は、ユーハングの方から直接教わり、製法を絶やす事なく先祖代々伝え続け、こうして今へと受け継がれていたのですね……!」

「間違いないかと。私でも知っている基本的な手法で作られている様ですから」

「その納豆を、ユーハングから来られたハルトさんに実食して頂ける日が来るとは！」

「ありがとうございます！ ご先祖様！ 若輩ながら自分が作った納豆を先祖代々の代表として食べて頂きます！ ハルトさん！ ご先祖様の名に恥じぬ納豆を、是非ご賞味あれ!!」

「あい、いただきます」

どこかのジツチャンに何かをかける勢いで申し込まれる。頂くだけですし、ありがとうございます。

藁から直接ご飯の上のせるのは、不器用な私には難易度が高い。なので一度、小皿にのせてから頂く事に。醤油をかけたりたいしね。

尚、今回使用した食器類は、自分達で用意し、洗い物をする際も場所を指定される程である。念入りな対策に、周囲との気温差を感じる。

その前に、追加の味付けやかき混ぜる前に、少しだけそのまま頂いてみよう。

箸で納豆をすくい、そのまま口の中へ。幾度か口を動かし、食感と味わいを楽しむ。

うん、納豆だ。イジツで日本と同じ味に出会えるとは。もしかしたら日頃食べていたスーパールのパック製品よりも美味しいのではないだろうか。藁って凄い。

「ハルトさん！ 直接食べるんですか!？」

「折角、頂けるのですから、最初は素材の味からと思ったのですが、このままでも十分美味しいです」

「……本当ですか？」

「本当です。ユーハンングで食べていた物と負けず劣らずの味わいですよ」

白米を用意して貰ってよかった。もう一度、そのままの味で納豆と共にご飯をかき込

む。イジツへやってきてから味わう、懐かしの日本の味。

こうなればもう止まる事を知らない。小皿に残る納豆に数滴、醤油を垂らし、適当な回数をかき混ぜる。その日の気分で変わるから正確性は無いのだけれど。

納豆を口に含み、味わい、更に白米を投入する事で、よりまろやかになる納豆を楽しむ。

私は決してイジツの食事について何かを言うつもりはない。イサオさんから聞かされていたよりも種類は豊富で味も好みだ。

問題は、食事を得られる人達と、得られない人達の差が激しいという事。孤児が当たり前の様にいる世界だから。

とはいえ、その話題はそつと横に置かせてもらおう。世界についても、愛についても、語らうべき時間は今ではない。

リッタさんの様子を伺う事を忘れる程、食べる事に夢中になっている私があった。

「ご馳走様でした。大変美味しかったです」

「美味しいと言って貰えてよかったあ……」

胸に手を当て、安堵のため息をつくリッタさん。幸い、事前情報としてリッタさんは料理上手だという事は伺っていた。

少なくとも、分量や砂糖と塩を間違えたりする様な方ではないという事。ご先祖様から伝わる製法を知っている事。

であれば、試食する事になった納豆も、飛び抜けて変な物が出て来る筈が無い。

「大丈夫です、リツタさんの事を信じていましたから」

「ハルトさんって、真正面から物凄い勢いの直球を投げてきますよね」

「結構恥ずかしい事だと自覚していますが、伝えられる時に伝えておかないと後悔するもので」

「では自分も！先祖代々から伝わる納豆を美味しいと言って頂き、あざーっすー」

最後は照れたのを誤魔化す為だろうか、いつもの調子でリツタさんから感謝の言葉が伝えられる。こちらこそ、ありがとうございます。

空になった食器に再び手を合わせてご馳走様。後は洗い物を済ませて、本当に食べたのかと言わんばかりの周囲からの視線から逃れる為にも、食堂から離れなければ。

納豆が入っていた藁をリツタさんにお返しする為、手に掴んだところで、その手をリツタさんに掴まれる。白い手袋を通じて力強いものを感じるの、何故だろうか。

「どうかしましたか、リツタさん？」

「ハルトさん！私の実家に来てくれませんか!？」

「リツタさんのご実家にですか？いつ？何をする為に？目的は？」

「なんでそんなに警戒するんですかあ!？」

「ヘレンさんの時に騙されたので」

「……あー、なるほど。確かに今の発言だけですと、分かりませんよね」

「ご理解を頂けて幸いです。何も分からないままヘレンさんの後を追いかけたら、ジョージさんという鬼が待っていたもので」

娘さんをお持ちの父親は恐ろしかった。詳細を聞かずに付いて行った自分も恨めしい瞬間であった。なお、付いて行かないという選択肢は無い事が前提。

「自分の実家が農家なのはご存知ですよね？」

「何でも様々な野菜を畑で育てているとか」

「はい！ これでも結構な広さの畑を管理しているんですよ！」

「そこへ私は何をすれば？」

「畑で育っている野菜を見て欲しいんです！ ユーハングに有る物や、無い物を教えて頂きたいと思ひまして！」

「それぐらいであればお手伝い出来るかと思ひます。素人目線になりますけれど」

「あざーつす！ それじゃ行きましょうか！」

「はい？」

いつ行くのか、今から。何処かで聞いた事のあるフレーズを実行に移すリツタさん。本日は、リツタさんが非番であつた事や、私の護衛をしてくれているレオナさんに『ハルトさんの力が必要なんです!!』と力説して説き伏せる姿。分かりみが深そうに頷き返すレオナさんを見て、護衛とは何だろうかと自問自答を始めた頃。私は空の上に居た。「ちよつと狭いかもしれませんが、紫電で飛ばせば直ぐですから!」

荷物扱いでリツタさんの実家へと運ばれる私。先程まで食堂で納豆を食し、幸せに浸かつていたはずなのに、何故こうなつたのだろうか。

リツタさんの、イジツ人の行動力の高さに、認識を改めていかねばこの世界で暮らしていくのは難しい。

「ただいまです!!」

「お邪魔します」

「リツちゃん、おかえりー」

「ねーちゃん、ソイツだれー?」

「フツチい……、知らない人をソイツ扱いしてはいけないと、あれほど言っているでしようがっ!」

「うわあつ!? かえつてきてすぐに、おせつきようかよっ!」

ドタバタと音を立てながら逃げ出すフツチ君を追いかけるリツタさん。置いてきば

りの私の服を引つ張るのは、妹さんだ。

「おねーしゃん、だれ？」

「ハルトつて言います。君のお名前は？」

「マイだよー」

「よろしくね、マイちゃん。あと私はこれでも男の子なのだ」

「ええー、ほんとうにー？」

本当だよ。とはいえ証明する方法を実行に移したら、上空から見えたカナリアくんの様な姿にされるのは想像に容易い。

生まれつきこの容姿で、髪まで伸ばしている私も悪いのだから、オタガイサマで終わらせておこう。

家の奥からフツチ君の悲鳴らしき声が聞こえた時、マイちゃんに手を引つ張られて連れて行かれた先で私が見かけたのは、フツチ君に足技をかけているリッタさんの姿。

ただでさえ短いスカートからは、隠れる事を忘れたおみ足が丸見えであり、本日はふとももに巻かれているホルスターが無い分、銃の恐怖が無い。これは大変まずいのである。

「オマエもみてないで、ねーちゃんをとめてくれよー！」

「フツチ！ ハルトさんにオマエ呼びとは良い度胸だあ！」

「ハーしゃん、リツしゃんと、なかよし?」

「仲良しだよ。ハーしゃんって私?」

「うん、ハーしゃん」

私を見つめる無垢な瞳。その様な呼ばれ方は、生まれて初めてである。

目の前で起こる悲劇と誘惑から逃れる様に、その場で膝を付き、マイちゃんと視線を合わせる。

気が付けば、お互いに正面を向き合いながら、日々のリツタさんの活躍について楽しくお喋り。小さな手は両方とも繋がりに、意味もなく上げたり下げたり。

私の話に頷き、時には質問をしてきたりと、お姉ちゃんっ子な面が伺えて微笑みが止められない。

一人っ子の私ではあるが、最近、お姉ちゃんと呼びたくなる人が周囲に増え、僅かながらではあるが、あるある話をした。時間が過ぎ去るのは一瞬であった。

「た、たすけ……」

「どうだ! 参ったか! 参ったと言えーっ!」

畑見学もなんのその。気が付けばそれなりに良い時間を迎えており、ご両親の帰りが遅くなる事から、夕飯を用意してから帰還する事に。

その間、下の子達の相手をお願いされたのだが、フツチ君は足技でやられたまま力尽き、マイちゃんはお喋りで疲れたのか、私の足の上で眠りについている。

そつと足から移動をさせ、風邪を引かない様にと二人の上へタオルをかける。

自由になった足を軽く動かした後、リッタさんの様子を伺いに台所へ。

辿り着いた先でリッタさんの後ろ姿を見つける。何かの味付け確認だろうか、小皿に口をつけて頷く。納得が出来たようだが、私はそれどころではない。

自警団の制服の上からエプロンを身に付け、短いスカート部分は山なりにふわりと浮かぶ。

料理を作る為、汚れない様に身に付けているはずのエプロンが、どうしてこうも似合うのだろうか。

そしてこの場合、どういう感情が先に浮かぶのが正しいのだろうか？ 懐かしさに浸るべきか、もう片方を優先すべきか。川の向こう側で見た人達には、あとで謝っておこう。

「(似合い過ぎてヤバイ)」

「どうしたんですか、ハルトさん？ さてはつまみ食いをして来たんですね！ ダメですよ！ もう少しの我慢です！」

「色々と我慢出来そうにないのですが」

「ダメです！ チビツ子達みたいな事を言わないでください！」

メッと怒られてしまう。その仕草さえも可愛いを強調する様にしか見えない。

「そういうえばチビ達はどうしたんですか？」

「力尽きて寝てしまいましたよ。タオルをお借りしてかけておきました」

「あざっす！ もう！ 夕飯前に寝ると、夜寝れなくなっちゃうのに仕方ない子達ですね」

やれやれといった風に喋るリツタさん。お姉ちゃんをしている姿も可愛い。あ、駄目だ。何を見ても可愛いとしか考えられなくなってる。制服の上からエプロンって反則すぎない？

「ハルトさんに相手をしてもらって嬉しかったんでしょね。本当なら畑を見学してもらうつもりでしたが、チビ達の相手をしてもらって申し訳ないです」

「大丈夫です。ちゃんとお礼は受け取っていますので」

「お礼？ 何かしましたっけ？」

「眼福です」

拜むように手を合わせ、高速ですり合わせる。

何事かという疑いの視線が、徐々に違う意味へと変貌していく。

「何を考えているんですか、ハルトさん！」

「見たまま、リッタさんは可愛いなど」

「可愛い？ ああ、そういう意味……ってそっちですかあ!？」

「どっちだと思っていたのですか？」

「どっちって、それは……」

顔を赤くしながらエプロンの裾を引っ張るリッタさん。なるほど、そっちであったか。確かに間違いではない。魅力的な足をお持ちなのは今更いうまでもなく。

「リッタさん、リッタさん」

「なんですかあ、ハルトさん」

「その仕草も可愛いです」

「そういう事まで真正面から伝えなくてもいいですから!」

「むしろ一番大切な事なのではないかと思つて、速報で」

「なんですか、速報つて!!」

私の一言一句により、恥じらうリッタさんの姿が、尚のこと可愛らしく、愛おしい。

決してからかう様な態度で伝えては無いと思うのだが。抱きしめれば伝わるのだからか、この気持ちは。

ああ、そうだ。可愛い事は伝えたけど、想いは伝えてないや。ふっと突然沸いたような気持ちである事は否めないけど、間違いではない。

口を開き、想いをのせて伝えようとした矢先、口元に何かが当たる。

残念な事に、リツタさんの顔は先程と同じ位置にある。そうなれば、口元に押し付けられている物は一体？

そのまま口を開くと、押し付けられていた物が押し込まれる。熱々で、噛めば肉汁が染み出す。唐揚げかな？

「分かりました！ 分かりましたから、一旦それで落ち着いてください！ もうー」

何度も同じ事を伝えていたせいで、先手を打たれてしまったようだ。残念だけど、押し込まれた唐揚げを味わう事に。とても美味しい。

「はあ……。ハルトさんって、自分に素直と言いますか、わるーい親玉さんと仲良くなれるだけの事はありますよね」

そんな人は、私をここへ送り込んだ人しか浮かばない。まさか同じ扱いを受ける事になるとは思いもよらなかった。

「でも、そんなハルトさんだから、自分達の居る町に出向いてくれて、出会い、協力して乗り越えてこられたんですよね」

失礼と分かりながら、口元をモゴモゴと動かしながら頷く。出会いはなんであれ、一緒に事件を乗り越えて来た事は確かだ。

「だから、これはお礼です。本当にお礼なだけですよ！ これ以上はきちんと手順を踏

んでくださいね！」

そう言い切ると、私に向けて手を伸ばし、髪をかき上げておでこを晒す。

つま先立ちでこちらに近づくと、少しくせ毛のふわつとしたリッタさんの髪が鼻孔をくすぐる。

額には、とても柔らかく、熱いといっても過言ではないものが当てられる。

ゆつくりと離れていくのが感触で伝わり、寂しさを覚えるが、目の前に現れたのは真つ赤な顔をしたリッタさんの表情。その色香に口に含んでいた唐揚げが飲み込まれる。

先手からの追撃。それは見事に私に決まり、見事に撃ち落とされた私に出来る最後の反撃といえば。

両手を伸ばし、リッタさんの身体をこちらへ引き寄せる様に抱きしめる。それに応えるかのように、私の服を掴んでくれるリッタさん。

これがきちんとした手順かどうかは分からない。様々な感情が流れ込む中、一番印象的だったことがある。

それは、この幸せを噛みしめている自分がいるという事である。

カナリア自警団 その後のミントさんと

私の目の前にある机の上には、積み重ねられた本が幾つも縦に伸びており、その一つを調べていかなければならない作業が、今か今かと私を待ちわびている。

その本を探し出してきてくれた人物。ミントさんは、私の隣に座り本の山に手を伸ばして私の調べ物を手伝ってくれている。

隣にいるミントさんの顔を横から見つめる。

カナリア自警団では、リツタさんと並んで小柄な方である彼女は、長い髪を三つ編みにしてまとめ、目にかかる前髪の間隙からこちらを覗き込むのは、金色の綺麗な瞳。

頭に乗せられたカナリア自警団のマークが付いた可愛い帽子は、机の上へと置かれ、制服を基準とした白く長めのコートをベルトでまとめ、下には灰色のスカートとタイツを身に纏う。

無論、両手には白い手袋と白いブーツを履いており、顔以外で肌を露出している所は皆無である。

仕事中は、常にこの姿で対応している彼女だが、寒がり体質なのか、はたまた気持ちの切り替えを行っているのか、コートの上から大きな目の半纏を肩から被せている事があ

る。

そして今、私の隣にいるミントさんは、半纏を着込んだ状態だ。

つまり、この作業は仕事としてではなく、ご厚意によつて手伝つて貰っていると考えるのか？

出禁解禁。なんの事かと言えば、要するに図書館の話である。

ホクサイのちよいとお茶目な春画に、過敏に反応をしたミントさんは、丁度そこにいただけの私を拳一つで軽く吹き飛ばした。

それが原因だったのか、図書館の方から『お前ら騒がしいから出禁』という至極真つ当な判断を下されていた。

しかし、その後イヅルマで起きた事件を被害者ゼロで解決した結果を受け止めてくれたのだろうか、再び図書館へ入れて貰えるという連絡を頂いた。

まだまだ調べ物が必要な時に救いの手。ありがたい話であり、今度こそは大人しく観覧しようと心に決めたわけで。

「ハルトさん、私でよければ何でもおっしやってくださいね！」

そこには呼んだ記憶の無い、ミントさんの姿がある。

しかしながら、両手を揃えながら首を横に傾げる仕草はとても可愛い。だが、その愛

らしい姿から繰り出される一撃は、熊も、私も、軽く一発で仕留める程のカナリア自警団きつての超武闘派。

イベントの際にお披露目していた自己紹介で、発言していた妹担当はどこへやら。

「ハルトさん。前回同様、ユーハングに纏わる本を集めてきましたけれど、今回はイヅルマの事に関しても調べているのですか？」

「はい。あの事件後から色々と考ええる事が多くて。考えてみたら折角イヅルマに滞在しているのに、この町の事に関しては何も知らないなと」

「ラハマから突然連れて来られて……といったら失礼かもしれませんが、その後はずっとお忙しい様子でしたからね」

「それを言うならミントさん達も。カナリア自警団は私がこちらへ来る前から、随分と慌ただしい事が多かったと伺っています」

「あはは……。今回の事も含めて大変ではありましたが、お姉様の活躍を真直で見られる事が出来てミントは感無量です！」

「好きなので、アコさんの事」

「はい！ お姉様は私のずっと憧れで、特別で、これから先もずっとお傍に居られればと思っています！」

「なるほど、ミントさんの一途な思い、アコさんが羨ましいです」

「でも、一時期お姉様を疑ってしまった事があるんです……」

「ミントさんが？ アコさんを？ 何故にゆえ？」

「お姉様は私の気持ちを知った上で都合よく利用しているんじゃないかって……」

アコさんの事だから、ミントさんの気持ちは絶対に知っているし、理解もしているよね。本当に知らない場合や、興味が無さそうな時は、正面から無自覚の毒を吐くから。

でも、アコさんを慕うミントさんがこう言うのだから、結構ギリギリな線でミントさんをコントロールしているみたいだ。

純粋な気持ちとはいえ、自分の事を好きと断言してくる同性の扱い方。うん、適切な対応方法なんて分からない。

好きだと伝えてくれる相手の事を好きになれば問題は。とは思うけど、アコさんだつてミントさんの事は好きはずだ。それが愛ではない事が捻じれる問題なのだろうけど。いや待て、それが通常ではないだろうか。

どの世界でもこういうった事は起こりえるのだなと、ミントさんに顔を向けながら思うわけで。

「でも、そんなドクズな事をお姉様が私にするわけがありません！ あの時は一か月間もお姉様にお会い出来なくて、精神的に追い込まれていたせいなんです！」

「つまり、悪魔の囁きの何かが、頭の中で渦まいていたとか？」

「その通りです！ 結果として、お姉様は私を迎えに来てくれましたから！」

周囲を照らすのではないかと思うほど、眩しい笑顔を魅せてくれるミントさん。その時の出来事を思い出しているのか、光悦とした表情をしている。

だが、誰しも心には隠さねばならない闇を抱えていると思うのだ。それは特定の誰かさんとか言うつもりは無いけれど。

積まれていた本は、ミントさんのお手伝いもあるおかげで順調に消化されていく。

紐解かれていくイヅルマの歴史。本に記述されている内容は、ご三方の証言とは食い違う箇所が幾つも見受けられる。

文献だけでは知れない事を教えてくれた人達に感謝の気持ちで一杯だ。

「こちらの本に書かれている内容も、私達が聞いた事とは違う内容が記載されていますね」

「ある程度は覚悟していましたが、ここまで私達が知っている内容と食い違う事が書かれているなんて」

「有権者と自警団上層部が手を組めば、好きに放題出来るのだな。というのが感想です」
「こういった間違いも、今後は少しずつ明らかに becoming していくのでしょうか……」

「そこは議会の頑張りどころではないでしょうか。自警団は、今まで通り住民の皆さん

から信用を得られるように行動を続けていくしかないかと」

「……そうですね！ お姉様の力になれるように、ミントは頑張ります！」

「正直、カナリア自警団に関しては問題無いと思いますけどね」

市長の突発的なイベントが開催されたとはいえ、あれだけ大勢の人達が集まってくれた。

間違いが正され、再び脅威に晒された時、住民の誰しもが目に出る形で町を救ったのだから。

その脅威の原因として、私と関わり合いのある人物が元凶なのがなあ。と、つい考えてしまう。

「ハルトさん、いま良くない事を考えていましたよね？」

「何故にバレたし」

「お姉様に出会う前の私は、人見知りでいつも一人ぼっちでいる事が多かったんです。そのせいででしょうか、人の顔色を伺うのは得意なんです！」

それは胸を張って自慢げに言える事なのだろうか。だが、実際に事実を指摘されてしまえば、ぐうの音も出ない。

住民の皆さんから滅茶苦茶に褒められる喜びの反面、調子に乗らない為だろうか、反動として余り良くない思考が湧いて来る。

うーん、これはきつと私の闇と呼べる部分なのだろうなあ。と、一人で完結させようとしていたところ、私の両頬を包むようにミントさんの手が添えられる。

「ハルトさん、私がこの様な事を言うのは変だと思えますけど……」

「あ、あの」

「いま、ハルトさんが考えていらつしやる事は間違いだと思えます！」

「それどころでは」

「あの事件は、あの人達の意志によって引き起こされた事です！ ハルトさんは関係ありません！」

「私の話を」

「私達と一緒に、イヅルマを守って下さったじゃないですか！ それで十分です！」

「首がヤバイ」

降参の意志を伝える為、両頬に添えられたミントさんの手に自分の手を重ねて、指先でトントンと叩く。

例え首が回る可動領域内であつたとしても、正面を向いていた首を突然、横へと向けられたら？

それが超武闘派と私の中で認識されているミントさんが行つたならば、結果は言うまでもない。

「寝違えた時ぐらいに、首が痛い」

「ああ！ ごめんなさい、ハルトさん!!」

ミントさんの手が私の両頬から離され、忙しそうに空を切り、慌てふためく姿が見える。

首の後ろ側が引き攣る感覚と僅かに動かそうとするだけでも走る痛み。これはしばらくの間、正面を向く事は出来なさそうだ。

「どうしたものやら」

「私が余計な事をしなければ良かったですね……」

「いあいあ、ミントさんの言葉はとても嬉しかったです。自分の事を自分以外の人が考えてくれるのは、とても心地よい事なんだなって」

「でも、結果としてハルトさんの首を……」

「そこで言葉を区切ると、もの凄く物騒なので止めましょう」

励ましてくれた人が落ち込む姿は見たくない。やられたらやり返すイジツ式。

そんな事を考えながら身体の向きはそのままに、片手を動かし、前髪に隠れているミントさんの綺麗な瞳を露わにする。

お互い向き合う状態で見つめ合う。こんなにも素敵な瞳を隠しているのは、勿体ないなあ。

「ミントさん、ありがとうございます。かなり真面目に救われました」

「本当に？ 本当にですか？」

「本当です。考えすぎて自滅する性格なので、ミントさんが私の調べ物の手伝いをして下さっていて助かりました」

「よかつたあ」

胸に手を当て、安堵の溜息。勿体ないけれど、ミントさんの前髪に触れていた手を離し、再び綺麗な瞳は前髪の後ろ側へ。

「一先ず調べ物はここまでにして、私を病院まで連れて行って下さると非常に助かるのですが」

「その必要には及びません！ 寝違えた首を治す事ぐらいなら、このミントにお任せください！」

「いや、寝違えた訳ではないのですが」

言葉の勢いそのままに、間近まで迫ったミントさんの顔と、後ろで跳ねる三つ編み。

『私を頼って下さい！』と言わんばかりの表情をされてしまえば、お断りが出来ない日本人。

「ミントさんがそう言って下さるのであれば、お願いします」

「はー。」

嬉しさを隠す事無く、返事と笑顔が返される。これだけでもお願いした価値があると言いきれてしまうのは仕方ないと思うのだ。

しかし、治すと言ってもどうやるのだろうか？ 首の体操をすると動く様になるとは聞いた事はあるけど、詳細までは分からない。

ミントさんの事だから古武術を利用した治療方法があるのだろう。あまり長引くとご迷惑をおかけしてしまうので、ある程度で良いから動かせる様になれば非常に助かる。

「では、後ろから失礼しますね」

椅子から立ち上がり、私の後ろ側に位置するミントさん。

伸びてきたミントさんの腕が、私の首を沿う様に回される。何だか嫌な予感がしてきたのは何故だろう。

もう片方の腕は、私の頭を固定する為なのか縦に伸びているのが視界の隅に映る。

いつもの定位置には、ミントさんの手が置かれているのだが、そこから感じられる心地よさは一切無く、逆に脳から警告が発せられる。これはマジでヤバない？

「すみません、なんだか不安になってきたのですが」

「動いちゃダメですよ、危ないですから！」

「首を動かせる様にする為の治療ですよね!」 治すのに危ないって言われる方法があるんですか!」

「大丈夫です! 私を信じてください!」

「信じ切ってますけど! 不安になるのですが!」

「もう! そんなに強張っていたら治療が出来ませんよ!」

ミント先生! 患者の質問に答えてください! そう口から言葉が発せられそうになつた時、変化が起きる。

首に回されていた腕の力が強まり、後ろへ引つ張られる。ついに私も終わりなのかと思えば、その先に待ち受けていたのは……。

これは意図しているのか、はたまた偶然なのだろうか。私の頭に伝わる柔らかな感触は、自分の存在を主張するかの如く、せり上がる。

片目は暗闇に覆われて何も見えなくなり、もう片方の目で現状を確認しようと思えば、それよりも先に脳が幸せに浸かる。

ミントさんの身長は、カナリア自警団の中でも最小と言ってもいい程、小柄な女性である。

にも関わらず、身に付けているコートの上からでも存在を確認出来てしまうお山があるのだ。肌を露出しない服装からして、コートの下にも何かを着込んでいる事は確か

だ。

もしかしたら、衣類が膨らみ、腰回りをベルトによって締め付けられた事によって強調されているだけの可能性も否定は出来ない。

だが、私の耳には穏やかに動くミントさんの心音が伝わり、回された腕によって押し付けられるどころか、挟まれている状態。

ここでロマンを見つげずに、どこで見つけろというのだ。愛と夢に満ち溢れた場所から、ミントさんの表情をなんとか伺おうと視線を上げる。

「ようやく大人しくなりましたね！」

「気持ち的には、指一本、動かせなくなつたのですが」

「きちんと固定させて貰いましたから！ これで安心して治療が出来ます！」

つい見惚れてしまうほど、素敵で満足気な笑顔をこちらに向けてくれるミントさん。流石はカナリア自警団の妹担当である。

立ち位置的にも可愛いの代表みたいなものなのに、私の頭と片目は、優しさと温もりに埋められている。

これが次世代の妹担当か。イジツにいる女性達には、こちらの常識など通用しないのだ。押し通す様な事もしたくはないしね。

「それでは！ ミント、参ります！」

「何を参るのかな？ あの世界かな？」

執行前の掛け声。私の首に回しているミントさんの腕に力が込められるのが感じ取れる。それと共に更なる幸せが訪れているのだけど。

ここまですればなる様にしかならない。だけど、ちよつぱり嬉しい事が判明している。

ミントさんは知らない人に触れられると、咄嗟に古武術を使用してしまうと聞いた事がある。

しかし、私がミントさんの前髪に触れた時は何も発生しなかった。少なくとも私はミントさんから、知っている人の対象に入れられているみたいだ。

それがなんだか不思議と嬉しくて、成すがままにされている理由でもある。

目を閉じて、ミントさんの心音に耳を澄ませながら息を整える。覚悟は決まった、さあ何時でも来い！

こうして、想像していた通り、私の意識はミントさんの腕の中で消え去ったのである。

カナリア自警団 その後のヘレンさんと

見慣れた自警団の詰所で、カナリア自警団に割り当てられた部屋の片隅に、ヘレンさんと私は二人きり。

他の皆さんは、巡回やら呼び出しに応じている為、誰もいない状況下。何故かお互いゼロ距離で会話をしている展開。

真横にはヘレンさんの綺麗なおべべがあり、背中には変幻自在ながらも自己主張の強い太陽が二つ。少しでも意識をした瞬間、全てを持っていかれそう凶器を抱えている。

「手、とまってるよ?」

「あ、はい。すみません。ってそうじゃない!」

「ここ、間違えてるー」

「ごめんなさい、すぐに直します」

「うん、素直でよろしい」

そして、本来ならばこの席に座り、ヘレンさん自身が作成しなければならない報告書を何故か私が書いている不思議な状況下に。

原因は言うまでもなく、私の背中に寄りかかるヘレンさんにあるのだが。

「ヘレンさん！ 今日こそは貯まった報告書を提出してもらいますよ！」

「えーめんどくせー」

「面倒くさいじゃありません！ みんな書いている物ですから！」

「団長、代わりに書いてよー」

「そうしていたら、いつまで経っても自分で書かないでしょう!!」

アコさんの正論が詰所に響く。

事の始まりは、いつまで経っても報告書を提出しないヘレンさんに対しての注意であった。

流石のアコさんも心を鬼にし、ヘレンさんに対して注意と、本日中に報告書の作成、提出をお願いする。命令と言わないのは、多分期待値が半分ぐらいだからかな？

その代わりに本日のヘレンさんはお仕事を免除して貰える事になった。サボる気まんまんで喜んでいたヘレンさんに対し、アコさんは『報告書が出来上がるまでは昼寝禁止』と伝えて監視役に私を詰所に置いていくと発言したのだ。

寝るのが大好きなヘレンさん。当然ながらアコさんに僅かながら抵抗をするが、どう考えてもアコさんの言い分が正しいわけで。

結果、ヘレンさんは昼寝をする事が出来ず、両手をだらしなく下げながら項垂れ、皆

が仕事の為に出掛けていくのを見送る。私も隣でいつてらっしやいと一言。

その後、姿勢を戻して真面目に報告書の作成に励むのかと思いきや、いつもの定位置であるソファに倒れ込むヘレンさん。

「ヘレンさん、言われた傍から寝ないでくださいよ」

「だるー」

「貯め込んだヘレンさんも悪いのですから、頑張つて終わらせましょう」

「めんどくせー」

「それは先程も聞きましたから。ほら、手を出して」

「んー」

名残惜しそうにしながらも、素直に手をこちらへ差し出すヘレンさん。その手を掴み、引つ張り上げる様にして上体を起こす。

背もたれに身体を預けながら天井を見つめているヘレンさんは、こう言つては何だかど、いつも通りである。

「寝ていませんよね?」

「起きてるよー」

「なら席に着いて始めましょう。私に何か手伝える事があれば言つてください」

「あたしの代わりに書いてー」

「それは駄目です」

「えー手伝える事があれば何でもするって言ったじゃん」

「そこまでは言っていないよ！」

「けちー」

散々な言い様のヘレンさん。このままでは再びアコさんに叱られてしまうのではないかと。そうなれば監視役を任せられた私にまで被害が及ぶ可能性がある。

お説教の際にアコさんが『私、怒っています！』という態度であれば、素直に反省が出来るのだが、万が一の事もある。

何せ悪意無しで毒を吐かれる方なので『大丈夫です、最初から期待はしていませんでしたから』なんて言われる可能性が捨てきれない。

大人しくごめんなさいと言えば終わる一件ではあるが、それで終わらせてしまうのも何だか悔しい気持ちになるのは、おかしな話ではない。

こうなれば何としてでもヘレンさんには、報告書を書き終えてもらおう。そうすれば誰も損をする事はないのだ。ヘレンさんを除く。

「ヘレンさん、何でもは無理ですけど、ある程度なら手伝いますから」

「ある程度ってどのくらい？」

「……隣で話し相手になるとか？」

「それってタダの監視じゃないの？」

「本日、私は監視役だとアコさんから言われたのを聞いていたでしょう！」

「あたしは思い出す事に集中するからさ、ハルトが代わりに書いてよ」

「本当に、真面目に思い出してくれますか？」

「まじまじ。役割分担、しよ？」

「なんでそんな意味深な甘えかたをするのですか……」

「ハルトはこういうのが好きそうだから？」

「大好きです。さあやりましょうか！」

「うえーい」

ようやくやる気を起こしてくれたヘレンさんを連れて席へと向かい、隣の席から筆記用具と椅子をお借りして、空欄の報告書を机に置いて代筆の始まり。しかし、ヘレンさんの席って何も置いてないのね。

「何でここまで無機質というのか、何も物が置かれていないのですか？」

「だって寝る時じやまだし」

「ここは寝る場所じゃないっす。準備が出来ましたので早速始めましょう」

「なにか書くような出来事ってあったかなあ？」

「それを忘れないうちに書き上げるのが報告書でしょう！」

椅子に座り、両腕を組みながら唸りを上げるヘレンさん。ツツコミを入れたいところは多々あるが、序盤から体力を消耗していたら、今日を乗り越える事が出来ない。

ヘレンさんの口から言葉が出るまでは、手持無沙汰の私。

首を傾げ、両腕を組みながら何かを思い出そうとするその姿を見ながら、可愛いと凶器の共存について考え始める。腕が組まれてしまえば、挟まれて持ち上げられる以外ないじゃない？

「思い出したー」

「何がありましたか？」

「んーとね、道に迷ってたおじいちゃんを案内したら、そのままお茶に誘われた」

「それは本当に迷っていたのだろうか……。ヘレンさんをお茶に誘いたかった口実の样にも思いますが、書いておきます」

「それからねー、他のおじいちゃんから良い身体してるって言われたー」

「もはやタダのセクハラ案件じゃないですか！　というかイツルマのジジイ共はみんな元気ですよね！　注意書きしておきますー！」

「まー元気がないよりはいいんじゃない？」

心が広いと言うべきか、器が大きいと言うべきか。いつもの調子を崩さずにそう言い放つヘレンさん。

その後も、様々な事件がひつそりとイヅルマで発生していた事を聞かされ、ヘレンさんらしい対応の仕方を報告書として書き示していく。

こうしてまとめた内容を確認していくと、自警団のお仕事は幅広いのだなと思わされる。

警備、巡回の他にも、探し物の搜索や慰問といった活動まで様々だ。後者に関しては、カナリア自警団だからこそとも思える。

ただ、自警団として多種多様な活動を行えば、どうしても報告書の類は多くなってしまうわけ。

そこにヘレンさんのだらしない……大らかな性格が合わさると、提出しなければならぬ報告書が貯まるという悪循環が発生するのである。

それら内容を確認していたら、ヘレンさんから指摘を受けてしまい、絶賛修正中なのだ。

「これでどうでしょうか？」

「じょうず、じょうず。ハルトって飲み込みが早いよね」

「そうでしょうか？ 自分では失敗ばかりしている記憶しかないのですが」

「慣れない事をやらされても上手くこなせてるじゃん」

「単純に怒られるのが嫌なだけですよ」

「あたしもいやだなー」

「ヘレンさんはもう少し覇気を」

「それは前にも言われたー」

よく覚えていらつしやる。気にしていたりするのかな？ でもヘレンさんだからどうだろう？

そんな事を考えてしまうぐらい、のほほんとしたマイペースな女性という印象を崩さないヘレンさん。その代わりに私の中ではエルさんが崩壊したのだけだ。

「ハルトー、飽きたー」

「飽きたじゃありません。日付的にまだ報告すべき事はあるでしょう？」

「ハルトー、あたしの家にいかない？」

「行きません。これを終わらせないとアコさんに怒られてしまいますし、それにもうその手にはのりませんよ！」

「なんでー？好きな事させてあげるよー？」

「そこで『配達、好きなんだよね？』とか言って、ジョージさんのお手伝いをさせようとしていますよね？騙されないのだ！」

「バレたか」

「人の純情を弄ぶのはやめて！ それよりこちらからもヘレンさんにお願ひがあるのですが」

「えー、あたしのお願ひは断られたばかりなのに？」

「お願ひというおサボリでしょうが！ むしろ、本来ならヘレンさんが一人ですべき事をお手伝いしているのですから、私のお願ひを優先してくれても良いと思うのですが！」

「それなら今もしてあげてるよ？ もっと強めの方がいい？」

「私に寄りかかってとはお願ひしてないし！ むしろ離れてというのが私のお願ひなのですが!!」

報告書をヘレンさんに確認してもらい、書き間違いのある箇所を指摘されたあと、修正をする為に作業を行っていると、後ろから物理的な圧力を感じた。

横から伸びて来るのは人の腕。指先は指示を出すかのように報告書に当てられ、お互いの頬と頬が触れる程の距離に顔がある。

全力で私に寄りかかっているヘレンさん。視線を動かして表情を伺うが、普段通りのぼけーとした表情を崩さない。

何か変化を起こしてくれてもいいじゃないの。そう思いつつも背中当たるものは好き勝手。このままでは私はまったく集中できない。

「ヘレンさん、指摘して下さるのは助かりますが、離れて貰えませんか？」

「別にいいじゃん、減るもんじゃないんだし」

「こちらは神経をすり減らしながら作業しているのですが！」

「それにさー、ハルトって暖かいからさ、抱きしめると心地良いんだよね」

「それは……って抱き枕的な意味合いでしょう？」

「うん」

「うん。じゃない！ もっとこうさ！ 私を勘違いさせてしまう様な言い方にして！」

「ちがうよ」

「遅いよ!!」

ヘレンさんの調子に合わせているといつまで経っても終わりそうにない。

こうなれば無理矢理でいいから寄りかかるヘレンさんを離さなければならぬ。怒られるのは誰だつて嫌なのだ。

早速、抵抗を試みる為に行動へと移す事にしよう。

私の背中に寄りかかっているヘレンさんを引き離す為に、まずは物理的圧力で猫背になつていた背筋を伸ばす事にした。

机に手を置いた状態で腕を伸ばす様にしていくと、丸まっていた姿勢が正しい位置へと伸びる事により視線が正面へと向いていくのが分かる。

このままいければと思っていたのだが、意外な事にヘレンさんから抵抗する力を感じられる。

机に置いたままの私の手を掴む様に、自分の指を絡ませてくる。何故こういう時ばかり抵抗を試みようとするのだろうか。

そのせいだろう、先程までは問題無く順調に伸ばせていた背筋が、ここにきて急に力クカクと油の切れた機械の様な動きになる。

となれば、いうまでもなく私の背中で発生するのはお祭りと宴会が一緒くたに混ぜられた混沌、しまいには横にあるヘレンさんの口からは、あまいろ吐息。

なんとなく分かっていたけれど、これはどう考えても自滅行為だ。少なくともヘレンさんを相手にする場合に行う方法ではない。

だが、ここまで来てしまえば進める他ない。撤退などしてみた日には、そのまま机にうつ伏せ状態にされてしまうのは目に見えている。

抵抗するヘレンさんを受け流す様に、緩急をつけて背筋を伸ばす。

その僅かな瞬間に出来た隙を狙い、勢い任せにヘレンさんを引き離す事は出来た。出来たのだが……。

いつの間にか、間違いを指摘する為に伸びていた腕が交差されており、その腕が離されるものかといわんばかりに力が込められ、私の首を絞めつけてくる。

ここは我慢比べの時か。そういう考えも頭に過つただけけれど、今や背中だけでなく頬でもおしくらまんじゅうの状態。

視線を移せば表情は先程と変わらず。けれど決して離れるものかという意思表示による行動。

敵う相手では無いと悟ってしまった私は、苦しさから逃れる為にも、ヘレンさんの腕を何度か軽く叩いて降参を伝える。

そうする事によつてようやく首を絞めつけていた腕の力が弱まるのを感じ取れ、再び私は猫背に戻る羽目に。

「ヘレンさん、私の負けです」

「どうして離そうとしたの？」

「こんな私にも色々と諸事情があるのです。決して嫌で離れたかった訳ではないのです」

「じゃあ、あたしのこと、すき？」

「好き。つて今はそういう好き嫌いの話ではなく！」

「じゃあ、あたしのこと、きらい？」

「大好き。そんな悲しい言葉で聞かないで」

「ごめん」

先程までの意地の張り合いはなんだったのだろうか。そう思える程、自然と寄りかかってくるヘレンさんを受けとめる。

お互いに言葉を発する事も無く、ただ身を寄せ合いながら、時折、じゃれ合う様にヘレンさんの頬が私の頬へと押され、おしくらまんじゅうが再開される。

普段はともしつかり……とはしていないけれど、人目を引く容姿の持ち主である事は確かだ。

そんなヘレンさんが甘える様に寄り添ってくれる姿がとても可愛らしく、愛おしいと思うのは仕方ない事。

こんな事をする性分ではないけれど、ヘレンさんの髪に触れる。ちよつとボサボサとした感じを受けるが、そういう髪質なのだろう。

「ふわふわですね、ヘレンさんの髪って」

「これ、タダの寝ぐせだよ」

「寝癖なんかいい！ 髪質かと思いましたがよ！」

「ハルトはきちんと整えた方がすきき？」

「うーん、ヘレンさんの印象がこの姿なのでいまいちピンとませんが……」

そう伝えながら寝癖の少ない方である、頭の頂点の辺りにある髪を触れさせてもらう。とてもサラサラとしていて指からすり抜けていく。

「もし、ヘレンさんが寝癖を整えて現れたら、誰か分からないかもしれないです」

「じゃあ、やーめた」

「一度だけでも頑張ってみませんか？」

「分からないって言われたし」

「んぐつ！」

「こんな近くにいるのに」

「それは今の話であって……」

「あたしは分かるのになあ」

「どうやって？」

「こうやって」

触れ合っていた頬が離れ、気が付けば私の首筋近くに顔を近づけるヘレンさん。

鼻を動かして匂いを確認する様な動作をしたかと思えば、そのまま押し付けられるのは、ヘレンさんの唇。皮膚が引っ張られる感覚を覚え、吸いつかれてるのが分かる。

「これで目印ができたね」

そう言葉にして微笑むヘレンさんの姿を見て、やはり悪魔で間違いないのかなと思うのであった。

カナリア自警団 その後のシノさんと

シノさんはとても綺麗な人だ。

自警団の制服を着こなし、肩下まで伸びている艶やかな髪、凛とした細くて長い眉毛、メイクによって目つきがやや鋭く見えるところではあるが、左目の下にある泣きホクロが鋭さを和らげてくれている。

唇に薄いピンクのリップ、耳には青い花をイメージしたピアスを付けており、見た目に気を遣う方なの分かる。

私に戦闘機のイロハを叩き込んでくれた時、後部座席にいるシノさんからは厳しい口調が飛ぶ。それは私の身を案じての事だというのは明白である。

他者に厳しく当たる事も多いが、自分には更に厳しい。人一倍、努力家なのは誰の目にも明らかだ。

だからこそ、みんなシノさんを頼りにするのだろう。

私にとつても胸を張って自慢できる教官殿である。この言葉に意図は無い。本当に。「ハルト、何をぼさっと立ち尽くしているのよ？」

だが、いま私の目の前にいる教官殿は、普段見慣れた服装から雰囲気まで全てが違う。

口調は変わらないのだが。

中身が入れ替わっている訳ではないのだが、いつもはクールビューティーと言われて
いる教官殿の姿とは真逆の服装だ。その姿を目にしたせいで言葉に詰まる。

全体を白とピンクに覆われ、そこら中にフリルが付けられた服装は、可愛いを全面的
に押し出している。

頭にはヘッドドレスともいえる形をした帽子を被っていることもあり、お人形さんか
と思ってしまうぐらいに。

やはりシノさんは美人さんだ。似合うかどうかは横に置くとして。

「すみません、シノさんがとても可愛い姿をしていたもので」

「あら！ ハルトはこの服の素晴らしさが分かるのね！」

「よくお似合いです。見惚れてしまいました」

「もう！ そんなに褒めても何も出ないわよ！ でも、ありがと！」

「ごめんなさい。嘘を付きました。先程から好奇心と懐疑的な視線を周囲から感じら
れ、一刻も早く逃げ出そうとか考えていました。」

そんな思いとは裏腹に、私の言葉を素直に受け取り、とても嬉しそうに微笑んでいる
シノさんを見つめていると胸が痛い。

「出会えて丁度よかったわ。時間はあるかしら？」

「ごめんなさい、今しがた用事が出来ました」

「分かったわ、それじゃ行きましようか」

シノさんは何を言っているのだろうか？ 伺う様に見つめっていると、ウイंकで返される。予想以上にご機嫌が良い。

この空気を感じ取ると、イジツ人の気質ともいえるゴリ押しで物事を進めている訳ではなさそうだ。

どちらかといえば『分かっているじゃない』の雰囲気。つまり私の遠回しなお断りを、シノさんは私に付き合うという用事が出来たと受け取ったわけだ。

なんとというポジティブ思考。いつの間にか私とシノさんの間には、言葉は不要のレベルで繋がりが出来上がっていたのか。

いやまあ浮かれているだけだと思えますけどね、ウイंकを下さるぐらいですから。早くこの場から逃げ出しておこうと考えていた私が悪いのだ。そんな私にご褒美までくれたのだから、本日は罪滅ぼしも含めてシノさんにお付き合いをしよう。

あと、イジツに居る間は、自分の考えは素直に言葉にしようと改めて決意する。空気なんて読むものじゃなくて吸うものだ。

どこへ向かうかも分からぬまま、シノさんの横に並びながらイヅルマの町を歩く。す

れ違う人達からは、様々な視線を頂く。

そんな視線を気にも止めずに歩くシノさんはお強い。カナリア自警団として市民の皆様から顔が知られていると考えているのだろうか？

そんなシノさんに負けない様に、私は普通を装う。あの一件以来、ちよいちよいと市民の皆様から話しかけられたり、餌付けをされたりした経験がここで生きる。と思う。

この際、何が勝ち負けで普通なのか分からないが、これでも私は日本人。シノさんが着ている服装が好きな人達がいる事も理解しているし、男性がセーラー服を身に付けて道端を歩いてもスルーされる国に生まれ育ったのだ。

そう、大事なのは理解。理解をしようとする努力。たとえシノさんがゴスロリ好きだとしてもシノさんに変わりはないのだ。

「ハルト、ユーハングにもこういう服装はあるのかしら？」

ひっそりと決意を固めていた私に話しかけてくるシノさん。自身の服を軽く摘み、そう問いかけてくる。

「専門で取り扱っているお店が複数存在するぐらいには、知名度はあります」

「専門店が複数もあるの!? やはりユーハングね、イジツより先に進んでいるわ……」

「まさか服装でユーハング恐るべし! みたいな使われ方をされるとは思いませんでし

たが」

「何を言っているのよ！ 普段身に付ける物なんだから当たり前じゃない！ 私からすれば戦闘機が！ 発動機が！ って異性同性問わず夢中になっている方が不思議よ」

「皆さん大好きですからね、ユーハングの機械」

「だからこそ、ハルトがイジツにやってきて、私達と出会い、私の服装に理解を示してくれている今がどれだけ貴重な機会か分かっているのかしら？」

「最後の部分が思いつきり私心だと思うのですが、教官殿」

「それだけ理解してくれる人が少ないのよ……。ミントは素敵だと言ってくれたんだけどね」

「可愛いが好きそんな感じがしますよね、ミントさん」

「だから今度、あの子の為に一着プレゼントをして」

「止めてあげて！」

そんなやりとりを続けながらイヅルマを散歩する私達。この様子だと特にコレと違って用事があつて出歩いていた訳ではなさそうだ。

歩きながらの会話の最中、ふと足を止めたシノさん。その視線の先には屋台があり、女性客で賑わっている。

支払いを終えたであろう人達が手にしているのは、飲み物のようだ。どの世界でも流行というものは発生するみたい。

その姿を見ていると、喉の渴きを感じるのが分かる。ずっと喋っていたから丁度いいかも。

「シノさん、よかつたらその屋台まで付き合ってくださいませんか？　なにやら美味しそうな飲み物を販売しているみたいなのですが」

「結構並んでいるわよ？　それに男性客はいないみたいだけどう？」

「だからこそですよ。一緒に並んで下されば……」

そこで言葉が止まる。あれ、これってデートじゃない？　お喋りしながら街中を散策して、時折ウィンドウショッピングをしながらお店を冷かしたり。

黙ったままの私から何かを感じ取ったのか、少し赤みを帯び始めたシノさん。その表情をしたまま沈黙が続く。

このままでは気まずい空気になってしまう。ここは一先ずシノさんには日陰にあるベンチで座っていてもらおう。

「し、シノさん。飲み物を買ってきますので、そこにあるベンチで待っていて下さいますか？」

「わ、分かったわ」

お互いにしどろもどろになりそうな会話を終え、私は列へと並び、シノさんは木陰のベンチへ。

こうして距離が離れた状態でシノさんの姿を見つめると、次第にアリなのではないかと思いはじめ。

本日は唐突な出会い方をしたせいで、日頃のシノさんとのギャップを脳が素直に受け止められなかっただけであつたか。

そんな事を考えていれば、シノさんと視線が合う。自然と笑顔になり手を振ってみるが、視線を外されてしまった。

それもそうだ、急にお互いを意識してしまう様な発言をして、私だけ既に自己完結済みという。シノさんからすれば『急に何よ！』と思われても仕方ない。

けど、視線は外したまま膝の上に置かれていた手から、こちらに向けて小さく手を振り返してくれているシノさんの姿を見てしまったら、それだけで心が喜びで満ち溢れてしまう。

「あ、ありがと、ハルト」

両手に持っていた飲み物の片方をシノさんに手渡す。

お隣にお邪魔させて頂き、さっそく飲み物に口を付ける。すつきりとした爽やかな味

わいは、乾いた喉に潤いをもたらせてくれる。

「あつ、美味しい」

「お口に合うようでよかったです」

「ハルトが選んでくれたのかしら？」

「はい。と自信を持って言いたいのですが、実際は店員さんにおすすめを伺いながら選びました」

「もう、そこまで素直に言わなくてもいいじゃないかしら？」

「性分みたいなものでして」

「確かに、ハルトならそうかもしれないわね」

誤魔化さず素直に答えたのが変だったのか、シノさんが笑う。なんだか照れ臭いけれど、ギクシヤクしたままの空気で終わらなくてよかった。

「そっちはどんな味がするの？」

「レモン……でしょうか？ 酸味が薄くて飲みやすいですよ。よければどうぞ」

ストローが付いている容器をシノさんに向ける。照れよりも呆れ顔に近い表情をしている。

考えている事は分かるけど、一つ一つを意識し始めたら、再びぎこちない態度に戻ってしまいそうだから。

ならこういう事をするなって？ それは無理というものでしょう。私の中では既にデートをしていると認識しているのだから。

髪をかき上げてストローに口を付けるシノさん。吸い上げられていく飲み物と、鳴らされる喉の音。その仕草からは色気を感じられる。

「どうでしょうか？」

「……ハルトも経験してみれば分かるわよ」

お返しといわんばかりに私へストローが向けられる。私にもやってみると。

先に仕掛けたのはこちら側、ケツコウデスとは言えるわけもない。一口頂きたいという欲求も沸いているのだから。

シノさんが使用していたストローに口を付けて飲み物を一口頂く。店員さんから味を聞いていたはずなのだが、不思議な事にその味は味覚に伝わらない。

「まったく味がしない。むしろそれどころじゃないのですが」

「無意識に勧めてくれたのか、意図的に勧めたのかによって、この後の私の態度が変わるのだけど？」

「意図的です」

伸びてきた手は、的確に私の頬を掴み引つ張つていく。

自分でも驚くぐらい伸びていく頬に、何故か笑いが止まらない。

そんな私を見て、怒るのが馬鹿らしく感じたのだろうか、再び呆れた様な顔をするシノさん。溜息一つの後に、微笑みをくれた。

頬を引つ張られて笑う人、頬を引つ張つて笑みを浮かべる人。傍からどう見られているかなんて、今更言うまでもない。

気が付けば夕焼けが空を赤く染める時。その後、シノさんがオススメする可愛いが沢山ある場所に連れて行ってもらった。

女性から見る可愛いには、様々なジャンルがあるものだと感じてしまうぐらいに。ゆるキヤラ的な物は、世界を超えるのがよく分かる。

「あら、もうこんな時間ね」

「今日は一日が一瞬で過ぎ去ってしまった感覚です」

「私もよ。休日をこんなに楽しく過ごせたのは久しぶりだわ」

「それはよかったです。用事が出来た甲斐がありました」

「その用事って、本当は他にあつたんでしょ？」

「まあ、有ったといえは有りましたが、私個人の用件だったので問題はありません。気にしないで下さい」

「……分かったわ。ありがとね、ハルト」

「こちらこそ、お付き合いいただきありがとうございます。シノさん」

今日はシノさんが笑ってくれる姿を沢山見られて、知らない一面も知れてとても唯意義な一日だ。

こんな楽しい日がいつまでも。そう考えてしまうところではあるが、私を待っていてくれる人達がいる事を忘れてはいけない。

このイジツにだって、きっと私の迎えを待ちくたびれている人がいるはずだ。

「ねえ、ハルト。今度、家族を探す為に行かなくてはならない場所があるって言ってたわよね？」

「オフコウ山ですね。早めに準備を整えて向かおうかと思っています」

「そこへ私も連れて行ってもらえないかしら？」

「それは構いませんが、何もない可能性の方が高いですし、あったとしてもお墓参りになるだけかと思えますよ？」

「構わないわ、こちらが無理を言っているのだから」

「ちなみに理由を伺っても？」

「私が孤児院育ちなのは知っているわよね？」

「ええ、努力を続けてシラサギ自警団の団長にまでなられた方だと」

「ありがと。素直に受け取っておくわ」

照れながら指に髪を絡ませ、そう答えるシノさん。

「そのせいなのかしら、家族というものがよく分からないのよ」

シノさんの言葉に、私はなんて返せばいいのだろうか？　なんだかんだ男ばかりとはいえ家族がいる身の私が何かを伝えても。

「あつ、そこまで深刻に考えなくても大丈夫よ。前に自警団の皆に実家へ招待された事もあつて、何となくだけど雰囲気は感じ取れたから」

「そうでしたか。最初の問いかけだけでしたら、返答に詰まるどころでした」

「ごめんなさいね、急に変な事を言つて」

「いえ、それでオフコウ山へ行きたいという訳なのです」

「やっぱり動悸が不純よね。忘れて頂戴」

「嫌です。もうシノさんを連れて行く事は決定事項なので」

「……ハルトつて本当に変わっているわね」

「こちらにもシノさんを連れていく理由がきちんとあるのですよ」

「理由？　何かしら？」

「私とレオナさんだけで向かう予定が、シノさんまで来て下さる。もし、オフコウ山にお墓があつた場合には、曾祖叔父から滅茶苦茶褒められる予感がします！」

「褒められるって、その場合は亡くなられているわよね？　どういう事かしら？」

「自分が死んだ後に、別嬪さんが二人も墓参りに来てくれると考えれば、男冥利に尽きるというものですよ」

半分茶化しながら、もう半分は本心でそうシノさんに伝える。

深い溜息をつくシノさん。完全に呆れている。でも男の子ってそんなものだと思うのだ。例えば口癖がヘレンさんの様にめんどくせーという性格であっても。

それにもしも本当にオフコウ山にお墓があつた場合、私とレオナさんの二人だけで訪れるというのは何だか寂しい気がする。

そこへシノさんが自ら同伴したいと言つて下さつたのだ。お墓参りをするなら賑やかな方が喜んでくれるだろう。全てが前提ありきの話になるのだけどね。

「なので改めてこちらからお願ひします。オフコウ山へ行く際にお付き合ひ頂けませんでしょうか？」

「分かつたわ。私から言い出した事だしね。こちらからもお願ひするわ」

「では、約束という事で小指をお貸し下さい」

「随分と懐かしい約束の仕方をするのね」

「私とシノさんの間で約束をするのなら、これ以上ない方法だと思ひまして」

私が差し出した小指に、シノさんの細く綺麗な指先が伸びてきて小指が絡まり合う。

イジツでも通じる歌に乗せて指が上下に動かされるが、離される前の段階で不意に動

きを止めてしまふ。

「急に止めてどうしたのよ？」

「嘘ついたらどうしましょうか？」

「別に歌通りでいいじゃない？　嘘なんてつかないでしょう？」

「シノさんからの想いが重い」

「なんでよ！　ハルトの事を信頼しているって意味よ！　そんなに自信が無いのなら私が勝手に決めるわよ!！」

「大丈夫だと思いますが、お願いします」

「貴方が変わり者だと十分理解しているつもりだったけど、ここまでとは思わなかったわよ」

「さーせん」

指を絡ませたまま嘘をついた時の罰を考え始めるシノさん。悩んでいる表情、身に付けている服装、周囲を赤く染める夕焼け、何一つとして一致しない不思議な状況に再び脳が混乱し始める。

「そうね、もしハルトが私に嘘をついた場合、どうして私を置いて行ったのかについて問い質さなきゃいけないわ。その為だったらイジツ中を探し回り、例えユー・ハンクに逃げたとしても追いかけてあげるわ！」

「こわっ!」

「ふふっ、怖いでしょう? だから私を置いて行ったらダメよ?」

「了解しました、教官殿」

「よろしい!」

私の返答に満足気に頷き、小指が離される。そのままシノさんは両手を組み、正面に向けて腕を伸ばす。

そして硬直した身体をほぐす様に真上へと腕が伸ばされる。時折、唇から漏れる吐息が艶めかしい。

今日一日、一緒にいた事で思う事がある。やはりシノさんは綺麗な人だ。外見だけでなく、内面も美しい人だと。

このままお別れするのが忍びないと思える程に。もう少しだけ一緒にいたい。その想いは私を動かす理由となる。

「その手は何かしら?」

「宿舎まで送っていきます。よければお手を」

「あら、ありがと。それじゃお言葉に甘えさせてもらおう」

差し出した手にシノさんの手が乗せられる。その手を離さぬよう、傷つけないように気を付けながら握り締める。

ほんの僅かでも長く居たいという想いを乗せながら、赤く染まるイヅルマの町を、手を繋ぎながら二人で一緒に歩き始めた。

カナリア自警団 カナリア合唱団

日頃からお世話になっている宿屋。その部屋の一室で、私とレオナさんによる会議が開かれている。

題材は、言うまでもなく私の探し人に関して。

このイヅルマでカナリア自警団や町の人達のご協力もあり、直接お話を聞かせて頂いたり、資料を拝見させて頂ける事が出来た。

それらの中から私の探し人に関連していそうな事柄を抜き出し、地道に資料のまとめ作業をしていたのだが、ここにきてようやく完成の目途が立ち始めた。

山積みになっていた数々の資料を整理し、一冊のノートに綺麗に収まった時、なにやら運命じみた物を感じてしまった。日頃から何かを信仰している存在なんていないに。

「ハルトを手伝ってくれた人達の想いさ」

「だとしたら感謝の言葉では足りない程なのですが」

「彼等からすれば同じ気持ちだと思うぞ？ 元は議会の疑いから始まり、半場強制的にイヅルマへ連れて来られた人間が、自分たちの町を守る為に命を賭けてまで守ってくれ

たのだから」

「そこまでおだてられても何もでませんって。それにイヅルマ自警団の皆さんや市民の皆さんのご協力あつてこそだと思えますが」

「お互いがお互いに感謝を忘れず、それが巡り合っているのさ。ハルトもその気持ちは忘れずにな」

レオナさんから伸びる手は、私の何時もの定位置に置かれる。イヅルマへ来てから何度目かは覚えていないが、レオナさんに頭を撫でられるのはとても心地よい。

当初は羞恥心が勝る事も多かったが、今ではこうしてもらえると不思議と心が落ち着くのだ。これが大人の女性の包容力。どちらの世界でもあつてもとても貴重な存在と言えよう。

「長いようで短い間だったが、こうしてハルトとイヅルマで生活するのもあと僅かなのだな」

「資料が出来上がり次第、一度ラハマに帰還してマダムにご報告。アレンやケイトには作成した資料を確かめてもらい、情報の精度について話し合いをしたりしなければいけませんね」

「お互いの共有すべき内容と、自身も確認の意味合いも含めて今後の予定を口に出していく。」

レオナさんからの発言は、私の気が付かない事を教えてくださる事が多く、いつもおんぶに抱っここの様な関係だ。

「一通りの確認は済んだかな？」

「はい、お手伝いいただきありがとうございます。レオナさん」

「気にしないでくれ。前にも言ったかもしれないが、ここに居るのは仕事である事に間違いはないのだが、ハルトとこうしてイヅルマで過ごす日々は楽しかったぞ」

「そんなに嬉しい事を言われたら、ラハマに戻ってもレオナお姉ちゃんつて口に出してしまいそうです」

「レオナお姉ちゃん？ ハルトは私の事をそう思っていてくれたのか？」

あ、やべ。心の内ではよくお姉ちゃんっぽいとか考えていた事は確かだけど、実際にレオナさんご本人にお姉ちゃんなんて言ったのは初めてだったか!?

お姉ちゃんと呼ばれたご本人は、机の反対側で満面の笑みを浮かべている。

「そうか。私もハルトは目の離せない人間だと思っていてな、私がきちんと手を握ってあげていないと勝手に何処かへ行ってしまうんじゃないかと心配していたんだ」

「否定したくても覚えがあり過ぎて否定が出来ないのですが」

「そうだろう？ 今回の件も改めて事情を聴いた時は、成り行きだったとはいえ肝を冷やしたぞ？ 余りお姉ちゃんを心配させないでくれ」

「ごめんなさい。それでもカナリア自警団や町の人達のお手伝いが出るのであればと思ひ、こちらからお願ひしたのです」

「それは自分の事で責任感を感じた事によるものか？」

「はい。ですが自分でも驚くほど、イツルマの町が好きになつていた事が大きいのですが」

「……そうか。なら私から何か言うつもりはない」

「もし自己嫌悪から来る行動でしたら、どうなつていましたか？」

「一日かけてその己惚れを叩き直してやるところだったよ」

笑みを浮かべるレオナさんの背後から、本気だと思わされる程の圧がこちらに向けられる。

あの時、恥ずかしくてもイツルマ全力周回ダツシュをしてアコさんに諭され、みんなが受け入れてくれたおかげで今の自分がある事を改めて思い知る。

そのみんなとはあと僅かでお別れなのだ。私は本来の目的である探し人の旅に再び戻らなければならないのだから。

一呼吸置いてレオナさんを真っ直ぐに見つめる。何かを察してくれたレオナさんは何を言う訳でもなく私の言葉を待つてくれている。

「レオナさんとイツルマで一緒に居られて凄く安心出来ました。私の知らないレオナさ

んを知る事が出来たりと嬉しく楽しかったです。本当にありがとうございます」

頭を真つ直ぐに下ろして感謝の言葉を伝える。きつと顔を上げれば慌てふためくレオナさんの姿が目映るのだろう。そう思っていた。

だが、実際は落ち着いた様子で私の言葉を受け取るレオナさんがそこにいた。

「顔を上げてくれ、ハルト。先程伝えたが、私もハルトと一緒にいられて楽しかったのは確かなんだ。こちらでも続けて様々な出来事があり、事が終えた後も取材やら慣れない仕事舞い込んできたりとかな」

「自由博愛連合を倒した事による反響ってそれほど凄かったですか?」

「ああ。だが、そのトップが穴の先で未だ健在。それどころか人を送り込んで来たのだから驚きさ」

苦笑いをしながら語り掛けるレオナさん。でもどこことなく嬉しきを感じる。

「でも安心したよ。イサオが送り込んできたユーハング人、ハルトは私が懸念していた様な人物で無かった。それどころか逆にその知識によって助けられた事も」

「私の記憶にある限りだと、アレンの治療が途中で止まっている事ぐらいしか浮かびません」

「マダムもユーリア議員も言っていた事さ。人一人が現れただけで大騒ぎ。だけどそれは悪い事ばかりでなく、むしろ良い事の方が多かったとさえ私は思う」

「……今の私にはまだ判断が難しいのです」

本来の目的もまだ未達成。けれど着実に近づいてきているというのは分かる。こうして手元に資料として形に表されているから。

だけど、私が現れた事による良し悪しなんて、きつと一生賭けても自分自身で答えは出せないだろうな。

私がいて良かったね！　なんて言える程の凶太い神経は持ち合わせていないし、何よりそういう事はヒロインにお任せしたい。けれど……。

「ハルトと出会えて良かった。それだけ覚えていてくれれば良いよ」

こうして不意にヒーローが現れるのがイジツ。その魅力に太刀打ちできる訳もなく。再び私の頭部には手が置かれ、なすがままにされるのであった。

レオナさんが有利の話し合いの最中、突如として聞こえる足音は大きな音を立てながら急ぎ足で階段を上る。そして私達がいる部屋の前で足音を止め、代わりに扉に向けてノックを繰り返す。

何事だと二人して警戒をしているところへ聞き慣れた女性の声が、叫ぶように私の名前を呼ぶ。

「ハルトさん！　助けてください!!」

その声の主は、カナリア自警団の団長であるアコさんであった。

「たまた大変です！ 私達、今度は歌を歌わされるみたいなんです！」

扉を開けた先には興奮状態のアコさん。そのまま立たせておくのも失礼かと思い、部屋へと招き入れベッドに座らせ水を渡す。

喉を立てながら水を飲み干し、何があつたのかを聞いてみればこの返答をもらう。

「歌、ですか？」

「はい！ 私達カナリア自警団は広報も担当をしている為、イベントや慰労の際に自己紹介をしてお話をさせて頂く事が多いのですが、もう一つ新しい何かが欲しいと市長が……」

「あの市長の闇を市民の皆さんに暴露したらどうです？ そうすれば辞任に追い込めるでしょう？」

「物騒な事を言わないで下さいよ！ それにもう遅いんです！」

「遅いとは一体？」

「既に歌が出来上がっていたんです……」

盛大に頂垂れるアコさん。その体勢のままこちらに折り畳められた跡が残る紙を渡ししてくる。

その紙を机で広げて内容を確認すると、歌詞が書かれてあり、誰がどのパートを歌うかまで決められている。

「音楽の事はよく分からないが、これはまた立派な歌だな」

「市長の作詞作曲でなかった事が救いですね」

「流れの吟遊詩人の方と酒場で意気投合して作って頂いたそうです」

「酔っ払いが二人になると厄介な存在になるのは、どこの世界も同じですか」

アコさんと同時に溜息をしてしまい、レオナさんが慰めるように言葉をかけてくれる。

「そうだ、こういう時の為にエルさんという秘密兵器がいらつしやるのでは？」

「市長に対しては、何の相談も無しに行つたという理由で『めっ』をしてくれたのですが……」

「ただのご褒美にしか思えません」

「ですよねえ……」

「ぎ、吟遊詩人の方はいらつしやらなかったのか？」

「既に町を離れた後だったようで、伝言として『歌って貰えるのを楽しみにしている』と言葉を残されてまして……」

「そうなるか歌わないというのは、その人に対して失礼になってしまうな」

「そうなんですよ！ レオナさん！ 分かって頂けますか！」

今度はレオナさんに対して前のめりで同意を得ようとするアコさん。勢いに押されているレオナさんから送られて来る視線が私に助けを呼んでいる。

「しかし何故、私に助けを？ ここまできたら歌う以外に他ないと思うのですが」

「急遽イベントが開催されたあの日、私が助けを呼んだら駆けつけてくれるって約束してくれたじゃないですか！」

「呼ばれる前に駆けつけられた訳ですが」

「物事の前後を気にしたら負けです。おねがい、たすけて」

「助けます！ 助けますから！ 覇気のない声を出すのは止めて！ 綺麗な瞳に光を取り戻して！」

私の返事によって意識を取り戻したのか分からないが、灰色に染まりかけていた瞳は徐々に光を取り戻し、見慣れたアコさんの姿を取り戻す。

「あ、ありがとうございます！ ハルトさん！ あの時の言葉は私を誤魔化す為の嘘じゃなかったんですね！」

「その悪意の無い地味に傷つく言葉やめて！ 今度は私の心がおれちゃう！」

「二人とも、一体どんな約束をしたというのだ……」

いたって普通の約束だったと記憶にあるのですが、アコさんの慌てる姿につられて自

分でもよく分からなくなってきました。

「私達が練習しているところを見守ってくれるだけでいいんです。自分達だけでは他の方からどう聞こえているのか判断が難しいので」

落ち着きを取り戻したアコさんから再び詳細を聞き、私達の役割を教えて貰う。

ピアノを演奏出来るエルさんの伴奏の元、本番に向けて練習を重ねる間に気になった部分があればお伝えすればいいという話。そこへレオナさんも付き合ってくれる事になった。

「歌い方を教えて欲しいとかの話でなくて安心しました。自慢じゃないですが私は音痴なので」

「私も歌は上手だとは思いませんが、これも自警団のお仕事だとたつた今割り切りました」

「自警団というのも大変な仕事だというのが、イツルマへ来てからよく思う様になったよ」

「多分、イツルマのカナリア自警団だけが特殊なんだと思いますよ、レオナさん。とりあえず善は急げとも言いますし、他の皆さんと合流しましょうか」

再び魂が抜けかけてきたアコさんに手を差し出してベッドから立ち上がらせる。

簡単な準備を整え、向かう先はいつもの自警団詰所である。

「一番最初の歌い出しは私一人なんですか!？」

「くそねみー」

「ヘレンさん！ 最初に歌い終わったからって寝ないでくださいよお！」

「ひ、一人で歌う箇所もあるんですね……。これもお姉様の為、ミント頑張ります！」

「まさか歌の中でもあの自己紹介をやらされるなんてね」

「明るく楽しくなれるこの歌は、私は大好きですよ」

練習中に各々が提供された歌の歌詞について思いを打ち明ける。

私の手元にある紙にも写しで書かれた歌詞が記載されているが、カナリア自警団への愛情に溢れた内容となっている。

市長の暴走に日頃は苦勞していそうだけど、この歌を作って頂いた吟遊詩人の方には頭が下がる思いだ。

「しかし驚いたな。みんな上手じゃないか。心配するようなどころは私には見つからないのだが」

「不思議と歌いやすい歌で私も驚いています！」

「きつとアコの最初の掛け声がみんなを鼓舞しているのよ」

「そ、そうなのかな？ そうだったら嬉しいな。えへ……」

「そうですとも！ お姉様に応援して頂けるだなんて！ 私、生きててよかった……！」
「いやあ、応援する人達はあくまで聞いてもらう人達に対してなんですけどね、ミントさん」

そんなアコさんの言葉をスツと受け流し、自分のパートを反復練習するミントさん。やる気が湧いたなら問題なさそうである。

どちらかといえば、いつでも自分のペースを崩さないヘレンさんが気になるところ。

「ハルトー、あたしの代わりに歌ってー」

「それほどは無理です。私はカナリア自警団の団員ではありませんから」

「えー、カナリアくんを着た仲じゃん」

「どんな仲だというのですか、それは」

「ですがヘレンさんの言う事も一理あると思います！ ハルトさんも自分達と一緒に合唱部分を歌ってみましょうよ！」

「私、音痴やねん。無理なものは無理やねん。見逃してや」

「なんで急に訛りを強調する喋り方になるのかしら？ 私と歌うのはそんなに嫌なの？」

「その言い方って卑怯だと思うのですが、教官殿」

「それならレオナさんも一緒にどうですか！ 自分の見込みでは上手だと思えますよ！」

「わ、私もなのか!? どんな見込みか分からないが歌なんてほとんど歌った事はないぞ！」

「大丈夫です！ 戦闘機に乗る人達はみんな声が大きいですから！」

まず声がデカイ事ありきで話を進めるリツタさんに押され気味のレオナさん。ついに根負けをして歌詞が書かれた紙を片手に輪の中へ。

エルさんの伴奏の元、再び通して歌が紡がれる。

アコさんの力強い声は、皆さんを引っ張り上げる力を持つ。カリスマ団長の肩書は決して伊達ではない。

エルさんの愛情に包まれ声は、大切な事を伝えるように歌い上げる。癒し担当とはまさにエルさんの為にある。

ミントさんの一生懸命に歌う姿と声には、聞く側に勇気を分けてくれる。妹担当は一杯の応援をみんなに与えている。

リツタさんの元気な声は、その声の通りみんなに元気を分け与えてくれる。突貫娘とはいうけれど、自身の信じる者の為に意思を突き通すことが出来る人だ。

ヘレンさんの寝ぼけた声は、いつでもどの状況でも変わる事のない不変不動。でも寝

ぼすけ娘なのは分かるけれど、歌う時だけは頑張つて起きてて欲しいな。

シノさんの凜とした声は、歌う者にも聴く者にも自分の意志の大切さを教えてくれる。クールビューティなんて言うけれど、誰よりも仲間思いだと思うんだ。

そして飛び入り参加のレオナさん。二度三度、練習をただけなのに綺麗な声で歌い上げる姿に驚きを隠せない。

ただ、コトブキ飛行隊として、レオナさん個人として、背負つてきたものが大きすぎた反動なのか、今回の明るさ全開のカナリアの歌とは少し相性が悪い模様。

きつとレオナさんの為に作られた歌があれば、聞いた後に泣いている自分が簡単に想像出来てしまう。

「レオナさんは残念でしたけど、まだハルトさんが残っていますよー!」

「マジで無理です。またカナリアくんを着て後ろから応援するお手伝いをしますので勘弁してください」

「ダメですよ。レオナさんも挑戦して頂いての断念なのですから、ハルトさんも始める前から諦めるのは『めっ』です」

「そうは言われましても壊滅的なのですよ」

「わ、私も自信はありませんでしたが何とか歌えました! ハルトさんもきつと大丈夫です!」

「そう信じて何度自分の歌声に絶望を覚えた事か」

「まだ聞いた事のない自分には絶望的かどうかは分かりません！ ハルトさんも観念したらどうですか！」

「へ、ヘレンさん。助けて」

「さつき助けてくれなかったからやだー。それにあたしもハルトの歌声聞いてみたいー」

「シノさん！ シノさんなら分かって頂きますよね!？」

「ええ、分かるわよ。曲がりにも私が手取り足取り空戦のイロハを叩き込んであげた相手が歌一つ歌う勇気が無い事にね！ 覚悟しなさい、ハルト！」

やべえ教官殿はお怒りのデスロードだ。

レオナさんは……諦めろの視線を送ってくる！ 嫌だ！ どこぞの人みたいにポーエーな声ではないのだが、音程がうまく取れないのだ！

こうなれば仕方ない。一度、諦めたフリをして歌う準備に取り掛かろうとする。

そして不意に出来た皆の気の緩み、騙して悪いが逃げさせてもらいます！ あばよとっ……お嬢ちゃん！

「ああ！ ハルトさんが窓から逃げ出しましたよ！ みなさん、追いかけて絶対に捕まえますよ！」

『了解!!』

ハルトを追いかける為に部屋から大慌てで出ていくカナリア自警団の皆……の内の一人、ヘレンは部屋に置いてあったソファに寝転がる。

「皆とハルトを追いかけなくていいのか？」

「大丈夫、なんだかんだでハルトはちゃんと戻ってくるから」

「ハルトの事を随分と信頼しているのだな？」

「お父さんの事で色々とお世話になっちゃったからね。きっとこの先もずっとハルトと一緒に居る事が多いと思うんだ」

「そうか……」

「レオナは？　なんとなくそんな気がしない？」

そんな気が。改めて言われてみれば、その様な気もしてきた。

まだ私達とハルトとの出会いは始まったばかりなのだ。これから起こる事も考えれば、長い付き合いになる事は間違いないだろう。

ハルトが飛び出していった窓に近寄り、そこから空を見上げる。穏やかで平和そのものだ。

カナリア自警団は、愛と正義で平和を守る為、この空を守り続ける。そんな彼女達が

少しだけ眩しくもあり、羨ましくも思えた。

それでも私とてコトブキ飛行隊の隊長だ。立場は違えど、守るべき人の為に空を飛ぶ事に変わりはない。

いずれは町と町の間で協定が結ばれて、カナリア自警団と共に仕事をする日も近い予感がする。

その際に、マダムから仲介役を頼まれて慌てふためくハルトの姿が簡単に想像出来てしまうのが、なんだか無性におかしく感じられて自然と笑みが浮かぶ。

「ハルト、まだまだ仕事が山積みみたいだぞ？」

本人の居ない所で、私はそつとそう眩くのであった、